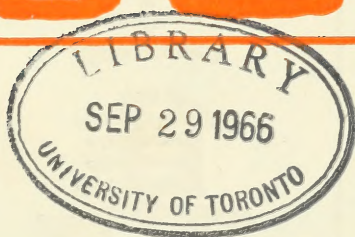
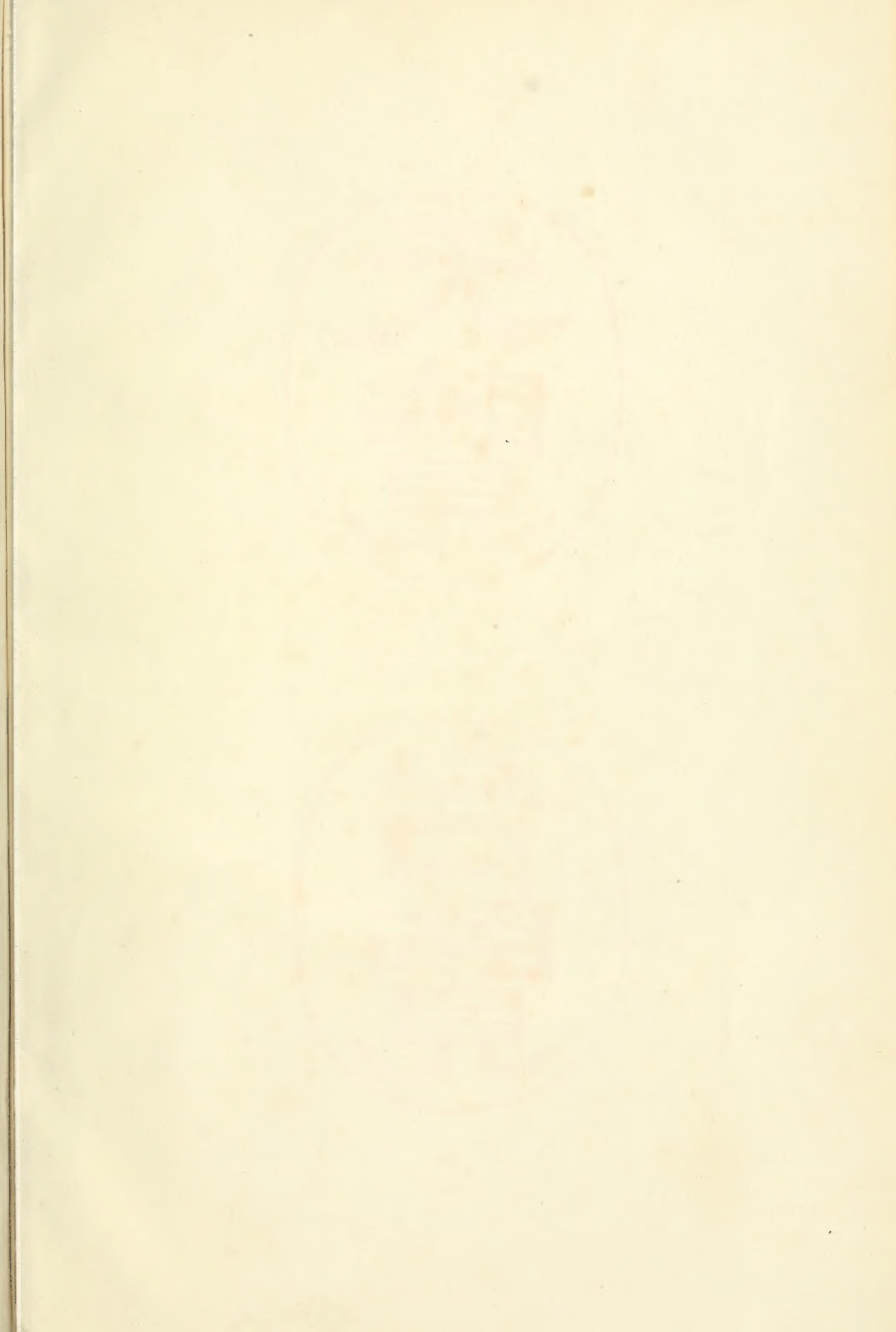
文學博士　井上頼圀
熱田宮々司　角田忠行　監修

平田盛胤
三木五百枝　校訂

平田篤胤全集

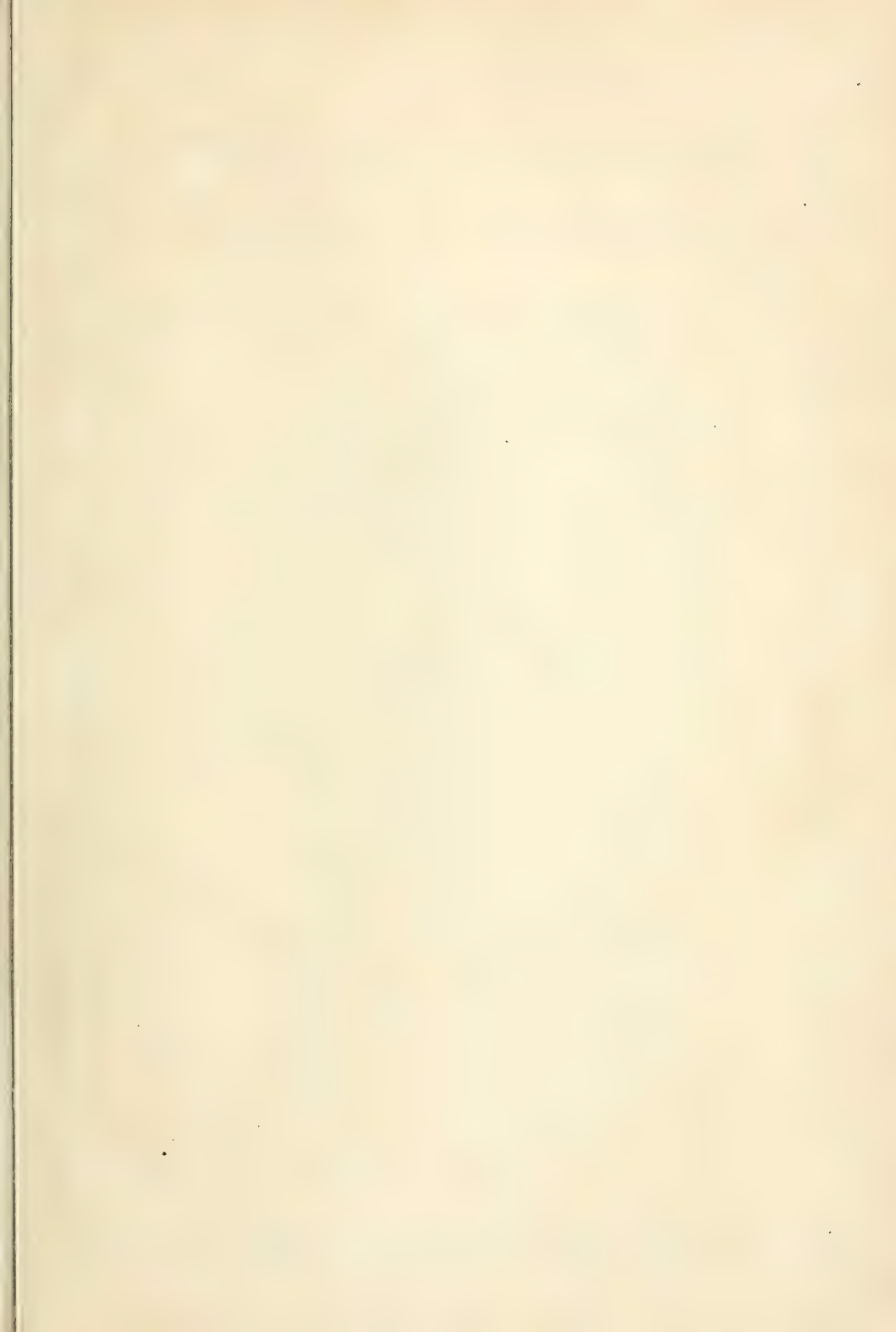
東京　平田學會

天覽

台覽

平田延胤翁肖像

先師平田延胤先生繼父祖之業立功於國家世人之所知今不復贅悳鄰不肖受學于先生之門殊蒙眷愛其恩厚且深矣友人勝田郁之助善墨畫乃乞今寫肖像二葉一葉則藏於家一葉則納於平田神社蓋欲傳其功于千載以報其恩之涓埃也于時明治十有八年第三月三日門人久保悳鄰謹識

目次

以上

鬼神新論序

世之論道者。率以君臣父子男女長幼朋友。爲人之大倫。而不知神人之際。更大於是焉。或稱。君爲臣綱。上爲民綱。父爲子綱。夫爲妻綱。而不知神之爲人綱。更先於是焉。神人之義、至貴至要。然其湮沒淆亂久矣。頼我本居翁論而定之。而後乃始較然著明。然歴歳尚淺。未能浹洽於世之心目。彼耆宿碩儒。材識兼優、獨其囿乎外籍、漸乎末學。其所擬議。率任智慧。索隱怪。厭棄康莊。故就崎嶇。曾不若倥侗顓蒙之夫、唯知頓空龔奉。反爲近道。而世猶迷惑。以爲當然。不亦悲乎。往歳余在江戸。聞平田君篤胤同門士也。訪之一見。如舊相識。遂與往來。揚搉所學。語及神人之際。大旨協同。相視莫逆。頃者撰定鬼神新論一編。千里寄示。乞余一言。閲之。則本據古傳。指摘世儒之謬。持論確而辨駁詳。誠足以鼓吹師言。療久痼之聵盲也。所幸者。神人之義。藉以益明。則反淳歸正。人極之率立。而君臣。父子。内外。上下。無物不得其所。是則融朗熙康久安長治之道。豈非天下之同願乎哉。余觀君志極篤。年方富。氣方鋭。其學方進不已。行將深有所造。而克大啓迪後人也。此猶其嚆矢也歟。

文化三年七月

尾張　鈴木朗序

應需　伊藤祐蔭謹書

鬼神新論の序

吹風のめにみえぬおにかみの事は。ことさへぐから人の。かしましきまで。さだめいへることゝもあれど。みな靈ちはふ神代の傳へことしらぬ。おしはかりなれは。うばたまのやみにしらぬ山路をゆくに似て。ふみまよふらんもことわりなるを。玉ほこの道のしをりある。此國の人までも。ともにあらぬかたにたどりきつるに。わが鈴の屋の翁の。さきたゝれたる松の火のひかりを見て。分いる人のおほかる中に。平田ぬしの。そのおく山のふかく思ひて。かのおにかみのあるやうを。やつをのつはきつばらかに。さだめいはれたるまことの愛たさおむかしさは。さらにもいはず。こゝのものまなびする人の。かばかりからことの。よのあしきけぢめまで。ますみの鏡のくもりなく。見あきらめられたるは。いと／＼めづらしき事なりかし。高尚近きとしごろ。此大城のみもとにまゐりをるに。おなし學びの友なれはとて。草枕旅のやどりを。しは／＼とひきつゝ。もの語せらるゝに。故翁をしたふこゝろ。さく花の色に出て見ゆ。こゝろざしふかしとは。かゝる人をぞいふべかりける。そのぬし此書のはじめに。言くはへてとあつらへらるゝに。おのれは明くれにつかへまつる。神のみうへの事なれど。かくまでは之思ひわきまへざりしも。はづかしの森のはづかしくて。下草のかりそめにも　何事をかいひ出んと。あいなうくちふたかりしかど。したしき中にて。むけにいふ事きかぬは　みづからもはらたゝしう思ふ事にしあれば。身をつみてなん。文化のみとせといふとしのかみな月　二十日あまり八日の日。江戸のすちかひのみかとのまへなる　仲まちの二のまちの。足立屋と云ふ家にやどりて。藤井高尚しるしつ。

（鐵胤云次に擧るは。藤垣内翁の書簡なるが。此書に係れる事のみを。少か抄出たるなり。扨これも。文化三年の事にこそ。

新鬼神論一冊先達而より預置申候繰返し拜見之上返上可申候今暫御待可被下候こまやかなる御說感入候

三月二十日　太平

春庭へもよみきかせ可申候

鬼神新論の成つるゆゑよし

飛騨人のうつ墨繩の只一筋に重みすべきは。道の學び也。是を除て外に依るべき事のあらめや。一匡いはけなかりし程より。此學びに思ひ入りて。釋迦孔子のとき教へたる事等にも。道の輔と爲るべきは。撰び取つゝ。且々は眞の趣をも。悟り得たりと思ひ居しに。去年の秋より。平田ノ大人の導き給へるに依りて。古の學びに立入り。はた鈴ノ屋ノ翁の御書ども讀て。初て神の道の妙なる由を知り。今まで眞の道と思へりしは。却て枝道なりし事をも悟ぬ。かくて世に。鬼神の論ひとて。からの倭の識者の著せる書等。數あれど。皆推量の說にて。眞の旨に叶へるは無く。中々に。世の惑ひ草になむ有ける。然れば其書共を。一つに論ひ定めて。此道に惑はひ居る人をら。諭し給ひねと。平田宇斯に願申せば。宇斯かねて。其事思ひ立れたる程なりければ。速けく事起して。倭漢千々の書等。淺茅原つばら〳〵に讀明らめ。菅の根のねもころ〳〵に論ひ正して。此書をなむ著し給ひぬる。抑鬼神の事。世の唯人は有がまに〳〵。疑ふ事も非ざるを。漢籍讀て。なま漢意つける人は。神の現に見え給はねば。無き物として思ふめり。少く立上りたる人は。鬼神は固よりなき物なれども。此を借て教ふるぞ。釋迦孔子の意なるべきなど思ふめり。又此上を一層のぼりたるは。實に有と云はむとすれば。現に見るべき形なく。無しと云むと欲れば。跡ありて灼然きにせむ方なく。有とも無とも決めざるを。鬼神を知れる至極とぞ思ふめる。こは都て西戎國の後ノ世風なる陋き習ひにて。云ふかひなく。甚も拙き事なりけり。然るに此ノ書はしも。高く思ひ深く考へて。橿の實のひとり立たる。最も最も奇靈に優れたる論ひにし有れば。今より後は。現世も幽世も。少かも惑ふふし無く。尊く愛たき御書になむ有ける。此宇斯に非ずして。誰かは是を成し得べき。此を讀まむ人々。ゆめ粗略にな見過しそ。然るは此うしの言は。この宇斯の言ならず。鈴ノ屋ノ翁の教へましゝ趣なり。鈴ノ屋ノ翁の教へは。神の御典の儘なれば。すなはち惟神なる教なり。神ながらとは。挂卷も畏き。天皇祖神の。大御心と定め給へる。天地の大道なればなり。かれ畏み〳〵もかく申すは。文化二年二

と云年のみなづき、中村の一匡

鬼神新論

平篤胤著

赤縣の古書どもに。上帝后帝皇天など云ひ。また唯に天とばかりも云ひて。甚く可畏き物にいへるは。天津神の天上に坐まして。世中の事を主宰り給ふことを。彼ノ國人も且々推察れるおもむきなり。(さるは尚書皐陶謨に、天叙有典、勅我五典。五惇哉、天秩有禮、自我五禮有庸哉、また康誥に、子祗服厥父、父字厥子、弟恭厥兄、兄友于弟、天與我民彝、また毛詩大雅に、天生烝民、有物有則、民之秉彝、好是懿徳、など、云へる類なほ多かり、此等すべて、古意に稱へる云ひざまにて、天神の産靈の妙なる御靈によりて、人も物も生り出で、また其ほど〳〵に、道を具て生るゝものなる事を、よく悟れるさまなり、なほ次々に論ふを見るべし、○また湯誥の篇に、惟皇上帝降衷于下民、若有恆性、克綏厥猷。惟后云々といへる語あり、これら別によく云ひ得て、古意にかなへる言ひざまなれど、この湯誥は。後世の僞篇なればとらず、餘の篇にも、かく古意に稱へる語のま

まあれど、其を擧ざるは、湯誥をとらざると同例なり、すべて尚書を擧たるは、眞の古書と決りたるのみを取れる也）。然るを後の世の儒者。これをたゞに。託言に解釋なしたり。（さるは程子の説に、天道理、理便天道也、且如説皇天震怒、終不是有人在上震怒、只理如是と云ひ。また朱子は、天者理而已など云へる類也、此の意は。古へに天といひ上帝など云ひて、情も形も有る物の如く云へるは、皆自然の理を、假にかく云へるものなり、と云ふの義也、なほ次々に云へるを見るべし。）然れども。かく託言の如くなれる事は。熟々考ふるに。強後の世の儒者等の誤れるのみにはあらず。彼の國はやくよりの風俗にて。此は決て然るべき理あり。さるは外國には。すべて正實の古傳説を失ひ。適存りたる傳説も。妄誕しくて正からず。且赤縣は生賢き國俗ゆゑ。古傳の儘に云へることも。何となく託言めきて聞ゆるゆゑ。（然るは前に擧たる皐陶謨、康誥、大雅などに云へる事も、何となく託言の如く聞きなさるゝ類なり。正眞の傳説を知らぬ人々の、此を託言と思ふも。實は理にざりける。）終にはこの天津神の。世中の事を主宰り給ふと云ことを。好き口實として。奸曲き輩。なにごとも上帝の命。天命と誣詐り。己が罪を文る云ひ種となしぬ。（さるは、殷ノ湯王が、夏氏有罪。予畏上帝、不敢不正と云ひて、其君を放し、周武王は、今予發惟恭行天之罰、と云ひて、其君を弑し。新王莽は、漢の天下を奪ひ取りて、皇天上帝隆顯大佑、云々、神明詔告、屬予以天下兆民、など云へる是なり、なほ數多あるを、今は其尤き物をあげつ。）されば赤縣籍に。天下を本として云へる事に。古意なると。託言に云るとの差別あり。此は能く辨ふべき事也。斯て世の移り來ぬるまに〳〵。彌益々託言の如く云ひ募り。古へより云ひ傳へたりし趣意を失ひ。狭小き惡狡意の。浸りつゝ。（但しこは儒者流の人のみこそ有れ、世の間の凡ての人は、元よりの儘に神を拜み祭る事は、更に變る事なく、其は皇國にて、儒者なむど何くれと、さかしら説いひ廣むれど、世間の凡人の用ひぬと同じ事也、其は彼の國の籍も、經書と云を始め、さかしら籍をおきて、餘の書を讀て知るべし。）其説皇國迄に及びて。古より漢學の人々。此癖を免れたるはなし。（漢學者のみならず、古の

事を說る人々も、此小智見に陷り溺れて、正實の古傳說をさへに、寓言の如く解き曲ぬ。其が中に。近世となりて。古學てふ事を唱へ出たる儒者等、何事も先儒の誤れる說を多く見開きて。いと〱よろしき說の多かるが、天帝を說き。その餘すべて。鬼神の事を論へるのみは、いまだ先儒の說に心醉て。陽にのみ其說を難れども、陰には、猶も彼の託言の界を出ること能はず。唯いはゆる其皮膚を變たるのみにて、更に其肉身を更めざれば、是はた古意に稱へる說の出來る事なし。（さるは　其の古學者と云ふ人々の中に物部徂徠と云ふは、心廣く才秀て、更に普通の漢學者と等並ならぬが、此人すら古義を得ずて、易にいはゆる以神道設教、又禮記に、明命鬼神以爲黔首則などやうの、古意ならぬ語どもに惑ひて實は鬼神と云ふ物を假て、敎の則と爲たる物なりと思ふ舊癖の、除こらざりしなり、其はその鬼神論に、聖人之未興起也、其民散焉無統、知有母而不知有父云々、死無葬而亡無祭云々、聖人之制鬼以統一其民、と云へり、これ甚しき臆度杜撰の說なり、すべて漢學者の癖として、何によらず、好事はみな聖人の制り初めたり、とのみ云へども是いと〱智見狹く愚なる事なり、抑人の生れながらにして、誰も誰も鬼神を敬ふ事を知れるは、これ天津神の命せ給へる、いはゆる性にて、則ち道なるを、赤縣人なりとて、聖人をしへずとも、いかで已が心と鬼神を敬む事を知らざらむ、素より其の情あるに就て、聖人と云ふ輩、その則を制めたる物なり、中庸に、率性之謂道、修道之謂敎と云ひ、尙書の僞篇に、若有恆性克綏厥猷、といへるも此の謂ひなり、また同じ鬼神論に、謂之有者權在彼者也、謂之無者權在我者也、權在彼者疑乎仁、其失愚也、權在我者疑乎智、其失賊也、愚與賊君子不由焉、且也有無者鬼神之迹也など云ひ、自は仁と智とを兼たる趣に論ひたれど、此は宋儒の說とは、辭の異なるのみにして、意は全おなじことなり、中にも甚しきは、邵康節が云へる、鬼者人之影也、人者鬼之形也、などやうの說を、先正有言など云ひて主張したるは、更に徂徠の所爲とも覺えずなむ、また伊藤東涯なども、不究鬼神於有無、此善究鬼神者也、と云へれども、かやうの說どもは、朱子既

く云ひおけり、其は其の文集に、鬼神之理、聖人蓋難レ言レ之、謂レ眞有二一物一固不可、謂レ非三眞有二一物一亦不可、など云へるたぐひ猶多かり、これ古學者流の說と、何の異れることかはある、斯て宋儒の說を破るとも、誰か其說を信なりといはむ、すべて鬼神を有無に究めず論ふことは、遁辭にて、實に有りと說むとすれば、奇怪に渉りて理外にきこえ、無と云はむとすれば、其の迹ありて灼然きにせむ方なく、何か巧妙に髣髴しくあやなし說て、人を欺く奸き所爲なり、抑々かく人々の僻說を云ひ露す事は、あぢきなき所爲の如くなれば、憎み云ふ人も有るべけれど、只に僻說なりとのみ云ひては、其說どもを未だ見ず聞かぬ人々の、如何なる故に依りて惡しと云ふにやと不審く思はむとの心配なり、見む人その罪を恕し給へや、穴かしこ、）これ復古とは稱へども。淸く古へ意に復らざるにて。甚々可惜しき事なり。實に復古の志を太しく爲したらむには。只に孔子の言と行とにのみ徵すとも。その實有なる事は知らるべきを。今迄然る人も聞えざるは如何ぞや。是は誰も書籍の上の空說にのみ拘泥みて　熟く古の事實と　孔子の

言行に。心留めざる故ならむか。思ふに孔子の靈幽界に在て。然こそは。云ふがひなく思ふらめ。抑赤縣州の事。赤縣籍の上の事は。儒者こそあれ。我徒の煩はしく云はずとも。ありぬべき事なれど。此事を熟く辨へものせる漢學者の無事を。傍より見るに得堪ねば。差出たる事なれど。いかで論ひ試ばやと思ひなりて。今は孔子の言と行との。總て鬼神の上に及べるを。論語と中庸とに摘出て。（秦漢以前の書どもに、孔子の言行の見えたる最多き中に、論語と中庸のみを擧ることは、餘の書どもなるは、傳聞の誤り、または後人の杜撰、あるは信僞も詳ならぬなども打混りて、今もとりどり論ひ云ふ書どもの多かれば、其を擧むは、なかなか街に迷ふふしもあれば、すべて徵には取らず、さらでも論語と中庸とを、よく讀て考ふれば。孔子の言行に。足らぬ事はあらじと思ひての所爲也、見む人怪むことなかれ、）大概は赤縣の事實に合せて徵とし。古傳說に照して。其實有なる事を曉し。また因に。すべて神祇の事に渉る事どもを。古意を以て論はむとするなり。漢學の人々　願はくは。孔子の。毋レ意毋レ必毋レ固毋レ我

てふ情にならひ。公平なる心を持て。熟く見別ち給ひねかし。（さてまた、誰も天と鬼神をば、別に論ふ事にて、こは實に然すべきわざなれど、其靈威ありて奇異なるは同じ事にて、其を相ひ通はして、廣く鬼神と云へる事、次に擧たる中庸の文に、鬼神之德其盛矣乎云々と云ひ、左傳にも、鬼神非二人實親一、惟德是依、故書曰、皇天無レ親、惟德是輔、など云へる、類多くあり、是みな天地の神を廣く鬼神と云へり、よし然らでも、此には天も鬼神も、實物たる事を曉さむとの業なれば。一ッに云ふなり、また天にしては神と云ひ、地にしては祇と云ひ、人にしては鬼といふと云ひ、また神は伸なり　鬼は歸なりなど云ふ類の、甚うるさきまでに說の多かれども、都て取らず、おしなべて、此には只に鬼神と云ふなり、然れども、云はで叶はぬ事は、序々に云ふべし）抑赤縣の古へに。上帝。后帝。皇天。また唯に天とも云へるは。皆同事にて　前にも云へる如く。實物を指て云るにて託言に非ず。吾友鈴木朗いはく毛詩大雅に。文王陟降在二帝左右一。（篤胤云、此の詩を引けることは、帝の左右といふ語にのみ用ありて、文王陟降といふ語には更に用なし、さるは先かの國にても、人死ては、其の靈天に陟る事として、王の大祖などの靈をば、天帝に配へて祭る事なり、いはゆる祖宗を天に配すといふこれなり、故この詩は、文王の靈天に陟りて、上帝の御左右に在りとの義なり、但しこの文王陟降といふ語、いにしへ皇國にて、天皇の崩御の事を、カムアガリと稱へると同意なり、されば漢文にては、登陟昇霞など記し奉れり、此は別に委き論ひあれど、此所には洩しつ、）焉にぞ形無くして。左右と云ふ事あらむやと云り　此實に然る言にて。形狀なしと定めたらむには。何でか帝の左右と云はむ。（然るを朱子など云はく、今若說二文王眞箇在二上帝之左右一、眞箇有二上帝一、如中世間所レ塑之像上、固不可、然聖人如レ此說、便是有二此理一と云へり、天つ神の御形容は。いかに坐すかは知られねども、既に御言と御行の灼然ければ。その御形の坐す事は、申し奉るも更なり、いかで是を不可なりと云はむ、また朱子の說に、今人但以二主宰一說レ帝、謂レ無二形象一、恐也不レ得、若如二世間所一謂王皇大帝一、恐亦不可とも云へり、かやうに御形を有無に究めず論ふなどは、また例の心き

たなき說なりかし、〇爰に皇國の古例を考ふるに、神武天皇紀四年二月の所に、立靈畤於鳥見山中、祭皇祖天神焉とあるを、古語拾遺には、禋祀皇天と記され、また同書に、起自天降泊于東征、屈從群神名顯國史、或承皇天之嚴命、爲寶基之鎭衞、とある皇天、また草薙神劍者尤是天璽、とある天、また桓武天皇紀二十四年二月丙午の下に、石上の大神の御誨言を記せるに、唱天下諸神、勒諱謂天帝耳、と有る天帝など、これらみな、正しく天津神の御事を、漢籍の文法を以て、稱し給へるなり。)孔子曰く、君子畏天命、小人不知天命而不畏也、又獲罪於天、無所禱也、又欺天乎、又知我者其天乎、など云へり、形なく情なき物を。いかで我を知るとは云ふべからむ。然るを伊藤仁齋の論語古義に、此を論ひて云へるは、何謂天知之乎、曰天無心、以人心爲心、直則悅誠則信と云へるは、儒者にして、などて如是、孔子の言行に暗きや、徂徠の徵にこれを破りて、孰謂仁齋先生非理學乎と云へるは、實にさることと也、)此等の言どもを熟く攷へたらむには。孔子の。天上に實物の神在りて。世の中の萬事を主宰り給ふ事を。熟く悟りて。畏るべく欺くまじく。天津神の心に背ひては。他に禱る神はなしと畏りたる事を思ひ得つべし其は天津神は。譬へば諸神の君の如くに坐せば也。(此を天帝と云はで、只に天とのみ云へるは、譬へば山川之神其舍諸といふべきを、山川其舍諸とある、山川の字義の如く、其在所を以て云へるなり、)また天神地祇の所爲の著明く。また感格ありし事どもを云はゞ。まづ史記の周本紀に。姜嫄と云へる女は。巨人の足迹を履て姙みて產たる子を、奇怪て棄たるに鳥獸も乳を含めなどして、養ひたるに驚きて、其子を育し、棄と名けたる、(これ周の祖也、)左傳に、楚國の鬪伯比と云ふ者、鄖と云ふ國に畜はれて、其所の女に婚けて子を生り、女の親是を怒りて、其子を夢と云澤へ棄たりしに虎これに、乳を呑しめければ、奇とて、終に其子を育しける事あり、よく似たる古事なり、又有娀氏の女は。玄鳥の墜せる卵を呑て。契と云ふ子を產たりき、(これ殷の遠祖なり)、此等鬼神の所爲。いちじるきものに非ずや。(此ノ事を、明の楊用修といふ者論ひて、誣妄の說なりとし、こは詩に、天命玄鳥降而生商、といふ語のあるに因りて、作

りたる事なりと、強て妄說と爲たれども、是亦赤縣人の、例の狹き智見に依て信ざるなり、此等の類、なほ外にも、神異なること數ふるに暇あらず、殊に毛詩なるは、此古事の實なるから、作りたる詩なり、此の詩に依て、作りたる古事と思ふは、本末たがへり、今世にすら、此に類たる奇異き事は、これかれ有り、況て上古をや、更に疑ふべき事に非ず、朱子の語類に、此等の事を云ひて、非可以常理論也、と云ひ、また當時恁地說、必是有此、今不可以聞見不及定其爲必無と云へるは、朱子には甚めづらしき說なり。）また感格ありし事は　殷高宗が夢に。天帝の良弼を賚ふと見て。傅說と云ふ人を得たる。（此事をも。楊明修が論ひに、高宗民間に在りしほど、傅說が賢人なる事を知りて、此を擧用ひむとするに、民の從ふまじき事を思ひて、殷人は鬼神を信ずる風俗ゆゑ、夢に託けて擧たるならむと云へり、是も亦臆度の杜撰なり、五雜俎と云ふ物に、楊明修最稱博識、亦善杜撰、など云ひて、しば〱此の人を惡める語あるは、信なる事なり、また朱子も、只是夢中事說是帝眞賚不得、說無此事只是天理亦不得、と云へるも、また例の頑しき說ざまなり、高宗は賢かりし王と見えたれば、さこそ誠心に神を尊みたるなるべければ、斯有る福ありけむことさらに疑ふべき事に非ず、ひとり千百年眼と云ふ書に、傅說事世咸疑之、以爲夢而得賢可也云々、蓋所云夢賚者、實帝感其恭默之誠而賚之也云々、鄭文夢鹿而得眞鹿、心誠於得鹿者可以得、況誠於求賢而有不得者乎、と云へるは、いと〱感たき說なりかし。）また周公旦は祖宗の神靈に願て。天津神に禱まをし。其兄武王が疾を瘳し。其後武王が子の成王に罪を得て。他へ出居りけるに。甚く神の荒びありて。成王それに驚き。周公旦が罪なかりし事を悟りし事あり。誠情より禱る時は。感應ある事かくの如し。（此は尙書の金縢に見えたる事なるが、明人王廉、張和仲などの輩、これを論ひて云へるは、周公面卻二公穆卜、以爲未可戚我先王、矣、陰乃私告三王自以爲功、此憸人佞子之所爲也、而謂周公然之乎、死生有命、周公乃欲以身代武王之死、使周公而然則爲不知命、且滋後世刲股醮天之俗、周公元聖、豈其然乎など云ひて、

金縢を僞書也と、なほ巨細に論ひたれど、金縢は伏生が傳へたる篇にて、古書なること論ひなきを、斯いふは、此は、周公旦が、鬼神を信じたる事を巽みてなれど、これ聖人と云ふものを、餘りによく思ひ過して、却て惡く云ひなす業なり、然るは聖人といへども、實に善人ならむには、其眞情は凡人に異なる事あるまじければ、何で神の威靈を仰がざらむ、いかで神に禱りて感應ある事を知らざらむ、然るを後世の儒者等、おのれ〳〵が智見の狹くて、神を知らざるに比べて、古人の眞情をさへに疑ふは、甚をこなり、若果して聖人てふものは、普通の儒者などの如く、人情に疎くて、鬼神を信ぜざるものならましかば、此も嗚呼ものとや云はまし、總て儒者の、聖人てふ人々の言行を解くを見るに、甚く巧妙に說むとて、更に人情に遠き嗚呼人に云ひなす事多くて、見るも心苦く、片腹いたき說等の多きなり、また以旦代某之身、とある所の註釋に、死生有命、不可請代、聖人敍臣子之心以垂世教、などやうに云へる說多かれど、此は更に眞の道てふ事を伺ひ知らぬ者どもの、云ふにも足らぬ嗚呼說也、偖また此所に、金縢の辨は用なきに似たれども、事の實なるよしを知らさむとの所爲なり、金縢の事、なほ末にも出せり、合せ考ふべし、）孔子の云く。鬼神之爲德其盛矣乎。視之而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人。齊明盛服以承祭祀。洋々乎如在其上。如在其左右。詩曰。神之格思不可度思。矧可射思。夫微之顯。誠之不可揜如此夫。また鬼神を祭祀て感應ある事を云ひて事死如事生。事亡如事存孝之至也。郊社之禮所以事上帝也。宗廟之禮所以祀乎其先也。明乎郊社之禮禘嘗之義治國其如示諸掌乎。と云ひ。また至誠之道可以前知。國家將興必有禎祥。國家將亡必有妖孽。見乎蓍龜動乎四體。禍福將至善必先知之。不善必先知之。故至誠如神。（また禮記には、我戰則克、祭則受福、蓋得其道矣、と云へる事も見えたり、これ實に孔子の語ならむも知るべからず、思ひ合すべし、）など云へり。孔子自かく云へるのみならず、其弟子等の孔子乃鬼神へ對ひての形狀を記して祭如在。祭神如神在。と云ひ。（此事なほ末に委曲に云へり、合せ見べし、）また齊必變食居必遷

レ坐。また迅雷。風烈。必變など云へり。後ノ世に云ひ出たる說の如く上帝と云ふも鬼神と云ふも。みな自然の理を假に云へるにて。實は形容も心も無れども。是を祭る事は聖人の民を敎ふる術に設けたる事なりと云はゞ。國も穩に治り。豫に禍福を知るばかりの感應あるは。いかにぞや。また事實の迹あるをば。何にとか云はむとする。また無心の死物を孔子は。いかで人に敎へて畏れよと云ふべき。また自も顏の色の變るまでに。畏るべき所謂なきに非ずや。平常の言行と比べ思ふに。愚夫兒女子などの所謂なく。雷風また奇異の事を畏るゝ類にはあらず。世の中の事は。すべて天神地祇の。奇妙なる御所行に洩たる事なく。別に迅雷風烈などは。神の荒びにして。いとも可畏く。何の故。なにの理に依て。かかるとも測り難きに依て畏れ敬ひたるなるべし。然るを儒者の云ふは。天は積氣にして。雷は陰陽の相轢て激する聲。風は陰陽の動靜なり。など云ひて。只に陰陽といふをのみ。事々しく說ども。その陰陽といふ物を。死物とせむか。活物とせむか。死物ならむには。激する事もなく。動靜も有らじ。或は激し。或は動靜する事も有るは。決て活物なる事論ひなし。既に活物なる上は。靈あること論ひなしまた陰陽は死物なれども激動靜あるは自然なりと云はむか。其自然に動靜さするは何物ぞや。死物なる陰陽を動靜あら令るは決めて活物の神在て然すること疑ひなし。（此につけて談あり、近ごろ阿蘭陀と云ふ國の學問始りて、この大江戸などには、是を學ぶ人多かるが、誠や彼國人は、深く物の理を究むる事を好みて、何くれと考へ出たる事も多かるが中に、エレキテルてふ器物あり、此は雷また電の理を考へて、造りたる由の器なるが、往年或る人の許にて見たりしに、一ツの箱の中へ作り置て、雷電の形容を觀むとするには、人三人にて其の事を爲し、一人は牀机などに坐て、彼ノ箱の上なる筒に付たる糸をもち、一人は箱の横の方より出たる棒の如き物を、糸車を回す如くするに、一人は金にて造りたる。小きこれも棒のやうしたる物を、彼牀机に坐たる人の體に丁るに、誠に電の如き光を出し。鳴動くなど、いと〳〵奇異きまでに、能く造りたる器なり、此は予その節、輪をまはす者となりて、見たりし儘を記せるなり、

斯て其器を藏たる人、予に語りけらくは、天地の雷電あるも、實に此理に等し、然れば何の畏るゝ事かあらむ、然るを俗には甚く雷を畏るゝ人もあるは、此理を辨へざるにて、いと愚なる事なりと云ふに、予いふは、此は實によく造りたるものなり、然れど實の雷電も、果してかゝるにか、其は眞に測り定めがたき事なり、よし此ノ理に違ふ事なきにもあれ、此ノ器は、主と我とまた一人ありて、此所をもち、彼所を囘しなどすればこそ、電光を見るに非ずや、然れば天地の眞の雷も其の如く、主と我との如き物の在りて、ものせでは、決めて然あらぬ理なり、はた此の器は、人の工に成りたる物にて、今傍に置て、かく爲るも爲ざるも、己が心儘なる一箇の小器なれば、何の畏るる事もあらねど、眞の雷は、雲中を荒び轉びて、或は雲中を放れ下ることも有りて、所を擇ばず、木を裂き石を碎くなど、何と云ふ嫌ひなく、斯て無情かと思ふに、惡き物、また善らぬ人などを、搏殺したる類も、古へよりまゝ有る事なり、其は殷の武乙が、天を詈りて打殺されたるなどを、よく思ふべきなり、かく測りがたく可畏かるを、人の小き智もて、工み出たる器に依りて、いかで其ノ理の知らるべき、然やうの淺々なる臆度は、篤胤は更に〳〵信なはず、もし實に此をよく辨へむと思さば、しばし人智の狹き舊習を忘れて、信に古へを學びて知り給ひねと云ふに、此人いたく腹立て、なほ何くれと云ひ爭ひて、いかに諭すとも。從ふべき容に見えねば、然もあらば、主の御心の隨意といひて。予は歸りたりきかし、また張橫渠といふ者の語に。鬼神者二氣之良能と云ひ。また程子の説に。鬼神者造化之迹也。など云へれども。實には二氣者鬼神之良能。また造化者鬼神之迹なるをや。かく奇妙なる。天地の神の御所行なるから。赤縣も古へは　實に鬼神を敬ひたるゆゑ。其禮をいみじき事にせる也　これ眞に道に合へる事にして。夏殷の頃まで然ありし趣也。斯て周の代となりても。猶上古の餘波にて。神を祭る事を重みしけるに。（さるは左傳成公が十三年の傳に、國之大事、在祀與戎と見えたるにても知るべく、此は徂徠の鬼神論に、先布井十有二月、而祭祀居其半、禮有五經莫重於事鬼神、而獨其與戎爲國大事、其官與物、惟恐其弗備、而經費不問。受福降殃。

諄々乎言之、是庸何慮設乎、と云へるが如し。また赤縣州にも、古より傳はりたる神事の中には、皇國なると似たるも多かり。さるはまづ彼國の字書に、徐曰示神事也、故宗廟神祇皆從示と有て、すべて示に从ひたる字は、みな神の事に係れり、其の一ッ二ッを云は、、祡また禷の字の註に、燒柴燎以祭天神也といひ、また祓除惡祭也、徐曰祓之爲言拂也、又潔也。また禜禳風祭雨、また祈祭者叫呼而請事也、禱告事求福也、また禍神不福也、また祟神禍也 また祝祭詞也、また禘春祭、嘗秋祭、などある類ひ、凡て古意に稱へる事どもにて、皇國にも既く。其字を借用ひ習へるも多きなり、古へを學びて思ひ合すべし。)漸々に生賢き風俗漫りて、神祇を祀る事は。大略は民に敬を教ふ。とか云ふ術の如くなり來にけり。もとも此は西戎の。元來薄惡なる國俗ゆゑとは云ひながら。我老翁の云はれたる如く。實には周公旦などが。徐りに賢と云ふ事を先とせるより。發れる事にて。易に聖人以神道設教と云ひ。禮記に。命鬼神以爲黔首則。また喪祭之禮所以教仁愛也。などやうの語は。みな後の小賢き世となりて。云ひ出たる言どもなり。然るから。論語中庸などに見えたる孔子の語どもに。かく實ならぬ語は一つも見えず(餘の書等に、孔子の語とて有るには、然る實意ならぬ言も多く見えたれど、予は更に信はず 其謂こゝに盡し難しと云へども、かゝる語は、みな人に僞りを敎ふる物にて、孔子の意とは、反なれば也 すべて赤縣州の事には。元來正實なりしをも。後には只うはべの文り 一通の事と變れること多く有り。(然るはまづ親などの失たりし節は、其悲しさに得堪ず。飮食ふものも、旨からねば、食がたくて、自から小體もやつるゝ事にて、此は彼國も、古には誠に然る者も有けむかし、さるを後には、是を則として、誰もしか爲べき事に制めを爲したるから、然のみ悲しくもあらぬを、わざと食物を減し痩さらぼひて、哀しき容にものして、人を欺く事とはなれり、これいかに心惡く、聞もうるさき狂事ならずや、また上古に神農と云ける王の代には、自ら鍬をとりて、民に混りて田作り、また其妻は蠶をとり、衣織りなどして、只に君臣と云ふのみ、所業はさのみ替らざりしを、後代となりては、其を

眞似びて、田作る時の最初に、王も出て鍬とり田がへす狀をなし、また其妻にも、衣織るわざ、蠶とる業など、少か學ばしめて、人を欺く事と成りぬ、此等の事をば、儒者は、民に義を勸むとか云ひて、甚よき事に云へども、我より見れば、却りて民に僞り巧む事を敎ふる業とこそ思はるれ、周の代となりて制りたる禮には、なほ此の類多し、さてこそ神を祀るをさへに、民に敬を敎ふるの道なり、或は鬼神を假て敎導すなど云ふごと成りて、本の意をばとり失ひ來れるなれ、さらぬだに、世降ち行くまに〳〵、人情輕猾にのみ移らふものなるを、況て上より狡意に僞術を敎へて、誘くに於てをや、然るを儒者の、かやうに、本と末とは、甚く違ひ來ぬる事さへ心づかず、末を執へて本を知らざるは、彼の船を刻みて、劒をもとむる類なむめり。)此は熟く辨へ明らむべき事なりかし。若强て後ノ世の說の如く。また儒者の云ふ如く。鬼神を祭ることは、假に設けたる事なりとせば。孔子も湯武王莽が輩の。天命と誣ひ詐りたると等く。實には畏るゝ心もなきを。人には畏れよと敎へ。はた其言を信にせむとて。畏れ敬ふ狀にもてなしたるにて。彼の似て非なる者か。何で孔子は然る僞巧の行をなして。人を欺かむや。自も巧言令色鮮矣仁。とも云へるに非ずや。(なほ委く云はば、孔子は凡て、その言行より外に、隱れたる心なかりしと見えて、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無行而不與二三子者是丘也、と云へり、若普通の論ひの如くならば、此も僞言となるをや、)實に正しき人は。人の見聞のみならず。其ノ意より誠ならねば。眞に正しき人と云ふべからず。孔子自も色取仁而行違ことをば。誡めたるをや。(また大學にも、誠其意者毋自欺也、と見えたり、もとも、西戎國には、賢人と云はれし輩にも、生涯みづから欺きたりと見ゆるも多かれど、孔子のみは、然る人とは思はれずなむ、)斯のごとく。其の言と行とに心止めて察もて行けば。更に廋れたる事なく。其實有なる事を悟りて。畏れ敬へると論ひなし。(論語に、子曰視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉、こは眞の道に志したらむには、四季、晝夜の來經ゆくありさま、萬物の生り出るなどを以ても、悟りぬべき事なり、腐儒者流の如く、天地と云ふ一

つの大きに奇異き物の中間に在て、己が體の大きに奇異の物なる事をさへに得知らず、己が智と力とに及ばぬ限りの事は、必無しと決むる類の、愚昧にては有らじ。)さてまた論語に。子不語怪力亂神と見え。又孔子自も。現に。天上に。世の事を主宰る神の。在すと云へる語も見えざるは、此は前にも云へる如く。赤縣には。正實の傳説なきによりて。詳には云ふこと能はず。よし云ひたりとも。大凡の人は。彼の藐姑射の神人の談きける如くなる故、云はぬなるべし。(正しき傳説を聽居る皇國人にすら。神の御所行を信はぬ人あり、まして傳説なき赤縣をや、藐姑射の神人とは、莊子逍遙遊の篇に、藐姑射之山有神人居焉、肌膚若氷雪、淖約若處子、不食五穀、吸風飲露乘雲氣御飛龍而遊乎四海之外、其神疑、使物不疵癘而年穀熟、吾以是狂而不信也、と云へり、此神人の寓言、よく俗の、天津神の御所爲を知らぬ人を諭すに足れり。)此は彼の於其所不知蓋闕如也、と云へる言の虚しからで。後世の儒者などの漫に臆度する類ひには非るなり。(また若くは、云ひたりしが、其語の傳はらぬにも有るべし、不語怪力亂神とあるを以て、決めて神怪を語れることなしと云ふ人も有れど、同書に、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫、と云へるは。上古に、伏羲と云へる王の時に、河中より、龍馬の圖を負ひて出たりと云ふこと、また鳳といふ鳥は、聖人の世の祥瑞なりとて、舜が時、また周文王が時に出しと云ふ事なるべければ。神怪を語れること、絶て無しとは云ふべからず、此外の書に、神怪を語れる言の見えたるは、今數ふるに暇あらず、且この一語を見ても、信而好古と云へりしことの空しからず、はた後世の儒者の、一向に往昔のあやしかりし事を、信せぬ類ならぬことをも思ふべし。)さて傳説なくては、天つ神の 世中の萬の事を主宰り給ふ事、また人の存亡禍福 みな神の御所爲にて、實には 人力に及び難しと云ふ事は、容易は知りがたき事故、孔子も。五十而知天命と云へり。この語を以ても、孔子の天命をいへるは、餘の戎人どもの、天命々々と云ふとは、大きに異にして、更に託言にはあらぬ事を悟るべし、)此は實に然もあるべし 然れども正實の傳へなく。さかしらのみ云ひ居る國に生れ出て。

よくも鬼神の奇妙なる理を悟れるは、是は實に、孔子の大に凡人に勝れたる處にして、餘の戎人等のかけても及び難き所なり。(中庸に、唯天下至誠爲能知天地之化育と云へるは、誠にさる語なりけり、)倩しか天津神の御所爲を悟りては、彼の董仲舒が、道之大原出於天と云へる如く、此理を知らざれば、道の大本に昧くして、時務に達せず、人情に疎くて政にも行屆かぬ事ある故。(時務をよく知り、人情をよく知ること、政を執る人の、別によく心得べきことなればなり、)魯哀公が政を問へるに對へて、爲政在人取人以身修身以道修道以仁云々。故君子不可以不修身思修身不可以不事親思事親不可以不知人思知人不可以不知天など云ひて。政をするには、天津神の御所爲を知る事を本とせり。不知命無以爲君子也と云へるも此意なり。此は初發に擧たる 尚書毛詩などに見えたる如く。都て世中の事物 また人の性も、天津神の賦命せ賜りしものにて(中庸に、天命之謂性、とあるも、則この事を云へり、)實に道の大原なれば。疎略には有まじき業なればなり。(家語に、顏回問於孔子曰、成人之行若何、子曰達於情性之理、通於物類之變、知幽明之故、覩游氣之原、若此可謂成人矣、既能成人而又加之以仁義禮樂、成人之行也、若乃究神知禮德之盛也、など見えたるをも思ふべし、)さて又赤縣には、正しき古傳說なきが故に、孔子ばかりの人も、世には善惡の神在て、其御所行のまにまに、吉事凶事互に往替る、最も奇しき道理ある事を。辨へざる事あり。故爰に、其由を論ひ諭さむとす。抑世には。大禍津日神と。大直毘神おはしまし。又一向に枉事なす枉神も在て。各その御所業いたく違へり。其はまづ大禍津日神と稱すは、亦の名は八十枉津日神とも。大屋毘古神とも稱して、此は汚穢き事を惡ひ給ふ御靈の神なるに因て 世に穢らはしき事ある時は 甚く怒り給ひ、荒び給ふ時は 直毘神の御力にも及ばざる事有て、世に太じき枉事をも爲し給ふ。甚健き大神に坐せり。然れども又常には、大き御功德を爲し給ひ 又の御名を瀨織津比咩神とも申して 祓戶神におはし坐て、世の禍事罪穢を祓ひ幸へ給ふ。よき神に坐せり、穴かしこ、惡き神には坐まさず。(然るを鈴の屋の大人は、

此神は一向の惡神に坐まして、世の惡事は、悉く此の神の掌給ふ事と、說き給へりしは、下に云ふ枉神と混一に思はれしにて、其考への未だ委からざりしなり。）さて大直毘神は、亦の名神直毘神とも稱して。世の禍事を悉に。吉きに直し給ふ御靈の。少かも紛ふ方なき。最よき大神におはし坐せり。亦の御名。氣吹戶主神と申して祓戶の神に坐り。さてまた枉神とは。夜見の國の穢より。出來たる神等を云ふ。其は道之長乳齒神。和豆良比之宇斯神。飽咋之宇斯神。奧疎神。奧津那藝佐毘古神　奧津甲斐辨羅神　邊疎神　邊津那藝佐毘古神　邊津甲斐辨羅神とて。合せて九柱ませり。是ぞ世に枉事なす。惡き神の出來たる始めなる。（大禍津日の神、大直毘神、また枉神たちの成り坐せる本緣は更なり、其御所行の事も、神代の御典を、よく讀みよく味ひて辨ふべし、猶委き事は、古事記傳、その外、師の著されたる書等を見て、吉事凶事往替る、世の有狀を考へ知るべきなり、〇この鬼神新論を、始めて書たりしは、去し文化の二年と云ふ年なりしかば、其頃いまだ、學問の力をさなくして、考へ得ざる事多く、また中には、一向に、師說をのみ恃めるも有りて、今見れば、違へる事も少からず、故次々に、委く書改めむとは思へど、今年文政三年の春、思ひ立たる事ありて、其草稿に暇なく、また此儘にと思へば、然はなし置がたき由ありて、止ことを得ず、たゞ大きに違へる所のみ、少か書き改めたれば、却りて前後うち合はぬ所もあるべけれど、其は暇あらむ時にとてなむ、此は卷首に云ふべきを、遺れて爰に記せり、見む人其意を得て、以前の本と違へるを怪むことなかれ。）右の如く善神と惡神と。其神性おの〳〵異にして。實に黑白違へる事なれども。善神なりとても。御心に良はず。怒り給ふ時などは。惡き事も。絕て無しとは云べからず。又惡神なりとても　時としては。善き事もなどか無からむ。（此は甚も畏けれど、我々凡人の上を以ても。思ひ奉るべきなり、眞の道理に於ては、事も人も異なる事なし。）然れば世には。善人も禍害に逢ひ。惡人も幸福を得る事も。自からあるべき理なる事。右に准へて心得べし。然るを。孔子だも。此の委き旨を知らざれば。押竝て。禍福吉凶。みな天命と思へり。（さるは冉伯牛が疾を訪て、命ナル

矣夫斯人也、而有斯疾也、と云ひ、司馬桓魋が殺さむと計りけるとき天生德於予、桓魋其如予何、また道之將行也與命也、道之將廢也與命也、など云へる類、すべて何事も、天つ神の命と思ひ委ねたるなり。）此は實に然あるべき事なり。今此所に善神と惡神との。御所行の事を少か云はゞ。まづ殷の太戊が時に、野に生べき桑木の。朝廷と云ふ處に生て。七日がほどに。兩手に拱るばかり。大きくなれる事。また紂王が時に、雀の大鳥を產たる事あり。此はともに。禍事の發るべき驗なりと云ふ。然るを太戊は疾く心づきて。力めて善事を行ひ。その禍を直したるは。これ直毘神の御靈を賜はりて。其の御力の及べるなり。また紂王は、その驗にも驚かで。武王に亡されたるは。枉神のまじこり甚しくて、直毘神の御守り薄かりしなり。（唯にかくのみ聞きては、何の至りげもなく、いと淺はかにおもふ人も有べけれど、此は實に一朝一夕に云ひ盡し難く、書き盡しがたき、妙なる故由あり。眞の道に志ある人は、よく古を學びて此の妙なる趣を悟りねかし、偖また家語に、魯の哀公が、夫國家之存亡禍福、信有天命、唯非人也と問へるに、孔子、この太戊、紂王が事を引て、存亡禍福皆己而已、天災地妖不能加也、と云へる事見えたり、これ實に孔子の語ならば、此は只一時、善行を勸めむとて、斯いへるなるべし、さるは太戊が、禍の發らむとするを直し、紂王が亡びたるなどは、此の語によく合ひたれど。また盜跖などのごとく、惡事のみして榮え、孔子の如く、善人の、生涯よき事なくて、終る事も多くあり、斯るをいかで。禍福皆己而已と云はむ、己より求めたりとならば。盜跖は禍にあひ、孔子は福を得つべき事なり、然ればは此語は、一時善行を勸めむとて云るならむとはいふなり、禍福皆天而已と云ふぞ。孔子の本意なりける、さるは前にも引出たる、伯牛が疾を見て、命矣夫、斯人也而有斯疾也と云ひ、また富貴在天など云へる、にても知られたり、これ善惡の神の所爲を知らぬ國に生れては、只に何事も、天神の爲す事と、安むじ居るより外なければ、誠にかく有るべき事なり、されば存亡禍福皆己而已、云々やうの語は、左傳にも、禍福無門、唯人之所召など有るをはじめ、餘の書にも、これかれ見えたれども、固く定めては、

云ひ難き事なり、希には己れより求めたりと云ひて、よき事もあれど、大概は此語の如くならず、朱子だに人事有以致之、也有是偶然如此時、と云へり、まして孔子をや、いかで斯る偏なる事を云ふべき、もし強に此語を推立たらむには、佛書に云ふ、諸法如影像、皆從因果生と云ひ、また福樂自追如影隨形など云へる、因果の理と、ひとつ意に歸あり、こかく善神と惡神とは、その御所爲の、大きに異なる妙なる故ありて、傳説なくては、絶て知り難き事はゑ、孔子だも知らず、況てほかの赤縣人等の、天命の事を云ひ、天道などを論へるやう、みな僻説にて平穏なる説は更になく、善人も禍にあひ、惡人も福ありしなどに至りては、誰も〳〵辨へかね、辛くして、時運など云ふことを設けて論ひ、(但しこの時運と云ふ事は、既く家語にも、孔子陳蔡の間に苦みけるとき、子路が甚く慍りて孔子に云へるは、由也昔者聞諸夫子、曰爲善者天報之以福、爲不善者天報之以禍、今夫子積德懷義行之久矣、奚居之究也、と云るに孔子答へて、伯夷叔齊が餓死し、龍逢比干が、殺されたる事を云ひて、かく遇不遇あるは、時と云もの也とて、諭したる事見えたれども、よし此語、實に孔子の云るなりとも信がたし、然るは此時と云ふも、究まる所は天命に出ざければ、福善禍淫と定めたるに合はず、もし果して、天命にも、時運などの事もありとせば、福善禍淫を、天道と定むべきよし更になし、)或は、かく定りなきが、則天德の大なる所なりと云ひ、或はこれ常理を失ひたるなり、など論へども、此等は尚書に、天道福善禍淫と云れ、易に鬼神害盈而福謙など云へるに、打合ぬ事のみ多きゆゑ、強て作りたる說どもなり文飾なる運命論、革命論、また宋儒者流の論ども、南秋江が鬼神論、新井君美ぬしの鬼神論、伊藤東涯の天道論、物部徂徠の福善禍淫論、みな同類の說どもにて、或は善人は禍にあひても、後世まで人に讃美らるゝは、これ則福を得たるなり、惡人は福を得ても、後世まで誹らるゝは、これ禍を得たるなりと云ひ、或は善人の禍にあへるは、祖先の世に積たる惡の餘波なりと云ひ、また惡人の福を得るは、これも祖先のなせる善の餘波なりと云ひ、或は惡人の福を得ることは、天實に祚るにあらず、その罪を厚く

して、罰せむとの所爲なり、などやうに云へり、此は。もとも、易の十翼。左傳。其餘も、何くれの書どもに見えたる語に基づきて。云へるなれど、すべて僻說なり、此はよく古を學びて。さて其眼を以て、彼の書どもを讀て知るべし、よく古へを學ばざる人は、大かたは此理を得さとらじ。）或人難じて曰く。世に善惡の神の在すに因て、世の中に善事と惡事とあり、また善人も禍り。惡人も福はふと云ふこと。一わたり聞ては 實に諾なりと 思はるゝ說なれど善はなほ信び難き由あり 畏かれど 此を日の神の御上にて云は、 彼の神の世を照し給ふ、 この光り坐すは 一とつなるに 此を其の受る物によりて禍に受ると 福に受るとの違ひあり 然るは西の國に旱のみして。稻の枯るとて歎けば。東の國にては。米の價の貴きを悅ぶ。また蟬といふ虫は。日の神の照り給ふを歡て音を鳴き。蚓は。かの神の御照にあひては忽に死ぬる。是その受るものに依りて。其善惡の異なるにて。神に善惡なき故なり また此方の軍の勝は。彼方の爲には。不祥なるが如き類も少からず。されば此事は。猶。赤縣學者の謂ゆる 福善禍淫と云ふは これ天の常を語れるにて。其禍福定りなきが。即天德の大きなる所なり。と云ふに。從ふべきこと明なり。かくても猶いふ說ありや。予答ふ。神はその主り給ふ御わざ。各々異にして。此難によりて云はゞ日の神は世を照し給ふが。主宰り給ふ御業なるを。その御光に得堪ずて、稻の枯るゝ事は雨を掌り給ふ神等の。雨を降らし給はぬに依る事にて、日の神の知食さぬ所也。（さてこそ、古は旱には、專と雨の神等を祭られたりき、旱のみ連くを日の神の御荒びの如く思ふは、赤縣俗の議なり、）さて雨の神等は。雨を程よく降し給ふが。其の主り給ふ所なるを 然あらぬは 是そのもとは 惡神の御心による事なるか、（此は下なる、大物主神の、疫をはやらせ給へる事を云へると、合せ考ふべし、）さて西の國の稻の枯れたるは 雨降らぬに依れる禍事なるを東の國にて。これを歡ぶは。慾といふ惡ものゝ。謂りある故なり。また蟬の音をなき。蚓の死ぬるは其のほど／＼に。受たる性の別なる故にて、此も日の神には關からぬ事なり。蚓の土中に隱れ居ても。宜からむと思ふを。わざと物するさまに。這出て死

るを思へば。かの虫は、斯して死ぬべきものに。神の定め給へるなるべく。此は山に住む物を水に放ち。水に住る物を岳に上れば共に死ぬると同じ理なり都て人にまれ物にまれ神の常なる御徳を吾のみ禍に受るは。それ決めて其性の異なるか何ぞかも常に異れる謂ありてなるべし其は雨降らぬに依りて米の價の貴きを悦ぶ者は慾ふかき故なると蛔の出あたりに出て死るとに。准へて知べし大概は此等の理に洩るゝ事なしまた此方の軍の勝は彼方の不祥なる類も種々の別あれど且々云はゞ。明智光秀が總見院の大臣を殺したる如きは理に乖ける事なれば惡神の所爲なるべく豊臣秀吉公の。明智にうち勝たるは。これ理に叶へるなれば善神の御心なるべし（さて上の件に云へる、善惡の神の御所業の異なる故は、古傳說につきて、其大體を云へるにて、世の中の萬の小事、また人の上の小事にも、善惡の神の御所業を、巨細にあてゝ、議するとには非ず、先その大體を知りて、萬の小事は、其中に込て心得べきものなり、なほ末にも考へ合すべき論あり、）赤縣人は左いふも右云ふも正實の傳說を知らざる故の僻說なれば。まづは難むるにも足らねども皇國の學問者にして此の故を知らず西戎人と等並に。をさなき說のみ云ひ居るなどは。甚も口をしき事なりかし併また世に有りとある事ども。總て天神地祇の御靈に洩たる事なければ。誰しの人も能々齋き祀るべき事論ひなし（この事は、我が師の書どもに、委曲に云ひ置れたり）これ則孔子の本意なり。赤縣にては後世となるがまにまに。神祇を祀るにもさかしらをのみ先として神の御上をも彼小理をもて。推むとすれど。其は甚じき非事なり神の御上は更に赤縣人の云ふ如き。理屈めきたる事にては無く我が翁の玉くしげに云はれしは善神を祭りて福を祈るはもとより。又禍を免れむ爲に荒ぶる神をまつり和すも。古の道なり然るを人の吉凶禍福は、面々の心の邪正。行ひの善惡に依る事なるを。神に祈るは愚なり神何ぞこれを聽む、とやうに云ふは。儒者の常の談なれども。かやうに己が理屈をのみたてゝ、神事を疎にするは。例の生さかしき唐戎の見識にして。これ神には邪神も有て。横さまなる禍のある道理を。

知らざる故のひが事なりと、云はれしを、熟々思ひ回らすべし、また太宰純が。經濟錄の、祭祀と云ふ條に云るは、時々祭をなして、雨をもとめ、風を止め。國のため。民の爲に。福を祈り、災をはらふ事、常の人より見れば。却りて愚なるやうに見ゆれども。人力を盡したる上は、神祇の助を憑むよりほかはなきものなり。神は聰明正直なるものにて。兒童の戯の如くなる祭をなして感應ある、これ鬼神の測りがたき所なり、天を畏れ民を患ふるは、王者の心なり、此段は尋常の經學者の徒の預り知る所にあらず、と云へるは。實に然ることにて。いと〳〵めでたく。眞の道に稱ひたる說なりけり。偖その御心を、とらむとするには、先いみじく火の汚穢をいみ清淨めて。（但しこの火を清淨むると云ふことも、尋常の學者の、いたく心得がてにする事なるが、此はよく古を學びて、其妙なる故よしある事を悟るべく、亦それまでもなく、今の現に、其しるしあるをも思ふべし、）種々美旨多く獻り、人ども親しく集ひて、歌ひ舞ひ、種々おもしろき事のかぎりを爲して、慰め奉るぞ、神の大御心には叶ふなる、此妙なる趣は、熟く古を學びて知るべし、或人問て曰く、普通の識者等の常云ふ言に、神は正直にして。非禮を歆たまはぬ理なるを。己が心の私欲あるに競べて。神に珍膳美味を獻り。或は甚しきに至りては。此願を叶へ賜はらむには、宮を修理して奉らむ、繪馬を納め奉らむ。など云ひて祈る。これ甚じき非事なり、人だにも志ある者は、賄賂を受る事を恥とす、まして神の上をや、もし然やうの祈を受る神もあらば、其は決めて邪神なるべし、など猶言痛く理を述て云ふ者あり。此論ひはいかに、予云ふは、其は凡人の常の道理を以て云へば、當れるが如くなれど、神は正直にして文なきと。奇く異く坐ますとのみ。人と異にして。其情は違ふこと無し、然るは、人にしか〳〵の事を叶へ賜はらむには、云々の物贈らむと云ふに。否みて受ざるは、其物の欲からぬに非ず、受るは道ならずと思ひ、又は佗の見聞を憚り思ふが故に、欲き心を制へて受ざるなり。神は然る心しらび無く。その物を受て、願ふすぢを叶へ給ふは、是神の直き情なり、譬へば稚子に果を與むと約りて、しか〳〵せよと云ふに。小兒は更に人の思はくを憚る事なく。悦びて其

事を成すが如し　然らば人の欲しと思ふ眞心を　曲て受ざるは。僞の如くなれば　直からぬかと云ふに。然にあらず　受るは道ならずと猶豫ひ　佗の見聞を恥るも　人の上の止事なき心にて　是則人の上の道なり　（また稀には、その心配なく、欲しと思ふ儘に、受る人も有らむか、是も其人の眞心なれば、然のみ惜しと云までの事はなきなり）都て斯る事の上に。道を心得るに足ること。多く有る事なれど。此はかたくなに。赤縣籍のみ讀たる人々の。容易く心得がたき處なり。然れど能く思ひめぐらすべき事なり。然れば人の受ぬを是として　神の受給ふを非なりとは云べからず。また神の受たまふを直しとして。人の受ぬを直からずとは。彌々云ふべき事に非ず　受ると受ざると。互にその道の異なる所なり。また神に祈言を申して　其よろこびに。物獻る事を。謂ゆる賄賂なりとて　非事なりと云ふも。いまだ眞の道を得ざる故の僻説なり。さるは神のみならず。人の上にても。人に物賴むには　いかで其事を成し得てましと思ふ故。何にも其人の心を執むとす　これ實に然あらでは叶はぬ事にて　自然の人情なり　又さらでも人の恩をうけて　其情き情を表さむとするには。只に辱きよしを云へるのみにては。何となく心に不足ず思ふ故に。さては物贈りてなりとも　其情き情を表さむとする　是もまた然あらでは叶はぬ事にて　即天津神の賦り賜へる人の性にて　則これ眞の道なり（さるを此意の轉りては、おのれ非事なる訟事に勝むなどかまへて、司の人に密に物おくりなどして、其心をとり、あらぬ惡事を爲出ることもある故に、いと惡き事の如くにも云ふめれど、元來は人の止事なき眞性より出たる事にて、惡からぬ事なるを、西戎人など、眞の道てふ事を知らざる故に、もとの意をたどらずて、一向に惡きわざなりとは云へるなり、人に甚じく恩を受たるは、なる限り物おくりてすら、心不足ばかり情きものなり、能く己が心に省て、此意を悟るべし）然れば神に禱言を申して物奉るも　此心ばへに異なる事なし。此をなどか惡しと云はむ　物奉らむと誓ひて。祈申すとも。なでふ事か有らむ　總て古へに例ある事にて　神の御みづから。我にしかじかの物を獻りて　しかじかの祭祀をなしたらむには。云々の福を與へまし。な

ど宣へること、古書に此彼見えたり。此はよく古へを學びて知るべし。（小智見の赤縣學者、おのが心に比べ見て、あなかしこ、神の御上を勿測り云ひそ。）また赤縣籍にも、尚書の金縢に。眞の道に稱ひたる。甚も殊勝なること有り。（この金縢の事は、前にも云へり、考へ合すべし。）然るは周公旦。その兄武王が疾を瘳さむとて。璧と珪とを奉りて。先祖の神靈に祈りて云へるは、以旦代某之身。予仁若考能多材多藝、能事鬼神云々。爾之許我、我其以璧與珪歸俟爾命。爾不許我我乃屛璧與珪。と云へり。周公旦は。我老翁の云はれし如く。何につけても。さかしらのみ爲し人なるが。中には斯く實々しき事もあるは。しかすがに上つ世に遠からねば。古へ意なる事も有けるよと、甚おむかしくなむ。（然るを彼國人、王廉、張和仲の徒、前にも云へる如く、此事をも、金縢を僞書なりと云ふの證として、夫人子有事于先王、而可以珪璧要之乎、使周公而然非達孝者矣、など云へるは、眞の道をたどらねばなるべし。）此等をも、赤縣學者流は、賄賂なりと云ふにや。其は何にも有れ、都て道は天津神の命せ賜へる、眞の性に順て尋ぬべき者也かし。また問て曰く。神に不敬事ありても。罰め給ふ事なく。祈りても忽に感應なき事も有は。神の實物なるとしては。甚心得がたき事なり。然れば感應ありつと思ふは。寓然にはあらざるか。予云ふ。まづ神の御心は。甚も〳〵測りがたく。奇異き物にて。善神の福を賜はり。人の不敬を罰め給はぬなどは、然る事なれども。時にふれては。忽に罰め給ふ事も有り。また不敬事も無く。粗畧にも爲奉らぬに。荒び給ふこともあり（さるは人こそ知らね、何ぞかも、神の御心にかなはぬ事の有りて、崇神天皇の御代に、三輪の大物主の神の荒び給ひて、天の下に疫病を流行らせ給へるなど、更にいかなる故とも測りがたし。）また惡神と云へども。御心の和み給へる時は、福をなし給ふ事も。絶てなしとも決めがたし。又問て云く。然やうに善神も、或は禍事をなし。惡神も或は福を與へ給ふ事も有りといはゞ。何れ善神。いづれ惡神と。別云ふべき證なく。甚混らはしき事に非ずや。予云ふ。此は我が翁の云く。凡て神と稱す物は、佛家に謂ゆる佛、また儒家にいはゆる聖人、などゝは異なるも

のに坐ませば。正き善神とても。事に觸て怒り給ふ時は。世の人を惱まし給ふ事もあり。邪なる惡神も。稀々には善き所爲も有るべし。とにかくに神の御事は。彼の佛菩薩聖賢など云ふ物の例を以ては云ふべからず。善神の御所爲には 邪なる事は。つゆも有るまじき事ぞと 理をもて思ふは 儒佛の習氣なり。神はたゞ尋常の人の上にて心得べし 勝れて善き人とても。時によりては怒る事あり。怒りては人のため善からぬことも。必無きに非ず。又あしき人とても。希には善神も混ることにて。一概には定めがたきが如し されば崇神天皇の御世に 大物主神の御心に依て 疫の發りしも異むべきに非ず云々 (篤胤云、此文の續きに、凡て世に惡き事の有るは、これ禍津日神の御所爲なるよしを、師の記し置かれたれど、其は一偏の說にて、委からざる事、既に上に云へるが如くなれば省きつ)と云はれたるを。能よく思ひ回らすべし。善神の禍害を爲し。惡神の幸福をなし給ふことは。譬へば櫻の花は。春さく物に極まりたれど 或はかへり花とて秋冬なども咲こと有ると 同こゝろばへなり。然るを この適ある事を以て。いかで櫻の花は。春さく物とは。定め難しと云ふべからむ。然れば善神の荒び。惡神の福をなし給ふなどは。此かへり花の類と思ふべし。かく神の御上の事は奇異く。實には測り難き事故に。たゞ畏れ敬ひ 御心をとり奉るより佗なき事なり。(孔子の、鬼神之德盛矣乎云々、詩曰、神之格思不レ可レ度。矧可レ射思。と云へるをも思ひ合すべし、)又問て曰く。古道を學びて 神の御上をよく辨へたらむには。佗國の神をば 祭るべからぬ理にや。また世に崇て祭る事には有れど 彼の佛などをも淨く厭ひ廢べき物にや はた佛は神とは甚く異なる者にや。予云ふ 能くも問ひ發されたる物かな 此事は俗の亦縣學者は更にも云はず 古へを學ぶ人さへに 心得ひがむる事なるが 玉鉾百首の歌に「釋迦孔子も神にし有れば其道も 廣けき神の枝道と。詠れたる如く 佛法すなはち神の枝道にて佛すなはち天竺の神なり(委くいへば、天竺にても、神と佛と二の別あり、謂ゆる神とは、諸天善神など云ふ類ひ、いはゆる佛とは、彌陀、觀音、勢至など云ふ屬なり、大概をいへば、謂ゆる諸神は、彼の國に元より事實の

傳はりたるにて、諸佛は大かた、釋迦法師の杜撰り出たる物と見えたり、此は實にしか有べき謂れあり、さるは出定後語に記せる如く、彼の國には、釋迦よりもいと上つ世に、既く教ありて、佛法に外道とさすもの即ち是なり、この外道、かの國に元よりある所の、諸天諸神の古傳説に原づきて、人を導けるを、釋迦法師いでゝ、一層その上を說き、諸天諸神にまさりて、尊き物こそ有なれとて、過去の諸佛と云ふもの、並に其の妄說を杜撰り、いはゆる神變といふ、くさ〴〵の妖術をもて、其有形を現はして證とし、さて終に、彼國人を誑きおほせたる物なり、然れば佛經に、諸天諸神の屬、佛の下吏の如く見ゆるは此の故なり、そは近くは、翻譯名義集に、佛陀大論云、秦言知者、知過去、未來、現在、衆生、非衆生數、有常、無常等一切諸法、菩提樹下了了覺知、故名佛陀、後漢郊祀志云、漢言覺也云々と云ひ、また原夫佛垂化也、道濟百靈、法傳世也、慈育萬有、出則釋天前引、入乃梵王後隨云々、三乘賢聖、既肅爾以歸投、八部鬼神、故森然而翊衞、と云るにても知べし、また諸佛經おほかたは、後世人の釋迦に託けて妄作れるなれば、其等が心に出たるも多きなり、何を以て、其古傳と、妄作とを、知ると云ふに、其佛の名と、事實とを、よく考へて知らるゝ事にて、此は出定後語、また赤倮々に論へるを階梯とし、なほ上りて密に考へて、さる由緣を曉るべし、さて彼國にても、神と佛との差別、かくの如しといへども、諸の佛書等に、諸天諸神をも、彌陀、勢至の類と、つかねて佛といひ、また彌陀、勢至の類をも、諸神諸天と等く神とも云へれば、爰には諸神諸佛おしなべて、只に佛と云ふなり、○序なれば云ふ、諸の佛神に實物と寓物とある事は、此は活眼をもて書を讀むうへにて云ふことなり、然るを禪宗と云ふを始め、後世に作りたる宗どもに、諸佛神ことごとに、有名無實にて、釋迦法師の、道理を諭さむため、寓に設けたる物なりとやうに、說けるが多かれど、此は彼國も後世となるがまに〳〵、人心生さかしく成りて、釋迦法師の教へたる趣にては、信はざりし故に、其を一段さかしく說て教へたるにて、此は何れの國も思ひ合さるゝ事の多きなり、諸佛神、釋迦の設けたるが多けれども、更に道理の上の寓物にあらず、實

物なるに決めて他まで彼國人を誑かしたるなり、また赤縣へ渡りてのち、彼國にて附會して、道理の上に取成したる事も少からず、其は禪學の書を讀見るに、多く老子の說を非心得して、其を取り、莊子の說をも附會して、說たる物なるにても知られたり、朱子もはやく、釋氏只有四十二章經是古書、餘中國文士潤色成之とも云へり、）或人いはく、佛は天竺の神にて、赤縣にても、此を神と云へり　其は後漢書に、西域有神其名曰佛といひ、勾瑞に　佛西方神など云へる是なり（なほ胡神、また蕃神など云ふ事も、何くれの籍に見えたり、）また皇國籍にも、欽明紀に　蕃神　敏達紀に他神など作き給ひ　靈異記に、隣國客神の像云々とありて　注に客神者佛なりとあるなど　能く符ひたる書法なり　此れ等をもて赤縣も皇國も　佛を神と云へる　古への例をも思ふべく。又それまでも無く。古へより佛の靈驗ありて。神なる事は灼然し。（されど人の僞れる事も多し、今は其正きに就て云ふなり、）更に疑ふべくもあらず。（但し此ことは、古學を爲たる者の心よりは、佛法と云ふもの、元來は釋迦の、さかしらに作りたる邪道なれば、みな禍神のこゝろより作る事にて、その靈驗あるも、みな其禍神の心なむありとやうに、ふと思はるゝ事なれど、然にあらず、諸の佛神は、天竺の國に元より其事實の傳はりたるを、釋迦の說廣めたるなり、○篤胤云、この或人の論ひの如く、天竺の蕃神佛、おほかたは、彼國に古へより事實の存りたるを、釋迦法師の說ひろめたるなる事は、論ひなきものから、先にも云へる如く、彼法師、ならびに後世の法師どもの杜撰り出て、有名無實なるも、又少からず、その有名無實の物に祈りて、驗ある事は是また神の御心なり、其は下に記せる鮑魚神、草鞋大王の靈驗ありしに、准へて知るべし、また元來は假に設けたるにもあれ、祈りて驗ある上は、打任せて神と云はむも、何事かあらむ、）また佛は蕃神なれば、祭るべき謂なしとて　疾み厭ひ廢むとする人の有るも、偏にして、眞の神の事を知らざるものなり、凡て世の中の事は善も惡きも　本は神の御所業によれる事にて、佛道の行はれ、佛神の參渡りて、其を祭る風俗となりたるも。本は神の御心に因れるにて。則公ざまにも立置るゝ事なれば　是も廣けき神の道

の中の一の道なり。かくて。佛すなはち神なれば。時世に祭る風俗のほど〴〵に　禮び饗しらひ　また由縁ありて。心の向はむ人は。祭もし祈言をせむも。咎むべき事には非ずかし。然れど眞の道の趣を聢りたらむ人は　皇國には　天地の初發の時よりの　正き傳説ありて　神々の尊く畏く　恩賴の忝き事を知りて。齋き祭り　なほまた其家々に就て　各々先祖氏神など　祭り來れる神靈ありて　家のため身の爲の　幸ひを祈る事なれば　其を除て　外蕃の佛神などに　ひたすら心の向きて　尊み忝むべきに非ず　此は欽明紀の議に　何背國神敬他神也とあるぞ　正しき道の理に叶ふべきと云へり　此或人の説に從ふべし　又問ふ　上の條々に云はれしにて　誰も誰も　神祇を敬ひ祭るべき理は　大抵に通えたれども　今の俗に　家ごとに宮を設けて　天皇の宗廟たる。天照大御神を齋ひ拜む事は僻事なり。これ謂ゆる淫祀と云ふものにて。禮記に。非其所祭而祭之名曰淫祀淫祀無福といひ　左傳にも鬼神非其族類不歆其祭と云ひ。孔子も。非其鬼祭之諂也　また敬鬼神而遠之可謂智矣　また未能事人焉能事鬼とも云へれば　決めて否き事なり。と云ふ人あり　此はいかに。予云ふ　此事は赤縣學者流の常いふ事なるが。何にも彼徒より見たらむには。然思はるゝ事なるべけれど　いまだ事の義を深く知らざる物なり　然るはまづ　天照大御神の大宮を　赤縣に謂ゆる宗廟と云ふものゝ如く思ふは。甚く違へり。彼國にて。宗廟といふ物は。王にまれ諸侯にまれ。己が遠祖を祭る所を云ひて　其は我のみ祀れども　他よりは祭る事ならぬ制なり。然るから。其の祭るまじきを祭るなどをば。淫祀とは云るなり。此は誠に然も有るべき事なりかし　天照大御神の宮所は今さら申すも更なれども　人々仰ぎ瞻奉る　日大神の御神靈を齋ひ祭り給へるにて　神宮なり　然るを赤縣州の王どもの。死靈を祭りたる所と等く稱し奉るは。いとも可畏く　餘りに物しらぬ儒者どもの云ひごとなり。唯似よりたる事は　天皇の御大祖に坐ます事のみなり　此は挂卷も可畏けれども　天皇の御遠祖に坐す　邇々藝命と稱し奉るは　日の大神の大御孫に坐まして　皇國へ天降ませる故なり　此は古事記。また日本紀　古語拾遺などに　委く見えたるが如し。

(此事をも、赤縣學者流は、彼國の、祖宗を天に配すなどいふ事と、同じ趣に思へど、其は古へをしらぬに依てなり。)かく赤縣州の宗廟。また社稷など云ふものとは異なる事にて。神宮なれば、諸人の拜み奉るとも。更に咎むべき事に非ず。(よし、赤縣に云ふ、宗廟と、ひとしき宮を、諸人の拜むとも、公より、然すること勿れとの御制なき事ならむには、赤縣の制を規として、論ふべき事に非ず、況て然もあらぬをや。)もとも。古へには、私に幣物を献ることは。禁じ給へれど。(こは大神宮儀式帳、延喜式などに見えたり。)大宮へ參詣る事は禁ぜられたる事なし。(但今の世の如く、家々に祀り奉る事は、源平の亂より打續き、世の中亂れて、大御神へ、諸國よりの奉り物も絶たりしほど、僧の輩、時を得て、法樂といふ事をして、佛經を誦し、其の祈禱の卷數を記して、諸國の旦家へ配りけるよりの事なりとぞ、此もすなはち神の御慮なるべし、猶この事は、外に委く記せる物あり。)殊に此大御神は。挂卷もいとも畏く。甚も妙なる由縁まし坐て。世に有りとある人の限り。敬ひ拜み奉らでは、得あらぬ業なるが上に生とし生るもの。今の現に。此大御神の御德を蒙らぬ物の無ければ。家ごとに祀り奉りて。其大御德を忘れ奉らぬは、いと厚き事にて眞に道に稱ひたる所爲と云ふべし。(赤縣人の如く、日は大陽の精などと云ひて、上もなく尊き神に坐ますことを知らず、其大御德を思はぬとは、實に年を同くしても語るべからず、赤縣にては、紅夷など云ひて陋むる、淤蘭陀人、また蝦夷の國の人までも、能く日の神の可畏く尊く坐ます事を知りて、朝夕に齋き祀り奉るとぞ、いとやさしき事なりかし)然れば元來祀奉らぬ家は。左も右も其意に任すべく、元より祀り來れる家は決めて粗略には爲奉るまじき事なり。眞の道を云はば。この大御神の御德に洩たる人の無ければ誰が家にも齋き祀り奉るべき理いちしるく 更に淫祀など云ふべき事にあらず。(然は有れど、近く祭り奉りては、自然に狎汚し奉ることも、あるべければ、其心しらびして、狎れず汚さで敬ひ、誠心に能く祀りら奉むやうこそ、有らまほしけれ。)さて又。問の語に云へる語どもは、大凡の學者の、神の御上の事を云ふ毎に、必いふ語にて。中には甚く道の害となる

說も多かれば。此所には處狹く煩けれど。委細に云ふべし。まづ左傳に。鬼神非ニ其族類一不レ歆ニ其祭一と云ひ。また禮記なる。非ニ其所一レ祭而祭レ之曰ニ淫祀一淫祀無レ福。などいへる類は。測り難き神の上を己が意もて。推むとするにて。例の妄說なり。然るは赤縣にて。王とある者の。天神地祇を祭祀る事は。儒者の云ふを聞くに。天地の主として。天地の中に居り。天地の氣。その身に關り係りぬれば。自然に天地の神。その祭を享べき筋なりと云ひ。また諸侯とある者は。一國の主なれば。天地の神を祭るべき由緣なければ。只に封內の山川をのみ祭るべしとて。此より以下。大夫。士。庶人と五等に分けて。其いはれを論ひ。譬へば諸侯にして。天神地祇を祀り。大夫にして。山川の神を祭る類は。其祭るまじきを祀るなれば。淫祀なり。淫祀には。神の福をなし給ふ事は決めて無き事なりと云へり。(この事なほ委くは、新井君美主の鬼神論を見るべし。)歆たまはぬと云ふ事。何を徵として云ふ事ぞ。天地の諸神の御德に依て。生立ゆく人なるを。庶人なりとて。誠心に祀り奉らば。神いかで其祭を享給はざらむ。和漢に庶人の身ながら。神祇を祈りて。其福を賜はれる事多くあり。又鬼神非ニ其族類一不レ歆ニ其祭一と云へるも信がたき事は。先人は。生て有りし時の情も。死て神靈と成りての情も。違ふ事は有るまじければ。生たる時の情もて。神靈となりての情を測るべし。生たる時の情は。更に由緣もなく。親族にもあらぬ人にても。我に懇なる意もて饗すれば。悅びて受け。又或はうち挂て。賴む事などの有れば。いかで其事を成し得て。取せばやと思ひて。力の限り勤むに非ずや。然るを死て神靈と成るとも。何でその族類ならぬ者の祭は歆ず。などやうの無端き情と成らむや。(然るを、陰陽五行の理をもて、鬼神を論ふ人々、決めてその族類ならぬ者の、祀を歆ぬ理を論ひて、君美ぬしなども、我族類に非ざる祭は、神たとへ其德を射はすとも、其饗を歆ること能はず、その氣別にして、相感ずべき理の具らざればなり、などさへぞ言れける。)もし强て。鬼神は非族の祭祀を歆ずといふ人有らば。其は決めて。その本情たのもしげ無き人なるべし。今鬼神の。その族類ならぬ人の祭を歆るよしを。和漢の事にて。其尤きものを云はゞ。北野

の神を、菅原氏ならぬ人の。祀りて驗あること灼然く、また赤縣にても關羽また天妃など云ふ者の神靈のすべての人に福をなす事の著明をも思ふべし　斯在ことの迹をば顧ず　信みがたき、空論空理にのみ泥み居るは何ぞや、殊に鬼神は、非族の祭を歆ずと云ふ事は　一偏に赤縣說を信ふ人には、甚く害となる語なり　然るは今世に多かる養親養子などの中も此語に惑ひたらむには　自然に親をさきて不慈不孝のもとゐを發すべきものなり。（若しひて此語を主張せむとせば、儒者の孔子を祭るは何事ぞや、朱子いはく、若祭其佗亦祭其所當祭云々、烏得而不來歆乎、今祭孔子必於學、其氣類亦可想と云へり、これ理めきて聞ゆるを、また性理學義などには、異姓の養子の祭をば、先祖の靈の歆すと云ふ理を、言痛く論へり、儒者の、孔子を祭りて歆べき理あらば、其家を續る養子の祭は、いよ／＼歆べき理なるをや、何事も空理を以て推むとするから、かく前後そろはぬ說も出來るなり、さるを信ひ居る人も有るは、いと怪しく可笑き事なり。）すべて赤縣の敎訓どもには、餘りに狡意すぎて人情を亂り、道を害ふ事、この類多く有り。（序なれば此所に記す、こは南秋江が鬼神論に見えたる事なるが、李子と云ふ者に、何者か問ひけらくは、凡人於母有連骨肉乎、と云ひければ、李子が云るは、子見五穀乎、種於土而生長也、其枝節根葉、皆出於種而无一膚於土、種者父也、土者母也、是故先王之制、同姓之親、百世不婚、而母族无親、夫母也功與父同而不連骨肉則有矣、と云ければ、その者かへりて、其母に云へるは、昨聞於李子、母无恩德於我と云て、其後は母に仕ふること、粗略になりける、と云ふ事見えたり、此類の事なほ有るべし、一向に赤縣語を信ふ人には、まゝ此の類の癡人あり、よく思ひ回らすべき事なりかし。）また孔子の非其鬼而祭之諂也と云たるを　淫祀無福。また鬼神は。其族類に非ざれば　其祭を歆すなど云へると。強會せて解くことなれども非說なり。此は、徂徠の論語徵に、此孔子有所譏而言、但來審其爲何人也、其義則與荅樊遲。務民之義、敬鬼神而遠之相發、と云へるにて。更に動くまじくこそ聢ゆれ。また敬鬼神而遠之可謂智　（吾友鈴木朗いはく、

遠之の二字、俗の儒者など、遠レ之と訓む事なれど、いとも不敬の訓ざまにて、孔子の語氣に非ず、遠レ之とこそ訓べけれと云へり、此實に然ることなり、從ふべし、僅にヲといふをニといふの違ひなれど、敬と不敬の太じき違ひとなる、これテニヲハの妙なる所なり。）と云へるは、樊遲への答なるを、此をも都ての人に及びたる語と思ふは、また謬なり。然るは樊遲は、孔子も小人なる哉と長息たるばかりの癡人なれば、（なほ此人の才の鈍かりしこと、論語を披き見て知るべし、）鬼神に褻事ることの過たりけむかし。然る故に。其を矯むとて、斯は教へたるなるべし。また未レ能レ事レ人焉能事レ鬼と云へるは、季路への答なり。此をも諸人に及びたる語と思ふは、また謬なり。子路は剛勇にすぎたる壯士なれば、察ふに幽冥の理を信はず、形も見えぬ物に、事るなどは、益なき事にも思ひて、鬼神を侮り、それに事へて、不敬き事もありけむかし、又然らでも、然る事も有らむかとの心配にて、汝などは、いまだ人に事ふることさへ、能くも學ばで、焉で鬼神に事へまつることを得べきぞと、鬼神の可畏き事を知らしめて、彼が不敬なきやうにと、誡めたるなるべし。（子路が、幽冥の理を知らざりけむと思ふは、鬼神に事ふる事を問て、やがて死生の事を問へるにても知るべし。）凡て孔子は、その問人に依て、同事も、其答の別なるは、誰もよく知れる事なり。又問て曰く。此語の同じつゞきに、子路が又死を問ひける答に、不レ知レ生焉知レ死乎と云へると、家語に、子貢が、死者有レ知乎將無レ知乎と問けるに、孔子答へて、吾欲レ言二死之有一レ知、將レ恐三孝子順孫妨レ生以送二死、吾欲レ言二死之無一レ知、恐二不孝之子棄二其親一而不レ葬。賜不レ欲レ知二死者有レ知與一レ無レ知。非二今之急一、後自知レ之と云へるとを、一つの意に解く人あり。誠にさる事なるか。若くは事異なるか、予いふ。子路に答たる語と、家語なるとは、詞は似たれども、意は甚く異なり。然るはまづ、子路に答たる語の意は、汝も吾も、かく生れ出たる物には有れど、何なる理に依て、何として生れ出たりと云ふこと、吾ながら更に知られぬに非ずや、然るを況や、心見もせぬ事なるを、死て後の事を、何として知るべきぞと云へるなり。死て知る事の有無を云へるには非ず。（もし強て、これを

死て知る事の有无を知らずと云へるなりと解かば、不レ知レ生といへるは、斯して居るも、死たるか生たるか、知らずと云へる事となるをや、然る事にてはあらじかし。）また家語なる。欲レ言二死之有一レ知。云々の語は。文面の如く、死て後。しる事の有無を云へるなり。倩また此語は。甚しく道の害となる語にて。思ふに。此は後人の、孔子に託けて云へる物にて。決めて孔子の語ならじとぞ所思ゆる。（すべて家語なる事ども、此類いと〳〵多し、）然いふ故は。此語に。死者しる事の有無を究めず。語を左右に託せて。云ひ遁れはしたれども。後自知レ之。など云へるより及ぼして。其そこの情を推量るに　實には死者しる事なしと。究めたるの語勢なり。然るから此語を信ひたる。和漢の識者等、大凡は死者を知ること無し。と云ふに決めたり。（鬼神を有无に究めずと云ふも。此等の習氣に因てなるべし、）孔子の意は然らず。死者しる事ありと。堅く云ひ敎へてすら。生さかしらの徒。または實意うすき輩などは。死者の靈其所に容を現さねば。自然に怠慢の情おこりて。生たる人に事る如くには有らぬわざなり。況て知る事なしと云ひ。また知ることを有無に決めざらむには。先祖を祭るにも。誰も禮文一と通りの事に成ゆきて。誠心には事へぬわざなり。何で孔子は。さる浮薄たる事いひて。人を惑はし疑はしめむ。死者しる事ありと云ひて。孝子順孫の。生を妨げて送るばかり。實の意おこりて。厚きに歸きたらむには。知る事を有無に究めず。人をして。祭祀に怠慢の情を漫らせむより。こよなく優りて、眞に道の本意なるべし。殊に生を妨げて。死を送るばかりの孝子順孫ならむには。然しては、父母の我を愛む意に悖りて。却て不孝なるべしなど。能く諭したらむには。決めて其敎に從ふべし。また同し書に。曾子の曰く。古之人胡爲而死二其親一也云々。孔子曰之レ死而致レ死乎。不仁不レ可レ爲也。之レ死而致レ生乎。不智不レ可レ爲也。（但しこは禮記の檀弓を採りて、記りと見えたるが、最初擧たる徂徠の說に、謂二之有一者權在レ彼者也、謂二之无一者權在レ我者也云々、と云へるも、此語に原づけるなるべし、）と云へるも。同類の語ゆゑ。人の能く引出る事なれども。是はた孔子の語とは聞えず。然るは死者しること無しと云ひ。或は有無に究めず

て。不仁と爲らむよりは。知る事ありと云て。不智と云はれむとするぞ。孔子の意なるべき。然るを有無に決ずて。仁智ともに兼たる人と云はれむ事を思はゞ。其は既に不仁不智の人なり。孔子は爭でさる心汚き事ならむ。能く論語を通讀すに。孔子は。仁と云ふ事を。殊更に。やむ事なき物に云へり。仁あらば。智も其中に籠り有るをや。曾子の語に。古之人胡爲而死二其親一也。と云へるぞ。却りて眞の道には。符ふべけれ。（よく考へて、家語なる語どもの、孔子の意とは反對なる事を悟るべし、家語のみならず、餘の書等に、孔子の語とて記しあるにも、此類多ければ、よく論語と比べ見て、取捨すべき事なり、さるを俗には、孔子の語とだに云へば、此所と彼所と、打合ぬ事をも、强て解きおく人も有るは、甚愚なる事也かし、）おのれ常に云ふは。人死て知る事なしと言ひ思ふ人は。必不孝の人なむめりと云ふ。然るは先祖を祭り親を祭るも。皆眞心より出て爲には非ず。たゞ文飾ひと通りにて。實に愼終追遠の誠心至らず。云ひもて行けば。僞巧の所爲なればなり。倩また此所には。最よき因なれば云ふべし。論語に。

祭如レ在祭レ神如二神在一とあるを。大概の儒者の解るやう。只に敬と云ふ事をのみ。言痛きまでに云ひて。神靈は。實には無きものなれども。在る如く心得て。事へよと云ふ如く解くめり。もとも神靈は目前に。その形狀を現し給はねば。しか釋きても。宜きやうなれども。未た委しからず。然るは此の事は。孔子の神を祭れる狀を。其弟子等の親く見て。形容し云へるなる事は。論なき物から。（徂徠の說に。祭如レ在とは、古經の文にて、祭レ神如二神在一とは、其の經文を釋るなり、故に孔子の語を引て、證せる也と云へるは非說也、此は禮記の祭儀、また家語に、孔子の其の親を祭るに、容を文ることなくて、每に神を祭るには、容を整ふることを專と敎へたるには、替りたるを見て、子貢が其の故を問へるに、孔子の云へるは、容を盛に整る事は、公の祭に與る時などこそ、然すべき業なれ、親に事ふるの道にあらず、と云へるなどゝ、向へ思ふに、こは孔子の、自身祭をなしたる狀を、弟子の記しおけるといふ、舊說に從ふべし、）孔子は。宋儒などの云ふ如き。理窟を思ひ

てには有るまじく。唯に神靈あらむには見え給はねども。實に寄來て坐ます故に。其の情にて祭りたるなるべし。然れば佗より見て。其の容を記し又その文を釋かむには。今までの註釋の如く。云ふより外はなき如くなれども。何とやらむ履を隔て、痒きを搔くとか云ふ心地するなり。然りとて予その義を述むとするに。彼の情あまり有りて言たらずと云ふ如くにて。實に書とり難し。然れども。今強に思ひおこして。予が神を祭る心を推て孔子の情を云はむには。先おのれ鬼神を祭るには。赤縣學者の如く。鬼神を疑ふ心さらに無ければ、（天神地祇、又死者の神靈をおし並べて云ふ。）其の祭に臨みて。現人の物言ひ事ふると其意さらに異なる事なく譬へば。貴人の襖を一重へだてゝ坐す所にて。事へ奉るが如し。されば孔子の神を祭りたるも。此の如くなりけむと思はるゝなり。吾不與祭如不祭と云へるも。實に然る事なりかし（但し斯くいはゞ、甚じき大言の如く思ふ人もあるべけれど、さるは、孔子の言行は、凡人には、絕てなき事と思ふよりの俗意にて、云ふにも足らず、凡て眞の道より出たる情は、誰も同事にて、鬼神のことを能く辨へたらむには、更に珍しからぬわざなり。祭神如神在と云ふ語も、物々しく書籍に記し有りて、殊にかやうの眞心なる所爲は、餘の西戎人どもには、いと有りがたき事ゆゑに、おどろきて、事々しき註釋どもあれど、眞の道に志を歸けたらむには、誰々も斯有べき事と思へば、予はさしもおどろかずなむ、偖また大抵の人の說に、まづ生るゝ事をよく知て其後に。死て後の事をも知るべしとて其據に毎もひき出て云ふ事は、先左傳に子產が云へる人生始化曰魄、既生魄陽曰魂（この子產が語にては魄と云ふは、人生るゝに、始て其父母より受たる體となるべき物を云へる如く聞えたり、偖こそ杜預も、魄者形也と註せり、然るを又淮南子などには、魄者陰之神也と云ふ說もありて、彼此混らはしく、朱子など二說ともに取りて、此をも彼をも、說得好など讚美て、更に前後あはぬ說どもを多く云へれど、其の辨は煩ければ、こゝに云はず、）と云ひ。また禮記の祭儀に孔子の語なりとて人生有氣有魂有魄。氣也者神之盛也魄也者鬼之盛也、衆生必死死必

歸土。此謂鬼。魂氣歸天。此謂神。合鬼與神而享之敎之至也。骨肉斃于下化爲野土。其氣發揚于上爲昭明焄蒿悽愴。此百物之精也。とあるなどを引て。人の生るゝと死るとは。陰陽二つの氣の。聚ると散るとにて。聚れば人となり。散りては元の陰陽に復る。其は薪盡て煙の騰上るが如く。何所に歸くと云ふ事なく。消散るなり。死生人鬼一つにして二ッ。二ッにして一ッなり。（徂徠の鬼神論に、有无者鬼神之迹也云々、有之與无代嬗、愈出愈新、愈動愈不屈、周之言曰、薪盡而火傳、莫見薪火之爲二、亦孰知熖續熖逝者如斯夫、而知道者見其常无死焉、是以邃古之无疆、盈六合之中、洋々乎莫非是物也、云々と云へるは、先儒の說とは、少く異にして大きに同じ、）子孫の祭を爲すに及びて來格ることは。子孫はこれ祖先の氣なる故に彼此もと一氣なれば。祭祀に其誠を盡す時は同氣相感じて感格あるなり。など云り。また祭儀なる人生有氣云々の語を。孔子の語なりと云ふことと信がたし。然るは論語に依て熟考ふるに。孔子は此やうに。隱れたるを索め。知らざる事を云ふ人とは見えねばなり。按ふに此は決めて。後世の小ざかしき者の。孔子に託けたる妄說なる事論なし。然るは。いま。一層。この上を問て。しか陰陽聚りて人と生れ。氣魂魄と云ふ。二つの奇物を生じて。かく活動き。また陰陽消散て死る時は。其の魂は天に發揚り。魄は土に歸る事は。何の理に因て然るや。また同氣相感ずるとやらむ。其子孫にのみ。別て感格ある事は。如何なる理に依て然るやなど。窮問たらむには。何にとか爲る。爰に至りては。百千の聖人額を蹙めて。考へたりとも。知る事能はじをや。偖こそ孔子は。不知生焉知死とは云へりけれ。（この語の意は既に云へり、）然れば人の生るゝ始のこと。死て後の理などを。推慮に云ふは。甚も益なき事なれば。只に古傳說を守りて。人の生るゝ事は。天津神の奇妙なる產靈の御靈に依て。父母の生なして。死れば其の靈永く幽界に歸き居るを。人これを祭れば。來り歆る事と。在の儘に心得居りて。强に其上を穿鑿でも有るべき物なり。其は此上の所は。人の智もては。實に測り難く。知りがたき事なればなり。孔子も於其所不知蓋闕如也と云ひ。また述而不作信而好古

なども云へるに非ずや。其のうへ靈異を現す事は、同氣相感じてなりと云はゞ。其の子孫なる者の禱らぬ限りは、靈の無るべき理なるに。然はあらで靈の祟を爲し、又禍を與へたるためし多く有り。さるは、左傳成公が十年に、晉景公が夢に。大厲被髮及地、搏膺而踊曰、殺余孫不義。（杜預が注にいはく、厲鬼也、趙氏之先祖也、八年晉侯殺趙同趙括、故怒、）余得請於帝矣、壞大門及寢門而入。公懼入于室。又壞戶。公覺召桑田巫。巫言如夢。（注に曰く、巫云、鬼怒、如公所夢、）と見え。此祟終に止ずて。景公は死りたりき。此一事を以ても。人死ては。魂魄消散て。知る事なしと云ふ說の妄なるを悟るべし。骨肉は朽て土と成れども。其靈は永く存りて。かく幽冥より。現人の所爲を。よく見聞居るをや（但此等の事をも、理學者流の論ひには、己が心と迷出す事なりとして、彼の瓜を踏て蟾なりと思へる法師の、地獄に墮たる夢見たりし類の事を、多く取り出て云ふ事なるが、みな一を知りて、二を知らぬ論どもにて、偏なり、その辨こゝには、處狹く煩ければ洩しぬ、○序なれば記す、朱子の文集に、人の死て、その靈永く盡ること无しと云ふを、世俗粗淺の知見なりとて、必如此說。則其界限之廣狹、安頓之處所、必有可指言者。且自開闢以來、積至于今。其重併積疊、計已無地之可容矣、是又安有此理耶、と云へるは、理をいふも限りあるべきを、天地も朱熹が心の如く、狹き物と思へるにや、）又昭公が七年に、鄭の國にて。伯有と云ふ者の靈の祟をなし、或人の夢に見えて。云くの日に、駟帶公孫段を殺むと云ひけるが。（この二人は。伯有を殺したる者どもなればなり）果して其言の如くなりしかば。國人ども甚じく畏れ騷ぎければ。子產が計らひにて。伯有が子等を。大夫と云ふ職になし。彼靈を和め祭らしめければ。其の祟やみぬとぞ。子大叔と云ふ者。子產にその故を問ひければ。子產が云へるは。鬼有所歸。乃不爲厲。吾爲之歸也。と云へること見えたり。同氣相感じたるに有らでも。其靈著明きこと斯の如し。（此ほか齊の彭生、晉の申生などが祟をなせる、魏武子が妾の父が、魏顆によろこび云へる類の事、いま數ふるに暇あらず、）然るを。朱子これにもまた說を造りて云はく。人鬼之氣。則消散而

無餘矣。其消散亦有久速之異。人有不伏其死者、所以既死而此氣不散。爲妖爲怪。(篤胤云、不伏其死とは、猛き人の軍などに出て、戰ひ死たる、又は暴惡人の刑戮はれて死たる、或は自ら縊れ。自ら刎ね、または甚く寃を抱きて、殺されたる人などを云ふなり、然やうの死を爲したる者は、魂魄もとの陰陽に復り得ずして、妖怪の事を爲すとなり。)如人之凶死及僧道。既死多不散。(篤胤云、其注にいはく、僧道務養精神、所以凝聚不散、と云へり、新井君美ぬしは、僧道は僧と道士なり、と云はれたり、此は然もあるべし、)若聖賢則安於死。豈有不散而爲神怪者乎。如黃帝堯舜。不聞其既死而爲靈怪也と云へり。此は子產が晉の國へ往ける時に。趙景子といふもの。伯有猶能爲鬼乎、と問ひけるに答へて。能人生始化曰魄。既生魄。陽曰魂。(杜預が注に、魄形也、陽神也と云へり、篤胤謂ふに、此子產が語、人より魂までの十二字は、前にいへる如く、推量の說にて、此所には無用の餘り物の如し、能用物精云々と連續きて、いと能く聞ゆる事なるをや、孰々考ふべし、)用物精多則。魂魄强。是以有精爽。至於神明。匹夫匹婦强死。其魂魄猶能馮依於人。以爲淫厲。況良霄。(伯有がことなり、)我先君穆公之冑。云々。而强死。能爲鬼不亦宜乎。と云へるは同じ趣にて。何にも然あらむと思はるゝ如くなれど。此れも例の信がたし。然るは子路などの如く。軍陣に赴き。刃に挂りて死たる者の。厲を爲ざりしは如何にぞや。此も大抵の人の說には。子路などの如き達士は。死生ともに一理なる事を知て。死に安むじ。其氣沈滯すること無く。散盡る故に。厲を爲さずと云へり。此亦實しけれど。達士と云ふにも非ず。死に安むじたるには有らで。甚く寃を抱きて死たる者の。厲を爲ざりし事も有り。又寃もなく强死もせざりし人の。年經て灼然く。その靈異を現はしたる事も有り さるは左傳僖公が三十一年に。衞の成公が夢に。その先祖康叔と云ふ者の靈告て。相奪予享と云へること見えたり。(朱子語類に、問、死者精神既散、必賴生人祭祀盡誠以聚之、方凝聚若相奪予享事、如伊川所謂別是一理否、曰云々、或是佗有這念便有這夢也、不可知と云へるは、例の强說なり、)また前に引出たる。晉の景

公に厲を爲たる。趙氏の先祖も。その始め。非命に死たるには有らねども　景公に。その子孫等を殺されし故に。怒りて厲を爲したるに非ずや。（この類の事、この餘にも、なほ多くあり）また聖賢は。死に安むずる故に。神怪を爲ずと云ふも强說なり。黃帝堯舜などを擧たれども。此輩の神怪なかりしとて、聖賢なる者ども、誰も〳〵死に安むじて。神怪の事なし。と云ふの徵には爲るべくもあらず。然るは孔子の、死て遙に後世に。神靈灼然かりし事あり。（さるは宋仁宗の代に、王曾字孝先と云ひし者あり、此が父は、年いたく老に至るまで、子のなかりしが、常に文字を書たる紙を貴みて、拾集め、汚れたるをば、洗ひ淨めて、これを焚くなど、更に一文字も、麁略にせざりしに、一夜の夢に、孔子その背を撫て云へるは、吾汝が、文字かきたる紙を貴むことの、怠りなきを感思へど、惜むべし、汝いたく年老て、學の成るべき齡なし、故に曾參を汝が子に生れしめて、大に家を興さしむべしと云ひしが。果して一人の男子を生ければ、即ちその名を曾と命せ、さて孔子の云へる如く、其家を興しけりと云ふこと、日記故事と云ふ書に見え、また明の大祖が世に、南京といふ所の、學問所の地は、もと多くの屍を、埋めたる地なればとて、萬人坑と號けしが、空曇り雨降る時などは、往來の人、亡靈の爲に惱されて、死る者さへ有ければ、其地に寺を建て。醮をなし、祟を和めむとしけるに、猶止ずて、死をうちなどするに、僧ども甚じく畏れければ、大祖が云へるは、孔子は大聖人なれば、決めて此厲を鎭むべしとて、孔子の木主を其所へ迂しけるに、亡靈これより祟を止けりと云事、群談採餘といふ書に見えたり、此は其證ある事なれば、爭ひ難し、また五雜俎にも、余於曲阜見孔子手植檜云々、孔林十里中、雲木參天上无鳥巢无鴉聲下无荊棘蒺藜刺人之草、聖人生前不語怪、乃身後著靈異若此、豈亦以神道設敎耶、抑或有地靈呵護之也、なども見え、猶この餘も。何くれの書に。かゝる類の事、また感應ありし事なども、見えたりしかど、今悉くは得ものせずなむ）若くは。孔子をいまだ聖賢に至らずと爲むか。又孔子は。死に安むせざりしにや。理を以て推たる論ひには。斯く打合はぬ事のみ多ければ。只死

ては、其靈幽冥に歸き居る者なる事を心得て、厲る厲らぬ共に、その靈と成りての情は、知られぬ事故に、測り難しとして、强て其理などは、云ふべき事には非ずなむ。俗また人死て靈を爲すことを、文海披沙といふ物に云へるは、孔子之聖不能使天下宗王。而既沒之後林木十里。無復荊棘鳥巢。關莊繆之賢。不能保其首領。其沒乃爲神。禦災捍患家敬戶奉。高郵女士爲蚊所嘬。僅露其筋而死。而立廟蚊蚋不能入。是皆生不如死。生以形運而死以神運故也。王子符論衡。極詆子胥江湖之妄。至曰使子胥生時。數百千人不能越水。一子胥之身煑湯鑊之中。其神安在。豈怯於湯鑊。勇於江水哉。其言陋矣。と云へり。此論穩にして、いと〳〵感たし。赤縣州にも、稀には斯く卓越たる、見解の人も有るなり。また新井君美主の論に、それ水は至て淸けれども、冰を結ぶ時は明ならず、神至て明なれども、形を成ぶときは明ならず、冰解ては淸にかへり、形散じては明に復る、故に寤るは靈ならずして、夢は靈に、生るは靈ならずして、死せるは靈なり、人死して厲をなす事、これに同じと云はれ、

又俗に謂ゆる、生靈の事を論ひて云はれしは、死るが厲をなすは、神その形を去ればなり、生るが妖をなすも、また神形を去ればなり、只死せる物は、神永く形を去る、生るものは神明ありて、其形を出入する事あるなり、譬へば形は屋舍なり、神はこれ主人なり、神ながく形を去るは、一たび家を去りて、萬里の外に行留るなり、神明に出入する物は、朝に家を出て、夕に家に歸るなり、家を去る事の、遠き近きは異なりといへども、其家を出て、營む業ある事は、彼此ともに同きが如し、と云はれたるは、實に然もあるべし、と思はるゝ程なれど、此は宋儒の說などに依りて、論らはれしにて、例の推慮說なれば如何あらむ、猶この主の論ひに、亡魂の人の身に寄りて詩を賦し、文字を書る事、また遊魂の人に代りてよれる事、また人を欺ける事など云はれしおもむき、實には信がたき說なれども、一通うち聞けるには、甚おもしろき論どもなり、此は彼論を拔きて見て、己がじゝ定むべき事なりかし、）扨又佛者の云ふ輪廻てふ事あり、然るは、何某は何某の再生れたるなり。また前身は虫にて有りき。獸にて有りき。な

ど云ふの類なり。儒者これを破りて云ふは。死る者は。神と形と相はなれ。形は朽て土と成り。神は風火の如く。散て知る事なし。譬へば木草の花の。今年咲るは。往年の花ならぬが如く。又川の水の。今日流るゝは。昨日流れし水ならぬが如し。死たる人の。また復らぬ事も。此に等し。また人の生るゝ事は。木の實より。木の生るが如く。梅實は梅樹となり。桃實は桃樹と生る。梅實は桃樹とならず。桃實も梅樹と成る事なし。いかで人死て再生れ。また禽獸虫魚に生るゝ。といふ理の有らむや。とやうに云ふめり。然るを佛者更に承引かず。然らば晉の羊祜が金環を見知り。（此は晉書に、祜年五歳時、令乳母取所弄金環、乳母曰、汝先无此物、祜即詣鄰人李子東垣桑樹中探得之。主人驚曰。此吾亡兒所失物、云何持去、乳母具言之。李氏悲惋、時人異之、謂李氏子即祜之前身也、）また鮑靚が。井に墮て死たる事を。おぼえ居たるなどは。（これも晉書に、年五歳、語父母云、本是曲陽李家兒。九歳墮井死、其父母訪問皆符驗、）いかにといへば。儒者こゝに至りて。更に辨ふる事能はずして。これ妄說なりなど云ひて。強に云ひ破らむとすめり。物部徂徠の論ひに。謂人死歸乎造化者。昧乎夫一者也　化爲異物、亦何所不有。不可爲典常。亦何拘拘乎と云るは。普通の儒者の。強て云ひ破らむとする類にはあらで。甚々感たし。佛者の謂ゆる。輪廻やうの事も。希くには實に有る事なり。其故は。何なる故に依て然りとも。更に知り難き事なり。此は神の幽冥なる御所爲なればなり。然るを儒者の。絕て無き事なりと云ふは偏なり。また佛者の此を竝て然りと云ふも。いよ〳〵僻言なり。實には。輪廻といふ說は。釋迦法師の。民を導くとて。甚稀にある事を種として。造れる說なり。天竺の人。いかに愚なりとて。更に徵なき事は。信まじければなり。佛法に云へる說ども。大概はこの類にて。彼いはゆる。僞を譬らむと欲して。眞を假る。と云ふの所爲なり。（さるは彼國にも、訛りなからに、天津神の傳への、少しは存りけむ、と思はるゝを種として、天堂、梵天、帝釋と云ふ物を說き、夜見の國の訛りならむと覺しきを種として、地獄を說き、海宮の傳へと覺しきを附會して、龍宮といふことを、說けるなどを以て知る

べし。)能く辨へて。知見狹く。猥りに無き事なりなどは。云ふべき事に非ず。徂徠の舍利記と云ふ文に。後世儒者所レ見多不レ及二浮屠者一と云へるが如く。凡て僧の徒。學問せぬ人などは。幽冥の事。奇怪き事にも。さのみ惑ふ事なきを。不熟に漢學せる人は。却りて知見狹くなりて。幽冥の事。その餘も。奇異にわたる事をば、一向に云ひ破らむと爲るなり。(常に見ること无きを以て、奇異き事を信がはざるは、いと愚なる事にて。此も徂徠の論語徵に、剖レ樹以求二花於其中一。烏能見レ之。謂二之无一レ花可乎哉、と云へるが如し。)もとも。世には妄なる虛言を云ひ。又は鳴呼なる者も有りて。犬神外法やうの事を爲して。人の眼を掠め。或は天狗。狐狸などの類。その佗にも。奇略き事する者の多く有て。人を誑す事あれば。奇怪き事とて。一向に懼れ惑ふも愚なり。よく其信べきと。信べからざるとを辨へて。惑はざるをこそ。眞に智の大なる人と云ふべけれ。扨また鬼神の事をいふ毎に。誰もよく引出る事なるが。赤縣州宋と云ふ代に。張横渠と云ふ者。(よく巧に臆度するをのこなり。)その下吏をして。一つの祠を毀た令むと

しけるに。其下吏が兩脚。ともに軟柔に成りて。歩行こと叶はざるを。强て輿に乘て。其祠に至り。神像を打剖て見るに。中に一つの合ありて。其中に白き大虫ありて。走り出たるを。捕へて油もて煎殺しければ。下吏が脚の痛み忽に愈けると云ふこと。性理字義といふ書に見えたり。此所爲などは。何にも雄々しく。猛き事の如くなれども。物の情を。能く思はぬ逸心の徒などは。眞に優れて尊き神の上をも。此等に準へて。測り言むと構るは。甚も〳〵鳴呼なる事なり。我翁の云く。迦微とは。天地の諸の神等を始めて。其を祀れる社に坐す御靈をも申し。又人は更にも云はず。禽獸木草の類。海山など。其餘何にまれ。尋常ならず。優れたる德の有て。可畏き物を。迦微とは云ふなり。抑迦微は。如此く種々にて。貴きもあり。賤きもあり。强もあり。弱もあり。善もあり。惡きもありて。心も行も。其狀々に隨ひて。とり〴〵なり。貴き賤きにも。段々多くして。最賤き神の中には。德少くて。凡人にも負るさへ有り。彼の狐など。怪き態を爲す事は。何にも靈利く。巧なる人も。挂て及ぶべきに非ず。眞に神な

れども。常に狗などにすら、制せらるゝ程の。微き獸なるをや、然れども。さる類の、と賤き神の上をのみ見て。何なる神と云へども、理を以て向ふには。可畏き事なしと思ふは、高き卑き、威力の甚く差ひ有る事を辨へざる僻事なり。と云はれしを思ふべきなり。(徂徠の天狗說といふ文に、夫神者聰明正直者也云々、故或以爲神爲仙、或以爲佛爲菩薩、爲羅漢、明王、爲魑魅、魍魎。各狃其所見建之名稱、といへるは、略この心ばへに符へり、しかすがに徂徠なり。)彼祠なりし虫も、初め下吏が、己が住所を毀むとて、來る事を知りて、渠が雨脚を軟柔にしたりしは、いと〳〵奇怪き行にて、眞に神なれども、捉はれて煎殺されたるは、甚拙く云ふ驗なき有形なり。凡て世に狐狸など。其餘も種々まが〳〵しき物ありて。禍行する事は、その本は、みなかの禍神の心より爲る事にて。人の是を制する威力ある事は。直毘神の御靈のふさはりたるなり。然れば直く正く。雄々しき大丈夫魂を。固めたらむには。狐狸など凡て賤しき妖物には、惱されじとぞ思ふ。然るは自には。正き神の御靈賜りて。禍にかつ理の有ればなり。(赤縣籍に、妖は德にかたずと云へるは、少しく此心ばへに稱ふめり、又かの國唐と云ひける代に、天竺國より渡りたる法師の、人を呪ひて、或は活し、或は殺しなど、心儘にしけるを、傅奕といふ者を呪ひたるに、傅奕はさらに覺ゆることなく。却りて彼法師の死ける事など思ふべし。)然れども。妖物に何ほど勝れて、猛く雄々しき人と云へども。勝こと能はずして。誑さるゝ事も有るは。此は彼の禍津日神の御荒び甚き時は。禍神ども所得て騷ぎ立ち、直毘神の御威力にも。及ばぬ事あると同し理なり。然ればいかに猛き人なりとも、誑さるまじと。固く決めては、云ひ難き事なり。(因に記す、世人の心正く猛き人は、妖怪に誑さるゝ事なし、と云ふの口實に、よくいふ事なるが、孔子の、陳蔡の間に飢ける時に、いと大きなる男の、黑き衣に高き冠きたるが來て、人々を駭かしけるを、孔子の子路に敎へて、打倒させけるに、大きなる鯰にて有けるを、終に打殺して皆々喰ひ、日頃の飢をしのぎける、といふこと、又漢の代に、董仲舒と云者の所へ、人の來りて、明日は必雨降むと云ひければ、董仲舒が云

へるは、穴に住む物は、能く雨をしるとぞ、汝は必ず穴に住む獸なむめり、と云ひければ、其人忽に狐と成りて、逃行ける、といふ事などを、引出る事なるが、此等は眞にいと雄々しき行にはあれど、此は妖怪に惱まされぬと云ふのみ、誑されたるには論なし、さるは鯰は鰻の如き魚、狐は狗に似たる獸なるを、共に人と見たるは、此者どもに、眼を掠められたるに非ずして何ぞ、實に惑はされぬとならば、鯰をば鯰と見、狐をば狐とこそ見るべき事なれ、かく正く賢しき人々の、狐鯰に誑されし上は、少し其上をゆきて、尋常の人には、惱さるゝも、などか无らむ、然るを俗には、自は狐鯰を人と見ながら、人の是に惱されたるを、甚く笑ふ者もあるは、此も彼五十歩にして、百歩を笑ふ類とや云はまし、何に猛き人なりとも、誑さるまじと、固く決めては、いひがたしとは、此故なり）亦問て云く、普通の論に。神に御像代を設くる事は。甚じき非事なり。木石金土の如き無情の物に。いかで効驗あらむ。祈りて感格ある事は。固く念を疑したる。己が心より感じ出すなり。と云ふ。此論はいかに。予云ふ。其は彼虚靈不昧自己固有の神明を。感得すとか云ふ類の事を。歡び居る徒の。常にいふ事にて。更に神の事を知らぬ論なれば。すべて云ふに足らず。（此餘にも、程伊川が、今人以影祭、一髭髮不相似、則所祭已是別人、といへる語を引て論ひ、また朱熹の、有其誠則有其神、无其誠則无其神、など云る語をひきていふ者もあれど、みな非説なり、殊に朱熹の云へるなどは、彼の佛即是心、心即是佛、など云へると全おなじ意にて、實に煩き漫説なり、勤々惑ふべき者に非ず、もし強て、像代を設くるを、非事なりと云はゞ、儒者の祖などを祭るとて、神主と云ふ物を設くるも非事なり、然るは、彼の神主は。即ち像代なればなり）然れども些か云べし。木石金土などを以て造りたる像代に。祈りて効驗ある事は。その禱をかくる人の念じたる。某々の神靈より來りて。驗あるにて。更に疑ひなし。（但し殊なる由縁ありて、その御靈實の鏡、または太刀などにて在す類は、此は固より其御靈の、それに留りましますにて、今云ふ限りに非ず、爰には只に新に設けたる、像代などの事をいへるなり、思ひ混ふべからず）何に念を凝

したりとも。心を赴くる方なくては。失ひたる物の。忽に在所を知るばかりの靈は。己が心とは出來ぬわざなり。志を赴くる方ありてこそ。感應も有るべき事なり。此は事舊たる譬なれど。石と金とを轢りて。火を出すと同し理にて。石も金も。火を含みたる物なれども。石一つにて。打つことなければ。火出る事なく。金一つにても同じ事なり。（此は金と金、石と石、木と木にても同じ事なれど、其が中に。専とある物を以て、こゝには譬へたるなり。）最も人も奇異き靈のある物にて。其靈を凝して禱るときは。神それに感て。應驗あるなり。此理に。能く思ひを潜めて。考へたらむには。今の疑ひは。自然に晴なむ。然れば木像石像などやうの物も。人信心を發して祈れば。神靈これに寄て實に神なり。人祈らざれば。神靈去りて唯に木像石像なり。木ならむには。薪ともなすべく。石ならむには。礎とも爲すべし。（然れども此は、道に情ある者の、忍がたき事なり、赤縣州、唐といひける代に、狄仁傑と云ふもの、江淮といふ地より南なる、小祠小廟を。一千七百ばかり、毀ちけりと云ふを、甚たけき所爲なりとて、人の煩く譽る事なるが、此等の事も、道に志ある人は、大きに心得あるべき事なり、又狄仁傑が、斯る所爲しけれども、神の祟らぬをもて、怪む人も有れど、本文に論ふ如くなれば、更に怪むに足らず、）俗の諺に。鰯の頭も信心がら。と云ふ事の有る。これ實にさる事にて。赤縣にて。鮑魚を祭りたる祠に祈りて。感應ありし事。また途の傍なる立樹に打かけたる草鞋の。幾千々となく積りたるを。草鞋大王と號けて。祭りたるに。效驗ありしと云ふの類。和漢に多くあり。扨また云々の神とさし奉らで。只に草鞋鮑魚を的に禱りて。效驗ありしなどを以て。神靈のより來て。感格あると云ふを。疑ふ人もあらむか。此は鮑魚草鞋などの如きは。人の惑ひ信ずるに付て。遊鬼ところ得て寄り來り。その效驗を著はしたるなるべし。（此は新井君美ぬしの云はれし如く、或は人の遊魂の憑りつきて怪を爲す事も有るべし、草鞋大王の靈ありしも、實は其邊なる、老鋪兵の死けるが、其靈の憑籍て、怪をなしけるなりと、五雜俎に見えたり。）また更に人の禱らぬにも。古き器物。また年舊たる木草なども。怪をなす神あり。此等も例の惡

神の御心にて爲す事か。（搜神記と云ふものに、孔子の語とて、我聞物老則群精附レ之、といひて、龜蜆草木魚鼈の類までも、久しき物は、神憑藉て、怪をなす。と語れる事見えたり、此は然も有るべし、）また夫までも無く。實に草鞋鮑魚に靈ありて。効驗を現はしたるも知るべからず。此は山田の曾富騰の。天の下の事を。盡に知れる事なるを以ても悟るべし。（この事は、古事記を讀て知るべし、）また若くは。實に神の御心にて。有情物と爲し給へるか。又は草木の類も。人こそ知らね。實には有情ならむも。知るべからず。冬蟲夏草と云が有りて。冬は蟲と化て。夏は又草となる物さへぞ有なる。此は實に測り難き神なり。猶此等の事は。今少し委く云まほしけれど。所狹ければ。此所には漏しぬ。（是のみならず、凡て神の上の測り難き事は、佛道わたりて以來、兩部とか云ひて。某の神は。本地觀音菩薩にて坐ます。或は大日如來にて坐すなど云ひ。また古へに祭り奉れる神の事をば、更におきて。譬へば安藝の嚴島に坐すは、須佐之男命の御子、市寸島比賣命に坐すを、天竺國の、辨才天女といふ事なりとて、祭り奉る類いと多かり、さるを更に咎め給ふ事もなく、剰に感應の坐ますなど、いと〳〵大らかに、かつは奇異く誠に測りがたきは、神の御上なり、あなかしこ、漫りに議りまをし奉るべき事にあらず、）又問て云く。此等の類の怪き行をなす事は。皆遊鬼の爲す行とならば。何といふ差別なく。憑託べきを。木にては椿柳など。草にては芭蕉などのみ。大概は定りたる如く。然る事のあるは何ぞや。予云ふ。此は甚く穿ちたる問ひごとなり。此は鬼神の心にて。然ある事なれば測難し。然れども強て今試に云はゞ。椿柳芭蕉などは。神の憑藉よき故由あるらむ。と思へばすむ事なり。獸も多き中に。狐狸などの。奇怪き行を爲す事。勝れたると。同じ心ばへなり。摠て斯やうの事ども。強て其旨を究めむと爲ず。鬼神の所爲にして。知りがたき事なれば。知り難しとして。置くべき事なり。世には限りもなく。奇異の事の有るものにて。或は有情の物の無情の物となり。（其は世說なる、望夫石の古事、また皇國にては、姥石等の類、）或は無情の物の有情と化り、（さるは小麥の蛾となり、杉栄の蟷螂と化るたぐひ、）あるは男かはりて女と化り。

女變りて男となり。（さるは漢書に、哀帝が建平年中に、豫章といふ地の男、化して女となり、人に嫁ぎて子を生ること見え、晋書に、惠帝が元康中に、安豐と云ふ地の女、化して男となり、十七八歳に至て。性氣成る、と云ふ事あり、此類いま擧るに暇あらず。）或は人變りて物となる。（そは淮南子に、牛哀と云ふ者、疾て七日に至り、虎と化り、其兄を搏殺すといひ、隋書に、文帝が七年に、相州と云地の桑門、長二丈許の蛇となり、樹を繞りてみづから抽く、とある類、なほ多有り、さて此等の物に化たるを、本草綱目に論ひて、至淫なる者は、化して狐となる、至暴なる者は、化して虎となる、心の變ずる所、變せざる事を得ず、と云ひ、新井君美主も、此說を好として、それ暴惡の心ある者は、人にして、いまだ化せざるの虎なり、貪慾の心ある者は、人にして、いまだ化せざるの狼なり、其化する所の者は、僅に形のみ、心一トたび變じなば、氣をも變ずべく、氣一トたび變じなば、形をも變ずべし、など云はれたれど强說なり、此の論の如くならば、人の石に化たるをば、其人もとより石の心ありしとせむか、かゝる事は、强て其理を云はむとするに、甚く究る事のみ多ければ、只に神の所爲なれば、知られずとして置くべき事なり、）扨また男の女と化るは、陰の陽に勝なれば、國の亡ぶる驗なりと云ひ、又は賢人の位を去る驗なりとも云ひ、また女の男に化るは、婦政の行はるゝ驗なり、また賤人王となるの驗なり、など云へども、此は大概は、國の亡びたる時、また婦政の行はれし時など、計らずも、此やうの事のありしを、後より附會して、其理を論へるにて、赤縣人の癖なり、何事も无かりし時にも、かゝる事の多かりしをば、不知氣にて居るなり、日蝕の事を知らで、古は甚じく畏れ、また麒麟の出る事は、聖人の祥瑞なりとて、ことごとしく云ひつれど、其後もしばしば出たる時は、麒麟に非ず、などさへ云ふも、いといと、可笑き事ならずや、明の張和仲と云ふもの、此等の附會を云ふ者をさして、欺天之學なりと云へるは、尤なることなり、）などの類　この餘にも、なほ奇異き事は。云ひ盡し難く。書つくし難く。凡て世中に有とある事ども　みな大に奇異き。天地の神等の。大に奇異き　御所爲に生る事にて。此天地の。

大にあやしき物なるを始めて。己が身の大に奇異く。云へば云ふまに〳〵。思へば思ふまに〳〵。彌益大に奇く異くて。更に凡人の少き智もて。千重の一重も。知られねば。彼の赤縣人の如く。狹く拙き空理もて。測らむとせずて。大直毘神の。直く正き心もて。神代の正き傳説を。熟々學びたらむには。鬼神の上の事のみならず。萬の心得に違誤るふしは有らじ。天津御神。地津御神の大御所爲こそ。阿那奇異く。甚も〳〵奇靈なりけれ。

○鬼神新論の後に自いふ。此書かける事は。今年文化二年と云ふ年の。彌生の末の十日ばかり。何くれと書置る事ども。一つに書集て見ばやと思ひて。物しける序に。つら〳〵思へるやう。漢學びにも。古學とて誘ふ人々。何れも〳〵前代の儒者どもに。勝れたる樣に物言へども。鬼神の事を論ふのみは。後の説に拘づらひて。古に符へる宜き説のなきは。未だ考へ盡さゞるなれば。何て此事をも。一とくだり書て。驚かさばや。と思ひて。頓に心に浮べる事ども。一つ二つとかきいで。人の問ひに答へたる趣をも。此かれと記したるに。又思ほえず。斯く轉て有る物とは成にたり。かく紙の數多くなりては。枕言しるせる中に。埋み置む事も。さすがにて。斯く別卷とはなしぬ。かく書めける物と成ては。世の竝に何ともかとも名づけては。得あらぬ業なれば。今まで和漢の識者等の。論ひ置れし書どもの多有に合せて。更に新に記るてふ意もて。鬼神新論と名けつ。抑鬼神の上を云ふ事は。甚々難き業なりとて。まづ易と云ふ赤縣籍に。知鬼神之情狀者惟聖人爲然といひ。また南秋江と云者の鬼神論に。雖辨之皓首。言之更僕。未易盡と云ひ。新井君美主も云はれしは。鬼神のこと。まことに言ひ難し。只言ふことの難きのみにあらず。聞くこともまた難し。たゞ聞ことの難きのみにあらず。信ずることもまた難し。信ずる事のかたき事は。これ知ることの難きにぞよれる。然れば能信じて後に。よく聞とし。能く知て後に。よく信ずとす。能く知らむ人に非ずして。爭かよく言ふ事を得べき。云ふこと實に難しとこそ云べけれ。など云ひ置れて。和漢の人々。誰も言ひ難く。知がたく。信じ難き事になし置た

るを。未三十にもならぬ、條なき篤胤が。ざえ短く。見る事聞く事の少きをも省ず、かく容易げに書出たるを。さこそは。人のをこなる所爲と見給ふらめ。然れどこは。大直毘の神。神直毘の神の。直く正き御靈賜りて。天の下に鳴神なす聞え給ひし鈴屋大人の。世に異なる智ます御心もて。神代の奇き由縁を、見し明らめ。教へ給へる　其の訓言に依て。かき出たるなれば。ゆめ篤胤が狡意となしからねば。其文辭の拙く。事ゆかぬにつきて。自に人の疑ひを受る事もありなむ。其は見む人さとし給はれかし。斯くて。この書かき終ぬるは。同じ年の。五月なかばになむ有りける。ひらたの篤胤。

文政三年と云ふ年の春。考へ訂せる事ありて。少か書き改めつ。

我が伊吹舎大人の著はし給へる御書等は。都て百部に餘れるが中に。此の鬼神新論はしも、最初に物し給へるが。其論ひの正く明かなるは　鈴木朗主。藤井高尙主などの序に稱へられたるが如くなれば。今更に申すに及ばず。然れば早く世に弘まりては有なれど、由ありて其稿を改め給へる處も有り。はた我も彼も互に寫し傳へたれば寫し誤めたるも多かるは、甚飽かぬ事にこそ。いかで刻本をと思ふ時しも。同門なる美濃國人市岡殷政も。同じ心に相議りて即櫻木に彫成て。普く同志の人々に示すになむ。かくて此御書。原本には、普通の如く。漢土陰陽など云狀に書れたるを。今悉く赤縣眞县など云字に書き改めたるは。豫て師命を受けたるに依てなり。見む人古寫本と異なるは。訝る事勿れ。かく云は。下野國人鶴山嘉治

古今妖魅考序

師木島乃大御代爾。中子止云布物乎。渡志參來爾祁留乎。其甚異加留行爾氐。直久正伎。神乃御國乃風儀爾波。似氐志毛隔加努。妖傷事爾奈母有祁禮波。愛尊武人毛。受依留人毛。其枉言爾相口會氐。狡久狂禮惑波奴波無志天。世乃爲爾毛人乃爲爾毛。甚惡加流事奈毛轉有留乎。天地止。日月止共爾。窮美無伎。大御代乃内爾波。唯暫時乃事爾許曾有禮。人乃世波。百繼八十繼止經行氐。遙祁久遠伎事爾奈母有祁禮波。慨美歎加努波無久奈母有祁禮杼。其將功驗奈伎物思爾天。何乃代爾加。此禍事乎却比給波武。何乃時爾加。此惡風乎直志給波武止。神乃所爲乃。甚願波志久氐奈毛有祁流乎。吾師大人伊。神乃御手代止。却比退久止。雄偉志久健備氐。和乃漢乃。佛乃書爾有留實徵乎得。歷世爾有都留事跡乎。探索米氐。伊邪醜目汚穢伎。佛祖與利始氐。相交許禮留僧徒麻傳。現世乃間許曾。人乃狀波變布麻自祁禮。魂乃行方波。五月蠅奈須。妖魅止成乍毛。冥府爾罸米良延氐有留乎事。熟爾見曝志。論定氐。世爾幸倍牟止。著述波佐禮祁留奈毛。此書奈利祁留。如此有尊伎美志書乎。徒爾文庫乃内爾。隱米置倍志夜波止氐。鐵胤主爾相謀利。印本止爲志氐。萬代爾後世爾。傳倍弘牟留爾奈毛。時波天保二年止云年乃春。如此云波。越後國蒲原郡新津郷人。桂譽正

○此書の成れるゆゑよし

これの古今妖魅考といふ書はも。林羅山先生の説に依りて。我父の。世に化物と云ふものある。其本緣を考覈められたる書なり。いで其大意をこゝに述てむ。化物とは即麻我毛能の。石根木株。草の片葉。青水沫にも憑託きて。言語しめ。謂ゆる非情の物をも。起ち活動かしむる類ひをいふは本よりにて。人の靈魂の人につきて。異き所行をなし。或は狐狸の類のなす態をも。みなすべてしか言ふなり。妖魅の二字は。其れに當れる漢字なるを。音にも讀べき爲に專とは此を用らる。されど古くより。妖物惡鬼。妖怪など。猶くさぐ〵に書き來つれば。強て拘はる事なく。孰をも書れたり。さて麻我神また麻我毛能とは。何なる義ぞと云に。世の治れる時は亂さむとし。人の福を見ては禍となし。萬つに直なるを惡ひて。枉れるを好むが故に。禍神とも枉物とも云ふ。毛能とは。鬼神。人種。萬物。何にも廣くいふ稱なり。抑々このまがものゝ。出來し始めを稽ふるに。久方の天つ神世に。伊邪那岐。伊邪那美二柱大神。男女の御事を始め給ひ。御子生給ひけるに。女神伊邪那美大神。はぢ給ふ事ありて。夜見國に往坐るを。男神伊邪那岐大神。その御後を追ひて。其國に到り給へり。然るに此夜見國はも。根國下つ國など云ひて。醜めき穢き國なるが上に。伊邪那美大神。すでに其戸喫し給ひて。歸り給ふこと能はず。甚も忌々しき御有狀なるを。見畏み逃歸り給ひて後に。其穢惡を祓ひ給はむとて。日向の橘の小戸ちふ水戸に到り坐して。禊祓ひ給ふと。其の大御身に著る物等を。脫棄給ひしかば。長道磐神。煩神。開囓神。奧疎神。邊疎神などいふ神なり出き。是ぞ世にも人にも。惡事なす神の始めなりける。斯くて千萬歳を過來し程に。其惡神ども多く成ぬるが上に。中つ御世に蕃國より。佛ちふ物を献れる時に。副ひ來つる妖魅も多かりしと聞ゆるに。此方にて其道に率れる者は。やがて其鬼と成つゝ。漸々にふえ行て。世にまが〳〵しき事をも多く成れりける。然るに此妖魅ちふ物よ。現人の目に見えぬ。幽冥の物にし有れば。其情狀を察る事。いと難き態なる故に。よく考明せるもの有らざれば。世の庸人の辨へ知らず。思ひ惑ふも。

尤なる事にこそ。然しも枉もの丶漫れるなり。古への神の御事は。麁略になり行つ丶。神等は坐まさぬごと隱ろひまし。高き卑き悉に。彼佛とふ蕃神をし。上なく貴き物とめで敬ひ。世人の心拙く女々しくぞ成れりける。是は枉物に。相率り相口會はてたるにて。最も悲く。慨き事の極みなりけり。然るに時や來にけむ。天文と稱し御世に。東照神祖命生れ出給ひ。天正慶長など云し御世頃には。專と天皇の御爲に。天の下を鎭め給ふ御業に。勞かせ給ひ。服はぬ人々をば。御仁惠を以て事向しめ給ひ。暴ぶる者等をば。武き御威稜を振ひて。征伐め給ひ。將ふるき皇典等を召問して。次々に古への御式に復し　廢れたる神事をも興し給ひて。天の下よく治り。目出たき御代とは成にけり。さる大き御擧をし。補佐申されたる臣たちは。最多かる中に。林羅山先生はも。文の道の事に仕へ奉らし丶程に。神社考ちふ書を著はして。神社の緣起を述べ。彼の佛の法を異端なる由を論ひ。其中にも。天狗ちふ妖魅の。本因を考へ明されたるは。古今に比なく。傑たる說になも有ける。殊に此ふみ。早くより板本と成て。世に弘まれるは。高きも卑きも悉く。此說に信奉るべくなりつるにて。最も愛たき事なりけり。然るに此書はしも。王公大人にのみ聞えむとて。其文體に記されたれば。庶人の心訥きは。悟り得ずてや有む。かく學の道の開けつる御代にしも。彼の左道說に誑され。或は君上の命令に戾り。あるは家の產業を弃て。各も〱先祖の大本たる。神祇をし。麁略になし奉る者の。世に多く有めるは。甚々歎かはしく。傍いたき事にこそ。爰に我父はも。早くより此先生の此說をし。深く信ひ給へるが係り。いかで此を天の下の大凡人の。容易く讀得べく書き成しつ。はたこの徵さなるべき事等を。手近き軍物語を始め。數の書等より抄出して參考へ。詳に解悟してむと。年まねく心留置れたるが。甚多に成りぬるを。此文政の五年と云ける年に。其を大抵に記し序でゝ。自らの考拔をも添られたるに。三百葉許とさへ成つれば。書の名をもかく負せて。側にさし置れたるを。親き教子たち。一速く乞申て見めでつ丶。同じ學の兄弟にも知らせてしがと。彼刊本なる著述書目に載つるより。弟子等は更にも云はず。此方彼方の人々より。いか

でくと急がるゝ。其答へに倦みはつる迄なり。爰に己申しけるは。かく人々の乞申すを。敏く淸書して見せ申さばやと願申せど。猶よく考へ正して後にこそと。父の許し給はざれば。さて過つるを。今年また强てこひ申て。かく淨寫して。我黨の人々に見する事とは成りぬ。かくて此論說の次第を云はむに。先始めに天狗とふ名義を辨へ。はた其物の形狀を。和漢の書に證し考へ。日本紀の訓に依て。天狐ちふ物の事にも及び。夫より彼の佛祖釋迦法師が。立たる戒の許多ありて。其れに違はむ者は。盡に魔道に墮つとふ。其道の法なるを。世々の僧等の。そを脫れたるは。一人も有まじき由を說き明され。將その物どもに。三熱の苦みと云事ある因緣をのへ。天堂地獄の體相。種々の苦患ある事をも辨へ。閻魔地藏などいふ鬼の由來。序に三途河の老婆の事にもおよび。夫れより西方極樂淨土の。往生といふ事までを解呈して。然る事どもは悉く。佛祖の幻說ありしより。出來たる事なる由を。博く諸の經論を引て考へ注され。終りに源平盛衰記なる。開發源大夫仕吉と名告れる者の語。また太平記なる。雲景が未來記と云物の說などを摘出て。貢高邪慢の所爲ある者は。悉く魔緣にて。果はみな天狗道に落べき事。はた我古學の輩といへども。其心なるは。皆同じ惡道に落べき由緣までを。悉く辨へ論はれたり。斯くてかの神社考は。先生の趣意の如く。王公大人は。敏く聞召し給ふべければ。今申し出るに及ばず。この書はし。庶人のよく讀み熟く味ひて。佛道の異端なる由を辨へ。地獄極樂など云は。皆かの釋魔の。變現して見する態なる事を心得て。少かも惑ふ事なく。魂の柱を太く固く衝立て。我本來の正道を守らしめむが爲に。かく著し述へられたり。見む人此意を得てよ。かく云時は。文政の十一年といふ年の四月。平のひら田鐵胤

古今妖魅考一之巻

平篤胤輯考

門人　備中國　堀家政富
同　武藏國　藤田勝誠
遠江國　中村眞幸　校

○敍言

林羅山先生の神社考に。我邦自古稱天狗者多矣。皆靈鬼之較著者。是非星之義也。或爲佛菩薩相。或爲鬼神貌。時時出現。或爲狐或爲鵄飛行。或爲童或爲僧爲山伏出于人間。其説曰。見人福則轉爲禍。遇世治則復爲亂。或發火災或起鬪諍。沙門之有慢心及怨怒者。多入天狗之中。所謂傳敎。弘法。慈覺。智證等是也と記し。

但し此は大意を引約めて擧たれば。委しくは本書に就て見るべし。

此餘にも。古く名僧大德の聞有し僧等の名を。多く擧られたるを。庸人は甚く驚く事なれど。

但し神社考は。非爲庸人而言之とは。既に序にも本文にも記されたり。僧等甚く右の説を惡みて。神佛冥應論。神社考私評論。同辨疑などと云ふ書等を著して。辨へたれど。少かも破し得たる説なし。

博聞絶倫なる。先生の語にし有れば。決めて確證有りて言れし説ぞ。己れは深く信ずる心に。身自も正しき證を見得てこそと。年ごろ讀む書どもの。其の證と成るべき事實をら。爪印して鈔錄せるが。甚多く成しかば。其を記し整へ。少か考按をも書加へたれば。所思ずかく名負では。得有まじく成にたり。故まづ始めを。天狗といふ名義の事より論ひ起しつ。

羅山先生の語に。我邦にて天狗と稱するは。靈鬼の較著き者にて。星の義に非ずと言はれたるは。星に天狗と云ふが有れど。世に天狗といふは。其の星の義に非ずと云ふ意なり。然れども予熟々按ふに。其の物は異なれども。天狗と稱ふ名は。かの天狗星といふ化物の名を取れるにぞ有りける。其はまづ所謂天狗星の事は。諸越の史記。漢書。晉書などと云ふ史等に。天狗狀如大奔星有聲。其下止地類狗。所墮望之如火光炎々衝天。また西北有三大星如日狀。名曰天狗。天狗出則人相食。また天狗如大流

星色黄有聲。其止地類狗。所墜望之如火光。炎々衝天。其上鋭其下圓如數頃田。見則流血千里破軍殺將。また流星有光。見人面墜有聲。若有足者名曰天狗。其色白其中黄。黄如遺火狀。主候兵討賊。見則四方相射。千里破軍殺將。人相食。所往之鄕有流血。其君失地。兵大起國易政などゝ見えたり。

上の件の文どもは。目易く引約めて擧たれば。少か本書と異に見ゆる處も有るべし。

此を合せて思ふに。此化物は。大凡の狀狗に類て。頭銳り喙あり。人面にも見成るゝが。天より墜る故に。天狗と名負たる也けり。斯て此物犬の如く横行し。また人の如く竪行もする物と見えたり。

そは後の物ながら。今の清代に成れる。述異記といふ書に。康熙壬子四月廿二日黎明。錢唐西北鄕有孫姓者。門未啓。鄰人夙起見孫屋脊上有一物。似狗而人立。頭銳喙上半身赤色。腰以下青如靛。尾如箒長數尺。驚呼孫告之。甫闢門。其物騰上雲際忽聲發如霹靂。委蛇屈曲向西南而去也。上火光迸烈如箒之掃天。移時乃息。數十里内皆聞其聲。亦有仰見其光者。所謂天狗墜地如雷也。甲寅有逆藩之亂と見えたり。此は己いまだ其本書を見ざれど。村瀨之熙が秇苑日涉といふ書に引たるを。再擧たるなり。なほ漢籍に。此化物の餘に。龍をも鳥をも。また石をさへに。天狗といひし事あれど。其は此に要なき事なれば得辨へず。此餘に仙を天狗といへる事あり。其は下に辨ふべし。

偖この化物を。漢人は星の墜て化れる物と。思へる趣にて。上に擧たる史等に。しか云へる耳ならず。昭明下爲天狗所下兵起血流。昭明星也とも。或は太白星散爲天狗とも云へれども。眞の星の墜下るべき由無れば。

漢人はともすれば。星の下ると云ふ說を云へども。眞の星は墜下などする物に非ず。此はよく天文の事を學びて知るべし。

此は異なる妖物の。態と形を星の如く見するにて。博聞錄に。陰山有獸焉。其形如貍而白首。噉蛇名之天狗と云ひ。

上に擧たる書等には。狗に類ると云へるに。此錄

には狸に如ると云へるは。違へるに似たれど。其に大凡の狀を云へるなれば。なほ狐に似るとも。鳶に似るとも云ひつべし。拘はる可からず。山海經にも此說を記して。其光飛天。流而爲星。長數十丈。其疾如風。其聲如雷。其光如電と有れば。此妖獸の態と見えたり。

然るを上に引たる史等に。此を星といへるは。流星の如く光りて飛ぶ故に。星と思ひ過りて。種々雷同したる說どもを云へるにて。決めて星の化たるに非ず彼妖獸の化て星の如く見する也けり。藤井高尙が說に。山海經に。天門山有赤犬。名曰天狗。其光飛天流而爲星。其聲如雷と見え。五雜組に。俗云天狗所止。輙夜食人家小兒。故婦女嬰兒多忌之とあり。此は山に住むあやしき物の出て。空をとび行き。大きなる流星の形を見すれど。眞の星ならぬ故に。高く聲を立て。止まる處にては人家の兒をとり食などするは。樹神山鬼の類なり。和名抄に。樹神山鬼をこだまと云へり。此木靈の類を 天狗とも云へるにて。同じ樣なる物なれば。物語ぶみには。天狗こだまと並ても云へりと。其天狗說にいひしは然る說なり。さて皇國にて。此物の現れたるは。舒明天皇の紀に。九年二月戊寅。大星從東流西。便有音似雷。時人曰流星之音。亦曰地雷。於是僧旻曰。非流星。是天狗也。其吠聲似雷耳と有る。これ始めにて。この年果して東夷の亂起りしかば。上毛野君形名といふ人を。將軍として討しめ給へるに。夷の軍强くて御軍敗れたるに。形名君の妻いたく慨みて。女軍を起し。夷の軍を大きに敗りて。悉く虜に爲たりき。戊寅は二十三日なり。僧旻は元より。戎法師にて有りしかば。早く史記漢書などの說を知り居て。此時かく天狗なりとは。斷れるならん。信に和漢ともに。此物の出たる時は。かく兵亂ある事は。甚も妖々しき物なりけり。

神世に聞えし香々背男といふ星神は。既く健葉槌神に誅はれたるが。此は若くは。其流裔の物に非ざるか。香々背男は決めて。大白金星に住る神なるべき由は。古史傳に云へる如くなるに。漢籍に大白星散爲天狗とあるは。由有るなり。但し此は庸人の爲にいふ言ならず。

さて御紀なる天狗の字の傍に。阿麻都倶都禰と付たるは。私記も同訓なるか。古き博士の深く思ひて付たる訓にて。此は皇國にて天狗といひ習へる物の。妖々しき狀の。天狐といふ物の趣に類たる故なるべし。

壒嚢抄天狗名目事といふ條に。天狗とも天狐とも書て通はし用ふ。然れば日本紀には天狗と書て。アマツクツネと訓めり。字は狗にて訓はクツネなり。是れ通へる事を顯すなりと云へれば。當時クツネと訓し本も有しと聞えたり。舊く狐を久都禰とも云へりき。

然るは天狐といふ物の所爲は。廣異記といふ漢籍に。唐済陽令某在官。忽云欲出家。念誦懇至月餘。有五色雲生其舍。又見菩薩坐獅子上。呼令歎嗟曰。發心弘大當得上果。宜堅固自保無爲退敗。因爾飛去。令因禪坐閉門不食六七日。家人憂恐損壽。會道士公遠自蜀之京。途令子請問其故。公遠笑曰此是大狐耳。因與書數符。當愈。令子投符井中。遂開門見父餓憊。遂令呑符忽爾明悟。不復論修道事。

上件の事ども。今昔物語集。宇治拾遺物語などに。美濃國伊吹山の聖人が許へ。佛菩薩來迎の相を現じ來れる。天狗の所爲にいと能く合へり。其は第三巻に引たる文を見て知るべし。また羅公遠が事。

續谷響集五巻にも見えたり。

後數歳罷官過家。家素郊居。令暇日倚杖出門。遙見桑林下有貴人自南方來。前後十餘騎狀如王者。令入門避之。騎尋至門通曰。劉成謁令。令甚驚愕。既見升堂坐謂令曰。蒙賜婚姻。敢不拜命。令有室女年十六歳矣。令曰未相識何嘗有婚姻。成曰不許婚事亦易耳。以右手掣口而立。令宅須臾震動。井廁交流百物飄蕩。令不得已許之。婚期尅翌日。成親後恒在宅。貲以饒益也。佗日令子詣京見公遠。公遠曰此狐舊日無能。今已善符籙。吾所不能及。令子懇請。公遠奏請行尋至所居。于令宅外儀步設壇。劉成策杖至壇所罵曰。汝何爲往來靡所忌憚。公遠法成求與交戰。成坐令門。公遠乘壇乃以物擊成。成仆于地久之方起。亦以物擊公遠。公遠亦仆如成焉。如是往返數十。公遠忽謂弟子曰。彼擊余殪。爾宜大臨。吾當以

神法縛之。及其撃也公遠仆地。弟子大哭。成喜
不為之備。公遠使神往撃之。成大戰恐自言力竭。
變成老狐。

玄光法師が擬山海經には、此説を舉て。其首書に。
善符籙。而非其人則去。劉成聞不容髪矣。
世俗奉而為神祟者。吁可悲と云へるは卓見なり。抑々漢土の道士といふ者の態は。大旨皇國の陰陽家の態に等しき物なり。其使ひたる神と云も安倍晴明が使へる。式神といふ物の類にぞ有べき
此は事の因に云ふのみなり。

公遠既起以坐具撲狐。裹之以大袋。乘驛還都。
玄宗視之以為歡笑。公遠自曰。此是天狐不可得殺。宜流之東裔耳。書符流于新羅。狐持符飛
法。今新羅有劉成神。土人敬事之とあり

廣異記の本文。これかれ要となき文を引約めて舉たり。因にいふ元亨釋書に。新羅明神者。天安二年圓珍師泛船自唐歸。洋中忽有老翁。現船舷曰。我是新羅國之神也。誓護持師教法。至慈氏下生。語已不見。珍入京將傳來教籍蔵尚書省。時海上翁來曰。此所不堪留經書。是日域中有一勝地。我已先相攸。師聞官建院宇度此典籍。又佛法是王法之治具也。佛法若衰王法亦衰。語已形隠。珍歸叡山至山王院。時山王明神現形曰。傳來經書宜藏此所。新羅明神又出曰。此地來世必有喧爭。不可置也。南行數里是為勝處。珍乃與新羅山王二神到滋賀郡園城寺。新羅明神語珍曰。我卜居寺之北野。時百千眷屬倏來圍繞。唯珍獨見他人不知。自此新羅明神。威靈益顯とあり。此事釋書のみならず。多くの古書に見えたるが。新羅國の神と名告たるも。圓珍に說たる妄說の趣とを思ふに。決めて彼の劉成神ならむと覺ゆ。然るを俗の學者たちの說に。新羅明神は。素盞烏尊の化現にやと云へるも有るは。餘りに事を辨へざる言なり。慈氏とは彌勒といふ佛の事なるが。其下生とは。釋迦佛在世の時に記を受てより。五十六億七千萬歳の後に世に出て。正覺を成すと云ふ釋家の幻說なるを。素盞烏尊のいかで其を信じて。佛法を守り給はむ。佛法是王法之治具也。云々など云へるも。殊に天狐の誑惑說なり。

然れば天狗に。阿麻都伎都禰と訓を付たるは。皇國

にて天狗と云ひ習へる物の所爲の。かの天狗といふ物の所爲に類たる故に。然よみたる事疑ひなく思ゆ。然らでは字の儘に。アマツイヌと訓べきに。アマツキツネと訓るは。然る事を思はずは。得よむまじき訓なるをや。

また仙家の說を攷ふるに。まづ抱朴子對俗篇に。彭祖言。古之得仙者或身生羽翼。變化飛行。失人之本。更受異形。有似雀之爲蛤。雉之爲蜃。非人道也。また至理篇に。或有邪魅山精。侵犯人家。以瓦石擲人。以火燒人屋舍。或形見往來。或但聞其聲音言語。と見え。また登涉篇に。萬物之老者。其精悉能假託人形。以眩惑人目。而常試人。唯不能於鏡中易其眞形耳。是以古之入山道士。皆以明鏡徑九寸已上。懸於背後。則老魅不敢近人といひ。但し彭祖がいはゆる神仙の事迹は。粗皇神の道に等しく。彼天狐老魅などいへる類とは。甚く異なれど。其形狀の稍似たるまゝに。姑く徵し記せるなり。

また山人の說を傳へ聞きたるに。魑魅といひ。天狗と世にいふ物の本は。鷲鳶狐は更にも云はず。餘の鳥獸も。數百千歲を經ては。鳥は兩翼より手を生じ。本よりの兩足に肉を生じて立ち。獸は前足に翼を生じ。異形ながら。稍人に似たる形と化て竪行し。其に飛行するが中に。翼なくて飛行するも有りと聞たり。

其中にも雷獸は。狸に似て空中を翔る物なれば。上に引たる山海經。博聞錄などの說に符ひてきこゆ。星の如く光を見する天狗は。此物の年經たるが。化たるならむも知るべからず。其飛ぶ時に。雷の如き聲を發すといふ。由有りて通え。杜甫が天狗の賦に。夫何天狗兮。氣獨神秀。色似狻猊。小如猿狖。忽不樂雖萬夫。不敢前兮。非胡人焉能知其去就。と云へるも。猛獸と通えたり。さて山人の傳說といふを。異み思ふ人有るべけれど。此は仙境異聞とて。別に聞書せる物數卷あり其を見て知るべし。

此れに就て思ふに。古への博士たち。若くは天狗は。狐も化る物ぞといふ說の。舊く有りしをかつぐも聞知りて。彼訓を付たりけむも知るべからず。

谷川士清の言に。源氏に。てむぐこだまと云へる

は。魑魅の類にて。或は老鷲の化する物といひ。日本紀の訓によりて。天狐とも物に書き。天狐に天狐地狐人狐の別有て。今いふ天狐は。元より天狐也とも云へり。四八日類函に。狐千歳與レ天通爲二天狐一。と見ゆれば然も有るべし。獸にてはまみ狸といふ物を。天狗と云へりと有り。士清が言に。老鷲の化すると云ふ說。また天狗は元より。天狐なりと云へる說は。何人の說ならむ。古人の說と聞ゆるが。仙家の說に符ひて通ゆ。さて士清が謂ゆる。地狐人狐と云ふ物の事は知らねど。天狗地狗と並べて云へる事は。愚管抄七卷に。後鳥羽天皇の。武家を惡ひ給ふ事を。諫め奉るとて。記出けむと思ゆる處に。攝籙と武士とを一つになして。文武兼行して世を守り。君を後見參らすべきに。成ぬるかと見ゆるなり。是は一定八幡大菩薩の御計ひか。天狗地狗のわざかと。深く疑ふべしとあり。天狗とは元來いはゆる天狗をいひ。地狗とは後に。僧徒らが化れるを云へるにや。詳ならず。
また抱朴子に。物之老者多レ知。率皆深藏遠處。故人少有レ見レ之耳。千歲之鳥萬歲之禽。皆人面而鳥身也と見え。仙家の說に。天狗ちふ物の本は。鳥獸なるが數百歲をへて兩翼を生じ。飛行すと云へるを。上に引たる漢籍等に云へる。天狗に翼有りと聞えざるは。中には翼なくて飛行するも有り。と云へる物なるべし。

但し天狗とこそ云はね。正に世にいふ天狗の狀にて翼ある物。漢土にも在ること。抱朴子の說にて炳く。また下に擧たる尙書故實といふ書に。記せる事を見て知べし。

また世に天狗と云ふは。上に論へる種々の物の化れるは更なり。羅山先生の說の如く。多くは僧山伏などの化れる鬼を云へり。何故に其を天狗と。いひ初けむと考ふるに。高鼻長喙にて。頭はかの天狗にほゞ似て山に住み。世に災異をなすことも。かの天狗に類たればなり。後白河上皇に見奉りて。開發源大夫と名告せる物の語に。僧等の化れる靈鬼の事を語りて。其形。頭は天狗にて。左右の羽生たりと有るを思ふべし。

此は源平盛衰記に見えたる事なるが。世にいふ天

狗の事を。正やかに語り傳へたり。第四卷に擧て少か注せるを見よ。

頭は天狗にて云々と言へるにて。元より天狗といふ物有りて。僧徒の化れる靈鬼の。其に似たる故に。其名を取て名とせる事は知られたり。

埃嚢抄に。諸道の長者。諸宗の行者　慢心に依て天狗と成れるは。其名は同けれど。種類各別なるかと云へるは。實然る說なり。また同書に。八坂の寂仙上人遍融。七天狗の繪といふ事を書れたりと有り。寂仙上人といふは。何頃の僧ならむ。七天狗とは何々ぞや　此繪卷今も傳はれるにや。見ま欲き物なり。俗に事の成りがたき事を。八天狗を使ひても。成がたからむなど云ふめり。もし斯る物に由ある言にや。また京の愛宕山に上りて見しかば。宮の後に八天狗社と云がありき。後に愛宕山大權現。强敵退散法といふ物を見るに。太郎坊。火亂坊。三密坊。光林坊。天南坊。普賢坊。觀喜坊。東金坊などいふ。天狗の名ども見えたり是等を祭れるにや。

斯れば法師たちの化れる鬼を。舊く天狗と云ひ來つれど。眞の天狗に非ず。其身に翼生じて。多くは山に住むは。魑魅の類に入れるにて。釋魔と云ふべき物にぞ有りける。

漢籍尙書故實といふ物に。章仇兼瓊鎭レ蜀日。佛寺設ニ大會ヲ一。百戲在レ庭。有ニ十歲童兒一舞ニ竿杪一。忽有レ物狀如ニ鵰鶚一。掠レ之而去。群衆大駭。因而罷レ樂。後數日其父母見レ在ニ高塔之上一。梯而取レ之。則神彩如レ癡。久之方語云。見下如ニ壁畵飛天夜叉一者上。將レ入ニ塔中一。日飼ニ果實飮饌之味ヲ一。亦不レ知ニ其所ヲ一自。旬日方精心如レ初とあり。此は天狗とは無れど。正しく翼有し天狗にて。魑魅の類と見ゆ。第二卷に論へる。東大寺の開基。良辨を掠去れる鷲も。此類の釋魔なり。先達も多く。漢土にも世にいふ如き。天狗も有りといふ證に。この尙書故實の說を引たり。谷川士淸云く。五朝小說に載たる。飛天夜叉といふ物。塔より下りて婦人を拯む。形梟鴞に似たりと云ひ。廣西通志に。一人約するに。長け二丈面濶さ三尺餘り。長さ是に倍す。被髮鳥喙背に二翼ありと云ふ物。世にいふ處によく合へりと云へり。また漢土に治鳥といふ物あり。此もいはゆる

天狗に似たる物なり。其は本草綱目に。越地深山有之。大如鳩青色。穿樹作窠大如五六升器。口徑數寸。飾以土堊赤白相間狀如射候。伐木者見此樹即避之犯之則能役虎害人燒人廬舍。白日見之鳥形也。夜聞其鳴鳥聲也。或作人形長三尺。入澗中取蟹。就人間火炙食。山人謂之越祀之祖とあり。此も一種の妖物にて。正に天狗の類と見えたり。寺島良安云く。先輩僉云。治鳥乃本朝所謂天狗之類矣。羅山文集云。日光山有天狗。好棲息于長杉。猶是愛宕山大杉。榮術太郎之所居之類也歟。蓋指鬼類而言也といひ。また北國能登海濱有天狗爪。往々拾取之。大二寸許末尖微反。色潤白如小猪牙。而非牙。全爪之類也。疑此其海大蟹之爪也歟。若夫天狗之爪者。可有處處深山中。何有海邊耶とも云へり。天狗の爪と稱する物は。何物の爪といふ事いまだ思ひ得ず。

抑釋魔といふ稱は。佛籍に有りしや無りしや今覺えず。若無らむには。余が新に設たる名と知べし。然るはまづ天竺にて。魔と云ひ。魔羅と云ふ語意を考ふるに。固有の梵語にて。自然にして靈異なる物をさして云ふ稱なり。然るを惡き物のごと聞ゆるは如何といふに。佛道には相反して。其道の妨げと爲り障りを作す物なれば。彼道には良らぬ物故に。佛者より惡く言貶せるなり。其は三藏法數。十魔の下に華嚴經疏を引て。魔梵語具云魔羅。華言能奪命。謂能奪智慧之命。又翻作障。能於修道之人而作障難故也。

按ずるにまた大論に。魔羅或言惡者。多愛欲害出世善根故也とも有り。さて俗に男根をマラと云ふも。佛道より賤めたる名かと思ふに然らず。此はもとマウラと云語の約まれるにて。固より正しき古言なるが。男根のみならず女陰にも通る名なり。其はマウラは眞心にて。彼處は眞情の凝結する處なる故に。專と稱ふ名なり。こゝに云ふ梵語も同義と聞えたり。猶委くは古史傳また。印度藏志に說注せるを見るべし。

一蘊魔。謂色受想行識五蘊爲魔。蓋貪著五蘊起惑造業也。

五蘊といふ事を。經論どもに說る樣。いと言痛く紛々しけれど。語易く言はゞ。此身の地水火風の

四大。および四大の造せる色を。色蘊と名く。百八煩惱等を身に受るを。受蘊と名く。小大無量の想ひ和合するを。想蘊と名く。好醜に因て。貪欲嗔恚等の心を起し。善惡諸行を作すを行蘊と名く。眼耳鼻舌身意の識を以て。無量の分別心起るを識蘊と名く。是五蘊なり。蘊は積集の義とも。蓋覆の義とも云ひて。色受想行識は。よく眞性を蓋覆すと云ふ義をもて。五蘊と號へり。さて此五蘊は皆空なりと明悟して。貪著せざるを五蘊實相といふ。實相は眞如無妄の理と云ひて。五蘊を皆空と見る。これ眞實の佛道なるを。其に貪著して惑ひ起し。業を造れば。五蘊はやがて魔といふ義にて蘊魔と名けたるなり。

二煩惱魔。謂一切煩惱之惑爲魔。蓋貪著五塵。起諸煩惱也。

按ずるに五塵とは。色聲香味觸をいふ。又大論に。謂百八煩惱等分別。八萬四千諸煩惱とあり。五塵は三藏法數に。法界次第を引て。眼所見青黃赤白黑。及男女形貌等色。是名色塵。耳所聞絲竹環珮之聲。及男女歌詠等聲。是名聲塵。鼻所嗅栴檀沈水飲食。及男女身分所有香等。是名香塵。舌所嘗種々飲食肴饍美味等。是名味塵。身所觸男女身分柔輭細滑。及上妙衣服等。是名觸塵。塵即垢染之義。此五塵能染汚眞性故也とあり。此の五塵に貪著するより。諸煩惱起る其を煩惱魔と云ふなり。

三業魔。謂一切惡業爲魔。蓋殺盜婬妄諸罪也。四心魔。謂一切我慢之心爲魔。蓋心懷貢高常生憍慢也。五死魔。謂人壽盡命終爲魔。蓋業報已畢。捨離現生之魔也。六天魔。謂欲界第六他化自在天爲魔。蓋此天爲欲界主。見人修道以爲失我眷屬空我宮殿。即興魔事惱亂行者也。

按ずるに同書四魔の下に。瑜珈論を引きて。天魔は。若人欲超越三界生死。作障礙發起種々擾亂之事令不得成就とも云へり。此自在天といふ物は。世に第六天魔王とも云ふ物にて。此を魔とも言へるは。佛道を惡み嫌ふ由にて負たるなれど佛道よりこそ然も云はめ。佗よりは然しも憎み云べき物に非ず。然るは此の天。佛書どもに云へる趣を考ふるに。子孫を相續して人道を行はむとす

る物なり。然るに佛法は其を魔事と立たる道にて。其道に違へる故に魔といへるなれど。自在天よりは。佛道をこそ魔道とは云ふべけれ。然るは子孫を斷絕して。人道に違へばなり。但し此は庸人の爲に。いふ言には非ずかし。

七善根魔。謂著所修一切善法爲魔。蓋修行之人或得一善。即生取著之心。更不加修也。八三昧魔。謂著所得禪定爲魔。蓋修禪之人得一三昧。久味耽著。不求昇進也。

佛法者に。或は一經に依り。或は一偈一呪により。或は一佛一菩一天一明王を採りて。外を顧みざる者甚多かり。此文に依れば善根魔の人なり。三昧は梵語なり。譯して正定と言ふ。さて禪家の學匠に。此の如き人甚多し。即ち三昧魔のみなり。

九善知識魔。謂慳吝於法爲魔。蓋於一切諸法起執著心。不能開導於佗也。十菩提法智魔。謂智著一切法而爲魔。蓋修行之人於菩提之法起智執著堅守不捨也。

諸宗の學匠に。かゝる人甚多し。即ち善智識魔の人なり。菩提は梵語なり。譯して道と言ふ。佛道修行の人々を普く觀るに。此魔を脫れたる人は。多く有るまじく思ゆ。

また翻譯名義集に。大論。瑜珈論などを引きて。四種の魔を明し。今謂煩惱魔。是生死因也。五衆魔。死魔。是生死果也。天魔是生死緣也と云ひ。五衆魔とは上にいはゆる蘊魔なり。なほ此餘に愛魔。婬魔。罪魔。行魔。惱魔など云ふ目あれど。皆上なる十魔に具れる故に。今更に記し出ずなむ。魔字は古譯の經論に。石に從ふ磨字を書しを。梁武帝が時に。磨は能く人を惱ませば。字を鬼に從ふべしとて。作れる由言へり。

上件三藏法數。名義集ともに。此に用なき文は省きて目易く記せり。具には本書に就きて見るべし。蕤鞞記に。惛前設煉火以去諸魔。此謂阿良知氣とあり。然れば魔を呼し古言も有りけり。されど佗書に見ざる言なれば。猶よく考ふべし。さて魔の本說は上に引たる佛書どもの說の如くなれば。釋子と成りて。其道に入たらむには。其の本敎の如く。十魔の繼を餘波なく截捨て。生死を出べき事なるに。其は人たる者の。決めて成得まじき所爲なり。人の決め

て成し得ざるわざを。成しめむとす。是ぞやがて魔
道なる故に。古今の釋子悉く。生死の因たる煩惱魔は
更也。生死の果たる蘊魔死魔をも去敢ず。此を去畢
ずては魔を脱れず。況て其戒の多端なる。菩薩戒は
姑くおきて。沙彌の十戒は事にも非ねど。
其すら佛書どもに。一殺生戒。常念有情皆惜身
命。當憐愍愼勿傷。二偸盜戒。物各有主。雖一
針一草亦不當攘竊。三不婬戒。清淨自守不犯
色欲。四妄語戒。言說誠實不以虛言誑人。五飲
酒戒。酒能昏神亂性增長愚癡。當絕飲。六離高
廣大牀戒。所坐之牀高不過尺六。廣不過四尺。
若過此量則不可坐。七離花鬘等戒。不著花
鬘瓔珞。不用香油塗身。八離歌舞等戒。不自
歌舞。乃不觀聽。不著樂器。九離金寶物戒。金銀
錢寶不當蓄積。亦不許手執。十離非食時戒。佛
制午時爲食時。若過午則不當食と有ればなほ
容易に持たるべき事には非ず。
比丘に至りては。具足戒とて二百五十戒。比丘尼に
三百五十戒あり。
この諸戒を鏡規として。諸宗の祖師聖人と云はる
る僧たち。古今の僧尼を照し觀るに。よく其法規
に叶へりと見ゆるは。吾れいまだ此を見ず。近く
は名義集。釋氏要覽。大藏法數などに。記せる戒
の處を讀み。古今の僧尼の行狀に合せ見て知るべ
し。
此餘に誡めたる禁戒の條々は。限なく多かれど。此
の禁を持ちたるも。彼戒を得持たず。彼の禁を持た
るも。此戒を持も敢ずて破戒に坐し。常に口實とせ
る幻說。やがて因となり。然る妖魔の果を感得し。
自法やがて自縄となりて自縛し。自業の自刑を自得
して。自造の惡道に歸し。妖魔の部屬と成ることは
佛子と云へども人の子なるに。甚も悲き因果なりか
し。
金剛三昧經に。自念起相自縶縛。以縶縛故則是
地獄。雖非是有而令受者受彼苦。云々と有る
は。即此の義を明せる說なり。
此は尋常の靈鬼とは。其因緣異にして。佛道有りし
以來。やがて其道によりて化り。其事を行ふ妖物な
れば。彼道に用ふる魔の字を用ひて。釋魔とは稱ふ
なり。然るは此を措く。天魔とも天狗とも稱へれど

も。天魔と云は。上に論へる如き物なれば。釋子の化れる魔の號には當らず。また此を天狗と云へる事も。佛經等に無ればなり。其は早く無住法師が砂石集に。天狗と云ふこと。聖教の慥なる文を見及ばず。先德の魔鬼と釋せる是れにや。天狗と云ふは。日本人の云ひ習はしなり。佛法者の中に。破戒無慚の者。多く此報を受く。我相憍慢名利諂媚等の業を。佛寺に交ふるは。定めて此道に入べしと云ひ。

埃嚢抄に。天狗と云ふを。聖經の中に見及ばずと。砂石集に云へれど。古德の釋に。天狗者。天光明義自在義。則表佛果狗痴闇義不自在義示生界則是生佛不二名也と。また天天曼荼羅。是金剛界。狗地曼荼羅。則胎藏界也と。殊に聖教中に。天狗と云ふは。魔王所部の從類なり。妙善王。金著女と云は。天狗の首也。と見えたりと云へるは。却りて覺束なし。延命地藏經といふ物に。天狗士公大歲神と云ふ事あり。此は正しく俗に云ふ天狗を云へるなれど。此經は此方にて僞作せるなれば。證とは成らず。また或る人正法念處經觀天品に。有大光明遍虛空中如火炎熾如大天狗從天而墮云々。彼天狗の量五千由旬。一切虛空皆悉炎然とあるを。世にいふ天狗の本文なりといへども。此は天上の光物のことを。初めに引たる史等に。天狗と云へるに效ひて釋せる文にて。妖魔を云へるに非れば。是また謂ゆる天狗の證とは成らず。

谷響集にも。此邦天狗從我教見之魔類也。此邦何謂無魔哉。凡出家人無菩提心。我執憍慢專求名利經名魔業。如是之曹當作天狗也と云へり。

聖財集にも。圭峯の孟蘭盆經の疏に。橫行曰畜竪行曰鬼と釋たり。日本の天狗は。山伏の如くにて竪行するなり。是鬼の形なりと云へり。此も無住法師が書なり。

さて魔業といふ事は。華嚴經離世間品に。忘失菩提心修諸善根是爲魔業。於甚深法心生慳悋有堪化者。而不爲說若得財利恭敬供養雖非法器而强爲說是爲魔業。樂學世論巧述文詞開闡二乘隱覆深法是爲魔業。增長我慢無有恭敬其心弊惡難可開悟是爲魔業とあり。

空華老人の名義考にも。此文の半をひきて。眞實

の道念无して。或は我慢勝他のため。或は名聞利養の爲に。善根を修する者多し。正しく魔道に入るの五因なり。此經文信に天狗道の證文なり。さ云へるは實然ることなり。

また大虛空藏所問經に。不護菩提心是爲魔業。於諸有情。簡別行施是爲魔業。樂求生處而持禁戒是爲魔業。爲求色相而修忍辱是爲魔業。作世間事相應精進是爲魔業。於禪味著是爲魔業。以慧厭離於下劣法是爲魔業。在於生死而有疲倦是爲魔業。作諸善根不迴向是爲魔業。厭離煩惱是爲魔業。覆藏己過是爲魔業。背恩不報是爲魔業。不求諸度是爲魔業。慳惜於法是爲魔業。希利說法是爲魔業。離於方便成就有情是爲魔業。毀破禁戒是爲魔業。順聲聞行是爲魔業。順緣覺乘是爲魔業。要求無爲是爲魔業。厭離有爲是爲魔業。心懷疑惑不利有情是爲魔業。好疑不通達是爲魔業。好懷諂誑假示哀愍是爲魔業。麤獷惡罵是爲魔業。於罪不厭是爲魔業。染著自法是爲魔業。少聞便足是爲魔業。不淨心口是爲魔業。とも見ゆ。

但しこは甚く文を省きて引たり。委くは本書を見るべし。

また釋氏要覽に。魔逆經なる魔事といふ事を釋に。瑜珈論を引て。魔事者於利養恭敬稱譽心樂赴入。或放逸慳　廣大希欲不知喜足忿恨惱覆矯詐等。皆是魔事と云へり。

また大般若經に。魔事品あり。楞嚴經に五十種の魔事を說り。色受想行識に。各十種ある由なり。披き見るべし。

此等の文を見通して。古への名僧の中に。戒行を持たず。名利の爲に。善根を修せる倫を稽ふるに。まづ古く世に聞えたるは。道昭和尙なるが。此法師の事は。文武天皇紀四年三月己未日の下に。道昭和尙物化。天皇甚惜之。遣使弔賻之。和尙河內國丹比郡人也。俗姓船連。父惠釋少錦下

船連は。姓氏錄右京諸蕃下に。船連菅野朝臣同祖。阿太郎王三世孫。智仁君之後也。又云菅野朝臣。出自百濟國孝慕王十世孫。貴首王也と有りて。百濟人の末裔也。惠釋は皇極天皇の御世に。蘇我臣蝦夷が誅せらるゝ時。國史を悉燒かむと爲しを。

火中より取出たる人なり。少錦下は。孝德天皇の
御世に。定られたる位なり。
和尚戒行不レ缺尤尙忍レ行。嘗弟子欲レ究二其性一竊穿二便器一漏汚二被褥一。和尙乃微笑曰。放蕩小子汚二人之床一竟無二復一言一焉

史にはかく戒行不レ欲と有れど。其靈の語に。一生の中に戒行相應せず。破戒の罪重しと云へれば缺たる戒行も甚多かりしと見ゆ。

初め孝德天皇白雉四年隨レ使入唐。適遇二玄弉三藏一師受レ業焉。

今昔物語集にも。此僧の事を記して。智廣く心直し。道心盛にして佛の如くなり。然れば世の人公より始め。上下の道俗男女。首を傾けて貴び敬へること限无し。而る間天皇道昭を召て仰給はく。近來聞けば震旦に。玄弉法師と云ふ人有りて。天竺に渡り。正敎を傳へて返來ること。其中に大乘唯識といふ法門有りと。其敎法いまだ此朝になし。汝彼國へ罷渡りて。彼敎法を受て返るべしと。道昭宣旨を奉りて。震旦に渡りぬと有り。但し其傳の中に。唐土に逗留の內に。新羅國へ渡り。役小角に相見せる由を記せるは誤なり。そは佛仙のところ。小角が傳の中に辨へたるを見るべし。

三藏特愛令レ住二同房一謂曰吾昔往二西域一在レ路飢乏無二村可一レ乞。忽有二一沙門一。手持二梨與一レ吾食レ之。吾自レ啖後氣力日健。今汝是持レ梨沙門也。

佛經の定れる因緣の幻說を效て。玄弉法師が幻說せるなり。また若くは。道昭法師が幻說せるを信として。史に記されたるが。左まれ右まれ。妄幻の說なれば。信ずべからず。

又謂曰。經論深妙不レ能二究竟一。不レ如三學レ禪流二傳東土一。和尙奉レ敎始習二禪定一。所レ悟稍多。

これ皇國の僧の。禪法を習へる始めなり。

於レ後隨レ使歸朝。臨レ訣三藏以二所レ持舍利經論一咸授二和尙一而曰。人能弘レ道。今以二斯文一附屬又授二一鐺子一曰。吾從二西域一自所二將來一煎レ物養レ病無レ不二神驗一於レ是和尙拜謝啼泣而辭。及レ至二登州一使人多病。和尙出二鐺子一煖レ水煑レ粥遍與二病徒一當日即差。既解レ纜順レ風而去。比レ至二海中一船漂蕩不レ進者七日七夜。諸人怪曰。風勢快好計レ日應レ到二本國一船不二肯行一計必有レ意。卜人曰龍王欲レ得二鐺子一和尙聞レ之曰。鐺子此

是三藏之所施者也。龍王何敢索之。諸人皆曰。今惜鐺子不與。恐合船爲魚食。因取鐺子拋入海中。登時船進還歸本朝。

佛法の幻説既に。靈ある物の生さし生るは更也。金石草木にさへ及び。喧響立てある故に。かゝる異驗は有るなり。怪むに足らず。猶次々にも。斯る事の出たらむ處々に云べし。

於元興寺東南隅。別建禪院而住焉。于時天下行業之徒。從和尚學禪焉。於後周遊天下。路傍穿井諸津濟處造橋。乃山背國宇治橋。和尚之所創造也。

是れ本朝に禪さいふ佛法を行ひし始めなり。委くは印度藏志に云へりき。また宇治橋を造れるは。後世までのよき功なり。然れど其は。名聞利養の心にて爲たにて。魔道に落る因縁なりしと通えたり。

和尚周遊凡十有餘歳。有勅請還。還住禪院坐禪如故。或三日一起。或七日一起。倏照忽香氣從房出。弟子驚怪就而謁。和尚端坐縄床无有氣息。時七十有二。弟子等奉遺教火葬於栗原。(栗一本作粟)。天下火葬從此而始也。世傳云。火葬畢親族與弟子相爭。欲取和尚骨斂之。飄風忽起。吹颺灰骨終不知其處。時人異焉と有り。

今昔物語集に。道昭が唐土の玄奘法師が許に居たりし時。玄奘が弟子。其宿房を竊に伺へば。道昭が口より光を放ちたりと云ひ。死期も兩牙より光を放ちたるが。壁を透りて庭松を照し。良久して。其光西を指て去れる由見えたるは。靈異記なる常昭が事を錯り傳へたる物也。元亨釋書には。やがて其錯を受て記せれば。云ふに足らず。常照が事は屍解仙の處に云へり。釋魔の態として。か斯異を示すると常なり。怪むべきに非ず。又釋書に。弟子思其兩牙放光。欲收之。而先爲鬼神取去。闍毘之後欲取其骨。暴風忽來骨灰共失と有るは。國史の文に依て撰者の例の妄説を加へたるなり。

國史に如此は見えたれども。此僧實には。破戒の事ども有りて魔道に落たり。然るは明慧上人傳といふ物に。或る時上人云はく去ころ笠置の解脱上人。來臨して語りけらく。

解脱上人とは。釋貞慶をいふ。少納言入道信西の

子なり。建暦三年二月三日に。五十九歳にて寂せり。此を古事談には。辨入道貞憲が子と云へり。

明慧上人とは。釋高辨をいふ。

秋の明かに晴たる夜に。人數來る音して。草庵の窓を叩き。謁せむ事を望む扉を開きて出向ふに。異類異形の者ども其數ありき。其中に然べき仁と覺しくて。雪の頭霜の眉なる老僧。香染の衣を著て。面貌事がら此世の人とも覺えぬ體にて。進寄て語云く。定めて聞及び給ふらむ。我は往時何某と云ひし者也。

按ずるに文勢を見るに。此時老僧その名告せる事疑なし。然れども此傳を記せる人の。此は傍痛き事なれば。憚りて態と名をば著さゞるなり。其は同じ佛道の人なればなり。されば佗よりは何か憚らむ。誰ならむと考ふべきなり。

佛法に於ては。隨分に行學年積りて。深理を究たる由を存じき。然れば其頃天下に肩を竝ぶる輩无りき。皆是れ世の知る所なり。然るに唯此大乘の本源を。究めむ事を先として。强に戒を專とする事無りき。仍て破戒の事耳なりき。其故に大乘の本源を究めたれども。一生の中に戒行相應せず。破戒の罪の方重きに依りて。魔道に入れり。古へより天竺震旦本朝に。名を得たる貴僧高僧たち。此戒力なき人。一劫二劫。また三四劫も。此魔道に落たる類。あげて計べからず。この魔道の習ひ。一度落ては。急に免れ出る事難し。我れは二劫に此業を果すべきなり。入滅の後五百餘年に及べば。久しき心地し給ふらむ。

按ずるに解脱房は。順德院天皇の建暦三年の。建保と改元有りし二月寂せれば。此老僧の靈の來りしは。其れより幾ばかり前なりけむ。姑く解脱房が寂せる年の事として。靈の語に依りて。五百餘年を操上げて。その頃に大乘の經旨を極めて。其世に肩を竝ぶる者なく用ひられ。かつ長命なりし僧は。誰ならむと考ふるに。道昭法師にぞ有ける。其は上に擧たる文武天皇紀に。四年二月に。此僧の物化せる由なり。其年より建暦三年まで。其間五百十四年なり。

然れども其五六百年を。萬億重ねても。猶其一劫にも及ふべからず。況や二劫を過ぎき末を思ふに。味氣なき事なり。我は大乘の義を明めしに依て。此業を償ひ果てば。佛果を證すべけれど。多劫の間徒に。

苦患にのみ沈みて過行こと。偏に戒律の闕たる故なり。今見るに末世なれども。道を修する志深切なる類あり。此を人間に普く示し知らしめ度て。此庵室に列參せり。後學に傳へ誡め給ふべし。

今按に憐むべし。道昭此道に落ても。なほ末其道やがて。佛祖の假說有しより。出來たる道なる事を悟らず。佛果と異に證すべき道の有て。多劫を經ては。其道に至らるゝ事の如く思へるは。早く先輩の其道に入りて在るが。しか誑惑するを實と思へる也けり。佛法の極意は即心即佛即身即淨土にて。說き得べき道も。行べき淨土も有ることなきを有と示する淨土は。其れもやがて佛祖の假說有しより。姑く妖魔の變現する淨土にて。彼も此も神の道より云ふときは。魔道を免れず。然れど其は因緣に引れたる。迷惑心にこそ有れ。我が苦道に落たるを前の鑑と爲しめ。後人に戒を持しめて。我が落たる惡道には落さじと。かく態と列參して心を添たる志は。發露懺悔の意にも叶ひて。

殊勝なりけり。

さて此れは某。彼れは何某と云ふを聞くに。古へみな名を得たりし僧侶等なり。今は既に佛果に至ぬらむと思ひし人等の。如何して斯は成ぬらむと。不思議に覺えて。偖如何なる御苦か候ふと問ひしかば。或は諸の異類の者來りて。身の肉を食ひ命を奪ふ。其苦に堪ずして絕入て。暫く有りて生れば。また異類現じて。頭目髓腦手足を截取る時もあり。或は猛火現じて全身を燒く時もあり。是すなはち殺盜婬の果なり。或は黑白の二鬼現じて。鐵箸を以て舌を拔き。或は熱鐵を呑しめて。遍身焦れて炭の如くなる時もあり。是れ妄語飲酒非時食の果なり。此の如き苦み。一日に三度五度。人に隨ひ時に依りて。樣々に換るなりと云ひて。搔き消やうに失たりとぞ。

是までは解脫房が夢に。道昭の靈と對問せる有趣なり。以下は解脫房が云へる言を。明慧房が弟子に語れる趣なり。三熱の苦の事は下に別に論ふを見よ。

此事を思ふに是實語なり。尤も愼むべき事なり。今は諸宗を學する者有れども。戒を知れる輩はなし。況や受持する類をや。今は婬酒を記さゞる法師も稀に。五辛非時食を斷たる僧もなし。是の如き不當不

善の擧動をもて。法理を究たりとも。魔道に入りなば。多劫の間苦を免れず。如何してか戒門を興行すべき方便を廻さむと云はれしは。大きに其謂有りと明慧房が語れる由見えたり。

文はいたく約めて擧たれば。悉くは本書に就て見るべし。明慧房と解脱房が事は。なほ別に考へあり。下に云を見よ。

此來れる靈の語に。入滅の後五百餘年と云へる年數。またその頃天下に肩を竝ぶる輩无りきと云へる語。また大乘を學たりと云へる語。また雪の頭霜の眉なる老僧の。香染の衣著たりと有るなどを合せ考ふるに。道昭法師ならで誰か有らむ。

禪は楞伽經をもて第一とす。是れ大乘といふ經々の中にも。最たる物なり。物化の歳は。七十二歳なること。上に擧たる傳に見えたり。

此の僧の父は船史惠釋とて。國史に大功有りし人なるが。其子として過りて。釋子と成り。かゝる苦を受る事は。いとも憐むべき事なり。然れど釋魔の由れる心を持たず。後學に心を添たるは。今昔物語なる此僧の傳に。心直しと有るに符ひて殊勝なる事なりけり。

又按ふに。砂石集に。伊勢國の或る山寺に。如法經行ひける僧の弟子の兒。佗地ともなく失せて見えざりけるが。一兩日過て堂の上にて見付たるに。正念もなく見えけるが暫して本心に成りぬ。扨語りけるは。山臥どもに誘れて。時の間に筑紫の安樂寺といふ處の。山中へ行ぬ。老僧の八十餘りなるが。世に貴氣にて其中の尊者と見えしが。あの兒こゝへ來よとて。傍に置て。あ奴原は所詮なき者ぞ。此に居て物見よと云ふ。賴しく覺えて見る程に。山臥ども舞ひ躍りけるに。網の樣なる物空より下りて引廻す樣に見ゆる時に。山臥ども興覺て、北むとするに叶はず。網の目より火然出て。次第に然上りて。山臥ども皆燒て炭灰になりぬ。暫くありて又本の如く。山臥に成りて遊びける。老僧あの山臥是へ參れと呼て。いかに和山臥よ。この兒を具して來りしぞ。疾く本の山寺へ具して行けと云れば。恐たる氣色にて。具して歸ると覺えつると云ひけりと有り。此老僧の殊勝に聞ゆるは若くは是も道昭には非ざりしか。然らずは安樂寺を開基せる法師にぞ有りけむ。

偖又名聞利養の爲に矯詐の說を構へ。我慢にして。廣大の希欲を發せるは。行基和尚ぞいと速かりける。其は四十九處の寺を建たるは。忘失菩提心。修諸善根にて魔業なり。大僧正の位を受け。四百人の出家を賜れるは。於利養恭敬稱譽。心樂赴入せるにて魔事なり。邪婬を犯して。孽子を生給へる光明皇后に菩薩戒を授けたるは。得財利恭敬供養。雖非法器而强爲說にて魔業なり。殊に具足戒を受たる身にて。畏くも伊勢大御神の託宣を僞作して神を誣ひ。皇を誑惑せる大妄語を吐て。國家の道の大義を亂せり。尙勝て計がたく。魔事魔業は多かるを。其は巫學談弊に記せるを見るべし。後に出たる最澄法師も。此れに效ひて廣大の希欲に。比叡山を物し。大伽藍を申し行ひ立て。天皇祖神の古傳を亂す。大妄說を作りて。彼の山の本緣と成し。宇佐八幡宮。賀春神。諏訪神などの妄說を作りたる。是れ魔業なり。

其は八幡宮。法華の法味を好み給ふと託宣を僞り。賀春神は。半身石の如き梵僧なるが。此れも法味を好めると云ひ。諏訪神にも然る妄說を作れり。

此事も委くは巫學談弊に云へり。

また此僧の。魔道に落たりと覺ゆる事は。神社考に。慶長甲寅夏。叡山僧侶到駿府告衆曰。頃叡山有奇事。覺林房奴二郞者一日忽失。經數日歸。人問何之。奴曰。有人將我去到伯州大山。已而登筑紫彥山。於是大山彥山之山伏相共歸。時人々自愛宕鞍馬比良來會。有一僧自上野國來。座定鞍馬僧正曰。久無奇怪。東州西州合戰今其不遠。愛宕太郞曰如何。叡山次郞曰。東方必勝其勢既見。言已各歸本山。我今見之諸人不信。幕下聞而奇之。後果有大坂之軍。自古民之訛言時之童謠。史之所載今亦奇哉と云はれたり。此の叡山次郞と云ふ者は疑なく最澄法師の。釋魔と爲れるよりの稱なりと聞えたり。

或人の說に。次郞坊と云るは。舊く叡山に住める天狗にて。最澄法師の靈には非ずと云は信られず抑皇國に固より有る枉神と。僧徒の化れる釋魔とを考ふるに。同類の物には有れど。其所業は別なる事あり。此次郞坊太郞坊が如き。其事跡を思ふに。釋魔なる事疑ひなし。猶云はゞ此法師等より以前に其名の聞えざるを以ても知るべし。

猶近く思ひ合さるゝ事は。櫻町天皇の元文五年に。比叡山の西塔釋迦堂御修理有けるに。奉行は江州信樂なる御代官。多羅尾四郎左衛門といふ人と。大津石原ぬしの家頼に。木内兵左衛門とて。三十餘歳の人有しが。三月七日の申時に。ふと行方知れず成しかば。方々を尋ぬるに。彼者の履たる下駄。行榮院といふ寺の玄關前と。内庭とに片足づゝ落てあり。奇みつゝ見るに。庭の角なる辨天の祠の處に。脇指鞘は碎きて。身は鐺鈎の如く曲り。脇指に添たる小刀は三に折てあり。また其邊に下帶も三つにきれて有ければ。人々天狗の業と心得て。こゝかしこ尋ぬるに。兎角見えざる故に山内の寺々にても。祈を始めて。慈慧大師廟を始め。魔所といふ所々を。人を分て尋けるに

慈慧僧正の名ぞ。良源と云ふ。世に元三大師と稱する是なり。其廟は叡山の内。横川と云ふ處に在て。其處を今も大魔所と云ふとぞ。猶この僧の事は次卷の始に載せり。

其夜丑刻前と覺しき頃に。何處ともなく。大風の吹ごとく大音に。賴まう賴まうと呼聲きこゆ。折しも大雨なるに。山は猶雪深く。物のあやも見えわかぬを。鈴木七郎と云ふ人。彼聲を尋ねて。釋迦堂の庭に出て見るに。堂の箱棟に羽形なりの異形の者立居て。恐ろしや下して給はれといふ。七郎言葉をかけて。兵左衛門にてはなきやと問へば。然也と云ふ。能々見るに翅と見えしは。破傘披きかけたるなりかくて人々より集り。四郎兵衛といふ働の者。棟に上りて。迎ひに來れりと云へば。兵左衛門忽に無性になり。持たる傘を捨たり。爰に四郎兵衛は。兵左衛門を背おひ。帶にてくゝり。腹ばひになりて下りける。三日ありて本性になれる後に問へば。七つ時と覺しき比。何處ともなく。名を呼けるゆゑ。外に出るに玄關の前に。小法師一人。黑衣に短きくゝり袴を著して。兵左衛門とよぶ。彼處に至れば。又一人顏赤くて黑髮を亂し。引ずるばかりに見えて。裝束を著し居て。玄關の屋根へ上るべしと云へる故に。主人ある身なれば行がたしと。脇指に手を懸むとせしに。彼異人ども奪ひとりて。投付たる其時に。鞘碎け。身は鐺鈎のごとくなれり。

今思ふに。兵左衛門がいひ分。甚理なるを。天狗の所爲いたく不當なり。然るは掛まくも畏き天皇に代り奉らして。天の下の政まをし給ふ。征夷大將軍の台命を蒙りて。此普請の奉行たる人に。其事にて仕ふる人は。卽ち公武の御用を勤むる人にて。其帶する兩刀。やがて其士の面目たる物なれば。人々私の物には非ず。然るを天狗慢りに。その魅術を以て。斯る無道のわざは爲せり。凡て世の帶刀する徒に。その帶刀する所以の本を思はずて。身の飾或は人恐しなどの如く心得たるが多かり。能く其帶刀する所以を知りて帶せむに。天狗界と云へど。是はた天皇のしらす國内の幽界なれば。天狗らいかで然る不當を働くべき。兵左衛門實體者とは云へど。此旨を知らざりけむ故に。天狗のさる無道に逢ひたりけむかし。

下帶を。取捨よと云ふを。此は免し給へと云ふに。是非に捨べしといふ。此をとれば。彼異人是を杖にかくると見えしが。忽に三つに切れたり。然して玄關の屋根へ引上て。此方の申し分を背く由云ひて。杖にて散々に打擲しける時に。長一丈計りと覺しき高僧の。紅衣を著したるが來て。叱とゞめて。何やらむ密語くと見えし。其時は三四間も隔て見えけるが。六人ばかり有しと覺ゆ。かくて異人たち。我と伴ひ行べしと云ふ。背きては惡かりなむと思ひ。差圖に從ひければ。是に乘るべしとて。丸き盆のごとき物を出せり。是に乘ければ。彼の小法師。兵左衛門が肩に兩手をかけ。下へ押つけられしと覺えけるが。其儘地を離れ。虛空へ高く上りける。

この謂ゆる高僧は。卽ち延暦寺の開山。傳教大師最澄と聞えたり。其由は下の評論に云ふを見て知るべし。また丸盆の如き物に乘せて。伴ひたりと云ふこと。此は叡山天狗の。凡人を乘蹻せしむる術と聞えたり。神仙に種々の乘蹻術あるに準へて思へば。叡山天狗に。かゝる乘蹻術あらむことも。疑ふべきに非ず。

然らば秋葉山へ行くべしと。虛空を飛行し。行方も知らず。海の上を通りける。餘りに恐ろしく思ふ所に。彼高僧出て水不能漂と云へば。恐るべからずと示せる故。眼を塞ぎ通りけれど。海も其儘見えたり。さて秋葉山と覺えて。山上に至り見るに。十丈計り

深き谷底に火炎上る。異人云ひけるは。汝此谷ぶべしと有れども。此火炎の內に落なば。燒死ぬべしと恐惑ふ折しも。高僧出て。火不能燒と云へば。恐るべからずと示せり。眼をふさぎ飛ければ。五六疊計りの平かなる。岩の上に立止りぬ。

此文に據りて攷ふるに。水不能漂。火不能燒ともに。法華經の文にて。傳教の始めて立たる。天台宗旨の要語なれば。かく教へたりと聞えたり。偖かくの如く。人の恐るべき事を。强て爲さしめて。人の心を引見ること。神仙もする事なるが。其は深き由ある事なるを。天狗は殊にそを。自の樂みと爲たる事。その例いと多かり。

彼異人も此所にて暫く休み。また妙義山。彦山。鹿島などへ行き。其外何國ともなく。諸方見物致せしなり。此の時兵左衞門思ふやうは。既に十日餘經ぬらむと思ひ。何卒暇給れかしと云ふ。

兵左衞門が天狗に誘はれたる間は。一日一夜なり大かた幽界に伴はれたる。多くの日數をも。しばしの間なりと思ふ事なるに。十日餘を經たりと思へるは。甚いぶかしき事なり。仍て思ふに。神仙の幽界に入りたるは。久しき年月をも短しとし。妖魅の界に伴はれたるは。暫時の間をも。長しと思へるにや。此は猶考ふべし。

時に白髮の老人出來り。然らば金銀を出すべしとて。大判。小判。一歩。小間銀。山もりに臺に載せ。此の金銀何程遣ひても。絶ることは無き由にて。給はる時に。貴僧の云ひけるは。其金を受取らば。其方二人の伯母の命。一年づゝ縮るべしと云ふ。兵左衞門申すは。有がたくは候へども。伯母の命縮まる事歎かはしければ。斷り申渡しとぞ云ひける。

此白髮の老人も。貴僧の眷屬なる事は。云ふも更なり。さて人間にて用ふる金銀は。大かた用ひざる事と聞ゆるに此天狗界には其定めなきにや。斯ばかり多くの金銀を。與へむと云ひしこと。是また不審しき事なりけり。

異人又云けるは。其方奇特なる者なり。然らば一生安穩に暮す樣なる。祕密の藥法行法を傳授すべし。其藥種の內一味は。當山より外になし。調合の節登山致さば。必是を授くべしとて。藥法書付給はりける。此事必人に知らすべからず。先三年の內は。身

心清淨にして。別て女の不淨を堅く愼み。行法を懈怠有るべからず。三年過て後に。妻の語らひ有るは苦からず。然し藥調合の節は。行法堅く守るべし。汝正直なる故に。是を傳ふと示されける。偖其方をかく誡むる事は。總(すべ)ての人ども心惡しく。山を麁末に致し。あしき心入の諸人に見せしめの爲なり。歸る後に。此趣を諸人へ傳ふべし。最(も)はや歸し申すべしとて。丑の刻ばかりと覺しき比。高山の峯におろさるゝ如く覺しが。本堂の椽なりけり。其後は彼の異人たちの行方しらず。時に先の貴僧大音にて呼はる聲。山河にひゞくばかりに覺えける。其時兵左衛門。かく吾をたすけ救はせ給ふ御僧は。何人にて渡らせ給ふやと尋しかば。我は此山に九百年來住ぞやと云れけり。夫より働の四郎兵衛と云者來て。某を捕へしと覺ゆるに。彼の貴僧も行方知らず。吾も夢中に成りぬとぞ語りける。と其時の事ども。親しく見聞し者の記したる。比叡山天狗之沙汰ちふ書に見へたり。此は近頃の事なれど。いと正しき筆記と所思(おぼゆ)る故に引出つ。

上件の事ども熟(つらつら)攷(かむが)ふるに。彼のタノマウ〳〵と呼たるは。兵左衛門には非ず。謂ゆる貴僧の呼たる聲(こゑ)なること明かなり。偖我は此山に九(きう)百年來住ぞや。と云へる由なるに依りて。此は疑なく傳教也とは知られたり。然るは最澄法師の寂せるは。嵯峨天皇の弘仁十三年にて。元文五年に至り。九百十九年なれば。其年數いと能く符(あ)へり。其は佛法出世間の說。極樂往生の說ともに。其道の妄誕にて。其道に首張せる。謂ゆる高僧祖師たるも。出世間は更なり。往生すと言ふ。極樂世界の說も妄なる故に。死しての往方(ゆくへ)は。即ち此世間の幽界にて。佛祖さへに。其靈(たま)の行方(ゆくへ)は。常在靈鷲山なれば。況(まし)てその末派の僧徒は。其在世中に。甚(いた)く執(しふ)せる山々に常在して。天狗と成りて在ける事較著(いちしろ)し。然れば傳教の叡山に常在する事。云ふも更也。偖是(さて)より三年すぎて。兵左衛門其行を亂(みだ)し。茶屋女としか〳〵の事ありて。非業の死を遂たりと云へば。謂ゆる心中と云ふ。はかなき死を爲たりと聞ゆ。哀れ兵左衛門は。天狗にさる妙法の傳を受ざらましかば。元よりの貧浪士にて。其直情正行を。世のかぎり遂げにけむを。中々に妙法の

傳を受て。欲する儘に。黄金を得けむ故に。其行ひを亂して。然る非業の死をば遂たるなり。抑始め兵左衛門を。天狗の誘ひ出せる事は。元來兵左衛門に。過失ある故には非ず。餘人らが不當の行ひあるを。諫めざるが惜しとて。誘ひ出して打擲せるが。不當なるは更にも云はず。彼高僧の叱りに。其過ちを悔たる趣にて。後に兵左衛門が心を。慰めむとにや。伴なひて。諸國の名山ども見せめぐれるが。猶氣の毒にや思ひけむ。呪文をも敎へ。また用ふる時は。伯母の命を縮むべき。金銀を與へむとし。其れをも辭めば。終には身を非業に亡ぼす。基緣となれる藥法を與へて。盛壯の男子に。不婬の戒を三年禁じ。そを禁じ敢ずとて。然る非業に死しめたるは。何に天狗の枉わざならずや。なほ此事委くは。本書に就て見るべし。○また沙石集を見れば。洛陽の或女。靈病ありければ。種種に祈りけれども。有驗の者をも欺き笑ければ。力及ばで打捨けり。彼が云く。佛法は。眞實の道心ありてこそ。生死を離れ悟を開く事なれ。何に學し行ずれども。名利執著の心ありて。實の菩提心なければ。魔道を出ず。我は一代の聖敎。一ッも不審なく知れり。然るに道心なくして。今に出離せず。僅に紙一重隔りて覺ゆるなり。我は天台山の。立ち始りし時の者なりと語る。さて當世の智者と聞ゆる人の事を問へば。皆云ひ甲斐なく云へりと有り。是も彼の最澄法師の靈と聞えたり。

次に空海僧都。これも行基最澄が妄說に效ひ。廣太の希欲に高野山を竊して。其山の神を誣たる妄語せるが魔事なるに。樂學世論巧述文詞て。諸佛を讃する。摩訶毘盧舍那といふ佛語に。天竺は更なり。漢籍にも曾て見えざる。大日佛と云ふ佛名を僞作し翻て。摩訶毘盧遮那經を。大日經と譯し。其本緣に。畏くも天照大御神を。己が僞名の大日佛と。人の思ひ紛ふべき幻說を巧み出し。

此事も巫學談弊と。印度藏志とに委く論へり。中にも嵯峨天皇の書せ給へる。金字心經の奧に書たる記に。詣神舍叢奉誦此祕鍵。昔予陪鷲峰說法之莚親聞此深文。豈不達其儀と書るなどは餘なる妄り語なり。

殊に名聞利養の爲に。魔事妄言は更にも言はず。我

慢勝佗の悪念深く、修圓法師を呪殺し。

今昔物語集に。嵯峨天皇の御代に、弘法大師僧都の位にて。天皇の護持僧なりき。また山階寺の修圓僧都といふ人も。護持僧にて。共に候ひけり。此二人の僧都共に。止む事なき人にて。天皇分き思召す事無りけり。然るに修圓僧都。天皇の御前に候ふ間。大きなる生栗あり、天皇此を煑しめて。持参れと仰せ給へば、人取て行くを見て、僧都云はく。人間の火をもて煑ずとも。法力をもて煑候ひなむと云ふ。天皇聞給ひて、極めて貴き事なり。速に煑るべしとて。塗たる物の蓋に栗を入れて。僧都の前に置つ。僧都然れば。試に煑候はむとて。加持するに。甚吉く煑られたり。天皇此を御覧じて。限なく貴びて。即ち聞召すに。其味ひ佗に異なり。かく爲ること度々に成りぬ。其後大師参りけるに。天皇此事を語らせ給へば、大師聞て申し給ふは、此事實に貴し。而るに己れ候はむ時に。彼を煑しめ給ふべし。隠れて試候はむと隠れ居ぬ。こゝに僧都を召て。例の如く栗を煑しめ給へば。僧都前に置て加持するに此度は煑られず。僧都力を出して。返々加持すと云へども。前の如く煑らるゝ事なし。其時に僧都奇異の思ひを成して、此は何なる事ぞと思ふ程に、大師傍より出たり。僧都此れを見て。されば此人の押へけるなりと知りて。嫉妬の心忽に發りて立ぬ。其後は二人の僧都、極めて中悪く成て。互に死ね〳〵と呪咀しけり。其時に大師謀を成て。弟子どもを市に遣りて。葬送の物の具共を買しめ。空海僧都は、早く失給へれば。葬送の具を買ふなりと。敎へて云はしむ。修圓僧都の弟子是を聞て。喜びて走り行て。師の僧都に此由を告ぐ。僧都此れを聞て。慥に聞つやと問ふに。弟子慥に承りて告申すなりと答ふ。僧都これ佗に非ず、我が呪咀しつる祈の叶ひぬる也と思ひて、其祈の法を結願しつ。其時に大師人をもて。竊に修圓僧都の許に。其祈の法の結願しつやと問しむるに。今朝結願しぬる由をいふ。其時大師切りに切りて。其祈りの法を行ひければ。修圓僧都俄に失にけり。大師其後は心安くなむ思はれけると有り。此事古書ども彼此に見えたるが。何れも守敏僧都とあり、修圓とあるは、今昔物語集の

みなり。按ふに一つは名。一つは號にぞ有けむ。法師には然る倫いと多かり。さて二人の僧都のわざ。共に幻術なる事は云ふも更なるが。空海僧都は。たゞに幻術の力の勝れたるにぞ有ける。惑ふべからず。

死後にもなほ邪執を留めて。在世中の妄說を示せる。摠て魔道の所爲なり。

然るは古事談に。六波羅の大政入道。安藝國司たる時。重佛の功に。高野の大塔を造られけるに。材木を手づから持れけり。其時香染を著たる僧出來て云はく。日本國の大日如來は。伊勢大神宮と。安藝の嚴島なり。大神宮はあまり幽玄なり。汝たま〳〵國司となる。早く嚴島に奉仕すべしと云ふ。守これを奇み。貴房をば誰とか申すと問ければ。奥の院の阿闍利となむ申すと云て。搔き消やうに失にけり。此僧をば國司の外。餘人此を見ずとあり。また奥の院へ詣ける時。大師御戶を開き袖を差出させ給ふ。此に依て五箇所を寄進せらる。と云ふ事も見えたり。淸盛は此故にや。弘法を深く信じたりと通えて。源義平の靈の雷鳴して祟りけるに。弘法眞筆の心經を守に懸たりしを。恐しさの餘りに頸に挂ながら。打振々々したりと。平治物語に見えたり。死後にもかく我執に。在世中の妄說を云へり。大神宮は更なり。嚴島神も豈大日ならむや。また諸書に。空海勅を受て。朱雀門の額を書たるを。後に小野道風朝臣其額を見て。朱雀門は米雀門に。略頌に作りける程に。やがて中風して手わなゝき。手跡も異やうに成にけりと記して。後人の甚く恐たる由見ゆれど。是もし實ならば。我執ならざらめや。俗人は然も有なむ。豈これ出家の本意ならむや。出家といふに三種ありて。一つに親を辭して世俗の家を出で。二つには道を悟りて五蘊家を出。三つには果を證して三界の家を出と云ふに。など此現世の事に執を殘して。纔に此境をさへに出ざるらむ。

次に圓仁法師は。其師最澄が志をうけて。妄說を弘めて。首楞嚴院を建立し。法華經を書たる時に。住吉神現はれ。彼經を守護すと宣へりと云ひ。また諸神替る〴〵彼經を守護せむと。誓へる由を詐りて。三十番神といふ事を妄作し立たる。是名聞我慢の魔

業なり。

其は古今著聞集に。慈覺大師如法經書ける時。白髮の老翁杖に携がりて。山によぢ上りけるが。あな苦し。內裡の守護と云ひ。如法經の守護といひ。年は高く成て。苦く候ぞと宣ひけり。誰か御渡り候ぞと尋ぬれば。住吉神なりとぞ名告けると見え今昔物語集に。慈覺大師は。傳敎大師の入室寫瓶の弟子として。比叡山を受傳へ。佛法興隆の志し殊に深し而れば別に首楞嚴院を建立し。中堂を立て。觀音不動毘沙門を安置し。摠持院を起て。宋より將來の舍利を藏めて。舍利會を行ひ。常行堂を建て。不斷念佛を修す。是れ阿彌陀佛を讚する音なり。引聲と云ふ是なり。また山に大きなる椙木有り。其木の空に住して。如法に精心して法華經を書れける。書畢て此經を安置す。如法經此より始まる。其時に此朝の諸の止事なき神。みな誓を起し番を結びて。此經を守り奉らむと。誓へりと有り。諸神のかく誓ひ給へりと云ふこと。元この法師の言出ずは誰か知らむ。釋書に。此時書たる經を。小塔に藏めて。一菴におく。如法堂と名づく。今の首楞嚴院なり。法華經を如法經と云こと。是より始まる由云へりまた引聲の事も。古事談に。慈覺大師は。音聲不足なりしかば。尺八を以て。引聲の阿彌陀經を吹れけり。成就如是功至莊嚴といふ處を吹得ざりける。常行堂の辰巳の松扉にて。吹あつかひけるを。空中に聲ありて。ヤ音を加へよと云へり。是より如是ヤと。ヤの音を加へたりと有り。功德は聲の善惡に依るまじき物をや。

其建たる院の名に負ふ。首楞嚴經にも。定中見㆓色陰銷受陰明白㆒自謂㆓已足㆒。忽有㆓我慢起㆒。疑㆓誤衆生㆒。此則有㆓大我慢魔㆒。入㆓其心腑㆒とあり。椙室の定中に。己に自足れりと謂へる我慢心より。衆生を疑誤せる。妄說を吐たりけむ。

諸神の法華經を。守護せむと宣へりと云ふ妄說は。有るが中に最惜き言なり。なほ巫學談弊に言ふを見るべし。

次に智證とは。圓珍法師が事なり。此は祖業を受て。比叡山を持たるに。猶喜足を知らず。別に我が門徒を立むと。三井寺を再興して。三尾神を誣ひて。佛法を守る神とし。

其は今昔物語。元亨釋書。古今著聞集などに。智證大師我が門徒を。別に立てむと思ふ心有りて。我が門徒の佛法を。傳へ置べき所か有ると。所々に求めて。新羅明神と共に。近江國志賀へ行給ふに。昔大友皇子の立たる寺あり。寺邊に荒たる一房あり。年老たる僧一人居たり。其名を敎待といふ。見れば鯽の鱗骨などを食ひ散して。臭こと限なし。僧の體を見るに。貴く見ゆれば。定めて樣有らむと思ひて語らふに。老僧云く。我れ此處に住て。百六十年を經たり。此寺は彌勒の出世まで。持べき寺なれども。持べき人無りつるに。幸に師の來り給へば。永く讓り奉るといふ。新羅明神は。寺の北野に止まり。無量の眷屬圍繞すれども。佗人は此を知らず。其時に輿に乘たる人。百千の眷屬を引率して來り向ひ。明神に飮食を奉り饗して。大師に告て云く。我は此寺の佛法を守らむと誓へる神なり。今聖人此寺を傳へ得て。佛法を弘め給ふべければ。今より深く大師を憑まむと。老僧と共に明神の處に至り。互に喜悅す。然るに老僧と輿に乘たる人と。忽に見えず。明神に誰人にて御すと問ふに。老僧は是彌勒如來。佛法を護持せむ爲に。此寺に住給ふ。輿に乘たる人は。三尾明神に御すと答へ給ふ。然ればこそ異人には非ずと見つるとて。老僧の房に至れば。始は臭かりつるに。此度は極めて馥し。前に鯽の鱗骨と見つるは。蓮の花莖根葉を煮食ひたる也けり。其後諸弟子を引具して。此寺に佛法を弘めて今に盛なり。三井寺と云ふは。天智天武持統三代の天皇の。生れ給へる時に。産湯の水を汲たる井の有れば。御井寺と云ひしを。大師改めて三井寺といふ。彌勒三會の曉を繼しむる故なり。圓城寺と云ふは是なりと云へり。新羅明神と云ふは。前に渡唐したる歸りに。新羅國より伴ひ來れる蕃神なれば。佛法の守護は然も有べく。彌勒菩薩の出現せりと云ふも。實には有名無實の物なれど。釋魔の變現する事珍しからねば。然も有けむ。唯三尾神の出現して。佛法を守らむと誓へりと云ふ事は。例の妄語なり。若し實に出現せるならば。其また釋魔の變現なるを。誠の彌勒。眞の三尾神と欺かれたるにて。此はかの菩提心を忘失して善根を修し。名聞の爲に。己

が門徒を別に立てむと思へる我慢心よりぞ起りにける。此僧の勝佗の名聞心より。三井寺を立て。其一派を遺せるが故に。慈覺の徒。智證の徒と。天台二派に別れて。其徒の互に。我慢勝佗の邪見を發して和合せず。世を騷亂せしめ。天皇をも蔑如し奉れる事。次々記すを見て知るべし。後に此僧の謚號の事を。僉議ありしとき。主上の御夢に。別名を求らるべからず。大通智勝れたれば。智證と付べき也と誨し白せるよし。古事談三卷などに見えたるは。旣に天狗と成しかばなり。

是より後の法師ども。上なる四大師の妄說を根基として。彌次々に。神を佛法に引率る丶。妄說を吐き散せる事は。今盡く記すに遑あらず。取總て言はゞ。本地垂跡の說は。行基菩薩が其種を殖初たるを。四大師の其を繁茂せしめ弘通せる也。實に皇神の道の大妖魔に非ずや。是を以て神社考に。沙門之有二慢心一者。多入二天狗之中一。傳敎弘法慈覺智證等是也。とは言はれけむ。

然れば神道に志有らむ人は。これを能く辨へずはあるべからず。神社考に夫本朝者神國也。中世佛氏移二彼西天之法一。變二吾東域之俗一。神道漸廢。而以二其異端一。離レ我而難レ立。故設二左道之說一曰。其本地佛而垂跡神也。時之王公大人信伏不レ悟。遂至レ令二神社佛寺混雜而不一レ疑。巫祝沙門同住而共居。嗚呼神在而如レ亡。神如爲レ神其奈何哉。讀レ書知レ理之人可二少覺一也。非下爲二庸人一而言上レ之。と言れしを熟思ふべし。四大師已に右の如く。魔事魔業を脫れざれば。其門葉末派の法師たち魔道に墮ざるは一人も有るまじく覺ゆ。

なほ神社考に。尊意與二群鳥一同翔二於橫川之杉一澄圓僧が志評論に。釋書の尊意傳を引て。釋尊意姓丹生氏。十七落髮。修練之後任二延曆寺座主一。天慶三年二月二十四日逝年七十五。瞑目之後。烏百餘集レ房悲鳴。見人不レ避。移レ時飛去。蓋生平分レ食施レ鳥。以レ木叩レ板群烏飛來矣。若因レ是爲レ群烏哉。分レ食施レ鳥。最沙門檀施也。何得二群烏之業一哉と云へれど。羅山先生の意は。尊意を烏の業を得たりとの事には非ず。群鳥と共に。橫川の杉に翔りと云れたるは。正しく古書に。其靈の群烏と共に天狗と化りて。翔りたる事の有けむを見て記

されけむを。釋書には其事を隱して。只に爲の集れる事のみを記して。其れやがて德行を感慕して。集へる事に執成たる物なるべし。予は未先生の見られし書を見ざれども。尊意を後に。妙義權現と崇めたる。其緣起を見れば。古より釋子の魔道に墮たる倫いと多かるを。我いかで其魔道に入りて。其倫を降伏して。正道に赴けむと誓ひて其黨に入たる由見えたり。是極めて古き據有るべければ。羅山先生は其を見て言はれしならむ。

慈惠著㆓甲冑㆒。攻㆓三井寺㆒燒㆓千手院㆒。

元亨釋書を始め。諸書を考ふるに。圓融院天皇の御世。天元四年十二月。餘慶法師を。法性寺の座主に補せらる。此は智證の徒なり爰に慈覺の徒奏云く。貞信公始めて。法性寺を建て。辨日法師を座主に任せし以來。九代相繼て。慈覺の門これに當る。然るに今第十代に。智證の門人をもて加へば。慈覺の徒望を失ふべしといふ。敕答に檀家に告よと宣へば。慈覺の徒百六十人。檀家關白賴忠公の家に向て喧き訴へ。しばしば爭論あり。帝聞食して。法性寺の座主始より慈覺の一門に附けず。智行兼備の者を撰びて任したるが。適々慈覺の門に入多かりし故に。相次て此を領せり。今餘慶また智行の譽ありて任ず。何ぞ必しも。慈覺の一門を守らむや。況や喧爭德を敗り。僧侶の事に非ずと怒坐して。百六十人の封職を息む。茲より兩門和せず。恨み爭ひ日に滋し。智證の徒叡山を出て別院に居し。餘慶は門人を率ゐて。觀音院に住す。その徒弟勝算。觀修。穆算など百餘人。なほ山上千手院に在り。此時慈惠僧正良源は。天台座主にて。元より是れ慈覺の徒なれば。密に謀りて。衆徒をして千手院を燒しめむとす。此事朝に聞えしかば。敕を下して云く。良源千手院を燒て。餘慶穆算等を殺さむと欲する陰謀匿し難し。早く其機を止めよと。良源表を上りて陳ず。是より後。一條院天皇の永祚元年九月。餘慶僧正を。延暦寺の座主に補せらる。慈覺の徒奏して云く。智證の門徒座主に補せられば。講堂を開べからずと。帝は更なり。時の關白兼家公も。また過詔と思食けり。同帝の正暦四年觀音院成算の徒。叡山衆と谷あり。慈覺の徒千手院を燒き。房舍を壞ること四十餘宇

なり。兩門相爭ふ。慈覺の徒。智證の徒一千人を擯けて。山を出せりとあり。此時良源死して。既に九年の後なれど。彼天元四年の。存生なりし時に。千手院を燒むと陰謀しつるを。敕に依りて止られしかど。其宿執勝佗の惡念なほ止ずて。此時其靈の現はれて。徒に千手院を燒しめたる事の。古書に有りしを見て言れし成べし。今昔物語集に。良源僧正成靈來觀音院伏餘慶僧正語といふ條あり。今本に本文は闕たれど。前後に天狗の事を記せる間に。此題號あるを思ふに。此は決めて天元四年の一件の。宿執に依りて來つる事と覺ゆ。羅山先生は。此條の闕ざる本を見て言れしならむ。猶下に記す祇園を。天台の末寺とせる一條を見ても。良源の宿執深きことは炳焉し。扨此後はますます執を引て。比叡山と三井寺と和せず。動もすれば闘爭を發して世を躁がし。宸襟をもなやめ奉り。三井寺を燒たる事も數々ありし中に。古事談に。永保元年六月九日。叡山の僧徒の爲に。三井寺燒る。其日記云。御影十五所。堂院七十九所。塔三基。鐘樓六所。經藏十五所。神社四所。僧坊六百廿一所。舍屋一千四百九十三宇。廣考天竺震旦本朝佛法興廢未有如此破壞。智證大師入滅以後。歷二百九十一年有此災云々と有り。互に天狗となりての爭ひ也かし。また同書に。西京の良眞僧正のとき。三井寺を燒たりけるが。僧房許を燒て。衆徒等歸山したりければ。座主これを聞て。堂舍經藏を燒たらばこそ甲斐あらめ。僧房許は詮なき事也と云はれければ。翌日また發向して。金堂より始め。堂宇經藏みな燒拂けるとも見ゆ。代々の座主の。我慢勝佗の執深きこと。是をもて知るべし。また此に可笑き事あり。此も同書に。保安二年閏五月三日。園城寺燒失のころ。或寺の僧の夢想に。褐冠を著たる人あり。誰人に御坐すと問へば答へ云く。我は新羅明神の眷屬なり。此寺を守護せむ爲に經廻すといふ。夢中に嘲りて云はく。佛像經論堂舍僧房悉く灰燼となり畢ぬ。何物を守護せらるべきや。無益の守護かと各々行分るゝ後。また直衣を著たる者老の人出來る。容體を見るに直人に非ず。其眉長く垂れて口に及び。鬢髮皓白なり。件人云く。汝が言太以て子細を知らず。

本より此寺を守護の素意。さらに堂舍僧房を護らず。唯出離生死の志を守護す。如此き患難のこと。僧徒多く道心を發し修學に倦ず。我此人を守る也と云へり。此事園城寺の別當大僧都覺基の語り申す所なりと有り。此は覺基が餘りに度々。其寺の燒れたるに。新羅明神が守護神とて在ながら。云ふ甲斐なき事を思ひて。造言せるか。もしも此夢誠ならば。彼僧の難詰につまりて。さる負惜みの妄言せるかの二つを出ず。いかにをかしき事ならずや。

覺鑁得造作魔心營傳法院。高野衆徒忿而鼓譟攻鑁居。不見鑁而見不動。衆徒曰是必鑁也。飛石中不動。時血流。衆徒曰非不動是覺鑁也。其後多武峯方等法師狂言曰。吾是覺鑁也。怒目睨人。取火箸燒爐中手自弄之曰。我始作即身成佛之印。是兩部祕奧之印明也。

元亨釋書を始め諸書を考ふるに。覺鑁は肥前國人にて平氏なり。此に記されし事は。多武峯に。方等法師といふ者あり。數月狂疾差ず。安部山の慶圓法師と云ふを迎へて加持せしむ。慶圓その房に入れば。方等目を怒して慶圓を瞰み。火箸を取て。爐中にて燒て手に弄ぶ。慶圓軟語懇誘して菩薩戒を授く。方等微笑して云く。我火箸を燒たる。師の心を試みむと欲してなり。然るに今師の誦戒を聞て。我か心已に降れり。慶圓云く爾は誰なるぞ。方等云く我は覺鑁なり。此方等我を誣て。即身成佛の印言は。覺鑁始めて作れりと。殊に知らず。彼印言は三圓相承の兩部祕奧の印明なり。我只この事を言はむと欲して。屢々方等に託たるなり。慶圓云く幸甚なり。今名德に逢ひて未聞を聞ことを得たりと。請談良久しく。方等か病すなはち痊たりと有り。羅山先生この事を言れしなり。

又和州堯信。爲天狗言而告慶圓曰。吾是中院僧都也。浮屠巫祝豈能降我哉。我心慢罵之擯斥之。我徒有神力者三百餘類。伺人死作嬈害。自古高僧碩師。臨終多遭魔撓。皆我之所爲也と有り。

此事も元亨釋書に。大和國に堯信と云者あり。狂疾を受く。加持する者あれば。慢罵擯斥す。其父安部山の慶圓を屈して救ひを乞ふ。慶圓彼に到れば。堯信恭敬しく禮を作して曰く。此ごろ陋しき

比丘。賤しき巫覡ら。聲を厲くして呼號する故に我慢罵をなす。今高德に値ふまた幸なり。願はくは左右を退けよ。我が夙志を遂せむ。慶圓すなはち看病の者を去る。堯信云はく。我先の世に灌頂を欲して。遂ずして亡す。餘執竭ず生を鬼趣に受たり。而れども法力の感ずる所なほ神威あり。願はくは悲救を垂れて。密灌を授與せよ。慶圓云く公は何人ぞ。堯信憮無として恥る色あり。慶圓いはく已に授與を乞ふに。豈名を忌むや。堯信良久しくして云く。我は中院僧都某なり。慶圓すなはち灌頂を授く。堯信歡喜合掌して云はく。宿望已に足れり。久く此に居べからず。何を以て此恩を酬いむ。慶圓云く。我世心已に灰ぬる餘は。何をか言はむ。而れども此に一つあり。古へより碩師宿德。臨終に魔撓に遭ふ者多し。神威あらば意せよ。堯信いはく。我が徒神力の者三百餘人あり。人の死を伺ひて嬈害を作す。われ誡めば敢て爲ざらむと。言已りて。疾すなはち愈たりと有り。中院僧都某とあるは。名を憚りて記ざるなり。十訓抄十卷に。遍照と云ふは。左馬頭顯定の子にて。

中院僧正といふと有り。此人にや猶攷ふべし。

古今妖魅考二之巻

平篤胤輯考

門人　山城國　江戸爲之　同校
　　　常陸國　竹來道彥
　　　武藏國　森田昌成

上の件記されたる外に。なほ數の僧名を擧げられたるが。其は姑く置て。早く寶物集にも。慈惠僧正の行業の高かりしも。延暦寺に執を止めて。金色の天狗と成れりと見え。

此僧の行業の高かりし事ども。諸書に見えたる中に。今鏡九巻。また十訓抄などに。大內にて五壇の御修法勤められけるに。慈惠は不動尊となり。寛朝は降三世と現じて。少しも本尊に替らざりけり。圓融院正しく此事を御覽せられけると見え。また著聞集。十訓抄などに。雅縁阿闍梨といふ人。慈惠僧正を。濫行肉食の人たる由云ひけるに。慈惠深く憤りて。三寶に祈りしかば。雅縁阿闍梨三塔を走り回りて。淨行持律の人に。空言を申したる報いとて。狂ひ歩行けるとも有り。

下に擧る雲景が未來記に。愛宕山に集ひて。世を亂さむと計れる釋魔の中に。此の僧も交りて在り。其は我慢勝他の宿執を引きて成れること。祇園を天台の末寺と成したる一事を以ても辨ふべし。

祇園を天台の末寺とせる事は。今昔物語集に。祇園はもと山階寺の末寺にて有りけるに。比叡山の末寺と成れり。其故は。比叡山の末寺に。蓮花寺といふ寺あり。然るに祇園の別當に。良算といふ僧有けり。勢德ありて世間叶ひたる僧なり。彼蓮花寺の堂の前に。紅葉の有けるが。十月の比。色の微妙ければ。良算そを折取りに遣りけるを。蓮花寺の住僧制して云はく。祇園の別當は。德人に坐せども。何でか天台末寺の內なる木をば。心に任せて按內もなく折らるべきぞ。極めたる非常の事なりと。良算が使かく制せられて。折らず返りて。此くなむ云へば。良算大きに嗔りて。此云ふならば。其木を皆伐りて來れと云ひて。從者共を出し立てゝ遣りける。然るに蓮花寺の住僧は。定めて良算が從者を遣せて。此木をば伐らせむずらむと悟りて。良算が從者共の來ざる前に。住僧みづから其紅葉の木を。根際より伐臥せてけり。然

れば良算が使行て見るに。木を伐てければ。返りて良算に其由を云ひければ。彌々嗔けり。此曲横川の慈惠僧正。天台座主として。殿下の御修法して。法性寺に在りけるに。蓮花寺の僧木を伐るままに。法性寺に急ぎ參りて。此由を座主に申しければ。其時座主に肩を並ぶる人無かりければ。大きに嗔りて良算を召しに遣りけるに。良算我は山階寺の末寺の司なり。何の故ぞ天台座主。我を心に任せて召すべきぞと放言して。參らざりければ。座主彌々嗔りて。山の所司を呼下して。其をもて祇園の神人ら代人等の。延暦寺に寄する寄文を書儲けて。其れに判を加へよと押責めければ。神人ら責られ侘て。判を加へてけり。其後座主今に於ては。祇園は天台山の末寺なり。早く別當良算を追却すべしと云て追せけるに。良算敢て事ともせず。□公正。平致頼といふ兵の郎等どもを雇ひ寄せて。楯を儲けて。軍を調へて待ける間に。座主此由を聞て彌々嗔りて。西塔の平南坊といふ處に住ける。容荷と云ける僧は。極めたる武藝第一の者なり。また彼致頼が弟に。入禪といふ僧在けり。

極めたる兵なり。此二人を祇園に遣して。良算を退しむるに。此二人彼處に至りて。良算が儲けたる軍兵に向て云く。汝ら濫りに箭を放ちて惡事を致さば。後の爲に惡しかりなむと誘けるに。良算が雇へる致頼が郎等ども。入禪を見て。早う山の禪師殿の御するにこそ有りけれと云ひて。後ろの山に逃去にければ。心に任せて。良算を追却してけり。然ば容荷を別當に成して執行させけるに。其後山階寺の大衆發りて。公家に訴へ申すやう。祇園は往古より山階寺の末寺なり。何でか恣に延暦寺に押取られむ。速に本の如く。山階寺の末寺と爲べき由を仰せ下さるべしと。度々訴申ける程に。御裁許の遲くなりければ。山階寺の若き大衆京上して。勸學院に著きけり。公聞食し驚きて。御沙汰有るべかりけるに。其前に彼座主慈惠僧正失せにけり。然て其沙汰明日有べしと既に仰せ下されけるに。山階寺の大衆は。皆勸學院に在りけるに。其寺の中算は。宗と此事を沙汰すべき者にて有けるに。勸學院近き小家に宿りて居たりけるに。其夕さり方。前に弟子共など數居たるを。俄

に中算只今此に人來らむとす。某達しばらく外に出よと云ひければ。弟子共みな去りける程に。人外より入來るとも見えぬに。中算人と物語する音の聞えければ。弟子ども怪しと思ひける程に。暫許ありて。中算弟子どもを呼びければ。皆出來りけるに。中算此に山の慈惠僧正の御たりつると云ひければ。弟子ども此を聞て。此は何に宣ふ事ぞ。慈惠僧正は早う失せにし人をばと思ひけれども。怖しくて物も云ずて止みにけり。然て明くる日此の沙汰有けるに。中算風發りたりと云て。沙汰の庭に出ざりければ。山階寺の方に。指せる由沙汰する人無かりけるに依て。其御裁許切れざりければ。大衆ども返下などして。遂に祇園は。此叡山の末寺に成畢たる也けり。由なき良算が惡事より發る事なれども。此を思ふに。慈惠僧正の強く執せる事にこそ有ぬれ。失せたりけれども。其靈の中算に乞請けゝれば。中算は假に風發りたりとて。出ざりけるにこそ。中算出て沙汰せましかば。何かは有らまし。然れば其を知て。慈惠僧正の靈も。行て乞請けたるにこそ。中算は只今には非ざりけりと。弟子共も此を聞く人も。皆知りにけりと有り。

陸奥國の女が。法華經を知らず歎きけるを。良源の白骨の顏の舌ばかり活たるが。女の家の天井に來りて敎へたるも。我執の魔事なり。

そは西行法師が。撰集抄に。陸奥國平泉郡栁といふ里に。坂芝山と云ふ山あり。其邊の河端に。高さ一丈餘なる石塔を立たり。針貫しまはし。草拂などしたり。此は何なる事にかと尋ぬれば。中ごろ此里に猛將あり。其女なる者。法華經を讀たけれと。敎ふべき者なしとて。朝夕歎きて過きけるに。或時天井の上に聲ありて云ふやう。汝經を求めて前におけ。我此に居て敎へむと聞ゆ。怪しく思ひながら。經を得て前に置きけるに。天井の上にて。ゆゝしき聲にて敎へけり。八日と云にみな習終りぬ。此女いかなる態ならむと。最怪しく覺えて。天井を見るに。白くされ苔生たる首に。舌の活たる人の如くなる有り。此白骨の敎へたるにこそと思驚きて。此は誰にてか御らむと。強に尋ぬるとき。我れはこれ延暦寺の昔の住侶。慈惠大

師の首なり。汝が志を感じて來て教たり。いそぎ我を坂芝山に送れと有りければ。哀れに忝きことに覺えて。泣々此山に納めて。此の如く塔婆などせるが。此頃までも山中に。貴き御經の音する折も侍り。さて此女は尼になりて。此山中に庵を結びて。思すまして在しが。此二十餘年さきに往生したり。其庵の形今にあり見よと云ふ。彼人と伴ひて見るに。口三間なる屋の形ばかり殘けりと有り。

此は良源法師のみならず。和漢の法師に。舌のみ死せずて。經を讀誦したる類はいと多かれど。一切の法に著せるを。法智魔と謂ふとある魔事なる物をや。序でに此方に此事の有しを倚記さば。古今著聞集の宿執篇に。壹睿といふ僧有けり。多年法華經に歸して修しける間。紀伊國宍背山に至りて宿しける夜に。其人は見えずして。法花經をよむ聲聞えけり。一部讀終りて經の聲止みぬ。怪く思ひて。朝に其程を見るに。年序經たる白骨あり。更に分散せずして。正體みな續きたり。其髑髏の中に舌あり。壹睿髑髏に向ひて。其因縁を尋ぬれば。舌答へて云はく。我はこれ叡山の僧。名をば圓善と云ひき。修行の間此山に至りて夭亡す。前生に法華經六萬部讀奉らむと願を起して。生分は既に終りにたり。計らざるに生を隔つと云へども。其願を誦滿せむが爲に。猶誦するなり。今年已に讀終りて。正に兜卒の內院に生ずべしと云ひけり。壹睿此事を聞いて。禮拜して去にけり。此くの如き例し多し。靈異記にも。熊野山。金峰山などに、誦經の髑髏有ける由見えたり。此等みな執の深き至りなりと見ゆ。

信に靈異記に。阿部天皇の御世に。紀伊國牟婁郡熊野村に。永興禪師といふ僧有けり。人其行を美めて。都より南なる國の人故に。南菩薩と稱ひき。此が許に來て仕へける僧の。山に入て行せむと云ひて。麻繩二十尋。水瓶一口を持ちて別れ去る。二年を過ぎて熊野村の人。熊野河上の山に至りて。樹を伐りて船を作りつゝ聞きけり法花經を讀音あり。月日を累ぬるに猶止まず。貴く覺えて山深く尋ぬるに見えず。還りて永興菩薩に云へば。菩薩怪しみ往て聞くに聲あり。尋求めて見れば一つの屍骨あり。麻繩をもて二つの足を繋ぎ。巖に懸り

身を投て死たり。其傍に水瓶あり。此をもて別れ去れる僧なる事を知り。悲哭して還る、三年を逕て山人告云く。讀經の音今に止まずと。菩薩また往て其骨を取らむと將て。髏髑を見れば。三年に至りて其舌腐ず。宛然として生有けり。また吉野金峰山に一禪師あり。峰に行て行道するに。往前に法花經、金剛般若經を讀む音あり。草の中を排開き見れば。一つの髑髏あり。久しく歷て日に曝たるに。其舌爛れず生著て有り。禪師それを淨處に取收めて。草を以て其上を葺覆ひ。共に經を讀て六時に行道す。禪師が法花經を讀むに從ひ。共に讀む故に。其舌を見れば。舌振動かすと有り。此永興禪師が事は。今昔物語集にも見えたり。そは靈異記を取れるなるべし。猶言はゞ。今昔物語集に。春朝持經者顯經驗語とある條に。今は昔春朝と云ふ持經者有けり。日夜に法花經を讀誦して。棲を不定して所々に流浪して。只法華經を讀誦し。心に人を哀みて。人の苦む事を見ては。我が苦みと思ひ。人の喜ぶ事を見ては。我が樂と思ふ。然る間。春朝遂に行き宿る棲无くして。一條の馬出の舍の下にして死にけり。髑髏は其邊に有て取り棄つる人无し。其後その渡の人夜聞くに。夜毎に法華經を誦する音有り。其邊の人等此を聞て。貴む事无限。然れども誰人の誦すると不知して。怪み思ふ間に。或聖人出來て。此髑髏を取て。深き山に持行て置けり。其後此經を誦する音絕ぬ。然れば其邊の人。此髑髏□□誦しけりと云ふ事を知にけり。春朝上人をば。只人に非ず權者也、とぞ其時の人云けると有るは。甚よく類たる事共なりかし。

靈異記に。右の事を記せる末に。諒知大乘不思議力。誦經積功驗德也。贊曰。貴哉受血肉身。常誦法華。得大乘驗。投身曝骨。而髑髏中著舌不爛。是聖不凡矣。と云へれども。悉く釋魔に率られたる宿執の爲す處にて。中にも兩足を繫ぎて身を投たるは。謂ふが如く殊に炳き。大乘の忌々しき驗なるを。是聖不凡と貴き事に云ひ思ふ。佛者の心ばかり。異しき物は無りけり。

然るは西行法師が撰集抄にも。慈惠大師のされ首の。經誦たる事を記せる末に。かゝる例げに有難

く。かき闇さるゝ心地して。物も覺えずと書たり。此法師は。佛法の事とし云へば。何ともなき事にも涙を落す。元より泣顔の法師なれば。然も有るべきを。此外の書共にも。かゝる事をば。いと貴けに記せるは。傍いたき事なり。然るに著聞集にのみ。此類を宿執篇に記して。由なき事に思へる狀なるは。見高き撰者なりけり。○序でに言はむ。西行は法師の多かる中にも。歌作りなる故に。物の哀れを知りたる顏して。撰集抄に記せる事どもを見れば。ほと〳〵物もつき出むとせらるゝ。拙き事をし泣顔して記し。名聞宿執などの筋は。いと淨よく失ひ畢たる樣に云へれども。宿執の心はいと深くぞ有ける。其は著聞集に。是も宿執篇に。西行法師出家より前は。德大寺左大臣の家人にて有けり。多年修行のゝち都へ歸りて。年ごろの主君にておはす睦しさに。公衡の中將の許へ尋ねて伺ひ見れば。縹の白裡の狩衣に。おり物の奴袴踏くゝみて。庭の櫻を詠めて。高欄に寄居たる狀いと優にて。德大寺の御跡は。此人に御けりと思ひて。左右なく櫻の本に立寄たりければ。中將いかなる人にかと尋られけるに。西行と申す者の參りて候と申ければ。年ごろ見參したかりけるにと殊に悅給ひて。椽の上に呼上せて。昔今の事語られける。日やう〳〵暮にければ。西行は歸りぬ。其後常に參りて物語しけり。かゝる程に。任大臣有べしと聞えけり。藏人頭に彼中將の成るべき仁に當り給ひけるに。院は中將成經朝臣を成さむと思食し。殿下は大藏卿賴宗朝臣を推擧ありければ。兩闕ともに叶ふまじげに聞えけるを。西行聞て。いそぎ中將の許に詣で其由を語りて。人に越られ給ひなば。定めて世を遁れ給はむずらむなど申けるに。中將聞て。誠にさこそ有るべけれども。母尼堂を立べき願有て。其間の事を申付く。出家の身にて口入せむ事。其願とげて後に計ふべしと答へられければ西行心おとりして歸りぬ。任大臣のついでに聞えしが如く。成經朝臣藏人頭に補せられにけり。其朝西行弟子を中將の許へやりて。若やさて事がらを見せけるに。敢て日來に替る事無りければ。又ふみを持て。申候ひし事はいかにと尋たりけるに。見參

のとき委く申べしと返事せられければ。無下の人にて御けりとて。其後は向はず成にけり。世を遁れ身を捨たれども。心は昔にかはらず。達々し有けるなりと有り。聖人貌はすれども。五蘊六塵の一宿執魔縁を去敢ざることは。是をもて知るべし。さて上に擧げたる四大師は更なり。叡山の中興と稱れし人すら。右に記す如く。憍慢宿執。名利勝他の魔念深有しかば。其末派門葉の僧徒の。魔縁を引ざるは。一人も有まじきことゝ。前に記せる道照法師が靈の語に。天竺震旦本朝に。名を得たる貴僧高僧の。魔道に落ちたる類は。勝て計ふべからずと言ひ。下に擧る開發源大夫住吉と名告れる鬼の語に。諸宗の宜しき法師は。皆天狗に成れる故に。其數を知らず。大智の僧は大天狗となり。小智の僧は小天狗となり。無智の僧は畜生道に墮つ。六十餘州の山峰に。或は二三十人。或は五十百二百人。天狗の集らざる處なし。と言へるに思ひ合せて辨ふべし。

この開發源大夫住吉といふ物の語は。第四巻にその全文を引て論ふを見るべし。

抑大智の僧の大釋魔と成り。小智の僧の小釋魔と成りて。人を誑惑し。世を騷亂せしむる事は。上にも下にも記し辨ふる如くなるが。謂ゆる無智の僧の。畜生道に墮ちたるは。多く屎鳶と成りて。是はた釋子の因を引き。随分の幻果を得て。種々の變相を現じ。世をも人をも誑かす物にぞ有ける。其はまづ鷲と鳶とは一類の物にて。鷲は鳶の大きく猛き物。鳶は鷲の小さく怯き物にて。形も類たる故に。古くは鷲を鳶とも云へり。然るは神世に。天日鷲翔矢命といふは。鷲を掌給ふ神と聞え。始めて弓を製り。弓削氏の祖なる謂れによりて。矢に鷲の羽を用ふるを。天照大御神の。天岩屋に幽居し時に。弓六張を並べて琴と成して。其子長白羽命に奏しめ給へる。其時に。金色の鵄高幡の上に居たりと有るは。やがて天日鷲命の暫く化れると通ゆれば。鷲なるべきに。鵄とあるは。形の類たれば言へるにて。此縁によりて。天日鷲命を。また天金鵄命とも申せり。

琴彈く上に金色の鵄と化て來れる。これ鵄尾琴を製れる事の本なり。また神武天皇の。大和國に征入り給ふ時に。金色の鵄。御弓の弭に止れりと有るも。天日鷲命の化れるにて。鷲なるべく覺ゆ。

なほ古史傳に委く考へ記すを見るべし。

但し此は神の御態なるを。釋魔の鷲の形を現じたるは。寶物集に。東大寺の一番の別當。良辨僧正は。相模國の人なり。三歳のとき父母懷き出して。愛せるを。金色なる鷲來りて抓去りぬ。父母悲むと云へども。空に消えて失せぬ。鷲は大和國春日山なる。木の空に置て是を養ふ。此子日を歷年積りて。物の心付く程に。佛法を修行す。人是を金鷲仙人と名付く。

此事今昔物語。古事談。佛法傳通緣起などに見えて。金鐘行者ともあり。また元亨釋書には。釋良辨姓百濟氏。近州志賀里人。其母祈觀音像而得。二歲時母桑焉。置兒於樹陰。忽大鷲落提兒而去。母悲望趁鷲而往。不歸家。初南京義淵詣春日神祠。見鷲鳥于野。將小兒也。鷲見人而避。淵收而歸。甫五歲就學。聞一知十云々と見え。また大山緣起と云ふ書に。良辨者相模國鎌倉郡由伊鄉人也。俗姓漆部氏。當國良將染屋太郎大夫時忠子也。母未之聞也云々。時忠年涓四十無胤子。遂就幽冥禱是。或夜夢有一高僧來告曰。汝所請求我哀之。授一卷。亦曰我是靈山釋迦。斯妙典彌勒菩薩也。時忠夢中嬉懽甚。即披而閱之法華經第一卷也。如言告妻。妻曰今夜妾亦夢。夢狀相同無違矣。夫婦感夢知其有子。既而有身遂生一男。父母以爲匪凡人育之。鍾愛尤切。歷五十日乳母提携遊觀園中。金色鷲不意飛來攫其兒入雲矣。云々とあるを以て。金色鷲の佛魔なる事を知るべし。行囊抄に。此全文を引たれば。古き書と見えたり。また同書に。相傳曰父大住郡三宮大明神是也。母則號易產大明神ともあり。

仙人さのみ木の空にて。佛法を修行すべきに非ず。一堂を建立せむと思へども。私力をもて叶ふべくも無りければ。公家に申さむと思ひけるが。奉公無くてはいかで。天聽を驚かさむと思ひて。南無聖朝安穩といひ。稽首ける聲。聖武天皇の奈良都に御座ける頃なるに。隱れなく聞えけり。また金色の光。春日山より來りて。禁中を照すと見る人あり。また春日山に。彌勒光を放ちて御座と。多くの人の夢に見ゆ。

此は金鷲行者は。彌勒の化現といふ事を。普く人に知らしめて。世に用ひられむとして。行へる幻術の夢なり。佛者の多くなす所爲にて。上に引たる大山寺縁起にも。良辨を彌勒と云ふ事あり。

是故に天皇勅使を遣して。仙人を召して故を問給ふ。仙人願の有狀を申す。天皇德に歸して一堂を建立し給ふ。今の東大寺是なりと有り。此不思議どもは。凡て佛法の異驗にて。金色の鷲やがて釋魔なりし故に。良辨を木の空に養ひ。幻通をつけて聲を遠音に響かし。光りを放ち夢を見せなど。種々の異驗を現はし。天聽を驚かし奉れるにて。是ぞ釋魔の鷲の形を現はせる始めなる。

なほ此事は。巫學談弊に。東大寺建立の事を論へる處に。委く辨へたれば。此には大略を云ふなり。

義楚六帖に。西域記云。靈鷲山似鷲鳥。有靈多集。故名靈鷲。峰聳類臺。故云鷲臺山といひ。また法顯傳に。祇闍崛山有大石室。阿難入定魔化爲鷲鳥來怖阿難とあるは。由有げなる事なり。また名義集三卷にも。常在靈鷲山の事を云へれば。披き見るべし。因に云ふ。抱朴子廣譬篇に金鶏不鏡擊於小鍋とあり。和名抄に。唐韻云鶏大鵰也。鵰鶏鳥別名也。山海經注云。鷲小鵰也。和名於保和之。鷲古和之と有れば。此金鶏も黄金色の鵰を言へるか。但し漢籍には。此熟字未だ見當らず。猶考ふへし。

また同書に。慈惠僧正は。金色の天狗と化りと云へるも。金色の鷲の形を云へりと聞ゆ。其は雲景か未來記に。崇德天皇の御靈の御形を。金色の鶏の形に見成し奉れるを。思ひ合せて辨ふべし。是れまた鷲を鶏とも見成たる一證とすべし。さて鶏の正しく佛菩薩に縁有る事を知るべきは。今昔物語集に。大和國平群郡の鵤村に。岡本寺といふ寺あり。尼の住する寺なり。

此は聖德太子の宮なりしを。太子誓願を發して。尼寺と爲し給へりと。靈異記に見えたり。其寺に。銅の觀音の像十二體あり。而るに聖武天皇の御世に。彼像六體を盜人に取られぬ。尋求むれども得ず。其後程を經て。其郡の驛の西方に小き池あり。夏のころ其池の邊に。牛飼の童部ども在けるに。池中に小き木指出て。其木に鶏居たり。

此事靈異記にも載せて。鵄を鵰また鷂また鷲などゝ誤れり。さて本草綱目に云く。鵄似レ鷹而稍小也。其尾如レ舵。極善高翔。專捉二雞雀一。其攫レ物如レ射之。寺島良安云く。鳶鴉有レ害無レ益。而多有レ之鳥爲レ人所レ憎也。然俗傳曰。愛宕之鳶。熊野之烏。以爲二神使一。未レ知二其據一也といへり。良安鳶と鴉とを。共に惡鳥に云へれども。二鳥共に惡き中にも。また世の爲人の爲となる事も有と覺ゆるを。其は此に言はず。偖また鳶と鴉とは。甚も中惡く。鴉の鳶を責むる事は。深き由有けなる事なり。童部これを見て。礫塊など拾ひて打つに。鵄去らずして倚居たり。然れば童部投打つ事を止めて。池に下りて鵄を捕へむとするに。鵄忽ちに失せて。居たりける木はなほ有り。其木をよく見れば。金の指にて有り。童部怪みて。此を取て牽上ぐるに。觀音の銅像なれば。童部此陸に牽上げて。里人に此事を告ぐ。岡本寺の尼等も。此事を聞て。里人と共に來て見るに。岡本寺の觀音なり。塗りたる金は皆剝落たり。尼ども觀音を圍繞して泣悲み。忽に輿を造りて。本の岡本寺に渡して安置したり。其邊の道俗男女。集りて禮拜して。錢を鑄る盜の態ならむと云ひき。此を思ふに。彼池に有たる鵄は。實の鵄には非じ。觀音の鵄と變して示し給ひける也。と有を見て知べし。此事靈異記にも載せたれば。見合せて記しつ。撰者の評に。彼池に有ける鵄は。實の鵄には非じ。觀音の變じて鵄と成れる也。とあるは違へり。然るは觀音と云は。元より有名無實の佛なるが。其靈驗ある事は。釋魔の態なるに。彼池に有ける鵄は。此觀音像に憑りて。其驗を示する釋魔が。眞の形を現じて。盜人の爲に。池に隱されて在る由を示せるにて。觀音の靈驗といふは。皆この類なり。かく論ふをも。疑はむ人の爲になほ言はゞ。源平盛衰記に。文覺は渡邊黨に。遠藤左近將監盛光が一男。上西門院の北面の下﨟なり。其母いまだ子なし。夫妻共に家の絶えなむ事を歎きて。長谷寺の觀音に詣で。七箇日祈り申ければ。左の袖に鳶の羽を給はると夢に見て。懷姙して儲けたる子なり。父は六十一。母は四十三にて生れたる一男なり。

觀音は。天狗なること元よりなれば。其一羽を別けて。まをし子の魂とは爲せるなり。

母は難産して死す。三歳の時父盛光も死す。十八歳にて。糸惜き女に後れて髪をきり。日本一州の高き峰至らぬ地なく。七日。二七日。三七日。百日籠り行ひ。十八歳にて出家して。一十三年の間。山臥修行者の勤苦なり。此文覺は。天狗の法成就の人にて。法師をば男になし。男をば法師になしなどして。現心は無りけれども。ゆゝしき荒行者にて。度々鍔金顯したる者なり。心しぶとく。身も健にして。立ぬ願ひもなく。せぬ業もなし。斯りければ。發心地。物氣など云て請用隙なし。向と向ひぬるに空しき事はなし。餘りに暇なき折は。念珠袈裟を遣して。病者の目にも見せ。手にも取せぬれば。忽ちに驗を顯はす。

觀音は右に云ふ如く。有名無實の物なれど。それが靈驗とて種々のことあるは。釋魔の觀音となりて有る故なり。然るは是が父母。その後胤の絶むことを悲みなむには。神を祈るべきことなるに。觀音を祈れるは。時世の狀なればいふにたらねど。觀音もし善心のものならむには。其願のごとく。家を繼べき子を授くべきに。天狗を授て出家せしめ。家の繼を絶ちたるは、いかに天狗の枉れる所爲ならずや。

係りしかば。元來天狗根性なる上に。慢心強く。高聲多言にして。人をも人とせざりける餘りに。法皇の御所にあばれて。獄に入れられたりけれど。惡口止まず。遠くは三年。近くは三月が中に。思ひしらせ申さむ。三寶護法とりどりに。利生を現じ給へと。手を合せ念珠を揉みて。院御所を咀詛し奉りけるに。獄中の者共も。身の毛堅て覺えける。さればにや上西門の女院指したる御惱みもましまさずして。隱れさせ給ひにけり。斯くて文覺は。院御所にて惡口を吐き流罪せられ。伊豆國奈古野が奥と云ふ所に。觀音の堂あり。奈古野寺と名く。其傍にあやしき菴を結びて。閉籠りて年月を送りつゝ。深く大悲の誓願を憑みて。不退の行法薫修せりと見えたり。また正しく天狗の鵄と化れりといふ事も。同集に。讚岐國に萬能池といふ。極めて大きなる池あり。其池に住みける龍。日に當らむと思けるにや。池より出て。人離れたる堤の邊に。小蛇の形にて蟠り居たりけり。龍の大小變化自在なる事は。和漢の書等にも記し

傳へ。今も目のあたり。小蛇と見たるが。大龍と成りて雲を起し。氷を降らし昇天するを見る人。いか程も有り。然れど心狹き漢學者は得知らで。然る事なしと思へり。

其時に近江國比良山に住ける天狗。鵄の形として。其池の上を飛廻り。此小蛇の蟠りて在るを見て。鵄返下りて掻抓みて。遙に空に昇る。龍力強き物なれども。思懸けざる程に。俄に抓まれぬれば。更に術盡きて。たゞ抓れて行くに。天狗小蛇を抓碎きて食はむと爲るに。龍も力強きに依りて。心に任せて抓碎くこと能はずして。遙に本の栖の。比良山へ持行きて。狹き洞の動くべくも非ぬ處に。打籠置きつれば。龍は一滴の水も無ければ。空を翔る事も叶はず。破无て。只死なむ事を待て居たり。

龍の神通自在なるも形をかく小さく變じては。其變じたる形の量ならでは。用を成すこと能はず。かく怯くて苦み居るこそいと墓无けれ。說苑と云漢籍に。伍員が斐王に云けるは。龍の魚の形になりて。浪に戲れて浮ける程に。預諸と云もの丶網を引けるに懸りて。悲しき目を見て。大海にかへりて龍王に訟へければ。龍王ことわりて云く。何しにかく魚の姿とは成ける。然ればこそ網にはかかれ。今より然る事をすまじき也と云へる事あり。虛實は知らねど。豐臣太閤に。曾呂利が鬼神の夢に託して。諫めし言をも思ひ合せて。人は無下に。品をば落すまじき物なりけり。

而る間に。彼天狗比叡山に行て。短を伺ひて。貴き僧を取むと思ひて。夜東塔の北谷に在ける。高き木に居て伺ふ程に。其向に造懸けたる房あり。其房に在る僧。椽に出て小便をして。手を洗はむが爲に。水瓶を持ちて手を洗ひ居るに。此天狗木より飛來て。僧を掻抓みて。遙かに比良山の栖なる洞に行て。龍の在る處に打置つ。僧は水瓶を持ながら。我にも非で居たり。今は限と思ふ程に。天狗は僧を置て去ぬ。

此所行を具さに思へば。本文に鵄とは有れど。ただ鷲の所行なり。舊く鷲と鳶とを混じ云へること。此をもて悟るべし。鵄は人を摑み去りて。碎食ふ程の事はなき物にて。鷲こそ然ること常にあるをや。

其時に。暗き處に音有りて僧に問云く。汝はこれ誰

人ぞ。何より來ぞと問ふ。僧答て云く。我は比叡山の僧なり。手を洗はむ爲に。坊の椽に出たりけるを。天狗俄に抓み取て。將來つるなり。然れば水瓶を持ながら來れるなり。抑かく云ふは。また誰ぞと云に。答云く。我は讃岐國萬能池に住む龍なり。堤に這出たりしを。此の天狗空より飛來て。俄に抓みて此洞に將來れり。狹くて爲む方なく。一滴の水も無れば。空へも翔らずと云ふ。僧云く。此持たる水瓶に。若一滴の水や殘たらむと云へば。龍此れを聞て喜て云く。我れ此處にして日來經て。既に命終なむと爲るに。幸に來會し給ひて。互に命を助くる事を得べし。若一滴の水あらば。汝を本の栖に將至るべしと。僧また喜て。水瓶を傾けて龍に授くるに一滴許の水を受つ。龍喜びて僧に教へて云く。努々怖るゝ事无して。目を塞ぎて我に負れ給ふべし。此恩更に世々に忘れじと云ふ。爰に龍忽ちに小童の形と現じて。僧を負て。洞を蹴破りて出る間に。雷電霹靂して。空陰り雨降ること甚恠し。僧は身振ひ肝迷ひて。怖しと思へども。龍を睦び思ふが故に。念じて負れ行く程に。須臾に比叡山の本の坊に至る。僧を椽に置きて龍は去ぬ。

龍の人語を成せる事を。漢學者の見狹き倫は。疑ふも有べけれど。神に入るときは。物として人語を成さゞるはなきを。たゞ人のみぞ。物と語を通ずることも能はず。此はよく古へ學をして辨ふべし。また龍の水を得ては。其自在かくの如く。水を失ひては。怯きこと蚯に異ならず。

彼の房の人々。常の霹靂して房に落懸かると思ふ程に。俄に坊の邊。暗夜の如く成て。暫許ありて見れば。一夜俄に失せにし僧椽に在り。坊の人奇異く思ひて問ふに。事の有樣を委く語る。人皆聞て驚き奇異がりける。其後に。龍彼天狗の怨を報せむ爲に。天狗を求むるに。京に知識を催す荒法師の形と成て行ひけるを。龍降りて蹴殺してけり。然れば翼折れたる屎鵄にてなむ。大路に踏れける。龍は僧の德に依て命を存し。僧は龍の力に依りて山に返る。此も機緣なるべし。此事は。彼僧の語り傳へを聞繼ぎて。語り傳へたるなりと有り。

但し此の物語。僧の房に返りたる迄の事は。僧の語れるにて知らるれども。其後に龍の天狗を蹴殺

したる事は。如何して知けむ。此は雷電霹靂して。荒法師を蹴殺したるが。古屎鳶と成て大路に在けるを。彼僧の物語りに思ひ合せて。かく語り傳へしなるべし。

また天狗の正に。佛と現じたる事も。同書に。延喜の天皇の御代に。五條の道祖神の在る處に。大きなる實成らぬ柿木有けり。其木の上に。俄に佛現はれたる事有けり。微妙き光を放ち。様々の花を令降などして。極めて貴かりければ。京中の上中下の人。詣集ること限なし。車も去敢ずかく塡るほど。既に六七日に成りぬ。

此れに據りて思ひ合さるゝ事あり。其は萬葉集に。「玉葛實成らぬ木には千早振。神ぞつくとふならぬ木ごとに。」と有るは。かゝる事を詠るなり。實ならぬ木とは。柿栗桃などの類の。實の成るべき木にて實ならぬを云ふ。然れば實のなるは。此樹どもの常にて。成るべき實の成らぬは變なり。其常ならず變なるが。則妖魅の託く所なり。此歌も正しき神の事には非ず。鬼魅の類ひを云へるなり。其は千早振と有るにても知べし。此は人の解得がたき事なる故に。少か注しつ。斯有れば。然る木ども有なむには。速に伐弃つべき事にこそ。

其時に光右大臣と云ふ人あり。深草の天皇の御子なり。身才賢く智明なる人にて。此佛の現じたる事を。頗る心得ず思ひ給ひ。實の佛の。木末に出給ふべき様なし。此は天狗などの所爲にこそ有めれ。外術は七日に過ず。今日我れ行きて見むと出立給ふ。

外術とは外道の術といふ事にて。佛法より外の術をいふ語なり。大論に委しく見えたり。

裝束直くして。檳榔毛の車に乘て。前駈など直しく具して。其處に行き給ひ。若干詣集れる人を拂ひ去させ。車を掻下し榻を立。車の簾を卷上げて見給へば。實に木の末に佛在り。金色の光を放ちて。空より様々の花を降すこと雨の如し。見るに實に貴きこと限なし。而るに大臣すこむる。怪しく覺え給ひければ。佛に向ひて目をも瞬かずして。一と時ばかり守り給ひければ。此佛暫くこそ光を放ち。花を降しなどしけれ。強に守る時に。侘て忽に大きなる屎鵄の翼折たるに成て。木の上より土に落てふためくを。多くの人此を見て。奇異なりと思けり。小童部ども

寄りて。彼の屎鵄を打殺してけり。

和名抄に。本草に云。鵄一名鳶。和名土比。爾雅注云。鳶一名鴟。喜食レ鼠而大目者也。漢語抄云。久曾止比とあり。寺島良安云く。鴟狀似レ鳶而羽毛疎。飛翔不レ能レ鷙レ鳥。但攫二牛馬枯糞一。或魚物鳥雛一食レ之と云へり。此を馬屎鳶とも云ふ。常の鳶よりは稍大に。羽毛疎びて。汚く憎さげ様したる古鳶をいふ。然れど常の鳶と處を異にするに非ず。共に交りて有が中に。稍形の異なるのみなり。合類節用に。鴟の字また鵄の字などを。クソトビと訓み。戴勝を。マグソツカミとも。クソトビとも有り。偖また馬屎鷹といふ物あり。此は屎こそ攫め。鷹の類にて。鳶とは異なり。寺島氏こを鴟と。同じ物に記せるは誤なり。

大臣は然ればこそ。實の佛は。何の故に。俄に木末には現じ給ふべきぞ。人の此を悟らずして。日來禮み喤るが愚なりと云ひて返り給ひにけり。然れば其庭の若干の人ども。大臣をなむ讃申ける。世の人も此を聞て。大臣は賢かりける人哉と。讃め申けると見え。

身才實に賢き大臣にぞ御ける。然れどなほ。實の佛はいと貴くて。木末などに出べき物に非ず。さ思はれたる由なるは。實の佛も眞には。屎鵄の大きく。殊に幻通を得たる物としも思はれざるは。甚惜き事なり。此事は宇治拾遺物語にも見えたれば。合せ見て擧たり。

また十訓抄に。後冷泉院の御時。天狗あれて。世の中騒がし有ける頃。西塔に住ける僧。白地に京に出て歸りけるに。東北院の北の大路に童部五六人ばかり集りて。物を打領じけるを。歩み寄て見れば。古鳶の世に怖し氣なるを。縛り搦めて楉にて打けり。あな忌じなど如此するぞと云へば。殺して羽を取らむと云ふ。此僧慈悲を發して。扇を取せて。此を乞取て放ち遣つ。

世の諺に太郎坊も鳶と成ては。鳶だけの智慧ならでなし。と云ふ事思ひ合さる。また上に云へる萬能の池の龍の事をも思ふべし。此鵄は大じき天狗なりしかども。鳶と化りて捕られしかば。かく怯かりしなり。また此事。里人談に本朝語園を引て。永承の頃と有り。

忌々しき功德造れりと思ひて行ほどに。切堤のほどに。藪より異樣なる法師の歩み出て。後れじと歩み寄ければ。氣色覺えて。傍に立よりて過さむと爲けるに彼法師近よりて云ふやう。御憐みを蒙りて。命生て侍れば。其悅聞えむとてなど云ふ僧立歸りて得こそ覺えね。誰人にかと問ければ。然ぞ思すらむ。東北院の北の大路にて辛き目見て侍りつる老法師に侍り。生者は命に過たる物なし。斯ばかりの御志には。爭でか報じ申さゞらむ。何事にても念比なる御願あらば。一と事叶へ奉らむ。己はかつ知らせ給らむ。小神通を得たれば。何かは叶へざらむと云ふ。細やかに云へば。樣こそ有らめと思ひて。我は此世の望更になし年七十に成れり。然れば名聞利養は味氣なし。後世こそ恐しけれども。其はいかでか叶へ給ふべきなれば。中に及ばず。但し釋迦如來の靈山にて。說法し給ひけむ粧ひこそ。愍かりけめと思ひ遣られて。朝夕心に懸りて。見ま欲く覺ゆれば。其有狀をまなびて。見せ給ひなむやと云へば。最易き事なり。然樣の物效するをと。己が德と爲るなりと云ひて。下り松の上の山へ具して上りぬ。しばし目をふさぎて居給へ佛の說法の御聲聞えむ時に。目をば開給へ。但しあな畏こ貴しと思すな。信をだに發し給はゞ。己がため惡からむと云ひて。山の峰の方へ上りぬ。

天狗の此言をよく思ひて。世に佛菩薩の靈驗。又天上極樂地獄など云ふ處どもを。人に見するなど。釋魔の變現なる事を辨ふべし。またかく云ひて上れるは。靈山說法の狀を止る時のしほにせむとてなり。其由下の文を見て知べし。

さばかりして。說法の御聲聞えければ。目を見開たるに。山は靈山となり。池は紺瑠璃となり。木は七重寶樹と成て。釋迦如來獅子の牀の上におはし坐し。普賢文殊左右に座したり。菩薩聖衆雲霞の如し。帝釋四天王龍神八部。所もなく充滿たり。空より四種の花降りて香しき風吹き。天人雲に列なりて。微妙の音樂を奏ず。如來寶花に座して。甚深の法門を演說し。其事がら。大かた心も言葉も及がたし。暫こそ甚じく學び似せたりなど。興有て思えけれ。樣々の瑞相。見るに在世の說法の砌に。望めるが如し。信心忽に起りて。隨喜の淚眼に浮び。渇仰の思ひ骨

に徹る間手を額にあてゝ。歸命頂禮する程に。山夥しくはらめき騷ぎて。有つる大會かき消つ如くに失せぬ。夢の覺るが如し。こは如何にしつる事ぞと。忙れ騷きて見廻せば。もと有つる山中草深なり。淺猿ながら。然て有るべきならねば山へ上るに。水の程にて有りつる法師出來て。然ばかり契れる事を違へ給ひて信を發し給へるに依て。護法天童降り給ひて。何とて斯ばかりの信者をば。誑かすぞとて我等を責み給へる間。雇ひ集めたる法師原も。からき肝潰して逃去りぬ己が片々の羽がひ打れて術なしとて失にけりと見ゆ。

かく宜々しげに。護法天童降りて云々と云へるは。變現したる靈山の狀を。止たるしほに云へる幻語なり。然るは護法天童とて。佛法を護る物の天上に在といふは。佛法の幻說にこそ有れ實に然る物の有るに非ざればなり。偖この事は本朝語園にも見えたるが。其に本は今昔物語集に記せるを採れりと思はる。但し今傳はる今昔物語には比叡山天狗報助僧恩語といふ題のみ有て。文は闕たり。必ず此を採れるなるべし。是ら正しく形を古屎鵄に受て。幻通ある天狗なり。

抑釋魔の鷲また鵄の形を受る事は。上に論へる如く。天狗といふ物は。元より狗にも狸にも似たるが。高鼻長喙にて翼あり此はもと種々の鳥獸も化れど。鷲の化れるが多かると。山人の說なれば。其部に入る故に。此形を受るなるべし。

但しそは皆がら。一樣の形とは聞えず。人體のままに高鼻なるも有か。また翼の有るも無きも。交れると見えたり諸國里人談といふ書に。駿河遠江の境なる大井川にて天狗を見ることあり。闇なる夜の深更に及びて。潛に封壇堤の陰に忍びて伺ふに鳶。の如くなるに。翅の徑六尺ばかりある大鳥の樣なる物川面にあまた飛來り上り下りして魚をとる樣なり。人音すれば忽に去る。是は俗にいふ術なき。木葉天狗などいふ類にやと見ゆ。遠江國人中村眞幸云ひけるは正しく其形を見たる事は無れど。秋葉その外高き山々に。夜々天狗の火とて數多見ゆる事あり。其火の狀留りて在るかと見れば。遙に飛去など見えつ又見えずつ又。樹間に出沒する事あり。又時として。彼物の噂などあしざまに云

ふときは其火忽に目近く來りて煌く事有り。大かた件んの火の見ゆるは。夏のことなるが。電し雷の音聞ゆれば。有つる火ども次々に去失ぬ。其さま雷の聞えぬ方へ逃行くやうにて。終に見えずなりぬ。是は常の事なれば。必ず其形を見る人有べしと云へり。又疫病疱瘡神など。都て妖魅の類の。雷を怖るゝ事思ひ合さる。

然れども然る忌じき形を受るは。大天狗小天狗などいふ強猛なる釋魔なるが。高くも卑くも。尋常の無智なる僧は。屎鵄ともなく。凡の鵄と成と見えたり。其は法師は。總じて人の門に立て。物乞ふ倫まで も。自然に貢高邪慢の心深く。吾こそ最無上の尊き道を行ふ。聖よと思ひ顏にて。俗家を凡夫と陋しむる心は。ほど〳〵に有りて。有智無智を云はず。俗家の物を掠め取らむと欲する心。常に見ゆるを。鷲また鳶はも。竊を伺ひ。人の手に持たる物をさへに。抓去らむと欲するが。其性の似たる故に。互に生を變ふるにや有らむ。但し此は試に云のみぞ。因に云ふ。先つ年我許に使へりし男の。遠江國人なるが云けるは。吾鄕の邊に。天狗の漁獵と云ひて。池また堀などの魚。大き小さき悉に死こある事有り。然るに其魚の目一つもなし。此は皆彼物の取食へるなりと云へり。天狗はさる業もする事にや。俗諺に。惡がしこく。人の見ぬまに物するを。眼をぬくと云ふ事あり。此天狗の所爲より云ひ出たるか。

然るは沙石集に。和州菩提山の本願僧正の房に。忠寛正信房と云僧有けり。餘りに眠ければ。眠り正信房とぞ云けるとて。是が甚じく眠れる事どもを記し。偖其死ける後の事を記して。近頃興福寺の東門院に有ける兒。隱所に居たりけるに。春日山の方より。鵄一つ來りて。此兒の前に眠り居たり。怖しさに。腰刀を拔てはたと切て。やがて絶入したりけるを。人見つけて。房へかき入れて祈けり。刀に血付き鵄の毛散たりけり。さて口走りて。忠寛が何となく眠居たるを。過たる事易からずとぞ云ける。とかく祈こしらへて。別事無りけり。先生に眠りしが。生を隔てゝも眠りけるにこそ。習因習果といふ事あり。辨へ知べし。常に心に思ひそみ。身に馴ぬる事は。生を經れども相次で忘れず。捨難くして自然に爲られ思

はるゝ也と有り。
習因習果の說。實に然る言なり。心有らむ人は。よく此理を思ひて。常の因を神の道に習ひて。神の道の果を得む事を思ふべし。
また舊き諺にも。鵄は天狗の乘物といひ。山伏の果は鵄に成とも云へれば。無智の尼法師山伏などは。大凡鵄となりて。天狗の下使を爲て。人間に神の守なき透間を伺ひ。妖魔の入る手引を成す物と見えたり。
鵄を天狗の乘物と云ふ諺は。源平盛衰記に。治承元年四月廿八日の大火の處に。指巫と名を得たる盲卜者が。火本は樋口富の小路と云を聞て。占は推條口占とて。火口と云へば燃廣がらむ。富の小路と云へば。鵄は天狗の乘物なり。小路は步む道なり。天狗は愛宕山に住めば。天狗の所爲にて。巽の樋口より。乾の愛宕を指て。筋違さまに燒けぬと覺ゆ。と云へる由見えて。果して其言の如く燒たり。今の世にも。尻尾の切れたる鳶の飛ぶこと有る邊は。ともすれば。火災ありと云ひ。鵄は太郎坊の使者など云めり。山伏の果は鵄になると云ことは。猿樂の柿山伏といふ狂言の言葉に見えたり。共に舊く。然る諺の有しに依りて云へるなり。また梅窓筆記に。燒亡に太郎次郎と云こと。淸獬眼抄ニ後淸錄記云。治承二年戊戌四月廿四日夜半許。七條北東洞院東中許。洞院面燒亡。世人號二次郎燒亡一也。太郎去年四月廿八日。至二于大極殿一燒亡。云々と有るも。由有げなる事なり。また近き世に記せる書なれど。新著聞集に。京の釜座下立賣下る町に。丹後屋佐兵衞と云ふ絹屋有しが。機を二十四立ける。或る時機の鳥居に。鵄とまり居眠ける。其翌朝より。一と機の糸何となく切たり。誰がわざぞと穿議しけれども。更に證據も無く。此の如く毎日切るゝ程に。後には二十四機殘らず切れしかば。祈禱など修するに。なほ切れける。或人云く。今度の次第を思ふに。憍慢の心より。斯る災のあるにや。最初に鵄の來りしも。只事に非ず。愛宕信仰然るべしと云へば。實尤もの事とて。正五九月に。愛宕山に百味を獻り。月詣すべきよし。立願せしかば。災忽に止にけりと云事あり。また下總國香取郡萬歲村なる門人。高

橋正雄が語りけらく。近き程我が村の後山へ。村の者ども五人連立て。木こりに行けるに。少し傍なる山の端に。常のよりは汚氣に見ゆる鵄一つ。羽を休め居たり。其を見て中なる一人が。恐ろしげなる山伏の立居たると云ふ。然るに四人の者の目には。鵄とのみ見ゆれば。云ひ諍ふに。彼一人のみ。正しく山伏なる者をと云ひて。更に四人が言を聞入れず。共に山より歸りて後に。彼男忽に熱さし煩ひて死たるが。殘り四人は何事も無りき。甚異しき事なりと語りき。猶山伏と見えたりと云ふこと。外にも聞たる事あれど。煩ければ悉くは記さず。

なほ此餘にも。釋魔と成べき因緣の語等の。經論に多く見たるを。彼此記さば。まづ楞嚴經に。佛告阿難。攝心爲戒。因戒生定。因定發慧。是名三無漏學。婬不除則塵不可出。縱有多智禪定現前。如不斷婬必落魔道。と有るは。婬心を斷ざる僧徒の。魔道に墮る證文なり。此れに依りて熟々古の。名僧大德と聞えし釋子等の。婬事に心を蕩したる倫を按ふるに。まづ舊く釋の玄昉は僧正として。

光明皇后を犯して。善珠僧正を生せ奉り。

光明皇后は。藤原不比等の女にて。聖武天皇の后なるが。玄昉はその頃の智識にて。唐土に渡り。種々の經論法をも傳へ來り。朝廷は更なり。世に重く用られたるを。皇后深く愛し給ひ。玄昉が子を生給へり。善珠僧正是なり。此をもて國史に。僧正善珠は。光明子の孽子なりと記されたり。然れど天皇は知看さず。一人も此事を云ひ露にす者無りし中に。藤原廣繼といひし人有て。天皇に玄昉が奸を奏しけるに。却りて廣繼を逆鱗有て。筑紫へ流し給ひしかば。廣繼憤りて謀反を起しぬ。爰に追討使を遣して誅し給ふ。其後玄昉を筑紫の觀音寺に遣し給へるに。廣繼の靈魂雷となりて。玄昉が首を拔捨たりき。委くは國史を見べし。斯て玄昉が靈の魔道に入たる事は。太平記なる雲景が未來記を見て知べし。其は下に擧たり。

釋道鏡は。如意輪の法を行へる驗によりて。高野姫天皇に寵せられ奉り。

古事談に。此女帝は。天平寶字六年に。簪を落し佛道に入り。法諱を法基尼と稱し奉る。同七年の

九月に。道鏡法師を小僧都となし給ふ。元は河内國人にて。俗姓は弓削氏なり。法相宗にて。西大寺義淵僧正の門流なり。常に禁掖に侍り。甚く寵愛せらる。如意輪の法の驗德と云へり。天皇道鏡が陰をゝなほ不足に思食され。薯蕷をもて陰形を作り。用ひさせ給ふに。折籠りて腫塞り。大事に及ぶとき。百濟國の醫師に。小手尼とて。其の手嬰子の手の如くなるが。見奉りて。帝の疾癒べしとて。手に油を塗りて。取らむと欲けるに。右中辨百川。靈狐なりと云ひて。劍を拔て尼の肩を切る。此れに仍りて療する事なく。崩じ給ふと有り。なほ道鏡が惡逆は。國史を見て知るべし。畏くも天日嗣をさへに窺ひ奉りき。壒嚢抄に。天皇密に藤原押勝を幸し給ひ。また道鏡を召て。寵遇他に異なり。此二人幸人として。威勢を諍ける故は。涅槃經に。所有三千界男子諸煩惱。合集爲一人女人之業障。といふ文を叡覽有て。朕女人なりと云へども。全く此の儀なし。佛の妄語なりとて。經に小便を爲かけ給へり。此經の護法神怒けるにや。忽に婬慾熾盛に成り御座のみならず。女權廣傳にして。敢て其欲を停がたく。天下に勅を下して。大根の者を求め給ふ。押勝其仁に當りしかども。道鏡なほよく是に叶へりと有るは。餘なる事に思ゆれど。傳へ有る事にや。女は殊に婬心深きものにもあれ。佛說の如きは。御言の如く餘なる妄語なり。然るにかゝる崇の有りしは。釋魔の態なり。護法神といふ物やがて其なり。其田は次々に云ふを見るべし。

釋玄賓は大僧都にて。當時上下に大德と稱せられ法師の淨行を云ふには。必ず例に引出らるゝ人なるに。大納言なる人の北方を懸想して惱み煩ひ。今昔物語集。古事談。撰集抄。長明發心集などに。昔し玄賓僧都と云人有けり。山階寺の止事なき智者なるが。世を厭ふ心深くて。寺の交を好まず。三輪河の邊に僅なる草菴に結ひ住めり。桓武帝の御時。此事を聞食して。强に召出ければ。遁べき方なく。懲に參けり。然れども猶本意ならず。思ひけるにや。奈良帝の御世に。大僧都に成し給ひけるに。辭し申すとて。「三輪川の淸き流にすゝぎてし。衣の袖を又は汚さじ。」と詠て奉り。弟子從者

にも知れず。何地ともなく失にけるが。其の後年來經て。越路の河の渡守となりて居たりしを。弟子なる僧の。此を通るとき見付たりしかば。又立去りて後に。伊賀國に。或る郡司が家の馬飼となりて。年來經ける程に。郡司罪有て處を逐はるべしとて歎きけるを。慰めて京に伴ひ。此の時伊賀國は。昔知りたる大納言なる人の。給はりて有しかば。其へ行きて。郡司が罪を許し給はりしなどは。淨行の例にも引出べけれど。是より後の事にや。發心集に記せる事あり。其は此の僧都を忌じく貴き人とて。高きも賤きも。佛の如く思へりける中に。大納言なる人。年來殊に相憑み給ひたりけるに。僧都そこはかとなく惱みて。日頃になりぬ。大納言覺束なさの餘りに。自ら渡り給ひて。何なる御心地にかなど。細やかに訪給ふを。近く寄給へ。申侍らむと有れば。異くて指寄り給へるに。忍びて聞ゆ。誠には殊なる病にも侍らず。一口殿の御許へ詣たりしに。北の方の形いと目出度。と見給へりしを。髣髴に見奉りてのち。物覺えず心惑ひ。胸塞がりて。何にも物の云れ侍らぬなり。

此事申すにつけて憚有れど。深く憑奉りて久しく成ぬ。爭かは隔奉らむと思ひて。なむど聞ゆ。大納言驚きて。さらば何かはとく宣ざりし。最安き事なり。速に御惱を止てむ。渡り給へ。何にも宣はむ儘に。便よく計らひ侍らむとて歸り給ひ。上にかくと聞え給ふに。更なりなのめに仰せられむやは。最淺間しく心憂けれど。かく懇に覺し計ふ事なれば。など辭給はむ。其用意して。僧都がり按内せさせ給へるに。最うるはしく。法服正しくして來り給へり。異しく實々しからず。覺ゆれど。間など立て。さる樣なる方に入れ給ふ。上の美しく取繕ひて居給へるを。一と時ばかりつく〴〵と守りて。彈指をぞ度々しける。斯て近く寄こと無て。中門の廊に出て。物をなむかづきて歸りにければ。主いよ〳〵尊み給ふ事限なし。不淨を觀じて。其執をひる返すなるべし。此觀は人身の汚穢しき事を。思ひ解く佛の敎なり。若人の爲にも愛著し。自も心有らむ時は。必す此の相を思ふべしと云へり。大方人の身は。骨肉の操り朽たる家の如し。六府五藏の有狀。毒蛇の蟠るに異ならず。

血は體をうるほし。筋をつぎ目を扣へたり。僅に薄き皮一と重覆へる故に。此の諸々の不淨を隱せり。粉を施し薫物をうつせど。誰かは僞れる飾と知ざる。海に求め山に得たる味も。一と夜經ぬれば悉く不淨と成りぬ。云はゞ繪がける瓶に糞穢を入れ。腐たる體に錦を纏へるが如し。譬大海を傾けて洗ふとも。淸淨べからず。若栴檀を燒て匂はすとも。久しく香しからじ。況むや魂去り壽盡ぬる後は。空しく塚の邊に捨べし。身脹れ腐り亂れて。終に白き骸と成り。眞の相を知る故に。念々に是を厭ひ。愚なる者は。假の色に耽りて。心を惑はすこと。譬へば厠中の虫の。糞穢を愛するが如し。と云へりと有り。篤胤今按ふに。不淨觀の事。かく言痛く云へれども。此は言に云ふのみにて。更に驗なき徒事なり。然るはかく觀じて。心の解る物にし有らば。玄賓僧都。かの北の方に再見えずとも。前に見て戀心の起れる時か。病付ばかり。思ひの凝りし時に。此觀を爲て其心を解べきに。いかに觀ずれども。戀心の解ざりし故に。堪かねて。大納言に云へりと聞ゆれば。相見ては倍々に。戀ふる心は增りけめど。然すがに。本意は遂がてに。此觀を爲て。心解たる狀に持成たりけむ。或る禪僧の態とて。人の骸骨をかきて。「骨隱す皮には誰も迷ふらむ。皮破れてはかゝる姿よ。」といふ歌を書たる有り。此も不淨觀の心なれど。死たる後の骸骨の狀を思ひて。現に美しき顏を美しと思はぬ理は。決めて無き事にこそ。其は美き食物も。食ひて後は。糞となる事を觀じたりとも。美き味を失はざると同じ理なり。此れを思へば。俗の口詠に。「白骨と觀じながらも美しや」と云へるぞ。中々に面白かりける。梵網經古迹と云書に。此身不淨累骨所レ成。血肉便穢薄皮所レ持。種々臭穢九孔流漏。不淨似レ淨。謂皮上分白膏。熱血交所ニ重映一。誑レ心媚レ眼種々燒害。然諸愚夫曾无ニ厭背一云々と見え。また眞言の密法に。男女の髑髏を合せ。壇におき。彈指して觀ずる法有りと聞ゆれど。上に論へる如くなれば。採るに足らず。さて此大納言は誰なりけむ。何に釋子を信じたりとも。其北の方をそれに逢しめむと。爲けるは。物に狂ふ事なり。只不淨觀のみ爲つる故に事無れど。誠

にかの不淨行を行ひたらむにも。其を見つゝ有むか。甚もをこなる大納言にぞ在ける。さて古今集に「山田守る僧都の身こそ哀なれ。秋果ぬれば問人もなし」といふ歌を。彼の僧都のといふ。此實ならば。後には人に嫌はれし故の述懷なるべし。發心集に。雲風の如く遷ひ行ければ。田など守る時も有けるにや。と有れど。然る心には非ず。山田守ると云ひしは。山田の曾保登に。僧都を係たる意なり。然ればいかに道德顔したりとも。釋子に心は許すまじき物なりけり。

金剛山に行ひ住ける。聖人は。御門の御妃に愛著心を發し。現に妖魔と成りて嬈亂せり。其は今昔物語集に。天狗嬈亂の語といふ條に。文德天皇の女御。物氣に煩ひ給ひければ。其世に驗有る僧を召集めて。樣々の御祈。修法有けれども。露の驗なし。

此の妃を本書に。染殿の后と有れど。彼皇后には御まさず。贈正一位良相公の御女にて。多賀幾子と申す女御なり。其の由下に注ふを見て知べし。此をまた本書には。后と有れど。女御と記しつ。

而るに大和國葛木山の頂に。金剛山といふ山に。一人の貴き聖人住けり。年ごろ此處に行ひて。鉢を飛して食をつぎ。瓶を遣りて水を汲む。かく行ひ居たる程に。驗並なし。然れば其聞え高く成にけり。

鉢を飛し瓶を遣るは幻術なり。其由別に記せる物あり。さて此聖人の名は。何と云けむ傳はらず。

天皇この由を聞食して。彼を召て祈しめむと思食して。召べき由仰下されぬ。

天皇は文德天皇なり。此事は此天皇の。末の世に有し事にて。元亨釋書に考ふるに。天安二年の事と通えたり。されど國史に記されず。其は此書の下文に云如く。極めて便なく憚ある事なればなるべし。

使聖人の許に行て。此由を仰するに。聖人度々辭し申せども。宣旨背き難きに依て。遂に參りぬ。御前に召て。加持せしめ給ふに。其驗新にして。女御の一人の侍女。忽に狂ひて。哭喇けり走叫ぶ。聖人彌々加持するに。女縛せられて打責らるゝ間。懷中より一つの老狐出て。轉びて倒れ臥す。其時に聖人をもて。狐を繋がしめて。此を敎ふ。

これ狐の人に託たる事の。物に見えたる始なり。

此を教ふとは。人に託たる事の。畜類として有るまじき事の理などを。言誨せるを云ふにや。

女御の病一兩日の間に止給ひぬ。父良相公此を喜び。聖人に暫く候ずべき由を仰せ給へば。仰に隨ひて暫く候ふ間に。夏の事にて。女御は御單衣ばかりを。著給ひて御けるに。御几帳の帷を。風の吹返したる迫より。聖人髣に女御を見奉けり。見習はぬ心に。端正美麗の姿を見て。聖人忽に心迷ひ肝碎けて。深く女御に愛欲の心を發しぬ。然ども爲べき方なく。思ひ煩ひて有るに。胸に火を燒が如くにて。片時をを思過べくも思えず。遂に人間を量りて。御帳の内に入て。女御の臥給へる御腰に抱付ぬ。女御驚き迷ひて。汗水に成て恐給へども。御力に辭し得がたし。然れば聖人力を盡して嬈し奉るに。女房たち此れを見て。騷ぎ喤る時に。侍醫當麻鴨繼と云ふ者あり。宣旨を奉りて。女御の御病を療治せむが爲に宮の内に候けるが。殿上の方に俄に騷ぎ喤る音しければ。驚きて走入たるに。御帳の內より此聖人出たり。鴨繼聖人を捕へて。天皇に此由を奏す。天皇大に怒給ひて。聖人を搦めて。獄に禁せられぬ。

文德天皇の御紀。齊衡三年二月辛巳。當麻眞人鴨繼。爲二典藥頭侍醫一。筑前介如レ故と見ゆ。されど心得がたき事あり。其の由下に云ふを見るべし。

聖人獄に在りて。更に云事無して。天に仰ぎて泣々誓云く。我れ忽に死て鬼と成て。この女御の世に在まさむ時に。本意の如く女御に睦び奉らむと云ふ。獄司の者此を聞て。父大臣に此事を申す。大臣聞驚き給ひて。天皇に奏し。聖人を免して本の山に返し給ひつ。然れば聖人本の山に歸りて。此思ひに堪ずして。女御に馴近付き奉るべき事を。強に願ひて。憑む所の三寶に祈請すと云へども。現世に其事や難かりけむ。本の願の如く。鬼に成むと思ひ入て。物を食ざりければ。十餘日を經て餓死けり。其後忽に鬼となりぬ。其形身は裸にして。頭は禿なり。長八尺許にして。膚黑きこと漆を塗れるが如し。目は鋺を入たるが如くにて。口廣く開て。劍の如くなる齒生たり。上下に牙を食出し。赤き褌衣を掻て。腰に槌を差たり。此の鬼俄に女御の御ます。御几帳の喬に立たり。人々現に此を見て。皆魂を失ひ。心を迷はして倒れ迷ひて逃ぬ。女房などは此を見て。或

は絶入り。或は衣を被りて臥しぬ。而る間に此の鬼女御を懷きて。狂はし奉りければ。女御いと吉く取詭びて。打咲て。扇を差隱して。御帳の內に入給ひて。鬼と二人臥させ給ひにけり。女房など聞ければ。只日來戀しく。侘かりつる事共をぞ鬼申ける。女御も咲嘲らせ給ひければ。女房たち皆逃去にけり。

三寶の驗大要かくの如し。諸の人には。有のまゝに。鬼と見ゆれど。女御には美しき男に見えけむ故に。かく婬れたる御行ひは。有しと通えたり。

良久しく有て。日暮るゝ程に。鬼御帳より出て去にければ。女御何に成らせ給ひぬらむと思ひて。女房たち急ぎ參たれば。例に違ふこと無して。然事や有つらむと。思召たる氣色も無てぞ居させ給ける。少し御眼見ぞ。怖し氣なる氣付せ給ひにける。此由を內に奏ければ。天皇聞食して。奇異く怖しきよりも。何に成せ給ひなむずらむと。歎かせ給ふ。事限なし。其後此鬼每日に同じ樣に參るに。女御また心肝も失給はずして。現心もなく。此鬼を媚しき者に思食たりけり。然れば宮內の人皆此を見て。哀に悲しく。歎き思ふこと限なし。而る間に。此鬼人に託りて云く。我かならず。彼鴨繼が怨を報ずべしと。鴨繼此を聞て。心に恐怖るゝ間。その後幾程を經ずして。にはかに死けり。また其の男三四人有しも。皆狂病にて死けり。

鴨繼は。淸和天皇紀。貞觀十五年三月八日の下に。從四位下行主殿頭。兼伊豫權守。當麻眞人鴨繼卒とあり。然るに此妖事は。天安二年の事にて貞觀十五年より。十六年の前の事なれば。極めて餘人なりけむ。

然れば天皇竝に父大臣。此を見て極く恐怖れ給ひて諸の止事なき僧共をもて。此鬼を降伏せむ事を。懃に祈らせ給ひけるに。樣々の御祈共の有ける驗にや。此鬼三月許は不參ければ。女御の御心も直りて。本の如く成給ひにければ。天皇聞食し喜ばせ給ひて。今一度見奉らむとて。女御の宮に行幸有けり。例よりことに。哀なる御幸なりとて。百官みな仕たりけり。

此の文勢を見るに。今度の御幸は。此女御のかゝる嬈亂に逢給れば。以來は御幸ならじと思食し定給ふ物から。然すがに哀に思し食す方はありて。

一期の見納めとも思食して。入御ならせ給へると知れたり。最哀なる御事なりかし。
天皇既に宮に入らせ給ひ。女御を見奉らせ給ひて。泣々哀なる事ども申させ給へば。女御も哀に思食たり。形も本の如くにて御す。而る程に例の鬼。俄に角より踊り出て。御帳の內に入にけり。天皇此を奇異と御覽ずる間に。女御例の有樣にて。御帳の內に急ぎ入り給ひぬ。暫計有りて鬼南面に躍り出ぬ。大臣公卿より始めて。百官みな現に此鬼を見て。恐れ迷ひて。奇異と思ふ程に。女御また取次きて出させ給ひて。諸人の見る前にて。鬼と臥させ給ひて。艶に見苦き事をぞ。憚る處もなく爲させ給ひて。鬼起にければ。女御も起て入らせ給ひぬ。天皇爲べき方なく。思食し歎きて返らせ給けり。
我が天皇命はしも。挂卷も畏き。天照大御神の。美麻命に御まして。其の大宮は。大御神と共殿に。御座すべき宮にし有れば。假にも穢き法師などをば。近付給ふまじき事なるを。用明天皇の御世に。聖德太子と蘇我馬子が心として。豐國の名もなき法師を禁裡に入れ給へるより事始まりて。後々は然る古の道をば思し召さず。天神地祇の御政事をば。麁略に成し給ひ。何事に付ても。法師を召て物せさせ給ふ事と成しかば。皇神等の御守り薄く成し故に。ともすれば。法師の妖事に逢給ふこと多く。斯有いみじき妖魔の嬈亂をさへに受給ふ事も有しは。悲とも悲しきわざに非ざらめや。
然れば止事無らむ女人は。此事を聞て。專に法師をば。近付べからず。此事極めて。便なく憚有る事なれども。末世の人々に見しめて。法師に近付かむ事を。强に誡めむが爲に。かく語り傳ふと有り。
末世の人々に見しめて。法師に近付かむ事を誡めむと。かく憚有る事をし。祕さず書殘されたる。撰者の心こそ。最も賴もしかりけれ。上なる玄賓僧都がこと。下に記せる志賀寺の上人。清水寺の光別當が事など。思ひ合すべし。
是より後の事は。宇治拾遺物語に。女御物の氣に惱み給けるを。
本書に。此を染殿の后と有れど誤なり。そは下に。元亨釋書を引て注を見てる知べし。
或る人申けるは。慈覺大師の弟子に。無動寺の相應

和尙と申こそ。いみじき行者にて侍れと申ければ。召に遣はす。即ち御使に連れて參りて。中門に立たり。人々見れば。丈高き僧の。鬼の如くなるが。信濃布を衣に著て。椙の平足駄をはき。大木槵子の念珠を持たり。其體御前に召上べき者に非ず。無下の下種法師にこそとて。只簀子の邊に立ながら。加持申べしと各々申して。御階の高欄の本にて。立ちながら候へと仰せ下しければ。御階の東の脇の高欄に。立ながら押懸りて祈り奉る。女御は寢殿の母屋に伏給ひ。いと苦氣なる御聲。時々御簾の外に聞ゆ。和尙纔にその御聲をきゝて。高聲に加持し奉るに。人人身の毛よだちて思ゆ。暫し有れば。女御紅の御衣二つ計に押包まれて。鞠の如く簾中より轉び出させ給ひて。和尙の前の簀子に投おき奉る。人々騷ぎていと見苦し。内へ入れ奉りて。和尙も御前に候へと云へども。和尙かゝる乞食の身にて候へば。爭か罷り上るべきとて。更に上らず。始め上られざりしを。安からず憤思ひて。只簀子にて。女御を四五尺あげて打奉る。人々しわびて。御几帳どもを差出して立隱し。中門をさして人を拂へども。極めて顯露なり。四五度ばかり打奉りて。投入々々祈ければ。本の如く内へ投入れつ。

元亨釋書には。下に引く如く。神の投出たる由云へり。但し此は佛法の異術にて。餘慶僧正と云し人も。此法を行へり。其は古事談に。文範民部卿の。餘慶僧正を。貴き驗者として。人の妻を犯さるゝかと云はれけるを。僧正此の由を聞て。忽に民部卿の許に渡られにけり。主其心を得て。所勞の由云ひて會ざりければ。僧正大事なる事。自聞えむと有りけれど。出ざりける時に。然らば投出せと加持せられければ。屛風の上より投出して。惑ひひくめきける時。僧正さこそとて歸られけり。民部卿は。三日許死たるやうにて。惱み臥たりけり。是に因て。子ども二人を僧正に奉りて。免されて命生にけりと有り。大かた世に驗者と稱るゝ僧らは。かゝる幻術を用ひて。異驗を見するなりけり。 此事は。十訓抄にも記せるを。校合せて擧たり。○校者等云く。此の民部卿の言に。餘慶僧正を驗者と云ひて。人の妻を犯さるゝか。と云はれたるを思へば。其頃の僧徒の。驗德々々と聞

ゆる者は。其に事託せて。婬事を行ふが多かる故に。然云はれたる事と思はる。抑々この僧正に。さる事有りや無しや知らねど。此前後に擧られたる。名僧大德と聞えし。法師等の事を思ふにも。世に語り傳へざる濫行の。殊に多有けむこと。推量られたり。但し彼善珠僧正の如き。正しく蘖子と知れたらむは。然ても有りなむ。若も其事の知れざらむには。人の血統をも亂る。いと〳〵重き枉事なるを。世の人々。僧とし云へば考少を云はず。女の訓近づくを。忌はしとも思はざるは。深く彼の道に誑惑せられたるが故なり。返す〴〵異しき驗德なりかし。偖此の民部卿。この事に心著れたるは然る事なれど。元より學力薄く。其魂の居り固からざる故に。妖僧の幻術に。屏風の上より投出され。三日が程辛き目見つゝ。剩さへ己が罪とや思はれけむ。子等二人を法師に成て。其の由を謝されたる事と聞ゆるは。いとも怯く。片腹痛き事にこそ。

其後和尚罷り出るを。しばし候へと止むれども。久しく立て腰痛く候とて。耳にも入れず出ぬ。女御は投入られて後。物氣さめて。御心地さはやかに成給ひぬ。驗德新なりとて。僧都に任ずべき由を。宣下せらるれども。箇樣のかたゐ。何條僧綱に成べきとて。返し奉ると有り。

染殿后の。眞濟僧正の靈に。惱され給ひし事は。下に擧る如く。諸書に見たれど。金剛山の聖人の靈に。嬈亂せられ給ひし事は。今昔物語より外に所見なし。爰に元亨釋書なる。相應和尙の傳を考ふるに。天安二年藤妃名多賀幾子。良相女。嬰狂病。萬方不愈。藤公延應。應入宮。妃隔屏而臥。應持咒。不久神擲妃於屏外。飛而至應前。擧聲叫呼。應曰可還本所。妃騰飛入帳中。頃刻靈託妃。陳謝。狂病速息。貞觀三年藤妃又病。藤公又召應。應加之便愈。藤公大悅與己子國寶劒。是從唐國所送。特爲奇寶者也と有り。是正に宇治拾遺の事實に同じ。さて染殿の后の事は。此後の事として別に記せり。然れば今昔物語。宇治拾遺に。染殿の后と有るは。良相公の御女。多賀幾子の事を。事實の似たる故に誤れるなり。相應は慈覺大師の弟子なるが。良相公に代りて。剃髮せる僧にて。

其の薙染の時に。師告て。藤公索ニ度者一。是汝良緣之相應也。今名レ汝以ニ相應一。蓋取ニ藤公一字一也とて。負たる由なれば。旁々由ある事なり。天安二年は。此年の八月に。文德天皇崩御なりしが。其前後に。染殿の后の惱み坐る狀。國史にも見えず。多賀幾子は女御に御ければ。元より其事の見えざる。然るべき事なり。

釋の眞濟は僧正なるに。染殿の后に想を懸て。妖魅となりて惱まし奉りき。其は古事談に。貞觀七年のころ。染殿の大后天狗の爲に惱まされ。稍數月を經るに。諸有驗の僧侶。あへて能く此を降す者なし。

染殿の皇后は。文德天皇の御后。淸和天皇の御母に座まし。御名は明子と申す。大政大臣良房公の御女也。染殿は處名にて。正親町の南。京極の西に在り。便良房公の家なりと。拾芥抄に見えたり。さて此の事元亨釋書を始め諸書に。寛平五年の事とせり。孰か是なる事を知らず。

天狗放言して云く。三世の諸佛の出現に非すは。誰か我を降さむと。爰に相應和尚召に應じて參入し。兩三日祇候すれども。其驗有ることなし。本山に還り。無動寺の不動明王に對し奉り。事由を啓白して愁懷祈請す。その時明王背きて西に向ふ。和尚隨ひて西に坐す。明王また背きて東に向ふ。和尚また東に坐す。明王忽に背きて南に向ふ。和尚また南に坐して。涙を流し合掌稽首して云く。相應明王を戴き奉り。更に他念なし。而るに今何の過を犯せる事有て。かく相背き給ふぞと。明王の本誓を念じて眼を合する間に。

不動明王の本誓とは。其一に。見ニ我身一者發ニ菩提心一。聞ニ我名一者斷レ惑修レ善。聽ニ我說一者得ニ大智慧一。知ニ我心一者即身成佛。其二に。一持ニ祕密呪一生生而加護。奉仕修行者猶如ニ薄伽梵一。と有り。此事谷響集にも見えたり。

夢にも非ず。覺るにも非ず。明王示して云く。我れ生々加護の本誓によりて。去がたき事あり。今顯に其本緣を說む。昔に紀の僧正眞濟存生のとき。我が明呪を持す。今の汝が如し。而るに邪執ゆゑに天狗道に墮し。本修の功力によりて。皇后を逼惱ます。我また本誓の爲に。彼の天狗の護る故に汝に背く。我が呪を持せば。彼れ此れ同朋なるが故に。彼の天

狗を縛し難し。然れども汝堅誠なる故に。我己ことを得ず。汝に祕方を示さむ。汝宮掖に至らは。密に彼靈に語れ。爾は眞濟の靈に非ずやと。彼此を聞かば。必頭を低て恥赧らむ。爾時に大威德の明呪をもて加持せば。かならず降伏を得む。我また彼の邪心を回して。正道に入らしめむと。

宇治拾遺物語に叡山無動寺の相應和尙は。比良山の西に。葛川の三瀧といふ處にも。通ひて行ひけり。其瀧にて不動尊に云けらく。我を負て都卒の內院。彌勒菩薩の許に將行給へと。强に申ければ。極めて難き事なれども。强ちに申すことなれば將行べし。其尻を洗へと云ければ。瀧の尻にて水あみ。尻よく洗ひて。明王の頸にのりて。都卒天に昇りけり。爰に內院の額に。妙法蓮華と書れたり。明王云く。是へ參入の者は。此經を誦して入る。誦せざれば入らずと云へば。遙に見上げて相應云く。我この經を讀み。讀めども誦することは未叶はずと云へば。明王さても口惜き事なり。其義ならば參入叶べからず。歸りて法華經を誦してのち參るべしとて。掻負て葛川へ歸りければ。相應泣悲むこと限なし。さて本尊の前にて經を誦してのち。本意を遂けりとなむ。其不動尊今に無動寺にあり。等身の像なりと有り。釋書にも此像は。貞觀五年の比。相應が等身の長に自刻せる由いへり。染殿の后の御祈せし時に。彼方此方に向たる像。やがて其れなるべし。太じき釋魔の憑託たりけむ故に。然る異驗の有しなり。不動と云ふは。その陀羅尼祕密法に。毘盧遮那佛之化身と云ひ。大威德明王と云は。阿彌陀佛の化現なる由。眞言の書どもに見えたるが。此二佛共に元より有名無實なれば。其像に憑物なくては。斯る異驗の有べくも非ず。また若くは相應が心と。かゝる事の有しと。妄話せるも知べからず。法師の然る妄說は。珍有ねばなり。

相應和尙この告を得て。感涙に堪ず。頭面接足禮拜恭敬して。後日に召によりて復參り。明王の教誡の旨に任せて。加持し奉る間に。天狗を結縛せり。今より已後また來るべからずと。歸伏ののち。此を解脫しければ。后は尋常に復し給へりと有り。

眞濟がこと。淸和天皇紀。貞觀二年二月二十五日の

下に。僧正傳燈大法師位眞濟卒。俗姓紀朝臣左京人也。父巡察彈正正六位御園。眞濟少年出家學大乘道。兼通外傳。夙有識悟。從空海僧都受眞言宗。師既其器量特加提誘。遂授兩部大法。爲傳法阿闍梨。時年二十五。時人奇之。眞濟入愛宕護山高尾峯。不出十二年云々。天安二年八月。文德天皇寢病。眞濟侍看病。大漸之夕時論嗷々。眞濟失志隱居。遷化時六十一と見え。釋書に。眞濟卿に。惟喬親王と惟仁親王と。位定めのとき。眞濟は惟喬親王の驗者を承り。慧亮法師は。惟仁親王の驗者と成て。驗を抗けるに勝ずて。惟仁親王儲君と成り給へり。清和天皇是なり。こゝに眞濟大に志を失ひ。また文德天皇の看病に驗なきに依て。倍々志を失ひて。隱居せる由を記し。また贊曰に。眞濟色に惑ひて魅と成ことは。彼の不平の時に當りて。偷に皇后の美色を眼て。所守を失ひたるかと云へり。然るに本朝高僧傳に。極めて眞濟が魔と成ると云は。世の浮說なる由を辨へたれど。此後延喜十一年の頃。玄昭と云ける僧の。亭子院にて。修法のとき。眞濟が靈鵲と成て來れるを。玄昭捕へて爐に投じて燒けるに。また怨を結びて。異しき小僧に化して。空より降來る。玄昭法師此を見て。心身惱亂しけるを。淨藏法師が加持して。彼の靈を降伏せること。淨藏が傳に見え。源平盛衰記なる。住吉と名乘れる物の言にも。柿本紀僧正大法慢を起して。大天狗と成れり。是を愛宕山の太郎坊と申すと云ひ。雲景が未來記にも。愛宕山に集ひて世を亂さむと計ける天狗の中に。太郎坊とて眞濟もあり。是をもて神社考に。柿本紀僧正入高尾峯。起大慢心。爲太郎坊とは記されし成るべし。然るを澄圓僧が神社考志評論に。此を辨じて。既明王曰。回彼邪心。令入正道。若爾眞濟墮鬼趣得遁者也と云へれども。玄昭法師が修法の處に至れるは。是より遙後なるを如何せむ。不動明王が。彼の邪心を回して。正道に入しめむと云りとも。其は賴がたし。然るは其謂ゆる正道。やがて釋魔の正道なる故に。猶妖魅を脫れず。其は此後にも。依然として。天狗の列に有るを以て知べし。

釋の淨藏は世に。大德貴所と稱れたるに。近江介中

興が娘に奸して。眞弟子を生み。
今昔物語集。大和物語などに。近江介平中興と云ふ人有けり。家豊にして。子共數有ける中に。一人の娘有けり。年いまだ若して。形美麗に髮長く。有樣微妙かりければ。父母此を悲び愛して。目を放つ事もなくて養ける程に。兵部卿の宮など申しける止事なき御子。また上達部など。數夜這けれども。娘高ぶりて從はず。父母は天皇に奉らむと思ひて。聟取も爲ずて傅けるに。此娘物氣に煩ひて。日來に成りければ。父母此れを難き。旁に付て。祈禱共を爲せけれども。其驗も無りければ。思ひ繚けるに。其頃淨藏大德といふ止事なき有驗の僧有り。實に驗德新なること佛の如く也ければ。世擧て此を貴ぶこと限なし。近江介この淨藏を以て。娘の病を加持せさせむと思ひて。搆へて呼ければ。淨藏行にけり。介喜びて加持せさせけるに。卽物の氣顯れて。病止にければ。暫くは此て御まして。祈らせ給へと。父母强に云ければ。淨藏言ふに隨ひて。暫く有りける程に。髣に此の娘を淨藏見てけるに。忽に愛欲の心發りて。更に佗の事不思りけり。また娘も其の氣色を心得たりける。然て日來を經る程に。何なる隙か有けむ。遂に會にけり。其後此事隱すと爲れど。自然人粗知りにければ。世にも聞えにけり。然れば世の人此事を云繚けるを。淨藏聞て。恥て其家にも行かす成にけるが。我れかゝる名を取り。今は世にも有らじと云て。跡を暗まして失にけり。悔有けるにや。其後鞍馬山と云處に。深く籠居て絶す行ひけるに。前生の機緣や深かりけむ。常に彼娘の有狀の思ひ出られて。心に懸り。戀しく思ひければ。行ひの空もなくて耳有ける程に。打臥たりけるが。起上りて見れば。傍に文有り。弟子の法師の一人副有けるに。此は何ぞの文ぞと問ければ。知らぬ由を答へければ。淨藏文を取て披き見るに。我が思ふ人の手にて有けり。奇異と思ひて讀めば。かく書たり。「墨染の鞍馬の山にいる人は。たどる〳〵も返り來なゝむ」と有り。淨藏此れを見るに糸怪く。此は誰をもて遣たるならむ。持來べき便もおぼえず。奇異事かなと思ひて。今は此事止めて。偏に行ひをせむと思へども。なほ愛欲の思ひに勝

ずして。其夜忍びて京に出て。彼の女の家に行て。搆へて然々と云ひ入れたりければ。娘竊に呼入れて會にけり。然てまた夜の内に。鞍馬に返り行にけり。其になほ戀くて。女の許に此なむ。忍びて云遣ける。「辛くして思ひ忘るゝ戀しさを。うたて啼つる鶯の聲」と。其の返事に女「さても君忘れけりかし鶯の。啼をりのみや思ひ出つべき。」となむ有ければ。また淨藏大とく「我かためにつらき人をば置ながら。何の罪なき世をば恨みむ。」とも云ひ遣けり此樣に云ひ通す事。度々に成ければ。此事皆世に聞えにけり。然ればこの娘をば。近江ノ介限なく傅きて。女御に奉らむと思ひけれども。此く聞えにければ。親も知らずして。遂に見えず成にけり。此は女の心の極めて憾きなり。淨藏心を盡して云ふとも。女用ひざらむには叶べからず。然れば心から女の身を。徒に成つる也とぞ。世の人云ひ繚けると見え。また發心集に。彼の淨藏は。日本第三の行人なれども。近江の守永世が女に契を結べり。久米の仙人は通を得て。空を飛ありきけれども。下衆女の物洗ひける。脛の白かりけるに

欲を發して。仙を退して只人となりにけり。今の世にも。手足の皮を剝ぎ。指を燈し爪を碎き。樣樣の片輪をつけて。佛道を行ふ人は。其の發心の程こそ隱無れど。妻子を設くる例多かりとも有り。淨藏は。三善淸行第八の子にて。元亨釋書に。母夢ニ天人入ルト臥内ニ而娠ム。生レテ聰明無シ雙。七歲求テ出家ヲと有て。いと弱より。不測に法驗有りて。延喜の御世の頃に。活佛の如く稱れたるに此の如し。今昔物語に。此は女の心の極めて憾き由云へれど。女の心は誘ひて後にこそ。男よりは深けれ。何に思へども。大方ほ言ひ出がてに思ひ惑ふを。男こそ。然しも深くは思はぬ物から。假令の如くも誘ひ試るぞ常なる。然れば淨藏こそ憾けれ。さるは常に讀む法華經にも。女盡勿ニ親近ニといひ。また爲レ法猶不レ親厚ニ況復餘事とも有るをや。凡て此の物語に限らず。當時の習ひとて。何の書にも。僧の行狀をば。惡き事をも。惡からぬ樣に論る事いと多かり。心して見るべきなり。然は有れど。此れも元より人の子なるが。魔緣に引れて。幼より釋子と成たれど。取外して人の道の戀路に迷けむ

は宜なる事なり。かく思へば。極めて憾しとも思はずなむ。此は此の人のみならず。女に心を惑はしけむ僧は。すべて然にこそ。謾に釋氏の法のみ執りて議すべからず。有驗の名高き僧も。色に本心を亂せりといへども。本心を露せりとこそ云ふべけれ。なほ大和物語。後撰集などに。此女親のなくなりて後に。男と共に佗國に。はかなくて住けるを哀がりて。平兼盛の「をちこちの人目まれなる山ざとに。家居せむとは思ひきや君。」と詠て遣ければ。返事もせで。よゝとぞ泣けると有り。發心集に。近江守永世が女とあるは。今昔物語。大和物語などに。近江介中興が娘とあるを。誤れるなるべし。

釋道命は。阿闍梨として。誦經第一と世に稱せられ。其驗炳然き人なるに。和泉式部に深く睦び。

道命阿闍梨は。傅の大納言道綱の子にて。天台座主慈惠大僧正の弟子なり。幼より山に登りて法花經を受持す。初めは一と年に一卷を誦して。八年に一部を誦し畢る。音微妙にして曲を加へず。音韻を致さずと云へども。聞人耳を傾けて。讃歎せずと云ふ事無りしとぞ。然れども色に耽る僧にて。和泉式部に通けり。宇治拾遺物語。古事談。東齋隨筆などに。道命或る時。式部がり行て臥たりけるに。目覺て經を心を澄して讀けるに。八卷讀はてゝ曉に眠まむと爲る程に。人の氣はひの爲ければ。彼は誰ぞと問ければ。己は五條西洞院の邊にをる翁なりと答へければ。道命こは何事か侍ると云へば。今宵此の御經を承給はりぬる事。生々世々忘がたく侍ると云ひければ。道命法花經を讀ことは。常の事なり。など今宵しもいはるゝぞと云へば。五條の齋云く。清くて讀參らせ給ふ時は。梵天帝釋を始め。聽聞し給へば。翁などは近く參りて承給はる事能はず。今宵は御行水も侯はで。讀奉らせ給へば。梵天帝釋も御聽聞候はぬ隙にて。翁參り寄りて承給はり侯ひぬることの。忘れがたく侯也と云けりと有り。また古今著聞集に。道命阿闍梨と。和泉式部と。一つ車にてものへ行けるに。道命後むきて居たりけるを。和泉式部。などかくは居たるぞと云ければ。「よしやよし昔やむかしいがぐりの。ゑみも合なばおちもこそすれ」

とも有り。さて五條の齋とは。謂ゆる五條の道祖神なり。此は眞の塞神にはあらで。後の世に祭れる漢土の卑き鬼なる故に。佛法を貴ぶる妄語をば放けるなり。斯る事よりや言出けむ。今昔物語集に。此僧法輪寺の禮堂に籠りて。經を讀けるに。一老僧も共に籠たるが。其夢に。金峯山の藏王。熊野權現。住吉神。松尾神など寄りて。道命が讀經をきゝたまふと見たる由を記し。法花驗記には。殊に妄說を加へて。住吉明神向松尾明神言。聞此經睡。離生々業苦善根增長。仍每夜所參也。松尾明神言。我有近所不論晝夜。常來聽經。如是稱讚禮拜阿闍梨なごいへり。驗記は。今昔物語を取りて記せる記なるに。本書に見えざる妄語を加へたるなり。此をもて法師の記せる書には。殊に妄說多き事を知るべし。なほ今昔物語に。或る女に託たる靈。道命が讀經を聞て。惡道を免れて。天上に生るゝ由を云へる事あり。其は佛法を信ずる。愚人の靈の常なれば。怪むに足らず。さて此法師の死後に。或人の夢に。大きなる池の中に。經を誦する聲あるを。吉聞けば道命が音なり池の中を見るに。彼の阿闍梨船に乘て來て云く。我生たる時に禁戒を持たず。天王寺の別當の時に。佛物を用ひたる罪に依りて。此池に住す。兩三年を運ば。罪苦を畢て。都卒天に生るべしと云へりご有るは。僧の靈の常言なれば。怪むに足らず。然れご天上の果は覺束なし。

釋朝勸は。志賀寺の上人と聞えたるに。京極の御息所に想を懸て。ゆらぐ玉緒の古歌を詠じ。

寶物集に。京極の御息所と申すは。左大臣時平公の御女なり。延喜の女御に參り給ふ夜。寬平法皇の。出立見むとて。御幸して見給ひけるに。御心に著給ひければ。老法師に給はりぬとて。押取給へる人の御事なり。此の御息所志賀寺へ詣で給ひけるを。寺の聖人見奉り。次の日彼の御息所の御許へ參り。對面し給へりけるを悅びて。御手をとりて詠侍りける。「初春の初子の今日の玉箒。手に執からにゆらぐ玉の緒」と詠めて。今生の行業を讓り奉ると云へりと見え。盛衰記に。京極の御息所。志賀寺詣でのとき。彼等の上人心を懸奉り。今生の行業を讓り奉らむと申せば。「よしさらば眞

の道のしるべして。我をいざなへゆらゝ玉の緒。」と打詠め給ひて。御手を授け給ひけりと有り。上人の詠たる歌は。萬葉集に。中納言家持卿の。正月初子の日に。玉箒を賜はりける時に。讀出られし古歌なるを。詠め出たるなり。宇治大納言物語に。寶平の御門出家して。忌じう行はせ給ひければ。天狗のつき參らせて。京極の御息所におとし參らせけるとあり。

釋善祐は。粟田口僧正と聞えたるに。二條の后に密通し。

王代一覽に。寛平八年に。二條の后高子。五十六才にて。東光寺の善祐と密通有し故に。后は位をすべり。善祐は伊豆の國に流さると有り。拾遺集に。善祐法師流されける時。母の云遣しける「なく涙世はみな海と成なゝむ。同じなぎさに流れよるべく。」井澤長秀云。伊豆の國熱海に。紀の僧正が墓ならびに。僧正が植し都松とて有り。土俗云く。紀僧正が。手づから植し松なり。都をしたひ歎く故に。此松も枝悉く都に向ふ故に。都松といふ。又は染殿松とも云ふといへり。按ふに善祐法師が墓を。紀僧正と誤り傳へたるならむ。

古今妖魅考三之卷

平篤胤輯考

門人　薩摩國　木村鈴滿　同
武藏國　古橋宗弘
丹波國　池畑厚牧　校

釋ノ仁海も僧正として。或女房に密通して。成尊僧都と云ふ眞弟子を生しめ。

古事談に。成尊僧都は。仁海僧正の眞弟子なり。仁海或女房に密通して男子を生しむ。母堂の云く此兒成長せば。此事おのづから披露すべしとて。水銀を嬰兒に服せしむ。水銀を服せる人もし存命すれば。其陰全からずといふ。件の僧都は男女に於て。一生不犯の人なりといひ。また仁海僧正は鳥を食ふ人なり。房に有ける僧の。雀をえも云はず取けるを。ハウ〳〵と炒りて。粥漬のあはせに用ひけるなり。然れども有驗の人にて坐けり。大師の御影に違はずと云へりとも有り。空海の再生なりしにや。また十訓抄にも。仁海僧正は。小鳥を食れけるとぞ。さればとて尋常の僧。この眞似をすべからずとあり。雲景が未來記に。愛宕山に集ひて。世を亂さむと計ける天狗の中に。此仁海も有けり。また古事談に。成典僧正法服を著て。仁海の許へおはしたりければ。房人ら不思懸事也と驚きて。仁海に告申しければ。此の僧正は夢見てけりとて。又法服を着て出過たりければ。成典地に下て禮拜して。座に昇り申て云く。大師の尊顏を禮し奉らむと欲する志多年に及ぶ。而るに去る夜の夢に。大師を禮し奉らむと欲せば。仁海を見るべきよし。其告あるに依て。參入する所也と云へり。なほ此事元亨釋書にも見えたり。

清水寺の老別當が。進命婦に係想して煩ひ死し。

宇治拾遺物語。古事談などに。進命婦若かりける時。常に清水寺へ參詣しけるに。師の僧は淨行八旬の者なるが。法花經八萬四千餘部讀たる者なり此女房を見て欲心を發し。忽に病になりて。既に死なむとす。弟子ども奇をなして問けらく。此病の有さま。普通の事に非ず。思食す事のあるか。被仰ずは由なき事なりと云ふ。此時語りて云く。實には京より御堂に參らるゝ女房に。近く馴れて物を申さばやと思ひしより。此三个年不食の病に

成て。今は已に蛇道に落入むとす。心うき事なりと云ふ。爰に弟子一人。進命婦の許へ行きて。此事をいふ時に。女房ほどなく來れり。病者頭をそらで年月を送りたる間。髭髪は銀針を立たる樣にて鬼の如し。されど此女恐るゝ氣色なくして云ふやう。年ごろ憑奉れる志淺からず。何事に候ふとも。爭か仰せを背き奉らむ。御身くづほれさせ給はざりし前に。などか被レ仰ざりしと云ふ時に。病僧かき起されて念珠をとり。押揉て云ふやう。嬉くも來らせ給ひたり。八萬餘部讀たる法華經の。最第一の文をば御前に奉る。俗を生せ給はゞ。關白攝政を生せ給へ女を生せ給はゞ。女御后を生せ給へ。僧を生せ給はゝ。法務の大僧正を生せ給ふべしと。祈り畢りて即命終りき。其後此女房果して。宇治殿におもはれ參らせて。京極大殿。四條宮。三井寺の覺圓座主を生奉れりとぞと有り。此もかの不淨觀をせるにや。但しかく止事なき人々を生奉れるは。偶然の事なるを。其の驗の如く。後に附會したる說なり法華經いかで然るしるし有らむや。

延喜のころ。比叡の山の增基法師が。俊子といふ女に契れる。

大和物語に。俊子が志賀に詣たりけるに。增基君と云ふ法師有けり。此は比枝に住む。院の殿上もする法師になむ有ける。それ此俊子の詣たる日。志賀に詣合ひにけり。はし殿に局をしいて。萬の事を云ひかはしけり。今は俊子歸りなむと爲けり其に增基の許より。「相見ては別るゝ事の無りせば。且々物は思はざらまし。」返し。「いかなれば且々物を思ふらむ。なごりも無くぞ我は悲しき。」となむ有ける。言葉もいと多くなむありける。同じ增基君。やれる人の許は知らず。「草の葉にかゝれる露の身なれはや。心動くに涙落らむ。」と詠りけりと有り。俊子は千兼と云ふ人の娘にて。名高き歌作の婬女なるが。大和物語に。數條に出たり。後撰集の作者にも入たり。

釋親鸞が。觀世音の夢想と妄語して。肉食妻帶の宗を始めたる。釋日蓮は。貢高邪慢の惡言を放けるが。魔事なるは更にも言はず密に日藏といふ眞弟子を生けり。

此二人の事は。數多の書どもに見えたるが。此は別に委く。出定笑語の附錄に云へれば。此には記さず。但し不婬妄語の破戒に據りて。魔道に墮たる事は云ふも更なり。

偖また寶物集に。不婬とて。女の方へ。目をだに見遣べからずと。數多の經中に戒めて。女人は煩惱の源なり。一度も犯せば。五百世の間。彼に隨ひて六趣に輪廻す。毒蛇は見るとも。女人をば見るべからずとも。一見於女人。不離三惡道。永結三途業。何況於一犯。定墮無間獄など侍れば。見るにさへ三途の業を結ぶなり。定子の皇后宮は。尼になりて後に子を生給へり。增て女は心憂たてき物にて。華嚴經に。所有三千世界。男子諸煩惱合集。爲一人女人之業障。女人地獄使能斷佛種子。外面似菩薩内心如夜叉とも說たり。和泉僧正の高位に上るも國母に名を立る事あり。明達律師は母を犯し。順源法師は。知ながら娘を嫁ぐ。此道に於ては。忍がたき事と見ゆと有り。

其は同書に。和泉僧正は。行業貴くて。高位に登りし程に。關白兼良公の女。東三條女院に名を立たり。明達律師は。下野國の人なり。幼少にして天台山に登り。漸く學文して人と成けるまゝに。生國へ下りて。母を見むと思ひて下る程に。母また天台山へ上りし子の。戀しかりければ。見むと思ひて登りける程に。旅宿に行逢て。母とも知らで犯したる事あり。順源法師は。流轉生死往因を觀じて。孰人か我が父子ならぬやは有るとて。娘を妻とし。遂に往生の素懷を遂たる人なり。○篤胤云。明達順源等がわざは。我が皇神の道に於ては。豫母都國へ逐はるべき。重罪の極なるを。流轉生死の往因を觀じたる力によりて。極樂往生の素懷を遂たりと示せたる。釋魔の態こそ。いとも邪なりけれ。然れど往生したりと示せたるは。釋魔が世を惑はす。暫しの幻術にこそ有れ。實には皇神の道を破れる罪人なれば。豫美都國へ逐はれけむ事は。言まくも更なり。

此は實に然る言にて。右の倫は。すべて魔道を免ざる徒なり。遍正僧正の俗なりし時の子。由性法師が。其の親族の娘と語ひたる等は。父僧正の。法師の子は法師なるぞ宜とて。強て釋子と爲たるなれば。罪

經かるべきを。世に此事なく。貴み用ひられたる釋子たちの。此の心を除敢ず。自法の魔道に墮たりと思ゆるは。なほ刧河砂と多かるべきを。然のみは記し出ずなむ。

また楞嚴經に。若不斷婬修禪定者。如烝砂石欲其成飯。經百千刧祇名熱砂。何以故。此非飯本砂石成故なりとも云へり。婬欲心の少も有む限りは。決して佛道を成さずとの誡なり。斯有ば眞の佛道を成せる人は。古今に希なるべくぞ覺ゆる。

抑婬心といふ情の。然ばかり除敢ざる物なる事は。如何なる緣ならむと云に。此は人と有らむ者の。子孫生々すべき根元の道にて。此天地を鎔造し給ひし天皇祖神と御座す。二柱産靈ノ大神の。無窮に人草を造り出給ふと共に。各々賦屬し給へる。本性の最たる物にて。此本性を失たず隨ひ用ひて。子孫を生せしめ給はむ料に。彼の一物と睾丸とを具備して生しめ給へれば。此二物を具して生たらむ程の人は。小兒を除て。弱より老に至るまで。除かむと欲するとも。其は大海の潮を。汲干むと欲する如き癡事にて。決して敢ざる。甚も貴く辱き賜物の。本情なりかし。但し希には。彼の二物は有ながら。然る性なき人も有る由なれど。決めて虛言にや有らむとさへ思ゆるを。若實に然る人も有らば。其は不仁物にぞ有ける。俊成卿の歌に。「戀せずは人は情の無らまし。物の哀も是よりぞ知る。」また藤原隆信朝臣の歌に。「色にそむ心は同じ昔にて。人のつらさに老を知るかな。」と詠れたるぞ面白かりける。

然るに釋家の道は。此性を魔と名けて。天皇祖神の賦命に戻り。子孫生々の道を制むと。不婬の戒を立たるは。左道の炳然き物に非ずや。

但し僧尼をば。不婬戒を立たれど。俗人をば邪婬戒と立て。上に引たる楞嚴經にも。衆生其心不婬。則不隨其生死相續。と云へれども。其は姑く衆生にて有らむ間を云へるにて。遂には衆生は更なり。草木國土悉皆成佛とて。佛祖生替り死替り千身萬變して。皆その道に導ひ入れむとの本願なれば。次々に釋子と爲して。不婬戒を持しめ。世の人種を皆盡さむと云ふ道なる事を。熟く辨ふべし。

然ればこそ古今の佛子ら。此性を去敢ざりけむは。然有べき理なれ。其は佛子の去敢ざる耳ならず。其法を立たる佛祖ら。久遠劫より成佛して居たるが。機を見て當時の世に出たりと。口には言しかど。其は出山後の幻說にこそ有れ。山に入ざりし程は。妻を三人もちて。子をも三人生しめ。中にも羅喉羅と云し子は。成道と稱して。山を出たる後に。令生たりしをや。自身旣に自法を破れる。破戒の人なりしかば。自業の自刑を自得して。釋魔と成けむ事は。言まくも更なり。

羅喉羅が出生は。出山より六年後なりき。此等の事は委く。印度藏志に論ひ。其略說は。出定笑語にも云へれば。彼書どもに就て見るべし。凡て大小乘の。眞の經論にていふ說ぞ。

俗の癡人等が說に。佛は本地にて。神は垂跡なりと云ふ。もし此說の如くは。神は佛の隨意に成べければ。彼の男陽女陰の二物を付ず。婬心を賦せず。頭に髮をも生ぜずて。生れしむべき事なるに。何とも佛祖その身を始め。總ての人の身をも。神の心任に造らしめて。彼の魔羅惡者など卑めつゝも。其物を付けて。其事に苦ましめ。髮をも生じて生れしめ。其を幾度となく剃廻らし。えうなき勞煩をも爲しむるや。又かの神通を以て。出家せしむる者をば。其の戒をも持たるべく。悉く煩惱魔をも除べきに。何とて其を去ること能はず。生涯其道に惑はしめ。終には妖魅の惡道に墮せしむるや。彼の二物の有るが故に。婬欲心の有なるを。其を神の產靈の隨意に造らしめて。不婬の戒を立たるは。いかに不法の甚しきに非ずや。其を不法としも知らざるは。頑愚に非ずして何ぞ。是を以て。神は天地萬物の本地にて。佛祖も神の產靈に憑りて。生れ出たる物なる事を知り。婬心の決めて除くべからぬ理をも辨ふべし。

凡て此道を。邪事の如く云ふ道々は。其道に取りてこそ。正道のごと云へ。神の道にとりては。忌しき邪道なるぞ。神國に生れて。神の御裔と有む人は。よく此旨を辨ふべし。但し此は庸人の。餘りに事を辨へずて。歌文詞章の學にのみ耽りて事識めかし。口には和學と稱すれども。古道に志なく。歌物語の佛緣より。淫々として佛意に入り。博覽に誇る。貢高我慢の魔緣に引れて。其道に入

ゝむと欲る者多かるを。傍より見るが哀に。堪ざれば。千に一つも然る徒の。悟れる事も有らむかと。誨しおく語にて。眞の物識人に云ふ語には非ずかし。猶此書の末に論ふを見るべし。

上に論る如く。婬心の極めて除かれざるは。人の眞の道なれば。佛子等いかに。外面には然る事無らむ狀に。淸僧めかして。世に振舞けむも。內實は不淨行の。多かるべき事を思ふべし。然れば大納言雅俊卿の。一生不犯の僧を擇ばれしとき。迯たる法師も有しなり。

此は宇治拾遺物語に。京極の源大納言雅俊といふ人有けり。佛事を爲られけるに。佛前にて僧に鐘を打せて。一生不犯なるを擇びて。講を行はれけるに。或僧の禮盤に上りて。少し顏氣しき違たる樣に成て。鐘木をとりて振廻して。打もやらで。暫ばかり有ければ。大納言いかにと思はれける程に。やゝ久しく物も云はで。有ければ。人ども覺束なく思ひける程に。此僧わなゝきたる聲にて。皮都留美はいかゞ候ふべきと云たるに。諸人頤を放ちて笑たるに。一人の侍ありて。皮都留美は。いくつ許りにて候ひしぞと問たるに。此僧首をひねりて。きと夜部も爲て候ひきと云ふに。大方とよみ合へり。其紛れに早う迯にけりと有り。然れど此はいと正直なる僧なりしと聞えて。一生不犯の僧を擇ぶと聞て。破戒の罪を恐るゝ心に。とり亂し迯たるなれど。取亂さず不犯顏して居たらむ法師に。一人も此犯を爲ざるは。有らざりけむと覺ゆ。其は太秦の牛祭の文に。長久遠久拂比退久倍支者安里とて。種々の惡事ども擧たる中に。癲狂傳死病。鐘樓法華堂乃加波津留美。聖教破留大鼠小鼠女。云々と記し。長久遠久根國底國迄。拂退久戸支者也。と有るを見ても。此行法師の常に有し事は知られたり。此文は。橫川の源心僧都が作とも。高野の空棄僧都の作とも云ひ傳へたり。
何樣にも舊き物にては有るなり。

また希には强て勉めて。一生不犯なるも有けめど。只愼みたる許にては。蘊魔。煩惱魔を免れず。其情の根を斷て。失ひ終ねば。砂石を蒸して。飯と成さむと欲する如く。百千劫を經とも成道せず。魔道は免れずと云ふ。自業自得果なるを如何とせむ。此れ

に就て思ふに。古今著聞集に。南都に一生不犯の尼有けり。遂に惡樣なる名。立たる事も無て止にけり。臨終いかゞ有らむ。世に有がたき例に人々云ける程に。病を受て大事に成りければ。善知識の爲に。小僧を一人請じて。念佛を勸けるに。其尼念佛をば申さずて。麻羅の來るぞや。麻羅の來るぞや。と云ひて終りにけり。一期の間ゆゝしく。思ひとりては侍れども。心の中には此事を係有ければこそ。かく終りの言葉にも云けめ。何事も只心の引方に。善惡の報を定むるなり。能々用心有べき事にこそと有り。
また同書に。此頃一生不犯の尼來り。いまだ齡の盛にて。見目ことに清氣なりけり。世狀も佗しからずぞ侍りける。物詣しける時。ある僧此尼を見て。堪がたく艶に思けれども。如何はせむ。思ひの餘りに。家を見て置て歸りにけり。其の後思ひ忘るゝ事もなく。ひしと心に懸りて。日數を送りけり。いかにも然て止べき心地もせねば。人知れぬ思をしるべにて。彼尼の許に尋行きぬ。此僧見目事がら。世に尼に似たりければ。尼の效を爲て仕はれて。隙を伺はむと思ひて行たりけり。彼所に物申さむと按內しければ。やがて主の尼出て。誰にかと問へば。此僧胸うち騷ぎて。彌々堪がたく思ゆるを。念じて。別の事には候はず。世にうはの空なるやうに候へども。宮仕へ仕らむとて。參りて候なり。年ごろ賴みて侍りし男に後れて。賴む方なき獨人にて候。男空しく成し日より。狀を替て候へば。尋常の宮仕へなども。叶ふまじく候へば。箇樣の御遁世の御邊には。自づから召仕はるゝ事もや候とて。參りて候なりと云ければ。實にもうはの空には覺ゆれども指當りて人も欲かりければ。其心の底をば知らねども。物うち言たる狀なども。優氣なれば。左右なく受取りてけり。此僧まづ爲おほせたる心地して。末も賴母しくこそ思けれ。宮仕ふにかひ〴〵しく實にして。しかも又女とも覺えず。健なる方さへ有て。事に置て大切なりければ。一と筋に家の中の事いひ付て。又なき大事の者にてぞ侍りける。斯て今年も過ぬ。今は是程の大事の者に思はれぬれば。只世渡りにも不足無ければ。心の中の本意をば。兎角思ひなくさみて過しける。次の年の冬の頃よりは。夜寒か

らむ。今は我衣の下にも寢よなど云へば。嬉しき事限りなし。然に付ても。彌々心の動くこそ。靜めがたければ。猶とかく心に伺ひて。其年もくれぬ。此尼正月七日は。別して持佛堂に候ひて。齋ひしの時ばかりぞ出むずるとて。其間の事ども。此今參りの尼によく云ひ置て。朔日より佛前に行ひて候ひけり。七日が間勤よく爲て。八日は例の如くにて有ける。日比なる精進なる上に。樣々の勤めに。身も勞れけるにや。其夜はだらりとして寢たりけり。此僧思ふやう。數ふれば今年は三年になりぬ。同じ事を旨としてかくは侍るぞ。如何にも有らば有れ。只今取り付て本意を遂げむと思ひ。よく寢入たる尼の股を廣げてはさまりぬ。豫てより巧み設たる事なれば。夥しき物を苦もなく。根本まで突入れけり。大きにおびえ惑ひて。何といふ事もなく引外して。持佛堂の方へ走り行ぬ。此僧あはれ然思ひつる事を。今はよき事有らじ。如何せむずると。胸騷ぎて。角かごにかゞまり居て聞けば。此尼持佛堂にて。鐘をあまた敲き。丁々と物騷がしげに打て。何とやらむ物申す音して歸りき。此僧いかなる耳聞むずらむ。彌々咎遁れつべくも非ずと思へるに。此尼思はずに氣色惡からで。何所にぞと尋ぬる聲する。嬉しく覺えて。此に候と答へければ。やがて股を廣げて顏をはり。懸りてければ。返す〴〵思ひの外に覺えて。やがて押臥せて。年ごろの本意を。思ひの儘に迫伏せてけり。僧も何とて一番には引拔きて。持佛堂へは入給へるぞと問ければ。其事なり是程に心地よき事を。いかゞは我ばかりにては有るべき。上開を佛に參らせむとて。鐘打鳴して參りたりつるぞと答へける。其後は打解けて。隙もなくしられければ。女男に成てぞ侍けるとも有り。此は建長六年に記せる書なるに。此頃と書出たれば。撰者の近く見聞たる事と通えたり。事の有りやうを考ふるに。謂ゆる一向宗といふ宗の人の。何もかも上分は。阿陀彌佛へといふ趣に見ゆるは。其宗の尼なりしにや。

空華老人の天狗名義考にも。始めに擧たる楞嚴經の文を引て。中古より戒律の法廢れて行はれず。剃髮染衣して沙門の形と成り。僧正上人長老和尚など、

名乘れども。在家所持の五戒八齋戒をだも持つ事なし。況や沙彌戒比丘戒をや。何なる智者行者と云へども。婬を斷ずる者希なり。紫金臺寺の大僧正の。千手三河を寵し。一乘寺の僧正增譽の。盟師小院を愛せるが如き。宜しく竝せ按ふべし。魔道の盛なるも宜なりと云へり。千手三河が事も。古今著聞集に見えて。男色の婬なり。

其文に。紫金臺寺御室に。千手といふ御寵童有けり。兒目よく心さま優也けり。笛を吹き今樣など謠ければ。御最惜み甚じかりける程に。また參川といふ童初めて參たりけり。箏の琴ひき歌詠み侍りけり。此もまた寵ありて。千手がきら少劣ければ。面目なしとや。退出して久しく參らざりけり。或る日酒宴の事有りて。樣々の御遊び有けるに。御弟子の守覺法親王なども。其座に御座けり。千手はなど候はぬやらむ。召て笛吹かせ。今樣など歌はせ候はゞやと。申させ給ひければ。即御使を遣し召れけるに。此程所勞の事候とて參らざりけり。御使再三に及びければ。然のみは子細申がたくて參りにけり。紋紗の兩面の水干に。袖にむばらこき雀の居たるをぞ縫たりける。紫のすそごの袴を著たり。殊に粲にそうぞきたれども。物を思ひ入りたる氣色現にて。しめり返りてぞ見えける。御室の御前に。御盃をさへられたる折にて有ければ。人々千手に今樣をすゝめければ。「過去無數の諸佛にも。捨られたるをば如何せむ。現在十方の淨土にも。往生すべき心なし。たとひ罪業重くとも。引接し給へ彌陀佛」とぞ謠ける。諸佛にも捨られと云ふ處をば。少かすか成やうにぞ云ける。聞人みな淚を流しけり。興宴の座も事さめて。しめり返りければ。御室は堪かねさせ給ひて。千手を懷かせて。御寢所に御入り有けり。滿座いみじがり詈りける程に。其夜も明ぬ。御室御寢所を御覽じければ。紅の薄樣の重なりたるを引やりて。歌かきて御枕屛風に押付て有ける。「尋ぬべき君ならませばつげてまし。入ぬる山の名をばそれとも」。怪くて能々御覽じければ。參川が筆なりけり。今樣にめでさせ給ひて。又舊きに御心の赴くを見て。かく讀侍りけるにこそ。偕御尋有りければ。行方を知らず成にけり。高野に上りて。法師に成

けるとかや聞えけりと有り。古事談に。高野の御室の御寵童に。常在參河といふ有りて。それらに琵琶箏などを習はしめ給へる事ありて。其本注に。高野の御室とは。覺法と申て。白河院天皇の御子にて。師子王宮ともまをし。常在は後に法眼に補せられ。三河は後に三河聖人とて。高野山に住せる由見えたるは是なるべし。

呪師小院が事は。宇治拾遺物語に見えて。此れも男色の婚なり。其文を略きて引かば。一乘寺の增誉僧正は。經輔大納言の子なり。貴くて活佛なり。二た度大峯に入り。蛇を見る法を行ひ。龍の駒を見などして。有れぬ有狀をして行ひたる人なり。此の僧正呪師小院といふ小童を。餘りに寵愛して。只法師に成て。夜晝放れずつきて有れと有けるを。童いかゞ候ふべき。今しばし斯て候はゞやと云けるを。僧正なほ最愛さに。たゞ成れと有ければ。童しぶ〳〵に法師に成にけり。偖過る程に。春雨打そゝぎて徒然なるに。僧正人を呼て。呪師小院が見なりし程の。裝束は有るかと問るゝに。納殿にいまだ候と申ければ。取て來よと云はれけり。持て來れば。此を著よと云れけり。呪師小院見苦しく候ひなむと否けるを。只著よと迫らるれば。傍に立忍びて。そうぞきて出來りけるに。露昔にかはらざるを。僧正うち見て。かいを造られけり。小院も打泪ぐみて立りけるに。僧正一曲をと望れければ。少し覺て候とて。一拍子いと面白く舞けるに。僧正聲を放ちてぞ泣れける。偖こち來よと呼よせて。搔撫つゝ。何しに出家をさせけむと悔まれければ。小院もさればこそ。今しばしと申候ひし物をと云ふに。裝束ぬがせて。障子の內へ具して入れにけり。其後はいかなる事が有けむ知らずと有り。〇猶男色の事は。北村季吟の著せる。岩つゝじといふ書有て。古今集より以後。代々の撰集。また物語書の中より抄出して。三十餘人の事の見えたるが。大抵は法師なるに就ても。此行は。僧徒の專とせし事と思はる。此の外和漢の書に記せる事多かれど。さのみは引出ず。

上に擧たる事實どもを考へ通して。世々の法師等の。魔緣を脫れたるは。希なる事を悟るべく。魔緣を脫れざれば。悉く魔道に墮て。妖魅の部屬と成けむ事

疑ひなし。其やがて自得果なるを如何にせむ。あな忌々しき業報なるかも。

猶その魔界に落たる状は。次々に記せる事を見て知るべし。

さて釋魔の境界に墮入る者は。三熱の苦さて。毎日に三度鎔銅を飲み。種々の火攻に逢ふさいふ事の聞ゆるを。前には釋子に成れる者さ云へども。神の産靈に依りて生れ出し者なるに。神の道には。死後に然る刑を設けて。罰し給ふ事の證は。古書に曾て見ざれば。決めて俗の妄説にこそさ思へりしかど。和漢古今の實事に。正しく其事の聞えて。更に浮たる説に非ざれば。深く考ふるに。實に本因有て。彼界に入る者は。其の苦を受ること。灼然き事になも有ける。其の本因は。因緣僧護經さ云ふ物に見えたり。其趣は僧護比丘さて。佛戒を持たず放逸にて。種々に教ふれど用ひざる者有りしかば。佛祖のそを強に。戒を持しめむさて。彼の比丘が伴を失ひ。路に迷へる程に。破戒の者の鬼界に墮て。苦を受る有狀を。變現して見せたるが。本因なりけり。

因緣僧護經といふ經は。三藏聖教目錄に。小乘經單譯の處に出て。信に釋迦氏の遺事を記せる物さ見えたり。凡て佛經は。大乘部には。釋迦氏の本説甚希なるを。小乘部には。實の遺説を存せり。其由は印度藏志に論へり。

其文に。僧護比丘失伴渉路未遠。聞犍椎聲尋聲向寺路値一人。即問曰何故打犍椎。其人答曰入温室浴。僧護念言我從遠來可就僧浴。即入僧房見諸人等狀似衆僧。共入温室。見諸浴具浴衣瓦瓶坻器浴室盡皆火然。其時僧護見諸比丘。共入温室入已火然。筋肉消盡骨如燋炷。僧護驚怖問諸比丘汝何人。比丘答曰。汝到佛所可問佛。便捨寺跳走進路。未遠復値一寺。其寺嚴博殊能精好。亦聞犍椎聲衆僧食飯。食器敷具。人及房舍盡皆火然。復見一寺。諸食器中盛滿鎔銅。諸比丘等皆共食已火然。咽喉五臟皆成炭。火流下直過云々。詣祇洹精舍問佛。佛言汝所見是地獄罪人。迦葉佛時出家比丘。不依戒律順己愚情。以僧浴具及諸器物隨意而用。持律比丘常教執則。不順其教。從迦葉佛涅槃已來。受地獄苦至今不息云々。是故我今更重告汝。當勤持戒頂戴奉行さ見えたり。

此は佛祖の例の神通方便をもて。變現して見せたるなること。印度藏志叉。出定笑語に論へる。其弟の難陀が出家せむ事を辭ぶを。天堂地獄の有狀を。變現し見せて驚怖せしめ。遂に出家と成したる方便と。同じきを以て悟るべし。

諸の比丘等に問へば。比丘等が答に。汝佛所に到りて。佛に問ふべしと曰しと有るも。正に同じ方便なり。また迦葉佛と云ふは。此も佛祖の方便に。其道の新治道ならぬ證にとて立たる。過去七佛の中にて。有名無實なる。幻說の佛名なること。富永仲基が說有しより。心智き人の。普く知れる事なるをや。然る質なき佛名をいひ出て。其時よりと云へるにて方便の變現なること。殊に著明なりかし。

其はまづ諸越にて。正にこの事實の有しは。唐の法華傳といふ書に。隋相州僧玄緒。有同房友道明者。以大業元年三月。於本寺卒。其年七月玄緒因行至郊野。日暮。忽遇伽藍。便往投宿。至門首。乃見道明。從寺方出。儀容言語不異平生。遂引緒至房。緒私心怪之。而不敢問。至後夜。明遂起。謂緒此非常處。慎勿上堂。至曉鐘時。復來語緒。不許上堂。而形體頓消衰顏色殊改。明去後緒遂祕往食堂後窻邊。覘其事。禮佛行香皆如僧法。昔貴高逝者多列座而在。維那唱施粥已。即見有人舁粥將來。粥皆作血色。行食遍竝。見諸僧舉身火然。宛轉悶絕躃地。如一食之間。維那打靜。諸僧一時無復苦相。緒駭懼。還所止房。少時明至。轉更憔悴。緒問之。明曰此是地獄。苦不可言と見えたり。

かゝる類の事共は。法苑珠林に甚多く擧たり。披見るべし。

また皇國籍にも。此にいと能似たる事ども有り。そは今昔物語集に。東大寺に住ける僧あり。花を摘とて。東の奥山に行たりけるに。道を踏違へて。山に迷けり。何處とも思えず。谷迫りて。夢の樣に思えて步み被行ければ。我は何に成ぬるにか。迷神に値たる者こそ此は有なれ。何處に行にか有らむ。怪くも有かなと。思々ぞ行きけるに。

迷神とは。狐などの類をいふ。人を途に迷はすればなり。宇治拾遺物語。今昔物語等に。左京の屬俊宣と云ける人。この迷神に惱まされし事見えた

り。平なる瓦葺の廊の樣に造たる有り。見れば隔々しき僧房の樣なり。恐々内に入りて見れば。東大寺にて死し僧有り。恐しき事限なく。早う此僧の。惡靈などに成て。住む處なりけりと思ふに。此死たる僧この僧を見て云く。汝何にして此處には來たるぞ。此は人の輙く來べき處に非ず。希有の事哉と。此行たる僧答云く。我れ花を摘まむが爲に。山に行つるに我にも非ず恍てる心地して。かく歩み來つる也と。死たる僧云く。かく對面したる。極て喜ばしきことなりとて。泣こと限なし。行たる僧極めて恐思へども此對面したるは。喜ばしき事也とて共に泣く。死たる僧云く。汝深く隱れゐて。壁の穴より密に臨きて。我が受る處の苦を見よ。我れ寺に在しとき。徒に僧供を請食ひて過ぎ。倦たる日は入堂をもせず。また學問をも爲ずして在き。其罪によりて。毎日に一度。堪がたき苦患を受るなり。漸く其期に至たりと云程に。此僧の氣色は。只替りに變りて。惱ましげに恐ろしげに成ぬ。此を見るに。今の僧も堪難く思ゆ。本の僧云く。疾く隱れて。此壺屋に入りて。

壁より臨けと云へば。言に從ひて。這入りて戸を閉て。壁の穴より臨けば。忽に唐人の姿の如き者ども。極めて恐しげなるが。額に帕額したる四五十人許。空より飛が如くに下り來ぬ。まづ盜人を打つ機を。忽に土を堀て立てつ。其後火を大きに備けて。鑊を居ゑて。銅を入れて湯に涌しつ。其中に主人と思しき人三人有て。胡床に著き並たり。後に赤き幡ども立並べたり。其氣色を見るに。更に此世の事と思えず。此人々極めて恐氣なる音をもて。疾く召出よと云へば。使二三人ばかり走分れて。此僧房の内に入りて。暫計あれば。十人許の僧を緋の繩をもて。繩列ねて將出たり。其中に見知たるも有り。見知ざるも有り。皆此機の本に將て寄りて。機ごとに結付つ。機の員は。此僧どもの員の如く有れば。餘たるはなし。皆動べくもなく寄せつ。其後大きなる金箸をもて。僧の口に入れて。口有るかぎり開けぬ。其口に鐵鑵に銅湯を入れて。僧共の口ごとに宛て入れつれば。暫許ありて。尻より流れ出て目耳鼻より烟いでぬ。身の節ごとに煙出て。各々涙を流して叫て音悲しう。僧ごとに皆次第に飮ませ畢つれば。皆解免して本の

房々に返し迸りつ。其後此人ども空に飛昇りて失せぬ。此僧此を見て。生たるにも非ず。爲方なく衣を引纏ひて臥たり。然る間に房主の僧來て。壺屋を開れば。起上りて見るに。術无き氣色にて。見給ひつやと云ふ。此僧云く。此は何にして何れの程より。此る苦患を受給ふぞと。房主の僧云く。我死てすなはち此所に來て。此僧房に住なり。寺にして徒に信施を受て。償ふ方無りしに依りて。此苦を受るなり。速に返り給へと云ければ。此僧其の處を出て。道のまゝに返りけりと有り。また砂石集に。南都の興福寺に學匠有けり。佗界のゝち。彼の生處を床しく思ふ弟子ありき或る。時春日野にて。師匠に行合ぬ。和御房。わが生處を不審に思へり。いざ見せむとて。春日山の奥へ具して行くに。興福寺の如き寺あり。三面の僧房あり。彼の師が房へ呼入れて。此に居て。わが有狀を見よと云ふ。さて佛事講行と覺しくて。面々に法服を取り。裝束を著て。講堂と覺しきに並居て問答すること常の如し。其後空より足ある釜。ふわ〳〵として落たるに。銚子土器體の物も。つゞきて落ち。獄卒の樣なる者落下りて。釜の中に銅の湯の沸たるを。銚子に汲入れて。土器にて押廻し。僧等に飮しむるに。術なげなる氣色ながら。皆飮て頓て身は燒失せぬ。さばかり有て。また本の如く蘇生して。我房へ歸り。我等名利の心にて。佛法を學行せし故に。かゝる苦を受るなりと云けるを見聞て弟子の僧も。學匠にて公請など勤けるが。此れより發心して。修行に出て。何處ともなく逐電しけりと有り。此文に其苦界を春日山の奥なりしと云ひ。上なる法華傳の文にも。郊野なりしと云へれど。此は共に我人の。見むと欲するとも。其緣なくては見らるゝ處に非ず。また元より神の御態と。かゝる苦界を設け置給ふにも非ず。即その因緣は。佛祖始めて地獄の苦相を說し以來。その說に應じて妖魅の變現せるなり。此を佛書に邊地地獄と云へり。其は新婆沙論に。邊地地獄或在二谷中一。或在二山上一。或在二曠野一。或在二空中一。と見えたる是なり。

空華老人も法華傳の說と。砂石集の說とを。僧護經に引合せて。天狗の苦相正しく符合す。尤信ずるに足れり。人その住處も。人界と雜はり居て。常人の見る所に非ず。華嚴經に。夜叉宮殿與二人宮

殿一同在二一處一。而不二相雜一。各隨二其業一所見不レ同。と云へるに全く同じ。また法華傳の文に。貢高の逝者多く列坐して在りといふ。貢高我慢は天狗の業因なるが故なり。また付法藏經に。堂閣嚴レ飾衆僧經行禪思。日時以到鳴レ槌集食。食將欲レ訖。爾時飾膳變成二膿血一とある文も。天狗の苦相に似たりと云る。實に然る說なり。また佛者の古き諺に。現在貪著未來鐵丸とも。智度論に。以レ貪二著美味一故當レ受レ苦洋銅灌レ口噉二燒鐵丸一ともあり。

但し佛說に因りて。出來たる界のみならず。元より神界あり。また仙界もあり。其宮殿また野にも山にも。何處にも有りて。是はた現人の宮殿家居と同く。一處にも在れど相雜はらず。其緣なくては。常の人に見ゆる事なく。適には見る人も有れど。所見同じからず。隱顯定なきこと。神境の事は。神世の海宮の有狀をもて知り。仙境の事は。諸越の桃源の故事などを以て悟り。其心を擴めて佛說より出來し。妖魅界の事をも辨ふべし。

神境と仙境との事は。古史傳また赤縣太古傳。三神山考などに委く註せれば。此書には唯その大凡を云のみなり。

偖また佛法に寺の物を仕ふ者は。死て後甚じき苦患を受ると云ふ誡有り。此に就て今昔物語集に。奈良の大安寺の別當なりける僧の娘の許に。藏人なりける人の忍びて通ふ程に。互に去難く相思ひて有ければ。時々は晝も留りけり。或時晝寢したりける夢に。俄に此家の內に。上下の人喤て泣合たり。何なれば斯は泣にか有むと怪ければ。立行て見るに。舅の僧姑の尼公より始めて有限りの人。皆大なる土器を捧げて。泣迷ひけり。何なれば此の土器を捧げて泣やらむと思ひて。熟に吉見れば。銅の湯を。土器ごとに盛れり。打責て鬼の飲せむにだにも。飲べくもなき銅の湯を。心と泣々飲なりけり。辛くして飲果つれば。亦こひ副へて飲む者も有り。下の下衆に至るまで此を飲ざる者なし。我傍に臥たる娘をも。女房來て呼べば。起て往ぬるを。不審さにまた見れば。此女も大なる銀器に。銅の湯を一と器入れて。女房とらすれば。此女取りて。細く勞たげなる音をさし擧て。泣々飲めば。目耳鼻より焔煙り出ぬ。奇異と見て立たる程に。また客人に參らせよと云ひて。土

器を臺に居ゑて女房持來る。我もかゝる物を飲むずるかと思ふに。奇異くて迷ひ騒ぐと思ふ程に。夢さめぬ。驚きて見れば。女房食物を臺に居ゑて持來り。寺の別當なれば寺の物を心に任せて仕ひ。寺の物を食にこそ有らめ。其がかくは見ゆる也けりと。忌々しく心疎く覺えて。娘の思はしさも忽に失せぬ。然れば擕へて。此を食はじと思ひて。心地惡き由を云ひて。物も食ずして出ぬ。其後は遂に。彼方へ行かず成にけりと有り。

此事は。宇治拾遺物語にも出たれば。校に文を合せ見て。多く今昔物語によりて記しつ。

此は上に引たる僧護經に。順二己恣情一。以二僧浴具及諸器物一。隨レ意而用。持律比丘常教二執則一不レ順二其教一。從二迦葉佛涅槃一已來。受二地獄苦一至レ今不レ息。云々なごいひ。僧等のそを口實として有る故に。それ即實の業報となりて。幽にかゝる苦刑の出來て。死ぬればやがてその報を受る有狀を。まだきに藏人なる人の夢に見はせるなり。此藏人なりける人は。何なる神の御靈をか賜ひけむ。正にその有狀を夢に見て。疾く此女の許に行かず成しは。甚も賢かりけり。此に就て按ふに。今の世の僧等に。寺の物を用ざる者一人やは有る。また世に在る人の。事缺たる狀に。法師の女を妻とするも多かるは。其後世の業報の程の。思ひしられていとも哀なりかし。

また今昔物語集に。比叡山に在し僧の。山を去て。攝津國に行て。妻を儲けて在けるに。其郷にて法事行ひ。供養などするには。此僧を呼て講師としけり。此僧其行ひの餅を多く得れど。人にも與へず置たりけるを。妻が此餅を。益なく子共從者に食せむよりは。破集めて酒に造らばやと思ひて。夫の僧にかくなむ思ふと云へば。いと吉かりなむと云ひ合せて。酒に造りけり。其後久く有て。其酒出來たらむと思ひて。妻往て壺の蓋を開きて見るに。内に動く樣に見ゆ。怪と思ふに。暗くて見えねば。火を燈して壺に指入れて見るに。大きなる小き蛇。一壺に頭を指上て蠢めき合たり。穴怖ろし。此はいかにと云て。蓋を覆ひて逃去りぬ。夫の僧に此由を語れば。其は女の僻目か。我行て見むとて。火を燃して臨くに。實に多くの蛇有て蠢

く。然れば夫も愕き去りぬ。さて壺ながら遠く、擔出て。野に窃に棄つ。其後一兩日を經て。男三人。其壺を棄たる側を過けるに。彼は何の壺ぞと云ふ。一人の男よりて。其蓋を開けば。中より酒の香匂ひ出たり。二人の男にかくと云へば。寄て共に臨くに。壺に酒ひと壺入たり。此は何なる事ぞと云程に。一人が我れ此酒を吞てむと云へば。二人の男。野中にかく棄て置たる物なれば。よも只にては棄じ。定めて様ある物ならむ。怖し氣に否吞まじと云ひけるを。一人の男は。極たる上戸にて有ければ。酒の欲さに堪ずして。其達は否吞ざるぞ。我は譬へ何なる物を捨置たるなりとも。只吞てむ。命も惜からずと云て。腰に付たりける具を取り出して。指救ひて。一坏吞たりけるに。實に微妙き酒にて有つれば。三坏吞てけり。今二人の男も。此を見て。其も上戸にて有ければ。欲と思ひて。今日かく三人列れぬ。一人が死なむには。我等も見弃てむや。譬死ぬとも。同くこそは死なめ。いざ我等も吞てむと云て。二人も吞けり。世に似ず美き酒にて有ければ。三人指合て吉く吞てむと云て。大きなる壺にて。其酒多かりけるを。指荷ひて家に持行て。日ごろ置て吞けるに。更に事無りけり。彼僧は佛の物を取り集めて。人にも與へず。酒に造たれば。罪深くして蛇に成けり。悔恥て有けるに。其後程を經て。三人の男こそ。野中にて酒壺を見付て。家に荷ひ往て吞ければ。美き酒にこそ有けれ。など語りけるを。傳へ聞て恥悲みけり。此事はかの酒吞たる男ども。また彼僧も語りけるを聞繼て。語り傳へたり。此を思ふに。佛の物は量なく。罪重き物なりけりと有り。此も佛の物を仕ふを。重き罪と立たる戒のあるに依りて。然る報の怪しき事も出來しなり。此も釋魔の態なる事は云ふも更なり。此外にも佛の物を仕ひて。惡報を受たる事實は。書どもに甚多く見えたり。皆此に準へて辨ふべし。

天堂地獄の説は。元より曾て無りし事を。妄説せるに非ず。印度藏志に委く論へる如く。天堂の説は。天御國の傳の。且々遺れるに基づき。地獄の説は。夜見國の傳の片端遺れるを取りて。佛祖よりは遙前に出たりし。婆羅門の徒の説弘めたりしを。佛祖其

說を採りて。勸佛道の具に用ひたるが。地獄の說は。其儘に用ひたれど。天堂の往生は。なほ生死を出ること能はざれば。卑しと爲て。始めて東西南北に。各々佛の淨土ある由を言ひ出て。中にも西方の。極樂淨土といふに往生するを。最究竟の往生とする由を說弘めたるなるが。其說實の如く成りて。天竺は更なり。東漸して。漢土にも此邦にも。中古よりして。眞に其說相に符へる。實事どもの多有けるこそ。甚も奇異かりけれ。天堂地獄有無の事は。旣く谷響集に。

問曰。天堂地獄是有是無。答。佛向レ無中一說レ有。眼見二空華一。眼前見二地獄一不レ避。心外聞二天堂一欲レ生。殊不レ知。忻怖在レ心善惡成レ境。但了二自心一自然無レ惑。

以上の文は。佛祖通載なる說を採て。記せる由見えたり。

客疑曰。如レ言下佛向二無中一說上有者。似レ云下實無二天堂地獄一。而佛方便假說且止中小兒之啼上奈下世不レ信レ佛者。往々作二是見一撥中遮因果上何。答。金剛上味經云。佛告二文殊一。地獄門從二何所一起。文殊言。一切法是自妄念起レ相。自妄念故一切凡夫自業纏。以二繫縛一故則是地獄。雖レ非二是有一而令三受者受二彼苦一。譬如三人於下睡夢中上。而見下自身墮二於地獄一。見二百千萬火所レ燒。見下捉二其身一擲中湯鑊中上。彼人夢裏吼言二極苦一。諸親問二汝何所レ痛。答三我受二地獄鑊湯之苦一。諸親言勿レ怖以二睡眠一。彼人聞已方知二睡夢虛妄一。如レ是知見二身心得レ安非レ有。自說言三我墮二地獄一。諸法皆是虛妄生故。佛讚二文殊一善哉。一切地獄如レ是見無レ有二地獄一と云へるを以て。佛祖の本意を辨ふべし。

此經文を本書に。金剛上味經とあれど。藏經目錄に。然る經名は無れば。決めて金剛三昧經なり。此も所謂大乘の經にて。佛祖の時よりは。最後に記せるなる故に。有名無實の文殊が語に託せれど。識は佛祖の本說なること。言ふも更なり然るは佛祖の道を弘むるに。天堂地獄の舊說は。元より信ずる心なき物から。姑の方便に用ひたる故に。或る時は其本心をも露しけむ。但し其は眞の委しき。古傳說なき國にし有れば。天堂地獄の舊說の。慥ならざりけむ故に信ざりけむ。然れど天堂の說は。天御國の傳の遺り。地獄の說は。夜見國の傳の遺れるなれば。本因の傳へなき事には非ず。然るを信せぬ心ながらに。種々その變相を付増して。

說たりしを。信じ怖るゝ倫も。然すかに多有しかば。かく本心を呈露して。實は天堂も地獄も無れど。心惑ひの虛妄に繫縛せられて。然る處有りと。自身に其の相を見す由を論ひけむ。其說の遺れるを。此經に擬ひ收たるならむ。其は左まれ右まれ。かく謂ゆる大乘の經說に。佛祖の既に。天堂地獄の變相を。睡夢の虛妄に譬たれば。是に準へて。極樂淨土の變相の。虛妄なる事をも辨ふべし。

さて佛祖の本心は。かく天堂地獄を。無に斷せる物から。方便に假說せる。天堂地獄極樂の說相に符へる。實事に逢へる人の。和漢にいと多かるは。何なる事ぞと考ふるに。佛祖世に在しほど。其幻說を。天地と共に立通さむと。石凝せる心より。其說の證とせむが爲に。種々の相を變現して示せたるを。人既に眞の說と信じたる故に。例の魑魅妖鬼など所得て。其態を成し。佛祖世を避りて後は。倍々に彼の突立たる靈の。凝堅まりて。在世の間に說たりし幻說を。實事にせむと。種々の靈驗變相を現して。人を其道に面向しめ。

蓋これ其の突立たる意なりき。然るは地藏本願經に。爾時世尊舒金色臂。摩百千萬億諸世界。諸分身地藏菩薩頂言。吾於世敎化剛强衆生令心調伏。分身千百億廣設方便。或有利根聞卽信受。或有善果勤勸成就。或有暗鈍久化方歸。或有業重不生敬仰。如是等輩衆生各々差別。分身度脫。或現男子身。或現女人身。或現天龍身。或現神鬼身。或現山林川原河池泉井。利及於人悉皆度脫。或現天帝身。或現梵王身。或現轉輪王身。或現居士身。或現國王身。或現宰輔身。或現官屬身。或現比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷身。乃至聲聞。羅漢。辟支。佛。菩薩等身。而以化度。但非佛身現前。汝觀吾累劫勤苦。度脫難化衆生。其有未調伏者時。汝當憶念。吾在忉利天宮殷勤付囑。令世界衆生悉過佛授記。爾時諸世界分身地藏菩薩。共復一形。涕淚哀戀白佛言。我從久遠劫來蒙佛接引。獲不可思議神力。具大智慧。使我分身。徧滿百千萬億恒河沙世界。毎一世界化百千萬億身。毎一身度百千萬億人。令歸敬三寶。唯願世尊。不以後世惡業衆生爲慮。爾時佛讚地藏菩薩言。善哉々々。吾助汝。汝

能成就久遠劫來發弘誓願。廣度將畢證菩提。と云しと有を思ふべし。種々に身を變現して。其道を弘むる本願なること灼然く。地藏さへに。やがて其の變現と通ゆるをや。此經は。佛祖忉利天にて說法の時に。地藏の來由。その本願を演ぶる趣に書たる。大乘の經にて。佛祖の世を過て後に。記せるなれど。佛祖の本願は。正に其の本說の傳へ遺れるを。撫ひ收たる物と見えたり。

さて其道を信じ行へる人々の靈も。緣に因りて。彌次々に加はり。また種々の物とも轉生して。共々に相助つゝ。彌倍々に。佛經にある趣に叶へて。種々の相を變現し。佛菩薩天魔鬼神の貌を現じて。幸福をも與へ。禍害をも爲し。天神地祇の掌給ふ御態をも竊み行ひ。或は天堂地獄極樂の變相をも示せて。世をも人をも倍々に此道に誘引るゝにぞ有ける。

然るは道家の書共を見れば。種々の妄說を吐散して。實なき鬼神の名をも多く物せるが。某の鬼よ某の神よとて。道家の書の妄說に叶へる、靈驗變相を見するを思ふべし。是はた道士の幻說を實にせむとて。魑魅妖鬼。また其道を行へる徒の歿せるが。其道の鬼と成て。變現するなるをや。佛者はよく道家を妄とすれども。互に此理を辨へたる人。古今に一人もなきは如何ぞや、惡神妖鬼は。左に右に妖態を行ひ。言語はぬ石根。木立。水沫。草片葉をさへに言語しめ。世を詐さむとぞ覘ふなる。神の道に志有らむ人は。よく此事を明めて。努々古傳に背ひ。古傳になき謾說をば信ずまじくこそ。然るは假初にも。信じて其事を行へば。其やがて因緣となりて。然る妖物の部に入る事ぞ。其の證次々に云を見よ。阿那忌々しき事なるかも。

然るはまづ。地獄の體相苦相の事は。長阿含經に。閻浮提南有金剛山內有閻羅王宮晝夜三時有大銅鑊自然在前。鑊入宮內。王見怖畏出宮外。鑊出宮外。王入宮內。有大獄卒。臥王熱鐵上。以鐵鉤擗口。以洋銅灌之。從咽徹下無不焦爛。事竟還與采女共相娛樂と。有る文を始め。諸經論を引きて。印度藏志に委く論るを見て辨ふべし。出定笑語にも少か說へりき。

閻羅王三熱の苦の事は。起世經になは委く見たれ

ど。阿含經は小乘部にて。佛祖の正說にし有れば。此文を擧たるなり。さて翻譯名義集鬼神篇に。琰魔。閻魔羅經音義。世鬼官之揔司也。亦云閻羅燄魔聲之轉也。亦云閻魔羅社。此云雙王。兄及妹皆作地獄主。兄治男事。妹治女事。故云雙王。或苦樂並受故云雙也と見え。問地獄經に。閻羅王者。昔爲毘沙國王。經與維陀始生王共戰。兵力不敵。因立誓願爲地獄主とも云へり。然れば此は。天地初發の頃より。在し物には非ず。中古に成れる鬼なるが。鬼官の司といひ。魔羅と云を思ふに。妖鬼の較著なる物にて。佛祖の道を助けて。其說相を變現する役と知られたり。僧こそ天狗の苦相に等しき。三熱の苦をも受るなりけれ。其王とある琰魔羅さへに。右の如き苦を受れば。況て罪人と成て。至れる者の苦刑の狀は。實に怖しとも恐ろしき事共にて。佛祖の愚人を威せる。方便說とは悟りつゝも。聞ごとに身の毛も彌竪つ事共なりかし。但し其は。我が徒こそ至らぬ所なれ。佛道に入れる人は。少かも。其教誡に背へる過有ては必至る處なる事は。云も更なり。

さて琰魔は元より。釋魔なる故に。三熱の苦を受け。佗にも其苦を及ぼしてむと。漢土にも和にも所定のす。地獄の相を變現して。佛祖の說を助くるなりけり。漢土にて早くこの。變現地獄に至れる事は。法苑珠林に引たる冥祥記に。晉趙泰字文和。清河貝丘人也。祖父京兆太守。泰郡擧孝廉。公府辟不就。精思典籍。有譽鄕里。當晚乃膺仕。終於中散大夫。年三十五時。嘗卒心痛而死。心煖不已。留尸十日。平旦喉中有聲如雨。俄而蘇活說。初死之時有一人。來近心下。復有二人。乘黃馬。二人來扶我腋。徑將東行。不知幾里。至一大城。崔嵬高峻。城邑靑黑狀錫。將我向城門入。經兩重門。有瓦屋。可數千間。男女數千人行列而立。

何の經論にも。閻魔王宮は。南方に在る由なるに。此に東行と云へるは不審なり。唯地藏本願經のみは。東方とあり。また是までの文。起世經に說たる王宮の有狀に。粗符へり。

吏著皂衣有五六人。條疏姓字。云當以科呈府君。泰名在三十。須臾將泰與數千人男女俱進。府君西向坐。視名簿訖。復遣泰南入黑門。有人著

絳衣坐大屋下。以次呼名問生時所事。作何罪行何善。以實言也。此遣六部使者。常在人間。記善惡。具有條狀。不可得虛。泰答。父兄仕官皆二千石。我少在家修學。而已無所事也。亦不犯惡。乃爲水官監。將二千餘人。運沙裨岸。晝夜勤苦。後轉水官都督。知諸獄事。給馬兵。令案行地獄。

府君とは即閻羅王を云へり。漢土に變現せる地獄なる故に。何事も彼國の風なること心を付て見るべし。

諸獄楚毒各殊。或針貫其舌。流血竟體。或被頭露髮。裸形徒跣。相牽而行。有持大杖。從後催促。鐵牀銅柱燒之洞然。驅迫此人。抱臥其上。赴即焦爛。尋復還生。或炎爐巨鑊。焚煮罪人。身首碎墜。隨沸翻轉。有鬼持叉。倚於其側。有三四百人。立於一面。次當入鑊。相抱悲泣。或劍樹高不知限量。根莖枝葉皆劍。爲之。人衆相訾。自攀。若有欣意。而身首割截。尺寸離斷。泰見祖父母及二弟。在此獄中。相見涕泣。

地獄苦刑のありさま。大かた經論ごもに說けるが如し。

泰出獄門。見。有二人。齎文書來。語獄吏言。有三人。其家爲其於塔寺。懸旛燒香。救解其罪。可出福舍。俄見三人自獄出。有自然衣服。完整在身。南詣一門。名開光大舍。有三重門。朱采照發。見此三人即入舍中。

追福を修せるに依て。亡靈の地獄を遁れて。善所に遷れるためし。御國の書共には。殊に甚多く見えたり。然れど此は佛法の。甚じき私事なりけり。然るは地獄に墮たる人は。皆破律大罪の者なるに。現世なる家人の。讀經佛事を行ふに感て。罪を免すと云ふ法やはある。其はその讀む經行ふ佛事は。やがて佛の弘めし法なるを。其を行ひたりとも。破律の罪の消る事は。かつて無き理なるに。其讀經佛事に感て免す事は。唯其法の尊き由を示して。其法を弘めむとする心より佗事なく。罪人の善心に改まる由無れば。これ私事に非ずして何ぞ。神の眞の道の。罪を律するの法は。かく陋しき事に非ず。知らで犯せる過失は。いかにも見直し聞直し。祓ひ捨べき便をさへに。教へ置給へれど。知つゝも其を犯し。道に悖れる惡事せる惡き人は。いかに傍より祓ふとも。免し給ふ事なく。夜見の

國に遂ひ遣りて。永く世に出し給ふ事なき。此ぞ眞の旨なりける。

泰亦隨入前有大殿。珍寶周飾精光耀目。金玉爲牀。見一神人姿容偉異殊好非常。坐此座上。邊有沙門立侍甚多。見府君來恭敬作禮。泰問是何人府君致敬。吏曰號名世尊度人之師。有願令惡道中人皆出聽經。時云有百萬九千人。皆出地獄入百里城。在此到者奉法衆生也。行雖虧殆尙當得度。故開經法七日之中。隨本所作善惡多少差次免脫。泰未出之頃。已見十人升虛而去。

この神人は。何物の變現と云ことも未考へ得ず。又この沙門。名を世尊度人師と號へば。必地藏菩薩の變現なりと通ゆ。そは地藏菩薩本願經を見て知るべし。

出此舍復見一城方二百餘里。名受變形城。地獄考治已畢者。於此城更受變報。入其城見有土瓦屋數千區。各有坊巷。正中有瓦屋高壯。欄檻采飾。有數百局。吏對校文書云。殺生者當作蜉蝣朝生暮死。劫盜者當作猪羊受人屠割。婬泆者作鵠鶩麞麋。兩舌者作鴟梟鵂鶹。捍債者爲驢騾牛馬。

この轉生の事も。佛經論どもに見えたるが如し。但し此事は。鬼神新論に論へる如く。俗の儒者などの。絶て信せぬ事なれど。神の道に元より在し事にて。其は罪の有無の故とは通えず。幽き由有て。神の御態と。然爲たまふと思ゆる由有れど。姑く此には洩しつ。さて佛祖は。此事の元より有しを採りて。弘道の具に用ひ。なほ種々言痛く。報應を說たる故に。其說やがて因緣と成りて。佛說の行はれし以來。出來たる罪報の轉生もいと多かり。然るは宇治拾遺物語に。丹波の國篠村と云ふ處に。年頃平茸やる方もなく多有けり。里村の者此を取て。人にも心ざし。また我も食などして。年ごろ過る程に。其里に取て。專とある者の夢に。法師どもの二三十人ばかり出來て。申すべき事と云ければ。何なる人ぞと問ふに。此法師ばらは。此年ごろも。宮仕へよく爲て候ひつるが。此里の緣盡て。今は餘處へ罷り候ひなむずる事の。且は哀に。若また事の由を申さではと思ひて。此由を申すなりと云ふと見て。打驚きて。こは何事ぞと。妻や子に語る程に。また其の里の人の夢にも。此

定に見えたりとて。あまた同じ様に語れば。心も得で年もくれぬ。さて次年の九十月にも成ぬるに前々出來る頃なれば。山に入りて茸を求むるに。摠て見えず。何なる事にかと。里國の者思ひて過る程に。仲胤僧都とて。說法並びなき人。この事を聞て。不淨說法する法師は。平茸に生る。と云ふ說のある物をと云けり。然れば平茸は食ざらむに。事欠まじき物とぞ。と有を思ふべし。是正に佛說有しより。出來たる罪報の轉生也。偶にかゝる事の有とて。平茸をすべて。不淨說法の僧の。轉生せる物とは爭でか云はむ。さるは此茸。佛說有てより出來たる物にも有るまじ。其は本文なる種種の物も。佛法有て後に。出來たる物に非ざるに。準へて知べし。また平茸は食ざらむも。事欠まじき物には有れど。よし僧の生れる平茸なりとも。人の食べき物と化れる上は。食はむになでふ事か有らむ。却りて罪を滅する理なるをや。此は平茸のみならず。種々の物に化れるも何じ事ぞ。然れど。今昔物語集にも見えたる。出雲寺の別當の。己が父の成れる鯰と知りつゝ。殺して食たるなどは。惡行なれば。神の甚く惡み給ふ故に。喉に其骨の留りて。死ぬる類もあり。然る正しき事の無らむには。然しも心とするに足らず。然れど無益の殺生殘害を禁じ。其生を見て。其死を見るに忍びず。其聲を聞て。其肉を食ふに忍びざる心は。常に存すべきものなり。

泰案行畢還二水官處一主者語レ泰卿是長者子。以二何罪過一而來在レ此。泰答。祖父兄弟皆二千石。我擧レ孝公府辟不レ行。修レ志念レ善不レ染二衆惡一。主者曰卿無二罪過一。故相使爲二水官都督一。不レ爾與二地獄中人一無二以異一也。泰問二主者一曰。人有二何行一死得二樂報一。主者言。奉レ法弟子精進持戒。得二樂報一無レ有二謫罰一也。泰復問曰。人未レ事レ法時所レ行罪過。事レ法之後得レ除以否。答曰皆除也。

かゝる罪なき人を。使を遣りて召たる事。御國の書共にも。多く記し傳へたるが。實は閻魔羅王の不明より起る事なり。趙泰早くも。釋魔の變現地獄の相に。誑惑せられて。其道に入らむとする心起れるが故に。此の問答あり。憐むべし。既に魔境に入れる事よ。

語畢主者開滕篋檢泰年紀。尚有餘算三十年。乃遣還。臨別主者曰。已見地獄罪報如是。當告世人令作善。善惡隨人其猶影響。可不愼乎。時親表內外候視五六十人。同聞泰說。泰自書記以示時人。時晉太始五年七月十三日也。

太始は泰始の誤なるべし。泰始は晉の武帝と云ける王の年號なり。太始といふ號晉の代にはなし。若實に太始ならむには。漢の武帝と云し王の年號なれば。晉は漢の誤とすべけれど。其頃はいまだ佛法の傳らざる世なれば。漢の誤には有ざりけり。乃爲祖父母二弟延請僧衆大設福會。命子孫奉法精進。時人互來訪問莫不懼然。皆即奉法也と有り。是ぞ諸越籍に。變現地獄の有狀の。世に漏傳はれる始なる。

釋魔の人を其道に誘ふ術計。あな甚じきかも。あな大なるかも。是より前に。彼の三代と云し頃より。前漢の頃までにも。幽冥に至れる故事は。數多有れど。皆彼國の古傳に符へる。天帝の冥府のみにて。聊も佛籍にいはゆる。地獄の體相に符へる事なし。地獄の說もし實にし有らば。佛道の渡らざる以前にも。冥府に行たらむ人の。其狀を見ずと云ことの有べきかは。此をもて彼道の渡りし以來。其道を弘むる釋魔どもの。變現なる事を思ひ決むべし。なほ此後に漢籍どもに。變現地獄に到れる故事は。いと多かれど。皆此に準へて辨ふべき中に。希には天帝の冥府に到れるも有り。そは冥報記に記し傳たる。柳智感と云者の。晝は縣職に臨み。夜は冥事を判せると有る冥府。また陰隲錄に收たる。決科要語なる。程學聖といふ者の到れる冥府など。是なりと思はる。然る類をも諸書に。閻羅王府を附會し。道家の說をも合せて記し。直ちに天帝とも。上帝とも云べきを。閻魔王として記せるも有れば。熟く事實を考へて辨ふべし。また御國の書にも此例あり。そは下に擧るを見て知るべし。

さて右に擧たる地獄の事の狀は。大旨よく。眞の經論等に說たる趣に符へて。變現せるを。後に唐の代の頃などよりや。閻羅王の外に。なほ數人の冥王ども有よしを云出たるに。其實は。眞の梵經どもに論なき事なる故に。蜀の國の成都府といふ處の。慈恩

寺の藏川と云ける沙門の杜撰に。十王經と云ふを述作し。秦廣王。初江王。宗帝王。五官王。閻魔王。變成王。泰山王。平等王。都市王。轉輪王など。十王の事相を著し。世に弘有しかば。妖鬼所得て。また其十王の形を變現して。人を欺く事と成ぬ。此十王の中に。閻魔王。五官王のみ。佛經に見えたる名にて。餘の八王の名は。唐の代より次々。いひ出たるに。また藏川が新作の王名も交れり。十王經。具には。地藏菩薩發心因緣十王經といふ。成都府大聖慈恩寺沙門藏川述とあり。其末記に。北天竺の嚴佛調三藏といふ者に。眞佛示現して演說せるを。梵文に記して。漢の嘉平年中に。漢土に到れる後。八百餘年を經て。慈恩寺の藏川法師。經藏を點檢するとき。偶然に此梵經を見得て。譯したるは。宋の仁宗が天聖十年霜月なり。一夜文殊菩薩化現して。勸めて流通せよと云へる故に。藏川大誓願を發して。流布せしむる由云へり。然れど天竺の嚴佛調といふ者に。眞佛の演說せるを。梵文に記して。將來れりと云へるは。藏川より後の人の。例の幻妄の說なり。然るは眞佛の演說を。其儘に譯せるならむには。如是我聞一時佛といふ由有らむや。藏川述と有もて。彼が杜撰なる事しるし。然れど梵經なりと世に誣むの心なく。佛經に擬して。一時の戲に作れる物と知られ。十王の名ども。多くは漢風にて。梵語の无をもて。戲作なる事知らる。例を言はゞ。開元釋教錄に。昔妬婦を恐るゝ者あり。そを制するに計なく。遂に經文に擬して佛に託し。妬の罪の極めて。畏るべき由を說たるが。世に傳來せる由見えたる。其類の物と思はる。是をもて藏經目錄に收れず。漢土にても僞經と立たり。さて此經御國に傳はりて後に。また御國人の。攙入たる事どもゝ多かり。人々其文を見て。全くこは御國人の。僞作せる物とのみ思ふは。委く事狀を糾さゞる誤なり。そは下に論ふ說どもを見て知るべし。

其はまづ十王の事の。唐の頃より云ひ出たる由は。佛祖統紀に。十王供世傳。唐道明和上神遊地府。見十王分治亡人。因傳名世間。人終多設此供。十王名字藏典傳記可考者六とて。閻羅。五官。平等。泰山。初江。秦廣などの名を擧げて。所見の書名を著したる

が。凡て唐以後の書共なるをもて知るべし。

されど十王の名悉くは見えず。餘の四王の名は。正に藏川が杜撰なること炳焉し。中に閻羅。五官。二王の名の所見に。提謂經を舉たれど。此名は元より。梵經にある名なれば。今論ふ限にあらず。

また同書に。熙寧五年七月。歐陽永叔自致仕居潁上。日與沙門遊。因自號六一居士。名其文曰居士集。息心危坐屛卻酒肴。臨終數日。令往近寺借華嚴經。讀至八卷。倏然而逝。永叔初登政府。苦於多病。嘗夢至一所。見十人冠冕列坐。一人曰參政安得至此。永叔問曰。公等非釋氏所謂冥府十王乎。曰然。因問世人飯僧造經果有益否。曰安得無益。既寤病良已。自是益知敬佛。その注に。樞密副使吳充撰行狀云。此事得於公之孫曰恕と有り。

永叔が佛道に入れることは。唐書の本傳を始め。傍の書どもに見えたるを。事長ければ記し出ず。

また蠡海集に。佛老有地府十王之說。と云へるを思ふに。梵經になき王等の名は。道家の徒の云ひ出けむを。其說を信ずる人の有るに所得て。彼國の妖鬼らが。十王經の說相に符へて。十王に變現せること疑なき物なり。

凡て妖鬼遊魂の類は。妄說にまれ其說に。人の迷惑するを伺ひて。奇怪の變現を爲す事は。鬼神新論に具に論へれば。此には云はず。なほ下に三途川の老婆にあへる。皇朝の昔語を舉て。其所に論ふ說をも合せ思ふべし。

さて皇國にて。地獄に往たる事の有りし始めは。今昔物語集に。文武天皇の御代に。豐前國宮子郡の小領に。膳臣廣國といふ人有けり。其妻は前に死けるが。慶雲二年といふ年の。九月十五日に。廣國忽に死けり。而るに三日を經て。更に甦りて。人に語りけるは。我死しとき。使二人來れり。一人は髮を舉げ。一人は髮を束ぬる小子なりき。

宮子郡は今の京都郡なり。さて此事は。今昔物語よりも。ふるく靈異記に載せれど。二書を合せ見て。目易く記せるが中に。多く今昔物語に依たれば。彼書名を舉たるなり。また此小子は。廣國が稚き時に書たる。觀世音經の變現なる由。下の文に見えたり。餘の傳共に合せ考ふるに。髮を舉たる一人は。地獄の使者と通ゆるに。此小子の副來

れると知られたり。
我此二人に副往く程に。二驛ばかりを度る。路の中に。大きなる河あり。橋を渡し。金をもて塗厳れり。其を渡りて彼方に。極めて讌き所あり。使人に。此は何なる處ぞと問へば。渡たるは南の國なりと答ふ。其處に至れば。八官人あり。皆兵を佩て追往く。なほ進行けば金の宮あり。門に入りて見れば。王在りて金の座に居たり。廣國を見て。今汝を召たるは。汝が妻の愁申せしに依てなりと。即一女を召たり。此を見れば死せる妻なり。鐵の釘を以て。頂に打て尻に通り。額に打たる釘は。項に通る。又鐵の繩を以て。四枝を縛りて。八人して擡擧て。將來れり。

渡たるは南の國。と有るを。靈異記には。度南國と記て有り。塙本に音讀にせるは誤なり。此は諸經論に。閻魔王の國は。南方に在る由見えたるに。符せたる幻説也。然れば南の國と云ぞ正しき。唯地藏本願經にのみ。東方と有れど。其は誤寫ならむも知べからず。また此王は。即ち閻魔王と知られたり。四枝は四肢にて。兩手兩足をいふ。新婆沙論に。鐵釘地獄獄卒撲レ之偃ニ熱鐵上ニ舒ニ展其身ヲ以レ釘釘ニ手足ヲ周ニ遍身體ニ盡五百釘。苦毒號吟猶不ニ復死セ久ク受レ苦とあり。其苦相を現せり。

王問て云く。汝此女を知れりや。廣國云く。此は我が昔の妻なり。王云く。此罪を蒙れる事を知れりや。廣國云く我れ知らず。爰に女に問ふ。女答云く我死せる時。汝我を惜まずして家より出し遣れり。我其を恨みて愁申せり。王此を聞て。廣國に云ひけらく。汝實に罪無りけり。汝が妻の愁當らず。速に家に還るべし。

琰魔の裁斷いと理にかなへり。但し斯ばかりの事に。廣國を召取らずとも。裁斷なるべき物をや。

若汝が父を見むと思はゞ。此れより南の方に行て見るべしと云ふ。廣國行て見るに。實に我父あり。甚熱き銅の柱を立て抱かしめ。鐵の釘三十七を其身に打立たり。人鐵の杖を以て。朝に三百段。晝三百段。夕へに三百段。合せて九百段。日ごとに打迫む。廣國此を見て悲みて。父に何なる罪を作りて。此苦を受給へると問へば。父云く。我が此苦を受る事は。我生たりし時に。妻子を養はむが為に。或は生物を殺し。或は八兩の綿を人に借して。強に十兩に倍し

て責取り。或は小斤の量を以て。稻を人に貸して。大斤を以て徵り取り。或は人の物を強て奪ひ取り。或は佗の女を姧犯し。父母に孝養せず。或は師長を恭敬せず。或は奴婢に非ざる者を。奴婢と稱して詈り打つ。如是き罪の故に。我が身少しと云へども。三十七の釘を打立られて。每日に九百段の鐵の杖を以て打迫らる。痛哉苦哉。何時か我が此罪を免されて。身を安くせむ。汝返りて。速に我が爲に。佛を造り經を寫して。我が罪苦を贖へ。怠ること勿れ。

廣國が父の犯せる罪の如きは。顯には天皇いまし。幽には大國主神いまして。罰め給ふ我が神の道なるを。釋魔緇に其御政を竊ひ奪ひ奉りて。傍に斯る地獄を變現して。愚人を陷れ。かゝる言を云はしめて。彼新治道を弘めむとぞ計らふなる。和漢の先賢一人も。此理を論ひ置かざるは何ぞや。其は多く事識等にて。物識には非ざりしかばなり。物を知りて後に。事は知べしと。己が常言に云ふは是故なり。

我飢て。七月七日に。大蛇と成て。汝が家に至り。屋戸に入らむとせし時。汝杖を以て懸棄き。又五月五日に赤犬と成て。汝が家に入し時。佗の犬を呼て咋しめ。打追しかば飢て還りき。また正月一日に。狸となりて汝が家に入しかば。飯を供養し。味物を與へて。食飽しめたり。其を以て三年の粮を繼たり。

狸一本に猫に作る。狸は即猫なり漢籍にも。令ニ狸執ㇾ鼠と見ゆ。本艸和名に。家狸一名猫。和名禰古末とあり。

我れ兄弟上下の次第なくして。理を失へる故に。犬と成て不淨の物を噉ふ。我れかならず赤犬と成べしと凡そ米一升を布施するの報は。三十日の粮を得。衣服一具を布施するの報は。一年の衣服を得。經を讀しむる者は。東方金宮に住し。願に隨て天に生ず。佛菩薩を造る者は。西方淨土に生じ。放生する物は。北方淨土に生る。一日齋食する者は。十年の粮を得むと。

世の諺に。赤犬は人に近き物ぞといふ事あり。かかる事よりや云出けむ。橘廣相の赤犬と成れると云こと。續古事談。十訓抄などに見えたれど。其は己が天滿宮御傳記に辨へたれば。彼の書に就て見べし。東西北の淨土の事は。既に論へり。但し其

は方便說なるを。偶にも其說相に符ふ。事實のあるは。例の變現相なること言まくも。更なり。
廣國具に善惡の業に因りて。受る處の報を見て。怖れて還來り。本の大橋に至れば。門を守る人。前を遮りて云く。此內に入ぬる者は。更に還し出さずと。廣國しばらく徘徊するに。小子出來れり。守門の者。その小子を見て。跪きて禮す。小子廣國を喚て。方脇門に將至りて。其門を押開きて出し。汝此より速に往けと。廣國小子に問て云く。汝は誰子ぞと。小子答て云く。汝が稚き時に寫せる。觀世音經なりと云て。還り入りぬと見る程に。即甦りぬと語りき。
觀世音經とは。法華經の普門品をいふ。凡て古書どもに。佛經の佛菩薩と現はれて。靈驗を施せる事の見えたる。其を尋常の人は。實に其經の威德による事と思ひ。普通の學者は。偏に。古書の妄說を記せる物と思ひ居れど。共に非なり。實は釋魔の。其と變現して異驗を示し。人を誑して。其道に引入るゝにぞ有ける。あやかしこ。
其後佛を造り經を寫し。三寶を供養して。父が受る所の罪を贖ひ。黃泉に至りて見し善惡の報を。委く錄して。世に流布せるを語り傳へたりとある。是ぞ皇國にて。變現地獄に行たる。實事の有し始めなり。是より以前。神の御世の。數千歲の間は更にも云はず。神武天皇の元年より。此慶雲二年まで。千三百六十五年が間に。一人として地獄に行て。其體相を見たる者無りしを。欽明天皇の十三年に。佛法渡りし以來。此國に見聞せざる。廣大不測の妖驗。いや次々に起り來て。遂にかく唐土と同じ樣に。かゝる實事を。見聞する事となも成ぬる。是をもて總じて佛道の不測どもは。彼道の渡ると共に。副來つる釋魔どもの。變現するなる事を辨ふべし。また今昔物語に記せる。元興寺の智光と云ける僧の。行基法師を嫉み惡めるに據りて。暫く行たる地獄などは。正しく行基が幻術を以て。示せたるなる事云も更なり。
偖この後には倍々に。此事有し中に。靈異記また今昔物語集に。聖武天皇の御世に。攝津國東生郡撫凹村といふ處に。大きに富める人有けり。此人漢神の祟を負ひて。其事を遁れむと。七年を限りて禱祭りけ

る程に。毎年に一つの牛を殺つれば。七頭の牛を殺させけり。七年既に祭り畢てのち。其人重き病を受て醫藥方療すれども愈ず。卜者を集めて。祓ひ祈ると云へども。彌増に病む。

桓武天皇の紀に。延暦十年九月。斷伊勢。尾張。近江。美濃。若狹。越前。紀伊等國百姓殺牛用祭漢神と見え。三代格に。此官符を載せられたれば。此頃の人のせし事と見ゆ。偖其神は。何ちふ神ならむ。いまだ考へず。甚惡き神とは聞えたり。また卜者とは。卜部氏の祓祈などする人なるべし。今昔物語集には。陰陽師とせり。

爰に病者思ひけるは。我身に重病を得しは。年來牛を殺せる罪による故ならむと思ひて。病に臥せる年より。毎月六齋日に闕ず戒を受け。方々に使を遣して。生物を買ひて。放生を行ひけり。而るに七年の末に至りて。遂に死ぬる刻に何にか思ひけむ。妻子に云けらく。我死なむ後に。忽に燒かず。九日置たれと云けり。妻子ら遺言のごとく。葬らずて有けるに。九日と云ふに活て語りけるは。

かく迷の心出たるぞ。所謂魔縁にて。變現地獄に伴はれて。誑惑せらるゝ因なりける。憐むべし。此は雜令云。凡月六齋日。公私皆斷殺生と見ゆ。此は月の八日。十四日。十五日。廿三日。廿九日。三十日をいふ。佛經論どもに依て。定られたるなり。

又よく妻子等に云へる言を味ひて。釋魔の態なる事を知るべし。然るは實に死むには。九日有て甦る事を。まだきに知るべき由なし。此は釋魔の幻をもて見する態なる故に。家に殘れる妻子。もし實に死たりと思ひて。燒たらむには。地獄の狀を語ら令べき便なき故に。自然の如く。かく言しめたる物なり。下に擧る讃岐國の。綾氏なる富人の死ける時は行者に託りて。我身を七日置たれ。と云しと有るも是なり。

我死し時。牛頭にて身は人なる。七人出來て。我が髮に繩をつけ。其を捉りて。立衛りて將行しに。前路を見れば樓閣あり。此は何なる宮ぞと問へば。七人の者眼を瞋かして。我を背みて。云ふ事なく急ぎ往けと追む。既に門内に入ぬれば。我みつから。閻魔王宮なりと知る、王此の七人に向ひて。此は汝等を殺せる讎か。答云く當に是なりと。七人各々膾机

と。刀とを持出て。我等を殺せる如く。膾に造りて啖はむと云ふ時に。千萬餘人忽に出來て。我を縛たる縄を解て云く。此人の咎に非ず。祟る處の鬼を祭らむ爲に殺せり。然れば鬼神の咎なりと。余を中に居ゑて。千萬人と七人と。咎の有無を毎日に訴諍ふこと。火と水との如し。琰魔王此の理非を判斷し給ふこと能はず。而るに七人の者。なほ強に申して云く。此人我等が。四足を截て。廟に祭りき。然れば此を得て。膾に造りて食はむと。千萬人もまた。王に白して云く。我等よく此事を知れり。更に此人の咎に非ず。鬼神の咎なりと諍ふ。王此事を定め煩ひて。八日を逕ての明日に參れ。判斷せむと告ひて。各々返し遣れば九日といふに集會して。訴諍ふこと前の如し。閻羅王すなはち。員多かる方に就て判斷せむとて。千萬人の方を理と定られぬ。

この千萬人は。六齋日に放たる生類どもなるよし。下の文に見えたり。さて是ばかりの事をさへに。定め煩ひて日を延き。員多かる方に就て判せるを思ふに。閻羅王といふ鬼は。いとも英斷なき鬼なりけり。かく不才不明の物にして。斷獄の官たること。實に其任に當らず。決めて非道なる判斷多かるべし。多少を別ち。多に就て定むるは。拙吏のわざなり。千萬人此を是とすれども。是なるあり。千萬人此を非とすれども非なる類は。常多かるをや。主たる閻魔王。かく聰明ならざる故に。其從者の獄卒どもの。奸を行ひて。人を非命におとし殞るゝ事もまた少からず。

七人の者此を聞て舌嘗をして唾を飲み。膾を切り。宍を噉ふ效を爲し。妬み歎き。刀を捧げて立て各々ゆく。怨を報ざること。限なき愁なり。我等此を忘れず。後になほ報ゆべしと云て。各々去りぬ。千萬人は我を敬ひ。幡を擎げて。王宮を出し。輿に乘せ前後左右に圍繞し。讃歎して送る。彼の衆人みな一色の容を作せり。爰に我問云く。汝等は誰人にて我を助くると云へば。答云く。我れ等は汝が年來かひて放てる生類なり。今恩を報ゆるなりと云しと語りけり。其後は増々誓願を發して。效にも神を祀らず。深く佛法を信じて。己が家に幢を立て寺と成し。佛を安置し。法を修し放生し。其後は此人を。那天堂とぞ號ける。終に病なく。九十餘歳にて死けるとあ

り。

撫凹村に。堂を立たる人なる故に。かく號るなるべし。此事今昔物語に載たるは。靈異記を採れりと見ゆれど。互に文の精粗あれば。合せ見て。其宜きに從ひて記しつ。

斯て撰者の評に。鼻奈耶經說。迦留陀夷昔作二天祀主一。由レ殺二一羊一得二怨報一所レ殺云々。最勝王經說。流水長者放二十千魚一魚生二天上一以二四十千珠一現報二流水長者一。其斯謂矣と云へり。此地獄を見せたる幻術は。信に此謂にて。此頃諸國に。漢神を祭る事流行しかば。遂には其道の弘まる。妨と成らむ事を思ひ。且は右の經說どもに叶へて。放生の功德なる由を。勸めむとの態と見えたり。

また此御世に。讃岐の國香川郡坂田里に。夫妻共に綾君氏なる富人有けり。其隣に極めて貧く。寡にて子もなき老嫗の在けるが。常に其富家に行て食を乞ふを。家室憐みて。日々に食を與ふ。家主此を厭ひて。此後は自分の飯を分て。與へよと云ふ。家室竊に。我が分飯を分て。養けるほどに。釣を業とする者あり。海にて釣を爲たるに。鉤縄に。螺十具喋著て上りき。彼の家主此を買はむと云ふ。釣人米五斗に賣らむと云ふ。家主釣人の云如く。直を渡して買取り。僧を請じて。呪願せしめて。海に放けり。其後家主。從者と共に山に入て。薪を伐るに。枯たる松の木に登りて。木より落て死けり。然るに其人。或る行者に託て云く。我身を燒ことなく。七日置たれと。行者の語に隨ひて。山より荷ひ持來て。期日を待けるに。七日に至りて蘇りて。妻子に語り云く。前に僧五人。後に俗五人有て往く。其道廣く平にして。直きこと墨縄の如し。其路の左右に。寶幡を立列たり。前に金の宮あり。此は何なる宮ぞと問へば。後なる俗諱に云く。此は汝が家室の生るゝ宮なり。老嫗を養たる功德によりて。此宮を造れるなり。汝我を知れりや。吾答へて知らずと云へば。俗云く。我等僧俗十人は。汝が買て海に放ちし螺十具なりと。其宮の門の左右に。額に角一つ生たる人あり。太刀を捧げて。我頸を切らむとす。此僧俗諫めて切しめず。門の左右に馥しき膳を供へて。諸人に食しむ。我れ其處に居て。七日飢て口より焰を出し

き。十人の僧俗云く。此れ汝が老嫗に食を施さず。厭ひ隱める罪の。報なりと云て。僧俗十人我を將て。返すと思ふ程に。蘇れり。と語りきと有るも。放生施食を勸むる狀。いと能似たり。此事も靈異記と。今昔物語とに見えたるを。合せ見て記せり。果して此幻術の驗ありて。其長者は。効にも神を祭らず。甚じき佛法者と成り。世にも放生を。此ひなき功德として。此の御世より。八幡宮の放生會と云事さへ始め給へるも。斯る事ども多有しを。朝廷には。聞食されし故にぞ有るべき。

石清水放生會の事は。巫學談弊に論れば。此には記さず。

また二書に。同じ天皇の御世に。讃岐國山田郡に。布敷臣衣女といふ有けり。此女重き病を得たり。時に偉しく百味を供へて。門の左右に祭り。疫神に賂して饗しき。

姓氏錄の皇別に。布師臣布師首といふ姓有りて。建內宿禰の男。葛城襲津彥之後也とあり。其餘流なるべし。疫神を祭れる事は。古史第二十二段の傳また玉襷に論るを見るべし。

而る間に。閻魔王の使の鬼。其家に來りて。衣女を召すに。其鬼走り疲れて。祭りの食を見て。䞋りて此を食けり。鬼既に女を捕りて行むとする間に。語り云く。我れ汝が饗を受けつ。此恩を報せむと思ふ。もし同姓同名なる人有るかと云ふ。女答て云く。同國の鵜足郡に。同姓同名の女有りといふ。鬼此を聞て。此女を將て。鵜足郡の女の家に行て。其女に向ひて。緋袋より。一尺許の鑿をとり出て。此家の女の額に立て。召將て去りぬ。彼の山田郡の女を免しつれば。恐々家に歸る。と思程に活けり。彼の鬼は。鵜足郡の女を將往けるに。閻羅王待校て言く。此は召たる女に非ず。汝錯りて此を召せり。然れば暫この女を留めて。捷に往て。彼の山田郡の女を召べしと。鬼隱す事を得ず。遂に山田郡の女を召て。將來れり。閻魔王見て。此れ召たる女なり。彼鵜足郡の女を返すべしと。鵜足郡の女。家に歸れば。三日を經る間に。其女の身を燒失ひつ。女の魂身なくして返り入ること能はず。更に還りて閻魔王に白さく。我返されたりと云へども。體失せて寄付く處なしと。

かゝる事の有が故に。死ときに多くは勿焼そと。斷り置て死しむるなり。何に釋魔の太じき心配に非ずや。また今昔物語に。一條の攝政殿と申人御けり。其御子に。兄は右近少將擧賢と云ひ。弟をば左近少將義孝と云けり。義孝の少將は。幼かりける時より道心有て。深く佛法を信じて。惡業を造らず。魚鳥を食はず。況や自ら殺生する事は。永く无かりけり。只公事の隙には。常に法華經を誦し。彌陀の念佛を唱けり。而る間。天延三年と云年の秋の比。世の中に。疱瘡と云病發て。極て騷しかりけるに。少將疱瘡を煩て。内にも參らずなど云ける程に。兄の擧賢の少將も。同く煩て。寢殿の西東に臥てなむ。共に煩ひける。兄の少將は。只三日重く成りて失にければ。枕など替て。例の失たる人の如く葬してけり。其後三日を經て母の御夢に。兄の少將中門の方に立て。極て泣く。母臺の角にして此を見て。何ど入り給はずして。此くは泣給ふぞと問ければ。少將參らむとは思へども。得參らず。我閻魔王の御前にして。罪を勘られつるに。此は未命遠かりけり。速に可免とて。免されつれば返り來たるに。急て枕を被替にければ。魂の入る方の違て。活る事を得ずして。迷ひ行く也。心疎き態せさせ給へるとて。恨たる氣色にて。泣くと見る程に夢覺ぬ。母夢覺て後。思しけむ事何許なりけむ。と有るをも思ひ符すべし。

其時に王使に問云く。彼の山田郡の女は。體いまだ有や。使答云く未た有り。こゝに王彼の女に。然らば其の山田郡の女の身を得て。汝が身とせよと。此に依りて鵜足郡の女の魂還りて。山田郡の女の身に入り。甦りて即ち言く。此は我家に非ず。我家は鵜足郡に有りと。父母活かへれる事を喜ぶ間に。此を聞て。汝は我子なり。思忘れたるかと云ふに。女更に聞ず。家を出て。鵜足郡の家に往て。此は我家なりと云ふ。其家の父母。知らぬ女の來れるを見て。驚き怪み。汝は我子に非ず。我子は早く燒失ひてきと。其時に女具に。冥途の事を語れば。父母聞て泣悲みて。生たりし時の事どもを問ふに。一事も違ふ事なし。然れば其體に非ずと云へども。魂現に其なれば。父母喜びて。此を哀れみ養ふ。山田郡の父母此を聞て見るに。正しく我子の體なれば。魂は無れ

と形を見て。悲み愛する事限なし。然れば共に此を信じて同く養ひ。二家の財を。此女一人に付囑し。此女は現に。四人の父母をもちて有ける。此を思ふに。饗を供へて鬼神に賂ふ。これ空しき功に非ず。また人死たりと云へども。葬す事を急ぐべからず。自然に。かゝる事も有るなりと見ゆ。

この條も。靈異記と今昔物語集とを。合せ見て記せり。

閻魔王が不明に。斯る姦鬼を使ひ。人を非命に死しむる事は。いかに罪去がたき事に非ずや。冥官の首長ならむに。然しも不正の所爲の有べき事かは。かく闇愚なる物をし。其職に任じて。人間の賞罰を掌しむる佛も。亦不明の罪は遁がたし。

なほ閻魔王が不明を。思ひ合すべき事は。同じ靈異記に楢磐島は。諸樂の□京六條五坊の人なり。聖武天皇の御世に大安寺の修多羅分の錢。三十貫を借て。越前の都魯鹿津に往て交易し。船に載せて。家に將來る時に。忽に病を得たり。船を留めて。一人馬に乘て家に歸るに。近江國高島郡。磯鹿の辛前に至りて。睠れば。三人にて追來る。山代の宇治椅に至る時に。近く追付て。共に副往く。磐島これは何に往く人ぞと問へば。答云く。閻羅王の闕より。楢磐島を召に往く使なり。磐島聞て。召るゝは我なり。何故に召ぞや。使の鬼云く。我等先に汝が家に往て問へば。商に往て未歸らずと。故に津に至りて求む。汝を召こと累日にして。我飢疲れぬ。若食物有や。磐島云く。唯干飯ありと。與へて食しむ。使の鬼云く。汝わが氣に病まむ。な近づきそ。但し恐るゝ事勿れと。終に家に望む。食を備へて饗すれは。鬼云く。我牛の宍を嗜む饗すべし。牛を捕る鬼は我れなり。磐島云く。我が家に斑牛二頭あり。此を進らむ。我を免し給へ。鬼言く。我今汝が饗を得たる。恩幸の故に。汝を免さむ。然れども我其罪によりて。鐵杖百段を持て打るべし。若汝と同年の人有や。磐島云く。我都て知らず。一の鬼議りて云く。汝は何の年ぞ。磐島言く。我年は戊寅なり。鬼云く。率川の社の許なる相八卦讀に。汝と同く戊寅の年の人あり。汝に替て彼人を召將む。唯し汝牛一頭を饗せよ。また我が打るゝ罪を。脱せしめむ爲に。我れ等三

人が名を呼て。金剛般若經百卷を讀むべし。一の名は高佐麻呂。二の名は中知麻呂。三の名は槌麻呂と云ひて。夜半に出去れり。明日見れば牛一つ死たり。磐島大安寺に往て。仁耀法師といふを請して。金剛般若經百卷を讀しむるに。三日を經て。使の鬼來て云く。大乘の力に依て。百段の罪を脫れ。常食より。飯一斗を倍して賜はりぬ。今より後節ごとに。我が爲に福を修して。供養せよと言びて忽に失ぬ。磐島は。九十餘歲にして死き。こ有るも思ひ符すべし。

古今妖魅考四之卷

平田篤胤輯考
門人　武藏國　碧川好尙　同
參河國　鈴木重野　校

倩かく闇愚ながらも。後には佛祖も嘗て言ざる地藏の妄說をさへに吐散して甚く世人を惑はしぬ。然るは靈異記に藤原朝臣廣足は。阿部姬天皇の御代に病に嬰りて其病を差さむが爲に。神護景雲二年二月十七日に大和國莵田郡眞木原の山寺に至りて住み。八齋戒を持し筆を取て書習ひ机に就て暮に迄びて動かず。侍者の童男これを睡眠と思ひて驚かして言く日沒の時に至れり。佛を禮すべしと云ふに驚めず。強て押動かせば手に取れる筆を墮し。四支屈みながら氣せずして死たり。從者怖慄て丶家に走り歸りて親屬に告知らす。親屬聞て喪殯の物を備へ三日と云に往て見れば蘇甦りて起居れり。親屬等これを問ふに。答云く鬚逆頰に生たる人二人下に緋を著け上に鉀を著け兵を佩き桙を持ち來て我を喚て鬧急に汝を召すと云て。戟をもて背を棠き一人は前に一人は後

に。立逼りて追往く。道中に深河あり。水色黒して流れず。楉を中に置たれど。兩端岸に及ばず。前に立たる人汝此河に沒り。我が蹤を蹈て。渡れと云て度らしむ。前道の頭に重樓閣あり。炫耀きて光を放ち。四方に簾をかく。其中に人あり面貌を覩ず。一使者走入て召將て來れりと白せば召入れよと告ふ。奉りて召入れぬ。簾を釾して問告く。汝が後に立たる女を知るや否やと。睠れば我が妻の懷姙して兒を產得ずして死せる女有り。此は我妻なりと答ふれば。復告はく此女の患事に依て汝を召たり。此女の受べき苦み六年の中已に三年受ていまだ三年を受ず。此に依て愁白す事は我ㇾ男に俱して。共に罪を造りて併も彼か子を生損ひ。死して地獄に墮てかく堪がたき苦を受れば殘れる三年の苦は汝と俱に受けむと。白すに依りて召たるなりと告ふ

好尙云此女の閻魔王へ愁ひ申せる趣。いといと心得がたし其は吾が夫なれば共に受べく定まれる苦をも。己獨受てむと申すべき理なるに。表裏なるはいかに枉れる心ならずや。またかゝる訴訟事の理非をも能く考へ量りて。道理に協ふ時は其夫をも召べきに。然る差別もなく召たるは閻王の不明論ふに足らず。斯て此女も然ばかり心の枉れる故に地獄に墮て堪がたき苦痛を受たるは。謂ゆる自業自滅と云べし。

我白して云く共に召れて苦を受侍る共彼が爲に苦の助かるべきに侍らねば。此度は罷歸りて妻の爲に佛經を寫し供養し候はむと申せば。妻白して云く實に白すが如くば忽免して還し給へと白せば。速還れと告ふに座を立て還る途にて思ふやう。玉の簾の內にて物の定して我を還さるゝ人は誰にか有らむと思束なく。更に還りて庭に居たれば簾の內より何にして復參りたるぞと問はる。我白すやう御恩を蒙りて還がたき本國へ罷歸り候事を。いかに御坐す人の仰とも知らで罷らむ事の口惜く候へば。恐ながら御名を知らむと欲ひて復參りて候と申せば。我は閻羅王也汝が國にては地藏菩薩と稱する是なりと告ひて。右手を下し我が頂を摩て。我が印點する故に災に逢ざらむ。速に往けと告ふを聞て然れば炎魔王と申すは地藏菩薩にこそと思ふ程に蘇生りぬと語る彼の手の指の大きさ十抱餘あり。其後妻の爲に佛經をかき

供養してげりと有り。

此は宇治拾遺物語にも見たる事なれば彼書に依て少は文を補ひて載せり。但し彼書に廣貴とあるは。廣たりと有けむたりをたかと誤りて字に書るならむ。借同書の末に此事を日本法花驗記に見たるとなむと有れど彼書には此事を載せず。日本靈異記を思ひ誤れるにや有らむ。

閻魔王が言に汝が國にては我を地藏菩薩と稱すと云へるは。地藏十輪經にその本誓を記して。或作二閻魔身一と云へる由說たるに符せて例の幻語せるなり。地藏十輪經は大乘大集部の經にて玄奘が譯十卷あり。但し此本誓は地藏本願經には見えず。彼十王經に閻魔王本地地藏菩薩と記し。御國人の作れる延命地藏經に或現二閻魔身一とあるは共に十經輪に據りて記せるならむ。

靈異記三卷の中に觀音菩薩の靈異は數載せれど。地藏菩薩の靈異有し事は一條もなく。地藏の字も此條より餘に有ことなし。此に依て考ふるに靈異記を記せる弘仁の始頃までは。地藏菩薩の靈異の世に聞ゆるばかり流行せざりし事知べし。斯て此物の名の聞えたるは此條の閻魔王が廣足に云へる語などより稍く人も知りて。世に持囃し始たるは弘仁の末程よりの事なるべし。然るは今昔物語集に伊豆國大島郡に海岸遙に絕て鳥獸も通がたき島有り。極めて惡き邊地なり。其島の西南の方に一勝地あり。昔江優婆塞の此國に被流たりける時に時々飛來て勤行ひける所なり。而るに嵯峨天皇の御代に修行僧藏海と云ける人初めて此山を開けり。山の體奇異にして神靈の栖仙人の窟なりまた常に神女來り遊ぶ庭なり而るに藏海其山の上に寺を建たり。名をば地藏寺といふ。堂內に等身の地藏菩薩の像を安置せり。靈驗新にして國人みな首を傾けて詣で求め願ふ事を祈り請ふに一つとして叶はずと云ことなし。藏海其處に居て修行するに其所行全く例の人に似ず。其故は口には常に地藏の名號を唱へて斷ことなく。身には久しく地藏の形像を負て放つことなしと有などや地藏の流行せる始ならむと覺ゆればなり。

此條なほ長けれど。此に用ある事をのみ約めて擧たり西行法師が撰集抄に伯耆國に大山と云處に大智の明神と申す神おはし坐す。本地は地藏菩薩に

おはすとぞ昔俊方と云ける弓取あり。野に出て鹿を狩けるに例よりも鹿多くて皆思ひの如く射留にけり。さて此鹿どもを取むとすれば。我が持佛堂に千體の地藏菩薩をすゑたりける五寸の像に矢を射立て鹿と見つるは地藏にぞおはしける。俊方淺間しく悲しく覺えて地藏に取つき泣叫(をめ)きけれども更にかひなし。軈てみづから髪切て我家を堂に造りて永く殺生を止まりにき。然る程に稱德天皇の御時社に祝ひ奉れと云託宣はべりて。軈て堂を社になして大智明神とぞ申侍る。利益新なれば彼所の砂だにも夕は逆上りて朝に下りて。參り下向の相を示す。彼岡の松は明神の御方に向ひて皆なびきける。歸依の姿を顯はし侍るとかや。と有れど此は妄説なり。稱德天皇の御世までに然る靈異の有らましかば。日本靈異記に載漏すべくも非ず。殊に伯耆の大山なる神は。神名帳に會見郡大神(おほかみ)山神社とある社にて大國主神を祭れる社なるをや。なほ此事は參攷神名式に委く論へるを見るべし。故(かれ)然る異驗の有なるを後に地藏を祭たる大智明神の奇瑞のごとく思ふは佛者の心なり。

さて此後は世々次々に地藏菩薩の靈異千變萬化にして。諺にいふ枯木も花咲き。唾壺より龍の出たるごとき幻相どもの多かること。今昔物語集を始め諸書を見て知るべし。又地藏菩薩の本經は本願經。十輪經。占察經。延命經なり。其靈驗を多く記せしは古今靈驗記。利益集。秘記。利生記。延命和談抄。同口吹。礦石集などなり披き見るべし。

好尙云今その靈驗の最も靈妙不測なるを少か記さば。今昔物語集に今は昔三井寺に一人の僧有けり。十一二歲許也ける時未出家せずして童子と遊けるに。戯れに自僧の形を刻み地藏菩薩と名付。古寺の佛壇の邊に置て時の花を折て其僧形を供養す。其後出家して名を淨照と云法を學び行を修て既に止事無き人に成にけり。而る間淨照年三十に滿る年に身に病を受て遂に死す。其時俄に猛き者二人出來て淨照を搦め捕へて駈進て黑き山有る麓に至る。其山の中に暗き一の穴有り。即淨照を其の穴に押し入。淨照心迷ひ肝碎けて思ゆることなし。但し纔に心有て思はく我は死ぬるなりけり。而るに生たる時法花經を讀誦し觀音地藏に懃に仕へり。

必此度助け給へと念じて穴に落入る間風極て猛く堪難し。二つの手を以て目を覆ふ。而る間。閻魔廳に至りぬ。四方を見廻すに多くの罪人有て泣き叫ぶ音雷の如し。其時一人の小僧出來れり。其形端嚴也淨照に告て宣はく我は汝が小童なりし時戯に造りし地藏なり。戯に作る所なりと云ども此を結緣として日夜に我汝を守るなり而るに我他行の間に此に召れたるなりと。淨照此を聞て地に跪て涙を流して禮拜す。小僧淨照を廳の前に將て行き訴て免し給ひつ。此の如く見ると思ふ間に即て活れり。其後淨照菩提心を發して佛道を修行す。戯に木を刻て地藏と名けて法の如く供養を至ざれども。地藏の利生は斯在しけり。況や心を發して造り供養し奉らむ功德思ひ遣べしと見え。又同書に今は昔京の太刀帶町の邊に住ける女有けり。聊に善心有て同廿四日に六波羅密の地藏講に參て聽聞しけるに。地藏の誓願說けるを聞て心を至して貴び悲て泣々家に返りぬ。其後地藏菩薩の像を造り奉らむと思ふ心深く付て衣を脫て佛師に與へて一搩手半の地藏を造り奉てけり。未開眼せざりける程に女俄に病を受て日來惱み煩ひ遂に死す。子供傍に居て泣悲むほどに三時許有て活く。目を見開て子供に語て曰く。我獨廣き野中を行たる間道に迷て行方を知らず。而る間冠したる官人一人出來て我を捕へて將て行く。亦端正なる一人の小僧出來て曰く此女は我母なり。速に免し放べしと官人此を聞て一巻の書を取出して我に向ひて云く。汝が身二つの罪有り早く其罪を懺悔すべし。一つには男婬の罪なり。泥塔造りて供養すべし。二つには講に參て法を聞畢らずして出去れりと。又小僧の宣はく我は汝が造れる所の地藏菩薩なり。其故に我來りて汝を助るなり。速に本國に返るべしと宣ひて道を敎へて返し遣たる也と語る。其後雲林院に有る僧を語らひて泥塔を造り供養し懺悔を行はしめけりとも云ひ。宇治拾遺物語にも。今は昔丹後國に老たる尼有けり。地藏菩薩は曉ごとにありき給ふ事をほのかに聞て。曉ごとに地藏見奉らむとて一夜かい惑ひ步行に博打の打ほうけて居たるが見て。尼公は寒きに何業し給ぞと云ば地藏菩薩の曉に步行給ふなるに逢まいらせんとて斯く步行也

と云ば。地藏の步行かせ給ふ道は我こそ知たればいざ給へ逢せまいらせむと云ば。哀嬉しき事かな。地藏の步行かせ給はむ處へ我を將ておはせよと云ば。我に物を得させ給へ驗て將て奉らむと云ければ。此著たる衣奉らむと云ばいざ給へとて隣なる處へ將て行く。尼悅びて急ぎ行に。其處の子に地藏と云童有けるを。其が親を知たりけるによりて地藏はと問ければ親遊びに去ぬ。今來なむと云ば。くは此處なり地藏の坐します所はと云ば。尼嬉くて紬の衣を脫て取すれば博打は急ぎて取て去ぬ。尼は地藏見參らせんとて居たれば。親共は心得ず。など此童を見むと思ふらむと思ふ程に。十計なる童の來るをくは地藏と云ば。尼見儘にせひも知ず臥轉びて拜み入て地にうつ伏たり。童ずはえを持て遊びける儘に來りけるが。其ずはえして手すさびの樣に額を掻ば。額より顏の上まで烈ぬ。烈たる中よりえも云ずめでたき地藏の御顏見え給ふ。尼拜み入て打見揚たれば斯て立給へれば。淚を流して拜み入參らせて軈て極樂へ參りけり。然れば心にだにも深く念じつれば。佛も見え給ふ也けり其

見え。なほ異しきは同書に。今は昔山階の道づらに。四ノ宮河原と云所にて。袖鏡と云ふ商人集る所有り。其邊の下すの有ける地藏菩薩を一體作り奉りけるを。開眼もせで櫃に打入て奥の部屋など思しき處に納め措て。世の營みにまぎれて三四年ばかり過にけり。或夜夢に大路を過る者の聲高に人呼聲のしければ。何事ぞと聞ば地藏こうと高く此家の前にて云なれば。奥の方より何事ぞと應ふる聲すなり。明日は帝釋の地藏會し給ふには參らせ給はぬかと云へば。此の小家の内より參らむと思へど。まだ目の開ねばえ參るまじくと云ば。かまへて參り給へと云ば。眼も見えねばいかでか參らむと云聲す也。打驚きて何の斯は夢に見えつるにかと思ひ參らすに異しくて。夜明て奥の方を能々見れば。此地藏納めて措奉りたりけるを思ひ出して。此が見え給ふにこそと驚きて開眼しけりと有り。又聖財集に昔平相國福原におはしける時貞守と云雜色を勘當して平兵衞尉と云侍に仰有て明日首を刎べしと有けるを。貞守泣々兵衞尉に申けるは。年來六波羅の地藏に月詣しけるに。今月未參詣

仕らず。最後に參て後世のことを申すべし。又八十になれる母が京に在り。今一度見候ひて朝はとくとく歸參るべしと云に。逃失まじき者也ければさもせよと許してけり。手を合せて泣々悦びて吉馬鞍有けるに乘じて。白太刀ばかり持つゝ六波羅寺に參て。日來參りては。今生の事も思ひ交へて申しつれども。命の候はむ事只今日計也。後世菩提を扶させ給へと泣々伏拜みて。太刀を御寶前に參らせ置て母が許へ行きしか〳〵と語りて。我なくて如何し給ふべき是はよき馬鞍也一とまど過給へといふ。母もたえこがれ臥倒れけれども泣々別れて夜中に福原へ打歸けり。其夜寅時ばかりに相國の夢に。老僧の金のマタブリを以て相國の頸をひしとつら貫き貞守が首切らば入道が首をつめ殺すべしと仰られければ。助け侍るべしと申して。マタブリを遁れて汗水になり。夢覺て朝。貞守を召て事の子細を問ひ聞て大に感じて猶々恩み召仕はれけり。兵衛尉も情有りて許したる事神妙也とて。彌氣色よかりけり。是但後世を思ふ心佛意に叶ひて。自ら今世も御扶有りけるなるべしと有り。尚右に引ける書共を始め記錄物語の類ひに。地藏の靈驗利益を記せる條々は。今數ふるに暇有らねど大概是に準へて曉るべし。また最可笑き事は沙石集に駿河國富士河の上りに。殺生を業とせる男有り。小地藏を一體持ち華香時々參らせて家に崇め奉りけり。或時夢に鬼に捕れて行けるを此地藏乞給ひけるに。鬼是は殺生の業によりて地獄に行べき者也と申すに。地藏是より後は止むべき由を敎ふべし枉て免せとて具して歸給ふと見て。一兩月が程は。殺生止めたりけるが。又本の如くしけり。聊煩ふ事有て絶入しぬ。今度は牛頭馬頭縛りて追立て行に。亦地藏來て乞給ふに先に約束違へて侍れば叶ひ候ふまじと申すを。漸に仰られて今度計り理を枉て助けよ自今以後は扶くまじと仰られて乞取て能々警め給ふに。今はふつと殺生留むべき由申して蘇りぬ。其後一年計止めたりけるが又殺生しける程に。重き病に責伏られて息絶ぬ。獄卒あまた縛りて追立て行に今度は。地藏も見え給はず。あら哀し度度約束違へて地藏にも棄られ奉ぬと思て一心に念じ奉るに地藏の影の如くにて側を通り給ふを。御

衣の裾に取付て引止めむとす。地藏は引放ちて逃むとし給ふ。獄卒如何にかゝる惡人をば横さまに救ひ給ふぞ。度々誑言申して候ふ者をと申すに。我は扶けず彼が取付る也と仰らるゝ時に一人の獄卒矢を以て脊より前へ射徹しぬ。又一人戈を以て胸を突貫きて土に突通して獄卒去りぬと思ひて蘇生して後。胸に疵有りて瘡となり遙に惱みて後出家して當時後世菩提の勤め懇にしつ。地藏を恭敬供養し奉ると云り。弘安年中の事也と云ひ。又同書に鎌倉に或武士二人知音也けるが。地藏を信じて倶に崇め供養しけり。一人は世間貧しかりければ舊き地藏の相好も整はぬを花香奉りて崇めける。一人は世間寛也ければ微妙く造立して厨子なむど美麗にしたてゝ崇め供養しけり。此人先立て世を早くしける時貧き知音に地藏を信ずる人なればとて本尊を讓けり。悦びて今の本尊を崇め供養して年頃の舊地藏をば傍に打置て供養もせざりけり。或時夢に此地藏物恨みたる氣色にて。「世を救ふ心は我も有ものを假の姿はさも有らばあれ。斯打詠め給ふと見て驚き騷ぎて一つ厨子に安置して同く供養を遂けるとぞと有るなどは。笑ふにもなを餘り有る事どもなり。亦六地藏と稱する物あり。其名の古く見えたるは今昔物語集に。今は昔周防の國の一宮に玉祖大明神とまうす神在す。其社の宮司にて玉祖惟高と云者あり。神社司子孫也と云ども少年の時より三寶に歸依する志有り其中にも殊に地藏菩薩に仕へて日夜に念じ怠る事なし而る間長德四年と云四月の比。惟高身に病を受て惱み煩ひ六七日を經て俄に絶入り冥途に趣く廣き野に出て道に迷ひ泣き悲む間六人の小僧出來れり。其形皆端嚴也。見れば一人は手に香爐を捧たり。一人は掌を合せたり。一人は寶珠を持たり。一人は錫杖を執れり。一人は花筥を持たり。一人は念珠を持たり。其中に香爐を持給へる小僧宣はく我等をば六地藏と云。六道の衆生の爲に六種の形を現せり。抑汝神宮の末葉也と云ども年來我誓を信じて懃に憑めり。

此惟高と云ふ人神宮の末葉と在りながら。地藏を信じたる事予別に思ふ旨有り。下に委く論ふを俟べし。

汝早く本國に返りて此の如く六軀の形を造りて恭敬すべし。我等は此より南の方に在と。此の如く見と思ふ程に三ヶ日夜を經たり。其後忽に三間四面の草堂を造りて六地藏の等身綵色の像を造り。其堂に安置し開眼供養しつ。其名をば六地藏堂と云。此六地藏の形は冥途にて見奉しを寫し奉れば也。其後維高齡七十に餘り鬢髮を剃て出家入道し。偏に極樂を願けり。命終る時に彌陀の寶號を唱へ。心に地藏の本誓を念じ西に向ひ端坐して失にけりと見え。元亨釋書にも釋藏滿傳に六地藏の降臨せる事を云り。

此事地藏靈驗記にも見えたり。釋書便蒙に法性地藏手持寶珠餓鬼道教主。寶陵地藏合掌畜生道教主。寶印地藏手持香爐地獄道教主也。陀羅尼地藏手持旌旗修羅道教主。鷄兜地藏手持錫杖人道教主。地持地藏手持念珠天道教主見或記と云ひ谷響集にも六地藏 寶以地藏菩薩寶處菩薩寶手菩薩持地菩薩寶印手菩薩堅固意菩薩名六地藏也と云ひ。尙餘の書どもにも見えたれど煩はしければ漏しつ。

此は一比丘にまれ六比丘にまれ。例の妖魅の變現なれば拘るに足ざる事ながら。既く世に六地藏と稱し。又六道の衆生を敎化すなど云へる說相に符せて。六比丘の形狀を視せるにも有べし抑佛道に歸依する者暫く死して獄卒に誘はれ。閻羅王の廳に赴く徒を横に出て救ふ者は。觀音菩薩も少からねど地藏菩薩は殊に多く。其變現せる形様を端正なる小僧とも。また其形端嚴なりとも美麗き小僧とも必云へり。既く師翁も引れたる地藏本願經に。或現男子身或現女人身或現神鬼身。或現天帝身或現梵王身或現比丘。比丘尼。羅漢。辟支。佛。菩薩等身而以化度と有れば女人神鬼天帝梵王などの身にも變現すべき事なるに。地藏菩薩と稱する時は其形端正とも端嚴とも云ひ。靈異記に端正をキラ〱シと讀て必美麗き小僧なるもいとおかし

上に引たる聖財集に入道相國の夢に老僧の形と見なしたるは珍し。なほ他の書にも種々の形に變現せる事有べけれど予いまだ見當らず。

また閻魔王が藤原朝臣廣足に云へる語に。我は閻羅王なり汝が國にては地藏菩薩と稱する是なりと有れば。同物分身と通ゆるを。其情態容貌少かも似たる趣なく。今佛刹に安置せる像を見るに。記錄物語などの事跡に據りて造り出せると聞え。閻魔は忿氣面貌に顯れ罪科の裁斷最も嚴酷に思はれ地藏は慈悲柔和にして衆生を救ひ敎化するよしなれば。主る處互に天地懸隔せり。然るを汝が國にては地藏菩薩と稱すと云へるは一時の幻語にもせよ。同躰分身とは甚く心得がたし。偖また地藏は慈心深きが故にや信じ敬ふ者世々次々に蕃殖して。何の地藏くれの地藏と己がじゝ唱へ出づ。其が中には无宿地藏首縊地藏伐地藏縛地藏など聞も忌々しき名稱なりかし。また慈心深きと云は上に引たる書どもに見たるは更なり沙石集にも地藏は六趣四生の苦を扶け給ふ事。諸佛菩薩の利生に勝れたりと云り。

鄙も都も猫も杓子もかしづく世とし成ぬれば彼本願經に爾時世尊舒金色臂摩百千萬億諸世界諸分身地藏菩薩頂言吾於世教化剛强衆生。令心調伏分身千百億。廣設方便云々と有る本願にも協ひて。佛刹及び道の邊に立すくめる石像の夥しく。其名稱も多かる事今計ふるに暇あらず。

彼柳樽に「夕立にすました顏の石地藏」と云る如く。雨に濡れ風に吹るゝ形樣は最も悲しき因果なりかし。また釋子の中にも。偶には地藏を信せざる者も有しと聞えて。沙石集に。中比念佛門の弘通盛なりける時は。餘佛餘經皆いたづら物也とて。或は法華經を河に流し。或は地藏の頭にて蓼搯なむどしけり。或里には隣家の事を下女の中に語りて。隣の家の地藏は既に目の元まで搯潰したるぞやと云けり。淺猿かりける所爲にこそ。或淨土宗の僧も地藏菩薩供養しける時。阿彌陀佛の側に立給へるを便なしとて取下して漸々に誹りけり。或淨土門の人は地藏信せん物は地獄に墮べし地藏は地獄におはする故にと云り。然らば彌陀觀音も利生方便には大悲代受苦と誓はせ給ひて地獄に遊戯してこそおはしませ地藏に限るべしや此等佛體の源を知らず。差別の執心深き故也と見えたるは。珍らしく思ゆる儘に記し出たり。猶地藏菩薩の事

は下にも往々論へる事ども有れば合せ見て思ひ辨ふべし。因に云西戎にては皇國ほど地藏も流行せざりしと聞えて。其名書籍ごもに多く見えず。酉陽雜俎金剛經鳩異篇に「梁崇義と云へる者の將に」孫咸と云ふ人暴に死して冥府に赴きしに地藏の助けたる事。また地獄をも見せたるに鑊湯沫を跳らし濺り左の股に落ち痛み心髓に入る。一日を經て蘇れるに夢の如く彼の濺りし所瘡と成て身を終るまで差ずと有などは。皇國に變現する地獄と大概異る事なし。委しくは本書に就て見よ。なほ斯有る事は彼國の書どもに多かるべけれど今は漏しぬ。

さて彼十王經の渡り來つる時代は詳ならねど。世に弘ごりて人も信ずるに付て。また彼經說の相に符へる葬頭河の奪衣婆さへに現はれて亡者を苦むる事となりぬ。其も今昔物語集に醍醐に蓮秀といふ僧有けり妻子を具せれども年ごろ懃に觀音に仕けり。蓮秀が身に重き病を受て日來を經て死けるが。一夜を經て活かへり妻子に語云く我死て高く嶮き峯を越て遙の道を行き。人の跡絕て鳥の音をだに聞かず極めて怖し氣なる鬼神をのみ見る此深き山を超畢りて大なる河あり。廣く深く怖ろし。其河の此方の岸に一人の嫗あり。其形鬼の如く甚怖し氣なり。大なる木の本に居たり。衣を懸たり。此嫗に何處ぞと問へば。嫗云く此は三途河なり。我は三途河の嫗なり。汝速に衣を脫て我に得しめて河を渡るべしと。其時に蓮秀衣を脫て嫗に與へむとす。

かの十王經に葬頭河曲於初江邊官廳相連云々。官前有大樹名衣領樹影住二鬼一名奪衣婆二名懸衣翁云々。牛頭鐵棒挾二人肩追渡疾瀨悉集樹下。婆鬼脫衣翁鬼懸枝顯罪低昂送後王廳とあるに甚よく符へり。漢土には十王の沙汰ありて三途川嫗鬼の沙汰なき故に。秦廣王初江王などの沙汰のみ有て嫗鬼の沙汰なく皇國には嫗鬼の沙汰弘く傳はり。閻魔を置て餘の九王の沙汰弘からざる故に。地獄の王とし云へば閻羅王のみ事を行ひ。嫗鬼の事をもかく變現するなりけり。

然る間に四人の天童俄に來て蓮秀が嫗に與えむとする衣を奪取て嫗に云く。蓮秀は法花の持者にて觀音の加護し給ふ人なり。汝嫗鬼何ぞ此が衣を得べきぞ

と。其時に媼鬼掌を合せて蓮秀を敬ひて衣を得ず。天童蓮秀に語云く。汝速に本國に歸り法華經を讀誦し。彌々觀音を念じて生死を離れて淨土に生れむ事を願へと教へて。具して返ると思ふ程に活れるなりと語り其後病忽に止て彌々法華經を讀誦し觀音に仕けりと有り。かく時々流行する說に符へて其相を現ずるを以て媼鬼も天童も共に釋魔なる事を思ひ辨ふべし。

譬へば劇場を業とする者の互に男となり女となり。義者とも成り奸者とも成りて俳優し。見る人を或は泣しめ或は喜ばし。或は威しなど種々に情を感かす類の幻術なりかし。

また古今著聞集に。攝津國に清澄寺といふ山寺あり。村人はきよし寺と云ふ。其寺に慈心坊尊惠といふ老僧有けり。本は叡山の學徒なり住山を厭ひて此處に來り年を送りければ人みな歸依しけり承安二年七月十六日脇足によりて法華經を讀ける程に。夢ともなく現ともなく白張に立烏帽子着たる男の藁沓はきたるが堅文を持て來れり。

此は閻羅王よりの使なれば天竺の裝束すべきに皇國の裝束なるは。天竺に處して天竺を行ひ。漢土に處しては漢を行ひ。皇國に處しては皇國を行ふ鬼神の常狀なれば。此は怪むに足らず。

尊惠あれば何處よりの人ぞと問ければ。閻魔王宮よりの御使なり請文(うけぶみ)の候とて立文を尊惠に取らせければ披見るに。崛二請閻浮提大日本國攝津國清澄寺尊天慈心坊一と端書して右來十八日於二焰魔廳一以二十萬人之持經者一可レ被レ轉二讀十萬部法華經一宜レ被二參勤一者依二閻王宣一崛請如レ件と書れたり。尊惠見て辭べき事ならねば領狀の請文を書て與ふと見て覺にけり。例時の程に成ければ寺を出ぬ。例時はてゝ僧ども出けるに老僧一兩人に此夢の告を語りければ。昔もかゝる例いひ傳へたり。其用意有べしと云ければ。房に歸りて勤彌々怠らず。

昔もかゝる例は上に載せる事どもの外にも。著聞集より以前の書共にいと多く見えたり。然れどかかる請文をもて來つる事は此外に見たる事なし。

○好尙云閻羅王の讀經を感たることは法華驗記に。沙門源尊稟二持法華一。日讀二誦數部一。盛年之比受二取重病一數日惱苦。即入二死門一臨二至冥途一趣二閻王

廳。見其作法尤可怖畏。傍有貴僧手執錫杖。又持經箱。即申閻王沙門源尊讀誦法華經年序多積。即坐嚴坐開箱授經。即捧經卷從第一卷至于第八卷高音讀誦經。閻王冥類合掌聞之。貴僧將出沙門源尊令向本國。還一日夜即得蘇生。と見え。又同書に信誓阿闍梨觀明律師弟子矣。幼少時入於佛法。天性質直誦法華經。天下疫病起。其時闍梨及父母受病。辛苦萬死一生。闍梨夢五色鬼神集會駈追令向冥途。闍梨是法華經持者也。免除不將去。夢覺所惱平愈。即見父母既入死門。闍梨揮淚誦法華。祈父母甦。夢法華第六卷從空飛下。其經副文其文注云孝子誦法華。依祈父母故延父母壽命。此度所還。是閻王消息也。夢覺見父母還一日一夜即得蘇息云々とも有り。

なほ經を感たる事は諸書に多く見えたり。

寺僧等きほひ來て訪ひけるが。十八日の申の終ばかりに唯いま心地少し例に違ひて世中も心細く覺ゆるこて打臥けるが西刻ばかりに息絶にけり。扨次の日辰のをはり程に生還りて若持法華經其心清淨の偈を四五行ほど誦しけり。其後起上りて冥途の事どもを語る。王宮に召れて十萬人の僧に列なりて。法華經十萬部の轉讀終りて法王尊惠を召て褥を設けて居らる。王は母屋の御簾の中に御坐して冥官どもは大床に列なり居たり。樣々の物語し給ひしに攝津國に往生の地五箇所あり。清澄寺は其内なり。汝順次の往生疑ふ事勿れ太政入道清盛は慈惠僧正の化身なり。敬禮慈惠大僧正天台佛法擁護者と誦へて。速に本國に歸りて往生の業をはげむべしとて還されたりと語ける。聞く人みな尊み珍がること限なし。其後一兩年を經てまた法華轉讀の爲に召れたりけると有り。猶往生の事など記して長かるを此に用ある事のみ引つめて載せるなり。閻魔王が語に清盛入道は慈惠僧正の化身也と云へる實に然も有べし。其は慈惠は觀音の變現なりと云こと諸書に記し傳へ死して金色の天狗と化り。愛宕山に集ひて世を亂す事謀しける天狗どもの中に此僧も列れる事などを清盛入道の邪法を修して一世の榮花を恣にし。種々の惡行をして世を擾亂せる行狀に思ひ合さるればなり。然る枉入道の本地をしも敬禮慈惠大僧正。天台佛法擁護者と讚美せるは承安二年の頃は彼入道の勢盛なりし間なりし

かば。其本地を讃擧てなほ佛法を興立せしめむ抔の意にや有けむ。いかに妖魔の掲焉ものに非ずや。清盛入道の邪法を修して榮花を恣にし。暴逆無道なる事は源平盛衰記平家物語などに委く見えたり。また上件の事を慈心坊が欲する旨ありて世に謟ひ云へるならむかとも思ゆれど然は有まじくこそ。又案るに古事談に慈惠僧正治山のとき人の夢に。八大龍王船に乘て大海を渡るに各々別船なり。一々渡り畢ぬるに。最後の船に乘者なし。此を問ふに。此船主はいま治山の務なるに仍て乘らずと云へり。然れば慈惠僧正は優鉢羅龍王の所變にやとあり。觀音の變現と云へるとき甚く異なる傳の如くなれど觀音は龍にも何にも化る由なれば。佛法の謂ゆる優鉢羅龍王も其所變ならむも知べからねば異むに足らず。若これ實の説ならむには愚管抄に。元暦二年七月九日午時ばかり斜ならず大地震ありき。古き家の轉ぬなく。所々の築垣崩れぬなく。山の口口に建る根本中堂以下ゆがまぬ處なし。事も斜ならず龍王動とぞ云なる。平相國龍になりて震たると世には申しきと有るは由有げなる事なりかし。

なほ地獄に往たる古事はいと多く數へも盡されぬを。上に擧たる條々に論へる説共に思ひ合せて。悉く妖魔の變幻なる事を辨ふべし。但し幽冥に往たる中に。源公忠辨の往て管相丞の訴給ふ狀を見て還れる冥界。又藤原良相公の往て小野篁卿に見えて還り給へる冥界などは眞の冥府と思ゆるを。此は別に記し辨へたる物あり。

好尚云今少か其事跡を記さば。古事談に公忠辨頓滅歷二三日一蘇生。告二家中之人一云。我今參內家人不レ信以爲二狂言一。然而依二事甚懇切一。被二相扶一參內。參レ自二瀧口戶一申二其由一。延喜聖主驚躁令レ謁給令レ奏言初頓滅之刻不覺悟一到二冥官所一門前有二一人一長一丈餘。衣二紫袍一捧二金書杖一訴云。延喜聖主所爲尤不レ安者。堂上有下紆二朱紫一者三十餘輩上。其中第二座者咲云延喜主頗以荒涼也。若有二改元一歟云々。事了。如レ夢蘇生云々。因レ之忽改二元延長一とあるを云れたるにや。門前有二一人一とあるは謂ゆる菅公と通えたり。また良相公の事は今昔物語集に。今は昔小野篁と云人有り學生にて有け

る時事有て公過を行はれけるに西三條大臣良相こ申ける人宰相として篁が爲に吉事を宣ひける篁心中に喜しと思ひて年來を經る間宰相に成ぬ。良相の大臣も。大臣に成ぬ而る間大臣身に重き病を受て日來を經て死給けり。閻魔王の使の爲に搦られて閻魔王宮に至りて罪を定らる王宮の臣共の居並ひたる中に小野篁居たり。大臣是を見て何なる事にか有らむと怖く思居たる程に。篁笏を取て王に申さく。此日本の大臣は心直くして人の爲吉者なり。今度の罪已に免し給はらむ。王宣く此れ極て難き事也と云ども申請ふに依て免し給ふと。然れば篁此搦たる者に仰せ給ひて速に將て返るべしと云へば、將て返ると思ふ程に活れり。其後病暫く止て日來を經るに。冥途の事極て怖く思へども人に語る事無し。篁にも問ふ事なし。而る間大臣内に參て陣の座に居給ふに宰相篁兼て居たり。又人无し。大臣只今吉よき隙也彼の事問はむと大臣居寄き。忍で篁の宰相に云く日來も便なくて申さず冥途の事極て忘れ難し。抑何なる事ぞと篁聞て少し頬咲て云く。先年の御口口の喜しく候しかば其喜に申したる也此事口に仰せられずいまだ人の知らざる事なり。大臣此を聞て彌恐れて篁は只人にも非りけり。閻魔王宮の臣也と云事を始て知て人の爲に直かるべき也とぞ。而る間此事自然世に聞えて。篁は閻魔王宮の臣として通ふ人也けりと。人皆知りて恐怖けりと語り傳へたると見えたり。また發心集に昔小野篁の妹の失て後夜々なゝ現に來りけるは。物いふ聲ばかりして詳には手に障る物無かりけるとぞ。とも有れば兄弟ともに最奇しき人なりかし。

○妍倚按ずるに僧俗男女に拘らず。暴逆無賴の徒は更也。質直清行の者も死して謂ゆる地獄に墮て閻羅王の刑政を受るに。師翁も既く論はれたる如く不明猥雜なる事少からず。又其麾下の冥官獄卒等が罪狀を糺問裁斷する趣の專等しきは傍痛き事にこそ。然れど閻羅王を始め。其冥司等も。都て釋魔の變現せるものなれば。我正道を紀律として議すべきには非ざれども。師翁の記し漏されたる中に見過しがたく思ゆる條々少か拾ひ出て今委曲に辨へてむ。其は高野姫天皇の西大寺を建立し給

ふ時。藤原永手公の國家の費を思ひ慮られ。塔婆の製作を減略せられたる罪の由にて。冥途にて暫燒銅の柱を抱かれ。

其は古事談に孝謙天皇西大寺建立之時於塔婆欲造八角七重之由被仰合長手大臣之處長手申云四角五重可足歟。我造八角七重請爲國土之費歟云々依之被造四角五重了。大臣者存公平雖令申爲後生之責於冥途被抱燒銅柱云々長手子息病患之時請名德僧數日加持之或日傍人假託云。我是長手也。存生之時依申減西大寺塔婆於冥途抱銅柱經年序之間。令炎魔王宮薫香煙仍矣王奇驚被尋由緒之處冥官申云。日本國非人長手息男從三位上藤原家頼。依病患以一僧加持伴僧凝堅固之信心替己身令祈請有效驗依志之深。其香煙所來薫也云々。依之免苦患令引卒同朋二十餘人生天上仍爲告此旨所來託也云々と有り。靈異記にも此事を記せるには塔婆を減略して造られたる外に。法華寺の幢を仆されたる罪もあるよしなり。委くは本書を見るべし。今犯されたる。罪を思ふに佛意を以て裁斷らむにも重き罪に非ず。然るに冥府にて燒銅の柱を抱かせたるは嚴酷に過たりと云ふべし。又我正道を以て考ふれば。國家の費を思ひ慮られて減造せられたれば。朝廷には忠誠なる所爲とこそ云べけれ。抑此公は贈太政大臣房前公の第二子にて。位階も正一位左大臣まで昇進せられ。續紀の薨れし所の傳に。寶龜元年高野天皇不悆時。道鏡因播耤恩私勢振內外。自廢帝黜宗室有重望者多羅非辜日嗣之位遂且絕矣。道鏡自以寵愛隆渥日夜僥倖非望至宮車晏駕定策遂安社稷者。大臣之力居多焉と見えたる如くなれば。冥府の刑政實に不當不律と云ふべし。

或は命數いまだ盡ざるに非道に死しめて冥府へ呼迎へ。(其は續古事談に嘉承元年の夏世の中騷がしくて東西二京に死る者多かりけり。其中に所の御筆ゆひ能定病つきて七日と云に死けり。櫃に入れて黃なる花□□て人離たる所に捨つ。四日を經て途行人聞ければ櫃の中に音しけり。怪しみて見るに蘇りたり。水を飲せて彼が家に告たりければ。妻子悅びて歸りて日比經て心地例ざまになりて語

りける。死て後恐き者共我を追立て暗野を行に。此世にて見し人更になし。唯風の音水の音ばかり耳に聞ゆ。若き童子の我を知たると思しき後に添て離れず。閻魔王宮に至りて二階の門を入る冥官其數あり。壇の下には罪人或は縛られ或は鉗したる者ども並居たり。遙に見上れば冠うへの衣着たる人三十餘人床につき並たり。ひら緒は有ど太刀はかず。我罪を判して地獄へ遣はず口口に入るゝに此ぐしたりつる童子閻魔王に申さく此人壽限未だ盡ず。免さるべきなり。王是を聞ず。童子怒りて云く閻魔王也といふもいかでか言む事をば違ふべきとて火を以て王宮を燒むとす。煙滿々て王宮の中くれ塞りぬ。此時王驚きて冥官と共に重て書を考ふるに。誠に命盡ず。王功德を作り罪を懼るべき由を云てこの童子に取せつ。童子此を俱して故郷に歸る。大なる穴の口に至りて我を押入と思程に蘇りたり。倩此事を思へば年來不動を賴み奉りて本尊とす。生て加護の誓違はず。斯し給ふ尊く愛たき事限り无しとぞ云けると有り。また前卷に師のひかれたる布敷臣衣女が事抔思ひ合すべし）

或は閻魔王宮燒失して生死の簡牒混淆し。短命變じて故に長壽と成れる類ひ計ふるに暇あらず。古來談に大御室者御壽命以二十八一可レ爲レ限之由有二宿曜勘文一依レ之十八歲春修二尊勝法一令二祈請一給之間。或人夢想炎魔王宮火付已令レ燒間。王宮騷動甚。便件御壽限二十八一之由札文已明白也。然而依二炎上一難レ治鈎二八字一了。果八十御歲九月廿七日御入滅と有り。なほ斯有る事は多けれど煩はしければ洩しつ。

抑斯く亂雜なるは閻羅王が暗愚より發れる中に。魔下の冥官等が所業も多かるべし。其はまづ豐山儀軌中なる焔羅王供行法次第と云下に。焔羅法王本宮在二鐵圍山之北地中一。是即冥道宮也。五方各屬而爲二圍繞一宮中庭有二檀拏幢一。其頭有二一少忿怒之面一。王常見二其面一知二人間罪輕重善惡一有下作二重罪一之者上。從二其口一出二火光一々中黑繩涌出警覺。見二木札一知二其姓名一。料二記之一又有二作善之者一白蓮花從レ口開敷其香普薰。大山府君。五道將軍王。常奉二王敎一能定二善惡一云々。是法疫病氣病一切病惱時。宜下修レ之正報盡付二死籍一能乞レ王側二死籍一付中生

籍上ニ多誦ニ太山府君ノ咒ヲ南无釋迦牟尼如來御名七遍可レ誦レ之とも。また太山府君住宅ハ□山後ノ有ニ勇猛ノ鬼王ニ刹那間ニ遊ニ行世界ニ行ニ木札之病ヲ注に木札ハ者疫病之異名也と有りて。此太山府君と云鬼妖魅の較著き物にて。冥官等が中にも酋長なりと聞え。また顯世に疫病の流行せるは。右の文に據れば此妖物の所爲も多かると聞えたり。

但し勘解由長官有國と云者。父輔道の俄に病て忽に死けるを。泰山府君の祭を爲して蘇生したる事古事談に見えたるを思ふべし。其は既く冥司となりて閻王の教を奉行し善惡をも定むる由なれば然る異驗をも視せたるなり。都て神も妖魅も惡き業のみ行ひては。信を人に起さしむることは能はず。是ぞ妖魅の妖魅たる所にて。萬民の耳目を誑惑し。千歳に餘る今の世までも仰き敬はるゝ根基にぞ有ける。あな忌じき方便なるかも。

斯て法華驗記に沙門源尊京ニ持法華ヲ日讀誦數部。盛年之頃受ニ取重病ヲ數日惱苦。即入ニ死門ニ臨ニ至冥途ニ趣ニ閻王廳ニ冥官冥道首ニ戴レ冠。鬼神著ニ鎧ヲ抜ニ或著ニ甲冑ヲ又著ニ補襠ヲ腰帶ニ屬鏤ヲ手捧ニ戟鉾ヲ或向ニ書案ニ開ニ笈櫃等ヲ或簡牒ニ注ニ記善惡ヲ見ニ其作法ヲ尤可ニ怖畏ニ云々と有れば。其形狀威儀も種々にて人數も多かる中には。既く地獄に墮たる徒の冥官と成れるも有と聞えたり。

平治物語に信西は凡人ならぬにや。死して後も手には日記を捧げ。口には筆を含み閻魔の廳にても第三の冥官に列りけると人の夢にも見えたりと云ひ。また古今著聞集に。二條右衛門佐重隆。沒後に冥官に成にける。白河院善と御罪等しくおはします間御生所定らせ給はぬよし冥官申と或人の夢に見たりけり。重隆舊臣のよしみにて。かく申けるにこそ哀なる事なり。鳥羽院此事を聞し召て樣樣の御事どもありて。弔ひ參らせられけりと有ればなり。猶例多かるべし。

此文に或向ニ書案ニ開ニ笈櫃等ヲ或簡牒ニ注ニ記善惡ヲと有る簡牒と云物は麤漏なる書かと思ふに然らず。都て世の中の人の生死の年月行狀の善否は更なり諺に云米を數へて炊き。薪を秤て焚とか云如き少けき事も洩さず載せると聞えて。源滿仲の郎等某が塩藏の立る寺の門外を通るとて。僅に敬ふ心を

發して笠を脫ぎ。或は幼き時戯に觀音の像を刻めるばかりの事にも。冥途にて其靈驗の著明きは最も異しき事ならずや。而るを上に引たる如き閻魔王宮の燒失せるにも有れ十八歳の八十歳となり。能定を冥府へ召迎へたるに不動の强て乞へるに據り。謂ゆる簡牒を探りて命數のいまだ盡ざる事を悟れるなどは。猥雜と云ふにも餘り有る事なり。都て地獄に墮たる者の趣を考ふるに。釋魔の因緣絕て無き者は一人も魔界に赴きし例なく。假令赴くにもせよ深く其道を信じたるは然も有べけれど。僅に一度彌陀の名號を唱へたるばかりの事にて暫の間にも有れ。三熱の苦みなど受るはいとあぢきなき事なり。偶には魔緣無き人も然る事の有べきに。欽明天皇の大御代。此道の渡り來るまで彼說相に符へるためし無きを以て辨ふべし。世の中に人の心を惑す邪業の多かる中に。此殃に交こられざる者ほとゝ希なり。抑佛の道を信ずる意は。地獄にも墮まじく。天堂とか極樂とか云へる樂しき所に往生すべしとの結構なるが。其結構即て魔緣となり。魔緣即て魔界に陷る楷梯としも知らざるは憐むべく。是ぞ贔負の曳仆しにて釋魔の方便怖るべき事なりかし。

偖また佛說弘まりし以來。天堂極樂の往生と云事をいと止事なき事として。古書共にあまた其事を記し傳へたるが。是はた妖鬼釋魔の經說に符せて然る相を變現して世をも人をも誑かす也けり。是故に正しく佛の來迎をうけて極樂に往生したりと聞えたる法師原の。或は釋魔道に入り或は畜生道に墮して。種種の物と成たる事證のいと多くぞ有ける。然るはまづ古くは左京の禪院に住せる道昭和尙は。國史を始め書共に香氣房に滿ち繩上に端坐して往生し。火葬せる遺骨より光を放たるを神の忮れりと傳えたるに。其靈の親しく解脫房に託せる語に。魔道に墮て晝夜に種々の酷苦を受るよし云へるを以て知べし。第一卷に記せる明慧上人傳の文見るべし。

故爰に古書共に記せる極樂淨土往生の傳の憐なるを五六擧て釋魔の變態を云ひ悟さば。まづ古事談に安藝僧都觀智は能說の名德なり。慈悲忍辱にして憐愍有しかば親疎これに依れり。臨終のとき苦痛なく正念に住す。弟子ども西方に牟向むとしければ。空中に

音ありて達摩和尚の文の次句を告て云く以二正念一西方勿レ見西方非二西方一心可レ念二西方一といふ文を誦して同事なりと云けり。惣て種々の要文を唱へて咲ふ如く命終れり。此を見る輩。疑なき往生なりとて悦びけり。

誠に西方に佛有に非ざれば空中に音有しはやがて釋魔の變態なり。さて現世をばかく當人をも他人をも佛有げに誑せるが。實は其魔道に引入るゝなる故に下文のごとく三熱の苦を受る也けり。

然るに中陰のゝち後房の夢に僧都庭上に來れるに其姿影の如くにて裸形なり。後房問云く臨終のさま。神妙に候へしかば心安く思ひ給ふる處に此御姿こそ悲しく候へ。何處に生させ給へると云ふに鬼道に候ふて忍がたき苦を受候ふなり。事の體を見せ奉らむ爲に參りて候なりとて。緣の際を庭中の邊に居ざり出ければ。無量の布施布虛より降り地より出て其身を埋み炎出來て此布に付き燒けり。燒畢りて灰中に消灰の如くにて見えけり。漸くまた人の正體になりて一日に三箇度かゝる苦を受候ふなりとて泣て退歸すと云り。

臨終の時には。然も佛の西方に迎ふる狀に變態しけれど實には西方の淨土なく。西方淨土と思へるがやがて釋魔道なる故にかゝる苦を受たるを。人の知ざるが慨たくなど有てかく告に來しなるべし。

また元亨釋書に釋實因少年離レ家。爲二叡山弘延弟子一。性聰慧誦憶少レ雙。儀容挺特志氣强健。耐二飢寒一勤二苦學一。膏油繼レ晷薄資二博物一。議論之場重二其席一。每レ逢二講說一聞者垂レ淚而感喜。又稟二密敎一行二苦修一。晚移二小松寺一。凝二觀心一誦二法華一。夢有二七寶塔一。釋迦多寶並レ坐放レ光。空中有レ聲曰。汝依二觀心誦經之力一。見二一如來西方迎接一。不レ生二疑慮一。後數年誦二提婆品一。結レ印而卽レ世矣と有れば。實因僧都は釋迦多寶二佛の迎接にて極樂往生せる事疑無しと思べけれど。宇治拾遺物語に。今はむかし了延房阿闍梨日吉の社へ參りて歸る路に唐崎の邊を過るに有相安樂行此依觀發品といふ文を誦したりければ。浪中に散心誦法華不入禪三昧と末の句を誦する聲あり。不思議の思をなして何なる人の御坐すぞと問ふに。奧房僧都實因と名告ければ汀にゐて法文を談じけるに少々僻事どもを答ければ。此は僻事也。如何と問けるに。能申すとこそ思ひ候

へども生改まりぬれば力及ばぬ事なり。我なればこそ此程も申せと云けり。と有を思ふべし。

此事は古事談にも見たれば校合せ見て載せり。法華經の文は本書に正して記せり。

實因が前の夢に。釋迦多寶二佛西方の迎接を約して宜々しげに迎ひ接つれども。元より極樂といふ地は無ければ遂に捨たりけむ故に。實因が靈その往方を知らず。さ迷ひて湖中の鱗魚と生を轉じたる也けり。佛の迎接の信がたき事是をもて知べし。

元亨釋書便蒙に按因公之記足為一高僧焉。然繋望於法性寺之座主位而託生于鬼趣者我不知其由矣と云へるは。何に據りて云へるか余いまだ其説を得ず○好尚云釋子等が種々の物と轉生せる事數多の書どもに見えたるを。今一つ二つ記さば法華驗記に。律師无空平生念佛爲業衣食常乏自謂我貧亡後定煩遺弟竊以萬錢置于房内天井之上欲支葬斂律師臥病言不及錢忽以遷世○枇杷左大臣與律師有舊契大臣夢律師衣裳垢穢形容枯槁來相語曰。我以有伏藏錢貨不度而受蛇身願以其錢可書寫法華經○大臣自到舊坊捜得萬錢錢之中有小蛇○見人逃去○大臣忽令書寫供養法華經一部畢○他日夢律師衣服鮮明○顏色悅澤手持香爐來語大臣曰○吾以相府之恩得免蛇道今當詣極樂西向飛去矣といひ。また古今著聞集に阿波國に智願上人とて國中に歸依する上人有り。めのとなりける尼死侍りて後上人の許に思はざるに馱を一疋設けたりけり。是に乘て歩行に道の早きのみに非ず。惡き道を行河を渡る時も危き事なく。急ぐ要の事有時は鞭の蔭を見ねども早く行き。のどかに思ふ時は靜なり。事にをきて有がたく思ふさまなる程に。此馬程なく死ければ上人惜み歎きける程に。少しも違はぬ馬出來にければ。上人悅びて先の樣に祕藏して乘歩行けるに。或尼に靈付て怪しかりければ。誰人の何事におはしたるぞと問ければ。我は上人の御めのとなりし尼也。上人の御事をあまりにおろかならず思ひ奉りし故に。馬と成て久しく上人を負奉りて露も御心に違はざりき。程なく生を替て侍りしかども上人猶忘れがたく思ひ奉りし故に。又同じ樣なる馬と成て今も是に侍也といふ。上人是

を聞に年頭も怪しく思ひし馬の樣なれば。思ひ合せらるゝ事共哀に覺えて堂を立佛を作り供養して。かの菩提を弔はれけり。馬をばゆゝしく勞りてぞおきたりける。執心の深き故に再馬に生れて志を顯しけるいと哀なり。是建長の頃の事なれば今の事也と見え。また三國傳記に播磨國に或る僧の住ける軒端の前栽に橘の木有り。實の多くなるのみならず其味も濃なりければ。主僧類なき物に思ひて祕藏する事極りなし。彼房の隣に年闌たる尼獨栖けり。重き病を受て床に臥せり。然るに此の橘を牆ごしに見て彼を喰ばやと云ければ。看病の者則人を遣りて所望したりけるに。橘主堅く惜みて情無く一枝をも與へず。病者此を聞最安からず思ひて心の中に怨けるは。我病惱存命今日明日に極れり。縱多食すとも二つ三つには過ぐべからず。其程の物を惜みて我願ひを協へぬ事よ。日來は。極樂に生れむ事を願ひき。今に至りては彼木を食枯す虫と成て主に損を取らせ。憤りを散せむと祈念してぞ死たりける。隣の僧は此事も知らず橘を愛執して有ける。其後此橘の落けるを不思議に思ひて取て見れば。橘の袋ごとに五六分計なる蟲あり。もし橘ひとつに限れるかと思ひて落るを取りて見れば悉く然なり。毎年かく有ければ其木何にかはせんとて切てぞ捨たりける。彼の尼の願力とは云ながら多くの蟲と成ける事こそ不思議なれ。或は頭目髓腦を與へ又は身肉手足をだにも施すは佛法者の行なるに。橘一枝を惜みて自他の罪業を畜へける主の僧こそうたてけれ。乞も無財餓鬼惜むも有財餓鬼なり。共に執心の深き二人の罪こそ恐ろしけれとも有り。靈異記に成實論云。若人負レ債不レ償墮ニ牛羊麞鹿驢馬等中一償ニ其宿債一とも云へり思ひ符すべし。

なほ佛魔の變幻を知べき狀なる往生人どもの事を三つ四つ記さば。今昔物語集に加賀前司源兼增と云ける人の女。若より法華經を受習ひ日夜に讀誦して年久しく成けれど。无量義經と普賢經をば受習ざりけり。然るに彼女病を受て日來を經る程に失せぬ。一夜を經て活て語云く。我死しとき俄に强力なる四五人來て我を追て遙に野山を過て將行く程に一の大なる寺あり。其寺に我を將入りぬ。金堂。講堂。經藏。鐘樓。

僧房。門樓など極めて多く造り重ねて。莊嚴せる事實に微妙なり。其中に天冠を戴ける天人。瓔珞を懸たる菩薩員を知らず。また年老貴き僧多かり。我心に此ば極樂にや有らむ。兜率天にや有らむと思ふに僧有て告云く。汝法華經を誦せし員多ければ此寺に來るべし。然れども來べき期いまだ速きに此度は返るべしと。我此を聞て一堂を見るに多くの法華經を積置たり。僧云く此經は汝が年來誦せる處の經なり。善根に依て汝此處に生れて樂を受べしと。

かく讀誦の經卷を積置たる狀を視せたる事實は。地獄に往たる條々に別に多かり。變幻なること言まくも更なれば誑惑せらるゝ事勿れ。僧此處に生れて樂を受べしと云へる事は下に評すべし。

又一つの高堂を見れば佛在して金色の光を放て照し給ふ。たゞ袈裟を面に覆ひ給へり。然れば御顏を禮み奉らず。微妙の音を出して告云はく。汝法華經を讀誦するに依て我身を汝に見せ音を聞しむ汝速に本國に返りて。なほも法華經を讀誦せよ。また無量義經普賢經を相副て讀誦すべし。其時に我面を隱さず汝に見せむ。我は釋迦如來なりと宣ひて天童二人を副て送り給ふ。我天童と共に來て家內に入ると思ふ間に活る也と語る。其後彌々心を至して法華經を讀誦し無量義經普賢經を副て讀誦しけり。釋迦如來は涅槃に入給て後はかく淨土を建立して在べしと思さるに。此は法華經讀誦の力を助けむが爲に靈鷲山を見せ給ふにやと有り。撰者の語の如く此は實に靈鷲山なりしか其は知らねども誠に佛祖の變現したる淨土なる事は疑なし然れど其所に往生して佛となり樂を極むと云ふ事は。實因僧都に西方迎接不レ生二疑處一と云へるに。彼僧の湖中の鱗魚と轉生したるを以て。此も幻妄の語にて信がたき事を知べし。

殊に法華經は佛祖入滅より五百年後の天竺人の佛說に託して作れる經にて。無量義經普賢經などは。法華經の世に出たるよりはまた後人の彼經を世に用しめむが爲に其傍證にせむとて此も佛祖に託して。作れること出定笑語に委く論へるが如し。然れば佛祖の靈かの經々は我より後の人共の僞作なる事は早知つゝも世の愚者の用ふるまゝに。其意に符へて彼經を讀誦する功德の卓たる由を示して。誑惑せるなり。努々惑ふ事勿れ。

斯て其誓願の如くなほ種々の相を現じ種々の物とも化て往生を勸むるに音樂を奏し。華を降しなど爲る幻術は例の事なれば更にも云ず。變幻の別に尤けきをのみ三四記さば。同じ今昔物語集に播磨國賀古郡蜂目郷に增祐と云僧有けるが。京に入て。如意寺といふ處に住して他事なく讀經念佛しけるに。天安四年の正月ごろ小瘡の病有て飲食不ㇾ例ざりける時。傍人の夢に此寺の西の方なる井の邊に三の車有り。車に付たる人に何ぞと問へば。增祐聖人を迎ふる車なりと云と見て覺ぬ。其後また夢に彼車前には井の下に有しに此度は增祐が房の前に有と見て。增祐に此由を告けり。其月の晦日に成て增祐弟子を呼て云く我已に死期近づけり。葬具を儲べしと。弟子此を聞て驚き怪しむ。遂に增祐命終らむと爲る時に臨みて。弟子の僧其寺を五六町ばかり去て一つの大なる穴を掘て葬處とす。然るに增祐その處に至り穴中に入りて念佛を唱へて失にけり此時其寺の南方に人多く音を擧て念佛を唱ふ。寺の人此を聞て驚き怪みて尋ねみるに念佛を唱ふる人無りけり。此は增祐が死する時に當れり。此を思ふに化人の所作と知て寺の人皆貴びけりと有り。

こは此に要なき文を省きて擧たれば委くは本書を見よ。

また同書に信濃國高井郡中津村なる如法寺といふ寺に藥蓮と云ふ沙彌の僧住けり。妻子を具して。世を過せども日夜阿彌陀經を讀み彌陀の念佛を唱へて怠らず。子二人あり男と女となり。然るに藥蓮二人の子を呼て云く我明日の曉に極樂に往生せんとす。速に衣裳を洗ひ身を沐浴せむと思ふと。二人の子ども此を聞て淨き衣を儲け調ふ。其夜に藥蓮舊き衣を脫弃て沐浴し。淨き衣を著て一人堂に入て子共に云く。明日の午剋に至りて堂の戶を開くべし。其前には努努開くこと勿れと子共きゝて泣々終夜堂の邊を離れず寢ずして聞くに。曉に成て堂內に微妙の音樂の音あり。此を聞て奇異なり夢かなど思ふ間に夜は曉けぬ。

往生の時に空に音樂を奏して迎ふることは常なれども堂內に閉籠らしめて。音樂を奏したるは甚珍らし。なほ珍らしきは同書に今は昔一人の女有けり。姓は藤原の氏也。此女本より心柔軟にして慈

悲有けり。常に極樂に心を懸て日夜に念佛を唱へて怠る事无かりけり。而る間漸く年積て老に臨て女人に語て云く。我年來極樂に生れむと願ひて晝夜に念佛を唱へつるに。今遙に微妙き音樂の音を聞く此往生すべき相かと。人此事を聞き貴び思ふ間其明る年亦云去年聞し音樂の音今少し近付にたり。此往生の期の近付故かと亦其明る年云く前の音樂の音年を追て近付く。就中に近日寢屋の上に聞ゆ。今往生の時至れりと云て彌念佛を唱へて怠る事なし。而る間女身に病无く苦む所无くして終り貴くして失にけり。此を見聞く人此女必極樂に往生しぬと知て悲み貴びけり。此を思ふに往生すべき人は兼て其相現ずる事也けりとなむ語り傳へたると也と有るも。音樂の年々に近よりしは釋迦多寶の迎接と誑せる如き釋魔の所爲なり。○好尙云死期を知たる例を少か記さば。同書に觀幸或時に俄に弟子の僧に告て云く。我は明日の未時に死むとす。汝等諸共に只今より明日の未の時まで念佛を唱へて音を斷つ事无かれと云て。自沐浴して淨き衣を着て念佛を始め唱へて終夜居たり。夜曉て既に午時に成る程に觀幸持佛堂に入て內着し籠て居ぬ。弟子物の迫より臨きて見れば佛の御前に端座して行ひ居たり。良久く有るに戶を叩て呼と云ども音も爲ねば戶を放ちて入て見に掌を合せて端座して死て有り。弟子等此を見て泣々悲み貴みて彌念佛を唱へけりと有り。なほ此書は更なり數多の書どもに。死期をまだきに知たる釋子等は數へ盡すべくも非ず。

既に午尅に至ぬれば堂の戶を開て見るに藥蓮が身なし。また持たる阿彌陀經も見えず。子ども奇異なりと思ひて心を迷はし尋ね求むるに遂に其體を見ずして止にけり。此を聞て其邊の人集り來て子共に問ふ。曉の音樂の事を語る。然れば藥蓮現身に往生せる也と云て皆人淚を流して貴びけり。往生は常の事なれ共身體を留めて其相を現はす。然るに此は其身無れは若逃て貴き山寺などに行たるかと思ふに子ども其邊を去らず。また堂の戶開けず內より閉たり。況や遂に聞ゆる事なし。然れば其身ながら往生せるこそ曉の音樂を思ふに疑なし。但し體を地神などの取て淨き處に置たるなめりとぞ疑ひけると有り。

此は地神の隱せるに非ずまた逃出たるにも非ず。案ふに此は釋魔の態と云中にも魔鬼なるが。佛の來迎めかして往生の日を誨し。堂內にて音樂の音をなして紛らし。其音の喧きにあはやと云けむを一と口に噉て有けむ。然るを傍の人も記者も眞の往生と思へる也けり鬼の人を一口に噉ける事は當時いと多く有し事なりきまた發心集に聖德太子の御墓に住ける覺能と云ける僧。常に琵琶を好めるが死て空しきから久しく亂れ損せず有けるが。四十九日と云に其身いづちともなく失せて見えず成にけり此五十年許が先の事なれば。年高き人などは見たるもやあるらむと有も此の類なり。〇好尙云古今著聞集に少將の聖も大原山の住人なり。三十餘年常行三昧を行せられける間に。毘沙門天王形を顯して上人を守護し給ひけり。御影像を束身に圖繪して今に勝林院に安置せられたるなり。此上人臨終の時は勝林院に常行三昧行ひける時。西方より紫雲現じて堂の內へ入と見る程に肉身ながら見えず即身成佛の人にやと有も似たる事也。借また魔鬼の一と口に噉たる例二つ三つ記さば。今

昔物語集に今は昔右近中將在原業平と云人有けり。世の好色にて世に有る女の形美しと聞くをば。宮仕人をも人の娘をも見殘す方無く員を盡して見むと思ひけるに。或人の娘の形有樣世に知らず微妙しと聞けるを。心を盡して假借しけれども止事无からむ婿取らせむと云て祖共の微妙く傅きければ業平中將力无して有ける程に。何にしてか搆けむ彼の女を密に盜出してけり。忽に將て隱るべき所の无かりければ北山科の邊に舊き山莊の荒て人も住ず有けるに。其家の內に大きなるあせ倉有けり。片戶は倒れてなむ有ける。住ける屋は板敷の板もなく立寄べき樣も无かりければ。此倉の內に疊一枚を敷て此女を具して臥せりけり然る所に俄に雷電霹靂して喤きければ。中將太刀を拔きて女をば後の方に押遣て起てひらめかしける程に。雷も漸く鳴止にければ夜も曉ぬ。而る間女音も爲さりければ。中將恠みて見返りて見るに女の頭の限りと着たりける衣と許殘りたり。中將奇異く怖しくて着物をも取敢ず逃て去にけり。然れば雷電霹靂には非ずして倉に住ける鬼のしけるにや有け

むと見え。また同書に今は昔小松天皇の御代に武德殿の松原を若き女三人打群て內樣へ行けり。八月十七日の夜の事なれば月極て明し。而る間松の木の本に男一人出來たり。此過る女の中に一人を引へて松の木の木景にて女の手を捕へて物語りしけり。今二人の女は今や物云畢りて來ると待立てりけるに良久く見えず。物云音も爲ざりければ。何なる事ぞと怖く思ひて二人の女寄て見に女も男も无し。此は何くへ行にけるぞと思て能見れば只女の手足許り離れて有り。二人の女此を見て驚て走り逃て衞門の陣に寄て陣の人に此由を告ければ陣の人共驚きて其所に行て見ければ。凡そ屍散たる事なくして足手のみ殘たり。其時に人集り來て見喤る事限无し。此は鬼の人の形と成て此女を噉てける也けりとぞ人云けるとも云ひまた同書に今は昔或所に宮仕しける若き女ありけり。只局にのみ居けるに指る夫も無くて懷姙しにけり。主に申さむと思も恥かしくて。申し出さず。而るに漸く月滿てその氣色思えければ。粟田山の方樣に深く入りて北山科と云所に行ぬ。見れば山の片副に舊く壞れ損したる屋有り見るに人住たる氣色无し。此にて產して我が身獨は出なむと垣の有けるを超て入ぬ。板敷所々に朽殘るに上りて息む程。奧の方より人來る音す遣戶の有るを開くるをみれは老たる女の白髮生たる出來たり。さだめて半无く云むと思ふに思懸ず打咲て何人の御したるぞと云。女有の儘に泣々語ければ嫗糸哀なる事かな。此にて產し給へと云て內に呼入るれば女喜き事限无し。佛の助け給ふ也けりと思ひて入たれば。賤の疊など敷て取せ程も無く平かに產しぬ。嫗來て喜き事也己は年老て斯る片田舍に侍る身なれば物忌もし侍らず。七日許は此て御して返り給へと云て。湯抔涌させて浴しなど爲れば。女喜く思ひ弃てむと思ひつる子も嚴氣なる男子にて有れば弃ずして乳呑せて臥させたり。此て二三日許有る程に女晝寢して有けるに。子を臥させたるを嫗打見て云ける樣。穴甘氣只一ト口と云と髴に聞て後驚て此嫗を見るに極て怖しく思ゆ。是は鬼にこそ有けめ。我は必噉れなむと思ひ密に構て逃なむと思ふ心附ぬ。而る間或時嫗の晝寢久しくしたりける程に。密に子を

ば女の竜に負せて我は輕やかにして佛助け給へと念し。其を出て來りし道の儘に走りに走りて逃げれば。程もなく粟田口に出にけり。其後嫗の有様を知らず女の年老て後に語ける也。彼嫗も子を穴甘氣只一と口と云けるは定めて鬼抔にこそは有けめと有るをも思ふべし。なほ斯有る枉鬼の事は予思ふ旨有りて下に委く論辨するを俟べし。

なほ斯る類の事は同書に近江國坂田郡なりける息長氏の女。日夜に極樂を願ひて念佛を唱けり。而るに其國に筑摩といふ處に江あり。其江に蓮生たり。此女その江に行て蓮花を取て心を至して彌陀佛に供養して極樂に迎へ給へと懃に願ひて數の年をふるに。遂に命終らむと爲る時に紫雲西より聳き來て家内に涌入りて女を纒ひて有ければ。現に此を見る人多かりけるに。此女紫雲に交ながら失にけり。此を見聞く人みな此女かならず極樂に往生せる人なりと知て悲ひ貴ひけり。紫雲來て家内に入て身を纒ひて失ぬれは更に疑ふべきに非す。此を聞かむ人心を至して極樂を願ふべしと有り。其に妖魔の襲ひ殺せるなり。

撰者の言に紫雲來て家内に入て身を纒ひてうせぬれば更に疑ふへきに非ずと云へれど。紫雲。光曜。香馥。音樂は妖魔の人を誑かす時には必ず行ふ術なれば信とは爲がたくなむ。○好尚云酉陽雜俎冥跡篇に。處士鄭賓于言嘗客河北。有村正妻新死。未殮日暮其兒女忽覺有樂聲漸近至庭宇。屍已動矣及入房如在梁棟間。屍遂起舞樂聲復出屍倒旋出門隨樂聲而去。其家驚懼。時月黑亦不敢尋。一更。村正方歸。知之乃折一桑枝如臂。彼酒大罵尋之入墓林約五六里。復聞樂聲在一栢林上。及近樹々下有火熒々然屍方舞矣。村正擧杖擊之屍倒樂聲亦住遂負屍而返。と有るは奇怪き事なり。

此も思ひ合すべき事なむ有る。其は同じ物語に美濃國伊吹山に久しく行ふ聖人あり。名をば三修禪師と云ける。他念なく念佛を唱ひて多くの年を經にけり夜深く佛前に念佛申して居たるに。空に音ありて告て云く汝懃に我を憑めり。念佛の員多く積りたれば明日の未時に我來りて迎ふべし。努々怠る事勿れと云ふ。

初に引たる漢籍廣異記に天狐が汧陽と云處の令を

誑せる語。また上に擧たる寳因僧都に釋迦多寳の二佛と空に名告れる事に甚よく似たり。さて三國傳記に近江美濃兩國の境に伊富貴山といふ大山あり。大乘峯と號く。古仙の靈崛なり。昔三朱沙門とて飛行の上人此山に栖み數百の伏臘を送る。三朱沙門と云ことは彼上人身の重さ纔に三朱なりし故なり。恒沙の世界に遍滿して山河石壁も障なき故に飛行上人とも名附たり。當山に長尾彌高太平の三寺を開けり。其頃の皇后御惱あり。諸山の高僧に仰せて御祈禱あれども其驗なし。然るに此上人の威驗世に無雙のこと天聽に及ければ。參內ありて加持有べしと勅使を立らる。王使彼山に入り上人の住所に臻りて勅宣の趣を陳るに上人云く。我は卑人也爭か禁掖に至べきと。勅使云く普天の下皆これ皇民なり何ぞ勅定に隨ざらむ。上人云く我は乾坤の外に逍遙す。何ぞ土俗に同からむと柱杖を石頭に立て飛昇て杖頭に座す。時に勅使云く此杖なほ王土を離れず。上人遂に勅使に隨ひ近江の湖水の漫々たる浪の上十八里を陸地を走るが如く渡りて片時の間に參內すれば。皇后の御惱忽に愈たまふ。叡感の餘に伊福貴山の地主明神に正一位を贈り唐筆の額を下されけり。と有はおほく妄說もまじりたりと見ゆれど同人のことゝ聞えたり。

聖人其聲を聞て彌々心を至して念佛申し。明る日に成ぬれば水をあみ香を燒き花を散して弟子共に告て諸ともに念佛申させて西に向ひて居たり。未時下る程に西山の峯の松木の陰より漸々曜き光るやうに見ゆ聖人彌々手をすりて見れば佛の御頭指出給へり。金色の光を放ちて指入たり。秋の月雲間より現れ出たるが如し。樣々の花を降し白毫の光聖の身を照し樣々の菩薩微妙の音樂を調べて貴き事限なし聖人尻を逆樣になし他念なく禮み入りて念珠の緖も絕ぬべし。而る間に紫雲厚く聳へて庵上に立わたる。

こゝの有狀をよく思ひて樣々の佛の瑞相といふ事の信がたき事を辨ふべし。紫雲。光曜。香馥。音樂は妖魔の常の態なるをや。

其時に觀音蓮臺を捧げて聖人の前による。聖人這よりて蓮臺に乗りぬ。佛聖人を迎ひ取て遙に西を指て去給ふ。弟子共此を見て泣々貴がりて其日の夕より其坊にして念佛を始めて彌々聖人の後を訪ふ斯て七

八日を經てのち其坊の下僧ら念佛の僧共に湯沸して沐せむとて。木伐に奥山に入たるに遙なる瀧にさし覆たるたかき椙木あり。其木の末に遙に叫ぶ聲しけり。奇くて見上たれば法師を裸にして梢に縛り付たり。木上りよくする法師の昇りて見れば極樂に迎られたる我師の聖人を葛にて縛り附て置たり。此法師見て我師は何とて斯る目をば御覽ずるぞとて。泣々よりて繩を解ければ聖人佛の今迎ひに來らむ。暫しかくて有れと宣ひつるに何の故にかく解免すぞと云けれども寄て解ければ。阿彌陀佛よ我を殺す人あり。をゝうゝと聲を擧て叫ける。然れども法師原あまた昇りて解下して坊に將行たりければ坊の弟子ども心踈がりて歎惑けり。聖人は現心もなく二三日ばかり有けり。智惡なき聖人はかく天狗に欺かれけりと有り。

宇治拾物遺にも念佛僧魔往生の事とて此の事を載せるを校合せて記せり。さて十訓抄に美濃國伊吹山に千手陀羅尼の持者住けり。二三日なれども斷食にて驗德の方に不思議多かりければ。遠近の貴賤集り拜ける時に善宰相淸行卿是を聞わたりて彼處へおはして此僧に對面して物語し給ひけるが。傍の人々に語云く此人はかく行德ある樣なれども終には魔界の爲に誑かさるべしと云て歸り給ひにけり。其後程へて或時に諸の天女紫雲に乘て妓樂をなし。玉の輿を餝り來て此僧を迎へ取て去にけり。見る者皆奇異の思を成たりける程に。四五日有て樵夫の山へ入たりければ。遙に高き木の上に蚊の鳴やうに人のうめく聲聞えけるを怪みて人に告たりければ。近邊の住人集りて是を見るに。人の樣には見成たれども容易く上るべき木ならねば鷹の巢おろす者を雇ひて上せたりければ。法師を木の末に結付たり。漸々に支度をして解下したるを見るに彼千手陀羅尼の持者也けり。淺間しとも愚にて具し歸り樣々扱ひければ命ばかりは活たれども耄々として云甲斐无りけりと有るは。同事なるべきを甚く訛れる傳なりけり。

一聲南無佛皆歸成佛道とも。十方世界念佛衆生攝取不捨とも經々に見え又發心集にも云へる如く設四重五逆を作たる人也とも。命終らむ時我國に生れむと願ひ。南無阿彌陀佛と十度申さば必ず迎へむと誓へ

りと見えたるに。佛菩薩ども其誓願の如くは。何とて斯る念佛者の魔に誑さるゝを接取して佛道を成しめざるや。撰者の言に智惠なき聖人はかく天狗の爲に欺かると云へれど。智惠なきは念佛すども救はずは佛の本願に叶ざる事にこそ。殊に此外の往生人ども皆がら智惠の有しには非ず。眞は誰も智惠なき輩なる故に往生と云事を止事なき事にぞ爲なる三修禪師が往生は天狗の態と現に知られ。餘の往生人どもの來迎は現に天狗の態と知られぬにこそ有れ。共に魔往生なる事は疑なき物をや。

なほ三修禪師が古事に思ひ合すべき事有。そは宇治拾遺物語に昔愛宕山に久く行ふ聖有けり。年頃行ひて坊を出る事なし。然るに其山の西方に獵師あり此聖を貴みて常に詣來りて物などを志しける。然るに獵師久しく聖の許に不詣ければ餌袋に菓子など入れて持詣たり。聖悅びて日來の覺束なき事など云ふ。其中に居よりて獵師に云く。近來極めて貴き事なむ侍る。我年ごろ他念なく法華經を持ち奉りて在る驗にや。此夜ごろ普賢菩薩なむ見え給ふ。今夜留りて禮み給へと云ければ。此獵師極めて貴き事にこそ候へ然らば留りて禮み奉らむと云て留りぬ。さて聖の使に童子のあるに己も此佛をば禮み參らせたりやと問へば。童子我も五六度許は見奉りぬと云に。獵師我も見奉る事もや有とて聖の背に寢もせで居たり。九月二十日餘りの事なれば。夜も長し今や〳〵と待居て夜半は過ぬらむと思ふ程に東の山の峯より月の出る樣に見えて。嶺の嵐も冷しさに此坊の內に光さし入る樣にて明く成ぬ。見れば普賢菩薩白象に乘て漸々おはして。坊の前に立給へり。貴き事云む方なし。聖泣々禮みて背にある獵師にいかに主どのは拜み奉るやと云ければ獵師をづ〳〵極めて貴く禮み奉ると答へて心の內に思はく聖は年ごろ經をも持ち讀給へば其目にこそは見え給はめ。此童我身などは經の向たる方も知らぬに見え給へるは心得られぬ事なり。此事心見てむ。信を發さんが爲なれば。罪得べき事に非ずと思ひて鋭雁矢を弓に番ひて聖の拜み入たる上より指こして弓を強く引て射たれば菩薩の胸にあたる樣にて。火を打けすごとくにて光も失せぬ。谷へ動めきて逃行く音す。聖此を

如何にし給へるぞと云て泣迷ふこと限なし。獵師云くあなかま給へ。聖の目にこそ見え給はね。我が罪深き者の目に見え給へば試むと思ひて射つるなり。實の佛ならば矢はよも立給はじ。然れば怪しき物也。と懃に誘云けれど聖人の悲み止まず。夜明て血をとめて行て見ければ一町ばかり行て谷の底に大なる狸胸より鋭雁矢を射通されて死て伏せり。聖人これを見て悲みの心醒にけり。聖なれど無智なればかく化されけるなり。獵師なれども慮有ければ狸を射殺して其化を顯はしけるなりと見ゆ。此は今昔物語にも載せれば合せ見て記せり。〇撰者の言に聖なれど無智なればかく術されと云へれど。有智無智を云はず聖はすべて妖魔に計られて有を。無智なるは實と信じ有智なるは信せねど。名利憍慢の具に信ずる趣に持成して有けむと思はる。然れは此聖は偶々に思慮ある獵師の爲に無智の名を顯せるにて。有智の聖と世に云れしは思慮ある獵師に出會さりし故と知べし。今昔物語には狸をば野猪と有り同じ物にや。〇好尙云今昔物語に今は昔筑前國に相知る人も无き尼有けり。

其國の人の妻として有ける女心に悲慈有て尼に云く此は家も廣し庭も廣し。然ば此に居て念佛も申せと云ければ尼喜て其家に居ぬ。三四年許にも成ぬる間尼家主の女を呼て云く。己は明後日に死候ひなむとす沐浴し侍らむ。年來哀れみ給ひつる事の喜く侍れば死なむ時の事見せ奉らむと思ふ也。此事人に語り給ふべからず。と云泣事限り无し。家女此を聞て哀ひ悲ひて人に此事を不語。既に其日に成ぬれば尼に沐浴せさせて淨き衣を着せつ。家女一間許を去て見居たれば此の尼音を高くして前々の如く念佛を唱へて居たる程に。夜に入て子丑の時許に成ぬらむと思ふ程に。後の畠の中に世に知らず。微妙き光り俄に出來れば。家女此を見て驚き怪て此は何なる事ぞと思ひて見居たれば。亦麝香の薫などにも似ず奇異き香匂ひ滿たり。空より紫雲其邊に湧き居て見えければ。家女も此を見て念佛を申し入て有る程に。尼は居乍ら西に向ひて掌を合せて額に宛て失にけりと有り。師は此光る物を狸か狢ならむと云れたれど慥には定めがたし。此尼は謂ゆる思慮有る獵師に出會ずして無

智の名を顯さねども云ふべくや。
發心集に或宮原の女房世を背ける有けり。病を受て限なりける時。善智識に或聖を呼ければ。念佛勸むる程に此人色眞青になりて。恐るゝ氣色なり。怪みて何なる事の目に見え給ふぞと問へば。恐ろし氣なる者共の火車を將て來る也。といふ聖云やう名號を怠らず唱給ふべしと云ふ。此教に依て聲を擧て唱ふ。暫有りて其氣色直りて悅べる樣なり。聖また此を問へば火車は失せて。玉の錺を爲たる車に天女の多く乘て樂を爲て迎ひに來れりと云ふ。聖云く其に乘らむと思召べからず。猶ただ念佛し給へと敎ふ。此に依てなほ念佛するに。暫有て云く玉の車は失せて墨染の衣着たる僧の貴氣なる只一人來りて今はいざ給へ行べき末は道も知らぬ方なり。我副ひて導せむと云ふと語る。努々其僧に具せむと思すな。念佛を申て獨參らむと思せと勸む。とばかり有て其僧も見えず人もなしと云ふ。聖云く其隙に疾參らむと心を至して念佛し給へと誨ふ。其後念佛五六十遍ばかり申して聲の中に息絶にけり。此は魔の樣々に形を替て謀りけるにこそと有り。
また同書に吉田齋宮と申しゝ人の今期に魔の搆たる事有しを。大原の藥忍と云ける僧の善知識に參りて。よく計らひたる事も有り。

火車の事諸書に數見えたる中に今昔物語に藥師寺の僧に濟源僧都といふ者。老て命終のとき念佛を唱へて絶入らむと爲るに起上りて弟子に告て云く。我此寺の別當なれども寺物を仕はず他念なく念佛を唱へて終れば極樂の迎有らむと思ふに本意なく火車を此に寄す。我云く何事の罪に依て地獄の迎をば得べきぞと云つれば車に附ける鬼共の云く先年此寺の米五斗を借て仕たり。然るに未其を返納せず。其罪に依て此迎を得たる也と云つれば。我云く然計りの罪に依て地獄に落べき樣なし。其物を返すべしと云へば火車はよせて未だ此に在り。然れば速に米一石を寺に送るべしと云ふ。弟子ども此を聞て急ぎ米一石を寺に送る。其後暫く有て濟源云く。火の車は返り去て今なむ極樂の迎を得たると云て。掌を合せて額に宛て泣々喜びてぞ失にけると有るも能似たる事なり。
此に甚よく心得たる僧にぞ有ける。然れば念佛勸め

ける事は只に際期の苦を忘れ死を紛さむとの術にや有けむ。此等の事共に准へて死期に種々の物の來り迎ふるは。悉く妖魔の所爲なる事を辨ふべし。偖こそ上に云へる道昭觀智寶因など。正しく佛の迎を受て往生したる輩の魔道に墮て有なりけり。佛菩薩のみならず種々の物も迎ひに來る事多し。眞覺と云し人の死ぬる時に白き鳥の尾長きが來て去來々々と誘ひ。

好尙云是も同書に入道眞覺は權中納言藤原の敦忠ノ卿の第四子也。初には俗なるに康保四年の比俄に道心發りにければ。出家して山に登り眞言の密法を受學ぶ。本より心直くして慈悲忍辱なる事並无し。而る間年月積りて遂に命終らむと爲る時に臨て。身に聊の病有と云ども苦しむ所少し同法の僧共に告て云く。此に白き鳥の尾長き來て囀て曰く去來去來と即ち西に向て飛び去ぬと。入道亦云く我目を閉れば眼の前に髴に極樂の功德莊嚴の相を現ず。如此く云て遂に入滅する日誓を發して云。我十二年の間修する所の善根。今日極樂に皆回向すと云て即て入滅しにけり。其夜三人の人夢に數の止事无き僧共龍頭の船に乘て來て眞覺ノ道を此船に乘せて迎へて去ぬと見て告けりと見えたり。

源憩といふ人の死ぬる時に孔雀の來て誘ひ。

好尙云是も同書に今は昔源の憩と云人有けり。內匠頭適と云ける人の第七子也。幼きより心佛法の方に趣きて因果を知り殊に慈悲有けり。而る間憩年卅餘の程にして身に病を受て卅餘日の間惱み煩ける。遂に世を厭ふ心深くして急に髻を切て出家してけり。其後偏に後世を恐れて彌陀の念佛を唱へて極樂に往生せむと願ふ。而間憩が兄に安法と云僧有り川原院に住せり。憩入道彼安法を呼て語て云く。我只今西方に微妙の音樂の音有と聞く君此を聞くや否やと。安法答て云く不聞と。入道云く亦此に一つの孔雀鳥來て我が前に翔て舞ひ遊ぶ。亦此を見るや否やと。安法見ずと答ふ。而る間入道西に向ひて端坐して掌を合せて失にけりと有ればなり。

また化たる僧の來りて尼の手の皮を剝きたるなども皆妖魔の所爲なり。

好尙云是も同書に伊勢の國飯高郡上平郷に一人の

尼有けり。石山寺の眞頼と云僧は此尼の末孫也けり。此尼本より道心有ければ出家して尼と成て偏に彌陀の念佛を唱へて極樂に往生せむと願ふて。年來を經る間尼手の皮を剝て極樂淨土の相を圖し奉らむと思ふ心懃なりけるに。自ら此を剝くこと能ずして過る間。一人の知ざる僧出來て尼に向て云く。我汝が懃の志を遂げむが爲に汝が手の皮を剝がむと。尼此を聞て喜びて此を令剝む。僧即ち此を剝ぎ畢りて後忽に失ぬ其後尼極樂淨土の相を心の願ひの如く寫し奉りて一時も身を不レ離持し奉れり。尼遂に命終る時に臨て空の中に微妙の音樂の音有けり。終り貴くて失ぬれば必極樂に往生しぬと聞人皆貴びけりと見ゆ。なほ似たる事は元亨釋書智光傳に佛告レ智言觀ニ如來相好及淨土莊嚴一。智曰今見ニ此界ノ廣博嚴飾一心眼不レ及。況又如來相好豈凡慮之所レ堪乎。於レ是彌陀便擧ニ右手一。智見ニ掌中ニ現ニ小淨土一。嚴飾具足。智覺命レ工圖ニ佛掌淨土一。常自觀レ之と有る下の智逢が便宜に彼土聲聞。菩薩神力。能持ニ一世界於掌中一。今佛掌可レ知耳。事見ニ無量壽經上一と云ひまた同書に釋信敬楞嚴院之學徒也。常誦ニ法華一。嘗曰我斬ニ剝皮骨一供ニ養佛法一。先截ニ手指一供ニ不動明王一。次斬ニ左脚骨一刻ニ釋迦像一。然脛骨漸愈行步如レ故。次剝ニ手皮一圖ニ彌陀三尊像一。次以ニ手指骨一刻ニ觀自在大勢至二像一とも有れば。右の尼が所爲も智光等が故事に效へると通えたり。因に云善智識と云ことは。僧俗に拘らず佛道の作法を能心得て尋常の行狀は更にも云ず。命終らむとする時は別に念佛をも勸め。都ての事彼道に協ふ如く說諭し。謂ゆる正念にして兜率天にまれ極樂にまれ。往生を遂しむる如く取計らふ者を云へりと通えたり。また唯に知識と云ふは狩谷望之が說に猶ニ今俗講中一と云り然も有べし。此は靈異記の攷證に見えたり。

また前に死たる人の來て誘へる事もいと多し。此はその人既に釋魔の部に入りて誘ふなり。なほ此事は下に云ふを見るべし。

古今妖魅考五之卷

平篤胤輯考
門人 武藏國 碧川好尙 同
國 參河國 岩崎発健 校

伊勢貞丈ぬしの歌に。「彌陀佛迎ひ來ることは紫の雲を掴むの類なるらむ」と詠れしは信に然る事なり。また此人の「昔より佛の道を貴ぶは心愚に欲深き人」と詠れたるも然る事にて往生を願へる人々大概は心愚なると欲深きと天狗の託たるとの三を出ず。

好尙云沙石集に出家の貧賤なるは貪欲深く智もなく德もなし。或は布施を贈りて導師を望み。或は祈禱を事として財産を望む。權を恐れ威を賴み利養恭敬を心とする故に。釋子の風に背き出家の義を缺くと見え今昔物語集に聖武天皇の御代に御手代の東人と云人有けり。此人吉野の山に入て法を修して富を願ふ。殊に觀音を念じ奉りて申さく。南無銅錢萬貫白米萬石好女多得と念じて。三年を經るなど有を思ふべし。此は出家には非ざれども佛を尊ぶ者大概斯の如し。然れど敢て誹るべき事にも非ず。心は長鯨の百川を吸よりも甚くして。名聞利養を捨たる趣に此世を渡れる釋子等より却て殊勝にこそ思はるれ。

なほ言約れば心愚にて佛に迷ふも欲深きも天狗の託たるにぞ有ける。

天狗憑と云ふ語は。宇治大納言物語に寬平の御門出家して忌じく行はせ給ければ。天狗のつき參らせて京極の御息所に墮し參らせたりけると云ひ。愚管抄に後白河院失給ひて後に建久七年の頃。兼仲と云ふ男の妻に故院つきおはし坐て我がいはひ社作りて國よせよなど云事を云出して沙汰になりて。兼仲は隱岐へ妻は安房へ流罪せられたる事ありき。しばしは人信ざりけれど建永元年の頃ほひ仲國法師は。故院には朝夕に候ひしが妻に憑せ給ひて。又我を祝へと云事は出來て淨土寺の丹後の二位など常に相て泣々此をもてなし抔して。院へ申して公卿僉議に及び旣に祝はれむと爲る事有けり。萬の人みな然候べしと申たりけるに。前右府公繼公すこし如何と申たると聞えしを。賢しく慈圓僧正は院には殊に賴み思召たりければにや大相

國頼實卿の二位の許へ一通の文を書て遣ける。斯る事聞え候こはいかに候事かな。如此の事は怨靈と定られたる人にこそ例多く候へ。故院の怨靈にならせ給ふに成候ひなむ。野干天狗とて人につき候物と申す事を信じてかゝる事出來候べしや。猶然候べくは誠しく御祈請候て眞實の冥感を聞し召べく候の申たりけるを。院聞し召て我も然思ふめでたく申たる物かなとて。ひしと此事を仰合されて仲國夫妻流刑に行ふべきかと仰合さるれば。僧正また申けるやう此事つや／＼と狐狸も憑候はで我心より申出たるにて候はゞ流刑にも行はれ候べし。先に兼仲と申候ひし者の妻もかゝる事申出候ひけり。狐天狗など申物は我を祭りなとするを本意に思ひて。人をかく誑かし候事は昔々の物語にも候。其が憑てさる病を仕出たるにて候。病すとて上より罪に行はるべきにても候はず。唯きこし召入られ候はて片角などに逐込めて置れ候はゞ。然る狐狸はさやうに成候へばやがて引入りて音もし候はぬに候。倩唯事がらを御覽候へと申たりければ忌じく申たりとて其定に御沙汰有て追籠られたりければ。攝津國なる山寺に仲山とかやに居たりける程に。また二度物憑たりと云事も无てみそみそとして止にけり。心ある人は此を感せずと云ことなし。淨土寺の二位もしらけ／＼として止にけり。此天狗憑どもは赦免せられて未た生て侍るなりと有り。

正に天狗憑たりと思ゆる往生人どもの事をまた二三記さば。寶物集に讃岐國多度郡に源太夫といふ武士有けり。狩漁を以て業とし人の足手を切をもて先とす。更に佛法の行末を知らず。漸々年序積りて物の命を殺すこと其數を知らず。

今昔物語には讃岐國多度郡に五位にて源太夫といふ者有りけり心極めて猛(たけく)して殺生を業とし日夜に山野に行て鹿鳥を狩り。海河に臨みて魚を捕る。また人の頸を切り手足を折ざる日は少こそ有けれ。三寶を信ぜず。因果を知らず。法師といへば故(ことさら)に忌て邊にも寄ざりけり。如此く惡人にて有ければ國人もみな恐れてぞ有ける。と見え長明發心集には讃岐國に源太夫と云者ありけり。佛法の名をだに知らず。活物を殺し人を滅ぼすより外の

事無れば。近きも遠きも恐怖るゝ事限なしと有り。斯ばかり剛强なる人なれど心愚なる故に天狗にぞ憑れける。此より下文を見て知べし。

十月許の事なるに狩せむとて野に出たりけるに。時雨のしければ人里の見えける方へ馬を走かして行ける程に。茅堂の有けるに佛供養する事有て人多く聽聞すとて集たるを見て是は何事するぞ。收納の盛に。多く人を集めて徒に置たるはとて目を怒からして腹立ければ。

今昔物語には此人。郎等四五人許を相具して鹿ども多く取せて山より歸る道に堂の有けるに人多く集たるを見て。此は何事する所ぞと問ければ郎等此は堂なり講を行にぞ侍る。講を行ふと云は佛經の供養する事なり。哀に貴く侍る事なりと云ければ。五位さる態する者有とは時々聞けれども目近くは見ざりつ。何なる事を云ぞ去來や行て聞かむ暫く留まれと云ひて馬より下りぬ。されば郎等どもゝ皆下りて此は何なる事せむずるにか有らむ。講師を搔せむずるにや不便の態かなと思ふ程に。五位は只歩みに歩みて堂に入るを。此講の庭に在者どもゝ此る悪人の出來れば。何なる事するにか有むと思ひて恐て騷ぐ恐て出る者もあり。五位並居たる人を押分て入る風に靡く草の中を分行て高坐の傍に居て講師に目を見合せて。講師は何なる事を云居たるぞ我が心に實と思ゆる許の事を言ひ聞せよ。然らずは便无る者ぞと云て前に差たる刀を押廻して居たりと有り。發心集には或時狩して歸ける路に人の佛供養する家の前を過とて聽聞の者の集れるを見て何態をすれば人は多かるぞと問ふ。郎等云く佛供養といふ事し侍る也と云ふ。いでやけうかり未だ見ぬ事ぞとて馬より下りて狩裝束の任ながら中を分入り。庭もせにこゝら居たる人これ情なしと見るに胸潰れて平がりをり。許多の人の肩を越て導師の法說く傍に近く居て事の心を問ふとあり。

講師只今ぞ頭をも手足をも切と思ひて怖々佛供養し奉るなりと云ければ。佛とは何を云ぞ佛供養すれば何事の有ぞと問ければ。講師少し心附て是より西に阿彌陀佛と申す御坐す其佛を供養し奉るなり。此佛の名號を唱へ奉れば極樂とて樂しく目出度國へ參る

なりと云ければ。我も參りなむやと問へば極樂は人を分事なし。參らむと云ふ願ある人をば阿陀彌佛觀音勢至ともに迎へ給ふ也と云ければ。如何樣にてか參るべきと問へば。男にても參りぬべけれども佛の御弟子に成とて法師に成て衣を着袈裟を掛て參るべき也と云ければ。然らば參らむとて頓て髻を切て法師に成ぬ。

今昔物語には講師極めて不詳にも値ぬるよと恐れて云つる事の始終も覺えずて。引落されぬと思けるに智惠ありける者にて佛助け給へと念じて答云く。此より西に多くの世界を過て佛在ます阿彌陀佛と申す。其佛心廣くして年來罪を造り積たる人也其思返して一度阿彌陀佛と申つれば。必ず其人を迎へて樂しく微妙き國に思ひと思ふ事叶ふ身と生れて遂に佛となむ成ると。五位此を聞て云く其佛は人を哀れみ給ひては我をも恤み給ふべきかと講師云く然也と。五位云く然らば我其佛の名を呼奉らむに答給ひてむやと。講師云く實の心を致して呼奉らば何か答へ給はざらむと。五位云く其佛は何なる人を吉と宣ふぞと。講師云く人の他人よりは子を哀と思ふが如くに。佛も誰にも惡かれと思ざれども御弟子と成たるをば哀と思給ふなりと五位云く何なるを弟子とは云ぞと。講師云く今日の講師が樣に頭を剃たるものは皆御弟子なり。男も女も御弟子なれども猶頭を剃ればまさる事なりと。五位云く然らば佛の弟子と成らむ頭剃れと。講師云く只今俄に何でか其御頭を剃らむ。實に思す事ならば家に返り妻子眷屬などに云合せて剃給へと。五位云く汝佛の弟子と名乘りて佛は虛言なしと云て。御弟子に成たる人を哀と思すと云て。何に忽に舌を返して後に剃れとは云ぞいと當らぬ事也と云て。刀を拔て自ら髻を根限より切つ。かかる惡人の俄にかく髻を切つれば何なる事出來たらむとて講師も周章て物も云はず。其庭にゐたる者共も喤合たり。また郎等ども此を聞て我が君は何なる事の御するぞとて太刀を拔き箭を番ひて走り入來たる。主此を見て大きに聲を擧て郎等どもを靜めて云く。汝等は我が吉身と成らむと爲るを何に思ひて妨げむと爲るぞ今朝までは汝等が有る上にもなほ人をもがなと思つれども。此より後は

速に各々行かむと思はむ方に行き。仕はれむと思はむ人に仕はれて一人も我には副べからずと。郎等共云く何にかゝる態をば俄に成させ給へるぞ直しき心にては此事有じ。物の託給ひけるにこそ有けれと云て皆臥丸び泣こと限なし。主此を止めて髻を切ては佛に奉りて忽に湯を涌して紐を解て押去て自ら頭を洗ひて講師に向てこれ剃れ剃らずば悪有なむと云へば實にかく計り思ひ取たらむ事を剃らずば悪くも有なむ。また出家を妨げば其罪有なむと旁に恐れ思ひて。講師高座より下りて頭を剃て戒を授けつ。郎等ども涙を流して悲む事限なしと有り。發心集には僧怖ながら說法を止めて阿彌陀の御誓頼母しき事極樂の樂しき、此世の苦み。無常の有樣などを細に說聞かす。此男いふやういと／＼忌じきことにこそ。然らば我法師になりて其佛の御坐さむ方へ參らむと思ふに道を知らず。心を致して呼奉らむと思ふに唯へ給ひなむやと云ふ。誠に深く心を發し給はゞ必ず唯へ給ふべしと答ふ。さらば我を只今法師になせと云ふ其とき郎等より來て今日は物騷がしく侍り。返り給ひて其用意して出家し給はゞ宜からむと云ふに。腹立て己が計ひにては我が思ひ立たる事をいかで妨げむと爲るぞとて眼を怒かして太刀を引廻せば恐れ慄きて立退きぬ。大かた今日の願主より始めて有とある人色を失へり。近く居より只今頭を剃れ剃らずば悪有なむと頻に迫れば。遁るべき方なくて。慄々法師に成しつと有り。今昔物語に郎等どもの語に。直しき心にては此る事あらじ。物の託給ひけるにこそ有けれと云へる由見えたるは實然る言にて釋魔の託てなむかく物狂はする也けり。

扨講師が衣袈裟を乞ひて着て西に向ひ。南無阿彌陀佛と高聲に唱へて行ければ。郎等ども弓に矢を張り太刀拔などして騷けれども。目出度處へ行かむと爲るをば如何にかくは爲るぞとて腹立て追留めて野山も厭はず西方に向て行ぬ。

今昔物語には其後入道着たりける水干袴に布衣袈裟等を替つ。持たる弓胡籙などに金鼓を替て衣袈裟を直く着て金鼓を頸にかけて云く。我は此より西に向て阿彌陀佛を呼び奉りて金を叩きて答へ給はむ處まで行むとす。答へ給はざらむ限は野山に

まれ海河にまれ更に返るまじ。只向たらむ方に行べき也と云て音を高く舉て阿彌陀佛よやヲイ〳〵と叩き行くを。郎等ども共に行かむと爲れば己等は我が道を妨げむと爲るにこそ有けれといひて打むと爲ればみな留りぬ。かく西に向て阿彌陀佛を呼び奉りて叩つゝ行くに。實に云つる樣に深き水とても淺き處を求めず。高き峯とても廻たる道を尋ねず。倒れ丸びつゝ向たる任に行く。日暮に寺の有るに行き着ぬ。其寺に有る住寺の僧に向て云く。我此思を起して西に向て行くに高平を見ず況や後を見返らず。此より西に高き峯を超て行かむとす。今七日ありて我があらむ處を尋ねて來れ草を結つつ行むとする其を見て注として來べし食べき物は有る夢ばかり得しめよと云ければ。干飯を取出て與ければ多しと云て只少を紙に裹みて腰に挾み其堂を出て行ぬ。住持既に入りぬ。今夜許は留まれと云て留むれども聞入ずして行ぬとあり發心集には衣袈裟こひて打着てこれより西方に向きて聲の有限り南無阿彌陀佛と申て行く。是を聞人涙を流して哀む。斯しつゝ日を經て遙に行々て末に山寺ありけり。其なる僧奇みて事の心を問ふ、云々と有のまゝに云へば貴み哀むこと限なし。僧も物心細く御すらむとて干飯をいさゝか引裹みて取せければ露物食はむ心なし。只佛の唯へ給はむ迄は山林海川なりとも命の絶む限にて行むと思ふ心のみ深くて其外には何事も覺えずとて尙西をさして呼び行くとあり。

其後覺束無りければ彼導師の聖。跡を尋ねて行見れば西海に向たりける小松の木の上に升りてぞ死たりける。色形違ふ事なくて口より青蓮華生て芳しき香匂ひて往生の相を現せりと有り。

今昔物語には其後住持かの敎の如く七日と云に尋ねて行くに實に草を結たり。其を尋ねて高き峯を超て見るにまた其よりも高く嶮き峯あり其峯に登りて見れば西に海あらはに見ゆる處あり。其處に二股なる木あり。其股に入道上りゐて金を叩きて阿彌陀佛よやヲイ〳〵と叩きゐたり。住持を見て喜て云く我なほ此より西にも行て海にも入なむと

思しかど。此にて阿彌陀佛の答へ給へば其を呼奉り居たる也と云住持是を聞て奇異と思ひて何に答へ給ふぞと問へば。然らば呼奉らむ聞けと云て阿彌陀佛よやヲイ〳〵何處に御すと叩へば。海中に微妙の御音ありて此に在と答給ひければ入道此を聞やと云に。住持此御聲を聞て悲しく貴くて臥丸び泣こと限なし。入道も涙を流して云く汝速に返べし。今七日有て來て我が有狀を見畢よ。物や欲きと思ひて干飯を取て持たれど更に物欲き事无して有と。住持見れは實に有し如くにて腰に挾みて有り。此て後世の事を契り置て住持は返りぬ。其後また七日有て行て見れば前の如く木の牓に西に向ひて。此度は死て居たり。見れば口より微妙の鮮なる蓮華一葉生たり。住持此を見て泣悲びて口に生たる蓮花を折り取つ。引きも隱さましと思けれども此る人をば只かくて置て鳥獸にも噉れむと思けむと思ひて動かさずして泣々返りにけり其後はいかに成けむ必ず極樂に往生したる人にこそ有めれ。其蓮花は何にか成けむ知らず此の事は甚昔の事に非ず。世の末なれども實の心を發せばかく貴き事も有なりけりと見え。發心集にも彼寺に一人の僧あり跡を尋つゝ行て見れば遙の西の海際に指出たる山の端なる岩の上に居たり語りて云く此にて阿彌陀佛の唯へ給へば待奉るなりと云て聲を擧て呼奉る。誠に海の西にかすかに。御聲聞えけり。聞給ふにや今は早歸り給ひね。さて七日ばかり過て又おはして我が成たらむ姿樣を見給へと云ければ泣々歸りにけり。其後云しが如く日比經て其の寺の僧あまた誘ひて行て問へるに元の處に露もかはらず掌を合せて西に向ひて眠たるが如くにて居たり。舌の先より青き蓮の花なむ一房生出たりける。各々佛の如く拜みて此花を取て國守に取せたりけるを持上りて宇治殿にぞ奉りける功つもる事なければども一筋に憑み奉る心深ければ往生する事また此の如しとあり。

然ばかり猛かりし武士の忽にかゝる所爲はしも何に天狗憑たる掲焉き物に非ずや。

好尙云此源太夫は更也源滿仲朝臣が惠心僧都。院源座主。橫川源信等が爲めに權謀られて剃髮し。飼鷹三百を放ち弃其郞等も五十餘人一時に出家せ

る事。また源賴義朝臣も出家遁世の後堂を建て佛を造り。件の堂にて悔過せるに悲泣の淚板敷より流れたりと云む。平良門と云ける者も一人當千の武士と聞ゆるに空照と云僧に勸化せられ。弓箭を燒失ひて忽に金泥の法華經を書寫し。黃金の佛像をも造立せる由也。此より後も世々次々に此道を信ずる武將等多く平相國清盛公を始め鎌倉の北條氏の人々。源高氏卿なども悉釋子に誑惑せられし徒なり。此事委しく論はまく欲しけれど思ふ旨有て武學本論に附錄し辨へたれば此處には漏しつ。

海中に佛の聲の聞えたるは更なり。

好尙云海中また虛空にて佛の唱へ給ふと云ひ。音樂の聞えたると云事怪むに足らず。既に引たる道命が池の中にて法華經を讀誦し。奧坊僧都實因が湖の中にて經を唱へたる事熟々思ひ符すべし。また海上に泊たる舟の上或は其近き邊など。或は山川にても音樂の聞ゆる事有る由なれど其は神仙の御所爲も多かる事三神山餘考に辨へられたるが如し。然れど海にまれ山にまれ釋子等が見聞したりと云は妖魔の變幻なる事云べくも非ず。

口に蓮花の生たるも横河の源信僧都が往生の時。胸より蓮の生たると一類の變現也。彼僧都が往生の事も諸書を案ずるに此は良源法師の弟子にて。漢國の善導和尙と云ける僧の臨終要[illegible]と云書に本づきて。始めて彌陀佛專念の旨を立て往生要集と云書を著せるに觀音菩薩夢に現じて金蓮花を授たりしとぞ。發心集には源信或時空也上人に見えて往生の旨を問しかば。智惠行德なくとも穢土を厭ひ淨土を願ふ志深くはなどか往生を遂ざらむと云ければ源信深く此言を信じて往生要集を撰しける。天慶より先は日本に念佛の行希也けるを。空也上人の進めによりて人擧りて念佛を申す事になれり。常に阿彌陀を唱へてありきければ世人阿彌陀聖と云けりと有り。〇好尙云觀音の蓮花を授けたる事珍しからず。今昔物語に比叡の山に千觀内供と云人有けり。俗姓は橘の氏人也其母初め子无して窃に心を至して觀音に子を儲けむ事を祈申けるに。母の夢に一莖の蓮花を得たりと見て後幾程を經ずして懷姙して千觀を產たりけると云事も見えたり。死期に及びて慶祐といふ弟子一人を留置て。密に語

云く。年來の間我が造る善根を以て偏に極樂に生れむと願ふに。此に二人の天童來りて告て云く我等は兜率天の御使也。聖人を迎へむが爲に來れる也と我天童に告て云く我が年來願ふ處は極樂世界に生れて阿彌陀佛を禮み奉らむと思ふ。然れば極樂世界にして彌勒を禮奉るべし。天童速に歸りて此由を慈氏尊に申給へと云つれば。天童返りて年來持奉れる觀音來り現じ給ふと語りぬ。また年來恭敬せる本尊に向ひ五色の糸を引きて偈を吟唱し。定印を結び端座して遷化しけるに。紫雲發て天樂空に響き奇香四方に薫ず。此は寛仁元年六月十日寅時許の事にて年七十六なり。寂後に胸の間より青蓮花三莖生たり。禁裡より此を召れけるに台徒惜みて奉らず。然らば一莖を奉れと有ければ一本を參らせ二本は文殊樓に納めたり。禁裡へ奉りし一莖は後に宇治の寶藏に納られけると云へり。

源信が往生の事今昔物語集。續往生傳。發心集。三國傳記。元亨釋書。礦石集などに載たる要を摘みて載せり。なほ蓮花の事にて釋魔の變幻を知べき事ども和漢に多かるを一二記さば。唐の明州德潤寺の儀端と云ける僧咸通二年と云ける年に結跏趺坐して遷化しけるに。口中より青蓮花七莖生じたる事あり。播磨國の平願法師といふ者或時河壖(かはばた)にて無遮會と云を行ひ。我當に安養に生ずべくは此地にて奇瑞を得むと誓へるが。明日河邊に白蓮花十餘莖生たり。また世に一宿上人と稱せる行空法師が死ける時に天衣おのづから身に纏ひ蓮花雙足を受たる。また或嫗の往生を願へるが病を受て惱けるに。着たる衣の自に脱落たりしかば看病の者怪み見るに右の手に一葉の蓮花を持たり。花の廣さ七八寸許にして光鮮やかに色微妙く香ばし看病の輩此を奇み持たる花は何處の花にて誰人の持來て與たると問へば。嫗答て此花は我を迎ふる人の給へる也といふ。人々奇異なりと見る間に嫗は居ながら失にけりと見え。又蓮長と云ける僧の死ぬる時に手に白蓮花の鮮なるを持たり。人此を怪みて。今蓮花の咲く時に非ず。何處に生たる花ぞと問へば蓮長答へて此を妙法蓮花とは云なりと云て失けるが。彼蓮花は誰人の取つるとも見えず忽に失けりと有り。今昔物語礦石集などを見て知べ

し何れも釋魔の變現なるが中に源と蓮長が持ける蓮は人の目を驚さむと何處よりか携へ來て令持たるにて趣は異なれど同じ幻術なり。此に花咲く時ならでも異國に花咲く時の有れば飛行も自在なる故に然る異國よりや持來にけむ。また古事談に門臥と名を得たる平燈と云ける僧の死骸の口より青蓮花一莖生出たりとも有り。思ふに此青蓮花とは白蓮花を云ふと通えたり。また發心集に唐に朝夕念佛する僧の家に畜たる鸚鵡常に念佛の聲を口眞似しけるが。死けるを埋たるに其處より蓮花一本生たり。掘て見れば。鳥の舌を根として生出たりとぞ〇好尙云梁慧皎が著せる高僧傳佛圖證の下に證曰至道雖遠亦可以近事爲證。即取應器盛水燒香呪之。須臾生青蓮花。光色曜日石勒由此信服と云ひ。また杯度と云ける僧の。死せる時に頭前脚後皆生蓮花。花極鮮香一夕而萎と有るも俱に同しき變現なりかし。

佛者に蓮花の奇恠の多かる中に此僧の胸に蓮花の生たるは山水の觀を好める女の。死骸に山水の形成せる塊の出來たりし類の變幻なり。生涯彌陀の淨土の蓮花往生といふ中を觀念したれば。其一念の凝結よりかゝる變の有けるは然も有へき事なりかし。往生要集に佛子止此界悕望。唯修西方業。既臥病床須閉目合掌一心誓期。自非佛相好勿見。自非佛法音勿聞。自非佛正敎勿說。自非往生事勿思。命終之後坐寶蓮臺上從彌陀佛後擧衆圍遶過十萬億國土之間。亦復如是云々と云へるを以て常の觀をしるべし井澤長秀云く程氏遺書に波斯國の人閩中の古塚を發しに棺內悉く腐てたゞ心の石の如くに確き殘れり。鋸して開き見れば內に山水のやうあり青碧にして畫けるが如し。其傍に女裝して欄によりて眺たる形あり。此女生る時常に山水を愛する癖ありて朝夕意を付し故に融結びて此の如し。宋の潛溪文集に臨川の僧法循といふ者般舟三昧の法を行ひて死する故に火葬のゝち只心のみ化せす。五色の光をいだす。其中に佛像あり高さ三寸骨に非ず石に非ず百體具足す。又徽水に優婆塞あり。禪觀の法を行ふ死して火葬するに觀音の像を包めり。刻成すが如し。これみな志し物に屈まりて形を凝す尤も非祥の癖疾

なりと見えたり。此に依て思へば源信が胸に蓮花を生せしも常に蓮臺に生せむ事を願ふ故に。凝結びて病となれる物ならんと云るは實に然る說也。
○好尙云かゝる類の事をなほ言ば。古事談に業平朝臣關東に發向す。奥州八十島に宿るの夜野中に和歌の上の句を詠する聲有り。其の詞に「秋風の吹髏ごとに穴目々々。音に就て是を求むるに人無し。只一つの髑髏有り。明旦猶これを見に件の髑髏の目の穴より薄生出たりけり。風吹ごとに薄の靡く音此の如く聞えけり。奇怪の思を成すの間或者云小野小町此國に下向此所に逝去す件の髑髏也。爰に業平哀憐を垂し下の句を付て云く。「小野とは云はじ薄生けり。件の所を小野と云けりと見えたり。此の事三國傳記にも記せれど訪ひたる人も空海にて秋風の歌も下の句共に小町の白骨の詠じたる由なり。然れど誤ならむ。また發心集に或人圓宗寺の八講と云事に參りたりけるに。時待程やゝ久しかりければ。其あたり近き人の家を借て且く立入たりけるが。斯て其家を見れば造れる家のいと廣くも非ぬ庭に。前栽をえも云はず木共植て上に假屋の搆をしつゝ聊水をかけたりけり。色々の花數を盡て錦を打覆へるが如く見えたり。殊に樣々なる蝶いくら共なく遊あへり。事さまの有難く覺えてわざと主を呼出て此事を問り。主の云樣是は等閑の事にも非ず。思ふ心有て植て侍り。おのれは佐國と申て人に知れたる博士の子にて侍り。彼父世に侍りし時深く花を興じて折につけて是を翫び侍りき且は其志をば詩にも作れり。六十餘國見れども未あかず。他生にも定めて花を愛する人たらむなむと作り置て侍りつれば自ら生死の會執にもや罷成けむと疑しく侍し程に。或者の夢に蝶に成て侍ると見たる由を語侍れは。罪深く覺えて然らば若是等にもや迷ひ侍るらむとて心の及ぶ程植て侍る也。其にとりて唯花ばかりば猶あかず侍れば。あまつら蜜なむどを朝ごとに灌き侍るとぞ語りける。又六波羅寺の住僧幸仙と云ける者は年來道心深かりけるが。橘の木を愛し少か波の執心に據りて虵と成て彼木の下にぞ住ける。委くは傳に有り。加樣に人に知るゝはまれ也。都て念々の妄執一々に惡身を受る事は果して疑なし。實に恐ても恐る

べき事也と見えたるを思ふべし。是悉執心の深かりしよりかゝる奇しき事も有なり思ひ合すべし。所謂往生の時に本尊の手に糸を付て引く事も。源信の爲はじめて往生行儀の第一たる事なるが。後の往生人も多く此に習ふ事となりぬ。

そは往生要集臨終行儀といふ處に。有二病者一堂中置二一立像一金薄塗レ之面向二西方一其像右手擧左手中繫二一五綵幡一脚垂曳レ地。當安二病者一在二像之後一左手執二幡脚一作下從レ佛往二佛淨刹一之想上瞻病者燒レ香散レ花莊二嚴病者一云々。欲二命終一時胸レ面向レ西心亦專注觀二想阿彌陀佛一心口相應聲々莫レ絕決定作二往生想花臺聖衆來迎接想一云々と記せるを見て知べし。發心集に高野山の邊に女を具して居て行ける僧の死ぬる時に。持佛堂の內に佛の手に五色の糸かけて。其を手に引はへて脇息に打より懸りて有けると云ひ。續古事談に堀河左大臣臨終の時も糸を引たる由見ゆ。今昔物語に横川の妙境と云ふ僧の死ときに彌陀佛の手に五色の糸を付て其を引て往生すと云ひ。釋妙といふ尼も命終のとき五色の糸を佛の手にかけて取れると云ひ。法華驗記に延暦寺ノ座主延昌僧正も。死ぬる時に彌陀尊勝兩像を安置して線を以て佛手に繫け我左右手に結ひ著たりとあるなどを始め數有り。また觀音の手に糸を繫けまた綱をもかけて祈れる事も數有り。己年ごろ源信が佛の手に糸を懸て引く事を始たる本據を知ま欲く。見る佛書每に心付て彼此人にも語らひ探ぬるに知る人無りしに。或とき三緣山の寮主雪門に逢て語けるに。此は觀無量壽經の觀音觀の處に授手迎接といふ語。また以二此寶手一接二引衆生一といふ語あり是より思ひ付れしならむと云へり。實に然も有べし。東大寺一番の別當良辨が執金剛神の足に繩を付て引動かして祈れる事。靈異記古事談など其外の書共にも見たり。此は强に祈る心を通さむと爲る態と見えて然も有べき事に思ゆれば。源信は此等を思ひ通して始つる成べし。俗に佛の開帳といふ事をするに繕綱とて佛の手に糸を付て綱をつぎ。詣つる人に引する事あるは是に倣へる事なるべし。阿那否しき態なるかも。

偖此源信法師が本師と立たる善導和尚と云し僧は。淨土略傳其餘の書にも阿彌陀佛化身にて。定中には

阿彌陀に相見して道を問へる由にて。彼の國の永隆二年三月六十九歳の時。柳樹に登り西に向ひて。願佛接レ我菩薩助レ我令下我不レ失二正念一得上生二安養一と言ひて身を投て自絶せる由此僧の傳に見ゆ。釋魔の憑たる物狂とは云ながら甚も哀むべき身の終なりかし續古事談に後一條院の御時に三井寺の叡効律師といふ僧。山城國宇治郡上醍醐の奥なる笠取山の正法寺と云寺に二三年行ひて。夜ごとに三千反の拜をなし。桂木に上りて谷へ身を投ければ護法の手をひろげて受とり露も事無りけりと見ゆ。此は釋魔のよく助たるなれど。此後萬壽元年十月に誓源と云僧此寺にて苦行して。天王寺の海にて身投て死たる由見えたり。また發心集に鳥羽院の御時に或宮に仕へて女に後たる女房歎に堪ず。自他なる樣に紛れ出て天王寺へ詣着て人の家を借り三七日が念佛して後。家主に云やう。今は京へ上るに音にきく難波の海を見せ給ひてむやと云へば。安事とて家主導して船に乘て漕ありく。甚面白しとて今少々と云程に澳に出にけり。斯て女房西に向て念佛する事しばし有て海にづぶと落入ぬ。あな忌じと惑ひて取上むと爲れど石などを投入るゝ如く沈ぬれば。惘れ騷ぐ程に空に雲一村出來て船に打覆ひて馥しき匂あり。家主いと貴く哀にて泣泣家に歸りて見れば。此女房の手にて夢の有狀を書付たり。初の七日は地藏龍樹來りて迎給ふと見る。二七日は普賢文殊の迎給ふと見る三七日には阿彌陀佛諸菩薩と共に來りて迎給ふと見るとぞ書置たりけると見えたるは善導に習へる物狂なり。

かゝる類はなほ種々有を。佛法には捨身の法とて止事なき態と爲れど我より見れば釋魔の狂はする態とこそ思ゆれ。此女房の手に後たる悲歎の虚に付入りて。例の變幻の夢を見せて汐に溺らし殺せるなり。天王寺の本尊の哀れと見けむ異驗にこそ有べき。なほ發心集に此條の次に書寫山の客僧が斷食して死ける由を載して。濁世の習ひ動すれば是等の事を誇りて天魔の心を誑かして抔も云べし。佛菩薩の因位の行。皆法を重むじ身を輕くす。彼善導和尚は念佛の祖師にて。往生疑ふべくも非ざりしかど木の末に上りて身を投給へり。人の爲に惡き事を爲初給はむや。我心の及はぬまゝに自ら信せぬ耳ならず。他の信心をさへ亂るは愚癡の極

れる也と云へれど。我は信せぬは更なり。他の斯る事をし信ずるをさへになき手を出しても止めむと思ふを長明また何とか言はむずらむ。

なほ入水往生の事に就て可レ笑きは此も同書に近ごろ蓮花城と云て人に知られたる聖ありき卜蓮法師相知て事にふれ情を懸つゝ過けるに。此聖の云けるは。正念にて罷隠れむ事極れる望にて侍るを心のする時に入水して終を取むと思ふと云ふ。卜蓮聞て諫けれども思堅たる事と見ければ。其程の用意など諸共に沙汰しけり。終に桂川の深き處に至りて念佛高く申し時經て水底に沈みぬ。聞及ぶ人市の如く集りて貴み悲ぶ事限なし。卜蓮は年頃見馴つる物をと哀に覺えて涙を押へて歸けり斯て日比ふる儘に卜蓮物氣めかしき病をす。邊(あたり)の人異(あやし)く思ひて事しける程に靈現はれて在し蓮花城と名乘ければ。此等實と思(おぼ)えず。年ごろ相知て終まで更に恨るべき事なし況や發心のさま等閑ならず貴くて終給ひしに非ずや。傍何の故に來るらむと云へば。物氣云やう其事也。よく制し給ひし物を我心の程を知らで云甲斐なき死を爲て侍り。人の事にも有ねば其際まで思返すべしとも覺ざりしかど水に入むとせし時忽に悔しく成て侍りし然れども然許の人中に何にして我心と思返さむ。哀み制し給へかしと思ひて目を見合たりしかど知ぬ貌にて催し給へる恨めしさに。何の往生の事も思はずすゞろなる道に入りて侍る。此事我が愚なる過(あやまち)なれば人を恨み申べきならねど。最期に口惜と思ひし一念に依てかく詣來る也とぞ云ける。是こそ實に宿業と覺えて侍れ。また末世の人の誡と成ぬべしと見えたるは笑ひに絶ぬ事ぞかし。また同書に或は勝他名聞に住し。或は憍慢嫉妬を本として愚に心の進るままに身燈入海するは即外道の苦行に同じ大なる邪見と云べし。愚なる人の言種に身燈は得道し水には安けむと云は餘所目にて其心を知らぬ故なるべし。或聖の語りしは彼水に溺れて既に死なむと爲しを。人に助られ辛くして活たる事ありき。其時鼻口より水入りて責し程の苦は譬へ地獄の苦なりとも然許こそはと覺え侍りしが。然るを人の水を安き事と思へるは。未た水の人を殺す樣を知らぬ也と申侍りし此事さもと聞ゆと云へり。此は實に然る説なり。身燈もいふは活ながら火中に身を投じて往生するを云ふ。

此事も同集に。近世の事にや仁和寺の奥に同樣なる聖二人有けり。一人を西尾の聖と云ふ一人をば東尾の聖と名付たり。此二人の聖事にふれて德を挑み。一人は如法經かけば。一人は如法念佛す。一人五十日逆修すれば。一人は千日講を行ひなど互に劣らじと爲ければ。人も引々に方々に別れつゝ結緣しけり。年ごろ如此くする間に西尾の聖身燈すべしと云事聞えて。結緣すべき人貴賤道俗市をなして貴みこぞる。東尾の聖此を聞て狂惑の事にこそ有めとて信ぜざる程に。遂に期日に成て弟子ども忌じく圍繞して念佛して火尾に火を指す。こゝに集りし人々淚を流し尊み合へる程に火中にて念佛二百遍ばかり申て終に忌じく貴げなる聲にて。今ぞ東尾の聖に勝果ぬると云てなむ終りにける。此事を聞かぬ人は貴しとて袖を濡して去りぬ。自づから漏聞ける者は思はずに此は何事ぞ。いと本意ならず妄念なりや定めて天狗祢に。こそは成べかりぬれ。益なき結緣をしてける哉など云けりと有り。

好尙云身燈したる徒を尙云ば。法華驗記に沙門應照熊野奈智山住僧轉誦法華之時每至藥王品銘骨髓徹肝膽戀慕隨喜々見菩薩燒身燃臂。遂發念願我如藥王菩薩燒此身供養諸佛矣。斷穀離鹽更不食甘味松葉爲膳文服風水以淨內外不淨爲燒身方便。臨燒身時著新紙法服手執香爐結跏趺坐薪上。面向西方勸請諸佛而發願。我以此身心供養法華經以頂供養上方諸佛。以足奉獻下方世尊背方東方薄伽梵納受前方西方正遍知哀愍。乃至以胸供養釋迦大師。以左右脇施多寶世尊以咽喉奉上阿彌陀如來乃至五藏供養五智如來以六府施與六道衆生。云々即結定印即口誦妙法。心信三寶。乃至身體成灰。誦經音不絶不見散亂氣色。煙香不臭似燒沈檀之香。微風頻吹如調音樂之聲。乃至火滅己後餘光猶殘虛空照曜。山谷明朗。不知名字不見形相奇妙衆鳥數百來集以如鈴聲和鳴飛遊矣。是則日本國最初燒身也。親見傳聞莫不隨喜矣と見え。また元亨釋書の應照等か傳を贊せる詞に。梵網曰。剝皮爲紙刺血爲墨。折骨爲筆書寫佛戒。楞嚴曰。其有比丘。發心決定能於如來形像之前。身然一燈燒一指節。及於身上

爇一香炷我謂是人無始宿債一時酬畢。乃至若不爲捨身微因纖感無爲必還生人酬其宿債法華曰若欲得菩提者。能燃手足一指供養佛塔勝三千大千珍寶供養又其烈士之趣難也。猶遊戲娛嬉者何彼蹈義而不移耳。烏乎義者道之一岐也。彼尙奮鬪感激者若斯況與道爲期乎。宜哉諸子萬苦千楚。不磷不緇乎。善與道爲期也とも云へり。抑身燈と云事は。皇國にては此應照が初めたる由なるは。後世の釋子等を非道に死しむる大罪人也。其は乞食の道を止事無き物に思へる比丘等が心にこそ。見聞する輩隨喜せざる事なしとも。宜哉萬苦千楚不磷不緇とも云へれ。予が黨の眼には是等の文を讀舉るすら。實に身の毛も逆立ばかりにて慷慨悲歎の至極とこそ云べけれ。

また宇治拾遺物語に桂川に身投むする聖とてまづ祇陀林寺にして百日懺法行ければ近き遠き者ども道も去敢す禮みに行違ふ女房車など隙なし。見れば三十餘許なる僧の目をも人に見合せず眠り目にて。時々唇ばかり動くは念佛なめり。また時々息を放つ樣にして集たる者共の顏を見度せば。其目に見合せむと集たる者共ひしめき相たり既に其日のつとめては。僧ども多く歩みつゞきて後に此僧は紙の衣袈裟など着て雜役車に乘たり。行道に立並たる見物の者ども打蒔を霰のふる樣に投散す。聖いかに斯はするぞ目鼻に入りて堪かたし志あらば紙袋などに入れて我がゐたる處へ贈れと時々云ふ。無下の者は手をすりて禮む。心ある者は此の聖は只今水に入なむずるに。かく云こそ怪しけれ抔さゝめく者もあり。偖遣もて行て七條の末に遣出したれば。京より增りて入水の聖禮まむとて河原の石よりも多く人集ひたり。河端へ車遣よせて立れば聖只今は何時ぞと云ふ。供なる僧ども申の下りに成候ひにたりと云ふ。往生の刻限には未しかこなる今少しくらせと言ふ。待かねて遠くより來る者は歸りなどして河原人少に成りぬ。此を見果むと思たる者はなほ立り。其が中に僧のあるが往生には刻限やは定むべき心得ぬ事かなと云ふ。とかく云程に此の聖褌にて西に向ひて河にさぶりと入る程に舟端なる繩に足を懸てつぶり共入らでひしめく程に弟子の聖はづしたれは。逆樣に入てこふこふと爲るを男の川へ下りて能見むとて立るが手を取

て引上たれば。左右の手して顏拂ひて含たる水を吐捨て此引上たる男に向ひて手をすりて廣大の御恩蒙り候ひぬ此御恩は極樂にて申候はむと云て陸へ走り上る(のぼる)を。聚りたる者ども童部ら河原の石を取て蒔かくる樣に打つ。裸なる法師の川原下りに走るを集ひたる者ども。受取々々打ければ頭打破られにけり。此法師にや有けむ大和より人の許へ爪を遣ける文の表書(うはがき)に。前の入水の上人と書たりけるとかと有もいと可笑かりけり。

好倘云入水往生の事をなほ云ば沙石集に或山寺に上人有けり。道心深くして浮世に心を止ずして急ぎ極樂へ參らむと思ひけるあまり。入水して死むと思ひて同行を語らひて船に乘て湖に漕出ぬ。此の上人申けるは臨終は一期の大事也。仕馴たる事だにも誤りも有不覺する事也。往生の大事臨終の作法未得ざる事なれば如何とも覺束なし。其に付ては水に入りて後もいかなる妄念執心も有て命も惜く餘念も起らば往生不定也。斯る心有て浮出たくは。繩を引べし。さ有らば引出し給へとて繩を腰に懸て念佛數返申て飛入ぬ。哀に思程に繩を引ければ引出しつ。濡々(ぬれ)として擧りぬ。水の中にて苦痛有て妄念起りつれば。此の心にてはよもと思て上りたりとぞ云ける。猶心得ず覺えけれども今度は歸りぬ。又日頃經て今度はさりともとて船に乘て出ぬ。前の如くに飛入ぬ。又繩を引ければ又引上ぬ。其後兩三度馴して又出ぬ。同行心得ず覺えて例のはかなくしからじと思ひける程に。今度は飛入て繩も引ず然程に空の中に音樂聞えて波の上に紫雲たなびきて目出たかりければ。隨喜の涙限りなし實に名聞我相を以て往生の大事說べからず。眞實の信心願行の力にて素懷は遂べきものなりと有は。桂川に身投むとせし聖より少か勝れり。

入水往生したる中に哀に聞るは後三條院の御時藏人所に候ひて朝夕仕奉れる人の院の隱れさせ給へる後に限なく惜み慕ひ悲み奉りて。佛に彼の生處を示し給へと祈ける程に年經て後に。西海に大龍に成て御坐すよしを夢に見て東風の烈しく吹ける時舟に乘て押出し暫しは浪間に漂ひて見けるが行末しらず成れるのみぞ哀なる此の事發心集に見えたるが佛道に迷へる心に斯る祈言しけるを。佛魔のかゝる夢見せた

るさしも知らで入水しけるは淺ましき事也。さて又古事談十訓抄などに惠心僧都と園城寺の慶祚阿闍梨と。互に遷化の期を告べき由を契りて年月を送りけるに慶祚あざり後夜の行せむとて椽に出て閼伽を供じけるに。空に芳しき匂有て幽なる聲にて。我是極樂久住菩薩。化緣已盡還生極樂と聞ゆ。怪しみ貴く思えて忽に横川の僧都の許へ久しく承り申さゞる由を案内しけり。使返りて僧都は此の曉に失たりと云へりと云事あり。此は彼僧都已に釋魔の來迎を受て其部に入たれば。則また人をも其部に引入れむと爲る幻妄の語にて例多かる事なりけり。

然るは此語意は我は元より極樂淨土に久く住せる菩薩なるが。此の國に生れ出て世を佛法に化したるが其緣已に盡たる故に。還りて本の極樂淨土に生たると云實なるを以て妄語なる事を知るべし。其は極樂と云處は元より有名無實なるに。其處に久住せる菩薩ぞと云へるもて揭焉し。かく死後に人を其道に誘引せる例は。今昔物語に攝津國島下郡の勝尾寺と云に住ける勝如と云ける僧。道心深く別に草菴を造て行けるに。或夜半に人來て柴の戸を叩て云く。我は播磨國賀古驛の北邊に住つる沙彌敎信なり。年ごろ念佛を唱へて極樂往生を願ければ。今日既に極樂に往生す聖人もまた某年の某月の某日に極樂の迎を得給ふべし此事を告申さむ爲に來れる也と云て去ぬ。勝如驚き怪みて明る朝に弟子の僧を呼び此事を語りて彼處を尋しむ。弟子其處に至りて尋ぬれば小庵有て前に一人の死人有り。狗鳥集りて噉ふ。菴内に一人の嫗と童子と有て涕悲む。弟子立寄りて問へば嫗云く彼死人は我夫なり名を敎信といふ。此童子は敎信が子なりと。弟子返りて勝如に此由を語れば涙を流して悲み貴び。忽に敎信が處に行て泣々念佛を唱へ本の菴に返ける。後に勝如は彌々心を至して念佛を唱ふる事怠らず。彼敎信が告たる年の月日に至りて遂に失にけりと見え。また比叡山の西塔に延昌僧正とて有けるが。下﨟にて修行しける時に京の北山の奥に行けるに。女持たる餌取法師の行ひ居たるが逢て。死なむ時は告奉らむ己死なむ後には此所に寺を起給へと契を成して返れるに。其後年月積て西塔の房にあるに。三月の晦方の夢に。西方

より微妙の音樂空に聞えて漸に近付て房の戸を叩きて告て云く。先年契り申しゝ乞食に侍り。今極樂の迎を受て參侍る其由を申さむ爲に態と參れりと云て。遙に西を指て音樂去りぬ。出て値はむと思ひて急き起くと思ふ程に夢覺ぬ。夜明て弟子の僧を遣りて見するに妻一人泣々居て我が夫は今夜の夜半に念佛申て失ぬと語る。弟子返りて其由を云へば延昌僧正涙を流して貴び。其の後村上天皇に申て其處に補陀落寺といふ寺を立たりと見え。また水鏡孝德天皇の下に元興寺に智光賴光といふ二人の僧有き。おさなくより同所にて學文をす。賴光年に爲る勤も無く又人に逢て物抔云事も无し。只徒にして月日を過す。智光怪みを爲していかに徒にてはおはするぞと問どもふつといらふる事も無し斯て多くの年を經て賴光失にき。智光歎きて年來の友なりき。何なる所にか生ぬらむ。行ひする事も無く物をだにはかゞ\しく云ざりつれば後世の有狀いと覺束なしと思ひて二三月の程賴光が在所知せ給へと佛に祈申し程に智光夢に賴光か居たる所へ行て見れば譬へむ方なくめでたし。智光是は何なる所ぞと問ば賴光是は極樂也。汝强に祈つれば生たる所を見するなり汝が有へき所に非ず。疾く返ていねと云に。智光我淨土を願ふ身也いかでか歸らむと云賴光汝させる行をせず暫しもいかでか此所に止らむと云。智光汝世に在し時させる行をし給はざりき。如何にして此處に生給へるぞと云。賴光いかでか知給はむ昔經論を見給ひしに。極樂に生れむ事いと難く覺えしかば。偏に世の事を捨物言事を止めて心の中に彌陀の相好淨土の莊嚴を觀して。多くの年を積りて僅に生れて侍るなり。汝心亂れ善根少くて淨土へ參るべき程に未至らずと云ふを。智光聞て泣悲ひていかにしてか決定して往生すべきと問しかば。賴光佛に申奉れとて智光を相具して佛の御前に參りぬ。智光佛を禮拜し奉りて何なる事をしてか此所に參るべきと申き。佛智光に告ての給はく佛の相好淨土の莊嚴を觀すべしと。智光此土の莊嚴心も眼も及ばず。凡夫はいかでか是を觀ずべきと申しかば。佛右の御手を捧げ給ひて掌の中に淨土を現じ給ひき。智光夢覺て此淨土の有狀を移しかゝせて。朝夕此を

觀じて遂に極樂に參りにきとも有て。此類餘の書どもにもいと數有り。此は皆宿執に依て人をも其部に引込むる釋子らが例の手段にて。鬼神新論に論へる首縊鬼。疫病鬼、疱瘡神など云ふ鬼どもの其部に人を引込めんとする同じ趣にぞ有ける。また發心集に覺尊と云し僧死て仙命と云僧の夢に見えて。極樂の下品下生の果を得たるを。仙命は上品上生の果を得べき由語せる。又津國渡邊といふ處に住ける邏俊と云ける僧。文殊の着ける袈裟とて持傳たるを相眞といふ弟子に讓たるに。邏俊に先達て相眞死けるが。後に夢に見えて此袈裟を掛たりし功德によりて都卒天の內院に生たる由を告て彼讓たる袈裟を持來て返せる事の見えたるも同じき手段と通えたり。○好尚云袈裟の功德の事を少か云ば。元亨釋書に野州刺史平師季妻。邪疾不レ愈經レ年乞ニ隣於行尊一行尊送ニ袈裟一曰病時覆レ體如レ教病愈と云ひ。沙石集に文永七年七月十五日尾張國下津の宿に雷落て。道行馬三匹蹴損じて小家に走り入て。帷に袈裟掛て双六打て居たる法師の脊にかき上りて帷をば散々に搔裂て。袈裟をば少しも損せす法師も恙なかりなど見えたり。

なを往生の。事を記さば發心集に近頃鳥羽僧正とて止事なき人有けり。

好尚云天台座主記に。前大僧正覺猷法輪院號ニ鳥羽僧正一宇治大納言隆國卿息。智證門徒覺圓僧正弟子。保延六年九月十五日入滅八十八と見え。古今著聞集に鳥羽僧正は近き世にてならびなき繪書也と有る人の事なり。

其弟子に年來同宿したる眞淨房といふ僧有けり。後世を恐るゝ心深くして修學を捨て偏に念佛せむと思ひ。折よく法勝寺の三昧の明たりしかば。僧正に彼處に申成し給へ。身を非人に成して三昧の事に命をつぎ後世をとりたく侍ると聞えけるに。かく思ひ取たる哀也とて申成しけり。其より本意のごとく閑にかの三昧僧坊に居て。間なく阿彌陀の名號を稱へて日月を送り乞食を哀れみ行すまして在けるに彼僧正病を受けて限りに成れる由をきゝて。訪ひに詣けり殊の外に弱くなりて臥たる處に呼入れて年來睦しく思ひ習へるを此二三年疎々しく成たるに戀しく覺えたり。今長く別れなむとす。今日や限ならむと云ひも

果さず泣ければ。眞淨房も涙を押へて。さな思食しそ今日別れ奉るとも後世にはかならず仕奉るべきなりと聞ゆれば。かく同心に思ひけるこそ嬉けれとて臥たり。眞淨房は泣々歸りぬ。其後ほどなく僧正隱れにけり僧この眞淨房は決めて往生する人と人も定むる程に。二年ばかり有ていと心得ず物狂しき病をして隱れにけり。邊の人あやしく本意なき事に思ひつゝ年月を送るほどに。老たる母の後れ居て歎けるがまた物めかしき事ども有けるを。親しき人ども集りてもて騷ぐ程にこの母が云やう。我は異なる物氣に非ず。失にし眞淨房が來つるなり。我が有狀を誰も心得がたく被思たれば且々その事を聞えむとなり。我偏に名利をすてゝ後世の勤より外に營み無りしかば。生死に留まる身にては無きを我師の僧正の別を惜み給ひし時に。後世には參合ひて隨ひ奉らむと申せる事を芳契の如くして。然こそ云ひしかとて如何にも暇を給はせぬによりて思はぬ道に引入られ侍るなり。偏に佛の如く憑み奉りし故に。由なき事を申してかく思ひの外なる事こそ侍りつれ。

好問云此眞淨房が靈の言に據ればば其の師鳥羽僧正も既く魔道に墮て天狗となりし事は云ふも更なるが年來睦しく契れる眞淨房をさへに同しく魔界に引付て暇を給はず。共に苦患を受させたる僧正の所爲惡むべきの甚しきに非ずや。

但し天狗と申す事はある事なり來年は六年に滿なむとす彼月めにかまへて此道を出て極樂へ詣ばやと思ふを。いかで障なく苦患を免るべき樣に訪ひ給へ。僧も世に侍りし時の本意のごとく後れ奉るならば。母の御爲に善知識となりて後世を訪ひ奉らむ。若また思ひの外に先立まゐらせば引攝し奉らむとこそ願ひ侍りしか。思ざるに今かゝる身と成て近付き詣來るに付ても悩まし奉るべしとはと云ひもやらずさめざめと泣く。聞人さながら涙を流して哀み合へり。さばかり物語りしつゝ長閑にあくび度々して例樣(れいさま)に成にければ佛經なむど心の及ぶほど書き供養しけりかゝる程に年もかへりぬ其冬になりてまた其母煩ふ。さかく云ふ間に母が云やう。誰々もさばかり有し眞淨房か又詣來たるぞ。其故は眞心(まごころ)に後世を訪給へる嬉しさを聞えむと思給ふ上に。この曉すでに此道を得脫し侍れば其靈をも見せ奉らむ爲なり。日頃いかが斗

の臭く穢はしき香をかぎ給へとて息を溜て吹出したるに一家の内臭きことと忍ぶべくも非ずとて夜もすがら物語して曉に及びて唯今ぞ既に不淨身を改め。極樂へ詣り侍るなりとて又息を吹ければ其度は香ばしかりけり。此を聞つる人々たとひ行德高き人なりとも必これに値遇せむと云ふ誓をば起まじかりけり。彼は取はづして惡き道に入たれば敢なく斯る態なりとぞ云けると有り。

好尚云此は眞淨房が魔界を得脱して極樂に詣る由なるが。其極樂も上の件に委く辨へられたる如なれば今更に論はず。また此處には師翁の辨論も有べきを其は偶に記し漏されたると聞えたり。

さて釋魔は上に論ふ如く世人を其道に引入れむと耳謀ごつと思ふに。また深く佛道に志して行ふ者をも妨げむとぞ爲なる。彼も此も共に釋魔なるが中に。其道に幸はふは其中のいはゆる善天狗と通え。其道を行ふ者を妨ぐるは已現世に其行を果さず同し釋魔の中にも惡果を得たるが妬くなど有て人をも妨ぐるならむと思はる。

好尚云沙石集に大方は同くして魔界となれども善惡不同也。佛法に信有れ共我相執心盡ざる者は。佛法を我も行じ他人の行するをも障碍せずして隨喜し護りとなる。佛法に信無く偏に名利憍慢深き者は他の善根を妨ぐ。されば出離も遠かるべし眞言師の中にも此道に入者多し近比高野に聞えし眞言師も天狗になりて後大事の祕法を靈付て弟子に授けると云り知慧道心あらば何處にても行して其より出離すべし善天狗惡天狗と云事有。此委也唯今生の心行の善惡によるべしと見え。又愚管抄に順魔逆魔と有るを熟々思ふべし其道に幸はふは善天狗謂ゆる順魔と通え其道を妨ぐるは惡天狗謂ゆる逆魔と聞えたり。上にも下にも記されたる釋子等か所業を攷ふるに逆魔は多けれど順魔は少し其は我か皇神の道より論ふ時は順逆ともに魔道なれば枉れる者の多かるは然も有べき事ぞかしなほ下にも謂ふを見るべし。

其の趣を古書共に言へる樣を並べ攷ふるに。既く第二卷に引たる宇治大納言物語に寛平の御門出家して忌じく行はせ給ければ天狗の憑參らせて京極の御息所に墮し參らせけると有。いかにも佛道より云とき

は天狗の憑て墮し參らせたりとも云べし妖魔の女に憑て佛子を妨げむと爲ける事は今昔物語集に京の東山に佛眼寺と云寺に仁照阿闍梨と云人住けり年ごろ其寺に行ひて寺を出る事も無して有けるに思懸ず七條邊なる薄打つ者の妻女の年三十餘り四十許なるが仁照の房に餌袋に干飯を入れて堅鹽和布など具して持來て阿闍梨に奉り。承れば貴く御ますと聞て參たるなり。御糧など痤て奉らむ事は安く仕らむと言吉く云て歸り去りぬ。其後阿闍梨何處の奴の此は來つるならむと怪み思けるに。廿日許有てまた前の女來りて餌袋に精たる米を入れて折櫃に餅また然べき菓子どもなど入れて。下衆女に頂かせてもち來たり。阿闍梨實に我を貴ふ志の有れば此く絶ず來る也けりと哀に思ひて有るに。また七月許に此女瓜桃など持せて來れり。其の間此房の法師原京に行て阿闍梨只一人有を見て此女房云く。此の御房には人も候はぬか人氣も見えぬと。阿闍梨云く一二人ある法師原の要事ありて京に行ぬるなり今返り來なむと。女よき折節にこそ參り會候にけれ。實には申べき事候ひてかく度々參り候つるに人の絶ず候つれば不申つるを。大切に申べき事候ふ也と云て人離れたる處に呼放てば。阿闍梨何事にか有むと思ひて寄て聞ば此の女阿闍梨を捕へて年來思給へつる本意あり助させ給へと云て只近付きに近付けば阿闍梨驚きて此は何に何と云て去らむと爲れども女助給へと云て。只捘しに捘すれば阿闍梨佗て此なせそ安き事也云む事は聞かむ。但佛に申して後にと云て立て行けは汝逃なむと爲なめりと思ひて。阿闍梨を捕へて持佛堂の方へ具して行ぬ。阿闍梨佛前に行て申して云く量らずも我魔緣に取籠られたり不動尊我を助給へと云て念珠の碎くる許に擬て額を板敷に宛て破ばかりに額を突く。其時に女二間ばかり投伏られぬ。一肱を捧けて獨樂を廻すか如し。暫許ありて音を雲井の如くして叫ぶ。其間阿闍梨は念珠を攤入て佛の御前に偁伍れ臥たり。女四五度ばかり叫びて頭を柱に宛て破るゝ許打こと四五十度なり。其後助給へ々々と々叫ぶ時に阿闍梨頭を持上て女に云く。心得ざる事なり何なる事ぞと。女云く今は隱し申べき事に非ず我は東山の大白河に罷通る天狗なり。此房の上を常に飛て過る間に。御行ひ緩なく

鈴の音の貴く聞つれば拂へて落し申さむと思ひて此一兩年この女に託て謀つる事なりかく被ㇾ攝つれば年來は猶く思つれども今は顯申しぬ。速に免し給へ翼打折られて堪がたく術なく候ふと泣々云ければ。佛を禮拜して免してげり。其時女心醒て本心に成にければ髮搔馴(なら)し抓して云事无して腰打引て去りぬ。其より後は永く見え來らず。阿闍梨は殊に愼みて行ひ緩む事无して有けると有り。

女に憑たるは更なり。本行の佛の靈驗有けるも共に釋魔の憑て物せる。態なれど。佛に憑たるは阿闍梨が行を守り。女に憑たるは其行を妨げむとす。此差別をよく思ひ明らむべき事にこそ。○好尙云上に云へる順覺逆魔の事をも思ひ合すべし。又其時に女二間ばかり投伏られぬと有るは二卷に載されたる無動寺の相應和尙の文德天皇の女御の物の氣に惱み給ひけるを加持しけるに。鞠の如く簾中より轉ひ出させ給ふと有るを初め。餘慶僧正の文範の民部卿を屛風の上より投出したるなど。或は神名睿實と云僧の肥後國にて守の妻の重き病を加持せるに。護法病人に付て屛風を投起して持經者の前にして。一二百反許打逼て投入れつと有るも同じ釋魔の幻術と通えたり斯て本文の本尊と稱する物は不動と聞ゆるが。是又地藏菩薩に等しく其靈驗の掲焉き事諸の書どもに見えたるが如し。今其一ッ二ッを載(しる)さば發心集に近來南都に僧有けり。年來三尺の不動尊を本尊として朝夕行ひける程に。或時行法の間に目を塞ぎて念誦する程に。此本尊失給ひて只空しき座ばかり殘れり。淺ましく珍らかに覺えて樣々に疑を爲す。若是魔の所爲(しわざ)か若は我不信懈怠にて佛意に協はぬかなど一方ならず心を障き悲を爲す程に。暫し有て見奉れば只もとの樣にておはしますとにかくに心得がたく思ふ程に其後斯(かく)失給事度々に成にけり。乍(たちまち)に沐浴し殊に潔齋して七日が間信を致して。三時の行法をして此事を祈り奉る程に夢に見る樣。本尊の御前にて現に見が如く此事を異み疑ふ間に。本尊告ての給はく汝此事驚べからず。此廿余年我を憑みて臨終の魔障を祈者あり。是を助けむが爲に時々行向ふ也との給ふ。僧夢の内に答奉て云く何(いづれ)の所に誰と申人ぞ。答ての給はく北京東山の邊に長樂寺と云

所に唯蓮房と云尼是也。終近く成たれば今二三年は倚々時々向ふべき也との給ふと見て夢覺ぬ。此僧不思議の思を成て涙を流して聽て長樂寺へ尋(まさ)行て。しか〴〵の尼や有ると問に詳(さだか)に有けり。正しく其庵に至りて見れば戸引建て人も無し。隣の人の敎へける儘に雲居寺(うんご)に至りて尋合て正(まさ)しく對面したりける。先此事をば云ず物語などして後世の勤には何事をかはし給ふと問。尼の云樣念佛の外には更に勤る事无しと云。猶々强て細かに問ける時此廿年ばかり不動の慈救呪をこそ毎日廿一返みて、臨終正念ならむ事を祈侍ると云。僧此事を聞て實には故なく尋詣來には非ずとて。有し樣を始より語ければ尼も涙を押へつゝ賴もしく尊き事也と悅びて。互に一佛土の契を結てなむ去にけり。其後は幾程も无くて此尼重き病を受たり。あたりの人活かたき由を云て樣々訪ひけるに今年は死侍るまじ。明年二月十五日にこそ罷隱るべき日にて侍と答へける程に其度は活ぬ。明る年の二月十五日未時に病も無く終正念にて不動の印を結びて端坐して息絶にけり。此十餘年が前の事なれば皆人見聞る事也。未世なれど信じ奉る人の爲には斯る不思議も侍ける也と云ひ。又三井寺に智興内供と云て貴き人有けり。世の中心地をして限りに成ければ弟子ども集りて泣悲む時晴明と云て神妙なる陰陽師有けり。是を見て云樣何にも叶ふべからず。其にとりて志深からむ弟子の替らむと思へる有ば祭り奉りてむ。其外には何にも力及ずとなむ云ける。其時證空阿闍梨と云人年若くて弟子の中に有けり。進て内供に申樣我替り奉らむとなり。其故は法を重くし命を輕くするは師に事ふる習也。即て年名乘書付て晴明が許へ遣りつ。今宵祈り替奉るべき由云り。斯て夜漸々更行程に此證空かしら痛み心地あしく身ほとをりて堪かたく覺へければ。我房に行て見苦しかるべき文など取認つゝ。年來持奉りける繪像の不動尊に向ひ奉りて申す樣我年若く身盛なれば命惜からざるにあらねど。師の恩の深き事を思ふによりて今既に彼命に替りなむとす。勤少ければ後世極て恐し。願は明王憐みを垂て惡道に墮し給ふな。病苦既に身を責て一時も堪忍ふべからず。本尊を拜み奉らむ事只今ばかり

也と泣々申す。其時繪像の佛眼より血の涙を流し。汝は師にかはる我は汝に替らむとの給ふ御聲骨に徹り肝に染む。協ひしと掌を合て念じ居たる間に汗流れぬる身さめて則心地爽に成にけり。内供も其日より心地愈りにければ此事を聞て愚に思はむやは。後には人に勝れて相頼たる弟子にてなむ有ける。彼本尊は傳はりて後白河院におはしましけり。常住院の泣不動と申は是也。御目より涙を流したる形實にさやかに見へ給へりけるとぞ共有り。また今昔物語にも智證大師比叡の山に登り石龕のうちに籠りて行ふ間に。忽に金人現じて云く汝我形を圖書して懃に歸依すべしと。和尚の云く是誰人ぞと金の人宣はく。我は是金色の不動明王也。我汝を護るが故に常に汝が身に隨て速に三密の法を極めて衆生を導べし。和尚其形を見るに貴く恐しき事限り無し。然れば禮拜恭敬して畫工を以て其形を圖せしむ。其像今に有りとも見えたり。なほ下にも云を見るべし。

また發心集に。中ごろ肥後國に僧ありけり。本は淸かりけるを年半たけてのち。妻をなむ設たりける。此有ど なほ後世の事を思ひ放たず。理觀を心にかけつゝ其勤めの爲に別に屋を作りて彼を觀念の處と定めて年ころ勤め行ひけり。此妻男のため心ざし深く事にふれて懃也けれども。何が思けむ病を受たりける時此妻に打とけず相知れる僧を呼て忍び語らふやう。若限ならむ時あなかしこ妻の方に告給ふな殊更すこし思ふ故ありと云ければ。其心を得て扱ふ程にいとも煩はず終目出たく息絶にけり。偖しも有べき事ならねば妻に此事を告るに。驚き惑ひて夥しく手を捽きて眼を怒らかし悶へ迷ひて絶入りぬ。人恐て近づき寄ざりける間に一時ばかり有て世に怖しく聲の有る限。おめき叫びて云やう。我此奴か菩提を妨けむ爲に世々生々に妻となり男となり。樣々親み謀りて今まで本意の如く隨ひ憑たりつるを。今日巳に逃しつる妬きわざ哉と云て齒を嚼しばり垣壁をたたく。人いとゞ恐れ凜きて皆這隱れたる間に何地ともなく失にけり。其後終に行方を知らずとなむ此は一人の上に非ず。惡魔の去がたき人と成て妨ぐる事は誰も必有べき事なりと有り此も上に准へて思ひ辨ふべし。なほ僧俗男女に拘らず往生の事は數へ盡す

べくもあらねど。煩しければ然のみは漏しつるになむ。

好尙云沙石集に或山寺法師世におちて或女人を語らひて相住ける程に。此僧病に臥て月日を經にけるに此妻懃に看病なむどし。よろづ細やかに見扱ひければかしこくして相語らひける弟子なむどの是程に志有事は有がたかるべし。心安く臨終もしてむずと思ける程に病日數積りて既に心弱く覺えければ。本より道心有て念佛の數返なむどしける者にて最後と覺へければ。端座合掌して西方に向て高聲念佛しけるを。此妻我を捨ては何處へおはするぞあら悲しやとて首に抱きつきて引臥せけり。あら口惜心安く臨終せさせよとて起擧りて念佛すれば又引臥々々しけり。聲を上て念佛はしけれども引伏せられて終りにけり。魔障の致す所にや誠しく菩提心も有り。往生の志もあらむにつけては必魔障有るべしと見えたりと云ひ。三國傳記に信州に一人の遁世者有り名を善阿彌と云ふ。妻女に尼公を持たり古き枕の上には階老の契約深く。紙の衾の下には同穴の眤ひ言濃也。然れども善阿は近き當(あたり)に同様なる桑門の有けると互に二世を憑み合たり或時善阿病席には伏て力無し醫術盡て身は老たり。鬼の障りを成す事既に近し。是に依て憑たる世捨人を呼寄て竊に云けるは。我病重く成ならば。別の所へ移し置て彼の尼公をも臨終の時分は邊土へ近付べからずと暮々云ひ置けり。然れ共此尼離れず然に今日中命終すべしと。此僧尼公に醫師の所へ藥を採に行給へとてたばかり遣ければ其間に彼善阿彌正念に住して高く念佛を申て終りけり。時に大悲觀世音は百福莊嚴の手を宣べ寶蓮を擎(ささげ)大勢至菩薩は無量の聖衆と共に讃嘆して引接し給ふ。其後尼公歸りて見れば善阿早く往生したり。爰に尼公の云く我は拘樓孫佛の時より此人と夫婦の語らひを成て。生死を離むとするを妨けつるに今度はたばかられてし損じつる事の口惜しさよとて。手を叩き結句青き鬼と成て今は此に有て詮無しとて空へ上りて失にけり。魔障の生死をさへ人の惡道に入る事如レ此恐るべし恐るべしと有るは古の本文と同じ事を誂り傳へたると聞えたり。

〇好倚云世に禍業を行ふ禍神の多かる中に人に首縊らせて非業の死を爲しむる枉物の事は。師翁の論辨せられたる如くなるが猶攷ふるに。是又釋魔の類ひ也と思はる其は生涯佛道に執着して極樂とか兜率天とか云へる處に往生すべく思ひ取て有けるに。師の論はれたる如く然る所は固より無かりければ。圖らずも魔道に轉生する事云も更也。しか轉生しては堪かたき苦痛を受るが上に。前に生涯極樂などに往生せまく勞きしことの嫉く悔しけれど少かも懺悔の心なく。しか思ひ凝せる負じ靈魂の盛にして進むか隨に。己が受たる苦みを人にも見せしめむと現世にかゝる枉業を行ふにぞ有ける。今然も有べしと思はるゝ比丘等か事蹟を少か擬ひ擧て悟さむに。先沙石集に中頃大原に上人有けり。無智なりけれども道心有にやと見けるが。かゝる浮世に存へて由无しとて三七日無言して結願の日頸を縊りて臨終せむと思ひ企て同法の上人兩三人相語らひて道場に籠り居ぬかゝる聞え有りければ哀に貴しとて大原の僧正も結緣の爲に往生講なむど行ひ給ひけり。言べき事有れば書付けるに往生の志をも勸め。念佛聽聞の志も有とて都の名僧共數多請して七日の別時念佛を初めしむ。然程に京中の道俗男女聞及ぶに隨ひて結緣せむとて許多集りひさめきて拜まむと云ば出て拜まれけり。相語らへる上人共は此事然べからずとこうけぬ事にぞ思ひける。然る程に日數既に滿じて行水用意し臨終すべき時刻近つき。又同法の上人の中に申しけるは今は是程の義になりて別の子細有まじく侍れ共。凡夫の心は刹那の間にとかく變る習にて候へば。若妄執も殘り又思食す事有らば仰られなむどして御心の底に殘る所無くして御臨終有らば然るべく覺え候今は無言は詮無覺え候と云時此上人誠にやと思けむ申けるは。始め思たちし時は心も勇猛也き。一日の頭湯屋の坊の燒てかの房主燒死なむとせしを聞し時は。今一日もとく／＼臨終してかゝる浮事も聞かじはやなむど思しが。此程は心も緩くして急ぎ死せばやとも覺えぬぞと語る時年來の弟子の中におとなしかりける在家法師京に住ける此事によりて來れるが道場にはいれられず少し嫉ましげなる氣色して障子の際に居より

て。上人の加樣に語るを聞て聲高に申けるは。物の義なむご申は定まらぬ時の事也是程に罵り披露して時日も定まり結緣の人々も集まり拜まむとするになまこざかしきさかしら異義の出來事返々有まじき事也。御往生妨むとする天魔の所爲にこそ。とく〳〵御行水參らせて急ぎ給へ時刻延なむずと罵りければ。上人も物云ひさしつさて行水しけるの前の榎木に繩を掛て頸を縊りて死にけり。人々拜み貴み面々に其遺物をぞ片身に取りける扨其後半年ばかりを經て座主僧正の御弟子の中に惱み候事有けり。例ならぬ氣色に見ければ。護身し亦陀羅尼なむごみてける程に口ばしりて樣々の事共云けり。彼頸縊り上人が付て衰僧正御房制止し給へかし思止らむと思ひしに其御事無りし口惜く候とぞ云ける。實に妄念執心は。忘れかたく捨がたし唯思止るべかりけるに。由なき名聞によりて魔道に入ける事返々も愚也。弟子いかに罵るともなじかは用ふべき魔界の障りにこそ智惠も有り誠の心有らば是程の事は存ずべきに。愚癡の致す所か名聞を思ふ故か罪業のさふる所か魔界の爲故か。此上人に相語らはれたる大原の上人の物語り也と見えたるは。此禍物と成りて人をも誘ひ其道に陷（おとしい）るゝ徒なる事疑なし。

但し今の世にも首縊らむとして勞く時しも傍の人の咎めて止めける事多し。其縊らむとせし人に尋ぬるに種々の卑賤しく汚穢らはしき物の來て誘ひたる由なり。其は即て此部（むれ）に陷りし者の靈魂の所爲なるかなほ現に頸縊りし奴の形狀の右に引出たる事の蹟にいと能似たれば斯は云なり。また師翁の玉多須喜鬼神新論にも辨へられたるを見るべし。

偖また疫病鬼疱瘡鬼など云も素より同種異稱の物にて世に禍業を行ふ事等しきが中に。疫病鬼は現に出たる時も有き其は古今著聞集に五の宮の御室静なる夕べ只今御手水めして唯一所おはしましけるに。御簾を揭けて丈け一尺七八寸ばかりなる物の足一つ有る顏姿は人の樣なりけり。御前に候けるをあれは何物の容躰ぞと仰られければ己れは餓鬼にて候也水に餓たる事堪難く候。世間に人の煩ひ候ふをこり心地と申候事は己れか致す事に候我

と水を求め候へばいかにも得がたく候て人につきてそれが飲候に餓を休め候也。然るを諸々の人君に申候て御手跡にても御念誦にても給はり候はば。身に觸候者は我に犯さるゝ事候はずまして御加持など候ぬればあたりへだにも寄ず候。是によ り候て水の欲しう候事堪忍ぶべくも候はず。助させおはしませと申ければいとおしく覺し召て誠に聞か如くならば不便なる事也。是れより後こそ其心を得めとて御手洗に白水を入させ給ひて給はせければ。うつぶきてよに心よげにすば〳〵と皆飲てげり。猶欲しきかと。問せ給へば都て飽時なく候と申ければ。水生の印を結ばせ給ひて御指をひとつ口に指あてさせ給へば嬉しげに思ひて吸付き參らせけり。然る程に其御指より次第に御苦痛有て御身までせきのぼれば。はらひ棄させ給ひて火の印を結ばせ給ひければ御心地本の如くならせ給ひにけりと見え。伴の善男卿の靈の此物となられて疫病の流行すべきを咳の病に申し替られ。また或る疫神の永超僧都に魚を與へし者の功徳を褒美せる意にや其家の厄難を除きたる由を夢に諭したる事有り。

但し伴の善男卿の事は今昔物語集に見えて師も何くれの書に論はれたれば其は措て。宇治拾遺物語に是も今は昔南の京の永超僧都は魚无き限は時非時も都て食ざりける人也。公請勤めて在京の間久敷成て魚を食はでくづをれて下る間。なしまの丈六堂の邊にて晝わりご喰ふに弟子一人近邊の在家にて魚を乞て進めたりけり。件の魚の主後に夢に見るやう恐ろしげなる物ども其邊の在家をしるしけるに我家をしるし除きければ。尋ねゐる所に使の云く。永超僧都に魚を奉る所也俗しるし除くと云ふ。其年此村の在家悉く疫病をして死る者多かりけり。此魚の主が家只一宇其事をまぬかるによりて。僧都の許へ參り向ひて此由を申す。僧都此由聞て被け物一重たびてぞ返されけると有が如し。又此を首領する物は泰山府君ならむと思ゆる事は既に云へり。

また世に疱瘡神と稱ふも此徒と聞ゆることは。其を病める者の夢とも現ともなく種々の賤しき物の眼に遮りて惱ます趣なる由多く聞たれど煩はしければ漏しつ。なほ此の餘にも三井寺の貧僧に乏しき宿世

を悟せし貧報の冠者と云し鬼。
發心集に中比三井寺にわりなく貧き僧有けり。念ひ侘て思ふ樣此所緣の無きなめり。斯しも思事の違ふべきかは。我外へ行て宿世をも試みむと思ひて晝などは旅姿も異しければ曉出立程に。夜深く起き道の程も煩しかるべしとて暫し依り臥したる夢に。色青み瘦衰へたる侘しげなる冠者我と同樣に藁沓はきなど用意し。いみじう出立有り。前々も見ぬ物なれど異くて己は何者ぞと問ふ。年來候者也いつも離れ奉らぬ身なれば御伴申候はむとて出立侍と云僧の云樣然る物やは有る名をば何と云ぞと問へば。人々しき身ならねば異名侍り。只うち見る人は貧報の冠者となむ申侍と云と見て夢覺ぬれば即身の拙き宿世を知り。何くへ行とも此冠者が添たらんにはと思て外心改めて異しながら本の寺にぞ住ける。是又しも有べき事なれど。人每に夢にも見ねば宿世の程をも知ず。幾ばくも有まじき身のあたら暇に後世の事を閣て先もしや／＼と走り求め心を盡すなるべし。佛天の知見こそいと恥かしく侍れと有は誠に珍らしき夢也かし。

或は閻王の御使白髮丸と稱して。小野宮實資公の車に乘て冠の上にのぼり失たる鬼。(是も發心集に小野宮の右大臣をば世の人賢人の大臣とぞいひける。納言杯にておはしける比にや有けむ。內より出給に現とも無く夢ともなく車の後にしらばみたる物着たる小さき男の見とも覺えぬが早らかに歩みて來れば異しくて目をかけて見給程に。此男走りつきて後の簾を持上るに心得がたくて何物ぞ便なし罷退との給ふに。閻王の御使白髮丸にて侍と云て即車に躍り乘て冠の上に登りて失ぬいと異しく覺へて歸賜儘に見やり給へば白髮を見て一ト筋見出し給たりける。世の人云事なれど正しくぞ證を見て心に哀とおぼされけるにや。本は道心杯おはせざりけるが是より後世の勤など常にし給ひけると有り。)或は道命阿闍梨が誦する法華經を聞て生々世々忘がたく侍ると云ひし五條西洞院の道祖神。また武藏寺と云に新き佛の出させ給ふとて隨喜したる筑紫のたう坂と云處に祀れる齋の神。或は日枝の山のうへすきの僧都と云へるが轉生して手も無き鬼と成れる。

此道祖神等が事は今昔物語宇治拾遺物語などに委しく有れば就て見るべし道命が經を感たる事は既に二卷にも引れたり。うへすぎの僧都の事は古今著聞集に。山にうへすきの僧都と云人有けり。法に執深くして容易く弟子などにも授けざりけり。死て後住房の天井の上に重き音なひして落かゝる物聞えけり。あら若しやとぞ云ける。聞人怖畏を爲しながら誰人にてかくはと問ければ。我は某也法慳□の罪によりて手も無き鬼と成れる也とぞ云ける。祕すべき事も甚く過ぬるは罪と成にこそ能心得べき事也と見えたり。

或は前權大副大中臣長家。大般若經を書寫せるによりて守護する趣に隨從せる三人の小鬼。是も著聞集に神祇權少副大中臣の親守。年來大般若一筆書寫の志有けれども空しくて止にけり。常のごとくさに此願を心にかけて。一日に二枚計づつ書奉る共十餘年にて果なむ口惜くも思ひたゝぬかなと云けるを前權大副同長家聞て忽に智發して此願を思ひ立て終に一筆書寫の功畢てけり。供養の後隨喜のあまりに親守が許に行て云けるは此事は本我思よりたるに非ず仰られし旨を聞て自おこして大功をなしたるしかしながら御恩也。且は其事謝せんが爲に殊更詣で來る也と云て對面したるを見れば。小き鬼三人長家に從ひて有り。其長赤子ばかり也けり。椽を上りける□□□入庭に跪きて畏りけり。頓て二人は從がひて上にのぼりて有。一人は下に有皆長家を守護する樣也。かやうの事は夢などにこそ見る事も有れ。正しく現に見たる事はふしぎの事也。大般若書寫によりて十六善神の立添ひて加護し給ひけるにや貴くめでたき事也。かの親守は五部大乘經自筆に書奉たる者也。正しく正直の者にて永く虛言なごせざりし者也。かゝるふしぎこそ有しかと親守語りしを聞て記し侍る也と有り。好尙按ずるに神の御國に生れ出る者は神の御國の學問せむ事云も更なるを。此大中臣親守また長家は神と君との御中取持つ天兒屋根命の末裔なれば殊更皇神の道をたどり辨ふべき理也。其は姓氏錄にも大中臣朝臣は藤原朝臣同祖と有り。また上にも引出たる周防國一宮玉祖大明神の宮司にて玉祖惟高と云者も其神胤と聞ゆるに。

幼き時より三寶に歸依する志有けるが。中にも地藏菩薩に仕へて日夜に念じ奉る事怠り无き由也是も姓氏錄に玉祖宿禰高御牟須比乃命十三世孫大荒木命之後也と云ひ。また玉作連ハ高魂命孫天明玉命之後也。天津彦火瓊々杵尊降二幸於葦原中國一時。與二五氏神部一陪二從皇孫一降來是時造二作玉璧一以爲二神幣一故號二玉祖連一亦號二玉作連一と見え神名式に周防國佐婆郡玉祖神社と出し。一宮記に祀る神を玉屋命なる由云り。然るを惟高長德四年と云四月の頃俄に絶入りて地獄に赴きたるが。謂ゆる六地藏の現じて云へるは汝神宮の末葉也と云ども年來我が誓を信じて懃に憑めり。早く本國に返て斯の如く大軀の形を顯し造りて恭敬すべしと敎たるに。三日を經て蘇生り。其敎の如くし終に往生を遂たる由見えたり。右の親守長家等も然こそ載さね由なき中子の道を尊ぶからに。大般若經を書寫して現に小鬼の從へるは是亦釋魔の見入れたるにて死て地獄に墮たる事疑なし。假令尋常の人は佛の道を信じたりとも神の見直し聞直し敎へ給ふ事の有もすらめ。六地藏も云る如く其神胤の神官等に至りては然る事も有がたかるべし。其は我が仕へ奉る神を蔑如し忘れたる所業なれば其罪こよ無く重きぞかし抑神官等は死りて後も其靈魂は齋き祀る神の冥府に在りて。顯世の如く仕へ奉るべき事なるを佛道に歸依する時は比丘等と同じく魔界に連墮する事疑なし。今其證文を一つ云ば。三國傳記に叡岳東塔南谷勝陽房眞源法橋と云人有り。非レ夢非レ現而山王權現社頭へ參る。大宮樓門前にて眞源の師範なりし嚴算阿闍梨に參會す公は失給ひし人也。何くに御座ぞと申ければ嚴算答て云く其事ならむ我存生時佛法志深く多聖敎を習學せしかども。出離生死の無レ志常名聞利養の思に住して。五道輪廻業無レ盡忽に可レ入二惡道一處に。權現和光誓に依て當社の邊召置れて有御扶持一也。況や貴方達は終此處に可レ栖不審思はゞ此の體を見せ奉るとて奥山へ後さまに伴ひて登る眞源佛谷鎌倉瀧邊を見渡せば。昔山上にて見孤名德耆老坂本住し司官神人などは其數幾共なく多く見えたり修因善惡隨ひて居所尊卑有り。或るは嚴淨なる樓閣も有り。或は蕭條たる陋巷もあり。誦二經典一俗も有り鈴杵に

て携る僧もあり。善惡差降雖レ受レ報明神利請無レ替と見えたるが如し。此頭は神官等も專佛道に歸依する事世の風俗なれば。此惟高等を殊更咎むべきにも非ずかし。斯て佛道の皇國に渡來しより以來今の世迄も普通の人は更也。神職神官さへに神國の神民たらむと願ふ者は鳳毛麟角よりも少く。佛國の佛民たらむと欲する者汗牛充棟と多かるは。いかなる禍神の枉事ぞや今の世の神職たらむ者此理を思ふべし。

是悉同類異稱の物にて皇神たちの御守護うすき隙を窺ひ枉業を行ふ事疑ひ无し。

但し同類なる由の證を少か云ば。法華驗記に。沙門道公天王寺僧也。從二熊野一出二還本寺一間。宿二住三奈倍鄉海邊大樹下一。至二夜半程一有二乘騎人二三十騎一至二此樹邊一。有二一人一言樹下翁侍歟。樹下答曰翁侍。又曰早罷出御供可侍。翁曰馱足折損不レ能二乘用一。明日加レ治可レ參二御供一。騎乘之類各々分散。至二明旦一沙門恠念巡二見樹下一。有二道祖神像一。朽故還多二年歲一。前有二板繪馬一。前足破損。沙門以レ糸綴補二置本所一。至沙門其夜宿二樹下一。於二夜半一如レ先數騎來。翁乘レ馬出行。臨二天曉一時翁還來。即語二持經者一此數十騎乘行疫神也。我道祖神也。巡二國内一時必翁爲二前使一云々と有を以ても互に親しき朋と見えたり。斯て此枉鬼どもの群集ひて夜に紛れ往來するを謂ゆる百鬼夜行と云藤原の常行卿の此物どもに出會れたるが。襟中に縫込たる尊勝陀羅尼の微妙き靈驗に據て其殃を遁れたまひ。

其は今昔物語に水尾天皇の御代に西三條の右大臣良相の御子に。大納言の左大將にて常行と云人御けり。其人の形美麗にして心に色を好て女を愛念する事並无かりけり。然れば夜に成れば家を出て東西に行くを以て業とす。東の京に愛念する女有ければ大宮登りに出て東さまに行けるに。東の大宮の方より多の人火を燃して喤て來る。彼何人の來るならむ何にか隱るべきと小舍人童の云く。神泉苑北の門こそ開て候ひつれ。其に入て戶を閉暫く御まして過しめ給へと。若君喜て打入て馬より下て柱の本に曲り居ぬ其時に火燃たる者共過ぐ何者ぞと戶を細目に開て見れば。早ふ人には非で鬼共也けり。樣々の怖し氣なる形也。鬼共云ける樣

此に氣はひこそすれ。彼搦めむと云て一人走り來る。我身今は限ぞと思に近くも寄らず走り返す。何の故に不搦ぞ慥に搦めよと。亦他の鬼走り來るに始よりは近く來て手係く許り亦走り返りぬ。何にと問ふに搦め得ざる理なり。尊勝眞言の御ますなりけりと云ふ其音を聞て多く燃たる火を一度に打消つ東西に走り散る音して失ぬ。然れども此くて有べき事に非ねば馬に乘て西三條に返りぬ乳母に若君有つる樣を語り給ければ乳母奇異かりける事かな。去年己が兄弟の阿闍梨に云て尊勝陀羅尼を書しめて御衣の頸に入れしが此く貴かりける事若し然らざらましかば何ならましと云て泣事限り无しと見えたり。)

又京に生侍の年若き男の有けるが此物に出逢けるに。其形を或は目一つ有鬼も有り。或は角生たるも有り或は手數た有も有り。或は足一つにして踊るも有と云ひ。即て鬼の搦めたるに重き咎有べき者に非ずとて男を免せるよし是亦六角堂の觀音の利益と聞え又或る修行者津國の古たる寺の中にて此物に出値しに。見れば手毎に火をともして人百人ばかり堂の内に來集ひたり近くて見れば目一つ付たりなど樣々也人にも非ず淺ましき物共也けり或は角生たり頭もえも云ず恐ろしげなる物共也と云ひ偖不動の咒を唱へたるに其驗にや鬼どもの即て其を唯に不動と見なしたる由又一條の棧敷屋に或男宿りて傾城と臥たりけるに長高き鬼の諸行無常と唱へつゝ格子押擧て顏さし入しなど有を致ふるに一人として釋魔の因緣無き物は有事无し。

京の生侍と修行者の事は今昔物語と宇治拾遺とに委く有れば其書どもに就て見るべし又一條の棧敷屋の事も宇治拾遺に今は昔一條棧敷屋にある男とまりて傾城と臥たりけるに夜中ばかりに風吹雨降りてすさまじかりけるに大路に諸行無常と詠じて過る者有り何物ならむと思ひて蔀を少し押あげて見ければ長は軒と等しくて馬の頭なる鬼なりけり恐ろしさに蔀を懸て奥の方へ入たれば此鬼格子押あげて顏を指入て能御覽じつるな〳〵と申ければ太刀を拔て入らば切むと構へて女をば側に措て待けるに。能々御覽ぜよと云ていにけり。百鬼夜行にて有るやらむと恐ろしかりける。其より一條の

棧敷には又もとまらざりけるとなむと見えたり。然なくばいかでか襟中に縫込たる尊勝陀羅尼抔を畏るべき謂れなく中にも諸行無常と唱へたるは因果經の語なるを以ても釋魔なる事を辨ふべし。なほ思ひ符すべきは今昔物語に。肥後の國の書生が圖らずも鬼に追れて觀音助け給へと念じ馬を早めて逃たるに。魂失て馬よりも落ぬ。逃得べくも非ざれば馬を捨て墓穴の有るに走り入ぬ。此鬼其馬を噉畢りて穴の許に寄來て云る樣。此今日の我が食に當れる者也。而るを何ぞ召し取て給はざると。穴の內に聲有て云く。此は我今日の食に當れり與ふべからず。汝は噉つる馬にて有なむと書生是を聞に此穴の內には彼に增る鬼の有りと知りて悲き事限り無し。而る間外の鬼歎乍ら返りぬ。斯て又穴の內の聲の云く汝懃に觀音を念じ奉れるに依て此難を免るゝ事を得たり。汝是より後心を至して佛を念じ法華經を讀誦し奉るべし。我は鬼にも非ず。此穴は昔此所に聖人有て此西の峯の上に卒都婆を建て法華經を籠め奉りき其後多の年積て卒都婆も經も皆朽失給ひにき。只最初の妙の一字許殘り留りて在り。其妙の一字と云は如此く云我也云云と有るは。鬼も觀音も法華經も釋魔なる隱れ无き明證にて實に玄妙不測と云ふべし。

但し上件引出たる卑賤しき鬼どもは。生涯乞食の業を上なき物と勤みたる聖上人など稱せられし比丘等が轉生したるも多かるべし。彼門臥と字せる平燈大德或は內記上人寂心其門弟なる三河聖人寂照。また宇治拾遺物語に空也上人の供に具したる若き聖三人有り。一人は繩を取集る聖也道に落たる古き繩を拾ひて壁土に加へて古堂の破れたる壁を塗事をす。一人は瓜の皮を取聚めて水に洗ひて獄衆に與へけり。一人は反古の落散たるを拾ひ集めて紙に漉て經を書寫し奉るなど有る釋子等は。轉生せざらむも其儘貧乏神と云名稱にいと能符へる行狀なるは憐むべきなりかし。

古今妖魅考六之卷

平篤胤輯考

門人　武藏國　碧川好尙
　　　上總國　柴田義信　同校

皇國に佛法の始て渡りし事は。古史傳印度藏志及出定笑語などに委く論ひたるが如くなれば其は措て。所謂ゆる變現地獄の事の書籍に見えたる初を攷ふるに大部屋栖古連公の蘇生して甦り給ひし聖德太子の靈に逢へる趣を談れるぞ最古かりける。今其大概を載さむに此皇子は用明天皇の御子なり。天皇いまだ皇子に御坐しける時に穴部眞人の女間人皇后と申すを夫人と爲給ふ聖德太子の姙まれ給ふ時に夫人の夢に金色なる僧來りて云く我は救世の願あり。其腹に宿らむと思ふといふ。爰に夫人此は誰にて候ぞと問へば僧云く我は救世の菩薩なり。家は西方に有りと云ふ。夫人云く我が胎は垢穢なり。何ぞ宿り給はむやと答ふ。時に僧我は垢穢を厭はずと云ひて踊りて夫人の口に入ると見て夢覺たり。其後喉中に物を含たるが如く思へて懷姙し給ふ。

金色の僧來て胎に投じたること日本紀には見えざれども。聖德太子の事を記せる數多の古書どもみな此事を記し且太子の生立よりいと奇異く凡ならざりしを思ふに決めて正しき說と覺ゆればとりつ。生々の古學者たち日本紀に見えざるをもて異み捨ること勿れ。案ずるに金色の僧來りて夫人の胎に宿れると云こと。是皇國にて變沒胎の事の見えたる始なり。偖その金色の僧の家は西に有りて救世の菩薩なりと云へるを諸書に此太子は觀世音菩薩の變沒して生れたると云に合せて思へば觀音にぞ有ける。然るに此觀音と云物は出定笑語また前條にも委く論へる如く元より名有れど實なき物なるに斯る事の有しはいかにと云ふに此ぞ釋氏の幻の妙なる處にて。實なき物なれども名を作りて。實有に說を立たる故に遊魂の變を爲さむと欲するや妖魔の世を誑かさむとするや所得て其物の形象を現じ幻をもて斯る所爲を見する物なれば佛法の渡ると共に付來れる外國の妖神のわざなる事灼然たり。然れば彼太子の生立れより佛を好み給ひ種々奇異なる御態どもの有し事も異むべき事に

非ず。
然るに用明天皇の御兄敏達天皇の元年正月一日にかの夫人宮の内を廻行て厩屋に至給へる時に。不意るに其戸口にて生れ給へれば人懐きて寢殿に入る。俄に赤黄なる光あり殿内を照す。また御身いと馥しかりき。厩戸に生れ給へる故に厩戸皇子と申す。四月の後によく言語し給ふ。三歳になり給ふ二月十五日の朝に掌を合せ東に向ひて南無佛と稱へて禮拜し給ふ。長なるに從ひて生知ありて十人一時に訟白す事を一言も漏さず聞別ち給へる故に豐聰耳命と申す。進止威儀よく僧に似たまふ。勝鬘經唯摩經法華經等の疏を作り佛法を弘め。また十七條の憲法をも制し給へる故に聖德皇子とも申し。推古天皇の元年に太子に立られ。天皇宮の上殿に座ませる故に上宮太子とも稱しき。然るに推古天皇の二十九年二月廿二日。斑鳩宮にて四十九歳にて薨じ給ふ。

好尙云右の事どもは日本紀。法王帝說を初め其餘の書をも採りて記されしと見えたり。また是より下の事は日本靈異記に據りて載されたる由なり。

爰に大部屋栖古連公は木國名草郡宇治の大伴連等が先祖にて。聖德太子の肺腑侍者として三寶を尊重しけるが。太子の薨じ給へる時に出家せむと欲けれど推古天皇聽し給はず。此御世に或る僧の斧を執りて祖父を毆殺しける時に。鞍部德積といふ人と二人を僧都と爲し給ふ。

稱德天皇紀神護景雲三年十一月の。陸奥國牡鹿郡の俘囚大伴部押人が上言に。押人等本是紀伊國名草郡片岡の里人也と云へり。此と同姓か。姓氏錄に大伴宿禰高皇産靈命五世孫天押日命之後也。また大伴連道臣命十世孫佐弖彥之後也と有れど其系とは聞えず。またこれぞ僧都といふ僧官の始なる然れど此時は俗形ながらに任給へりと聞えたり。

この連公難波に居住しけるが。同天皇の三十三年と云ける年の。十二月八日に卒に死りぬ。天皇勅して七日留めて彼が忠を誄せしめ給ふ。然るに三日を逕て蘇生たり。妻子に語りて曰く。五色の雲あり霓の如く北に渡れり其よりして其雲道を往くに芳きこと雖名香の如し。道頭に黄金山ありて西に炫けり。爰に薨ぜし聖德太子侍立して共に山に登れば其頂に一比丘居れり。

誄とは其死れる人の一世の功德を稱へて。哭事するをいふ。其辭を誄文といふなり。雖名香は狩谷望之云く雞舌香の譌なるべしと云り。此一比丘は即下に見える妙德なり。

太子敬禮して是は東宮の童なり。今より巳後八日夜を逕て鋸鋒に逢はむ。願はくは仙藥を服せしめむと曰へば。比丘すなはち環の一玉を解き授けて吞服せしめて南无妙德菩薩と三遍誦禮せしめ。彼より罷下れば。皇太子速に家に歸りて徐に佛を作れ。我も悔過畢らば宮に還りて佛を作らむと宣ひつ。然して先道より還ると見れば。驚蘇たりと語る。此より名けて還俗連公と曰ふ。此後九十歳餘にして卒りき。

皇太子と云より宣ひつと云までの文本書に皇太子速肆家除作佛之家悔過畢還宮作佛とあり。狩谷望之が言に肆は歸の字の誤と云へり。下なる家は一本に我とあり。除は徐の字の譌と思ゆれば本文の如く訓つ。そは還ㇾ宮。とは太子に係る語なればなり。案ずるに本書の賛曰に黄金山者五臺山也。東宮者日本國也。八日夜者八年也。逕二八日夜一逢二鋸鋒一者當二宗我入鹿之亂一也。令ㇾ服二一玉一者令ㇾ免ㇾ難之藥也。妙德菩薩者文殊菩薩也。還ㇾ宮作ㇾ佛者。聖武天皇生二于日本國一作ㇾ寺作ㇾ佛也。爾時行基大德者文殊菩薩之化也とあり。此は本書の解しかたき文を引直して擧たるなり。狩谷望之云蘇我入鹿之殺二山背大兄王等一在二皇極天皇二年一距ㇾ此十八年也。疑八日八年上並脫二十字一と云へり然る言なり。

屋栖野古連公死して五臺山に至り。聖德太子の既に彼處に侍ひたると共に其頂に登りて文殊菩薩を敬禮し。其時有し事共を蘇生して語りたる。是ぞ皇朝にて蘇生したる人の幽界の事を語れる始なる抑五臺山といふは諸越代州といふ處にある山にて其山に文殊菩薩の堂あり。

好尙云五臺山といふは。明楊愼か五臺山の記に五臺在二代州五臺縣一山形五峙。相傳以爲二文殊示現之處一山在二長安東北二千六百里一と云へり。

此は人の普く知れるが如し。皇國よりは數百里の海山を隔たれど。屋栖野古連死して其靈魂の到れるなれば其を疑ふには非ねども。彼の由の文殊菩薩に逢たるは例の幻にぞ有ける。然るは彼の文殊菩薩とい

ふも觀音菩薩とおなじく。有名无實の物なれば眞形の現はるべき由無ればなり。然るに屠栖野古連の正に見つることは。聖德太子は上にいふ如く變沒の人なる故に。幽に歸しては倍々に幻通の術をもて五臺山また文殊菩薩をも變現して見せ給へるにや。若これ太子の變現ならずは。其本師釋迦佛の靈神かの五臺山にも住して文殊菩薩の事を行ふと通ゆれば此時に文殊菩薩と現はれたるは即釋迦佛にて太子も其の許に侍し給へるなりけり

五臺山の文殊の種々奇異なる態どもの有る由は彼國の書等にいと多く見えたり然るに其文殊は上にいふ如く有名無實なるに。奇異なる驗のある事は釋迦佛の態ならで何か有らむ熟々思ふべし。

偖此とき太子の神の未然に誨し給へる如く。十八年すぎて皇極天皇の御世の二年に宗我入鹿臣亂を起して太子の御子孫を盡く弑せ奉りぬ。偖また賛曰に還リテレ宮ニ作レ佛者ハ聖武天皇生レテ二于日本國一作リレ寺作ルレ佛也。爾時行基大德者文殊菩薩之化也と云へるは辭足らず。通え難けれど此は太子の神の語に我も悔過畢らば。宮に還りて佛を作らむと宣へるを注せるにて。

悔過は懺悔といふに同じさて太子は佛の變沒なれば佛法弘通の事を除きては後世にても悔給ふべき御過は有べくも非ざるにかく宣へるはいさゝかは世事をも行ひ。國史をも撰ばむとし。また御妻を納れて御子あまた生せ給へるなど佛道に違へる事なる故に其を過として悔過し給ふにや。然れど太子の本地なる佛も本は凡夫にて妻も子もあまた有しかば垂跡して世に出ては人の眞の道の御態もなどか無らむ。

後に太子は聖武天皇と再生して寺を作り佛を作らむと宣へるにて此天皇の寺を作り佛を作り給へる爾時に專と其事を議り行へる行基大德と云はすなはち文殊菩薩の變化して生れたる人ぞと云ふ意なり。

聖武天皇を聖德太子の再生と云ふ說は。本文に記せる太子の神の御言なれば疑なくまた古事談三の卷に聖武天皇は救世觀音の變沒たる由見え。壒囊抄十八卷にも如意輪化現聖德太子の後身也とあり此は本文の御言より出たる說なるべし。行基大德は文殊の變沒といふ說も今昔物語集古事談壒囊抄などを始め數多の古書に記し傳へて普く人の知れ

るが如し。其文殊といふ菩薩は本より有名無實なれば。其變沒せるは卽て釋迦佛の化身なること上に論へるが如し。然るは諸佛菩薩は悉く釋迦佛の化身と云こと和漢の知識の定説なりかし。

さて屋栖野古連は此後九十有餘歳まで世に在りて卒たる。其靈の往方は五臺山にまれ天王寺にまれ。聖德太子の神の坐ます御許に天翔り往けむ事は言まくも更也其は太平記に小淸水合戰の前夜に武藏五郎と河津左衛門と少も替らず同じ正夢を見たるに所は何處とも知らず渺々たる平野に。高師直師泰その一族數萬騎轡を雙べて控へ東には左兵衞督直義の勢。石堂畠山上杉桃井など千餘騎にて相向ひ。兩陣鬨を合せて戰ひいまだ半ならざるに。石堂畠山桃井が勢旗を巻て引退く。高家の勢勝に乘りて追駈る處に雲の上より百騎ばかりの勢かけ出て。天王寺の聖德太子甲斐の黑駒に白鞍置きて召れ。蘇我馬子臣小野妹子臣など甲冑を帶し跡見赤檮秦河勝など弓箭を取りて眞前に進む高家の一族ども其勢を小勢と見て中に取籠めて討むとするに。赤檮河勝四方に颯と走り散り同時に引て放つ矢に。師直師泰眉間の眞中を洞して馬より倒に落ると見て驚たるが。其日果して高家の軍うち負て師直師泰共に間なく亡たりき。此は太子の神の直義が軍を助給へるなるが其軍に馬子妹子赤檮河勝などの從へるを思ふべし。此は皆太子の現世におはせる間に親しみ仕奉れる輩なる故に。幽にも其御許に侍るをや。此餘に睦魂あへる人どち其の靈神の集へる例は上にも下にも論ふ條々にも往々見えたるを以て知るべし。さて直義は最も畏き天皇をなやめ奉り。護良親王を弑せ奉れるばかりの甚惡き人なるに。かく助け給へる事は聖意なれば測りがたし。また此によりて熟思へば其後の書共にいと多く閻魔王の廳に行たる者の蘇生したる事實を記し傳へ。今もまた然る事のあるは釋迦氏の靈と聖德太子の靈との態なるべくぞ覺ゆる。其は既に載せる條々をも思ひ符せて辨ふべし偖大部屋栖野古連の靈の變現地獄に赴きたる事に續きて古く聞えしは行基和尙なるが

此の僧の廣大の希欲を起し魔事魔業の多かる事は始めの巻にも少か論ひ。巫學談弊にも記せれば合せ見るべし。

其は此の法師の事聖武天皇紀天平勝寶元年二月の處

に。丁酉大僧正行基和尚遷化和尚藥師寺僧。俗姓高志氏和泉國人也。

靈異記に行基俗姓越史也。越後國頸城郡人也。母和泉國大鳥郡人蜂田藥師也と有り。姓氏錄和泉國諸蕃に古志連ありて。王仁之後也と見え。同編に蜂田藥師出自吳主孫權也と有り。然れば。父はもと越後の國頸城郡の人なるが妻の緣によりて和泉國大鳥郡に住し故に行基を和泉の國の人とも越後國の人とも云しと見えたり。元亨釋書に姓高志氏泉州大鳥郡人。百濟國王之胤也と有は誤なり。さて姓氏錄に高志連天押日命十一世孫。大伴室屋大連公之後也と有るは別姓なり思ひ紛ふべからず。

和尚眞粹天挺德範夙彰初出家讀瑜伽唯識論即了其意既而周遊都鄙敎化衆生道俗慕化追從者動以千數。而行之處聞和尚來巷无居人爭來禮拜隨器誘導咸趣于善又親率弟子等於諸要害處造橋築陂聞見所及咸來加功不日而成百姓至今蒙其利焉。

古事談に神龜元年行基菩薩造山崎橋造畢後於橋上大設法會而俄洪水出橋流畢人多死といふ事もあり今昔物語集元亨釋書などに。行基は胞衣に裹れて生れけるを父母忌て弃て樹枝に懸たるに。宿を經て往見るに胞を出て言ふ。父母此を異と爲て養けるに童なる時村の小童等と遊ぶに動すれば佛法を讃歎しき。牛馬飼ふ童集りて此を聞入て家に還らず。其主等牛馬並に童部を覓めて其讃歎の聲をきゝ。牛馬の事は問はず淚を流して歸る事を忘れて此を聞く。其說法の間に牛馬諸處に散ず。主各各已に失へりと思ふに說畢りて高き處に上りて牛馬を呼ぶに。聲に應じて來る。主各々牽て歸る。如此して折々男女集ふに鄉の刀禰此事を聞て田をば作らずさる由なき態する者ども追むと云て行ぬ。寄て聞けば云む方なく貴く覺えて泣て此を聞くまた郡司此の事を聞て大に嗔て我行て追むと云て聞くに限なく貴ければ亦添て留まる。また國司より使を遣して追しむるに使みな歸らず。泣て此をきく然れば國司極めて恠く成て自行て聞くに實に恐く貴きこと限なし。隣國の人まで聞傳へ來て此を聞く。此に依て公に奏す天皇召て聞給ふに極めて貴こと限无し。十五歲にて出家して藥師寺の僧と

成り名を行基と云ふ。法門を學ぶに心智深して露計も悟得ざる事なし。諸國に修行して本國に歸る間。慈心深く人を哀む事佛の如し。一ノ池の邊を通るに人多く集りて魚を取り食ふ。行基の前を過るに若き男戯れて魚の膾を以て行基に薦む。行基此を食て程もなく池に臨みて吐出れば皆小魚と成て游ぎ去りぬ。見る者ども驚き貴ぶ事限なし。また山城國鹿寺の邊なる獵人鹿を三頭獲て寺門に擔ひ來しを。行基見て殺生の罪を說くに獵人聽かず。法力にて此鹿を活したらむには其敎に從はむと云ふ時に。行基咒持すれば三の鹿忽に起走りて山林に入りぬ。此依りて其寺の名を鹿寺と云など有り。天皇甚敬重焉詔授大僧正之位並施四百人出家和尙靈異神驗觸類而多時人號曰行基菩薩

行基を大僧正と爲給へるは天平十七年正月なりき釋書辨蒙に先是天平五年勅許輦車賜度者三十五人基詠和歌謝恩同十六年給封戸九百以賜香厨と云へるは何に依たるか知らず元亨釋書に天平二十一年正月皇帝及皇大后皇后受菩薩戒乃賜號大菩薩と有は非なり。國史に從ふべし靈異記にも時の人欽貴美稱菩薩と有をや。さて此和尙の靈異有し事どもは上にも下にも記す如くなるが。なほ靈異記今昔物語などに。行基大德故京の元興寺の村にて說法の時聽衆の中に一女人有り。髮に猪油を塗り中に居て法をきく。爰に大德甚晃かな頭に血を塗たる女を遠く引棄よと云へば女大恥て出けり。また難波の江を掘開く時に說法しける。其聽衆の中に河內國若江郡川派里の一女人子を携へ來りて法を聞けるに。其子十餘歲なるが。脚なほ立ず。乳を飮み物を噉ふこと間なくかつ哭て人々に法を聞しめず。爰に大德其子を持出て淵に捨よと云ふ。衆人聞て慈ある聖人のかく告るを怪み。母もまた捨ず。後にも携來て法を聞くに哭囂きこと前の如し大德また其子を淵に捨よといふ。母是を怪みながら深淵に投たるに其兒更に水上に浮出て足を踏み手を攢□概て云く惻かな今三年徵り食なりつ母是を恠み更に入りて法を聞く。大德問て言く子擲捨つるや。時に母具に上の事を陳ぶ。大德告て言く汝先世彼が物を負て償納めず。故に今子の形に成て徵債て食ふ。是昔の物主なり

鳴呼耻よと云ふ事も有り。母の子を淵に捨たる事は實しからねど不情なる者にて有まじき事とも云べからねば記し出つ。好尙云此僧の事古今著聞集に行基菩薩諸々の病人を助けむが爲に有馬の温泉に向ひ給に。武庫山の中に一人の病者臥たり。上人憐みを垂て訪ひ給ふやう汝何に依てか此山の中に臥たる病者答て云く病身を扶けむ爲に温泉へ向ひ侍る筋力絶盡て前途達しがたくして山中に止る間糧食與ふる者無して漸々日數を送れり。願くは上人憐みを垂て身命を助けて給へと申上人此言葉を聞て彌悲歎の心深し則我食を與へて附添て養ひ給ふに病者云く。我鮮なる魚肉に有では食する事を得ずと是に依て長洲の濱に至りて生しき魚を求めて是を進め給ふに。同くは味を調へて與へ給へと申せば。上人自鹽梅をして其魚の味を試みて進め給ふに病者是をぶくす又云我病温泉の效驗を賴むと云ども忽に愈む事難し苦痛暫も忍びがたし上人の慈悲に有らでは誰か我を助けむ。願くは上人我痛む處の膚をねぶり給へ。然らば苦痛助かりなむと云。いふに從ひて其膚をねぶり給ふに舌の跡紫磨金色と成ぬ。其仁を見れば藥師如來の御身也。其時佛告て云く上人の慈悲を試みむが爲に病者の身に現じつる也とて。忽然として隱れ給ひぬと云事も見えたり。

留止之處皆建道場其畿內凡四十九處。諸道亦往々而在弟子相繼守遺法至今住持焉。時年八十と有り。

諸國に行基の開基と云ひ傳ふる寺院の多かるは此故と知らる〇好尙云法華驗記にも菩薩畿內建立道場凡四十九處。諸州亦往々而在之。菩薩天平勝寶元年二月四日唱滅時年八十矣と有り。

さて行基法師が靈異有し事は御紀を始め分注に記せる書等に見えて紛なき事なるが神ならずして如此き異驗の有しは如何と云ふに。此は佛祖の分身文殊菩薩といふ物の變沒して生たる人なる故に。元より身に例の神通と稱する幻法を具し生れて然る異驗の有しなり。斯て此法師道昭和尙に隨ひて法相の訣を受け二十四歲の時に高宮寺の德光法師と云ふに具足戒を受たりと元亨釋書また其辨蒙に云へり。

行基法師が文殊菩薩の變沒なる由は。古史傳推古天皇二十□年□月の所に諸書を引きて委く說明せ

るを見よ。
然るに上にも謂へる如く數の寺を建立し。大僧正の位を受け。四百人の出家を賜はれるは魔業なる事更にも云ず。光明皇后に菩薩戒を授奉れるは。所謂得財利恭敬供養雖非法器而強爲説にて魔事なり。光明皇后は玄昉法師と密通して。彼が子をさへに生給へり。かく法器に非ず。且は女人に菩薩戒を授しは財利恭敬供養を得たる故に非ざらめや何是に神通を用ざりけむ○好尙云東大寺要錄と云書に。皇后藤原光明子諱安宿。又號仁政皇后。贈太政大臣不比等之女也。母贈一位縣犬養橘宿禰三千代也。天皇爲太子爲后天皇卽位神龜元年爲一位大夫人藤原宮子之妹。孝謙天皇之母也。天平寶字四年六月七日乙丑崩年六十佐保山東陵在大和國添上郡。兆域東三町西四段南北七町守戸五烟と見え。釋書の本傳も是に同じ。また此皇后の佛法を勸み給ひし事諸書に多く見えたる中にも。釋書に天皇の六年正月薦先妣橘氏於興福寺建西金堂安釋迦十弟子等像莊麗妙絕聖武帝造國分寺東大寺皆后之勸發也。又置悲田施藥二院恤天下饑恙及東大寺成后以謂大像大殿皆已備足帝勗于外我營于內勝功紀德不可加也且有詫意一夕閨裡空中有聲曰后莫誇也妙爛宣明浴室濟濯其功不可言而已后怍喜乃建溫室令貴賤取浴后又誓曰我親去千人垢君臣憚之后壯志不可沮也。既而竟九百九十九人最後有一人徧體疥癩臭氣充室后難去垢又自思而言今滿千數豈避之哉。忍而揩背病人言我受惡病患此瘡者久適有良醫敎曰使人吸膿必得除愈而世上無深悲者故我沈痾至于此今后行無遮悲濟又孔貴之願后有意乎后不得已吸瘡吐膿自頂至踵皆遍。后語病人曰我吮汝瘡愼勿語人。于時病人放大光明告曰。后去阿閦佛垢亦愼勿語人。后驚而視之。妙相端嚴光耀馥郁忽然不見后驚喜無量就其地構伽藍號阿閦寺と有るを思ふべし。

また同書に釋實忠は良辨之徒也容貌端麗初皇后光明子詣講堂（東大寺）堂有地藏像。妙斵也后拜像私念安得如此端正沙門潛令宮人覓美沙門或曰實忠法師踰於像也。后賜浴且欲觀其

體一忠入二溫室一肌膚鮮明后兪眼不二暫捨一。忽然假蘇夢與レ忠交。寤見レ忠頂載二十一面觀音一儀相自若。后出拜合掌懺謝曰凡女癡慾輙察二愛見一聖師眞慈恕二我觸忤一と云ひ。また右の傳に贊して背則天供二安秀二老於宮中一。一日命二溫室一使下宮人去上垢唯嵩嶽恬然不レ動后嘆曰不レ因レ入レ水爭見二長人一。吾太后光明子與建崇奉之跡則天未レ知二其伯仲一也。然則天之淫放亦孔醜矣。光明子者我未レ聞焉特覬覦之私發二於忠公豈夫忠之感靈所二以因而見一乎と見え三國傳記にも光明皇后と申は聖武天皇の后妃也窈窕を思ふて善心を傷ふ事なく。賢才を進めて其色に婬し給はず。實に君子の好き匹也。殊に三寶に歸し一乘を貴び慈悲深くして道心堅固なる人也と有るは。潤飾の文にて採るに足ず。なほ浴室を立て湯の施行し給ひし事も委く載せれど釋書と同じければ漏しぬ。

また皇后を贊せる詞に或言。光明后去二千垢一可レ謂二光前絕後一乎余曰設二溫室一者可也。去レ垢不可也。曰若不レ去レ垢爭感二阿閦佛一乎。阿閦者生二于堅誠一也苟有二堅誠一造次顚沛皆見二阿閦一何必區々去レ垢吸レ膿始爲レ得乎又夫君々臣々夫々婦々人倫之大常也。我光明子婦德陰教奉レ佛崇法古來寡儔也然去垢之者失常也矣と云へるは然る事なり。釋子等が心にすら斯の如し。實に天皇の皇后と齋れ給ひながら。かゝる乞食の御所爲は如何なる妖魅の見入しにや畏しとも辱しとも云む方なしまた浴室をしつらひて施行し給ふなどは佛道を崇敬し給ふ故のみならず美沙門を愛し給ふと云ひ彼玄昉が事など攷ふれば穢けき事どもの許多有けむこと想ひ像られたり穴かしこ〇因に云行基僧が數の寺を建立したるを魔業なりと有につけて思ひ合さるゝ事有り。發心集に或山寺に德高く聞ゆる聖有けり。年比堂を建て佛作り樣々功德を營み貴く行けるが。終目出て有ければ弟子もあたりの人も疑无き往生人と信じて過ける程に或人に彼聖の靈つきて心得ぬ趣の事ども云。聞けば早天狗に成りたりけり。弟子共思の外なる心地して。微妙く口惜く思へども力無く。覺束无き事抔問ければ不思儀の事ども云中に。我在世の間深く名聞に住して無き德を稱して人を誑かして作し佛なれば斯有る身と成

て後は此寺を人の拜み尊ぶ日に我苦患勝る也とこそ云けれ。微妙き功德を作るとも心整はずは甲斐無るべし。今の事なれば名は憚なれど殊更顯さずとぞ或人語り侍りしと有り。

殊には國家の道の大義を亂す矯詐の大妄語を吐きて神を誣ひ皇を誑惑し奉れり。是また魔道に入べき破戒也。其は聖武天皇の東大寺を建立せむと思食立せる起原より言はでは辨がたき事も有れば先此事より言ふべし。其は靈異記古事談などに此御世に諸樂京の東山に一寺有けり金鷲山といふ。金鷲といふ童行者この山の麓の大櫟木の下に草菴を結びて住ける故に字とせり。

金鷲を古事談には金鐘と作き寺をも金鐘寺とあり此は同音の字に用たるなり。今昔物語に金就とあり。元亨釋書に金熟と作るは共に誤なり。

後に此處に東大寺を造る此寺を造ざる時に金鷲行者土にて作れる執金剛神の像を安置して。其像の蹲に繩を繫ぎて晝夜憩はず引動かし禮拜しけり。然るに其蹲より光を放ちて皇殿に至れり。

古事談には禮拜ごとに引動して聖朝安穩增長福壽と唱けり。其聲かすかに天皇の御耳に聞えけりと有り今は靈異記の傳に依れり。何に依たらむも然る不思議は祆魔の幻術なること言まくも更なり。また若くは此行者の幻なりけむも知べからず。此行者も幻を行へる由は古事談に金鐘行者の靈驗殊勝なるに天下皆これに歸依す。大佛殿を造らるべき沙汰のとき辛國行者といふ者云けらく。歸依僧の道は驗德に依べし。何ぞ金鐘一人を歸依せらるべき。兩人を召合され其效驗を競られて勝劣に隨ひ德をも崇られ伽藍をも立らるべしと云ふ。申す處謂あるに依て二人の行者を召合さる。各々驗德を競べ誦咒祈の間に辛國方より數萬の大蜂出來て金鐘を刺さむとする時に。金鐘方より大鉢飛來て蜂を打拂ふの間蜂みな退散しけり。爰に辛國忽に惡心を結び寺敵となりて度々此寺の佛法を魔滅せむとしけりと見えたるを思ふべしすべて此御世にかゝる不思儀は數へ盡すに暇あらず。みな釋魔の態にぞ有ける。此祆魅攷に見識をたて博く古書を見て知べし。○好尙云東大寺要錄に古老傳云。天長之頃中門有二大蜂一。是辛國變レ身螫二殺寺僧一依レ之

常住僧多失。寺家荒廢。依宣旨一﨟瀧口着草衣僅目許開。於大佛殿堂前遙射之其後止蜂難渡他寺。僧即弘法大師等依宣旨從大安寺口。渡住東大寺南院と有るを見れば。幸國が宿
執の深き事も知られたり。

天皇驚き怪み勅使を遣して看しめ給ふに。勅使光を尋ねて寺に至り見るに一行者ありて本尊の蹲に縄を繫ぎて禮拜する也けり。名を問へば金鷲行者と答ふ勅使還りて其狀を奏せば行者を召て何事をか求むと問給ふに。出家して佛道を修し伽藍を立て佛法を興隆せむ事を欲ふに私力に及がたしと白す勅して得度を許し金鷲を名とし彼行を擧て四事を供し乏こと無らしむ世人その行を美讚して金鷲菩薩と稱す。天皇是より大伽藍を建立せむと思食立けりと見えっ

上件の文は靈異記と古事談とを合せ見て目易く文を成たるなり。今昔物語集にも元は此事を記せると見えて十七卷に。金就優婆塞修行執金剛神語

といふ目のみ殘れり。

三國佛法緣起に。東大寺造立發願初興者即良辨其英也。良辨元名。金鷲仙人。本尊執金剛神。放光照內裡良辨奉祈聖朝安穩音聞內裡已達上聞乃被立勅使良辨奏聞奉祈聖朝安穩建立大伽藍祈禱懇志深契叡慮迺先賜以羂索堂以公家土功造營已畢此處名金鐘寺後立東大寺と有り。

古事談にも金鐘行者やがて良辨なる由記せり。然るに元亨釋書に別人とせるは誤なり。さて序に言はむ釋書に良辨幼き時鷲に抓去られたるが。數十年過て後に其母に相る由見えたり。なほ此等の事は既に第二卷の初にも云へれば合せ見て知るべし

○好尚云先賜以羂索堂とは。東大寺要錄に羂索院名金鐘寺又改號金光明寺又云禪院堂一字五間一面在禮堂天平五年歲次癸酉創建立也。良辨僧正安置不空羂索觀音菩薩像當像後有等身執金剛神是僧正本尊也。また羂索院雙倉納物尤多

右前帳云阿彌陀堂藥師堂等雜物依去延喜廿年十二月十四日宣旨文皆移納於羂索院雙倉などあるを思へば羂索堂或は金鐘寺とも稱せる寺院を良辨に賜はり。其邊に東大寺を建立せられしかど。なほ其舊名を存する僧房も在しと通えたり。偖右の執金剛神の靈異有りし事も同書に。其執金剛神

像頂髻右方之飾切落。古老相傳云。去天慶年中將門之亂時爲鎭護國家祈請當寺。于時此神王髻中有本結。其右方忽成大蜂飛入雲中指東方去喫螫將門。依此冥助輙以征伐由彼神王有所示現爲護王城向北方立云々又寺僧傳云天慶之頃有平將門謀危國家兵革尤絕。公家爲免其難祈請此寺神像已隱廿餘日。寺家稱怪異屢經奏聞疑戰之不利彌以恐怖不經幾日像已立本壇之跡見其天冠之飾右方缺落又其身濕如流汗現爲賊被射損之相也。依此靈異遂梟將門首云々右は白川院高野巡行之日記に載せるよし見えたるは。謂ゆる良辨が本尊なる趣なり。ヽ其執金剛神と云は今の世に云仁王の事也と。何の書にか見えたるを其書名忘れたり。また元亨釋書に釋日藏天慶四年秋於金峯山剋三七日絕穀不語修密供八月一日午時修法之間忽舌燥氣塞欲呼人相救又思已稱不言豈得出聲如是思惟氣息既絕悦至一窟前窟中有沙門手執金鉢傾出瓶水與藏飲其味甘美沙門曰我是執金剛神也常住此窟護釋迦遺法我感上人勤修故忽往雪山取八德水救師渴耳と云ひ。其使蒙に天台普門品義疏下曰金剛非八部數手執此寳而護法也或言在欲色天中教化諸天即大權神也とも云へり思ひ合すべし。

斯て此不思儀より思食立して大伽藍を創造し給はむ事を伊勢大御神に請し給はむと。其御使を行基法師に仰せ給りへしかば此時なむ大妄語を放ちて神をも皇をも欺き奉りける。其は元亨釋書に神宮雜事記を引きて記せるは聖武皇帝欲創東大寺即思念我國家歷代奉神今營佛宇不知戻神意不欲試機宜天平十三年勅行基法師授佛舍利一粒詣勢州獻皇太神宮於內宮南門大杉下縛盧而居期七日持念告上旨。

此年に行基法師に敕して皇太神宮へ詣しめ給へること御記に記し漏さる其は佛法に係る事は大抵漏さるゝ例なれば成べし御紀には漏たれども今に正しく行基が居たりし古跡を存せりと伊勢の人云へり

第七日之夜神殿自開大聲唱曰實相眞如之日輪照却生死之長夜本有常住之月輪爍破煩惱之迷雲我今

逢難遭大願如渡得船又受難得寶珠如暗得炬師其持舍利藏埋飯高郷以賴邦家基捧舍利藏彼所反都奏聖皇情大悦。上又謂朕以行基為廟使恐不協朝儀 十一月三日重勅右僕射橘公詣勢州

難遭大願とは大佛造立の願をいひ難得寶珠とは佛舍利を云へり實相眞如本有常住など云ふは法花經の旨なり彼經の藥王品に如渡得船如闇得燈と有る全文をさへに用たり法師を神宮の使に遣し給へる事は朝廷の儀則に叶はずと思看せる由なり右僕射橘公とは右大臣橘諸兄公をいふ是より前天平十年五月使右大臣正三位橘宿禰諸兄云々賫神寶奉欽于伊勢大神宮と云事は御紀に見えたれど此十一月三日に詣しめ給へる事は漏されたりさて不協朝儀と云より以上は今傳はる雜事記に欠て十一月三日と云より以下の傳は存れり但し天平十四年十一月三日と有り大神宮諸雜事記は古代の本書は燒失せたるを今傳はる本は後に集たる物の由度會正兌の外宮儀式解に記せり傳有る事にや

十五日僕射復奏其夜上夢皇太神宮告曰日輪是毘盧遮那也帝得此意為當眞言已現日輪相其光耀如也帝覺感激以故東大寺大像高一十六丈蓋擬毘盧也と有り。

今傳はる雜事記の文は稍異なり其は上に云ふ如く後に記せる文なればなり引出ては中々に紛しければ引出ずなむ偖また擁嚢抄に昔聖武天皇東大寺を立給はむ爲に天平十三年辛巳の年に太神宮に申合せ給はく吾國は神國なり神事を先とすべし。大寺をたてむこと神慮に叶はゞその告を示し給へ。垂跡の本地を知らば速に大寺を立べしとて行基勅を承給はりて内宮の南門の大杉のもとに七日七夜參籠してこの事を祈りけるに太神宮御殿を開きて告て宜はく實相眞如之日輪は照生死長夜之暗本有常住之月輪拂無明煩惱之雲吾逢難遇本願如闇夜得燈亰難受之寶珠若渡海得船依其名福將埋飯高郡云々と云へり此御納受新なる故也。行基菩薩涙を流して佛舍利を奉納して都に赴き給ふ天皇大に喜て御願を思食立せ給へども御本地の事詳ならざる上に若行基佛法流布の爲に僞詞あらば神慮恐るべしとて左大臣橘朝臣を勅使として同年十一

月三日に重ねて申合せらる然るに十五日歸參の夜に天皇御靈夢ありと云へり。御託宣と稱せる文も何も聊異なり但し此も神宮雜事記に依れる由見えたり。然るに文の異なるは各々撰者のいさゝか本書の文を直せる故なりまた神社攷にも此事を擧て見二于神宮雜事一と云れたるは釋書を其儘に擧られしなり○好尙云要錄に大神宮禰宜延平日記云さて擧たる文も大概同じければ洩しぬ。

抑天照大御神は撞賢木伊豆の御魂と御座して佛を惡ひ給ふ事は明々赫々として更に異論を起すまじく機宜を試み給ふまでも無き御事なるに。此天皇は然べき因緣ありて深く佛法を好み給ふ御心に。大佛を造らまく欲く思召しつゝも然すがに神意に戾らむ事を恐り思召して佛舍利ちふ穢物を授けて行基を詔しめ給へるに姦僧思ふ隨なる廣大希欲の時を得て佛語を竊して妄語を作り畏くも大御神の神託有しと誣奉り穢物を神境に藏めて朝廷をも欺き奉れるなり。

もし實に神の託宣ならむには。朝儀を憚り疑を拂はむ爲に詔しめ給へる諸兄公にはまた別に朝野の人も信ずべく託宣あるべきに行基へのみ託宣有しと云ふは妄語の炳焉たる證に非ずや

扨諸兄公の復られし夜の御夢に大御神の御告有しと見給ひしは姦僧が例の幻法をもて妖魔を語らひ畏くも大御神の御有狀を效しめて示奉れる御夢なること智光法師を十日殺して變現地獄の苦を受しめて令從たる幻法に思合せて疑なし其は靈異記に釋智光は河內國安宿郡鋤田寺の沙門なるが元興寺に居れり俗姓を鋤田連といふ後に上村主と改む。母は飛鳥部造なり天年と聰明にして盂蘭盆大般若心般若等の經疏を作れり行基法師を大僧正と任給へるに妬心を發して曰く。吾は智人行基は沙彌なり何ぞ我を棄て彼を賞し給ふやと鋤田寺に歸り住けり。

鋤田連は天武天皇紀に次田倉人連と有ると同氏にて上村主氏と同祖の蕃種なり飛鳥部の造も蕃種なる事姓氏錄を見て知べしさて鋤田寺を今昔物語に椙田寺に作れり。

而るに間もなく智光癩病を疾み一月許を經て死けり命終の時に弟子等に誡めて曰く我死なば燒ことなく九日一日置て待べし他に知する事勿れと弟子ら敎を受けて室戶を閉て他に知せず期日を待けるに。十日

を經て蘇りて弟子を喚ぶ。弟子聲を聞て集會して哭喜ぶこと限なし。智光大に歎じて具に弟子等に語云く。我閻羅王の使二人に捕られ西に向ひて行けるに前に金もて造れる樓閣あり。高廣にして光耀くこと限なし此は何なる處ぞと問へば。汝は名に聞たる智者にして知らざるや此は行基菩薩の生(うまる)べき處なりと。其門の左右に二神人立たり。身に鉀鎧を着し額に緋縵を着たり。

命終らむとする時何日措きたれと誡むるは即て蘇生せしむる爲に言しむる釋魔の常言なれば怪むに足らず。又西に向ひて行たるは定めて五臺山なるべし偖此二神人と有は何物に變現せるか知らず若くは所謂金剛神を效たるなるか今昔物語元亨釋書には閻羅王一人と爲たれど其は非なり。

使等長跪して。智光法師を召せりと云へば神人問云く汝は智光法師か。答て云く然り爰に神人北方を指して此道より將往けと云ふ。使に副て歩み往けば遠くて見るに。煙炎空に滿ちて身に當り極めて熱(あつし)と云へども心に近就むと欲しき何ぞかく熱きと問へば汝を煎べき獄の熱氣なりと極めて熱き鐵柱立たり使等その柱を抱けといふ。我就て柱を抱くに肉皆銷爛して骨のみ存れり。三日有て使等箒をもて其柱を撫て活々と云へば故の如く生ぬまた北を指て將往くに先に倍(まさ)れる熱銅の柱立たり。所引(ひくところ)の惡にて猶就て抱かむと欲す。此を抱けと言へばまた就て抱くに身みな爛銷せり。また三日を經て先の如く活々と言へば故の如く更生す。また北をさして往く甚熱き火氣雲霞のごとく空より下り。飛鳥熱氣に當りて落煎らる。此は何處ぞと問へば汝を煎熬せむ爲の阿鼻地獄なり。至れば。吾を執りて。燒煎たり。唯鐘を打つ音を聞ときのみ冷て憩めり此を逕る事三日ありて其獄の邊を叩きて活々と言へば本の如く復生す。

所引の二字を本書に所川とあるは誤寫なり是佛書の定れる語なれば改めて記しつ。また度ごとに活活と言へば蘇れりとある事の論ひは下に其事の出たる處に云ふべし。

更に將てかの金門に至り。還來れりと云へば彼の二神人告て云く。汝を召ぶは行基菩薩を謗れる罪を滅さむと也彼菩薩は葦原國を化し已りて此宮に生れむとす。今は疾く還れと云ふ。爰に使と共に東に向ひて

還來つと語りて大きに懼れ念ひ此時行基菩薩は難波に在て椅を渡し江を掘り船津を造る時なりしかば其處に至りて罪を謝せむと欲するに。行基菩薩は神通にて空に智光が來れる心を知りて咲を含みて在り智光地に伏して罪を懺悔し夢の事を語り是より深く行基菩薩を信じけると有り。

此傳は今昔物語集にも元亨釋書にも見えたれど。靈異記は古く殊に傳の趣も委ければ其に依れり。然れど彼の二書によりて文を目易くせる處もあり。

是正しく智光法師を從へむが爲に行基菩薩が變現して示せたる地獄なる事。夢中の事實を熟々考へまた智光法師が來れる心を空に知りて咲を含み居たる拆をもて悟るべし。己が生るゝ金殿を示せまた火獄の刑を加へたるは。正に佛祖が其弟の難陀が妻の別を悲むを止めて出家させむと玉女の一人居る金殿を示せまた出家せずは落て刑せらるべき火獄を示せたる幻法を效ひ行へる妖術にて。實に生ながらの釋魔なるをや。

なほ今昔物語に行基菩薩は前世に和泉國大鳥郡に住ける人の娘なりき其家に仕ふ童部あり名を眞福田丸と云此童思けらく我受がたき人身を得たれども。下姓の身なれば勤むる事なくは後世に憑あらじ。大寺に行て僧となり。佛道を學ばむと思ひて主に假を請て出るとき主云く。修行に出る身なれは水干袴を着せて遣らむと云て調へむと爲るに。彼娘功德の爲なりとて其袴を縫てけり。童部此を着て元興寺に行て僧となり名を智光といふ。止事なき學生と成ぬ。此童の出てのち彼娘いくほどもなく死て其後同國同郡の高志連が家に生る是行基菩薩也。菩薩未だ小僧にて在ける時に河内國にて法會を修すとて智光も止事なき老僧にて有ければ其講師とす元興寺より行きて高座に上り説法するに聞人貴ぶこと限なし。説畢りて高座を下りむとするに後方より。論義を出す音あり見れば頭青き小僧なり。何計の者なれば我に對して論義をば爲ならむと思て見返れば小僧云やう。眞福田が修行に出し藤袴は我こそ縫しかと云ふ。其時に智光大に嗔りて小僧を罵けらく。我は公私に仕へて年來を經るに田舍法師の論義を出し我を罵ること極めて

安からぬ事なりと怒るにぞ小僧は打咲て逃去りぬ。此は行基菩薩也けり。智光然ばかりの智者なれば。罵り咎めず思ひ廻らすべき事也。思ふに其罪も有らむ此の菩薩は文珠の生れ給へるとなむ語り傳へたりと有り。いかにも逃去れる時の恨をも晴けむと成べし。さて行基は文珠菩薩の變沒と云事は靈異記に記せる聖德太子の御靈の語を。始め數多の古書に見えて紛なき事也。先彼娘に生れて夭死して父母に無常の心を起さする佛の例の方便を用ひて。後に行基と生れて種々の靈異を示し世人を悉く其道に赴くる菩薩の本誓こそ忌じけれ。偖かく種々の幻法をもて世の上下を誑惑して東大寺の大佛を造らせ奉り爰に始めて佛は本地神は垂跡といふ妖説の基をぞ起し行ける。

名を行基と號しも陰にかく廣大なる希望を起し。佛法の世に弘まる基を立行はむといふ本誓にて負けむもまた知べからず釋書に良辨爲帝重勸帝營像字一夕帝夢良辨前身爲支那比丘求法赴天竺到流砂有大河辨無錢不得渡淹留數日帝時爲渡子憐辨求法不言傭賃乃渡之辨先身發誓曰。願爾來世必登王位因此主日域覺後帝創此像と有り此は行基良辨二僧のうち誰か見せ奉れる御夢なりしか

抑東大寺及び彼の大佛を造り給ふ由を始めて天下に詔ひ出たるは天平十五年十月十五日の事にて其時の詔曰に。朕以薄德恭承大位志存兼濟勤撫人物雖率土之濱已霑仁恕而普天之下未浴法恩誠欲賴三寶之威靈乾坤相參修萬代之福業動植咸榮粤以天平十五年歲次癸未十月十五日發菩薩大願奉造盧舍那佛金銅像一軀盡國銅而鎔象削大山以構堂廣及法界爲朕知識遂使同蒙利益共致菩提云々と詔ひ行基法師に弟子等を率ゐて天下の衆庶を勸め誘ひ助成せしめ給ひ近江國信樂京にして此を創め同十六年十一月に甲賀寺にて像模を造り帝親その繩を引き十七年八月大和國添上郡奈良に移して改造らる是かの金鐘寺の處なり天平十九年より鑄始めて鑄改むること八度なりしとぞ斯て孝謙天皇の天平勝寶元年二月に行基死けり此年十月廿四日に大像鑄上げて同四年三月十四日までに金薄を押したる由なり。

殿の高さ十五丈六尺東西は二十九丈南北は十七丈。東西の兩塔各高さ二十三丈なりしとぞさて師說に盧舍那は梵語にて漢國にては光明遍照とも淨滿とも飜譯せりまた毘盧遮那は徧一切處と譯して此の二つ共になべての佛の上に云ふ言なり。然るに皇國にて古盧舍那と云しは件の義どもには非ずいかなる故にか只大なる佛像を云へりと聞えたり河内國の智識寺の盧舍那佛といふも大像と聞えて三代實錄十二に河内守菅野豊持を智識寺の佛像を修理する別當とせられし事見えたり大像に非ずは然る事有らじ抑大佛像をしも別て盧舍那と云へるは心得がたきことなりまた盧舍那と毘盧遮那とは別事と聞ゆるに。此の東大寺の大佛を文德實錄三代實錄などには大毘盧遮那佛とも毘盧舍那大佛とも記されたり是によりて思へば此の大佛は大日かと思へど當昔(そのかみ)未だ密教は渡り參來ざる御世なれば然には非ず或は釋迦也と云は然も有べし。然れども盧舍那といふは釋迦一佛の名には非ず。また釋迦の名として云へるにも非ずかにかくに大なる佛像の名として云へりとこそ聞ゆれど

言れしは然る說にて當時の人いまだ盧舍那毘盧遮那などの譯語にも委からず只大なる釋迦佛を云ふ語と俺(おろそか)に心得てかく云しなり天皇の御夢の託言に日輪毘盧遮那也とあるも日神はやがて釋迦佛ぞと云ふの意なり○好尙云本文の事ども東大寺要錄にも天平十七年八月廿三日天皇自信樂宮車駕廻平城宮於大倭國添上郡山金里更移彼事創同盧遮那佛像天皇以御袖入土持運加御座公主先人命婦采女文武官人等運土築堅御座云々又於古金鐘寺造東大寺幷蓮花藏世界盧舍那佛又造盧舍那佛像結跏趺坐高五丈二尺四寸完髮高三尺自髮際至頂七尺自眉上至髮際二尺九寸三分御眉間一尺一寸御目長三尺九寸御目間一尺六寸自目至眉八寸自鼻前至眉間四尺五寸人中長八寸五分御面徑九尺五寸御頂長一尺六寸御耳長八尺五寸御頸長二尺六寸五分御肩徑二丈八尺七寸一分御肩長五尺四寸五分御胸長一丈八尺御臂長一丈九尺肱至腕長一丈五尺御腹一丈五尺掌長一丈六尺中指長五尺中脛長二丈三尺八寸五分膝前徑三丈九尺足心長一丈二尺厚七尺と云ひ

また奉鑄用銅卅萬一千九百十一斤兩數鑄卅九萬一千卅八兩。白鑞一萬七百廿二斤一兩。八箇度所用合四十萬一千九百斤兩と云ひ。注に始天平十九年九月廿九日造勝寶元年十月二十四日合八箇度所用と有り。また塗練金四千百八十七兩一分四銖爲滅金二萬五千百卅四兩二分銖御座高一丈之中立花卅八枚葉七百十七枚反花二十八枚實二十六凡上座六丈八尺。上周二十一丈四尺中周十九丈五尺七寸基周十三丈九尺。一重白石高八尺下階合花上鐸同卅四丈七尺敷花下周三十九丈五尺など見えたり。なほ種々の事備に載せれど煩しければ洩しつ。

さて神社考に舊記云。南京東大寺中央臺遮那大佛者表天照大神之本地左面觀世音者天兒屋命右脇虚空藏者太玉命也とあり。能上件の趣に符へる傳なり。實に斯ぞ表し給ひけむ。

壒囊抄にも雜事記なる彼託言を記して此御納受新なる故に大神宮の本地盧舍那を本佛とし。相殿の御本地左は觀世音右は虚空藏を脇士として東大寺を立給へり。左は天兒屋命。右は天太玉命なりと有り。但し上に引たる書共に脇士の事の見えざるは記し漏せるならむ。

斯て右大像成りて開眼のこと御紀に。天平勝寶四年四月乙酉(九日なり)盧舍那大佛像成始開眼。是日行幸東大寺親率文武百官設齋大會其儀一同元日。五位以上者着禮服。六位以下者當色請僧一萬。既而雅樂寮及諸寺種々音樂並咸來集。復有王臣諸氏五節久米儛楯伏踏歌袍袴等歌儛東西發聲分庭而奏。所作奇偉不可勝記佛法東歸齋會之儀未嘗有如此之盛也と有り。

是より前天平勝寶元年四月朔日に天皇幸東大寺御盧舍那佛像前殿北面對像皇后太子並侍焉云と云ふ事の有に就て師の言に。此像は此時既に成訖たる趣なるに此後天平勝寶四年四月。盧舍那大佛像成始開眼是日行幸東大寺云々と有はいかゞ。彼は此の元年の時の事なるが記の紛たるには非ざるか。月も共に同じ四月也。元年に既に成れる趣なるに四年まで開眼無るべきに非ずと云れしは誤なり。彼の元年の行幸は陸奥國より始めて金の出たるに依りて佛に其事を宣ふとして未成畢

ざるに行幸有しなるをや。偖其時の宣命に始めを三寶乃奴止仕奉流天皇我云々と詔へるに依て師の論ひに。抑この天皇の殊に佛法を深く信じ尊み給ひし御事は申すも更なり中に此等の御言は天神の御子尊のかけても詔ふべき御言とは覺えず餘りに淺ましく悲くて讀奉るも甚ゆゝしく畏ければ。心あらむ人は此の始の八字をば目をふたぎて過すべくなむと言れたるは實然ことなり。凡て此御世には甚もゆゝしく悲しき事のみぞ多かる。

さて開眼の導師はいはゆる婆羅門僧菩薩提ぞ行ひける。

好尙云。此僧の事元亨釋書に。釋菩提南天竺國婆羅門種也遙聞支那五臺山文殊師利靈應發本國駕小舟入唐即登五臺山中逢一老翁問曰法師何之提曰山頂拜文殊

此處の便蒙に法苑珠林曰代州東南五臺山古爲神仙之宅山方三百里極崇峻有五臺上不生草木經中明文殊將五百仙人往清涼山即斯地也。地極嚴寒多雪號曰清涼山所以古來求道之士多遊此山中臺最高有二浮圖次之中有文殊像人有至者鐘聲香氣無日不有神像瑞像往々逢遇云云とあり。なほ此の山の事は上にも辨へたり。

翁曰文殊不在也見託生日本國語已翁不見提乃赴本朝天平八年七月行基法師奏曰當□□僧聖武帝詔禮部鴻臚雅樂三僚向難波津基率一百沙門共官僚於海濱調音樂莊儀仗待之須臾西海波面小舟泛々漸近有一梵僧基迎笑執提手共語如舊識始梵言基能應後和語提亦和甚歎密敕館大安寺東坊十月賜時服天平勝寶元年東大寺銅像成詔提爲開眼導師三年四月爲僧正時號婆羅門僧正天平寶字四年二月二十五日化と見えたり僧また佛道を崇敬し給ふ天皇の多かる中にも此の大御代は實に其道の眞盛りとも云べく殊に東大寺を建立し給ふに就ては奇怪き事どもの多く聞えたるを一ッ二ッ記さば元亨釋書に伏見翁者不知何許人或曰從竺土來翁臥和州平城菅原寺側岡三年不起又不言人呼爲啞者時々擧首見東方天平八年行基法師迎婆羅門僧菩提歸於菅原寺設供二人甚歡乃執箸爲拍板二比丘互舞于時翁俄起入口亦作舞面歌曰時哉時哉綠

熟哉三人相共舞如故舊蓋頃年作啞態者爲發此言也時々擡頭望東見東大寺營構也其臥所自從翁之居名臥見崗因而名翁焉と云ひ。また此等の傳を贊せる詞に。聖師之赴感也其所赴異而所以感者同矣吾謂菩提之求曼殊也未必在五臺佛哲之索寶珠也未必在南海昔吾聖武大帝睿明之感發也不然伏翁何以三歲不起不言一旦起舞唱時哉何乎好哉聖境一場之倡和我雖後出不得不擊節矣と記せる虎關が意は實に然も有べく思はれたり○偖また東大寺要錄にも寺家古今靈驗の事と載せる條に。凡當寺者三聖印可之所靈鑑揭焉之砌也是以供養之日中門之師子哮會庭大會之時變化之普賢失高坐加之神像放光照宸宮紫雲聳奎覆殿上黃金出地餝大佛甘泉涌石供觀音凡八幡感應諸神知識者乎彼守眞奏勅伏東夷貞盛冥感梟賊首貞觀供養降甘露永延祈雨感雷神致常至誠遁王難章遠繫志際時氣島九八堂補五位名祐仕佛生安養凡如此等種々靈驗不可勝計者歟と有をも思合すべし。

抑東大寺要錄と云書は全部拾卷有て撰者詳ならず。然れど其を建立し給ひし起原また都て其事に關係せる古文書また古老の舊見舊聞せる事は更なり其より後の世の事も種々の書より撮ひて備に集錄せる物なるが時代も古ければ誤寫錯亂なども多かりと通えて甚く讀がたし然は有れど他し古書どもに洩たる事實も許多有れば當時の事を辨へむには徵引せざる事能はず。斯て其序文にも大概を綴り載たれば今此處に抄出して視す事左の如し

原夫東大寺者平城宮御宇勝寶感神皇帝御願天下第一大伽藍也變婆娑於蓮花藏鑄舍那之大像移靈字於平城宮攄摩尼之寶殿施入水田一萬町以供養三寶割分食封五千烟而撫育衆僧昔阿輸伽大王之起八萬四千塔未鑄大佛於金銅之像縣達多長者之造四十九重殿無施戶邑於紫磨之尊印度支那未嘗見聞者矣於是帝菩薩爲誡後代邪惡之輩立誓願言若聖主賢卿承成我願恒將福慶永護國家若愚君拙臣改替我願旬起大禍永滅子孫者既是至賢之誓言也豈徒然哉自下夫神王放

光遙耀中殿行者唱禮遠驚天聽以降削彼大山而搆堂閣傾此國銅以鑄佛像是以十世界海盧舍那佛跏趺臺上而青蓮閣瞼千百億國釋迦文佛端座葉中而丹菓點脣左方觀自在菩薩妙相澹然號玉毫流彩右邊虛空藏高士芳儀宛爾號金姿舒光又復殿閣連甍樓臺交影金蓋玉鐸映日赫奕繡幡花縵隨風飄搖凡厥壯麗盡美綺績究妙矣迦維羅之大士遙渡蒼波而爲開眼之導師耶婆提之化人忽昇蓮座而爲供養之講匠其會莊嚴不可勝載聖皇稱讃舍那之德群臣舞蹈法堂之前非常寶樹薰栴檀之香未見珍花發摩尼之色時乃道俗雲如集仰梵釋之威肅尊卑星如羅沐仁皇之惠化信是祇洹精舍之盛集摩竭鷲峯之儀式也加之地藏菩薩施黃金於陸奥遠敷明神涌香水乎堂邊寺家衰弊示災變于普天伽藍興復呈豊稔于卒土金光明四天王護國之寺誠哉此稱矣凡嘉瑞頻現靈異甚多盛變之奇難得稱者歟矧乎聖教流布慧眼易開名匠相繼諮受不滯六宗達者作此伽藍三學行人萃此大寺可謂興隆佛法之仁祠矣作持遺敎之勝處焉然而年紀漸謝伽藍荒蕪星霜推遷流記紛失嗟乎哀哉佛法訛替聖跡將絶焉爰小僧日視伽藍耳聽耆談聊拾舊記粗勒寺要遂編集成十卷名東大寺要錄其有所不載幸見者補之于時嘉承元年孟秋存斯略記耳今開要錄略有十章とあるは則自序の全文なり偖嘉承元年は堀河天皇の御代しろしめす二十年にて丙戌の年なるが嘉永四年辛亥の年に至りて七百四十六年なれば最も古き書なりけりまた第四の卷なる諸院の章の發端に凡大伽藍爲寺之體華臺大像猶若金山栴檀大厦宛似須彌寶閣高搆裏起風雲飛樓特表接日月大虛寥廓讓其高廣山岳穹崇憚其在下寔是廣博殊特心言不及淨滿寶刹法界道場也不運普賢無盡之行自詣蓮華藏之寶殿不開文殊大智之悟而見盧舍那之境界擧目瞻仰恒沙罪障一念能消低頭恭敬微塵煩惱一時能滅見聞覺知皆入法界禮讃結緣盡出塵勞自非本願聖皇之力我等何預此大利益乎加以東看西看靈塔聳出疑多寶佛從地涌出南望北望法堂側立謬能仁仙乘空降生殿堂高閣煥爛圍遶諸院廚連綿相對椽梠榱梁彫鏤奇形戸窓垣墻圖畫衆彩寶池妙苑八節滋茂名華瑞草○四時開敷林樹蓊鬱不

別冬夏華葉光鮮難知春秋既爲勝地靈廟寔繁凡日域伽藍數乃千萬壯麗崇高此爲長也建立之古ハ諸院是新年代久遠頗以荒廢今所記錄且擧大略矣とも見えたり此は作者が潤色の詞少か無きにしもあらねど此御世の有趣斯こそ有けめと想像せらるゝ事ぞかし大廈の寥廓たるも其高く廣きを讓り山獄の穹崇たるも其の下に在るを慚と云るも誣事に非ず殊に其頃は日域の伽藍數すなはち千萬なれども壯麗崇高なる事此を最と爲すと云へるが如し信に聖武天皇の大御心にあらざるよりは斯有る大伽藍を建立する事能はずなほ右等の本書を始め鈴屋翁の歴朝詔詞解師の巫學談弊をも合せ見て知り辨ふべし。

○好尚又云此より下に記せるは謂ゆる增賀上人の論ひなるが師翁の舊く妖魅攷に加へむとて殊に委く記し措れたるを其儘出せるなり是まで評論の次敍の隨に多くの釋子等が事を云れたるに此增賀の事のみ漏たるは斯記されし物の有し故なりまた次の卷抔にも此の事載して能らむと覺ゆる所も無りければ突出の所爲なれど止事を得ず此處に揭げぬ然れば見む人東大寺の事に連續せざるを訝かること勿れ。

多武峯の增賀法師は師僧正の名聞を習はじと捨たるは殊勝なれど幼稚の時より早く魔緣深かりしかば我こそ名聞利養を捨たれと限なき憍慢放逸をぞ行へる其やかて魔事也然るは今昔物語に多武峯に增賀聖人と云人有けり俗姓は橘氏京の人也生れて久からぬに父母事の緣ありて坂東の方に下る馬の上に輿に似たる物を搆へて乳母に此兒を懷かせ居て將行く然るに乳母馬上に居ながら眠けるに兒は馬より轉び落けるを知らで十餘町を行く程に眼覺て見れば兒はなし落にけりと思ふに何處に落けりと云事を知らず驚き悲みて父母に告ぐ父母聲を擧て泣叫びて我子は道行く馬牛に蹈殺されぬらむ然れども死骸をも見むと云ひて泣々返りて求むるに十餘町を返りて狹き道の中に此兒何事もなく空に仰き笑ひて臥せり父母喜びて懷き取りて奇異なりと思ひて返り行ぬ其夜の夢に泥の上に嚴なる床あり微妙の色の衣を敷たり其上に此兒あり形端正なる童子の髮結たる四人有て此床の四角に立て誦して云く佛口所生子是故我守護と云ふぞと

見て夢覺たり。
此夢やがて釋魔の態なる事は灼きか此時始めてかくて誑かしたるか。信に其語の如く早く佛口より橘氏の室の胎に變沒せるか其は知べからねど是ぞ魔緣の始なりけるあなゆゝし。發心集に增賀上人は經平宰相の子なりと有り○好尙云三國傳記には一條院御宇に五條西洞院に恒正宰相と云人有けり。一子無き事を愁ひて心の中には佛にこそ祈られける。其注しにや端正の男子を一人儲たり。何なる宿習にか有けむ此子三歲と云時父の宰相病を受て幼き子を妻に預置き遂に薨し給ひけり。母兎角して此子を養育しけると有り。
其後は此兒只者に非ずと知りて傅き養ふ間に四歲になるに父母に向ひて。我比叡山に上りて學せむと云ひて亦云ふ事なし父母是を聞て驚き怪みて是鬼神の託して云しむる事かと疑ひ恐れける間の夢に。此兒を懷きて乳を飮せけるに急に勢長して三十歲許の僧と成て。手に經を捧げ傍に貴氣なる僧の在まして父母に告て云く。汝等驚き疑ふこと勿れ。此兒は宿因ありて聖人と成べき者なりと告ぐと見て夢覺ぬ。其よりぞ父母は聖人と成べき者なりと心得て喜ける。美々と釋魔の幻術に誑惑せられて喜べるこの父母こそいと淺間しくいと憐なりけれ○好尙云三國傳記には七歲に成時母に向て云く。吾宿報拙く幼くして父に別れぬ。角て長はてゝは何の甲斐か有む。如何ならむ貴き僧にも付き螢雪の勤を勵まし父の後世をも訪ひ母の菩提をも資せむと云て暇を乞ければ母泣々曰けるは。無人の事を思ひて悲きにも添奉りてこそ慰む便とも成べけれ若汝に生て別れなば我何でかは命も有はてむと惜みて免し給ざりければ若君思ひける樣は。今一旦の母の命を背かむことは不孝に似たれども學道般若の沙門と成て二親の菩提を助奉らば其眞實の孝養なるべし。佛も棄恩入無爲眞實報恩者と說せ給たるなればと思ひて。或曉忍びて家を出にけり。少き心なれば何くを指て行べしとも思ひ分ざりけれども。足に任せて行程に賀茂の河原へ迷出て北へ向て山路を分て入に。樵歌幽に聞えて牧笛聲稀也き。行前を人に問へば比叡山西坂也と答ふ步進みて登り行けば横川の慈惠僧正の御房へ行著たりとあり。僧また

幼き時より妖魅に見込れし者の事を少か云ば發心集に中頃壹岐前司親輔と云人取子をして稚くよりはぐゝみ養けり。此兒三と云ける年ずゝを持て遊ひとして更に異物にふけらず。父母是を愛して紫檀の珠數を取せたりければ阿彌陀佛を言くさに申居たり母聞て諫けれど猶此事を留めず六と云年重き病をうけて日頃經て後床に伏ながら手遊にせし念珠の傍に有けるを見て。我珠數の上に塵のゐにけると云て深く嘆たる氣色なり。是を聞人涙を落して哀みあへり即父母に合て身の穢らはしく覺ゆるに湯を浴ばやと云。病重き程なれば更に免さず。其後人に助られて西に向ひつゝ起居て音をあげで。開妙法華經。提婆達多品。淨心信敬。不生疑惑者。不墮地獄と云より若在佛前蓮華化生と云まで誦す。其聲殊に妙なり。幼き者なれば日頃人の敎ふる事无し。皆驚き哀ふ聲未だ止ぬ程に眼をうけて息絶にければ父母泣悲む事限なし。日頃經て後母晝うたゝねしたる時夢ともなく現ともなく此兒を見る。形殊に目出く淸らかにて有けり。母に向ひて我形をば能見るやと云母能見ると云。兒誦して即往南方。無垢世界。坐寶蓮花。成等正覺。此文を讀終りて即失にけりとぞ。此事は嘉承二年の頃也と見え。また古事談に解脫房者辨入道貞憲息也。母堂夢中ニ無上聖人來請ニ宿於腹中ニ。爰辨室云如ク此不淨之腹中爭カ可ニ令ニ宿給一乎。但誰とか申哉。重云依テ有ニ宿因一也。名をば貞慶と申也云々。又答云縁御坐ナバ不レ能ハ固辭スルコト承了云々。此夢之後懷姙所レ產之人也。六七才許童稚之時夢中ニ惡鬼出來テ爲レ成レ害兒不レ堪ニ怖畏ニ何共なき事を口に唱へけり。依レ之鬼神有ニ怖氣ニ退散畢。夢覺之後件ノ唱言を覺悟して僧に語るに十一面觀音の呪也。不思議事也と云ひ。酉陽雜俎續集に與元城固縣有ニ韋氏女ニ兩歲能語自然ニ識ニ字ヲ好ムニ讀ムコトヲ佛經ヲ至ニ五歲ニ一縣所レ有經悉讀遍至ニ八歲ニ忽淸晨薰レ衣靚粧默シテ存スニ牖下ニ父母訝ニ移レ時不レ出ヅ視レ之已蛻衣而失。竟不レ知ニ何之ヲ荊州處士許卑得ニ於韋氏鄰人張弘郢ニと有などは幼稚の時より微妙き妖魅の見入れたるにて怪むに足らず。なほ聖德法王の生れ給ひし趣良辨が鷲に抓まれたる事なども合せ考ふべし。

兒年十歲にして遂に比叡山に登り天台座主横川の慈

惠大僧正の弟子に成り。出家して名を增賀といふ法花經を受習ひ顯密の法文を學するに。智深して既に止事なき學生に成ぬれば師の座主も此を去難き者に思ひて過る間に學問の隙には必每日に法華經一部三時の懺悔をぞ斷ず現世の名聞利益を永く棄て偏に後世菩提の事のみ思ける間にかく止事なき學生なる聞え高く成て召仕はむと爲れ共强に辭して出ず我此山を去りて多武峯と云處に行て籠居て靜に行ひて後世を祈らむと思ひて。師の座主に暇を請ふに免されず傍の學生共も强に制止すれば思ひ歎く心に狂氣を翔ふ。

發心集に根本中堂に千夜參りて夜ごとに千返の禮をして道心を祈申けり。始は禮の度ごとに聊も音立ることも無りけるが。六七百夜になりては付給へ〳〵と忍やかに云ひて禮しければ。聞人此僧は何事を祈り天狗付給へと云かなど且は異しみ且は笑けり終り方に成て道心付給へと審に聞えける時にぞ哀なりなど云ける。斯しつゝ千夜滿て後然べきにや有けむ世を厭ふ心いとゞ深く成にければ。爭でか身を徒になさむとて次を待ちけるといひ。撰集抄にも千夜籠りて祈けれどもなほ實の心や付かねけむ。或時只一人伊勢太神宮に詣て祈請しけるに夢に見るやう。道心を發さむと思はゞ此身を身とな思ひそと示現を蒙りけり。打驚きて名利を捨よとの事にこそ。然らば捨よとて著たる小袖衣みな乞食どもに脫きくれて單なる物をだにも身にかけず赤裸にて下向しけり。見る人不思儀の思をなして物に狂ふにこそ。見目狀などの忌じきにうたてやなど云つゝ打かこみ見れども露心も動かず道々物を乞つゝ四日と云に山へ上り本住ける慈惠大師の室に入ければ。宰相公の物に狂ふとて見る人もあり。又かはゆしとて見ぬ人も有りけり。師匠の大師密に招入れて名利を捨給ふとは知侍りぬ。但し此までの振舞侍らじ只威儀を正して心の名利を放れ給へと諫めけれども。名利を永く捨畢なむ後は然にこそ侍べけれ。あな樂しの身やおう〳〵とて立走ければ大師も門の外に出て遙々見送りすずろに涙を流し給ふ。實もうたてしき物は名利の二なり。墨染の形に身をやつし。念珠を手にくるも詮は。只人に歸依せられて世を過むとの計或は極位極官を極めて公家の梵筵に列なり。三千の禪徒

にいつがれむと思ふも名利を放れず。法文の至理を辨たる人等の知ながら捨侍らで生死の海に漂ひ給ふぞかし。太神宮の御助に非ずは何にしてか此心も付侍べきやと有り。行基が妄說有りけるより太御神を佛の垂跡と思ひ奉りて祈請し。己が妄念の狂心より然る夢を見つるを大御神の示現と思へるなり。爭か大御神の人に乞食を勸め給はむ。然るを泣類の西行法師が太神宮の御助に非ずは何にしてかなど云へるは是も物狂ひに非ずや忝なくも大御神の御國に生なから武士を捨て乞食となり。「何事の御し坐すかは知らねども」と云へるばかり。物知らぬ法師のいかでかは大御神の御上をば知べき。

○好尙云三國傳記の上の文の續きに。僧正之を御覽ずるに七ッ八ッ計なる幼兒の其姿嚴しく有ければ自庭上に御出有て何なる人ぞと御尋有るに小兒の云く。我は京に恒正宰相と申者の子にて侍が。三歲にして父を葬し貧き母に生立られて候が。學問をもして父の後世をも資むと思ふ志し深くして母に陰れて迷出是まで參たる也と云ければ。僧正大に感し玉ひて然らば我を師とし給へ。汝を弟子とせむとて呼入て休息せしめ奉る。則學問有けるに利根聰敏にして一聞千悟せり。仍見學匠の聞へ三諸に陰れ無かりけり。其の後出家しては小將禪師とぞ申ける。然に母の行末思遣り何なる有樣にてか坐すらむと心苦しくて其裝束乘物尋常に用意して古京へぞ思ひ立れける。其儀式畏く相如が再び蜀の昇仙橋を渡しが如く。朱買臣が還會稽の故鄉に歸しに似たり。斯て五條西洞院なる所に行て見ば庭の面に草深く門外に人稀也人を入れて昔かゝりし者こそ參りぬれと云せければ。遙に其の返事もせず最も久く有て入べき由を云出たり。內に入て見に稿荒たる體哀にして心苦さ云計り無し。母上は障子を少し開て顏計を指出して居給へば景色を見に疲衰へて事の外に見えし人とも覺えざりければ。王質が山より歸りて七世の孫に逢る有樣も角やと哀に爲方なし。禪師は始め是を出しより今迄の事細々と泣々語り。母上は何にうれしがり悅び給はむと思けるに事の外なる氣色にて暫は物も曰はず。良有て曰樣は故宰相の佛神にも祈申して儲け奉りし事なれば。何にも養生長て朝にも仕

へてかゝりし人の末とも世に立奉むと思しか共空く成しかば。其の形見とも見奉むとて有しに。たばかり出させ給ひて行方も知り奉らず。加様に乏しき世の中に一人明し暮す心は何程とか思し召す。然らば同く髪を剃り衣を染る身と成らせ給はゞ道心をも發し。いみじき佛法者とも成らせ給たりと見は何計かはうれしからまし。其御有様を見奉れば名利の幢高く憍慢の色深し。左様にては何に訪せ給ふとも最も二親も炎とこそ成むずらめとて。本意無げに有ければ禪師は面目なさと云ふ量りなし去ながら適御入有とて酒肴體の物勸め給ひけり。配膳しける女房潸々と泣ければ禪師怪く思ひてなごかく泣るゝぞと云ければ。此女房申様御事の適入せ給ひたるを只歸し奉む事の歎かしく。母御前の一つ召したる御小袖の裏をときて酒に替。御ぐしの後を下して肴に成させ給ふ。吾は此の御事の糸惜さに常に參る此邊近く侍る者也。此事の哀さにそゞろに泣れ侍る也と云。禪師之を聞に胸塞りて酒も飲れず又參るべしとて歸りし也。即本山へ歸りて母の事を山王に籠りて祈られければ。母を

ば或忝卿相具して樂しく過きけりと有り。此は他し古書どもにも見えず。此書にのみ記し傳へたるが比枝の山にて修學中の事なり。慈惠僧正の既く名利を捨よと教訓有しが上に。また母親の名利の幢高く憍慢の色深しとて嚴に誡めたるを。彌堅く心に執して其を捨まく勞きける故に狂氣の如きまで翔へると聞えたり。僧母親のかくまで乏しきを見捨てゝ歸山したるも尋常の人の忍びがたき所なるを。然る事の少かも見えざるは謂ゆる釋魔の所爲なればなり。また此修學中の事にや有けむ。古事談に增賀上人爲レ書ニ寫止觀一美紙を被願けり。而書寫上人暗ニ知レ之被レ送レ紙之消息云。紙進レ之此にて止觀は可ニ令レ書給一云々。返事云如レ此入思事を暗ニ令レ知給哀候事也云々と見えたり。

其時に山内に僧供を引く處有。皆人下僧を遣りて此を受るに增賀みづから黑く穢たる折櫃を提持て彼僧供を引く處に行て此を受く。行事ら此を見て此人は止事なき學生にて自ら僧供を受るは奇異の事なりと云て。人をもて送らむと爲るに增賀已給はりなむと云て、受れば思ふ樣ぞ有らむ然らば奉れとて受しめ

つ。增賀受得て房には持行かず諸の夫共の行く道に夫共と並居て木の枝を折て箸として我も食ひ傍の夫共にも食しむれば。人々此を見て此は只には非ず物に狂ふ也けりと轉がりて穢かりけり。如此く常に翔ひければ傍の學生共も交らず師の座主にも此由を申けり。座主も然の如く成なむ者を今は何かは爲むと云ふを聞て。增賀思ひの如く叶ひぬと思ひて山を出て多武峯に行きて靜に法花經を誦し。上には魔障强しとて麓の里に房を造りて其にぞ住ける。

發心集に或時內論義と云ふ事有けり。定れる事にて論義すべき程の終ぬれば饗を庭に投捨れば諸の乞食方々に集りて爭ひ取りて食ふ習なるを。此宰相善師俄に大衆の中より走り出て此を取て食ふ。見る人此禪師は物に狂ふかと詈り騷ぐを聞て我は物に狂はず。然云るゝ大衆等こそ物に狂はるめれと云ひて更に驚かず。淺間しと云ひ合ふ程に此を次として籠居して後には大和國多武峰と云所に居て思ふはかり行ひて年を送りけると有り。其趣少か異なり。偖此法師のかく物狂ひを始めて身を遁れたるは。師の座主の名聞利養に三千の衆徒を從へ。貢高邪慢の事耳なるを見て師と共に魔道に連坐せむ事を恐れ思ふ心より。師に暇を請しかど許ざりしかば初はわざと物狂ひを始けるなり。其は此に至までの事實によく心をつけ。中にも師の座主の諫めて只威儀を正して心の名利を放れ給へと云し答に。名利を永く捨畢なむ後は然にこそと云しを讀味へて悟へし。然る志は殊勝なれど。我こそ名利を捨たれと云ふ慢心やかて魔緣なれば。更に其方に名聞立て稱譽に心樂みて赴入し放逸なりし事。是より後の事實を見て知べし。正法念處經に放逸過一切過中最爲勝上諸苦放逸爲根本と有をや發心集に出世の名聞は譬へば血を以て血を洗ふが如しと經にも說たり。本の血は洗はれて落もやすらむ。今の血は大に汚す愚なるに非ずやと言へるは實に然る言なり。

また心を至して三七日の間三時に懺法を行ふに。夢に南岳天台の二大師來りて告云く。善哉佛子善根を修せりと見けり。其後は彌々行ひ怠る事なし。

南岳とは南嶽衡山の慧思禪師を云ひ天台とは□□□□□□□□□□□□□□□共に其の住處を以て呼ふ

由也。此二僧早く釋魔と成て在からにかく見えたる也○好尙云元亨釋書に天曆二年八月夢至二一所一山川明媚阿練若僧徒在焉。西南隅有二坦地一。見二一老翁一首戴二靑冠一身被二赤裟一。左手持レ經右手携レ杖。天童神女左右圍繞。賀問誰乎。對曰毗耶離城居士也。住二此千餘歲。止二此地一者多得二佛智一汝盍レ居乎。覺後不レ知二何許一。應和三年如覺法師勸上二談峯一山川風物宛如二昔夢一因レ是居焉。四序各修二三七日一懺一夢南嶽天台諸祖師摩項曰。善哉佛子能勤修行釋迦普賢加護攝受常有二異人一晤語。言涉二朝野一以レ故雖二山中一諳二悉京畿之事一州人多來訪問賀能應不レ舛と見えたり。此傳へに據れば夢の悟しに似たるを以て多武峯には住ける由なり。

而る間に貴き聖人なりと云こと世に高く聞えて冷泉院請して御僧とせむと爲るに召に隨ひて參りては樣樣の物狂しき事共を申て逃去にけり。如此く事にふれて狂ふ事のみ有けれども其に付て貴き覺えは彌々增りけり。三條大后宮出家せむと思して增賀聖人をもて御髮を挾まむと仰られて召に遣たれば。御使多武峯に行て此仰を告るに聖人いと貴き事なり。增賀こそ尼に成奉らめ他人は誰か成奉らむと云へば。弟子ども此を聞て此御使を嗔りて打むとや爲らむと思へるに。思の外にかく和に參らむと云ふは希有の事也とぞ云ける。

好尙云三條大后宮とは大鏡裏書に。東三條院詮子圓融院女御。一條院母儀東三條入道攝政太政大臣女。母贈正位藤原時姬。攝津守中正朝臣女。天元元年八月十七日入內。同十一月四日爲二女御一寬和二年三月廿六日敍二正三位一同七月五日爲二皇太后宮一年廿六。正曆二年九月十六日出家年卅一。同日院號年號年爵封戶如レ元長保三年閏十二月廿二日崩年四十一と有る御方なりと聞えたり但し釋書便蒙にもしか云へり。又今昔物語に此宮は時の關白の御娘圓融天皇の御時后に立て徽妙かりけるに。皇子をも女宮をも產給はざりければ世に口惜き事になむ父の關白殿も親き人々も思たりけると有り。さて關白とは兼家公を云へり。

斯て三條宮に參りて參れる由を申さしむ。宮喜ばせ給ひて今日吉なりとて御出家あり。上達部また然べき僧など多く參り合たり。內よりも御使有り聖人を

見れば目は怖し氣にて貴けながら煩はし氣にぞ有ける。さて御前に召出られて御几帳の本に參りて出家の作法して珍たく長き御髮をかき出して此聖人に挾ませらる。御簾中の女房たち見て泣こと限なし挾み畢て出むとする時聲を高くして云やう増賀をしも強に召すは何事ぞ更に心得られ候はず。もし穢き物を大なりと聞食したるか現に人のよりは大きに侍しかども今は練絹の樣に亂々と成たる物を。いと口惜しと云ふ聲極めて高し。簾の內近く侍ふ女房たち外には公卿殿上人僧たち此を聞て淺間しく目口はだかりて覺ゆる事限なし。宮の御心は更なり。貴さも皆失せて各々身より汗あえて我にも非ぬ心地して居たり聖人罷出なむとて大夫の前に袖かき合せて云く年罷老て風重くて今はたゞ利病のみ仕れは。參まじく候つるを態と召つれは相構へて參り候つるなり。堪難く候へば急ぎ罷出候なりとて出るに。西對の南の放出の簀子に築居て尻をかゝげて樋の口より水を出す如く腑散す。音高く臭きこと限なし。御前まで聞ゆ。若殿上人侍などは此を見て咲ひ嘷ること夥し。聖人出ぬれば僧等はかゝる物狂ひを召たる極めて謗り申し

けれども甲斐なくて止にけり。三條宮に參りて放逸せる事はもと別條にて十九の卷に出たるを。此は宇治拾遺物語にも見たれは彼物語をも合せ見て舉たり。偕この放逸なる振舞はやがて名聞利養を捨たりと云名聞の憍慢にて釋魔のかく狂はするにぞ有ける。なほ發心集に又佛供養せむと云ふ人の許へ行く間に說法すべき樣など道すがら案ずとて。名利を思ふにこそ魔緣便を得てげりとて行つくや遲き。そこはかとなき事を咎めて施主といさかひて供養をも遂ずして歸りぬ。また師僧正悅申ける時せむくうの數に入りて干鮭といふ物を太刀にはきて骨限なる女牛の淺猿げなるに乘りて我こそやかた口仕らむとて面白く折廻りければ見物の異しみ驚かぬは無りけり。斯て名聞こそ苦しかりけれ乞食のみぞ樂かりと謠ひて打離れにける。師の僧正も凡人ならねば彼の我こそやかた口うためと云音の僧正の耳には悲きかな我師は惡道に入なむと聞えければ。車の內にて此も利生の爲なりとなむ答られけると有り此を案ふに良源僧正は増賀法師の我が名利貢高の有狀を魔

道のしわざと後めたく思ふ事も。實に我が有狀の佛道の本意ならぬ由は裡の心に有ける故に。彼語を聞誤りて此答は有しなるべし。

此聖人八十に餘りて命終らむとする時龍門寺の春久聖人と云は娚也ければ。來て副居けるに旣に入滅の日に成て棊枰を取よせ搔起されて龍門の聖人に棊一打たむと云へば物に狂ふわざ哉と悲しく思へども枰の上に石十ばかり互におく程に吉々と云て押壞りつ。龍門の聖人何に依て棊をば打給ぞと恐々問へば。小法師なりし時棊を人の打しを見しが。人に諫られて打さりしかば今思て出て打つるなりと答ふ。また泥障一懸求めて來れとて持來つれば搔起されて其を結びて我が頭に懸よと云へば懸たるに。糸苦し氣なるを念じて左右の肘を指伸て古泥障を纏ひてぞ舞ふと云て二三度計して取去しめつ。龍門聖人此は何しに給ぞと恐々問へば若かりし時隣の房の小法師原の泥障を纏ひてぞ舞ふと歌ひて舞しを好ましと思ながら窒しく止しが心に懸りたれば。若生死の執となる事も有ると思ひてこそと云けり。さて人を皆のけて室の內に入り。繩床に居て口に法花經を誦し。手に金剛合掌印を結びて西向に居ながら旣に聖衆の迎を見て悅びて歌を詠む「美都波さす八十餘の老の浪海月の骨にあふぞ嬉しきと讀みて終りけりと有り。

龍門寺の聖人が傳詳ならず。偖此法師の死ぬる時の件は發心集を校合せて其目易きに從ひて記せり。

○好尙云元亨釋書に長保五年六月九日集徒曰。西方佳期今其不遠即設講筵談論深旨又令弟子念佛自入靜室座繩牀誦法花結金剛印而滅年八十七。臨終語徒曰吾沒不須闍毗只要窆埋過三年開壙見之弟子依顧命作大桶輿殯寺後後三年十一月春秀等啓壙全身不壞趺坐儼如也但衣已朽弊秀等禮拜讚嘆と云り。死後の事は何に據りて記せるか予未其の本書を見ず。また便蒙に寬和二年撰玄義鈔學者珍玩焉嘗修不動法惡鬼來現三面八臂甚可怖畏賀乃作不動尊本尊亦現大身威焰共熾惡鬼卽隱本尊及賀共復本形と云へる事も見ゆ。是亦出所を知らず。

さて此の法師の放逸にして物に狂へるが憍慢の魔緣なることは言まくも更なるが。死期に至りて宿執を恐れ棊を打ち胡蝶を舞たるを見て。往生して往先の

不決定に覺束なく思へりし事を悟るべし其は學匠智識と世に稱るゝ程の僧は增賀に限らず。昔即心即佛即身即淨土の理を知り。淨土外になし。身を捨て何處にか求めむと云理を辨へ。元よりなき淨土を自造りて行むとする道なる事は辨へ居る故に。宿執ありては淨土を自造せむこと覺束なき故にかゝる恐は有也けり。さて其自造せりと思ふ淨土はやがて魔界なる事は上に委しく辨へたるが如し。

古今妖魅考七之卷

平篤胤輯考
門人　武藏國　碧川好尙
同國　下總國　野口吾春　校

○好尙云貴僧高僧聖人など稱はれし釋子等が釋魔の境界に陷りて天狗妖魅と爲り。或は種々の物とも轉生し又其境界に陷り果ざるも。變幻地獄に趣きたる者どもの多かりし事既に載されたるが如くなれば今更に論はず。其が中に申すも可畏けれど羅山先生の神社考天狗論の中に。歷代天子之中。讃岐院爲金色大鳶。長一丈餘。後鳥羽院爲靑髮長翼之沙門。後醍醐院爲高鼻勾爪之王。乘五龍車。其餘猶多と云れたる如く崩りまし〳〵て後は謂ゆる釋魔の境界に歸せ給ひ。彼三熱の酷苦は更なり其餘都ての御形狀も貴僧聖人など稱はれし釋子等が魔道に墮たると大概同しきが中に。大魔王と成らせ給ひ其部屬の徒を率ひ。種々の事ども掟したまふ趣顯世に天皇と御座して世を治めし。臣等の其御法に隨從して尊び敬ひ奉る事は天狗界

も現世に專替るまじく所思ゆ。此は當時の書籍ごもに委く載せる如く。大御心を佛の道に傾けさせ給ひし非事にて釋魔の微妙き靈驗なりかし。今其事蹟を諸書に攷正して具に述られたること左の如し。

保元物語に新院讃岐へ御遷幸有りければ。御所は國司の沙汰として當國四度の直島といふ所に造り。陸地より押渡ること二町ばかり田畠も無ければ住人も少し。實に氣踈き所なり。方一町に築地をつき中に屋一つ門一つをたて。外より鎖をさし。供御進らする外は人の出入有べからず仰出さるゝ事あらば目代奉りて奏すべしと仰下さる。

發心集に崇德院讃岐にうつろはせ給ひける後旅の御住居哀にかたじけなき事云盡すべからず。國の兵ども朝夕御所を打かこみて輙く人も參り通はぬ由聞ゆれば。彼蓮如と云すき聖もとより情深き心にて最かなしく覺へけれど。人遣事も無りけり。只妹なる人の候けるゆかりに御あたりの事をも聞き。又昔陪從にて公事勤ける時御神樂拆の次に希に見參に入ばかりなれば。さしも深く歎くべきにしもあらねど。態と只一人身づから笈掛て讃岐へ下けり。行著て見れば御所の有樣目もあてられず。傳へ聞つるよりも恠なり然れどせちに內へ入むと思ふ志深くてさるべきひまや有と終日に窺ひけれど。守り奉る者最はしたなく咎めて人かくるべくも非ず空しく日も暮にければ月の明かりけるに。笛を吹てなむ御所を廻りありきける。如何さまにせむと思ふ程にやゝ曉に及て黑ばみたる水干ばかり打かけたる人內より出たり。いと嬉くて此便に御所の中に入て見れば草茂り露深くて殊更人の音もせずいみじう物悲しきに。とばかり立煩ひて板の端に書て見參に入よとて在つる人になむ取らせける「朝倉や木の丸殿に入ながら君に知られで歸る悲しさ。」此おのこ程もなく歸來て是を奉れと侍と云を取て月の影に見ば「朝倉や只いたつらに歸すにも釣する蜑の音をのみぞ泣」とぞ書れたりける。いとかしこく覺へて是を笈の中に入つゝ泣々歸り上りにけりと有り。但し蓮如とは紀伊守則通といふ北面の出家してしか稱せる由なり。

然らぬたに習はぬ鄙の御住居は悲しきに。我が御身

の御事は思召し伸る方も有けるに女房達は何の省にも及はず明暮たゞ都をのみ戀悲み給ふ事斜ならず。此有様を御覽ずるに萬御心弱くなりて相構へて申宥らるべき由。關白殿へ度々仰事有けれども。御返事も無ればロ惜き事と思召し。

異本共に以上の文なし下の文にもいさゝか異同あり。本書を見るべし。

我天照大神の苗裔を受て天子の位を踐み。太上天皇の尊號を蒙りて久しく仙洞の樂みに誇り。既に三十八年を送れり。過にし方を思へば昨日の夢の如し。如何なる前世の宿業にか懸る歎に沈むらむ。縱鳥の頭白く成とも歸京の期を知らず定めて亡鄕の鬼とぞ成むずらむ。奈良の先帝世を亂し給ひしかども出家せられしかば流罪には及ばざりき。況是は攻らるゝと聞しかば防ぎし計なり。是程に罪深かるべしとは覺へず。

奈良の先帝と云より以下の文異本どもに平城先帝世を亂り給ひしか共。出家し給ひしかば遠流までは無りし。況や當帝をば我在位の時いとをしみ育み進らせし物を。昔の恩をも忘れ辛き罪に行はる心うしなどぞ思召けるとあり。〇好尙云平城天皇のことは水鏡に。弘仁元年正月に太上天皇奈良の都に遷り住給ふ。中納言種繼の娘に內侍のかみと申し人を思召しき。其のせうとの右兵衞督仲成心落ゐずして妹の威を借りて。樣々の横さまの事をのみせしかども世の人憚りを爲してとかく謂ざりき。內侍のかみも心ざま靜まり給はざりし人にて。太上天皇に事にふれて位を去給ひにし事のロ惜きよしをのみ申しきかせしかば。悔しく思す心漸々出來給ひし程に。九月に內侍のかみ太上天皇を勸め奉りて位に復り卽て。我后に立むと云事出來て世の中靜ならずさゝめきあへりし程に。帝內侍のかみの官位を取り給ひ。仲成を土佐國へ流し遣はすよし宣旨を下させ給ひしに。太上天皇大きに怒り給ひて十月丁未畿內の兵を召集め給ひしかば。帝關を堅めしめ給ひて。田村丸の中納言の大將と申しを俄に大納言に成し給てき。事既に發りにしかば豫て將軍の心を勇ませ給ひしにこそ。諸十〔月カ〕一日に太上天皇軍を起して內侍のかみと一つ御輿に奉りて東國の方へ向ひ給ひしに。大外記上ツ毛

頼人奈良より馳參りて太上天皇既に諸國の軍を召集めて東國へ入り給ひぬと帝に申しかば。大納言田村麿宰相綿麿を遣して其道を遮りて仲成を射殺してき。太上天皇すぢ无くて歸り給ひて御髮おろして入道し給ひてき。御年三十七なり内侍のかみ自命を失ひてき。恐ろしかりし人の心也と有り。可畏けれど今按ふに崇德天皇の斯く思召し採らせ給ひし事實に然も有べき事なりかし。しかし頼長公の呪詛せられしに據りて近衞天皇は崩御ましましたる由なれば竊に崇德天皇の命を受られて呪詛せられしには疑有まじく其事師翁の説に頼長公の自記せられし台記に親隆朝臣來語曰。法皇惡二禪閤及殿下一者。先帝崩後人寄二帝巫口一曰。先年爲レ詛レ朕打二釘於愛宕護山天公像目一。故朕目不レ明遂以早世。法皇聞二召其事一使三人見二件像一既有二其釘一。召二件僧一問レ之申云左大臣所爲。法皇惡レ之云々。余雖レ知二愛宕護山天公飛行一未レ知三愛宕山有二天公像一。何況祈請乎とあり。

法皇とは鳥羽天皇を申し。禪閤とは頼長公の父忠實公を申し。殿下とは頼長公をさして云へり。先帝とは近衞院天皇を申す鳥羽天皇の皇子なり。御目を煩ひて崩御の事諸書に見えたり。但し此本文は此に要となき文を略きて引たり。委くは本書を見るべし。

自記にはかく不知氣に記し有れど誠には呪詛せられしなり。其は古事談に宇治左府の近衞院を呪咀し奉るとき。神祇の官幣に預さるや御坐すと尋て愛太子竹明神四所を尋出して呪咀し奉れるに依て天皇崩し給へり。然して左府は幾程を經ずして天矢に中りて薨し畢ぬと云ひ。

但し愛太子竹明神に祈れると有れど此山の神は元より官幣に預り給ふ神なれば直に此神に祈れるには非じ。台記と合せ考ふるに愛太子山は元より天狗の住所と聞ゆれば。殊に天狗の像を造りて祈られけむを古事談に誤りてかく傳へしにや有らむ。天矢に中るとは保元物語に左大臣殿北白河を指て落させ給ふ所に。いづくよりか射たりけむ流れ矢一筋來つて左大臣殿の御首の骨に立。矢めを見れば御喉の下より左の御耳の上へぞ通りける。逆さまに矢の立けるこそふしぎなれ。神矢なるかとぞ

覺えしと有を云へり。

保元物語に左府東三條に或僧を籠て内裡を呪詛し奉らるゝ由聞えしかば。源義朝に仰せて其僧を捕へしめて僉議有けるに。左府より其僧に呪詛の事を命せられし書狀出たるに依て顯然なりしが其行へる法は烏瑟沙摩明王の法。金剛童子の法聖天供にて有しと見たれば呪詛し奉られし事疑なし。委くは保元物語を披見て知べしと云れたるを思ふべし。

斯程の有樣にては命生ても何の益か有むとて御髮をも召さず御爪を截ず。柿の頭巾柿の御衣を召し。御指より血をあやして五部の大乘經をぞ遊ばしける。五部の大乘經を遊ばしたる事。異本共には後世菩提の爲とて御指の先より血をあやし。三年が間に五部の大乘經を御自筆に遊ばしたりけるを。遠島に置む事痛ましければ鳥羽八幡邊に納むべき由御室の御所へ申させ給ふ其狀に曰く。朕故宮を離れて思を他鄕の雲路に送る。昔は槐門宗廟の窓にして玉體遊宴の心を休め。今は蒼海萬里の浪を凌ぎて江南哀傷の聲を加ふ。然るに嵐樹頭を拂ひて獨遊に曉の月を觀じ雨桐葉に灑ぎて廢庭に夕の露を悲しむ。適々旅愁の白日に伴ひて悲泣の憂を殘す。爭か舊都に歸りて再玉聖の氣を成さむ。月西山に傾けば都城雲上の詠を思ひ出。日晨岳に出れば龍樓竹苑の興を忘れず。早く民烟茅屋の悲淚をやめて必三佛菩提の月を翫ばんと遊ばして奥に一首の御製あり。「濱千鳥跡は都に通へども身は松山に音をのみぞ鳴。」御室法親王御淚を流させ給ひて。關白殿と樣々に執申させ給しかども。信西御身は配所に留給ひ御手跡ばかり都へ返し入給はむ事忌々しく覺え候。其上如何なる御願にてか候らむ覺束なしと申ければ。主上御許され無りける間力及ばず彼御經を返し遣され。御咎重くして御手跡も都近く置れずと御返事有ければ。新院是を聞召し口惜き事ござむなれ。我朝にも限らず位を爭ひ國を望みて兄弟軍を起すためし有事なれども。時移り事去て罪を謝し咎を宥らるゝは王道の悳なり。況や出家入道して菩提の爲に佛經を誦讀するをば皆許されてこそ有けれ。後世の爲にとて書たる經の敷地をだに惜まるゝ事さては後世迄の敵ござむな

れ。然らむに於ては我生ても無益なりとて其後は御髪をも召さず御爪をも生させ給ひて。生ながら大天狗の姿に成らせ給ふぞ淺ましきと有り。本文に記せると異なり孰か是なることを知らず。○好倘云。五部の大乘經とは太平記鈔と云書に一には舊譯華嚴經六十卷。二には方等大集經三十卷。是に日藏經十卷月藏經十卷合て五十卷。三には大品般若經三十卷。四には法華經開結二經合て十卷或は除二一經一○五には涅槃經四十卷なりとあり。此事都に聞えしかば御有樣見て參れとて。平左工衞門尉康頼を下し遣さる。康頼島に渡り御使として參たる由奏しければ近く參れと仰らる。康頼障子をあけて見奉れば御髪御爪長々として。煤け返りたる柿の御衣に御色も黄ばみ御目もくぼみ瘦衰へ給ひて。荒氣なき御聲にて我違敕の譴遁れ難くして既にたいざいの法に伏す。然と雖ども今に於ては恩赦を蒙るべき由申すと云へども敢て御許容なき間。志の忍難き餘りに不慮の行を企るなりと仰事あり。御氣色身毛も竪ち物冷まし有ければ康頼一言をも申さず急ぎ退出してげり。

源平盛衰記平家物語などに平判官康頼とて清盛入道に鬼界が島へ流され後に赦免せられて京に歸り寶物集を著せる人すなはち是也さて此より以下は諸本互に詳略あれば文を合せて記せり。

新院已に御寫經事終しかば御前に積置て御祈誓有けるは我深き罪に行はれて愁欝淺からず。速に此の功力を以て彼の怨を酬はむと思ふ。此の經を魔道に抛うち日本國の大惡魔と成り。王を取りて民となし民を王と成して遺恨を散ぜむと誓はせ給ひ。御舌の先を嚙切り其血を以て御經の奥にこの御誓狀を遊ばして。冀くは天衆地類合力し給へやとて千尋の海底に沈め給ふ。

參考本の説に吉記壽永二年七月十六日の條に。崇德院於二讚岐一御自筆以レ血令レ書二五部大乘經一給。件經奥非二理世後世料一可レ滅二亡天下一之趣被二註置一件經傳在二元性法印許一云々と有り。此説に據ときは經を海に沈むると云事は未必しも信せずと云へる實に然る説なり。さて吉記に元性法印とあるは崇德院第二の皇子に御坐すなり。

斯て長寬二年八月二十六日御歲四十六にて隱させ給

へるを。白峯と云所にて烟になし奉るに其烟は都をさし靡きけり。此君怨念に依て生ながら天狗の姿に成らせ給けるが。其故にや程もなく平治元年の亂出來て。後白河院は信頼が爲に仁和寺に押込られ給ひ。保元の軍に新院の御方を破り奉れる大將義朝は討れて梟首せられ。彼信西も切られたりき。此亂は新院いまだ御在世の間に目のあたり御怨念の致す處と人申けり。

　以上の文は本書の大意を取り甚く約めて記せるなり。

仁安三年冬のころ西行法師諸國修行の次に白峯の御墓所へ參にけり。御墓堂と覺しくて僅なる方形の構結たりけれども造畢りて修造も無れば傾き破れて蘿や葛などぞ這懸れる。事問參る人も無れば路蹈分る方もなく。葎や荆垣をなし淺茅より經を閉たり。西行つく〴〵と見進らせ昔の御事思ひ出し奉りて角ぞ詠侍りける。「よしや君昔の玉の床とても斯らむ後は何にかはせむ。」箇樣に申たりければ御墓三度まで震動す。

　かつて彼國の事委く知たる人に尋ぬるに。御墓所今も折々震動する事あり。昔は其響都まで聞えたりしと土人の語り傳ふる由なり。〇好尙云沙石集に西行法師國々修行しけるに讃岐の院の御廟に參て。昔し十善の餘薰によりて。萬機の政を收め四海の帝王として九重の臺に崇られて御座しに。かかる松山の苔の下に埋もれ給へる事。無常轉變の理りを知と云ども。夢の心地して哀に覺えけるまに「よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ。」苔の下に幽なる御音にて詠じ給ひける「濱千鳥跡は都に通へども。身は松山に音をのみぞ鳴。」是等の歌は尋常に人每に口に付たれども。靜に詠ずる時萬緣悉く忘れ一心漸く靜なる者にやと有るは少か本文と異なれば記し出たり。なほ此事は撰集抄古事談其餘の書どもにも多く見えたり。偖また古今著聞集に崇德院御位の時保延六年の秋の比。御夢に白河僧正增知參りたるよし申ければ暫く候へとて御對面有けるに。僧正柿のすり水干を着て久しく見參に入らざる由を奏し侍りけり。御夢覺させ給ひて後御心例ならず御座して時々朗詠讀經などせさせ給ひけり。或時は御手水

めして西に向はせ給ひて生身の成佛など仰せられけり。或時は又故僧正堉智なり抔と名乘らせ給けりふしぎなりける事なり。去ながら後々はべちの御事も无りけるにやと有は由有げなる事なり。

治承元年七月二十九日追號有て崇德院とぞ申ける。宇治左大臣賴長公に太政大臣正一位をぞ贈られける。其後人の夢に讃岐院を輿に乘奉り。爲義判官父子六人相具して先陣仕り。平馬助忠正父子五人家弘父子四人後陣にて淸盛が西八條の館へ御幸なしぬとぞ見たりげる。

盛衰記に新院讃岐に遷され御座し。思死に隱させ給しかば旁の怨靈の故にや打續き世中靜ならず。是に依て神と祝奉り崇德院と御追號有けれども。怨靈なを靜まり給ざりけるにや平中納言敎盛卿の夢に見けるは。保元に討れし平馬助忠正六條判官爲義大將軍と覺しくて數百騎の勢ども有ける中に或は柿衣に不動袈裟係たり。或は鵠甲に鎧著たり。或は首丁頭巾に腹卷着たり抔して讃岐院を張輿に乘奉り。本幡山の峠に昇すゑ奉りて都に入奉るべき由評定しけり。新院の御貌を見奉れば足手の御爪長々として御髮は空樣に生て銀の針を立たるが如し。御眼は鵄の目に似させ給へり。此は柿の衣をぞ召たりける。爲義申けるは君をば何所へ入進すべきやと申せば。種々評定しけるに新院御有けるは。太政入道の宿所へ入進せよと仰ければ。然らば昇進せよやとて數百騎の者ども手々に捧奉りて入道の宿所西八條へ入進するとぞ見たりける。敎盛卿は夢覺て此由を內々申給けれども入道はさる片顔なしの人にて更に用給はざりける。實も怨靈のよく入替給たりけるにや。現心もなく物狂はしくして天下を亂り臣下を惱ます云々と有り。保元物語盛衰記ともに。忠正が言に新院を法皇の御所法住寺殿へ入進せむと云けるに。爲義申けるは院の御所は不動明王大威德明王など門々を守護せれば入難しと申せば。然らば淸盛が許へとて入進らせたりと有れど。此は撰者たちの附會と聞ゆれば採らず然るは不動といひ大威德といふは共に有名無實の物にて其靈驗ありと聞ゆるは。遊魂妖鬼の態なるを新院の御靈また此勇士たちの靈の。いかで然る少鬼に塞られて入得ざる事の有べき戲散し

ても通り給ふべき物をや。然れば此説は撰者の附會なること炳焉し。

其後清盛次第に過分になり太政大臣に至り。子息所從に至まで肩を雙ぶる人ぞなき。入道して後にも奢れる餘りに物狂しく成て朝家を恨奉り。太上天皇を鳥羽の離宮に押籠奉り。太政大臣以下四十三人の官職を止め。關白を太宰權帥に遷し參らす。是直事に非ず崇德院の御祟とぞ申ける。其後讃岐院方々へ御幸成ぬと見ては絶入し。爰に御幸なりぬと見ては蹴殺され進らせけり。是讃岐院の御靈なりとて宥進らせむ爲に。元曆元年四月十五日に昔御合戰有し大炊御門が末の御所の跡に社を造りて崇德院と祝ひ奉り宇治左大臣をも神に崇られける。

以上は參考本を合せ見て記せり。吉記壽永三年四月條に。十五日今日崇德院宇治左大臣爲レ崇レ靈神一建レ社有二遷宮一。以二春日河原一爲二其所一。保元合戰之時彼御所跡也。當時爲二上西門院御領一。今被二申請一被レ建レ之云々と見ゆ。壽永三年は元曆元年なり。また百練抄にも元曆元年四月十五日崇德院並宇治左府遷宮也。件の事公家不二知食一。院中沙汰也とあり。然れば後白河法皇の彼御靈を畏ませ給ひて。物し給へる也けり然も有べき事にこそ。○好倘云愚管抄に。安元三年七月廿九日に。讃岐院に崇德院と云名をば宣下せられけり。かやうの事ども丶怨靈を恐れたりけり。やがて賴長左府に贈正一位太政大臣のよし宣下など有けり。また此年京中大燒亡にて其火大極殿に飛付て燒にけり。是によりて改元治承と有けり。又壽永三年四月十六日に崇德院並ニ宇治贈太政大臣の寶殿作りて。社壇春日河原保元戰場にしめられて範季朝臣奉行して靈地出來たり。又預になされたる神祇權大副卜部兼友夢想ありなんど聞えき。此事は木曾が法住寺軍の事ひとへに天狗の所爲なりと人思へり。いかにも此新院の怨靈ぞなど云事にてたちまちに事出來たり。新院の御思ひ人の烏丸どのとて在しいまだ生たりければ。それも御影堂とて綾小路河原なる家に作りてしるしども有とて。やうやうの沙汰ども有きと有るをも思ひ合せて辨ふべし。

然れども御憤なほも止給ざりしと聞えて世中亂れに亂れて後白河法皇世に御坐せる限。信賴義朝誅に伏

すれば平家憍りて惱め奉り。平家退けば義仲義經等の爲に宸襟を煩はし給ひ。義仲義經退けば鎌倉將軍の爲に惱されなど。武臣の爲に惱され給ひし事當時の記録に見たるが如し。新院の誓はせ給へる御言に王を取て民となし。民を王と成して遺恨を散せむと詔へるに思ひ合すれば。新院の幽より仇を成給へると空に知られて甚も畏き事なりかし。

此に就て愚管抄に昔より怨靈といふ物の世を失ひ人を亡ぼす道理の一つ侍る。百川宰相は光仁桓武をば立おほせ參らせたれど餘りに沙汰し過して。井上内親王を穴をゑりて獄を作りて籠參らせ抔せしかば。現身に龍になりて遂に蹴殺させ給ふと云めり。後白河院一代明暮事にあはせ給ふ事などは。新に此怨靈も何も道理を得るかたの報ふる事にて侍るなり。一通りは易々とある事の一大事には成なり。讚岐より呼返し參らせて京に置奉りて國一など參らせて御作善候べし抔とて。歌打詠ませ參らせて有ましかば斯ほどの事有まじ。怨靈と云は詮はたゞ現世ながら深く意趣を結びて仇にとりて。小家より天下にも及びて其敵をほり（本ノマヽ）亡ばかさむと爲て。讒言そら言を作り出すにて世の亂れ又人の損ずる事は。只同じ事なり。顯にその報ひを果さねば冥になる許なりと云へるは前に古人なき説にて實に然る言なり。此に就てなほ己か思ひ得つる説ども有れど容易くは云ひ出がたき説なれば此に漏しつ。○元亨建武の亂までも崇德院の御靈の御心なりし事雲景が未來記を見て知るべし。

さて此後に崇德院の御靈の祟りの所爲なりし事は太平記に。延文三年の春筑紫の菊池肥前守武光を討むとて將軍方より細川式部大輔繁氏を伊豫守になして九國の大將にぞ下されける。此人まづ讚岐國へ下り兵船を揃へ軍勢を聚むる程に六月二日俄に病付て物狂に成にけるが。自ら走りて我崇德院の御領を落して軍勢の兵粮所に充行ひしに因て重病を受たり。冷しき風に向へども盛なる炎の如く。凍なる水を飲めども沸返る湯の如し。あら熱や堪がたや是助けて呉よと悲叫びて悶絶僻地しければ。醫師陰陽師の看病の者ども近付むと爲るに。あたり四五間の中は猛火の盛に燃たる樣に熱して更に近付人も無りけり。病付て七日に當りける卯刻に黄なる旌一流差て直兜の

兵千騎計り三方より同時に鬨の聲を揚て推寄たり。誰とは知らず敵寄たりと心得て此間馳聚たる兵共五百餘人大庭に走出て散々に射る。矢種盡ぬれば打物に成て追つ返しつ半時ばかりぞ戰ふたる搦手より寄ける敵かと覺えて紅の母衣掛たる兵十餘騎。大將細川伊豫守が首と家人行吉掃部助が首とを。取て鋒に貫ぬき、惡しと思ふ者をば皆打取たるぞ是見よや兵共とて二の首を。指上たれば。大手の敵七百餘騎勝鬨を三聲どつと作りて歸るを見れば此寄手天に上り雲に乘じて白峯の方へぞ飛去ける。變化の兵歸去れば是を防つる者ども討れぬと見つる人も死せず。手負と見つるも恙なし。此は如何なる不思議ぞと互に語り互に問て姑有れば。伊豫守も行吉も同時にはかなく成にけり。末世と云ながら不思議なる事共なりと見えたり。なほ崇德天皇の祟らせ給ふと思しき事は諸書に多かれど然のみは記し出ず。

但し金色の大鳶と成らせ給ひし事は次の巻に雲景が未來記を引て云るを見るべし○好尙云此所に追次て掲げたるは源平盛衰記なる後白河法皇の御灌頂を遂させ給へる事なるが。此は強ち魔界に赴かせ給ふとには有らねど。其に就て謂ゆる開發源大夫仕吉と名乘れる物の法皇に申し上たる言の中に。天狗の趣を委く述たり。他書にも釋魔の事は無きにしも非ねど斯く炳焉きは无ければ。其言の見捨がたく思はれて師翁の妖魅攷に加へむと論辨をも添へて記し措かれたる舊稿也。見む人其意を得て有るべし。

後白河天皇は治天僅に三年にして御位を下らせ御坐ける。御志は無智無官の僧にも近付て甚深の佛法を聽聞し。壇處行法の花香をも御手づから營まむと思召されし故なり。

好尙云古今著聞集に承安二年三月十五日。六波羅の太政入道福原にて持經者千僧にて法華經を轉讀する事有けり。件の經以下御布施まで諸院宮上達部殿上人北面迄も藏人右少辨親宗が奉行にてすゝめけり。法皇御幸成て其一口にいらせおはしましけり。法印三人が御行道有けり。諸國の土民結緣の爲に或は針或は餅四五枚など引けり。法皇も受させ給けり。濱に假屋造りて道場にせられけり。佛は一千體ぞおはしましける。又四十八壇の阿彌陀護

摩も有けり。法皇も其中に加はらせ給けり。十七日迄三箇日ぞ轉讀し奉ける。導師法印公顯勸賞に僧正に成されにけりと有るは右の本文と思ひ合すべし。

抑佛法我朝に傳はりし以來修行の貴賤其數多しと云へども。此法皇ほどの薫修練行の御門を承らず。子に臥し寅に起させ給ふ御行法なれば打解て更に御寢もならず金烏東に耀けば六部轉讀の法水。三身佛性の玉を磨き。夕日西に傾けば九品上生の蓮臺に三尊來迎の御心を運び給へり。常の御座の御障子の色紙に書せ給たりける名句に。「身雖レ居二東土一八苦蘇之下一心常令レ遊二西方九品蓮之上一」とぞ遊ばしける。又常の御詠吟に「智者秋鹿鳴入レ山愚人夏蟲飛燒レ火」とぞ詠させ給ける。此は止觀行者四種三昧の大意を釋しける絕句とかや。斯て三井寺の公顯僧正を御師範として眞言の秘法傳受せさせ給けるが治承二年の春三部の秘經を受させ給ひ。二月十九日に三井寺にて御灌頂有べき由。思召し立と聞えしかば。

三部の祕經とは大日經金剛頂經蘇悉地經是なり。公顯僧正といふは。法皇の御外戚顯密兩門の師德なり。内に付き外に付て御歸依の御志深きに依て此經をも此僧正に受け御灌頂をも三井寺にてと思召たるなり。○好尙云止觀四種三昧などの事は飜譯名義集また佛經どもに委く見えたれば解を洩しつ。なほ公顯が事は天台座主記に前大僧正公顯。安藝守顯康息。智證門徒文治六年庚戌三月四日。宣命。同七日辭。建久四年癸巳九月十七日入滅八十四と有れば是より後に座主にも命ぜられしなり。また灌頂とは法崇尊勝陀羅尼經の疏に所レ言灌頂者若初修レ道入二眞言門一先訪二師主大阿闍梨一○建二立道場一求二灌頂法一○入修二三密一願證二瑜伽一猶如三世間輪王太子欲下紹二王位一以承中國祚上用二七寶瓶一盛二四大海水一澆レ頭灌レ頂方承二王位一○故號二佛子一と見え。なほ華嚴十地品に委く記せれば就て見るべし。

山門の大衆憤りて申けるは昔より今に至るまで。御灌頂御受戒みな我山にして。遂させ給へり。山王の化導專ら受戒灌頂の爲なり。殊に園城寺は昔大友皇子國家を亂らむとて軍を起せる謀叛惡逆の境なり。

大友皇子の軍を起し給へるは謀叛惡逆には非す。

其は水戸光圀卿の大日本史を見て知べし。旁以て然べからずと申ければ。様々に誘へ仰けれども例の山大衆更に院宣を用ひず。三井寺にして御灌頂有ば彼寺を焼拂ふべき由僉議すと聞えければ。権大納言隆季卿の奉書にて院宣を下されて云く。御入壇偏可㆑為㆓秘密結縁㆒之處。還及㆓騒動㆒條不慮之次第歟。因㆑茲園城寺御幸所㆓延引㆒也。是延暦園城安全謀也と有けれども大衆なほ憤り申けるは。延引の院宣全く山門の眉目を開かず。永く三井の御幸を停止せられずは彼寺に發向して佛閣僧坊一字も殘さず焼拂ふべき由騒動すと聞えければ重ねて院宣を下されて云く。御幸之事被㆓停止㆒之由一日被㆓仰下㆒畢。山門衆徒等明日二日猶發㆓向彼寺㆒之由風聞可㆑令㆓制止㆒云云と有ければ。御幸停止の院宣に依りて山門既に静り。法皇は御加行結願の思召止らせ給ひけり。

百錬抄に治承二年二月一日太上法皇於㆓園城寺㆒可㆘令㆑入㆓灌頂大壇㆒給㆖之由被㆓仰下㆒而天台大衆蜂起訴訟仍園城寺沙彌如㆑舊可㆑受㆓天台戒㆒之由被㆓仰下㆒。三井寺承伏進㆓請文㆒依㆑之天台和合。可㆑被㆑遂㆓御願㆒之由再三雖㆑被㆑仰山門不㆓承引㆒發㆓向三井寺㆒可㆓焼拂㆒之由結構仍御灌頂可㆓延引㆒之由被㆓仰下㆒也と有るは此時の事なり。

然ども猶御宿願を遂させ給はむが為に。此後九年を經て。文治二年の春の頃また三井寺にして御灌頂有べき由聞えければ山門の大衆また騒動して云く。園城寺の御幸の事治承年中に其沙汰ありて停止せられ畢ぬ。然るを彼寺にして御灌頂あらば。三井寺を焼拂ふべしなど聞えければ當時の座主全玄僧正を召れて行隆を以て仰下されて云く。

好尚云天台座主記に前権僧正全玄治山六年少納言藤原實明息行玄僧正入室最嚴阿闍梨灌頂壽永三年甲辰二月三日宣命建久三年壬子十二月十三日入滅八十と有り

求法の御志あるに依て公顕僧正より智證流の灌頂を受べきもの由思食す處も公顕申さく智證大師一流の灌頂は一行禪師の釋に依て寺中を出べからざるの由殊に誡む處なり然れば早く當寺に御幸有て御傳法有べしと申す處すでに道理なり。仍て三井寺に御幸有らむとす。

好尚云一行禪師とは佛祖統紀に一行張公謹之孫

也。初從普寂落髮開元三年詔入見。啓出世法及安國撫民之道時號天師と有る比丘の事なるべし。

爰に山僧この事を訴へ申すの條甚その謂なし。凡一天の下皆王土なり何の處なりとも臨幸叡慮に任すべし。此に依て或は本尊を拜せむがため或は神道を仰く故に。熊野金峰清水廣隆にも臨幸あり。昔より違亂に及ばす何ぞ三井の一寺に限りて訴訟に及べきや制止を加ふべしと有けるに。座主の御返事に勅定は石よりも重し。爭か子細を申すべき。速に制止を加ふべし。但し山門の訴訟は叡慮に背くに似たれども其本意を論ずれば忠節の至也。長寛に三井に幸有て後天下の不吉は萬人の知所なり。彼寺は叛逆の地たるに依て此災をなす。適安樂に屬する處にまた臨幸有らば天下の滅亡か。故に鎭國の御祈禱を致す山僧等諫諍を加へ奉るをや。

これまでの御返事偏に山僧等が訴訟の道理に合へる由を演て早く同意の趣なり。然るは此僧正本より山僧の座主なれば然も有べき事なり。

抑公顯申狀は不審甚多し。寺中を出べからざる由智證大師の遺誡ならば何ぞ智證大師歸朝の後叡山にして度々灌頂を修すべき。又智證の門流たる靜觀僧正爭か我山の惣持院にして灌頂を寬平法皇に授奉るべき。智證の遺誡すこぶる信用に足らず。殊に一行禪師大日經の義釋には三所の道場あり。王城と深谷と寺中となり。然れば公顯申狀は偏に信ずるに及ばずと申たりければ。叡感の氣有て三井寺の御幸は止られにけり。

全玄僧正が公顯僧正の申狀を難破せる言實に當れり。此は公顯僧正の舊くは叡山にて受させ給へる灌頂を。いかで我が三井寺に御幸なし參らせて授奉らむと思ふ偏執の心より。智證大師の遺誡と申成せるなり。全玄僧正の其を難破したる言は通えたれど。此も亦舊く我山にて授奉れる灌頂を三井寺にて受させ給はむ事を嫉める偏執の心よりかく辨へ奏せるなり。實に勝他偏執の心を止めて柔和を本とせば何處にまれ法皇の御心の赴く寺にて受させ奉るべき事なり。僧正と在し人々すら如此なれば況て其山々の大衆と稱する僧等の。我執勝他偏慢心の熾なるは實然も有べき事ぞかし。○好尙

云上の靜觀僧正とは謂ゆる増命和尙の事にて。左大史桑內安峯男なり靜觀は其諡なるよし天台座主記に見ゆ。また寬平法皇とは宇多天皇の御事にて延喜十年九月九日於二台山一灌二頂于座主僧命一と大鏡裏書にも見えたり。

法皇忝くも觀行五品の位に御心を係け御坐して。

忝くも法皇は天照大御神の正統嫡々の皇美麻命を御子に持坐して其太上皇と御坐して。天下に比倫無く尊き御位に御坐せるを。然る由なき位に御心を係させ給へるは天魔の類の見入奉れる緣とは申ながら甚も慷慨き事にこそ。〇好尙云觀行五品の位とは太平記鈔と云書に。天台一家には衆生と佛との位を立るに六重あり。是を六即と云。一には理即鳥類等の上迄も乃至は我等凡夫の佛共法共知ぬ者の位なり。二には名字即佛法の名をも聞き妙法の實體などゝ云事を聞分齋を云ふ。三には觀行即是は佛法の妙理を觀念し修行するを云ふ。但し此位にて細かに叉分て五品を立るなり。故に第三觀行にて五重を立ると知べし。第四に相似即我等が六根の體がいかにも淸淨に成りて世界國土をも見徹す樣に成る程に佛にも相似たり。衆生にも似たりとて相似即と云。第五に分眞即眞實の悟が佛の程にこそ極まらぬ。當分には眞實の悟を得たる意を云ふなり。第六に究竟即是は悟が極たる位を云なり。此六即を知らざれば觀行五品と云事は知られずと見えたり。委くは佛書に就て見るべし。

法華修行の道場に五種法師の燈を挑げて七萬八千餘部轉讀せさせ給ふ。上古にも未承及ばず況や末代に於てをや。十善玉體の御膚に三密護摩の烟そみて即身即菩提の聖帝とぞ見させ給ける。

佛道の聖帝は實にかくも有べし。上皇の受傳ませる天皇。祖神の道に聖帝と申奉るは甚く異にして。其皇祖の道を斯計り勸させ給ふをぞ申せる。〇好尙云元亨釋書釋源信傳に五種法師四種三昧無レ不二薰練一と有る便蒙に。法華法師品注曰。法者軌則也。師者訓レ匠也。叉五種人能以二妙法一訓二匠於他一故界レ法曰レ師也五種者一受持二讀三誦四解說五書寫と有り。また便蒙に三密とは菩提心論曰。一者身密者如下結二契印一召中請聖衆上是也。二語密者如下密誦二眞言一令二文句了々分明一無中謬誤上也。

三意密者如住瑜伽相應白淨月圓滿觀菩提心也と見えまた護摩とは六波羅密經音義云。或云呼麽梵語也唐云火祭如此方燔柴と有り。

山門騷動して三井寺にての御灌頂を打止め奉ければ御心憂く思召され。僧衆の法は歸僧息諍論同入和合海と云へり。その和合海にこそ入ざらめ諍論を專にして咎もなき三井寺を燒失はむとするは無道心の者共かな。破和合僧は五逆罪の隨一に非ずや。形ばかりは出家にして心はなほ在俗よりも不當なり。愚痴の闇深くして憍慢の幢高く比丘と成ながら朕が入壇灌頂を障　して邪見放逸の鎧を著し佛法破滅の續松を捧げて三井寺を燒亡さむと計ること末代ならむからに此れ程に皇威を輕すべき樣やは有べき。口惜き事かなとて宸襟靜ならず逆鱗しば〳〵にて天台座主を流罪し山門の大衆を禁獄せむと思召けるが。山門の大衆內心は愚癡なりとも形は已に比丘にて身に五帖の法衣をまとへれば。一々に禁籠せむこと罪業消滅すべからず醫王山王大師聖靈の御計ひをも待べしと御淚に咽ばせ給ひ。何なる深山にも閉籠り苦生す洞にも隱れ居ばやと思召ける。

皇威のいふ甲斐なきを歎き思召せる事ども實に然もおはすべき事とかしこし。出家の憍慢無道心なる事は當時も今も替なく。其が中にも山法師の我慢勝他は桓武天皇の御世に彼寺を建させ給へるより御々代々の天皇の叡慮にも御威にも治め給ひがたく。既に白河天皇の御語に加茂河の水と山法師は朕が心にも爲むすべなきよし宣へりき。其我慢偏執無道なる狀は盛衰記をはじめ數多の書に記せるを見るべし凡て天魔の所業なりかし。實や彼山は殊に魔緣憍慢なる智識學匠の多かる山にて。其靈魂の天魔と成れるが集へる處なれば然も有るべき事なりけり。

御心を澄して智者は秋の鹿とのみ詠させ給ひ三月にも成ければ桃花も盛に開たれど。花を御覽ずる事も無れば。雲上人さらに一人も花を詠ずる人は無りけるに。三月三日たりしに。「春來遍是桃花水。不辨仙源何處尋」と高聲に詠ずる人あり。法皇誰ぞと聞召されし程にやがて清涼殿に參りて笛を吹鳴して。時の調子黃鐘調に音取すましたり。然かとすればまた御厨子の上なる千金といふ琵琶を懷き下して。赤

白桃李花といふ樂を三返ばかりぞ彈たりける。直人とは思えず希代の不思議哉とぞ思召されける。さて良久く音もせざれば此者は歸りぬるにやと思召して。やゝ赤白桃李花をば何者か彈つるぞと仰あれば御宿直の番衆とぞ答ける。番衆とは誰ぞと御尋あれば。開發源大夫住吉とぞ名乘たりける。偖は住吉大明神にこそと思召して急ぎ御對面あり。夢にも非ず現とも思召さず希代の不思議哉と思召して御物語有けり。

住吉神の御名を開發源大夫住吉と申すこと甚異しくいまた餘の古書に見及ばざる御名なり殊に彼社に坐す神は四柱坐まし。其を總て住吉明神と申すことなるに。今一柱現はれ給へるは四神のうち誰神といふこと知べからぬを。熟思へば此は四座をすべて住吉明神と一神の如くに申し習ふ世の人意に應へ給ふ例の和魂の和光同塵の出現にぞ有べき。然る例は餘の神等にもいと多かり。猶下に注ふを見るべし。

神の仰られけるは今夜は松尾神の當番にて候へども急き申すべき事ありて引替て參り候なり。昨日の曉に山王七社と傳教大師と翁が宿所に來臨あり。國の吉凶を評定有て今度山門の大衆等が。邪風殊に甚しく宸襟を惱まし奉れる事は睦心にては候はず。日本國の天魔集りて山の大衆に入替りて君の御灌頂を打止め參らせ候なり。然れば衆徒の咎には非ず天魔の所爲にこそと奏し給ふ。

此神語に宿直の番衆といひ。今夜は松尾神の當番也しを引替て參たる由奏されたるにても。實に住吉社にます四神本體の神とは聞えず。然るは三十番神とて三十社の神たち替る〳〵日を持分て守護し給ふと云說は。もと慈覺大師の云出たる妄說にて神世に例有し事には非ず。然れども神等の和魂は例の和光同塵に坐ますが故に。然る說を作りて其日に配して年經ればやがて其說に應じて和光同塵し給ふなり。彼三十番神の說に月の三日には松尾神の宿直と當たる故に。今夜は松尾神の當番なるを云々と奏せる也。其はたゞ此神語に宣ふのみならず實に神界にさる定を立て松尾神の和魂の今夜番に當り給ふなるべし。偖山王七社と傳教大師と翁が宿所に來臨あり云々と宣へる事も。眞の住

吉の神等の御語とも思えず。此は古意を得たらむ人は自然に悟りつべし。〇好尙云三十番神の詳說古き書にては予いまだ見當らず。元亨釋書釋淨藏傳に。昔慈覺大師令三京畿二百餘神番二護此經一今日我之直也云々と見え。其便蒙に此經者法華經也。或曰大師居二楞嚴院杉洞一修二法華一之時。每日有二番役之神一而護レ經大師記レ之爲二三十番神一矣。然考二年曆一有二二說一其一入唐已前天長年中也其一歸朝已後嘉祥年中也。以三番神中有二赤山神一而視レ之則似二于歸朝後之事一也。蓋以下彼神隨二大師一而來上也或又但番神之事在二于歸後一乎また今日者賀茂神番十二日也と有るは然る事なり。斯て開發源大夫住吉と名乘れるを法皇の頓に住吉神にこそと思召したるを以ても番神の事の普く世に流布せるを思ふべし。また師の言に保元物語に宰相光賴卿の語に。南には正八幡宮北には賀茂大明神天滿天神。東西には稻荷祇園松尾大原野等光を雙べて日夜に結番し禁園を守り給ふと云事あり。然れば此頃すでに番神の說ありとも云れたり。抑三十番神と配當したるが其本體の神に非ざる由はまづ法華

驗記に。道命阿闍梨卜二法輪寺一爲二練行處一數々勤行。有二一老僧一籠二行其寺一。夢見二堂庭及四隣邊一貴人充塞無レ隙又從二南方一遙有レ音皆人閙言。金峯山藏王熊野權現住吉大明神。爲レ聞二法華一來二至此所一皆悉來訖一心頂禮聞三阿闍梨誦二法華經一住吉明神向二松尾明神一而作二是言一日本國中雖レ有下巨多持二法華一人上。以二此阿闍梨一爲二最第一一。聞二此經一時離二生々業苦一善根增長。仍從二遠處一每夜所レ參也松尾明神言。如レ是如レ是。我有二近處一不レ論二晝夜一常來聽レ經如レ是稱讚隨喜禮二拜闍梨一時老宿夢覺見者道命阿闍梨。在二法輪禮堂一一心高聲誦二法華經第六卷一。老僧從レ眼流レ淚起立禮拜と云ひ。また古事談に空也上人自二雲林院一七月許大宮大路を南へ行けるに。大垣の邊に常人とも不レ覺之俗の無術寒氣を歎氣色にて逢たりけるが奇かりければ。何人の令レ坐給乎炎天之頃さしも寒げに令レ坐給ふはと問給ければ。俗云其事に侍り空也上人とは御事にて侍にや。日來いかでかと思ひ給つるに今日うれしく奉レ逢侍。我をば松尾明神とぞ云れ侍る。般若の衣は時時着侍れど。法華の衣は無下に薄して。妄想顚倒の

嵐烈しく。惡業煩惱の霜厚くして。如二此寒一侍る也。可レ然者法華之衣給哉と被レ仰に。上人いと尊く思して。さ承候了。御社へ詣て法施奉らむとつい
と忝く侍れど。是こそ此四十餘年法華經讀しめて侍る衣よとて。下に被着たりける帷の垢付きたなげなりけるを脱て被レ奉ければ。乍レ悅衣給てやがて氣色も。忽に直りて。法花の衣を着侍つるより惡業の霜消。煩惱の嵐も吹止て。いと／＼暖に成候にたり。佛に成給はむまでは可レ護とて上人を禮して去給にけりとも見え。又古今著聞集にも延長八年六月廿九日の夜。貞崇法師に稻荷の神の大般若の讀經の驗有る由を告給ひし事見え。又釋書最澄傳に弘仁五年春詣二宇佐八幡神宮一講二妙法華一講竟神託曰不レ受二法味一久歷二歲華一今聽二微言一何以報レ德我有二法衣一願表二嚮達一乃啓二齋殿一推二出紫衣一一領一神宮巫祝各相謂曰我等未二曾見一如レ斯靈感一也其一襲多羅。其一袷衣今尚在二山院一と云ひ。又春日神諏訪神も最澄師の勸緣を受むと託し給ふ事見え。なほ古書どもに斯有る類の事は今數ふるに暇あらず此等の事共を見渡し攷ふるに此神たちの爭でか斯迄

佛法を好み給ふべき其は神社考にも中世寖微佛氏乘レ隙移二彼西天之法一變二吾東域之俗一王道既衰神道漸廢而以二其異端一離レ我而難レ立故設二左道之說一云云と云れたる如く。神國の神民を佛國の佛氏と爲まく欲する勸化僧の方便にて番神の說を吐散したるが。彼魔緣に羈絏れたる遊魂妖魂所得たりと其說相に協へ符せて貴き神名をこそ僞稱すれ。最も卑賤く汚穢しき鬼どもなりかし。彼塞の神と祀れるに道祖神の稱して其有狀にもてなし稻荷の神と祭れるに狐の栖て其捧物を貪り。少か異驗をも視して人を誑惑せるに同しく。其本體の神に非ざる事柄嵩し右の開發源大夫住吉と名乘れる物も謂ゆる道祖狐等が如く卑賤くこそあらざらめ釋魔の因緣は固より深き物なり。然れども法皇の御灌頂を妨げむと思ふ心は少かも无く。釋子等が天狗と爲れる故よしは更なり。其形狀業態までも悉く述て法皇の御憍慢の起らせ給ふを風に諫め奉り。三井寺にこそあらめ天王寺にて御宿意を遂させ給ふ如く奏し上たるは最も殊勝なる事にて。愚管抄に見えたる順魔或は善天狗など稱する物に

や。今詳には極めがたけれど住吉大神に非ざる事疑ひなしなほ上下に論へる趣をも合せ攷ふべし。
其時法皇の仰せに天魔と申すは人類か畜類か修羅道の族か何なる業因の者なれば然様に佛法を障导し侍るぞと御尋有ければ。神の答へに魔と申すは通力を得たる畜類なり。但し此に付て三品あり。一には天魔こは諸の智者學匠の無道心にして憍慢の甚きが死すれば必天魔と申す鬼に成り候なり。其形頭は天狗身は人にて左右の羽生たり。前後百歳の事を悟りて通力あり。虚空を飛こと隼の如し。
天狗といふ物は頭は狐に似て翼あり。飛行する物ゆゑに天狐と書ぞ正しきを天狗と書くは漢籍にいはゆる天狗より謬れる由は上に委く辨たるが如し。其は此神語に其形頭は天狗身は人にて云々と有るにても。天狗と云物の一種有りて其に似たりと云へる事は知られたり。偕法師原の化れるをば實は天魔と云へきを天狗といふは彼天狐に似たればなり。其形こゝの神語にてほゞ辨へ知られたり。また保元物語に宇治大相國の南都へ落て悪僧等を語らひ給へる事を天魔のたぶらかし奉るか。祉の御咎を蒙給ふかと云ひ。平治物語に信西と信頼卿とが中悪き事を云とて如何なる天魔が二人の心に入替けむとも。また信頼卿に謀反の仔細を尋らるるに一事の陳答にも及ばず只天魔の勸也とぞ歎かれけるとも云ひ。また發心集に今世は天魔盗人みちくて人の善根を伺ひ妨ぐ。然れども悟深く徳ある人は天の護隙なくして天魔其便を得ことなしとも。また天魔はよく憍慢を便とすなど見えたり。なほ記錄物語の類に多く見えたるが。天魔と云へるは悉(みな)同じ物と聞えたり。
佛法者なるが故に地獄には墮ず。無道心なるが故に往生もせず。憍慢と申すは人に増らむと思ふ心なり無道心と申すは愚癡の闇に迷ひて智者の證を受ばやとも思はぬを云ふ。末世の僧はみな無道心にして憍慢なるが故に八宗の智者は十が八九は天魔となる此を天狗と申すなり。
往生したりと聞ゆる佛法者もみな魔道に往生したる事。上に委く辨たるが如し。さて佛法者は地獄に墮ずと云こと詳ならぬ語なり例の變幻の地獄はいかに有らむ知らねども。汚く曲れる事物をば途

には豫州都國に逐ひ給ふ神の眞の御定なれば。和光同塵の神語は憑みがたし。夢中問答云佛法を行する人の魔道に入ると云は。魔業を成する故に魔道に入るなり。此は大般若經の魔事品楞嚴經等に委く明せる要を取て云はゞ魔に二種あり。內魔と外魔となり。魔王魔民外より來りて惱すを外魔と名く。魔王を天魔ともいふ。魔民とは尋常の天狗これに當れり。また行人の心中に煩惱を生じ惡見に著し慢心を起し禪定に耽り。智慧にほこりなどする此を內魔と名く。智德靈驗あるに因て魔道に入ことは。譬へば世間に合戰の忠を致し。奉公の功餘人に勝たる人有らむに。其人若其功績に誇りて過分の擧動を致すときは必誅罰に逢ふが如し。これ其功の過に非ず。只偏に功にほこる心を起せるが故なり。佛法もその如く學道修練の功積るに隨ひ行德靈驗も餘人に勝たるを其人もし其智驗にほこりて憍慢の心を起す時は魔道に入こと疑なしと云ひ。上に擧たる解脫房の許に來れる道昭法師が靈の言に。古より天竺震旦本朝に名を得たる貴僧高僧等の魔道に落たる類擧て計ふべからず。世に崇敬せられし僧侶おほく此道に入ると云ひ。法性寺殿下の御內の女房に付たる靈の言に。中古の智者の聞有し諸宗の名人おほく魔道に在りと云るなどを此の神語と合せ思ふべし。○好貪云此等の事沙石集にも假令多智禪定現前す共。若淫を斷せずば。必魔道に落。上品は魔王。中品は魔民下品は魔女と成て。皆徒衆有て各々無上道となれりと思はむ。我滅度の後末法の中に此魔民多くして世間に熾盛ならむ。廣く貪淫を行して善知識として諸の衆生をして。愛見の坑にをとし菩提の道を失せむと說けり。心に淫を斷ざる猶魔道に落。況や身にも行して慙愧無らむをやとも見えたり。借師翁も論はれたる如く佛法者なるが故に地獄には墮ずと云へるはいとおかし。其は西方淨土と思へるも即て魔界なれば謂ゆる地獄に墮たるに疑なし。此處の前後の文を考ふるに源大夫住吉と名告れる者も佛の道を尊ぶ心の深在し故に彼の淨土を魔界とも思はざりし趣なり。此は鮑魚の肆に遊ぶ者は幽蘭の馨きは更なり。鮑魚の臭穢をさへ知らざるの譬にひとしき事にこそ。

浄土門の學者も名利の爲に羈されて虚假の法問を囀り。無道心にして念珠をくり。慢心にして數反すれば天魔の來迎に預る。

此間は源空法師が立たる淨土宗門の旨もやゝ世に弘まりて。世人おほく此宗旨に傾きて。餘宗は多く無得道なるが。此宗のみは必極樂往生すと心得たるも多有しかば。此門の學者も決定往生とは云べからず幽にて見れば如此しと誨せる意の神語なり。但し此宗の人も魔道に入る事は其祖師源空法師語燈錄といふを著して念佛を行じて實々しく成ぬれば萬の人を見るに皆我心には劣たり淺ましと見、我身をばゆゝしき念佛者にて有ものかな。誰々にも勝たり思ふは大憍慢にて有れば。其を便とし魔縁付て往生を妨ぐ。其は憍慢心は阿彌陀佛の願に背けるなれば護念し給はず。惡魔の爲に惱まさるゝなりと云へり。此語やがて例の自法自縛の綱となりて然るにぞ有ける。〇好尚云古事談に丹後國普甲と云山寺の住僧大般若の虚讀を好みて業と爲す。已に年序を經畢ぬ。或時手に經卷を披き虚讀の間後の頭をつよく毆るゝと覺ゆる程に。兩眼拔て經卷の面に付云々。件の眼ひつきたる經は今に彼寺に在りと見えたるは虚假の法問を囀りたると有るに少か似たる事なりけり。

尼法師の憍慢は天狗に成たる形も尼天狗法師天狗にて侍るなり。頬は天狗に似たれども頭は尼法師なり。左右の手に羽は生たれども身には衣に似たる物を着て。肩には袈裟に似たる物を懸たり。

尼天狗のこと今昔物語集に仁和寺の成典僧正と云ふ人。當寺の辰巳の角にある圓堂といふ寺は天狗有りとて人の恐るゝ所なるに。夜その堂に只一人行法を修して居けるに。堂の戸の迫より頭に帽子を着たる尼の臨ければ。何なる尼の臨にか有らむと思ふ程に。尼急に入來て僧正の傍に置たる三衣筥を取て逃行ければ追行けるに。尼堂の後戸より出て後に高き槻木の有るに上りて居ければ成典此を見上げて加持しける。時に尼木の末より土に落ければ立寄りて三衣筥を奪返さむと曳ばかり引しろひ成典遂に取てける。尼は筥の片端ひき破りて取て逃にけり。其上たる槻木今に在り。其尼を尼天狗と云なりと見え。また古事談二の卷に清少納

言零落の後。若殿上人あまた車にて彼宅の前を渡けるほど。宅の甚く破壞したるを見て少納言無下にこそ成にけれと車の内にて云をきゝて。本より棧敷立たりけるが簾を掻揚げて鬼形のごとき女法師顏を指出し駿馬の骨をば買はずや有しと云へり。燕王好レ馬買レ骨事也とあるも尼天狗とて無れど天狗なり清少納言が憍慢なりし事は其草紙を見て知られ。殊に源賴光朝臣四天王等を遣して清原清監を打れし時に。清少納言その姉なる故に同宿にて在けるが。法師に似たれば此を殺さむと爲けるに。尼たる由を示さむとて忽に開を出し見せたりと有を思ふにも甚じき憍慢なり。尼たる由を示さむと思はゞ乳房を出し見すべきに開を出したるは餘なる事なり。然れば天狗に成けむは實然ることなり。法師天狗の狀は上下に擧たる事實に多く見えたれば殊に引出ず。偖また此神語の趣にては尼天狗法師天狗共に左右の手に羽生たりと有れど。羽の無きも多かりと見ゆ。但し其は人に見ゆる時の事なればぱ引繕ひ羽をば隱して見ゆるにや。

○好尚云三衣とは或書に慧上菩薩經ニ云。五條名ニ中著衣ト七條名ニ上衣ト大衣名ニ衆集時衣ト云へり。

男の憍慢は天狗と成ぬれば頬こそ天狗に似たれども頭には烏帽子冠を着たり二の手には羽生たれども身には水干袴直垂狩衣などに似たる物を着たり。

○好尚云天狗に羽の生たる事蹟を少か記さば今昔物語に陸奧國小松寺の僧玄海夢に我が身左右の脇に忽に羽生ず。西に向て飛行く千萬の國を過て微妙なる世界に至りぬ皆七寶の地なり其所にして我身を見れば大佛頂眞言を以て左羽とし。法華經の第八卷を以て右羽としたりと云ひ。又近き書成が最委きは天狗名義攷に引たる善惡因果集に江州仰木の里に翁婆有り成人の子一人有しを便にて年を送りける處に。萬治の頃或時翁が屋の棟に白羽の矢一つ立たり。怪み思ひけるに其翌日子息の男子何地とも知ず往失ぬ。四方に馳走して尋ぬると云ども見えず。父母の歎き悲む有樣目を擧て見るに堪ず。日を重ね月を積と云ども。衰老の勞しく衣食の時に叶はぬに。付てもいとゞ悲み戀ふて涙にのみかきくれたり。十二年を經て後或夜子の刻ばかりに戸を叩く者有り。答むれば子息何某こそ參

りて候と云。子息が語音かと覺しければ姥出て戸を開けば實の子なり。星月夜にすかして見れば大小を腰にして衣服奇麗なり。父母悦びて内へいざなひ入れ先灯をとぼせよと云ば子息制していやいや有べからず明にて逢申す事はならぬなり。我は天狗の眷屬と成たるが。主の天狗の申さるゝは汝が父母あまり深く歎く間一度往て逢べし。但白晝には叶ふべからず暗の夜に行べしと下知せられし故に今來れり。久しく留る事は得難し今夜の内に又歸る也。我始爰を出し事は家の外より頻に喚聲有しを父なりと思ふて出て見れば。山伏一人有て召ける程に何となく隨ひ往ければ暫の間に高き嶺に至りぬ何くなりと云事を辨へず。遙に下を見れば石礐峨々として谷極めて深きに我に是よりあの谷へ飛べしと云。我畏りて即飛たり谷底に至ると思へば却て元の嶺に坐したり。山伏見ていしくも飛たるかな。汝はけなげな者ぞとて悦びぬ。是の如く種々の危き事共をして我心をためし見て後深山の奥へ連行て鉛の湯を飲しめたり。是を飲ぬる後はいかなるけはしき山より實に飛と云ども小しも身の痛む事なし。偖彼天狗の住處七寶莊嚴して微妙不思議なり。我始より命を背かず仕へしかば大天狗惠を垂て召仕はる。今は漸く我身にも翼出來て飛行自在なり。試に捜り見給へと云母手を肌に指入て探り見るに鳥の翼に似たる者手に觸たり。兎角する程に隣家の者共聞付て集ける間に家の上に手を扣く音しければ。此者あつと答へて出往けるが其より重ねて來る事无し。即隣家の老女慥に語り申されきと見え。また新著聞集に洛陽の東松が崎に日蓮宗の寺あり。此上人高才の人にて門弟にも上人分の聖あまたあり。師煩ふて遷化遠からず見えし頃より何となく面像のあたり物すごくて看病の面々も心もとなく思ひしに不圖起あがり只今臨終ぞとて四方を睨と見たる眼輝き見る見る鼻高く成り左右に羽がひ生て閨より走り出て椽はなに行しと見えしが。向ふの如意が嶽に飛さり行方なく成りし。弟子の上人五人皆々宗旨を改めし中に淨土宗に獨成りて名を了長坊と改め。東山におはして多くの人に念佛を勸め給ひし此人の委く語りて舌を振ふて恐れあへり。誠に其上人の

日來の行跡思ひ像られて哀なりとも見えたり。なほ羽の生たる事は最多けれど煩しければ漏しつ。此の事は第一卷にも論はれたれば合せ見て辨ふべきなり。

女の憍慢は天狗と成ぬれば頭に蔓かけて紅粉白物の樣なる物を頰に付たり。大眉作りて鐵漿黑なる者もあり。紅の袴に薄衣かづきて大虛を飛ぶも有り。

○好尙云今昔物語に近江國安義橋の鬼の條に。橋の半許に遠くては然も不見えざりつるに人居たり。此や鬼ならむと思ふも靜心无くて見れは。薄色の衣のなよやかなるに濃き單に紅の袴長やかにて口覆して破无く心苦氣なる眼見にて女居たり。打長めたる氣色も哀氣也我にも非ず人の落し置たる氣色にて橋の高欄に押懸りて居たると云ひ。增鏡村時雨の卷に先帝はあたの道に同じ御やどり。蓬垣ばかりを隔にておはし坐ば主なき院の內いと寂しくて衞士の燒火も蔭だに見えず。內にはいつしかけしかる物など住つきて或時は紅の袴長やかに踏垂て火ともしたる女見る儘に丈は軒と等しく成て後にはかきけち失するも有り。又いみじう光を放ちて髮前に亂しかけたる童なども見えけり。鬼殿などはかくや有けむと恐ろしなど有るは右の神語に據れば女天狗には非るにや鬼も釋魔の因緣ある物なる由は第五卷に委く辨へたる如くなれば斯は云なり。

二には波旬といふ天狗の業已に盡果てのち。人身を受むとする時若くは深山の峯もしくは。深谷の洞など。人跡絕果たる所に入定したる時を波旬と名く。一萬歲のゝち人身を受くと云へり。

翻譯名義集に波旬此云惡。釋迦出世魔王名也と有り。此にいふ波旬は彼と異にして名は佛語なれど。上件々に所謂天狗等の罪業已に盡果て。本文にいふ如く入定したる間をいふ名に用ひたり此は幽の定めと通ゆれば佛書の旨に違へりとて誤とは云べからず。旣に天魔といふも名義集に因に委くは天子魔と云ひて。欲界といふ所の主にて佛道に障礙を爲す物なる由見えたるに。其名をすべての天狗の事に用ひたるに同じ。

三には魔緣といふ。憍慢にして人に增らばやと思ふ心を緣として諸の天狗集まるが故に此を名けて魔緣

と申す。憍慢なき人には魔緣なき故に天魔來て障を成ことなし。世間に天魔多しと云へども障导を成べき緣なき人の許へは翔り集まることも更になし。魔緣とは即上の注に引たる夢中問答にいはゆる內魔をいふ。內より起る魔心にて天魔を招く緣となれば魔緣とも內魔とも云へるなり。空華子云く砂石集に或人は天狗託して曰く慈悲ある人は畏しくて何にも犯し難し。何なる善事を行すれども我相憍慢ある人はあはれ我が伴黨よと思ふ故に心安く覺ゆと云へる由見えたり。これ我慢勝他の意すなはち魔道に落るの證文なりと云へるは然る說なり。此の本文と合せ思ふべし。

されば法皇の御憍慢の御心忽に魔王の來べき緣と成らせ給ひて。六十餘州の天狗ども山門の大衆に入替りて此加行を打醒し進らせて候なり。御憍慢の發らせ給ふも實に御理なり。兩界の曼陀羅一夜二時に懈怠なく行はせ給ふこと四十代の帝の中にも御座さず。僧中にも希にこそ有らめと思召す御心すなはち魔緣と成なり。

兩界とは密宗にいはゆる金剛界胎藏界をいふ。四十代は四十八代の誤なるべし。然るは此は欽明天皇の佛法始めて渡れる御代より計へ奉りて云へりと聞ゆるに。欽明天皇よりこの法皇まで實は四十八代なればなり。○好尙云曼陀羅とは釋書便蒙に。大日經疏曰漫荼羅者名爲二聚集一今以二如來眞實功德一集二在一處一乃至十世界微塵差別智印輪圓輻湊翼二輔大日心王一使下一切衆生普門進趣上故說爲二漫荼羅一又名義集曰滿荼邏此翻レ壇正名二曼荼羅一と有り。

二十五壇の別尊の法諸寺諸山の僧衆も朕には爭かと思召すも魔緣なり。三密瑜伽の行法。護摩八千の薰修上古の御門に坐まさず。況て末代にはよも有じ佛法修行の智者達にも勝らばやと思召すも魔緣なり。光明眞言。尊勝陀羅尼慈救眞言寶篋印火界眞言。千手經護身結界。十八道。仁王般若五壇法朕に過たる眞言師も希にこそ有らめと思食たる魔緣なり。

○好尙云瑜伽とは瑜伽論音義云此譯云二相應一また供養法疏曰瑜伽佛身與レ我無レ異故言二瑜伽一とも見えたり。また陀羅尼とて名義集に大論秦言二能持一。集二種々善法一能持令二不レ散不レ失。譬如三好器盛レ水水不二漏散一。惡不善根心生能遮令レ不レ生若欲レ作二

惡罪一時持令レ不レ作。是名二陀羅尼一と云り。

況や入壇灌頂して金剛不壊の光を放ち。大日遍照の位に上らむこと明徳の中にも希なるべし天子帝王の中にも我は勝たらむと大憍慢を成させ給ふが故に。大天狗ども多く集りて御灌頂は空しく成たる事とぞ奏されける。法皇の仰せに日本國中に天狗に成たる智者いか程か侍ると問給へば。神答給はく宜しき法師は皆天狗に成れる故に其數を知らず。大智の僧は大天狗と成り小智の僧は小天狗と成り。一向無智の僧も隨分の慢心あり。其等は悉く畜生道に墮て朝夕に責役はれ行歩に打はらるゝ諸の馬牛と成れり。

宜しき法師原の世に智識と稱れたるが多く天狗に成れる由は前に委く論へり。無智の僧等は悉く畜生道に墮て牛馬と成ると云ふ說。こは一端を語れるにて牛馬に限らず。蛇にも鱗魚にも生を替るが中にも屎鶏に成るが多有と思はる。其由上に證を擧て委く論へるを見るべし。

中頃柿本の紀僧正と聞えしは智徳院秀一にして驗徳无雙の聖たりき。然るに大法慢を起して大天狗と成れり。此を愛宕山の太郎坊と申すなり。惣じて。憍慢の人多き故に隨分の天狗と成りて六十餘州の山峯に。或は二三十人或五十百二百人集ざる處なしと。諸國の山峯に天狗多き事は。まづ愛宕山に太郎坊。鞍馬山の僧正坊。比良山に次郎坊伊都奈山の三郎坊。富士山に太郎坊。上野の妙義坊。常陸に筑波法印。彥山の豐前坊。大山に伯耆坊。大峯の前鬼後鬼金平六。比叡山に法性坊、肥後の阿闍梨。葛城に行者高間坊。高雄の內供奉。秋葉に三尺坊。光明山の利鋒坊。嚴島に三鬼神白峯の相摸坊。如意ヶ嶽の天狗等は書にも記し傳へ人も普く知る處なり。此餘に諸國の高山絶巘には必住して各々名あること諸國の人々に尋ねて知べし。また高野山醍醐山比叡山などに多かる事も皆人の知る處。また筑波山の十八天狗。岩間山に十三天狗加婆山に四十八天狗。日光山にて數萬の天狗など人々常に云ふ言なり。然れば其部屬種類の多きこと實に量なき事にぞ有べき○好尙云三國傳記に比叡山の學徒愛宕山の地主良勝が許へ尋ね行たる事を記して即案内すれば奧の間より大僧正にやと覺えたる貴き高僧の。腰に一張の弓を張り眉に八字の霜を垂

れ給へるが只一人御出有て曰ひけるは。是へは不當の者共の集るに是へ來て隱れ居べしとて吾が御後に引寄て置せ給ける。去程に深更に及千人計が聲にて曳々と云て來る音しけり。此法師何事なる覽と恠く思て恐しさに蹐き居て見れば。老若尊卑の山伏ども我慢の翅憍慢の觜有りき。或は牛頭馬頭の像鳥類禽獸の姿なる物共。年の程七ツ八ツ許なる女子を因へて來て進物にて候と申ければ。高僧不思議の奴原の痛しき振舞哉とて小女をば呼て御そばに置給へり。五更に月落て一點の燈殘り夜既に明なむとしければ。彼天狗共又曳々應々と云て虛空を走り東西に去にけりと有るを以ても。愛宕山に天狗の多き事を悟るべし。但し本文は甚く約めて引たれば委くは本書を見るべし。

其時法皇の仰せに誠に仰せの如く朕が行法は。王位の中にも佛法者の中にも最希にこそ有らめと思ひて侍りしなり。まづ兩界を空に覺えて每夜二時に供養法し給ふ御門上古には未聞かずと思ひ侍りき。別尊法鈴杵を二十五壇に建たる帝王も未聞かずと思ひて子に臥し寅に起たる行法帝王の中には未聞かずと思ひ侍りき每日法華經六部を信讀したる帝王も我朝には未聞かずと思ひ侍りき況や三部祕經の持者。上乘灌頂の聖と成りて本寺本山の智者達にも勝たりと稱られむと思ふ慢心を起せるこそ度々なりき然るに今此の如く聞召さるゝにこそ罪業の雲既に晴て覺え候全く山門の大衆の猥藉にては侍らず。我身の慢心すなはち天魔の緣と成りて六十餘州の天狗ども數日精進の加行を打破りけるにこそ道理にては侍りけれ。今に於ては慚愧懺悔の風冷に魔緣の境界爭か晴さらむ偖て忍やかに宿願を果し候はゞやと存ず。御計ひ候へと仰有ければ。神の云く傳敎大師の申せと候つるは。延暦寺は愚老が建立園城寺は智證大師の草創也。効驗も何も輕くして御歸依の分に能はず我朝の靈地には四天王寺勝れたり。聖德太子の御建立にて佛法最初の礎なり。彼聖德太子は救世觀音の應現なり。

○好尙云。此太子の轉生の事元亨釋書論に曰思大陳大建九年滅。太子敏達二年誕。以レ曆考レ之太子五歲時思公化。豈有三未レ死而受二生於他方一哉。曰阿含口解十二因緣經曰人年老少レ識多レ忘者識轉稍

向後生處。夫塵累之人尚存此身赴佗界泥救世之大士分身百億何容疑於其間乎。曰太子古傳曰。太子四十七歳冬語妃曰。昔我在南嶽修道名曰慧思。有婆羅門僧達磨者。後魏文帝大和八年丁未十月入支那遊歷衡山。於此達磨結草菴六時行道時思問曰公修道幾年。對曰二十餘歳思曰得感應乎。對曰無。達磨良久曰禪定易厭濁世難離今遭素交。我意足矣。子何更數生居此山不移餘方惜哉化之不博乎。海東有國願子生彼彼地三毒雖厚聖化可宜子其思之乎。思曰公誰人乎。對曰我是虛空也言已東去思大尋又六時行道年方五十。後魏皇始元年庚申長逝。然則聖言不虛故我生此國安撫百姓興隆三寶又捨此身生賤種出家修道誓度有情是我本願也云々と有り。此事六巻の初めに云べきを記し漏せれば此處に出せり。なほ法王帝説師の古史傳印度藏志を始め諸書を見て委き事を知るべし。

折ふし彼等に入唐の聖跡朝して在り。灌頂の大阿闍梨その器に足べし。密に御幸ならせ御座して御入壇候へと仰られて神は忽に失給ひぬ。法皇御落涙ありて思召けるは慢心いかに發さじと思へども。事により折に隨ひて起べき物にて有けり。然しも神の教給へる慢心の今更起たるぞや。日本に七十餘代の御門座しかども。親く住吉神に對面して種々に物語したる帝王は朕ばかりにこそ有らめと慢心の起たるぞやとて。阿彌陀佛阿彌陀佛助させ御座せと御祈念ぞ有ける斯て法皇は公顯僧正を召具せられて天王寺に御幸あり。

百練抄に文治二年八月十三日法皇御幸天王寺三七日籠御也。可被修御逆修並萬燈會云々と有り此時の事にや。

彼寺の西門にして御手を合せ御心中に住吉神を拜ませ給ひつゝ。住吉の松吹風に雲晴れて龜井の水にやどる月影と遊ばし。五智光院にして龜井の水を結び上げ。五瓶の智水として佛法最初の靈地にてぞ傳法灌頂をば遂させ給ひける法皇今年六十一。智證大師より十五代の御付法にて無上菩提の御願忽に成就し給ひけりと見えたり。

○好尙云此處に追次て記されたるは源義經朝臣の天狗に兵法を習はれたりと云事なるが。此は前條

に連續せる事に非ず。唯時代の近き儘に標出せり見む人恠む事勿れ。

源義經朝臣の天狗に兵法を習へりと云こと。判官物語には鞍馬の奥に僧正が谷といふ所有り。昔は何なる人の崇奉けむ貴船明神とて靈驗殊勝に渡らせ給ひける。神主も有ける。

御神樂の鼓の音も絶ず新に渡らせ給しかども。世の末にならば神の驗徳も劣らせ給ひて人住あらし。偏に天狗の住所となりて夕日西に傾けば物氣おめき叫ぶ。然ればは參りよる人をも取惱ます間。參籠する人も無りけり。

○好尙云伊邪那岐命其御子迦具土神を斬て三段と爲給ひき。其一段に成り坐る神の御名を高龗の神と申す。是即て貴船明神なり委くは神典を見て知るべし。

然れども牛若はかゝる處の有由を聞て晝は學問にてなし。夜になれば日頃は一所にてともかくも成參らせむと申つる大衆にも知らせずして。別當の御守護に參らせたるしきたいと云腹巻に黄金作りの太刀帶て。唯一人貴船明神に參り給ひ念珠申させ給ひけるは。南無大慈大悲の明神八幡大菩薩と掌を合せ源氏を守らせ給へ。宿願信に成就あらば玉の寶殿を造り千町の所領を寄進し奉らむと祈誓して正面より未申へ向ひ立給ふ。四方の草木を平家の一類と名付大木二本有けるを一本をば清盛と名付。太刀を拔て散散に切り。懐より毬打の玉の樣なる物を取出し木の枝に懸け。一つをば重盛が首と名付一つをば清盛が首とて掛けられけり。斯て曉にも成しかば我方に歸り衣引被き臥給ふ。人是を知らず和泉と申法師の御介錯申けるが。此御有樣只事には有じと思ひて眼を放たず。或夜の夜半ばかりに身に添ふ影の如くしてぞ行ける。或叢の蔭に忍び居て見ければ加樣に擧動給ふ間急ぎ鞍馬へ歸り東光坊に此由を語りけりとのみ有て天狗に兵法習へる由は記さねど。平治物語に牛若は鞍馬寺にて十一の歳とかや母の申事を思出して諸家系圖を見けるに。實も清和天皇より十代の御苗裔にて左馬頭義朝が末子なれば如何もして平家を滅し父の本望を達せむと思はれけることぞ禮けれ。晝は終日學文を事とし夜は終夜武藝をせられたり。僧正ヶ谷にて天狗と夜々兵法を習ふと云々然れば早足飛

越人間の業とは覺えずと有り。

異本には十一歳にて家々の系圖を覺え諸國日記などを見る程に。心賢しく成て我身の有様を思ふに清和天皇十代の末を受け。爲義が孫左馬頭義朝が子にて有物を父義朝の本望を遂し世にも出ばやとぞ思ける。隣の房に長しき兒あり語ひて常は出行して小太刀打刀にて辻切をし人を逐ふも早く逃るも早し。築地塀など跳超るも相違なし。僧正谷とて天狗の栖所へ夜々行きて兵法を習ひ。彼難所をも夜々越て貴船社にぞ詣ける其振舞凡夫には非ずとて寺僧等舌を振ひけるとあり。○好尙云神社考にも鞍馬山與二貴布禰一之間有二岩谷一。名曰二僧正谷一。或云不動明王示現之地也。世傳源牛弱初名二舍那王丸一。遁二平治之亂一入二鞍馬寺一。一日到二僧正谷一逢二異人一。一云山伏異人敎二牛弱一以二劍術一且盟曰我爲二舍那王之護神一。其後時々與二異人一過二于僧正谷一善習二其刺擊之法一。牛弱素好二輕捷一。至レ此益精。及二十五歳一往二奥州一。壽永元曆之際與二平氏一合戰。其功居レ多。文治之始再遊二鞍馬山一不二復得一レ見二其人一。牛弱則源廷尉義經是也と云れけるは。平治物語などに據られたるか別書の傳へなるかいまだ思ひ得ず。

此をも合せて考ふるに義經實には貴舟社に詣て志を遂せむ事を祈られけむを。神その孝心に感坐して眷屬の神などの兵法を敎たりけむ。然るに昔も今も然る物とし云へは天狗といふ習俗なりしかば。天狗に兵法を習へりと云傳へしならむ。何樣にも義經の幼少より早術に卓たるは凡事には非ざりけむ然れど釋魔に兵法は似つかはし有ず。

但し天狗に武術を習へりと云事は折々聞く事なるが。昔にも記し傳へたるは諸國物語に。或時志賀の山越に懸り此里の八幡宮に詣で辛崎の方へ行く。爰に大津の方より二十歳計の男を人數して搦來る此男正體なく狂言を云さくる聲かしまし。後に就て此男は盜賊の類かと問へば年比なる男云く。此者は平生兵法を好みて修練尋常に超たり。過にし八月の黃昏の比所用ありて坂本に赴くに怪しき僧有て云く。汝兵術の望は無かと云ふ。此男思寄らずの僧の仰せやと云へば。只我が言ふに任せて來れ名師に逢せむと云ふ何に侍るやと問へば此方へと衣の袖にて覆ふかと思へば。忽に空中に飛行す

ること暫くにして一つの高山に至る。巖峨々として潤水音遙なり一叢の杉の欽々たるに坐して僧云く。兵術の師外になし。我すなはち師なりいざ汝が好む處を傳へむ。是を持て打て來よとて利刀の氷の如きを與ふ。意得ず怪しや尋常に手習ふときは木竹を以て爲ることなり。眞劍の稽古は危しと云へば然れば我は此刃を以てあひしらはむ汝はたゞ其刀を持て千度百度我を討べし。其危きを出て安きに至る是を深奥の祕術とすと。双方立分りて切結ぶこと暫するに言し如く僧は一所の疵をも受ず度ごとに男うち負ぬ。なほ兵術の奥旨至らざる不審を問ふに答の明なること譬へば塵ひらけし鏡の如く數年の望み此に足りぬ。其外の神術悉く學び得たり。然るに此者家を出て十餘日行方知れず。是に因て近里隣郷へ人を催し手を分ちて尋求む。爰に當國信樂のこなた鵜川と云處にて尋ね逢たりいかにや汝はと詞を懸るに心得たりと刀を拔て討て蒐る尋ぬる人大勢なれば何程の事かはと棒を持て輿中に追とり籠たるに。飛鳥の翔る如く神變を振ひ持ところの棒を寸々に切折たり。衆人爲方なくて逃行くを此者呼返して今は是までなり。我が兵術の勝たる所を各に見せむとてかくは爲つるなり。恐れ給ふなとて太刀を投出しぬ。さて此程は何處に在しやと問ふに唯今の通り物語しぬ。言語未終らざるに狂亂してあら苦し大事を白地に人に語るなと師房の云しを。有のまゝに言し故に爰に來りて責さいなむぞや悲し痛しと叫ぶ。兎角まづ家に返れと云へば思ひ寄らず己等が尋ね來しゆゑ此憂目を見る。惡し恨めしと狂ひ出て縱横にかけり廻るまゝ。取放さじとかくは計ひ侍ると語り捨て足早に過行ぬれば終る所を知らず。これ世に云ふ天狗といふ物の態なるべし。怪き事の世には有ける物哉と有り。名義攷にも此說を擧て鞍馬山の奥に僧正が谷と云所あり。岩石に太刀打の痕あり。傳言ふ僧正坊かつて牛若丸に兵術を敎へし處なりと。今此江州の男もまた天狗に兵法を習ひしこと古今同日の奇談なり。武田信玄の家臣板垣信形も天狗と兵法をたくらべし事有と云ひ傳ふ然らば天狗は何れも能劍術に妙を得る物かと云へるは然る事なり。また鞍馬天狗と云ふ猿樂の謠物に抑是は

鞍馬の奥僧正が谷に年經て住る大天狗なり。まづ御供の天狗は誰々ぞ筑紫には彥山の豐前坊四州には白峯の相摸坊。大山に伯耆坊飯綱の三郎富士太郎。大峯の前鬼が一黨葛城高間餘所までも有まじ。邊土に於ては比良横川如意が嶽我慢高尾の峯に住て。人の爲には愛宕山霞と棚引き雲と成て。月は鞍馬の僧正が谷に充々峯を動かし嵐木枯し瀧の音天狗倒しは夥しや。いかに舍那王どの只今小天狗を參らせて候に稽古の際をば何ぼう御見せ候ぞ。さむ候只今小天狗ども來り候程に薄手をも切付け稽古の際を見せ申度は候ひつれども師匠にや叱られ申さむと思止りて候。あら最愛の人や云々。姿も心もあら天狗を師匠や房主と御賞翫は。いかにも大事を殘さず傳へて平家を討むと思召すかや云云。驕れる平家を西海に追下し浮雲に飛行の自在を受て敵を平らげ。會稽を雪がむ御身を守べし云云。西海四海の合戰と云ども蔭身を放れず弓矢の力を添守るべしなども見えたり。

○好尙云天狗は兵術のみに非ず種々の事をも敎へたる事諸書に多く見えたる中に沙石集に。奥州修行の僧。或山中の古き堂に宿す。天狗の住よし里人云ければ。すさまじく覺て。佛壇の上に登り佛座の後に座す。夜更て山の峯より人多く音なひ下る。恐く覺て隱形の印を結び心を靜めて見るに。白く淸げなる法師を手輿にかきて小法師原二三十人伴して堂の内へ入。此法師小法師原庭に出て遊び候へと云。ばら〳〵と出て遊びけり。僧此僧や御房々々と云見付られぬと思ひて候と云。御房の隱形の印の結び樣のわろくて見ゆるぞ。おはしませ敎へ申さむと云時心安堵して側へ據りぬ。細々と敎へて僧物見給へ所詮なき奴原に見せ申さじとて追出したりと云。僧印結びて居たればよし〳〵只今は見給はぬぞと云て。法師原參候へとて堂の中にて遊び舞躍りて曉山へ歸登りにけりと見えたり。僧また上の件の如く兵術に妙を得たると云に。中には刀劔を恐れたりと思はるゝ事も有り。其は古今著聞集に仁治の比伊勢の國書生莊より百性成ける法師のぼりて五條坊門富の小路に宿りて居たりけり。役果て下りけるに同莊に相知たる山寺法師に行逢ぬ。何所へ行ぞと問ければ莊へ下る由を

語れば。我も下る也然らば同道せむと云ければ。具して下ると思ふ程に其道にもあらで思ひがけぬ法勝寺法成寺などに來にけり。いも心ならず鬼にみられたる樣也。去程に又七條高倉に來ぬ。此山寺法師云樣あちこちと步行て喉の乾きたるに其指たる刀にて酒買かし。我も飲みそこにものむと潤へ給へと云ば我にも非ず買つ。僧二人飲て具して行程に比叡山の邊に來ぬ。去程に又も知らぬ山伏三人逢たり。此山伏を見て此法師恐れおのゝきたるけしきにてしゝかゞまりて進まず。三人の山伏の中に主領とおぼしきが云樣。わ法師を詮無き事するなど云てにらみて立り。此法師彌々恐入たり。いかなるやうにと見る程に斯云たる計にて三人ながら過ぬ。其時此人々はたそ又斯物いひつる人の名をば何と云ぞと問へば。あれをばたてるやと申也と答へて又具して清水に至りぬ。鐘樓の上にゐて行ていかにかしたりけむ。檜皮と裏板とのあはひに葛を持て長々と縛り搦めて釣りつけて天狗は失にけり。刀を指たりつる程は斯く思ふ樣には得せざりつるに。刀をなくせさせて後斯はしたるなめり。鐘突に人の下り立けるに物のうめきければ寺僧どもに告て。裏板をはなちてとかく命いけて問ければ斯語りけるとなむと見えたり。此は謂ゆる木の葉天狗の屬なりし故に刀を恐れたるなるべし。なほ次卷々にも論へるを見るべし。

貞和二年七月十九日の事なるに往來の禪僧嵯峨より京へ歸けるが夕立に逢て立寄べき方も無りければ仁和寺の六本杉の木陰にて雨の晴間を待居たりけるが日已に暮にければ行前恐しくて縱さらば今夜は御堂の傍にても明せかしと思ひて本堂の緣に倚居つゝ閑に念誦して心を澄して在けるに夜痛く深けて月淸明たるに見れば愛宕山比叡山の方より四方輿に乘ける物ども虛空より來集りて此六本杉の梢にぞ並居たる座定りて後虛空に引たる幔を風の颯と吹上たるに座中の人々を見れば上座に先帝の御外戚峯僧正春雅香衣に袈裟かけ眥長くして鳶の如くなるが水精の珠數爪操て座したり。其次に南都の知教上人淨土寺の忠圓僧正左右に著座したり皆古しへ見つる形にては有ながら眼の光尋常に易りて左右の脇より長き翅生出たり。其餘の小天狗は其數を知らず禪僧此を見て怖

しや我は天狗道に隨ぬるかはた天狗の我眼に遮るかと肝心も身にそはで目も放たず守り居たる程にまた空中より五緒の車の鮮なるに乘て來る客あり榻を踐て下るを見れば兵部卿親王の未だ法體にて御座有し時の御貌なり先に座して待たる天狗共みな席を去て蹲踞す（峯の僧正の形を嘴長くして鳶の如しと云ひ知教忠圓等が形狀を左右の脇より長き翅生出たりと有るを思ふべし彼の源大夫住吉と云し者の後白河法皇に奏し上たる趣に最克似たりまた兵部卿親王とは則大塔宮の御事なるが五緒の車の鮮なるに乘たまふと有るは羅山先生の後醍醐院乘五緒龍車と云れしを合せ思ふに此は天狗界にて高貴の御方の飛行に用ひ給ふ物と通えたり）姑く有て坊官かと覺しき者一人。銀の銚子に金の盃を取副て御酌に立たり大塔宮御盃を召れ。左右に叱度禮有りて三度聞召して差置かせ給へば峯僧正以下の人々次第に飲流して然しも興ある氣色もなし良遙に有て同時にわつと喚ぶ聲しけるが手を擧て足を引攣め頭より黑烟燃出て悶絶僻地すること半時はかり有て皆火に入る夏の蟲の如くにて焦れ死にこそ死けれあな恐しや是なめり天狗道の苦患に熱鐵の丸かれを日に三度存なる事はと思ひて見居たれば二時ばかり有てみな活出たり峯僧正苦しげなる息をつきて偖も此世の中を如何してまた騷動せさすべきと云へば忠圓僧正進出て其こそ最安き事にて候へ。まづ左兵衞頭直義は他犯戒を持ちて。俗人に於ては我ほど禁戒を犯さぬ者なしと思ふ我慢心深く候。是ぞ我等が依所なる大塔宮の直義が內室の腹に男子と成て生れさせ給ふべし。また夢窓の法眷に妙吉侍者と云僧あり道行共に足ずして我程の學解の人なしと思へり此慢心我等が伺ふ處にて候へば峯僧正其心に入替りて政道を輔佐し邪法を說教させ給ふべし知教上人は上杉伊豆守重能。畠山大藏少輔が心に依託して師直師泰を失はむと計られ候べし。忠圓は師直師泰が心に入替て上杉畠山を亡し候べし此に依て直義兄弟の中惡くなり師直主從の禮に背かば天下に又大なる合戰出來てしばらく見物は絕候はじと申せば大塔宮を始進らせ我慢の小天狗共に至る迄いしくも計ひ申たる者哉と一同に皆入興して幻の如くに成にけり夜明ければ彼禪僧京に出て施藥院師和氣仲成は此僧の檀越なりければ此事を語りたりける

二十日許の後八月の頃に直義の室（澁河丹波守貞頼が女義季が姉なり）相勞はる事有て和氣丹波南流の博士本道外科の名醫數を盡して招請せられ脈を取せらるゝに或は御勞風より起り候へば風を治する藥を合せて治すべしと申し。或は諸病は氣より起る事に候へば氣を散むる藥を合せて進り候べしと申し或は此御勞は腹の御病にて候へば腹病を治する藥を合せて御療治候べしと申すかゝる處に施藥院の仲成少遲參して脈を取けるに如何なる病とも辨へず心中に不審を成けるが彼六本杉にて天狗どもの評定しける事をきつと思ひ出して是は御懷妊の脈にて侍りしかも男子にて候べしとぞ耳語ける當座に聞ける者どもあら惡の仲成が追從や。四十に餘る女房の始めて懷妊する事や有べきと口を嚬めぬは無りけり。（園大曆に直義の室家今年四十一歲のよし見えたり）去程に月日重なり誠に只ならず成にければ。種々の藥を合せし醫師共は面目を失ひ仲成一人所領を賜はり俸祿に預る耳ならず軈て典藥頭にぞ申成されける。明年の二月九日著帶にて其儀また嚴重なり（園大曆にも二月九日戌一點著帶今月七箇月云々と有り去年の八月より七箇月めに著帶せられたる由なり）六月八日の朝生產容易してしかも男子にてぞ有ける一族門葉國國の大名は云に及ばず我劣らじと引出物を先立て賀し申されける間。公家にも勅使を立らる。後の禍をば未知らず哀大果報の少人やと云はぬ者こそ無りけれ

○貞和五年正月の頃より天變変有りて世人驚く處に二月二十六日夜半許に將軍塚夥しく鳴動して虛空に兵馬の馳過る音半時許しければ京中の貴賤不思議の思をなし何事の有むと魂を冷す處に二十七日の午刻に清水坂より俄に天火出來て清水寺の本堂を始め鎮守まで一宇も殘らず炎滅す。火災は尋常の事なれども風吹ざるに大なる炎遙に飛來てかく一時に燒失すること直事に非ず凡天下の大變ある時は靈佛靈社の回祿定れる表事なり（園大曆に貞和五年二月二十七日午刻許、當巽有火終日清水寺悉掃地燒失本佛取出之）とあり）今年多くの不思議うち續く中に洛中に田樂を翫ぶこと法に過たり。大樹是を興せらるゝ事また類なしされば萬人手足を空にして朝夕是が爲に婚費す。關東亡びむとて高時法師好み翫びしが先代の一流斷滅しぬ宜からぬ事なりとぞ申ける。新座本

座の田樂處々にて能を較けるに是を引々に申す間。新本の座貶當座の口論と成て闘爭死亡止事なし。同六月十一日祇園の執行に行惠といふ者四條橋を渡さむとて新本の田樂を合せ老若を別て能較をせむとて四條河原に棧敷をうつ。希代の見物なるべしとて。貴賤男女こぞること斜ならず。公家には二條關白殿門跡は當座主梶井二品法親王武家は大樹是を興せられしかば其以下の人々は申に及ばず我劣らじと棧敷を夥しく搆たり已に時刻に成しかば新本の老若東西に幄を打て兩方に橋掛りを掛たり樂屋の幕には纐纈を張り。天蓋の幕は金襴なれば片々と風に散滿して炎を揚るに異ならず舞臺には曲彔縄床を立雙べ紅緑の氈を展布て豹虎の皮を掛たれば見るに眼を照されば心に空に成ぬるに律雅の調冷しく颯聲耳を淸す處に兩方の樂屋にて中門の口の鼓を鳴し音取の笛を吹立たれば紅粉を粧盡したる美麗の童八人一樣に金襴の水干を著して東の樂屋より練出たれば白く淸らかなる法師八人薄假粧の鐵漿黑にて色々の花鳥を織盡したる水干に銀の亂紋打たる下濃の袴に下絓して拍子をうちあやい笠を傾け西の樂屋よりきらめき渡て出たる

は誠に由々敷ぞ見えける。一の彪は本座の阿古。亂拍子は新座の彥夜叉。刀王は道一。菊王おの〳〵神變の堪能なれば見物耳目を驚かす。立合終りしかば新座の猿樂より八九歲の小童に猿の面をきせ御幣を差上て。赤地の金襴の打掛に虎皮の連貫をふみ開き小拍子に掛て紅緑のそり橋を斜に蹈て出たりけるが高欄に飛上り左へ回り右へ巡りはね返りては上りたる有樣誠に此世の者とは見えず山王神託して此奇瑞を示さるゝかと感興身にぞ餘りけるされば百餘間の棧敷ども座にも溜らずあら面白や堪難やと喚き叫ひける間しばしは感聲靜りもやらずかゝる處に將軍の御棧敷の邊より美しき女房の練貫のつま高く取けるが扇を以て幕を揚るとぞ見えし。大物の五六にて打付たる棧敷傾立てあれやあれやと云程こそ有れ上下二百四十九間共に將棊倒をするが如く一度にどうと倒れける許多の大物ども落重りける間打殺さるゝ者其數を知らず(異本に打殺さるゝ者五百餘人といへり)斯る紛に物取ども人の太刀刀を奪ひて逃るもあり。見付て切て止るもあり或は腰膝を打折られ手足を打切られ或は己と抜たる太刀長刀に此彼を擲貫れて血に

まみれ或は涌せる茶の湯に身を燒て喚き叫ぶ田樂は鬼の面を著ながら。裝束を取て逃る盜人を赤き撻を打振りて追て走る。人の中間若黨は主の女房を舁負て逃る者を打物の鞘を外して追懸る。返し合せて切合ふ處もあり切られて朱になる者もあり。田樂の棧敷に事出來て人死たりと云說の有しかば武士たる者腹卷鎧投かけ太刀長刀の鞘をはづして馳違ふ梶井宮も御腰を打損ぜさせ給たりと聞えしかば一首の狂哥を四條河原に立たり

　釘付にしたる棧敷の倒るゝは梶井宮の不覺なりけり。

また二條關白殿も御覽じければ

　田樂の將棊倒しの棧敷には王計こそ登らざりけれ。

また別に

　去年は軍ことしは棧敷討死の所は同じ四條なりけり。

これ直事に非ずいか樣天狗の所行にこそ有らむと思合せて後に能々きけば。山門の西塔院釋迦堂の長講といふ僧所用ありて下りける道に山伏一人引逢て只今四條河原に希代の見物の侍る御覽候へと云ければ長講曰已に日中に成り候また用意の棧敷など候はで只今より其座に臨み候共內へいかゞ入候べきと申せば山伏內へ安く入奉るべき樣候たゞ我が跡に付て步まれ候へとぞ申ける長講げにも聞ける如ならば希代の見物なるべし然らば行て見ばやと思ければ山伏の跡に附て三足ばかり步むと思へば覺えず四條河原に行至りぬ。はや中門の口うつ程に成ぬれば鼠戶の口も塞りて入べき方もなし如何して內へは入候べきと佗れば山伏我が手に取つき給へ飛踰て內に入候はむと云ふ。實しからずと思ながら手に取附たれば山伏長講を小脇に挾て三重に搆へたる棧敷を輕々と飛越て將軍の御棧敷の內にぞ入にける長講席に坐して座中の人々を見るに仁木。細川。高。上杉。畠山の人人ならでは交たる人も無ればいかに此座には居候べきと躊躇したる體を見て彼山伏忍やかに苦からず只其にて見物し給へと申す長講は樣ぞ有らむと思ひて山伏と雙びて將軍の對座に居たれば種々の獻盃樣々の美物盃の始まるごとに將軍殊に此山伏と長講とに色代有て持る〳〵始め給ふ處に新座の樂屋より猿の

面を著て御幣を差擧げ橋の高欄を一飛々ては拍子を蹈み蹈ては御幣を打振りて誠に輕げに跳出たり。上下の棧敷なる見物衆此を見て座席にも溜らず面白や堪がたや我死ぬるや是助けよと喚き叫て感ずる聲。半時許ぞのゝめきける。此時かの山伏。長講が耳にささやきけるは。餘に人の物狂はしげに見ゆるが憎きに肝潰させて興を醒させむずるぞ騒ぎ給ふなと云て座より立て。或棧敷の柱をエイヤエイヤと推すと見けるが二百餘間の棧敷みな天狗倒しに逢てけり。餘所よりは辻風の吹とぞ見ける。(異本に此事山門の記錄に載せて有りといへり)誠に今度棧敷の儀。神明御眥を廻されけるにや。彼棧敷崩れて人多く死ける事は六月十一日なり。其次の日夜に入て大雨車軸を降し（頭注云齋明記に入鹿を誅せる後に雨ふりたること有り）洪水盤石を流し昨日の河原の死人の汚穢不淨を洗ひ流し十四日の祇園神幸の路をば清めける有難かりし樣なりまた其頃天下第一の不思議あり出羽國羽黑に雲景といふ山伏あり諸國一見の志有りて都に上り今熊野に居住して同年六月二十日の事なるに天龍寺を一見せむとて往く道に年六十許なる山伏一人行連たり。彼雲景に御身は何處へ御座ある人ぞと問ふ。此は諸國一見の者にて候が公家武家の崇敬ある加藍なれば天龍寺へ參り候なりとぞ答ける山伏聞て天龍寺もさる事なれど我等が住山こそ日本無雙の靈地にて侍れいざや見せ奉らむとて誘ひ行程に愛宕山の高峯に至りぬ誠に佛閣奇麗にして玉をしき金を鏤たり。いと貴く覺えけるに彼山伏雲景が袖を控へて是まで參り給へる思出に祕所どもを見せ奉らむとて本堂のうしろ。座主の坊と覺しき所へ行たれば是また殊勝の靈地にて。人多く坐し給へり或は衣冠正しく金の笏を持給へる人も有り別座に山伏七人有り何れも貴僧高僧の形に香染の衣着たる人もあり雲景を伴ひし山伏も此末に座しぬ雲景はその廣廂にくゝまり居て座中を見るに。御座を二帖布たるに大なる金色の鵄翅を刷ひて著座したり。右の傍に長八尺計なる男の大弓大矢を横へたるが畏りてぞ候ける。左の座には袞龍の御衣に日月星辰を鮮に織たるを着給へる人。金の笏を持て並居給ふ座敷の體。餘りに怖しくて伴たる山伏に此は如何なる御座敷に候ぞと問へば答けるは上座なる金色の鵄こそ崇德院にて渡らせ給へ。其傍なる大男こそ源

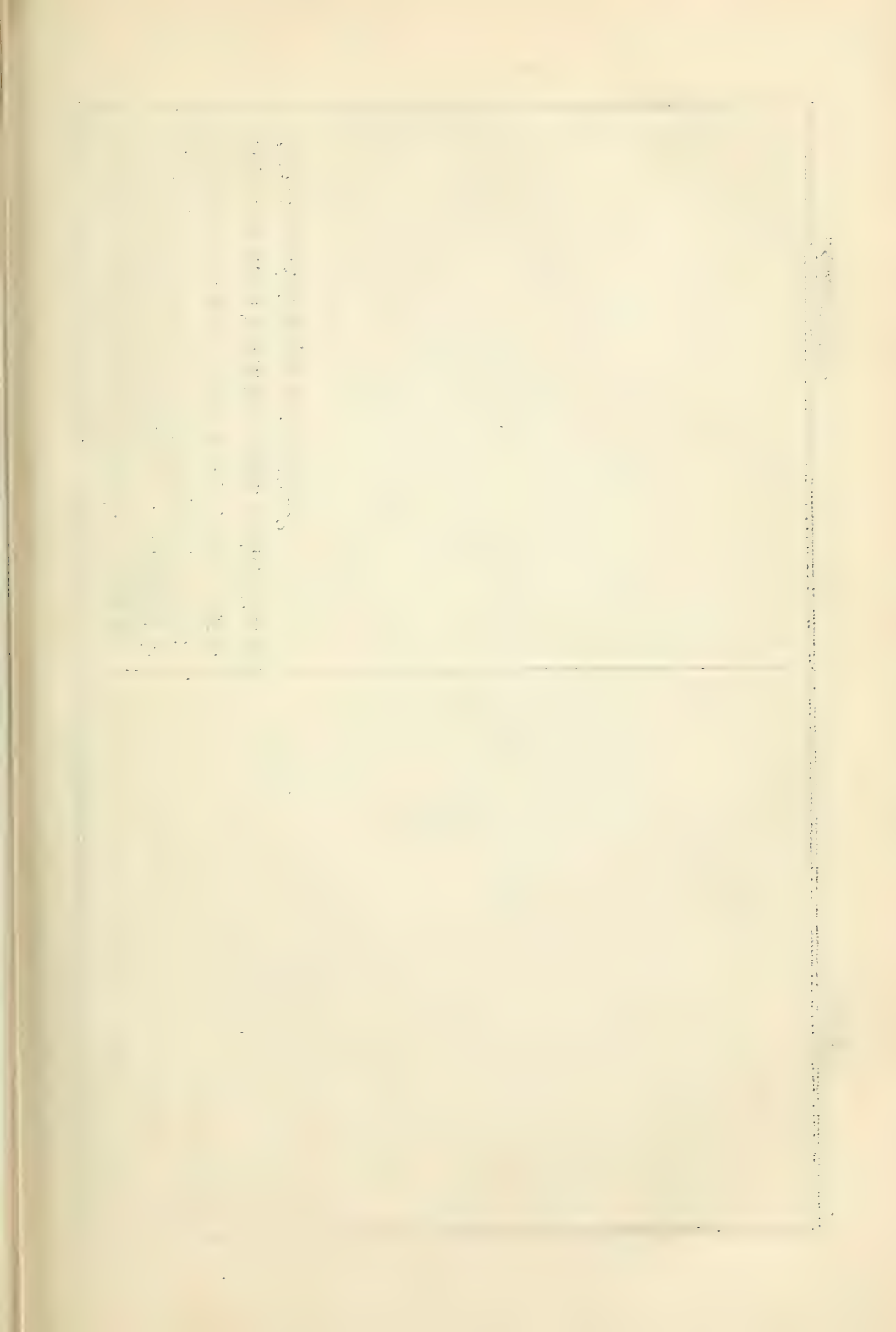
爲義入道の八男八郎爲朝よ左の座なるは淡路廢帝。井上皇后。御鳥羽院。後醍醐院みな止事なき賢帝達よ。別座なる僧達こゝ玄肪。眞濟。寛朝。慈慧。頼豪。仁海。尊雲等の高僧達よ同く大魔王と成て今爰に集まり天下を亂すべき評定にて有とぞ語ける雲景恐怖ながら不思議の事哉と思ひつゝ畏り居たれば別座なる宿老の山伏雲景を見て是は何處より來給ふ人ぞと問ければ伴たる山伏しか〳〵とぞ申ける（宿老の山伏は下文に依るにすなはち紀僧正眞濟にていはゆる愛宕山の太郎坊なり）其時この老僧會釋してさらば此間京中の事共をば皆見聞つらむ何事か侍ると問ければ雲景云く殊なる事も候はず此頃はたゞ四條河原の棧敷の崩れて人多く打殺され候事を昔も今もかゝる事候はねば只天狗の態とこそ申候へ其外には將軍御兄弟この頃執事の故に御中不快と申候是もし天下の大儀に成候はむかと貴賤申候とぞ答ける。此山伏申けるは。然る事も有らむ棧敷の轉倒は總じて天狗の態ばかりにも非ず。其故は關白殿は天兒屋根命の御末。天子輔佐の臣にて渡らせ給ふ梶井宮は今上皇帝の御連子三塔の貫首にて御坐す。將軍は弓矢の長者。海内衛護の人なり。而るに彼棧敷は橋勸進に桑門の世捨人が興行する所なり。見物の者と云は洛中の地下人商賈の輩共なり。其に日本一州を治給ふ貴人たち交り雜居し給へば八幡春日山王の怒を含ませ給ふに依て彼地を載く地神驚かせ給ふ其勢に應じて皆崩たるなり。此僧もその頃京に罷出しかども村雲の僧に申べき事有て立寄しに。時刻移りて見ずとぞ申ける。雲景云く金村雲の僧と申して行德權勢世に聞え侍るは如何なる人にて候ぞ。京童部は一向天狗にておはすと申候はいか樣の事にて候やらむと問ければ老僧云く其はさる事也。彼僧は殊に貴しき人なる故に天狗の中より選出して亂世の媒に遣したるなり。世の中亂れば。本の住所へ歸るべきなり（此間印本に僧こそ所多きに村雲と云所に住するなれ雲は天狗の乘物なるに依ての故なりと云文あれど附會の說なる故に一本に依りてさらず）此樣の事努々人に知らすべからず初めて此所に來つれば委細の物語を申なりとぞ語りける雲景不測の事をも見聞物かな。天下の重事未來の安否を聞ばやと思ひてさて將軍御兄弟執事の間の不和は何れが道理にて始終通り

候べきと問へば。三條殿と執事の不快は一兩日を過べからず大なる珍事なるべし理非の事は是非を辨へがたし。此人々身の難に逢ひ不肖なる時はあはれ世を持たらむには政道をも能行はむと思ひしかども富貴充滿の後は。古の有增し一事も通らず上關く下諛ひて諸事に親疎有れば神明の冥鑒にも背き天下の人望にも違ひて我が非をば知らず人を誹り合ふ心あり。適々仁政と思ふ事もさも有らず只人の煩ひ歎のみなり夫仁政と云は惠を四海に施し深く民を憐み國を治むるに親疎を別たず撫育するを云ふ而るに近日の儀。いさゝかも善政を聞かず欲心熾盛にして君臣父子の道をも辨へず只人の財を我有にせむと計る心なれば。矯飾らずと云事なし。神よく知見し御座せば我が企つる事も成らず果報の淺深に依ていさゝか世を取り國を保つ者ありと云へども眞實の儀に非ざれば長久には保ざるなり。君を輕しめ神をも恐るゝ事なき末世なれば其外の政道何事か有べき。然程に惡逆の道こそ替れ猜みもごき合ふ輩。何れも皆亡びむ事疑なし喩へば山賊と海賊と寄合て互に犯料の得失を指合ふが如し。されは近年武家の世を取ること

賴朝卿より高時に至まで已に十二代賤しき身を以て世の主たること本義には非ねども世澆季に及ぶ驗に力なく時と事と只一世の道理に非ず臣君を殺し子父を殺す下剋上の時到れる故に君主も力を得ず。是に依て天下武家と成なり君を遠島へ配し奉り惡を天下に行ひし義時を淺猿と云しかども宿因のある程は子孫光榮せり然れども宿報漸く傾き神明捨給ふ時を得て先朝高時を追伐せらる此必しも先朝の德の至れるに非ず自滅の時至れるなり世も上代。德も今の君主に增り給ひし後鳥羽院の御時は上の威は强く下の勢は弱かりしかども下勝上負ぬ高時が代に上勝下負たる事は運の興廢なり。是をもて心得べしと語ければ雲景重ねて申さく先代運盡て亡びしかばなど先朝久しく御代をば治め御座し候はぬと問ければ。其また子細ある事に侍り。先朝隨分に賢王の行をせむと爲給ひしかども眞實に仁德撫育の叡慮なく。絕たるを繼き廢たるを興し神明を歸依し給ふ樣に見えしかども憍慢のみ有て實義おはし坐さず然れども其程の賢王も末代には有まじければ。暫その御器用に當り運の傾ぶく高時が消方の燈の前の扇とならせ給ひて亡

ぼし給ひぬされど誠に聖明の德おはし坐ねば高時に劣る足利に世をば奪はれさせ給ひぬ今持明院殿は武家に從はせ給ひて偏に幼兒の乳母を憑むが如く。奴と等しく成て御坐す程に還て形の如く安全に御坐す者なり是も御本意には有ねども理をも欲心をも打捨て御坐さば末代に中々御運を開かせ給ふべきなり兎ても角ても王法は平安の末より盡果て武運ならでは立ざるを御了知もなく。仁德聖化は昔に及ばずして國を取らむは御欲心ばかりを先とし。本に世を復すべしとて末世の機分。戎夷の掌に隨べき御悟無りしかば後鳥羽院の御謀徒になりて公家の威勢其時より塗炭に墮しなり。然れば其宸襟を休めむ爲に先朝高時を失給しかども尙公家の代をば取らせ給はぬ者なり。僭も三種の神器を本朝の寶として神代より傳はる璽。國を理する守りも此神器なれば傳はるを以て詮とす。然るに今の王者この明器を傳ること無て位を踐給ふこと。誠に王位とも申難し然れども三箇の重事を執行はせ給へば天照大神守らせ給ふらむと憑敷き處も有なり此明器を寶として神代の始より今に至まで取傳へ坐ますこと誠に神國の不思議は是なり。されば此神國無らむ代は月入て後の殘夜の如し。此末代のしるし王法を神道より棄給ふ事と知べし。此重器は平家滅亡の時に安德天皇西海に渡し奉りて海底に沈られし時。神璽內侍所をば取返し奉りしか其寶劍は遂に沈み失せぬ然れば王法は安德天皇の御時までにて失ひぬる證は是なり。其故は後鳥羽院の始めて三種の重器無して元曆に卽位有しに其末流の皇統繼體として今に御相承あることと佳摸とは申せども思へば彼元曆よりこそ正しく武家を始め置れ海內に則とり君王を蔑如にし奉る事は出來にけれ然れば武運王道に勝し表示には寶劍は其時までにて失にき仍て武威盛に立て國家を奪へるなり。然れども。其盡し後百餘年は武家我意に任せて天下を司ると云へども王位も文道も相殘る故に關東形のごとく政道をも理め君王をも崇め奉る體にて。諸國に總追捕使をば置たれども諸司要脚の公事正稅神佛の本主相傳領には手をかけず目出度かりしに時代純機宿報の威果ある事なれば後醍醐院武家を亡し給ふに依ていよ〳〵王道衰へて公家悉く廢たり。此時を得て神器徒に微運の君に隨ひて空しく邊鄙外土に奔り給ふ。是王威

の盡し證據なり國を受給ふ主に隨給はぬは神明國を守らざる驗なり。神道王法共に棄れたる世なれば上廢れ下驕りて是非を辨ふる事なし。然れば師直師泰が安否。將軍兄弟の通塞を辨じ難しとぞ語りける。雲景重ねて申けるは偖は早亂惡の世にて下上に逆ひ。師直師泰我儘に爲濟して天下を保つべきかと問へば。いや然は有べからず如何に末世濁亂の儀にて。下先勝て上を犯すべし。然れどもまた上を犯す咎遁れ難ければ。下また其咎に伏すべし。其故は將軍兄弟も敬ひ奉るべき君主を輕しめ給へば執事その外の家人等もまた武將を輕しむ。是因果の道理なりされば地口天心を呑むといふ變あれば如何にも下尅上の謂にて師直まづ勝べし是より天下大きに亂れて父子兄弟怨讐を結び政道いさゝかも有間敷ければ世上も左右なく靜り難し何樣天下の大變日を驚かす程の珍事は百日の中を過べからずとぞ申ける雲景怦たる山伏に今かく世間の事を鑒にかけて宣つる人は誰ぞと尋ぬれば彼老僧こそ世に人の持あつかふ。愛宕山の太郎房にて御坐すとぞ答ける尙も天下の安危國の治亂を問はむとする處に俄に猛火燃來て座中の客七顛八倒する程に門外に走出ると思へば夢の覺たる心地して大內の舊跡。大庭の椋木の本に朦々としてぞ立たりける。四方を見廻したれば日已に西の山の端に殘りて京へ出る人多ければ其に伴ひて我が宿坊にたごり來て心閑に彼不思議を案ずるに疑なく天狗道に行にけり是は只に打棄べき事に非ず。末代の物語。かつは當世の用心にもなれかしと思ひしかば我身の刑をかへり顧ず委細に書記して熊野の牛王の裏に告文を書添て貞和五年閏六月三日と載し傳奏に附て進覽しければ事誠しからずと云へども百日の中の大變を指す上は虛否これに過たる證據有がたし姑く是を待見てこそ披露も有べけれ中に憚の事ども多ければ多聞に及がたしとて傳奏洞院相國公賢卿に返し下されける然るに又この閏月の三日に八幡の御寶殿辰刻より酉の時まで鳴動す神鏑聲を添て王城を差て鳴て行く社家是を注進す戌刻に巽方と乾方より電光輝き出て百千の燈を虛空に張るが如くなり南方の光寄合て戰ふ如くして碎け散ては寄合ひて風の猛火を吹上るが如く餘光天地に滿て光る中に異類異形の者見えて寅刻に乾の光退き行き巽の光進み行て卯刻に丑

の光消失せぬ此の妖怪いか樣天下穩ならじと申合ひにけり（園大曆にも貞和五年閏六月三日天晴雲間有光如電同日辰刻以後自酉刻八幡寶前鳴動云々と有）果して雲景が未來記に記せる如く百日を出ざる此年の八月に師直師泰が騷動出來て其後また天下大に亂たること具に太平記に載せるを見べし。

仙境異聞（一名寅吉物語）上之一卷

平田篤胤筆記

文政三年十月朔日夕七時なりけるが。屋代輪池翁の來まして。山崎美成が許に。いはゆる天狗に誘はれて年久しく。其使者と成たりし童子の來り居て。彼境にて見聞たる事どもを語れる由を聞くに。予のかねて考へ記せる說等と。よく符合する事多かり。吾今美成がり往て。其童子を見むとする也。いかで同伴し給はぬかと言はるゝに。余はも常にさる者にただに相見て。糺さばやと思ふ事ども種々きゝ持たれば。甚嬉くて。折ふし伴信友が來合たれど。今歸り來むと云ひて。美成が許へと伴はれ出つ。（美成は長崎屋新兵衞といふ藥商人にて。往し年頃は。予に從ひて有しが。更に高田與清に從ひ。今は屋代翁の門に入りて。博く讀書を好むをのこなり。家は下谷長者町といふ坊にて。余が今の湯島天神の男坂下と云所よりは。七八町ばかりも有べし。屋代翁の家と。美成が家とは。四五町ばかりも隔たれり。）さて途中にて屋代翁に言けらくは。其言おぼろ〳〵として慥ならず。殊に彼境の事をば。祕つゝみて顯に云ざる物なるが。其童子はいかに侍ると云へば。翁云く大抵世に聞ゆる神誘ひの者は然有れど。彼童子は蘊まず談る由にて。既に蜷川家へ行たる時に。遠き西の極なる國々にも至りて。迦陵頻伽をさへに見たりとて。其聲をも眞似び聞かせたるよし。美成が物語也。近ごろ或處にて。誘はれたりし者も祕すことなく談れりと聞けば。昔は彼の境の事の世に漏るゝを忌たるが。近頃は彼の境の事を然しも蘊まず成ぬと覺ゆ。よく問ねて忘れず筆記せられよ。と返す〳〵言はるゝに。余諾ひてまた心に思へるは。現世の趣も昔は甚く祕たる。書も事も。今は世に顯はれたるが多く。知り難かりし神世の道の隈々も。いや次々に明になり。外國々の事物。くさ〳〵の器どもゝ。年を追ひて世に知らるゝ事と成ぬるを思ふにし此は皆神の御心にて。彼の境の事までも聞知らるべき。所謂機運のめぐり來つるにやなど思ひ續けつゝ。間なく美成が許になむ至りぬる。時宜くあるじ居相ひて。彼の童子を呼出し。翁と余とに相見せしむ。然るに彼の童子はも。二人の面をつくつ

く打守りて。辭義せむとも爲ざりしを。美成かたはらに居て。辭義せよと云へば。甚ふつゝかに辭義を爲たり。惜氣なき尋常の童子なるが。歳は十五歳なりと云へども。十三歳ばかりに見え。眼は人相家に下三白と稱ふ眼にて。凡より大きく。謂ゆる眼光人を射るといふ如く。光ありて面貌すべて異相なり。脈を診し腹をも診たるに。小腹實して力あり。脈は三關のうち寸口の脈いと細く。六七歳の童子の脈に似たり。江戸下谷七軒町なる。越中屋與總次郎といひし者の二男にて。名を寅吉といふ。然るは文化三寅年十二月晦日の朝七つ時に。生れたるが。その年も日も刻も寅なりし故に。かく名づけしとぞ。父は今より三年さきに世を退れり。其後は寅吉が兄庄吉。ことし十八歳なるが。少しの商ひを爲て。母と幼き弟妹などを養ひ。細き烟を立るといふ。(寅吉が親兄などの事は、後に余親から其家に尋ねて記せり、また母が言を聞くに、寅吉五六歳のほどより、時々未然に言を發すること有りき、そは文化□年□月、下谷廣小路に火事ありける前日に、家棟に上り居て、廣小路に火事ありといふ、人々見るに何の事もなき故に、などて然は云ふぞと問ひしかば、あればかり火の燃るを人々には見えざるか、疾く逃よかしなど云へるを、人々物に狂ふ如く思へりしが、果して翌日の夜に廣小路燒亡あり、又或とき父に向ひて、明日は怪我すること有べし、用心せよと云へりしを、父は用ひざりしに、果して大に怪我したる事あり、また或時今夜かならず盜人入るべしと云へりしかば、父叱りて然ることは云ふべき物に非ずと制しけるに、果して盜人入たること有り、またいまだ立ことも叶はずて這まはりしほどのことを覺え居て、語り出ることも時々ありき、然るに生れつき疳症にて、幼少の時は色青ざめ常に腹下り夜つばりなどして、遂に成長すまじく思へりしが、今年旅より歸り來ては、いと丈夫になり侍りと語りき、(頭書云事に引れてけがせるがけんくわせずてよかりしと云る事母咄し)未然の事を知たるが奇くて、後に寅吉にいかにして知たりしと探ぬれば、廣小路の燒たりし時は、其前日に家棟より見けるに、翌日燒亡したるほどの所に、炎起りて見えける故、然云ひしなり、父が怪我あるべき事、盜人の入るを知たるなど、何やらむ耳の邊にて、ざ

わ〳〵と云ふ樣に思ふと、其中に何處よりともなく、明日は親父怪我すべし、今夜は盗人入るべしと云ふ聲きこゆると、直に我知らず其の言のごとく口に云ひ出たりと云へりき。)さて寅吉。余が面を熟々見て打笑みつゝ有けるが。思ひ放てる狀にて。あなたは神樣なりと再三いふにぞ。予その言ひ狀の奇しきに答もせずてありしかば。あなたは神の道を信じ學び給ふならむといふに。美成傍より。此は平田先生とて古學の神道を敎授し給ふ御方なりと云へば。寅吉笑ひて實に然るべく思へりといふ。爰に予まづ驚きて。其はいかにして知れるぞ。神の道を學ぶは善き事か惡き事かと問へば。何となく神を信じ給ふ御方ならむと心に浮びたりしゆゑに。然は申侍りつ。神の道ほど尊き道は無ければ。此を信じ給ふは甚宜き事也と答ふ。爰に屋代翁我をばいかに見つると問はるれば。寅吉しばし考へて。あなたも神の道を信じ給ふが。なほ種々ひろき學問を爲給ふらむと云ひき。(頭書云神といはれ佛てふ名も願はずてたゞよき人になる由もがな屋代翁)是なむ己が此の童子に驚かされたる始なりける。偖先神誘ひに逢たる始めを尋ぬるに。文化九年の七歲に成けるとき。池端茅町なる境稻荷社の前に。貞意といふ賣卜者ありしが。其家の前に出て日々賣卜するを立寄りて見聞くに。乾卦出たり坤卦出たりなどいふを。此は卜筮といふ物は。くさ〴〵獸の毛を集め置て擬ふ法ありて。其毛を探り出し。熊の毛を探り得れば。いかにとか。鹿の毛を探り出ればいかにとか。其探り出たる毛により判斷する事なるべく思ひて。頻に習はまほしく覺えしかば。或日卜者の傍に人なき時を窺ひ。いかで我に卜筮のわざを敎へて給はれと請しかば。卜者我を幼き者と思ひて。戲言したるが。此は容易に敎へがたき態なれば。七日がほど掌中に油をたゝへ。火を燈す行を勤めて後に來るべし。敎へむと云ふ故に。實にも容易には傳ふまじく思ひて家に歸り。父母も誰も見ざる間を忍びて。二階に上りなどして密に手燈の行を始めけるに。熱さ堪がたかりしかど。强ひて勤め七日にみちて。卜者の許に到り。手の此く燒爛るゝばかり。七日が間手燈の行を勤めたれば。敎へて給はれと云ふに。卜者たゞ笑ひのみして敎へざりし故に。いと口惜くは思ひしかど。詮方なく。倍々此わ

ざの知たくて。日を送りけるに。(この貞意と云る卜者は後に上方すぢへ行たりといふ)其年の四月頃。東叡山の山下に遊びて。黒門前なる五條天神のあたりを見て在けるに。歳のころ五十ばかりと見ゆる。髭長く摠髪をくる〳〵と櫛まきの如く結びたる老翁の旅裝束したるが。口のわたり四寸ばかりも有らむと思ふ小壺より。丸藥をとり出して賣けるが。(平兒代答に五六寸とあれど四寸ばかりなりと寅吉後に云へり)取並べたる物ども。小つゞら敷物迄。悉くかの小壺に納るゝに。何の事もなく納りたり。斯て自も其中に入らむとす。何として此中に入らるべきと見居たるに。片足を踏入たりと見ゆるに皆入りて。其壺大空に飛揚りて。何處に行しとも知れず。寅吉いと奇しく思ひしかば。其後又彼處に行きて。夕暮まで見居たるに。前にかはる事なし。其後にも亦行きて見るに。彼の翁言をかけて。其方もこの壺に入れ。面白き事ども見せむと云ふにぞ。いと氣味わるく思ひて辭ければ。彼の翁かたはらの者の賣る作菓子など買ひ與へて。汝は卜筮の事を知たく思ふを。それ知たくは此の壺に入りて吾と共に行べし敎へむと勸むるに。寅吉常に卜筮を知たき念あれば行て見ばやと思ふ心出來て。其中に入たる樣に思ふと。日もいまだ暮ざるに。とある山の頂に至りぬ。其の山は常陸國なる南臺丈と云ふ山也。(此の山は、加婆山と、我國山との間にありて、獅子鼻岩といふ、岩のさし出たる山にて、いはゆる天狗の行場なりとぞ。)然るに幼かりし時のことなれば。夜に入りては。頻に兩親を戀しくなりて泣しかば。老翁くさ〴〵慰めしかど。なほ聲を揚て泣たる故に。慰めかねて。然らば家に送り歸すべし。かならず此の始末を人に語る事なく。日々に五條天神の前に來るべし。我送り迎ひして。卜筮を習はしめむと言ひ含め。背負ひて眼を閉させ。大空に昇りたるが。耳に風あたりて。ざわざわと鳴る樣に思ふと。はや我が家の前に至りぬ。こゝにても。返す〳〵此の事人にな語りそ。語らば身のため惡かりなむと誨へて。老翁は見えずなりぬ。斯て我はその誡めを堅く守りて。後まで父母にも此事を言はず。さて約束の如く。次の日晝過るころ。五條天神の前に行けば。彼の老翁來り居り。我を背おひて山に至れるが。何事も敎へず。彼此の山々に

も連行きて。種々の事を見覺えしめ。花を折り鳥をとり。山川の魚など取りて。我を慰め暮相になりては。例の如く背負ひ歸せり。我その山遊びの面白さに。日々に約束の所に行きて。老翁に伴はるゝ事。日久しかりしかど。家をばいつも下谷廣小路なる井口といふ藥店の男子と伴ひて遊びに出る風にて出たりき。又或時の事なるが。七軒町の邊を謂ゆる。わい〳〵天王とて。鼻高く赤き面をかぶり袴を着し太刀をさし。赤き紙に天王と云ふ二字を摺たる小札をまき散して子共を集め。天王樣は囃すがおすき。囃せや子ども。わい〳〵と囃せ。天王樣は喧嘩がきらひ。喧嘩をするな間よく遊べ。と囃しつゝ行くを我も面白く。大勢の中に交りて共に囃して遠く家を離るゝ事も知らず。今思へば本郷のさきなる妙義坂といふ邊まで至りけるに。日は既に暮たれば。子共はみな歸りたるに。札を蒔し人。路の傍によりて面を取たるを見れば。いつも我を伴ふ翁にぞ有ける。爰に我を送り歸さむとて。家路をさして連來りけるが。茅町なる榊原殿の表門の前にて。我が父の我を尋ねむと出たることを知りて。我が父尋ね來れり。此の事かならず言ふこと勿れとて。父に行逢ひ此の子を尋ぬるに非ずや。遠く迷ひて居たる故に連來れりとて渡せば。父なる者大きに悦びて。名と處とを問ふに。何處の誰とあらぬ名を云ひて別れ去りぬ。翌日その處に父の尋ねたるに。元より虚言なりしかば。其處に然る人はなしとて空しく歸れり。(篤胤云凡て諸社の札配り、わい〳〵天王など云ふ物に山々の異人も稀に出ること、下に委く記せるを見るべし、さて此事を母に問へば、晝飯前より五時まで歸らず、連たる人は。神田紺屋町の彥三郎といふと答へし故に、翌日與總次郎、酒を持て紺屋町を尋ねしに、然る人なかりし故に、ほいなく思ひて、同町の酒屋に知たる者ありし故に、賴みて悉く尋ねたるに、無りしと云へり。)さて大抵日々の如く。伴はれ行たる山は。始めは。南臺丈なりけるに。いつしか同國なる岩間山に連行きて。今の師に付屬したるに。先百日斷食の行を行はしめて。(頭書云老人の行方師の名共第の事)後に師弟の誓狀を書しめたり。爰に我かねての念願なれば。卜筮を敎へ給はれと云へば。師のそは甚易き事なれど。易卜は宜からぬ訣あれば。まづ餘

事を學べとて。諸武術の方。書法などを敎へ。神道にあづかる事ども。祈禱呪禁の爲かた。符字の記し方。幣の切かた。醫藥の製法。武器の製作。また易卜ならぬ。種々の卜法。また佛道諸宗の祕事經文。その外種々の事を敎へらる。其はいつも。彼の老翁の送り迎ひたれど。兩親はじめ人にはかつて語らず。敎を受けることどもゝ。明さざれば知る人なく。殊に吾が家は貧しければ。世話なく遊ひに出るを善として尋ねず。また十日廿日五十日百日餘りなど。山に居て家に送り歸されたる事も。折々有しかど。いかなる事にか。家の者ども。兩親はじめ。我が然ばかり久しく。家に居らずとは思はで有したり。斯く山に往來しつる事。七歳の夏より十一歳の十月まで。都て五年の間なるが。此の間に師の供をなし。また師に從ふ餘人にも伴はれて。國々所々をも見回りたり。(此ほどの事を母に問へば、筆こまたこなど、持遊びを持來れりと云り。)さて十二十三の歳には往來せず。唯をり〱師の來りて事を誨らるゝのみなりき。然るに父は我が十一歳になる八月より煩ひ付たり。其の病中に師の我に誨へて。(頭書云○めしくはぬ病氣○先和尚びくにゝたゝられ、氣ちがい和尚の氣に入る事、とらならではめしもくはず○ゆうれいをうつ○禪僧問答に來る○かこひものゝこと後見ふぢ寺根ぎしえん光寺)禪宗日蓮宗などの宗體をも見覺えよと有し故に。父母に我は病身にて商ひ覺束なければ。寺に奉公して後に出家せむと思ふと云ひしかば。父母ともに佛を信ずる故に諾ひて。此の年の秋より池端なる正慶寺といふ禪宗の寺に預けぬ。此の寺にて彼の宗旨の經文など習ひ宗體をもほゞ見聞て。極月家に歸れるが。文化十五年の正月より。亦同所の覺姓寺と云ふ富士派の日蓮宗の寺へ行たるが。この二月に父みまかりたり。此の寺に居たる時に或人の來て。大切なる物を失ひたりと人に語るを。傍に聞居たるに。誰ともなく耳元にて其は人の盜みて廣德寺前なる石の井戸の傍に隱し置たりと云ふ聲聞えし故に。其の如く言ひしかば其人驚きて歸りけるが。果して其處に有しが不思議なりとて人々に云ひし故に。彼れ此れと人に賴まれて卜ひ。また咒禁加持なども爲たるに。悉く驗ありし中に。富の題付とかいふ物の番を。數度云ひ當たり。其は來て問ふ

人々題付と云ふことは言はず。千番ある物の中。一番を神社に納めむと思ふ。幾番が宜からむと云こと。卜ひ給はれと云ふ故に卜ひて。幾番が宜しと云ひしかば。前後すべて二十二三人に頼まれたるに。十六七人は取れりと云ふ。六七度は當らざれど。其の内五度などは。我がさし教へたる番札は早く人の手に入れる故に外れたりとぞ。斯在しかば諸人種々の事を頼み來りて煩かりし故に。隱れて人に相はざる樣にせしかど。なほ大勢來りしかば。住寺驚き此狀にて世に弘まらむには。寅吉は弱年なれば。我が怪き術を敎へて物する如く人の思はむこと。心遣ひなりとて家に歸しぬ。此の後一月ばかりは家に居たるが。おこゝし四月よりまた師の敎へにて日蓮宗なる宗源寺といふ身延派の寺へ弟子入りして。此の寺にて剃髮したり。然るは彼の宗に剃髮して眞の弟子とならざれば。見聞しがたき祕事ごもの多かれば也。然るに文政二年五月二十五日に師の來りて。伴はむと云はるゝ故に。母には人に誘はれて伊勢參宮する由を云ひて。師と共にまづ岩間山に至り。夫より東海道を行て江島鎌倉の邊を見て。伊勢南宮を拜み。西の國々なる山々を見廻り。八月二十五日にひとまづ家に歸り。九月になりて。また師の來りて伴はむと云はるゝ故に。此の時も母に神社周りに出る由を云ひて。師と共に遠き諸越の國々までも翔り行き。御國の地に歸りて。東北の國々なる山々を見廻りたるが。如何なる事にか十一月の始めに妙義山の山奥なる。小西山中と云ふ處の。家いさゝか有りて。人跡絕たりとも云ふべき處に捨置きて。師は何地ともなく行かれし故に。其の處の名主とも云べき家を賴みて。二三日待居たれど。師は來られず。然るに其家に何處の人なるか。名も知らねど五十歲ばかりと見ゆる老僧の來れるに。吾は江戶の者なるが。神道を學ばむとて國々を周り道に蹈迷ひて。此の處に來れる由を語りしかば。老僧さゝて其は殊勝なる心也。然も有らば我が知れる人に神道に委しき人あり。其の許に伴はむとて。筑波山の社家なる白石丈之進と云ふ人の許に伴ひて。此の童子は神道熱心の由なれば。止めて敎へ給はれと賴み置て去れり。扨丈之進といふ人の神道は蟇子流といふ流にて。吉田流よりも猶佛法を混じたる神道にて。面白くは無かりしかど。

子分にして名を平馬とおほせて懇に敎ふる故に。此をも學ばむと思ひて此の家に年を越して其の道を聞たり。然るに三月の始めに古呂明の來りて。師の居る山に伴はむと云はるゝに甚嬉くて。丈之進に東國すぢの神社周りに出たしと暇を請ければ。通り手形に印形を押たるを授けて。一人旅は宿かさゞる定めなれば。此の手形を見せて宿を請ふべしなど敎へて出しぬ。其の手形の文面は左に擧るが如し。

差出し申一通之事、

一此度私悴平馬與申者。幟成者に御座候間。於神前國家安全萬民繁榮之令御祈禱。近國近林巡行に差出申候。若途中にて御神職衆中江御目に掛り候節は。私同樣に御取持被下候樣に奉賴上候。將又此者何方にて行暮候共。無御心置御一宿之程奉希候以上

筑波六所社人

文政三歲三月日　白石丈之進印

御神職衆中

村々御役人衆中

と記して上包の紙に。白石丈之進內同平馬とぞ書たりける。爰に古呂明に伴はれて。岩間山に行き師に見えしかば。猶種々の事ども敎へ授けらる。然るに我は去年の九月より此三月まで。七月ばかりも母に別れたれば。今頃はいかにして居らむ。兄はいまだ弱年なり。父のなき跡にはいかに暮すらむなど思ひ出て打ふさげる有狀を。師の見咎めて。汝は母の事を思ふ狀なるが。無事にて居れば案じ過す事勿れ。其の有狀を見よと云はれけるが。夢とも現とも山とも家とも辨へざるが。母と兄の無事なる有狀の幟々と見えたるが。言をかはさむと思ふ程に。師の聲の聞えたり。此に驚きてふり返り見れば。師の前にぞ有ける。爰に師の言はれけるは。今より暫く家に歸るべし。さて里に歸りたらむ上にも。人はたゞ一心こそ大事なれば。搆へて邪趣の道に踏入ることなく。神の道の修行に心を凝せよ。然れど佛道をはじめ。我が好まざる道にても必々人に惡しと爭ふ事勿れ。汝が前身は神の道に深き因緣ある者なれば。吾また影身にそひて守護すれば。兼て敎へたる事どもの。世のため人の爲となる事は施し行ふべし。但し其人を得ざる限りは。謾に山にて見聞したる事を明し云ふ事勿れ。また我が實名をも人に明さず。世に

云ふまゝに天狗と稱し。岩間山に住む十三天狗の中にて。名は杉山組正といふ由を云ひ。古呂明の事を云ふときは。姑く白石丈之進と稱し。汝が名も我が授けたる嘉津間といふ名は名告らず。白石平馬と稱せよと誨へて。平馬の二字を花押に作るすべを教へられ。師みづから古呂明左司間と共に送られしが。途なる大寶村の八幡宮に參詣せしめ神前に奉納の刀劒の夥しく有るが中を擇びて。一振の脇指をとりて指料とせしめ。空行して暫時の間に人足しげき大きなる二王門ある堂の前に至りぬ。こゝに古呂明の此より汝が家にほど近し。一人にて行けと云はるゝ故に。此は何處にて侍ると問へば。淺草觀世音の前なりと云はるゝに。驚きて見れば實然にぞ有ける。空行に伴はれ。ふと此處に置れし故に。何處と云と思ひ惑へりしなり。此にて師に暇乞して。一人家に歸れり。其は三月二十八日なりけり。さて母と兄とは。また寺に行て。出家を遂よと勸めしかど諾はず。然るは我生れつきて。三寶の道は惡なるを。前に剃髮したるは。師命にて。望むことの有し故なり。然れば今は還俗せむとて。下山したる三月より六月まで家に居たり。然るは我が髮は。去年の夏宗源寺にて剃たる儘の。いが栗頭にて。結び舉ること能はざれば。其を延さむとてなり。然るに我が家の宗旨は。一向宗にて。母も兄も明暮に阿彌陀佛を稱へ。神をきらひ卑しめて抹香くさき事どもを。常の所行とするを。吾はそれに替りて。太神宮の御玉串を棚になほし。手を拍ち拜すれば。兄は穢はしとて鹽をまき散しなどするを。我もまけず。佛壇こそ汚けれと。唾など吐し故に。兄弟の間宜しからず。山より持來つる物ども。天氣を見る書。その外雜々の法を記せる書。又藥方の書なども。母と兄とに皆燒捨られ。師の賜へる指料をも。古鐵買に賣拂はれたり。然るに六月の末頃は。既に髮も生延たりし故に。野郎頭となり。聊か由ありて七月より或人の家を主としけれど。我元より大抵は山に育ちて。現世の人に使ふる道を知らず。僕の態にも習はねば。馬鹿々々と云はれ役にたたずとて。八月の始に返されつ。是よりまた少しの緣にて。上野町の下田氏に居たりけるに。山崎美成の來りて。ほゞ我が事をきゝ。珍しがりて我が許に來れと云はれし故に。母にも云はず。九月七日より

彼のぬしの家に往き居て。事の因みに少か山の事も。我が身の上をも語りしかば　人にも語られし故に。人々聞傳へて多く來られしが。荻野先生　また山崎ぬしなどの如く　佛法を好み信ずる人には　問はるるまに〳〵。其道の事ども　印相の事など答へて師の誡めの如く。佛法を惡き道とは言ざる故に　然ばかり佛法の事を知たれば　俗になるは惜き事なり。我等いかにも世話すべし。僧になれと屢々勸められしかど。我は師の言の如く。實に宿縁ありし事と見えて。佛法を好まざる故に辭退して在けれど吾が誡の心を語る人なく。事を辨へざる徒は。何くれと惡ざまに評し云ふ由なども聞え。また我は世間の交らひ世の所業も知らざれば。いかにして宜けむと。吾身ながらに持あぐみたる心地して。をり〳〵火の見に昇り外に出て。岩間山の空を長日て日を送りけるに。其月の晦日に。美成の店なる者の使に行くに伴はれて出けるが。途にて同友高山左司間に行逢たり。然れど人と伴ひたる故に互に物も云はて別れしが。決めて師の使ひに我が方へ來つるならむと。心に待て在けるに。其夜果して外にて我を呼ぶ聲きこえし故に。それとなく出て見れば。左司間にて。師の言遣されたるは。近き間に汝が便となる人有れば。然しも物思ひする事勿れ。猶また極月三日より寒に入る故に。例の如く三十日の行あれば　十一月の末までに登山せよ。然れど師もし讃岐國の山周りに當らるれば。寒行は休みなる故に。また里に歸されむとの事なり。と云ひ置きて歸りぬ。此に力を得て。美成ぬしに同友左司馬が來て。極月には例の如く寒行はじまる故に。十一月の末までに。登山せよと云ひ遣されたりとのみ語りて在けるに。十月朔日に。大人と屋代先生と訪ひ來まして。何くれと問給へる事どもの。人の問へるとは事替れるが。心に應へ。とに大人の美成ぬしを制して　僧に成れとは勿勸めそ。入立たる道を遂しめよと言へるが。いと嬉しく辱なく。我許へも來れと返す〳〵言を殘し給へりしかば。直にも參らばやと。心すゝみて。師より左司間を使ひにて。近きほどに汝が便となる人有りと云ひ遣されしは。此人々の事ならむと賴もしく。時を待て侍りしと。後に委しく語りけり。

十月六日に屋代翁より。けふ夕方に美成が寅吉を伴

ひ來るよし云ひ遣されたるに。訪ひてまた種々の事どもを尋ね。さて美成に。此童子山風の誘ひ來つれば。疾く歸らむも計りがたし。我が方へも。いかで伴ひ呉よと言へば。明日伴はむと云ふに。甚嬉しく。佐藤信淵。國友能當なども。寅吉に逢はまほしく云ひし故に。其夜に消息すれば。皆悦びて七日に早く來そへ。小島主よりは。童子に饗せむ料にとて。鮮けき魚など賜はりて。待けるに。夕方に美成より手紙をもて。今日は伴ひかぬれば。時を見て伴ひ侍らむと。云ひ遣せたるに。集へる人々空しく歸りぬ。我が家の者どもゝ。今や來ると待けるに。斯在しかば。いと本意なしと力を落す。己れつら〳〵思ふに。美成言宜くは云へど。我が方へ遣すを惜む狀に見ゆれば遂に連來らじ。其間にもし山に歸りてば。弟子どもも本意なく思ふらむ。振はへて彼が宅へ物せむと。八日の晝まへに。妻と岩崎吉彥。守屋稻雄。とを連れて。美成がり行きて。昨日は待て在けるに。來ざりしかば。本意なく思ふ故に。家内の者ども連れて來れり。いかで童子に逢せ給はれと云ひ入るゝに

美成が母出て。美成は外へ出たり。童子は今朝その母の方へとて出行たりと云ふに。また力なく歸れるが。(後にきけば、此時童子は奥に居て、己が店まで行たるを、見聞しつれど、隱れ居よと私語く故に、逢まほしくは思ひしかど、詮方なかりしと云へり。)途にて連たる者ども。みな童子は母の許へ行たる由なれば。彼の方へ直に尋ね給はゞ。いかに有らむと頻に勸むるにぞ。己れも然る事に覺えて。七軒町へは間遠からねば。皆うち連れて尋ねつ。辛ふじて其家を探り得たるに。裡住居のたゞ一間ある家にて。母のみ居たり。寅吉が來つるかと問ふに。兄といさかひて下田氏へ行たる後は。たえて來らざる由にて。美成が許に居る事さへも知らざりける。然れば美成が方にて。母が方へとて出たりと云へるは。早く僞りにぞ有ける。直に歸らむも慽しければ。寅吉が生立。また異人に誘はれたる事の始末など問ふに。生立の事は委く語りしかど。神誘ひに成たる始末をば。此頃になりて人の言によりて。ほゞ知たる趣なり。偖この日も遂に童子に逢はで空しく歸りぬれど。母の物語りに。童子の生立など種々聞たるに。なほ

種々問まほしく思ふ心いや増りて。美成がしわざの心憎くは思へど。此は彼が心を取るにしかじと。物など贈り、また屋代翁にも頼み。親から行きもして。心を取しかば。十日の書なりしが。手紙をもて明日の夕方參るべしと云ひ遣せたり。此時しも佐藤信淵。來合たるが共に悅び。六日の日に國友能當が吾と共に遠き四つ谷の里より。態と來て空しく歸れること氣の毒なり。我が方より明日つとめて。消息せむと云ひて歸りぬ。十一日の朝早く屋代翁がり。夕方に美成が童子を伴ひ來るよし消息す。然るに下總國香取郡笹川村なる須波社の神主。五十嵐對馬。もの習ひにとて江戸に出て。此日我が許へ來れり。八つ半時に屋代翁その孫なる。二郎ぬしを伴ひて來らる。國友能當。佐藤信淵も來り。折よく青木並房も來合たり。小島氏家内みな來らる。塾には竹內健雄。岩崎吉彥。守屋稻雄などあり。申刻過れど美成來らねば。皆待あぐみけるに。屋代翁消息したゝめ。使を遣はさむとしける時に。童子を伴ひて美成來りぬ。此ぞ寅吉が我が許へ來つる始なりける。倩童子にかねて約しつる岩（石）笛を見せけるに。自然の狀にて音の高く入るが。甚く心に應ひて悅ぶ事限なく。吹入るゝ音もよく入りて。止る期なくぞ吹鳴しける。此日問へる事どもは云々の事などなり。皆感じ驚く事どもなるが。中にも鐵炮ありやと尋ぬるに。鐵炮は世にある常の鐵炮なるが。外徬は聊か異にて。大きなるも小きもあり。また風をこめて打つ鐵炮もありと云ひ出たるに。我母人も此頃國友子が風炮にいたく驚きをるに。此を聞て更に驚きて貌見合せける中にも。國友能當は殊に甚く驚きぬ。これ己と共に仙炮の事を問へる始なり。（然るに此事におきては、己が尋ぬるよりは、國友子が尋ぬるさま、然すがに其得たる道ゆゑに、意得る事早き故に、此は能當に委ねて問たる趣、圖に著せるが如し、實に此事は己いかに思ふとも、しか明には問明しがたき事なるを、國友無らましかば、あたら仙炮の世に傳はらずかし）また此時。試に奉書美濃紙などを出して。物書しめたるに。運筆凡ならず。人々此にも驚きぬ。是ぞ童子が大字を書たる始なりける。（此の前にも、事の因に、いさゝかは書つれど、たゞ半切などに、小字を書たるまでの事なりしかば、見苦しき故に誰も美しき大

字を書得べしとは思はず、寅吉みづからも、世間の文字はいくばくも知らず、山にて習ひたる字は、世間の字と形の異なるを、人の笑ふべく思ひて、書ざりし由なり、細字を、世間に書く狀に書得ざる事は、山にて手習ふには手に砂を抓みて習ひはじめ、いまだ小字を書ことは習はざりしと云へり、さて童子が書、またその運筆をば屋代翁をはじめ書に賢き人々は皆驚き稱する事なり、猶次々にも此事の出るを見るべし。）倩何くれと物語るほどに。早くも戌刻になれば美成は歸りを急ぐ由にて暇を乞ふ、いと殘多く思ひて、今しばしと止むれど止まらず。こゝに長笛を製らしめて世に傳へたく思へば、また近き程にと返す〲云へば。諾ひて伴ひ歸りぬ　翌十二日に岩崎吉彥を使ひにて。昨日の夜の謝を言しめ　貸さむと約したる鉗狂人の書を持たせ遣し。更にまた笛製らむ料の竹を求めて待居らむ。近き程に童子を貸給へと云ひ遣りけるに。間もなく童子を伴ひて走りて歸りぬ。いかにと問へば吉彥云く大人の宣はせる如く申して侍ればゞ美成が母出て。寅吉は流行子にていと鬧がしく今日も早く美成と伴ひて他へ行たりと云ふ間に。童子は我が笛作る竹を求むといふ聲を聞て奥間より走り出て　笛の竹買はむとならば。我も共に行かむと云ひて。外にかけ出たるに。美成が母は甚心苦く思へる狀に見えつれど。又しも他へ出たりと云へるが憎さに。いざやとて伴ひ侍りと笑ひつつ云ふに　予もおかしく。常には汝が遠慮なきを叱りたれど　今日のみは遠慮の無きが用に立けりと云ひて笑ひぬ。然るに童子は辭義もせず　來るとやがて神前なる岩笛を吹鳴し。かばかり自然の面白き物はなしと悅びて。また止むる期なく。人言の耳にも入らぬ狀なるを。菓子など與へ。予も共に種々の戯れ遊びなどして見合せつゝ。岩笛の成れる始めの考へ。石劍の事矢ノ根石のこと。石を造る方。また石をつぐ法　月に穴ありと云へること。星を氣の凝れる物と云へる事。空行の委しき事ども　人魂の行方。鳥獸の成行きなどの事を問たりき。此日晝前に來合たるは五十嵐對馬。竹內健雄が母刀自などなり。然るに予が家のまた隣にて。所謂はごと云ふ獵事して。數丈なる高木の枝に鳥黐(もち)をつけ。媒鳥を出して日々に鳥を捕るを。予が妻の母なる人の。常に無益の殺生

と厭ひて在けるに。をりしも鵯のかゝりければ。居合たる者ども立見て。また鳥のかゝりつると云ふを。童子聞て今の間に其鳥を放ち飛して見せ參らせむ。茶椀に水を賜はれと云ふに。與へつれば我が書齋の椽側に立居て。太刀かきの眞似などし。口に何やらむ唱へつゝ。茶椀なる水を指先にてはじき注ぎ。吹飛す狀をなす。爰に己も對馬も立て見るに。體も羽も多く指たる枝にひしとつきて。少しも働かず。殊に我が書齋よりかのはごの所までは三十間餘りも有れば。心中に。いかに神童なりとも。彼の所までは咒ひとゞくべしとも覺えず。放ち得ざらむには。恥見する事ぞと。此を放つ事能はじと思ひて。彼鳥を飛しては。捕人の本意なく思ふべし。止めよと云へど。童子はひたすら咒ふを。人々に目合して。傍より然しも促さしめず。對馬と予とは。わざと知らぬ狀にて在けるに。立て見居たる者どもの。すわや鳥の片羽の放れたりと云ふに。予も對馬も立て見れば。右の羽がひ誠に放れて。見るが間に左の羽がひも。體も放れて下りたるが。また中なる小枝の多く指たるはごにつきたり。甚惜き事と見るに。童子は猶も咒へば。また下なる枝に落止まり。羽づくろひして飛去りぬ。其落たる狀を見るに。黐は蛛の糸の如く引たりき然れば呪ひにて力なくうすく成れりと思はる。人々甚く感ずるに。童子は更に珍しとも思はぬ狀にて。いざ竹買ひに行かむと云ふ。己云く其は今に我も共に行きて買ひ來るべし。其前に。己れ常に風神を信仰にて。驗を得たる事數々あれば。いかで其幣を切りて得させよと云ふに。明日に爲給へと辭むを。しひて請ひて。紙と刀物を出せば。なま〱に諾ひて。切かけたるが。切さして數度立て虛を見て。今日はまづ見合せ給へと云ふを。いかにと問へば。風神の幣を切る事は大切の傳を受たる事なれば。切るまゝに東の方に雲起りて。其雲西に渡れば風吹きて。終に雨降るなり。然ては竹を買ひに行こと能はざる故に。明日に爲給へとは申すなりと云ふ。爰に己云ひけらく。然ばかりの驗あらむと思へばこそ請つれ。よし雨降り風吹くとも。何てふ事か有らむ。我みづから買ひに行かむと云へど。なほ辭むを猶强るに。止事を得ず。左右に虛空を見て氣遣ひつゝ。切畢て神をうつし。此を用ふる時のしわざをも傳へ

て。神籬に納めたる程に。はや一點も曇なき青空に東の方より言ふが如く雲起りて。西に渡らむとし。既に風も吹出たり。寅吉さればこそと騒ぎて。切たる幣をまづ出し給はれと云ふを。己なほ辭みけれど。強に云ふ故に出せば。しばし祈念してまた納めしめ。夕暮まで移したる神功を封じ奉れり。其間までは雨風あらじ。然れど暮相には起り候はむと云ひき。さて稲雄を供にて。寅吉を伴ひ筋違外なる竹川岸へ竹を見に行て。往來の途々聞ける事共は。七韶舞に用ふる。リンと云ふ琴の事。短笛のこと。羽扇のことなどなり。斯て竹をとゝのへ歸りて。其日來れる番匠に竹を九尺と一丈とに切らせ。洗はせ拵する程に。小島主も來られて。己また健雄。稲雄。對馬らと共に。舞の事尋ねて在けるが。既に未の下りと覺ゆる頃に。美成が許より急ぎの用あれば。寅吉を此使と共に歸し給へと云ひ遣せたり。いと殘多けれども詮方なし。寅吉。本意なげに明日また參るべしと。心を殘して歸りぬ（かくて此の日のくれあひに、果して風出で氷雨降つ。）さて此夜は更なり。翌る十三日の夜にも。門人どもの打寄れば。たゞ寅吉の噂のみをするを。己も共に。間なく山へ歸ると云へば。歸らぬ間にいかで笛をば製らせたき物なり。然るはおのれ音曲の事は得知らず。元より謂ゆる好事に種々の物集むる事は好まねど。幽界にもかゝる物は有けりと人に知らしめ。彼界の道の八十隈とき明さむ其證ともなるべき物と思へばなり。然れど美成が甚く。童子の我が許へ來る事を惜む狀なれば。遂に笛を作りはてじと歎息しけるを。健雄。稲雄は殊に心苦しく思へる狀に聞居つるが。十四日の朝にて。門人どもは朝ごとに我が前に出て朝の機嫌を問ふを。今朝しも健雄と稲雄が見えざるは何處へ行つらむと思へるに。辰の半刻ごろに歸り來れり。何處へ行つると問へば。二人が云く笛を作りはてじと大人の歎き給ふに。己等もしか思へば。二人が語り相ひ。童子の母兄などに聞けば。美成が許に童子の居る事さへも知らぬ狀なり。然れば美成は。童子の主と云ふにも非ず。然れば童子の母と兄とに語りて。童子を大人の許に呼てむと議りて。今朝早く彼の宿へ行きて。兄莊吉を美成がり遣はして。童子に逢しめ。宿に用あれば歸れと云はしめたるに。彼の童子は元より家に居

る事を嫌ふ故に來らずとて。兄は空しく歸れるに。二人が力なく歸り侍りと云ふ間に。日々に來る番匠の今日も來れるが戸口にて。彼の小僧どの一人今此の門前を七軒町の方へ周章たる狀に馳て通りつと云ふに。二人は立上りて。それ留めむと馳出たるに童子は飛ぶが如くに。はや半町ばかりも行過たるを。二人も後より疾く追及て。何處へ行くと問へば。今より山に出立つなり。其につき急ぎの事ありて。宿へ行くよしを云ふに。二人は。さてこそと驚きて。しばし立寄れと云ふに。承引かざるを。左右より手を取りて。まづ我が家の入口まで伴ひ來て。其由を云ふ。爰に己も立出て。兼ては十一月の末までに登山する由云へるに。如何して發足のしか急になりしと問へば。俄に變事の出來し故に。今日急ぎて發足せまほしく成れり。其につき。また登山の時に必ず持來れと師の命ありし一通を。宿に殘し置たれば。取に行くなり。放ち給へと云ふに。己もあきれて其面を見れば。眼もさか立て物狂しげに見ゆるを。笛を作らざるが餘りに憾くて。其事を云ひ左右の手を取たる健雄。稻雄は。まづ好みの岩笛吹きて心を靜めよなど云へど。耳にも聞入れず。引放ちて馳り行かむとするを。二人して抱き上れば。童子も少し困りたる狀にて。然らば今の間に笛作らむ。作り畢たらむには。速に歸し給ふべし。然るにても家に置たる一通のこと。氣遣ひなれば。其を取りて來侍らむと云ふに。稻雄がそは我とりて來らむと云へど。その在所しれねば。我行かむとて立出るに。健雄。稻雄は。また見失はむ事を思ひて。共にそひ行き。母と兄とに山へ發足する由を告げ暇乞せしめたるに。兄は別を惜しみて泣くを。母はいと思ひきりよく。斯く我儘に生れたる者なれば如何にせむとて。肌着すまし物などさすがに取出て與ふるに。山へ行きては我々如きは服物を重ねず。同じ物を二つ持まじき掟なれば。入らずとて何も受ず。かの一通を取出し。兄は別れの盃せむとて取出たるを。入らざる事と返り見もせず。健雄稻雄にいざ參らむと云ひて家を出しとぞ。(此一通の事、甚床しくて請見れば、かの白石丈之進が授けたる一通にてぞ有ける、此を大切にせる由は既に上に記せり。)偖我が家に來れば。やがて笛作りかゝり。一丈と九尺の雌竹の節をば何にして拔らむなど人々

のいぶかしみ云ふを。茶椀に水と火箸をと乞ひて。節間に火箸を入れ水を注ぎ入れつゝ。ひたと石に突當れば何の事もなく拔たるを。篠竹の長きを入れて上下したれば。中に殘れるも美しく通りぬ。斯て穴の間の寸をもりて。鼠齒の錐もてもみて忽に長笛二管を作り畢て。然らば發足せむと云ふを。家内の者ども。又來相たる小島主。佐藤信淵。五十嵐對馬。小林元二郎など何くれと。まぎらし石笛を吹しめ。菓子などすゝめて心を取れば。少しは和みつゝも落つきがてに。ともすれば駈出むとするを。猶逗めて短笛をも作らせたく思へど。詮方なかりしが。ふと昨日伴信友が來つるに。童子の噂をして石笛を甚く悅べる由を語りしかば。然もあらば君のかねて賜へる蘆根石の笛を與へばいかに有らむと云へりし事を思ひ出て。我が岩笛よりは。甚く少けれど。音色は面白き石の笛あり。此はおのれ去年上總國にものしける時に。濱邊にて二つ拾ひ得たり。其を屋代翁と伴信友とに贈りたるが。汝の石笛を好むよしを語りしかば。信友が笛を與へむとの事なり。其を今取りに遣さむ。使の行きて歸るほどを待べしと云へば。然も有らば。しばし待候はむ。然れど先生の得手なる足どめの咒ひなど爲給ふなど云ふに。岩崎芳彥を急ぎ立て信友がり遣しつ。(信友は酒井若狹守殿の藩にて。州五郎といふ、殊に親しく交らふ友なり、牛込矢來下といふ所の中屋敷に住すれば、余が所よりは一里半ばかりも離れたるべし。)然るにおのれ童子が十二日の夕がた。我が家を歸れる時までは。我をしたふ狀に見えけるに。今日は甚く心遣ひなる狀にて。歸らむとのみ爲るが不審く。はた得手なる足どめの咒ひ爲給ふなど云へるが。心にとまりて今日の有狀只ならず。故こそ有らめと尋ぬるに。笑ひて言ざりしを強ひて問へば。先生は種々の咒禁を知り給ふ故に。我を止めて山に歸さじと。足止めの法を行ひ給ふ由を云ふ人あり。然る事にあひては。我が行の害となる故に。早く此の難を遁れて。急に山へ行かむと思ひなりて侍りと云ふ。我は法ごと咒禁など一つだに知らず。誰かしか云へると問ふに。其人を云ざれば。我が心は誰にもあれ。志して入立たる道は邪道ならずば力を副ても遂させたく思ふ故に。既にはじめて汝に逢たる時に。美成が僧になれと勸むる

をさへに止めたりき。然れば夢々然る法を行ひて。汝の行を妨げむとは思はず。心おく事勿れと返す返す曉せば。やゝ心とけたり。(この遙後に、稻雄が此時の事を委しく尋ねしかば、十月朔日の日に、大人に始めて逢參らせけるより。不思議にも慕ひ奉る心深く、美成ぬしに、平田先生の許へ行かむと云へど止めて行かしめず。平田は神道を好みて弘むれど。神は利益なく、佛の利益あること、世に神社の衰へて、寺の盛なるを見て、神道の佛道に及ばざる事を知れり、かまへて神道をやめて、佛者になれとすゝめられ、十二日に用ありとて呼ひに遣されし時、然しも用は無りしかど、平田に神道を勸められむが氣の毒なる故に、呼よせたり、笛を作りたく思はゝ、我その竹を買ひて與ふべし、平田へは必ず行こと勿れとて、孝子善之丞物語といふ、地獄の恐ろしき事、極樂の樂しき事、佛の尊き事などかける書をよみ聞かせける故に、また平田へ行きて笛作らむと云こと叶はず、山にて師に聞たるとは甚く違ふ事なれど、爭ふこと勿れといふ誡あれば、わざと諾ひたる狀にものして有けるに、十四日の朝に兄が來て我を呼出し、平田樣より呼ひに來りつと云へる聲を聞て、家内の人々、平田といふ人は呪禁の法をも知たれば、然ばかり汝を留めたく思へば必ず呼びて足どめの咒ひせむとの事なるべしと云へる故に、さては我が行の害となる事なれば、此方に知らさず、急に山へ行かむと思ふ心つきて、彼の一通をとり歸らむと、思はずも御前を通りて强に呼よせられたる事、師より左司馬を使にて、汝が使となる人有らむと云ひ遣されたるに符合して、いと不測なる事なりと語れりとぞ。)是よりまた種々の物語りとなり。空行の事にも及びて。對馬が星はいかなる物ならむと云へるより。星の口口を通れる事。月に穴有しこと。云々の事の物語にも及び。又文字を書てと請へば。「此世に見ざる種々の字をいと多く書きける。此世間の字も多かる中に。神風野禍。神野心鬼。鬼野心神などいふ語をも書り。此は彼界の熟語なるべく覺ゆるに。其意の知らま欲く。また朝開ともかけり。此は萬葉集に見えたる發辭なるを書たるも床しく。倩書く程の文字を其訓を知らずと云ふ故に。何なる故ぞと問へば彼界の手習ひには先づ文字を有のことゞ〵異體まで

を習はしめて。其を用ふべき時の至れば。一時に啓發して覺らしむる法なりと云ひて。あまたの中には異體なからに讀得らるゝ文字のあるを。傍より讀むにかく我だに知らざる文字を讀むと云ふ事やあると云ひて。悦ばざるが。後までも讀まざりき。偖この時かける字どもは大抵謂ゆる上代樣の狀に見えたり。（小島主の言に、彼の境の字の、かく上代ふりなるは、空海法師も早く死解仙となりて、今に彼の界に在りと聞ゆれば、傳へたるにやと云はれたり、然も有べく思へるに、寅吉後に云へるは、彼の界には元より上代の書法傳はれり、師の言に弘法は世間にてはよき手と云へども、いまだ上代の筆法の骨法を得たるには非ずと云はれしと語りき、さて寅吉後までも自ら書たる文字を一字も讀たる事なく、讀を知らずとのみ云ひて有るは、誠に知らざるか、知りつゝも故ありて讀まざるか、今に心得がたし。）斯在に申の刻と思ふ頃に。芳彥かの石笛をとりて信友が許より歸れり。其讓狀に

石笛御懇望之由承及候所。篤胤より貰ひ候而所持致候間致ニ進上ー候。萬世神界に而御重寶被ㇾ下候はゝ可ㇾ爲ニ本望ー候也。謹言。

文政三庚辰年十月十四日　　伴信友花押

白石平馬君

とぞ書たりける。童子悦ぶこと限りなく。速に吹鳴して。さらば今より發足せむと立上るを。今日は七時過たれば日はやがて暮るゝなり。今夜は此方に止まりて。明日發足せよと皆々いふが中に。誰にか有けむ今夜こなたに止りなば。此人數にて目隱しの遊びせむと云ふに。何れもそれ宜からむと云へば。寅吉手を拍きて大きに悅び。然らば止まり侍らむと云ふにぞ。日の暮るゝ頃より余は更なり。竹內健雄。佐藤信淵。五十嵐對馬。守屋稻雄。岩崎芳彥など。何れも寅吉が心をとるとて　亥刻過るまで目隱しの遊び爲たるに。猶果しなく爲むと云ふを。夜の更たれば又明日こそと云ひて寢しめぬ。斯て十五日になりて。朝も早く起て食事終ると。はや目隱しせむと云ふを　此遊びは長者も交りてするには。晝は爲る事に非ずと言ひ諭せば。なま〳〵に聞入れて。然らば夜になりてこそと云ひて。この遊び故に登山は十一月の末までにて宜しとて。かの進り心のいと靜になり

しこそいと可笑けれ。さて此日の晝前に。誰も進めざれど。短笛をも三管つくり。七部舞またその唱歌。長笛短笛の吹く狀をもいと懇にぞ教へける。こを習へるは。小島主。守屋稲雄。予となり。然るに余は昨日の夜より寒熱のある心地せるが。この晝過より熱甚くさして。惡寒もつよく。決めて瘧症ならむと思ふばかりに苦し有りしかば。病臥して在けるに。寅吉傍に居よりて。熱冷しの咒ひといふをしつ。其は夜に入りて目隱しの遊びせむとてなり。不測にも瘧症の如くなる熱たちまちにさめたり。然るに七時ばかりに屋代翁と。荻原專阿彌ぬしと伴ひ來まして。童子に逢ひて。猶七部舞のこと其樂器の事など尋らる。已も病をおして出逢へば。いかにして童子はこなたに來つると問はるゝに。昨日門前を通るを。抱き入れて笛を作らせたる始末を語り。美成が家に居る人を心儘に止めたるは義理違へれど。然る義理をのみ立てば遂に笛は成まじく。しばしも止めて彼界の事を聞まほしく思ひし故に。かく計ひつといへば。屋代翁も笛の成たる事は悦びつゝも。疾く美成が許へ返しねと云はるゝに。童子云く我が美成ぬしの許に居る事は。奉公といふには非ず。遊びに來れと言れし故に行たるなれば。今夜はこなたに遊びて居たいから。ゐたといへばよきこと。明日かの家へ罷らむと云ひて歸らず。其夜も塾中の輩また僕等にねだりて例の遊びなりき。さて翌十六日の晝前に。健雄稲雄と二人を副て。童子を美成がり遣して。此を押止たる由を謝せしむ。然るにその晝過ぎと思ふ頃に。童子は旅裝束にて來れり。いかにと問へば。美成ぬしの。早く山へ發足せよと云はるゝ故に。立出たるが。暇請さむと思ひて。立寄侍りと云。然らば今日は既に遲し。今夜は我が許に宿りて。明日發足せよと云へば。然らばと云ひて止まりぬ。試に常陸國へ行く道を知たるか。路用は持たるかと問ふに。美成ぬしに請ひたりとて。八百文計りを取いで。我は師に伴はれては。多く空をのみ行たる故に。下の路は知らねど。筑波山を向ひ見つゝ行たらむには。遂には行着なむと思ふと云ひて。少かも案じる氣色なし。いと哀に覺えて。守屋稲雄に彼山の麓まで。送らせなむかなど議るほどに。五十嵐對馬が。あす

笹川へ歸るとて暇乞に來れり。こゝに己れ對馬に云けらく。寅吉が又山へ行くに。其路を知らざる由なれば。いかで笹川へ伴ひて。暫く汝が家に留おきて。幽境の事をし探ね、笹川より筑波山へは間近ければ、麓まで送りねと云ふに、對馬いと易く諾ひて、然らば明日つとめて御許に立より。伴ひ待らむと云ひて。旅宿へ歸りぬ。夕方に寅吉が兄莊吉來りて、弟にあひて別を惜み。母人はいと思ひきり宜けれど、我は兄弟數人ある中に。男とては汝ばかりなれば。共に心を合せて。母を養はむと思へるに。いつ逢ふべくも計がたき境に行くこそ力なき事なれ。何時かまた歸るべき。と貌も得上ず泣くを、寅吉は瞬きもせず眼をはりて。兄が涙ぬぐふを。いと異しく思へる狀にうち守りて。男は泣く物に非ず。いかに思へばとて我は因緣ありて。かゝる身と成しを。今更いかにせむ。我をば死たる者と思ひて。母をば兄一人にて養はれよ。我は母の命ある限りは年に一度は必ず來りて。力になるべき事は助くべし。と云ふに。兄は猶かきくどきて別を惜むを。傍よりも。寅吉はかく神に見入られたる者なれば、其心にも任せぬ事と見ゆ。など慰むれば。兄も心得て涙ながらに歸りぬ跡にて寅吉云く、我も親兄弟の別れの悲しき事を知らざるには非ねども。彼の境の慣ひにて。泣ことを堅くいましめ。かつ未練の心をもちて。山入りせる跡にて泣などすれば 修行の害となり。行を爲損ふものなる故に。わざと兄をつれなく持成たる也。と云ふに。居合たる者ども。兄弟ともに道理なるいひ言にて。何とも裁斷しがたしと。中には涙ぐむも有けり。斯て翌十七日の朝に。對馬は約せる如く。旅裝束にて。供なる者と二人にて立よれば、寅吉悅びて旅の支度す。こゝに己れ昨日の夜したゝめ置たる。山人への消息と、はなむけの歌とを書て渡せば、稻雄が與へたる笈箱に納れて背おひ、また同人にこへる藤木の長杖をつき。信友が授けたる蘆根石の笛に紐をつけ 腰にさげて。立出むとすれば。今朝此の子が行末を祈ると。阿須波神に奉れる御酒もて山入りを祝ひ 諸共にしたらを打合せ、家内の者ども笠よ草鞋と世話をやき。涙ぐみつゝ門口まで見立れば、見返りつゝ完爾と笑ひて出行ける、跡を見おくり女どもは涙を落して噂するを 己れ別を惜み泣など

しては。彼が修行の妨となる。と云へるを。忘れたるかと。叱りはしつれど。涙は胸にせまりてぞ有ける。

此時山人へ送れる消息の文左の如し。

今般不慮に貴山の侍童に面會いたし。御許の御動靜、略承り、年來の疑惑を晴し候事とも有之、實に千載の奇遇と辱く奉存候。其に就き失禮を顧みず。侍童の歸山に付して。一簡呈上いたし候。先以其御衆中。ます〳〵御壯盛にて。御勤行のよし萬々奉恐祝候。抑々神世より顯幽隔別の定り有之事故。幽境の事は現世より窺ひ知り難き儀に候へども。現世の儀は御許にて委曲御承知有之趣に候へば、定めて御存被下候儀と奉存候。拙子儀は。天神地祇の古道を學び明らめ。普く世に說弘め度念願にて。不肖ながら先師本居翁の志をつぎ。多年その學問に辛苦出精いたし罷在候。併ながら現世凡夫の身としては。幽界の窺ひ辨へがたく。疑惑にわたり候事ども數多これあり難澁仕候間。此の以後は御境へ相願ひ御教誨を受候て疑惑を晴し度奉存候。此の儀何分にも御許容被成下。時時疑問の祈願仕候節は。御教示被下候儀相成まじくや。相成べくは。侍童下山の砌に。右御答被成下候樣偏に願上奉り候。此儀もし御許容被下候はゞ。賽禮として生涯每月に拙子相應の祭事勤行可仕候。偖また先達て著述いたし候。靈の眞柱と申す書入御覽候。是は神代の古傳によりて。不及ながら天地間の眞理、幽界の事をも考記仕候ものに御座候。凡夫の怯き覺悟を以て考候事故。貴境の御覽を經候はゞ。相違の考說も多く可有之と恐々多々に奉存候。もし御一覽被成下相違の事ども御教示も被下候はゞ。現世の大幸勤學の餘慶と生涯の本懷不過之奉存候間。尊師へ宜しく御執成下され。御許容有之候樣偏に奉賴候、一向に古道を信じ學び候凡夫の誠心より。貴界の御規定如何と云事をも辨へず。書簡を呈し候不敬の罪犯は。幾重にも御宥恕の程仰ぎ願ふ所に候。恐惶謹言。

平田大角

十月十七日　平　篤　胤　花押

常陸國岩間山幽界

雙岳山人御侍者衆中

猶々寅吉こと。私宅へ度々入來にて。深く懇志を通じ候に付。今般下總國笹川村門人五十嵐對馬と申者に。御山の麓まで相送らせ申候こと實に千載の奇遇と雀躍限りなく奉ゝ存候。依之憚を顧ず申上候。尙此の上とも修行の功相積り行道成就いたし候樣。拙子に於ても祈望仕候事に御座候以上。

偖また寅吉にはなむけと詠たる歌と。其端言は左に擧るがごとし。

車屋寅吉が山人の道を修行に山に入るに詠ておくる。

「寅吉が山にし入らば幽世の。知らえぬ道を誰にか問はむ。

「いく度も千里の山よありかよひ。言をしへてよ寅吉の子や。

「神習ふわが萬齡を祈りたべと。山人たちに言傳をせよ。

「萬齡を祈り給はむ禮代は。我が身のほどに月ごとにせむ。

「神の道に惜くこそあれ然もなくは。さしも命のをしけくもなし。

かく記しよみ聞かせてぞ與へたりける。寅吉が歸れる後は。心靜になりて。十日ばかりは聞置たる事ども書記して在けるに。二十七日の日に笹川村の門人高橋正雄と云者來れり。（字を治右衛門といふ。）寅吉はいかにと問へば。對馬と共に舟にて十九日の朝早く笹川へつきて。我が許へも對馬が伴ひ來りて逢たり。彼家に二十三日迄逗留して。對馬に呪術祈禱の事など語り聞かせ。膏藥を煉り丸藥など敎へて製しけるに。二十三日の夜に外より呼ぶ聲の聞えければ。寅吉きゝつけて出けるが。暫して家に入りたるを家僕の中に寢ながら聞たるもあり。偖翌廿四日の朝。寅吉對馬に向ひて。昨日の夜師の許より迎ひに遣せたれば。今日筑波山へ參るべしと云ふ故に。然らば麓まで伴ひ行かむと云へば。今日また迎ひ來るべしと云ひ暫く物語などして在しが。何氣なく外へ出て行方しれず。決めて迎ひの來つると共に登山したるべし。此由を先生に申し給へと。對馬が云ひ遣せて侍りと云にぞ。また今更のやうに驚かれける。斯て童子の噂いと高くなりて。人々とよみて取々に云ひ罵るに。同じ江戸には住つゝも。日々に來ざる弟子ど

もは童子のわが家に居つるほどに來合ざる事を口をしく思へる者もいと多し。さて十一月の朔日には約せる如く。雙岳山人また寅吉にも心ばかりの物を手向けて。發足の時に詫せる事どもを約せる如く祈りける。然るに此間は火事しげくて騷がし有しが。二日の夜の七つ時にも火事あり。家内をおこし覺し我も火見に上り見るに。本所のはてと見ゆ。其邊には知音の人も無れば。夜の明るまでしばしも寢らはむなど云ふ程に。門を扣く者あり。家僕を出して問しむるに寅吉なり。やがて小門をひらきて内に入るれば。旅ともあらぬ狀にて。笈筥を背おひ入り來るに。家内の者ども。中にも女共は鬼物には非ざるかと。恐れ惑ふもげに理りなり。偖いかにして今來つると問へば。寅吉云く笹川に行きて五十嵐氏の許に二十三日まで居たるに。師より左司馬を迎ひに遣されし故に。二十四日のあさ伴はれて山に登りたるに。師はことし讃岐國の山周りの鬮に當られたる故に。寒行は休みなれば。豫て申せる如く。また里に出よとの事なる故に。古呂明と左司馬とに送られてより只今いで立來れり。始めの由あればまづ美成ぬしの家にものして呼おこしたれど夜は金門開ざる家の定めなれば。明日來れとて入れざる故に。こなたに來侍りと云。能こそ來つれいかに眞柱の書と手簡は見せ參らせたるかと問へば。先生の云ひ合められし如く申侍れば。師は書物の事も。手紙の事も。疾く知られたる狀にて。唯よし〳〵と云ひて點頭せられ。我が賜はれる神世文字の書をば殘らず披き見て。よく集めたるが。中に三字云々の異體を擧洩したれば其由を傳ふべしと云れたり。七韶舞の事も。汝短笛の持やうを圖の如く敎へたるは違へり。圖の如く敎ふべし。舞の足ぶみも。汝は右足より蹈出すよし云へれど違へり左足より蹈出す舞なり。誠に切なる志ありて問はるれば。あやまたず敎へよ。また此舞に合する臥龍笛浮金をも傳ふべしと。臥龍笛の中のしかけをも見せて。具に敎へ遣されたりと云ふ。さて何くれと山の事ども探ぬる程に夜は明たり。毎朝の神拜をへて。己は屋代翁がり寅吉が來れる由を物語りに行き。健雄は美成が許へ此由を告げに遣りぬ。そは寅吉が我がり來つる元の因を思ひてなりけり。此日來り合ひて。寅吉がくさ〴〵の物語を聞たる人々は。小島主。伴

信友。中村帯刀　青木五郎治　篠川の正雄などなり。國友能當が仙炮の事を問ひ極めざるに。寅吉が歸山せる事を甚く歎き居つれば。また來つる由を消息すれば。五日に自作の風炮を持來て。寅吉にその仕掛を見せて。神炮の事を探ぬるに。相發して悟り得る事甚だ多し。此時しも小島氏。屋代翁。荻原仙阿彌ぬしなど來り合ひて。物語りの中に。寅吉が書を好まれしかば。今夜は多く飛白體の字をぞ書ける。然るに寅吉が兄莊吉勝手へ來りて云けらく。今日廣小路名主何某の許より。我が坊の名主何某方へ云ひ遣せたる由にて。家主をもて寅吉を連て出べきよし申遣せて待りと云ふ。寅吉そを聞つけて物思ふ狀なれば。屋代翁に其よしをいひしかば。翁我に向ひて。そは我が思ふ旨あれば。莊吉に寅吉ことは。屋代殿より尋給ふ事ありて。日ごとに參れば。其事すみて後に連行べきよし云はしめられよと云はるゝに。其由莊吉に云ひ含めて歸しぬ。寅吉よろこびて此世の中にては。大名の門番と名主。家主ほど恐ろしき者はなしといふ。皆々其由を問ふに。我いとけなくて大名屋數に行たる時に。したゝか叱られ。また何某とふ者の家主に店を追れたる事あり。然るに其家主を名主は叱る故に門番。家主。名主ほど恐ろしき者なく覺ゆと云ふに。皆々甚く笑ひたりき。偖諸々歸られたるは。亥時を過たり　けふは寅吉ひめもす諸人の應對。また書き物をも多くせしかば。己その脊をかき撫て。けふは疲れたらむと云へば。取つきて蜜柑を給はれといふ。幾箇ほしきと云へば。尻に針ある虫の名ほど賜へと云ふ。故に蜂かと云ひて八つ與へたれば。悅びて此より思つきて。手近く有合ふ物をもて。なぞをかけ給へ。解べしといふ。家の者ども口に出るまに〳〵云ひかくるに。聲に應じて悉く解たり。其中の五つ六つをこゝに記す。

燭臺の蠟燭　ひるの九ッ時　心はひが高い　廣嶋藥鑵　草津　心は湯が出る　破れ障子　憎い子のあたま　心ははつてやりたい

碎擂鉢　小野小町　心はする事がならぬ　人だま　神鳴り　心は光りてこわい　土の團子　斷食の行　心は食たくてもくへぬ　狸の陰嚢　押へた盃　心はまた一ぱい

またかく世俗の才も有り。かくて其夜とく。居風呂

に入れといふに。なぞ面白しとて立ざるを。しひて入しめたるに。唯徒のみして體をば洗はず出たる故に。健雄が鳥の行水とは此事ぞと戯れつゝ。逃るを押へて洗ふを。己見て山人の行水とかけたれば。月夜と解たり。其心はと問へば。十五日にはえるといふ。こゝに。なほ根問をすれば。山にて月々の行の時は。日々に湯に三度。水に三度入れども。常に身を清むる行水は。毎月の十五日ばかりなりと云ふ。此夜のなぞどもは書つけて。翌六日の朝たよりにつけて。屋代翁がり参らせたれば。翁もかく世間の才も有けりと感られけり。此日來合ひて。問答せるは。松村平作。(此は大坂人にて予が門人に成らむとてわざと大坂より來て塾中に居るなり)野山種甍。佐藤信淵など也。寅吉が議論の高上なるに。何れも否をまきけり。七日の夕つかた。屋代翁來まして。祕藏せらるゝ。唐の則天と云ひける女王の書る口口口口と云帖本を寅吉に見せて。此はいかにと云はれしかば。寅吉たゞ一枚を見て。此は位高き女の書なりと云ふに。まづ驚き。年の頃はいくつばかりの時の書ならむと云はるれば　七十歳前後なる時の書ならむと云ひつゝ　末まで手早に披き見けるが。いづこか男子の書たる字の交りて有りしとて。本へ卷き返して一行を見出し。此行は男子の書なりと云へるにぞ。己は更なり。屋代翁も甚く驚かれけり。然るはまづ此帖は　かの女王が鳥虫飛白といふ體にて。此には屋代翁ならでは　藏たる人なく。寅吉がかつて見たる物に非ざるを。始めて見てかく目利たればなり。則天といふは。唐太宗といひし王の妻なりしが　夫の死ける後に云々して。別に國號を建て周と云へるが。其その口口口と云ける年に。みづから書たる書にて。其時は口十口歳の時也。又男子のかける行也と云へる行は。彼國の例として。云々する例にて。誠に臣下の男子のかける行なればなり。翌八日には。小島惟良ぬし　屋代翁　予と三人にて寅吉を伴ひて。山田大圓がり行きぬ。然るは彼人もかねて寅吉に逢まほしき由を。小島主にいひ　殊に種々珍しき器どもも持たれば。其をも見むとてなり。此日山田氏に集へる人八十人餘りなるべし　寅吉に書を乞へば。是まで見ざる繩を結びたる如き字あまた篆書の如き彼界の字などを夥しく書たり　種々の物を見るにつきて種々

の物語りも出ける中に。阿蘭陀より來れるオルゴオルといふ樂器を見て。山にも見たる樂器に是と似たるが有りと云ひ出たり。山田氏それはいかに製れる物ぞと探ねれば。下に記せる鐵の箱に笛六本を仕掛け。水をはりて肘金をまはせば。中なる水の湯となりて笛の鳴出る器の事を語り。此因に鐵の器に水をもり。鐵棒にてかきまはせば湯のわく器の事を委く語り出たりき。また此時集へる人々の中に。臼井玄中といふ人に。山人の事を答ふ是より屋代翁の言にて。小島主。予。寅吉共に桑山左衛門主へ行き。此にても書を多く書しめらる。屋代翁も筆とりて云々と云ふにぞ。女牛に腹をつかれたる心地したりき。九日の日に或人(松屋がこと)來りて云々といひしかば。寅吉きゝて云々と云へるに。其時居合たる松村平作。竹内健雄。守屋稻雄。岩崎芳彥などなり。松村が此より前にもをり〱聞ける事どもを。古郷のみやげにせむと書記せる物あり。(此を屋代翁、嘉津間問答と名づけられたり。)十日には。今井□□(呼名を仲といふ。)伴信友。岩井中務。山崎篤利。笹川の正雄など來りて。種々の物語しける因に云々と云へり。

皆々其大議論を感じける。此日屋代翁より口狀をそへて。倉橋與四郎主始めて來られ、易の事の咄あり云々。また印相の事を問はるゝを悉く其形を結びて傳へ參らす。十一日にも今井仲來る。昨日の如き議論をなほ聞かむとてなり。種々物語あり、十二日に倉橋勝尚ぬし來られて。なほ印相の事を探ねらる。此時に印相の大議論あり　また此日美成が許より岩間山の近き邊なる知人の來れるが。寅吉の噂を聞て逢たきよし云へば。いかで遣し賜はれと云ひ越しぬ。やがて其人と遣したれば、其知人は呪術など行ふ人にて。美成とりもちて寅吉に種々の呪術を敎へしめたる由なり。其夜は美成が許に泊りて十三日に歸りぬ。十四日に松村平作が大坂へ歸るに。塾の者ども短冊など書きて別を惜みけるに。寅吉も日ごろ親しく交りしかば。打ふさぎて有しが。己に今急に歌をよむすべを敎へ給はれといふ。何事を思ひて然は云ふと問へば。人々の歌よみ給ふが羨しければ。我も詠て贈らむと思ふといふ。己うち笑ひて。歌てふ物はしか急に詠得らるゝ物に非ずと云ふに。然らば丹冊一枚たまへと乞ひて竝と書てぞ贈りける。人々見

て花といふ字かなど云ひけるに。裡返して見たまへといふ。然して見れば松といふ字にぞ有ける。いかなる意ぞと問へば。また返して來給ふを待こゝろなりと云ふに。平作も甚く悦ひ。諸に暇乞して立出るを。人々見送るに。寅吉も送り出けるが。なほ別をしき狀にて。平作が門外まで出たるをしばしと云ひて呼もどす。何事かあると立歸れば。兩手を出し。平作が顏を押へて其鼻と我が鼻とをすりよせて。これ鼻向也。恙なく歸りて。また春早く來給へといふに。皆々大きに笑ひつゝもいと哀に覺え。平作も淚を浮べてぞ出行ける。常のしわざ大抵かくをさなく可笑ければ。來集ふ人ごとに愛く思ふも理也。然れどわやくに徒なること誠に類なし。そは己思ふ旨ありて少しも逆らはず。氣儘に捨おけば膝にもたれ。肩に取付て學事を妨くることは更にも云はず。机前に居ては机のふちを嚙碎き。錐もて穴をもみ。筆をとりて鋒をもみ。小刀とりて硯屏におく。雲根石。孔雀石など打かき。筆墨をけづり。すり墨をこぼし。灰を吹たて。傍にある程のもの。悉く瑕をつけ。庭に出て枝を作れる木草を折り。庭中をば。いつも素足にてあるき。高みへ上りて下には何物あるをもかまはず飛下りて打こはし。また竹馬に乘て泥に落たるを洗はず。席上を泥まみれとなし。張調へて程もなき障子ふすまを引破り。小兒のもて遊ぶ竹もて作れる紙(豆か)鐵炮といふ物を自ら甚強く作り。小石を拾ひ入れてふすまを打破り。天井板をさへにうち拔くを。其はあぶなしと制すれば畏まりはすれど。直に忘れては人にもうちあて。既に健雄が物書き居たる傍より。其耳に小石を打入れ。大きに惱ませたる事さへ有けり。細工ずきなる故に。彼を作る此を作るとては。鉋鋸などの類を再び用立ざる如く害ひ。臺所むきの諸道具まで損ひ捨たる物いと多く。家ぬちの者どもゝ稍あくみて見ゆれど、己が愛しむ者なれば。何事も忍び居る狀なり。帶も得結ばず。くる〳〵と回して端を挾みをる故に。誰にまれ朝ごとに帶を結び遣はすを。結び果ざるに駈出すは常の事なり。またいつも寢所より帶も結ばず。かけ出ては直に誰にても取付て角力を取らむとて。抓み掛る。然るにわざと負ては悅はざる故に幾度となく投付れば。己が負たるかぎりは果しなく取らむといふ。遇にも勝ときは悅ぶ事限なし。

始めて逢たる人をばいつも暫く其面をうち守りてあるが。意にかなへるは。始めて逢たる人へも。其肩馬に乘りなどす。世に甚く。わやくなる子をば天狗の巣立の如しと云ふ諺のあるは。かゝる狀よりや云ひ始めけむ。また此ほど。やごとなき御邊に時めく醫師の。三人四人と聞ゆるが。寅吉に逢はむとて。二人來れる日ありき。前に來れる醫師の何事をか問はるゝと思へるに。身の上いかに有らむ。病難は有まじきかなど云ふ事を問しかば。甚く心に合はざる狀ながら。可なりに答へたるを。後に來れる醫師も同じ狀に。身の上の事ども。病難の事など。尋ねて云ひけらくは。云々といふに。答はせずて座をたち徒するを。己傍より心苦しく。まづ座に居て答へ申せと引居れば。止事を得ざる狀にて。云々と答へて速に立て。かの紙鐵炮を持て打散し遊ぶを。あぶなし靜まれと制する詞の下に。過りて柱に打當たるむくろじ程なる小石の。それて醫師の後首にぞ當りける。醫師胆を冷して手をあげて首を撫るに己堪がたく心苦しく。其罪を謝して寅吉を叱り退くれば。醫師は苦笑ひして。實にも噂に違はぬ徒なり。然るによくも養ひ置給ふ事と云ひて踊られき。後に云々と問へば。寅吉云く云々と云ひき。十七日の夕方に屋代翁がり寅吉を伴ひ行く。然るは阿部備中守殿より。近習に使ひ給ふ人。二人を遣せて。寅吉が事を尋ね給へばなり。十六味保命酒一とくり。百花鏡を賜ふ。二人の人たち。種々の事を尋ぬるに。悉く答へたり。己と屋代翁といたく勸めて。七部舞を敎へ。太刀かきを望みて見せつ。十九日にも屋代翁がり寅吉を伴ひ行く。然るは大久保加賀守殿より近習二人を遣せて。寅吉を見せ給ひ。酒中花。蜜柑など賜へり。二人の人たち種々問ふを大抵は答へたり。廿日の夕方に荻野梅塢子來りて。寅吉が事を語り。彼は是まで神仙に使へたりと云ふこと妄說なり。熟々察るに。怜悧拔群の者なれば。其處彼所を徘徊せるほどに聞たる事を。幽境にて見聞したりと云ひ觸らすなること疑なしと云ふ故に。己云けらくは。中には聞傳へたる事を語るも有べけれど。摠ては中々然る事とは思はれず。七部舞のこと。仙炮の事などは。かつて此世の事とは思はれずと云へば。荻野氏云く其事どもは皆妄想なり。怜悧なる童子には妖魔のわざにて然る

こと有るものなり。我も童子なりし時は。世にも神童と云ひ囃されたる程の事にて。目に見ざる事物の有状をいひ。まだきに晴雨を知り。リクト（氣）さへに見えたり。其を人の譽むるが嬉くて。今思へば杜撰妄説もいと多く吐たりしなり。彼童子もその如く。人に聞たる事を山人に習へりと云ひ觸らすこと。既に我が始めて逢たりし時には、かつて印相の事などは知ざりしかば。悉く我が教へたるに。速に覺えて其後或家に伴ひたれば。其主人に我が教へたる印相の事を元より知れる狀に委く語れり。是をもて此世に聞ける事を幽境に見聞したる事の如く云ふこと知べし。疾く追出しねと勸むるに。己もやゝ心惑ひていらへもせず有けるに 寅吉次の間にて我を呼ぶ故に。立て何事ぞと云へば、今こゝにて聞くに。荻野氏の言甚く心得がたし。我かつて妄談を云へる事なく。彼人に印相の事を習へることなし。美成の許にて始めて逢たりし時に印相の尊き由をいひて。彼界にも印相を結ぶ事ありやと問はれし故に。尊き由は聞ざれど。此も世にあるわざなれば知辨へすては事缺る事あり。覺えをれとて教へられつと云ひて。彼人の望まるゝ儘に。知たるかぎり結びて示せたるに。甚く感じて。懷紙を出して書記し。此後にも折々此事を問ね。かゝる事どもをよく知れるが惜しき由にて。僧になれとは勸められしなり。此は美成ぬしの委く知られたる事なり。然れば先生の客人なれど聞捨がたし。此事明りを立て恥見せむと、眼ざしを變て甚く憤るを 己は更なり、家内の者もさまざまに宥めて靜めたり。後に此事美成に尋ぬれば、誠に寅吉がいふ如くにぞ有ける 梅塢のいかなる心にて、右の如く云へるにや。己も今に心得がたくぞ覺ゆる。廿一日に寅吉みづからリンの琴のひな形を製り終て。屋代翁へおくり。此より松下定年の許へ伴ふ。こゝに瀧川主水とかいふ神道者來合たるが、あるじの寅吉に書をかゝしめ。種々幽界の事を問ふに答ふるを聞て 尻目にあざ笑ひて、傍の人に高津鳥の災にあへる童子よといふ聲を聞て、笑ひながら君は神職の人にや。中臣祓の詞にある高津鳥を。天狗の事と思ひ。我をそれに取られたる者と思はるゝにや。我はさる卑き物に取られたるに非ず。殊に彼詞なる高津鳥といふは、鷲の類を云へるよし山にて聞たりと云へば。神職面を赤めて詞なし。幽界に誘はれたるに。

神と山人と天狗との差別あることを辨へざるは。すべて天狗のわざと云へば、かの神職もしか思ひ、殊に天狗を高津鳥と思ひ誤れるはいとをかし。さて家に歸れば留守なりし程に、吉田尙章が（呼名を太左衞門といふ、內藤紀伊守殿の內人にて、余がふるき弟子なり）寅吉に逢はむとて、若き醫を伴ひ來つるに居合はざれば、內の者ども出て挨拶しけるに、其醫師も寅吉が事を探ぬるに。天狗の子とのみ思へる狀にて（鼻のさまはいかに、翼もやゝ芽ぐみ侍るにやと云へりしかば、內の者ども答へにこまり可笑かりしとぞ。此日は外も內も同じ樣なる事の有しと。寅吉も甚く笑ひける。廿三日に上藩へ出て目付役所へ。寅吉を我が家におく由をとゞけて歸る、さるは世間に寅吉が噂いと高き故に、目付役より內意ありてなり。今日も吉田尙章が來て寅吉に逢ひて。書を望み種々の尋あり、此時內藤殿の領所越後國口口にて口口口口と云產土神に口年ばかり使はれて歸されたる童子の物語あり。此は口年前に歸りたるが、產土神に習へりといふ文字を書くに。寅吉が書に似たりと云へり。後にその書二枚を人に借りて遣せたるを見れば、實にも凡ならずぞ見えける。其童子今は二十歲ばかりにて。生國に在りといふ、此夜に屋代翁と美成と來合たり。越後國蒲原郡小關村。上村六郎篤興來れり、屋代翁寅吉に向ひて云はれけらく、汝は病には呪術を行ふよりは。藥を用ふるがよしと云へども。我は云々と云はれしかば、寅吉も感服したり。さて今夜も亦皆樣と角力を取らむと望む。酒宴の上なれば己は更なり。翁も美成もその相手となる。廿五日の申時より寅吉は兄莊吉に伴はれて、東叡山まへ廣小路なる名主、岡部何某が所へ行く。然るは始め童子の噂世に高く。事を辨へざるきはゝ。甚怪しき物にいひ囃せるを聞し故に。始めは糺明らめむとて、莊吉に連來れと度々云ひ遣せたるが、莊吉は其時ごとに我が許へ來れるを。前に屋代翁のいひ置れたる如く。いつも云ひ遣りしかば。後には名主も呼あぐみて。莊吉が心をとり。物など取らせていかで伴ひ具よと。切に賴み遣せける由いふにぞ。今日は是非なく遣したるなり。然れど寅吉。日ごろ名主をまたなく悧きものに恐るゝか上に。名主より寅吉に。寅吉が來る日をその前日に告てと賴みたる由なれば。

決めて人多く集へて待べく。そが中にいかなるをこ人か有りて。彼をなじらむも知べからずと案じられ。其出行く程より。己は岩間山の方にむきて。彼もし人に恥見せられば。我もいと口惜きを。いかで恥見ざるやう守り給へとしばし祈念してぞ在ける。然るに酉刻すぐる頃に。寅吉怒れる狀ながら又快氣なる面もちにて駈戻る。跡につきて寅吉も來りぬ。いかにと問へば二人が言に。侍の袴を着ざる狀なる人々名主たちなど凡て二十人ばかりも二階に來集ひたる中へ。寅吉を出し思ひ〳〵に種々の事ども問つれど。例の如く何を食ひて居る。雨降にはいかにするぐらゐの問にて。其煩さく思へるが中に。眞言僧と見ゆる僧の。三衣を嚴重に着かざりたるが來り居て。我を卑しみたる狀に物言ひけるが。進み出て印相の事に及び。何の印相はいかに結ぶぞ。某の印相はいかにと問ふ故に。山にて見聞したる狀に種々結びて見せけるに。其を元より知たる狀に點頭するが少し可笑しく。摩利支天の印相を問ふ時に。寅吉思つき。わざと非ざる印相を結びて見せたるにも點頭きたる故に。此は元より知らざる印相を。知たる狀に物する僧と悟りぬ。然るは山にて見聞たる印相は。世の僧修驗者などのするとは大かた異なるを。此僧の知りて在るべき由なければなり。然る程に祈禱の事をも問ふを。そこ〳〵に答へたるに。其僧終に寅吉をなじり出て。汝の知たる印相はみな道家の印相なり。祈禱などの事は大かた荻野梅雨が敎へたる由。かねて聞たり。偖また汝は佛を嫌ひ神を尊むといふ事をも聞たれど。佛ばかり尊き物なければ。神を尊ぶ事を止めて佛者になるべし。吾は元より神を嫌ひなる故に。伊勢大神宮又金毘羅をさへに。したゝかに惡く云ひしかど。罰あたらず此をもて。神を尊ぶは益なき事を知るべしと云ふに。寅吉甚く怒りを起して。自然に聲も荒くなりて云けらく。そこは僧衣をのみしか嚴重に着飾れども。一向に事辨へざる賣僧にてそは有けれ。然るは先に我に印相の事を問へる故に。山にて見聞しつる如く形を結びて見せたるに。悉く元より知たる狀に點頭きたれど。我が結びて見せたる印相は。大かた此世の僧修驗者などの結ぶとは異にて。往古の眞の狀の傳はりたるを習へるなれば。足下たちの知らざる形なり。然るを道家の印相なり

と云へるは舌長し。此世にて。そこ達の物する印相は。本を知らざる世々の僧らが。次々に傳へ謬れるにて。本の眞の狀に物する僧修驗者を一人も見たる事なく。人々各々結びざま違ひて。何れを眞の印相と決むべき由なきが。元にて習ひたる我が印相を。違へりと云ふは。かく人多き中ゆゑに。我をかすめて人に物知ぬかさむとの心なるべけれど。今我が摩利支天の印とて結びたるは。眞の印に非ず。汝知らざる事を知れる顏にもてなすが憎さに。非らぬ形を結びて試みたるなり。然るを汝うなづきたるは。眞の印を知ざる事は更にも云はず。汝が輩の常に結ぶ誤りの印相をさへに知らずと見えたり。また祈禱などの事を。荻野氏に習へりと聞たるよし。そは何者かしか云へる。先ごろ平田先生の許に。荻野氏の來て物語らるゝを聞けば。彼人我に印相をさへに教へたる由いへり。然れば其邊より然る説を聞て云へるにや山崎美成といふ人に探ね見よ。荻野氏はかへりて我が印相を見て。返す〴〵問はれたるをや。偖また我が神を尊ぶ事を異見がましく云へども。佛はもと此國の物に非ず。神は此國の物にて。我も人もその御末なる故に。順道をたどりて。其道を第一とすること。我が師の教にて。これ眞の道なり。汝こそは其よる佛道の事も生知りなれば。早く還俗して神の道に歸るべし。また汝は神を嫌ひなりと云へども。汝も佛の子孫には非ず。神國に生れたる人として。神を嫌ひといふは。此國を嫌ふ理なれば。此國に居らぬがよし。僧と云ふ者は。大かた汝が如く。心ひがみて穢らはしき者故に。我は元より僧を嫌ひなり。偖また天照大神。金毘羅神などを詈り奉れるに。罸當らざるをもて。神には利益なしと云へるが。神は大らかに座ます故に。汝が如き穢たる者に罸を與へ給はざりしならむ。もし誠に神はいかに申しても罸の當らぬ物と思はゞ。今試に大神宮。金毘羅宮などを詈りて見よ。我こゝにて彼宮に祈り訟へて。忽に御罸を蒙らせてむと。散々に詈りて歸り來つといふ。猶その末の事を問ふに。よくも答へざれば。又兄に問ふに。我は玄關に居たる故に。委くは知らざるが二階にてしたゝか人を詈る聲きこえたるが。暫くして階子をかけをり。玄關に出て歸らむといふ。跡より家あるじと。二人三人送り出て。また重ねてとい

ふを聞入れず。かく不興なる家にいかで二度來らむと。すげなく云ひて飛が如くに駈て歸るを。吾は跡より靜にといへど。駈る故に追かけて途なる盛土につまつき。膝をかくすりむきたり。名主の所にて寅吉が如く荒ぶる者を遂に見たる事なし。定めて跡にて。我に尤めあらむと否をまきてぞ語りける。後の事は知らねど。まづ恥見ず歸れる事を。己も悅びて在けるに。二三日すぎて。佐藤信淵わざと來りて云けらくは。去る廿五日の夜に廣小路名主の宅にて。寅吉が甚く僧を詈りたるよし。其席に居たる何某といふ者に聞たり。其人は甚く感心して語りしかども。然る事ありては。ます／＼人に憎まれ謗らるゝ事なれば。此後にも然る事なきやう。禁め給へといふにぞ。其はいかに聞つると問へば。始め終りは。兄弟が言の如くにて。彼僧の神を詈りても罰は當らずと云へるを尤めて。今我が前にて詈り見よ。大神宮。金毘羅神に告て今立所に罰をあて給ふやう祈らむ。いざいざと責けるに。滿座の者ども興をさまし。甚く恐れて。僧に向ひ。此子は彼界に使はるゝなれば。いかにも祈らば忽に驗あるべし。出直し給へといふに。其僧まけ惜みの苦笑ひしつゝ。しか仇をせられては迷惑なり。我も神の道を知ざるに非ず。今汝に其道を說聞せたく思へども。三衣を着ては三寶に對し恐れある故に。說こと能はずと云ふに。ます／＼怒り。いかにも然る穢らはしき物きて。神の事を申しては恐れあり。但し汝はその歸依する所の佛道をさへに能も知ざるを。いかで神の道を知べき。其はたゞ負をしみの詞なり。もしそれ負惜みならずば。いかに一事も說見よ。汝が如き賣僧の。いかで誠の事を知べきや。大勢の中にてかく云ふを口惜しとは思はざるか。いざ神の道の講釋せよと。返す／＼責けるに。彼僧の顏は火の如くなりて。何やらむ。くだらぬ言をつぶ／＼云ふを。寅吉なほ甚く詈りしかば。家あるじと今一人。寅吉が傍に居たるが。すかし宥めて。あの御僧は格式高き人なれば。然な云ひそと制するを聞入れず。僧の德といふものは三衣の嚴重なるや。寺格などによる事に非ず。此僧あたまを丸めて。三衣は立派に着かざれど。其よる所の佛道も知らず。況て神の道を知らずして。神を惡口し。我に恥を與へむと爲たる穢はしき坊主なれば。いかに云

ひたりとも何てふ事かあらむ。大抵世の出家といふ者。俗家を欺き物とりて衣服を飾り。寺格などにほこりて人を見下すが。憎きゆゑに。我は元より坊主を惡ひなり。我が坊主を嫌ひと云ふ事は。兼て聞傳へたらむに。切に我を招きつゝ。何とてかゝる賣僧をよび置て。我に恥與へむとせられしぞ。我が師は。釋迦よりも遙前より　世に存へ給ふが。常の物語を聞に。佛道といふ物は　愚人を欺きて　釋迦の妄に作れる道なりと聞たり。思ふにこゝに集へる人々は。大かた佛ずきの人々にて。神の道を知らざる故に。世間の訛れる評を聞て　我を怪しみ試さむ爲に　此坊主をよび寄せたるならむと云ふに　人々すまひて然る事には非ず。彼御僧は今夜不意に來り合たるなり。まづ怒をしづめてと。菓物など進め。紙筆を出して書を請ふに。常の少き筆に半紙をそへたりしかば。紙も筆もけちなりと嘲きつゝ。硯に嚴しく突て深くおろしたれど。猶細く殊に怒りの最中なる故に。能くも書れざりしと見えて。吾は何方へ出ても。かかる惡き筆もて書たる事なし　筆のもそつと大きく宜きを出し給へといふに。家内に尋ねて出したるも。なほ少さけれど。其をとりて。めつたに六七枚かき散して。紙筆ともにあしく　殊に坊主のをる故に。今夜は不出來なりなど嘲く間に。膳を出してまづ寅吉にすゝむるに。彼坊主が居ては穢しくて食もくへずといふに。是非なく。主人をはじめ。人々かの僧に　此子は出家を嫌ふといふ事かねて聞たり。貴僧のおはしては。この怒り靜まるまじければ。歸り給へといふに。彼の僧はしぶ〳〵に立て。居たる食をくひもやらず　なほ捨語に負をしみを云つゝ。階子をおりて歸れるに。寅吉はなほも怒りの顏色とけず。世人の神道を知らず　佛道に淫すること。出家の不行狀なる事など　嘲きつゝ一椀の食に菜を殘らず食ひて　物付たる狀に　食を九椀かへて食たり。人々餘りの大食なり。すぎまじきかと云へば。食にあたると云ことは無き事なりといふ。またあるじ傍より。何ぞ心にかなへる菜をかへてと云しかば。鯛の燒物の替りを請へるには。甚く困りて。暫くして密に調じたる狀なり。また柿と密柑とを　盆に三四十ばかり盛て出しけるに。其は彼僧と問答の間に。謾にとりて皆食盡せる故に。また同樣に盛りて出したるに。

其をも二十ばかりは食しぬ。かくて僧と問答の間は。目はいとゞ大きく光りて別人の如く見えて。座中の人々冷ましく覺えしとなり。さて食事をはると。早歸らむと立上るを。人々なほ心をとりて。しばしと止むれど止まらず。かく不興なる家に長居は好まずと云ひて。暇も請はず。階子をおりて歸りつと。舌をまきて語りしと云ふに。己も始めて其時の事を委く聞て。其は決めて。雙岳山人の。幽より守護して然る振舞を爲しめたる物ならむと悟りぬ。かくて後に。その僧は何者といふこと。聞まほしくて。此事美成に語りしかば。美成が因を求めて探りたるに下谷金杉町なる。眞言宗の修驗者。眞成院といふ者にて。今流行る江戸風の佛學をものする才僧なりと言へり。さて同月廿六日寅吉が兄莊吉來りて云はく。名主かたにて昨日寅吉がものせる時に。機嫌を損ひて歸れる事を快からず思ひて。いかで再び伴ひてと請遣せて侍りと云ふを。寅吉きゝて。我決めて彼家へはまた行かじと云を。莊吉わびて。己に云けらく。弟がかく申す上は力無れど。我は名主の支配下に住む者なれば。然は云がたし。何卒こなたの御弟子奉公にして賜はれかし。然もあらば名主より呼に遣せたりとも。其由を云ひて斷り候べし。然もなくては支配下の我ゆゑに。斷を云がたしと云ふにぞ。實然る事に覺えて。此事屋代翁と議りけるに。苦からず莊吉が願の如くし給へと云はるゝ故に。兄より例の如く諸色まかなひ。弟子奉公の證文とりて。今まで着たる汚き服物を脱替させ。新しき布子。羽織袴。大小などをも與へて。我が家に置く事と成しかば。侍の形になりしとていたく悅びぬ。さて此夕がたに美成來りて。寅吉わが方に居たりしほど。大關侯の奧方の七年がほど惱まれし癪を。たゞ一度まじなひの符を奉りつれば。直れる故に。頻に見たく思ひ給ふ由なり。又た水戶家の立原水謙翁も。寅吉が事を聞て逢たしとて我が家に尋ねられたれば。今日伴ひたきよしいふ故に。遣しぬ。立原翁甚く悅び。書をも多く書しめ。種々の事を尋て其答を感ぜられしとぞ。さて大關侯へも伴ひ。夜に入りて連歸りぬ。水謙翁後に。屋代翁に語られけるは。世の生漢意なる輩は。此童子の事を疑へども。我は幽界に誘はれたる事實を。目のあたり數々見聞たる故に。一點も

疑ふ心なし、また誘はれて彼境に行たるには非ねども、神仙に藥方を授かりたる者も正しく見たり、其は水戸の上町といふ坊に。鈴木壽安といふ町醫の子に。精庵と云ふ者あり。今は三十歳ばかりなるが。十五六歳なりける或時に。容貌凡ならぬ異人忽然と來りて。某の日に下總國神崎社の山に來るべし。方書を授けむといふに。辱しと諾しつれど覺束なく覺えて。其日行ざりしかば。また或日その異人來りて。何とて約を違へて某日に來らざりしぞ。某の日には必ず來れと云ひて歸りぬ。爰に精庵不思議に思ひつつ。約せる日の前日家を出て、神崎社の山に至れば。かの異人まち居て一卷の方書を授けて。返す〳〵人に示する事勿れと禁めて歸しぬ。其は口口病の藥なり。用ふるに從ひて功を成しかば、此事遂に侯廳に達えて役人中より其一卷を出し見せよとありけるに。異人の禁を申したれど聽入られず。是非なく役所へ出す事となりける。其前日に家に紙の燒るかほりす。此れ彼れと見れど知れざれば。近き邊の事ならむと云ひて有けるに。翌日役所へ彼の一卷を持出むと。納めたる所を見れば。彼の方書はみな燒けて少しも殘らず、殊に奇しきは。反故もて包み置たるに。其包紙はくすぶりたるのみにて少しも燒けず有けり。家內大きに驚きて。此由を申さば僞りと聞召さむかと。甚く心を痛めけるが。是非なく其焦たる包紙の反故をもち出て右の由を訟へたる事あり。神仙の不測かくの如くなれば。寅吉童子が事は疑ふべきに非ずと語られしとぞ。然すがに章考館の總裁とありし人とて。よくも辨へられたるかな。」二十七日に伴信友來りて。夜に入るまで予と共に種々の事を探る。そは云々の事などなり。此日山にて、師の夜學するに用ひらるゝ器の事に及びぬ。そは山に月夜木とて。十五六町ばかり放ち見るに、光る木あり。其を細にして硝子を○かゝる形に吹たる中に入れて。机上に置くに。夜光の玉といふ如く光る物なりといふ物語を爲出て、今その器を作らむといふにぞ。然る木は現世にいまだ見たる事なし。夏になりて光木の出るを待て製せよと云へど。何事にても云ひ出ては其事のみを打置かず。物せむとする性急ゆゑに。今はなき物と得心しつゝも。山にては夏に限らず何時にても有り。然れば此世にも尋ねてなき事は非じとて。

來る人ごとに尋ぬるにいと煩くぞ覺えける。さて此事に就て可笑しき事ありき。然るは其十日ばかりほどは。餘りに光木を欲しける故に。稻雄が戯れて。わぬしは光木をもて夜光の器を拵へむとすれど。我は元より神の御靈によりて。この軀に夜光る物を持たれば。然る器は入らずと云しかば。其はいかなる物をか持たると問ふ。稻雄わざと驚たる狀して　わぬし程の人の。此を知ざるかと云へば。誠に知らず。其は何物なるぞといふ。稻雄すまひて。此は諺に云ひがたしと云へば。强に聞かむといふ故に。稻雄うべしけに容を改めて。産靈大神は。我が大人の。常に人に說諭さるゝ如く。上なく尊き神にて。其産靈の德によりて。かく人を造り成し給ひ。人體の上つ方には眼をつけて晝の用を辨へしめ。下つ方には睾丸をつけて夜の用を辨ぜしめ給ふ。いかに尊き御德ならずやと云しかば。寅吉うち笑ひて。其は何さまにして夜の用を辨ふぞといふ。稻雄云けらく。其用ふる狀は。譬へば闇なる所にて物尋ねむとする時など。褌をかゝげ睾丸を手に握りて。ゆら／＼と振へば。小さく電光の如き光りきらめきわたる。其光にて用を辨へらるゝ事なり。此は誰にてもしかする事ぞと云へば。寅吉云く。そは僞なるべし。我が睾丸のつひに光りたる事なしといふ。稻雄笑ひて然らば振りて試たる事有かと云へば。いまだ試みたる事はなしと云ふに。山人たちの。此事を敎へざるはいと麁略也。若くは山人の睾丸は光なきにや。など不審みつゝ。眞顏にいふを。寅吉眞信にうけて。然らば夜になりて試し見むと　日のくるゝを待けるが。其夜闇き所に行きてしきりに振たれど光り無りしかば。腹を立て稻雄に擢(つか)みかゝり。僞する事は神の甚く惡み給ふ事なるを。能くも我をば欺きたると云ふに。稻雄なほも欺きて。其は合點行かざる事なり。人として夜に睾丸の光らざるは無きが。わぬしの睾丸のみ光り無るべき謂なし。若くはいまだ毛の生ざるには非ざるかと云ひしかば。寅吉面を和けて。毛の生ざる程は光なきかと問ふ。稻雄答へて睾丸の光ると云へど。實は毛にも光ある故に其光と互に映じて。光を放つことなりと云へば。實に然も有べし。我が睾丸にはいまだ毛の生ざる故に。光りなき物と見えたり。然は知らず子の僞せると思へるは。我が誤なりけりと

云ひて。其後は毛の生るを待居る狀なりとぞ、此は後に聞たるが。甚愚なる事の。よく思へば。實は己が怜悧のすぐれて。窮理に心深き故に。かくは欺かれしなり。然るは是より前に人々集ひて。人の髮毛より火いで。また火氣つよき人は其衣服よりも火の出るものなる事。また黑猫の毛を闇なる所にて逆に撫れば。火の出る事など。語りけるを。寅吉かゝる事を聞ては。必ず試し見る性質なれば。我が家に畜おく猫は黑き故に。そを捕へて闇き所にてかき撫たるに。火のきらめき出しかば。甚く悅びて。常に制すれど。わざと戶をたて屛風を引廻しなどして。猫の迯むとするを捕へて撫けるが 此を山人天狗などの體中より火を出すなどにも思ひ合せて居つる故に。己が心と欺かれたるなり。二十九日に越後國より。戶田作七國武といふ 己が說を信ずる者來り宿りて。道を問けるが。これいと猛き荒男にて。髮髭は生たる儘にて。髮をかき上げて笄と櫛をさしたり。其形狀を寅吉つく〳〵と見て。古呂明の顏の柔和になき樣なる貌なりといふ。さて此男國々をいはゆる武者修行にめぐりて。勝も負もしたる事ども。また神主。出家など〻。數々議論をも爲たる噺など。大音に語りけるが。腰なる提烟草入を取出して。この根付は。とある修驗者と議論して。勝たる時に取たる本尊の聖天なるが。ろくろぎりにて穴をあけて根付に爲たるなりと云ふ故に。己餘りなる事に覺えて。然る英氣をくじかむと。態と手に取らず。子はよくも然る穢き物を腰に付る事かな。余は手にとる事は更なり。目に見る事さへ汚はしく思ふなり。然るは古學に志を赴くる者は。まづ心に眞の柱を立て。常に神の御稜威を受賜はるべく願ふこと故に。身體を淸淨に保つべきわざなり。然れば假初にも神の惡ひ給ふ。然る枉々しき物など體に付べき事に非ず。そは伊勢兩宮の神事には更なり。朝廷にても重き神事を行ひ給ふをりは。佛法ざまの事を忌み蕃客の來れる時。また其歸れる後にも。塞神の祭を爲して蕃國の妖神を追退給へる古の道を思ふべし。然るに其古道によりつゝ。然る妖々しき物を身に付ると云ふ事や有べき。さて余も覺ある事なるが。此道に入立たる程は。外國々の道風なる事どもは。憎く堪がたくて。子のやうにせま欲く思ふものなれど。其は荒魂

のすさびにて。長々しからぬ態なれば。唯々一人學問して徳行をつみ。願はくは著述をして。自然とその徳化の普く世に及ぶべく。勤むる事肝要なり。子の如く荒びて二人三人に勝たりとも。其徒も決めて心よりは服せず。返りて謗を招くわざなり。世に一升入る陶器に一升入れば鳴らざるを。中ばに入りては鳴るといふ譬あり。しか荒び鳴りては。其譬を引いでいふ人も有べし。いかで其像を海にも川にも捨よかしと云へば。伴七甚く畏りて。實に辱き御諭なり。然らば此像によく祟らぬやうに申し含めて。捨侍らむといふにぞ。余も可笑くなりて。子はいと剛なる人と思へば。しか心弱き事をいふ。古學する者の。然ばかりの物に祟られむかと恐るゝ如き。云ふがひなき事やある。殊に其聖天といふ物は。元より有名無實の物と思はるゝが。祈りて驗ある事もあるは。妖魔遊魂のより憑て見するわざと見えたり。凡て妖物は然る事あれかし。寄添はむ。人の心に透間のあらば。付入らむと窺ふ物なりといふ折ふし。傍に田河利器。竹内健雄。寅吉も居たれば。皆はいかに思ふといふに。利器と健雄とは。戸田に初めて逢しかば。聊か心をおき。唯かねて在けるに。寅吉は少しも心おかず。誠に言ふ如く元より無き物と云へども。形を作りて祈り立れば。妖魔の類より憑て。種々の變を見するものぞと師も言れたり。借また其像は海川へ捨ること宜からず。鑄潰すべき物なり。然るは海川に捨たる物と云へども。遂に陸に上る期ありて。網にかゝりなどもして上る時は。靈像よとて。世の人は信じさわぐ物なりと云ことも聞たり。然ればまた後世の愚人を惑はすわざなる故に。鑄潰すに及はなしと云へば。伴七も實もと悟り。然らば鑄潰して捨べしと云ひてぞ歸りける。十二月朔日に塙氏の塾生。佐藤甚之助來りて。余にひそかに逢はむと云ふ。此は去年の夏より知る人なれば出て逢けるに。先頃より溫故堂にて。をり／＼屋代氏の言を聞くに。奇しき童子ありて。幽界の事どもを語るが。君の常に說るゝ趣に符合の事ども多きよし聞たり。然る事侍るかと問ふに。實に然る事ありと云へば。甚之助云く。其事に就て申すべき事あり。然るは此ごろ我が神學の師。大竹先生がり物しけるに。何某といふ神職の來りて。君を散々に誹謗しけるに中に。幽界の

事を語る童子の事も。平田は山師なる故に教へて言しむる事ぞと云ひ。また石笛の事をも云ひて。彼笛は神感にて得たりなど云へども僞なり。我が知れる古道具屋の久しく持たるを請求めて。しか云ひ觸たる故に。其者は甚く怒り居るよし語るを。大竹先生聞いていたく心苦しく思はれ。何某が歸れる後に。我は平田といまだ知る人ならねど。今の世の神の道を盛に弘むる人とては此人なり。然るにかゝる惡評をうくる態ありては。同じ道をたどる我らも共に心恥かしく。且はいと惜しき事なれば。子は平田氏と知る人なり。行て我が旨を傳へよと云るゝ故に。石笛の事はかねて承り置たれば辨へつれど。童子の事はいまだ旨を承らざる故に。この事申さむ爲に來れりといふにぞ。己形を改めて。誠に同志の徒どちは斯こそ有べけれ。大竹氏の我を思ひ給ふこといと辱し。然は有れど。彼童子は己元より知る者に非ざりしを。前に山崎美成が許に居る時に。既く我が說と符合する事ども云ふ由を。屋代翁の聞出て。我を伴ひ問答せしめたるが始にて。今は我が許に置く事とは成しなれば。然るねぢけ人はよしいかに云ふとも。元より知る人ぞ知るぞにて。幽に恥ること無ければ。何でふ事はあらじ。此事よく大竹氏に謝して給はれと云へば。佐藤氏は心得て歸りぬ。

己は何ちふ因縁の生れなるらむ。然るは藁の上より親の手にのみは育てられず。乳母子よ養子よと。多くの人の手々にわたり。二十歳を過るまで苦瀨に墮たる事は今更に云はず。江戸に出て今年の今日に至るまでも。世に憂しと云ふ事のかぎり。我が身に受ざる事は無れど。是ぞ現世に寓居の修行なれど。世の辛苦をば常の瀨と思ひ定め。志を古道に立て書を讀み。書を著はし。世に正道を說明さむとするに就ては。目に見えぬ幽界は更なり。鳥獸蟲魚。木にも草にも心をおきて。憎まれじと力むれば。況て世の人には我が及ぶたけの。所謂陰德をつむを常の心定として。人はよしいかに云ひ思ふとも。幽に恥る事はせじと。假にも人の爲に宜からぬ事を爲たりと思ふことは無きに。上件の如く作言さへして。我を誘り憎む人も多かりと聞ゆるは。いかなる由ならむ。別に口口といふ人は。今までかつて名も面も知らぬ人なれば。憎み

を受べき覺はなきに。然る作言して誹ることはいかなる意ならむ。また此後に上總國中原村なる玉依姫社の神主。弓削春彥が來て。我が許へ來ざる前にかねて知人なれば口口が許に立よりけるに余が事に及びて。大竹氏にて云へる如く。甚く謗りて。此ほど彼の童子は召捕られ。平田も其事にて御尤を受たりと語りし故に。心ならず彼所より急ぎ參りつと。余が事なき體を見て悅びつゝぞ語りける。彼人のしか人ごとに我を謗り聞すること返す〳〵不審なり。余は彼人に罪犯さすとは思へども。道の長手に遺居る小蟲を。心とはなく沓の下に踏過つ事も有れば。若くは彼人にもさる類の過はせざりしか覺束なし。もし然もあらば我過ちけり。思ひ宥めてと人々云ひつぎ給ひねかし。此外にも童子の事につきて。我を誹れる人々多かる中に。平田は自說を弘めむとして大妄說を作り。故鈴屋翁は幽界にて天狗と成られ。其使者なる童子を遣せて。年ごろ我が說たる說どもの。よく幽界の有狀に符合する由を云ひ遣されたりと披露す。いと憎き事也と云ひふれ。或は神世文字の書を著せるによりて。其字を眞の物にせむとして。幽界の字の事をも童子に敎て云しむる也など。云ひ觸るるもあり。又かゝる言を朋友弟子どもなどの聞傳へて。然る人のさかしら故に我に思ほえざる災難あらむかと氣遣ひて。とく童子を逐ひてと勸むる人も多く。また常に我が許に來通ひつゝも。漢意うせず幽界の理をよくも心得ざるきはゝ。童子の言を疑ひ。世のさかしら言に率らるゝも多かるに。己さへもをり〳〵心のたゆたふ事も有しは。實にも人の口ばかり恐るべき物はなきなり。

二日に鈴木敬貞近ごろ久しく見えざるが來れり。(呼名を吉兵衛といひて、商人なり、)然るはこれが妻を常石(ときは)といふ。六十歲あまりなるが。老女には珍しく。夫と同じ樣に元より佛道を嫌ひて神を尊み。余が說を信じて年ごろ來り通ひ。講說を聞きたるが。性質强悍猛固なるに。決て美詞滑稽をもて夫の心を和ぐる才もありしかば。己戲れて於須女老嫗(おすめおうな)と名付たるが。此ごろ甚く煩ひて今をかぎりと見ゆるに。我が許に幽界に仕ひたる童子の來り居て。種々語るを己が信ずと聞て。深くあやしみ。若くは先生の學事の

今弘まらむとするを妬む妖魔の。然る童子を遣せて。まづ師の旨に應ふ言を云しめ。漸に災難あらしむる結構には非ざるかと。深く案じて師に此言を申し給へとて。今日わざと吾を遣せ侍りぬ。彼が言も理ある事と覺ゆるを。いかに然る事と思ひあたり給ふ事は侍らずやと云ふにぞ。己甚く感じて。我も既くより然る心つきて。今も常に心をつけて伺ひ居れば。謀らるゝ事は非じとて。我が思ふ旨を委く語り。夢夢案じ過すこと勿れと云へ。といひて歸しぬ。此は老媼の言ながらも。實理に合へる物思ひなりけり。敬貞が歸れる後に。門人どもに此事を語るを。寅吉きゝ居て。前にも申せる如く親しく使ふる我さへに。師の邪正を知こと能はず。またかく成れる事の善きか惡きか辨へねば。まして現世の人の然る疑ひは尤なる事なりと云へりき。(此時始めて。於須賣媼が病の事をきゝて。尋ねむと思ふほどに。四日の日に死りぬと告け來る。今わまでも此ことを案じて在しとぞ。)三日に伊勢內宮の內人。荒木田末壽神主來る。此は己が舊相識の人なり。(常の呼名を益谷大學太夫といふ人にて。故鈴屋翁の弟子なるが。所謂旦家廻りにとて。江戶に來れるなり。)童子の事を。彼是にて傳へ聞たるに。いと不審く思ふを。委く聞かむと云ふ故に。此ごろ筆記したる物どもを示せ。また寅吉が書を物する狀をも見せけるに。此も深く感じて云けらく。此童子の仕ふるは。實に神仙の正しき物と見えて。いと穩に聞ゆるを。山人も國所によりては荒々しく人をおどし誑す事と見えたり。然るは駿遠參あたりに天狗と聞ゆるは。多く手火など燭し連れて人をおびやかすを。常のわざとして。いと憎き物也。往し文化七年の夏のころ。由ありて僕二人つれて秋葉の山を夜行せる事ありけるに。例の如く峰より峰に手火をいと數多ともし。今遠山に見ゆると思ふに。やがて目前に來りなどして驚かし。又は山鳴り大木を拔仆す如き有狀などして。おびやかしける故に。僕らが甚く恐れて進み得ざりしかば。己狹箱に腰かけ居て大音に。

安國と安らけき世に螢なす。かゞやく神は何の神ぞもと詠じて。我は伊勢大御神の內人にて。神用にて此所を通るとは知らざるかと呼はりしかば手火も忽にきえ。林の動む事も止たる事あり。と云り。

仙境異聞上之二卷

平田篤胤筆記

○予寅吉に始めて逢ける時。その脉を診。また腹をも察たりけるに。何やらむ懐に紐の附たる物あるを。大切にする狀なり。守袋なるべく思ひて在けるに。其後もをり／＼懐の透間より其紐の見ゆるが。或とき取落したるを見れば。黒き木綿の。さい手を疊みたる物の如し。其は何ぞ。いとも大切なる物と見ゆるは。と云へば。

寅吉云く。此は古呂明の頭巾なるが。下山の時に此を授けて。汝しばらく人間に出る故に。我が多年冠れる頭巾を與ふ。寒風の節こを冠れば。邪氣に當る事なからむと。授られたる故に。今日まで大切に肌を放つこと無かりしなり。

とて取出たるを見れば。俗に山岡頭巾といふ物にて。いと古び油つきて見ゆる故に。髮に油を付て結ざる人の頭巾に。油の附たること合點ゆかず。偖また此と異なる頭巾は無かと問へば。

寅吉云。此は髮の油に非ず。摠身の精氣の上りて凝しみたるなり。凡て精氣は濫にうたるれば。一旦は下れども。下り切てはまた上り。上りてはまた下るなり。上達の人ほど。上る精氣強し。夫故に此頭巾は我等ごとき未練の者の。邪氣除ともなるなり。偖また水行の時は。必ず手巾か何ぞ頭の眞中に當て冠らでは。寒氣を引込むものなり。偖外に此世に見ざる頭巾は。寒風の時冠る芒の穗にて作れる。圖の如き頭巾あり。

○問云杖は神世より由ある物にて。神にも奉り。古き神樂の歌にも。「此杖は我がには非ず山人の。千歲を祈り切れる御杖ぞ。」とも有て。山人も杖をば止事なき物にして。祝言しつゝ切るにやと思ふを。いかに杖は用ひざるか。

寅吉云。杖は朴木にて。棒の如く太く作る。竹の杖もあり。然れど杖を力にして步行すると云ふ事には非ず。さて杖を切るに祝言あるか其は知らず。

○問云山人たち螺貝を吹く事は無か。

寅吉云彼方にては用ふる事なし。然れど山伏の貝を吹く事は。魑魅。妖魔を除るわざにて。上代よりの習ひなりと云ふ事は聞たり。

○問云男子の靈の行方は。古今の事實に種々見えて。考へ得らるゝ事多かれども。女子の靈の行方は。古今の事實に然しも廣く考へ得らるゝ計りは聞えず。此は師說に聞たる事なきか。

寅吉云女の靈の行方のこと。聞たる說は無れど。一旦男に生れて神になると云ふ事を聞たり。此に依て思ふに女はもと。男の愚痴心の分りて成れるにて。死しては其魂混じて。愚痴なる男と生れ。また女とも生れ。さて此世の修行によりて。男神となる故に女の靈の行方の事の。然しも聞えず。詳ならぬ事かと思はるゝなり。

○問云每年の十月には。出雲の大社へ。大小の神祇悉く集り給ふと云ふことあり。彼の境にても云ふ說なるか。

寅吉云此方にては。十月朔日に。神々大社へ立給ふと云へども。彼境にては九月晦日に立給ひて。十一月の朔日に歸り給ふと云ことにて。每の如く兩度の祭あり。偖大社へ集給ふことは。大社の神は神の司なる故に。氏神は氏子等の當年中の善惡を申し。來年中の事を定め。家內に祭る神等も其事にて集り給ふと云ふことなれど。神の御上の事なれば。委くは知れず。大かた神界の事の山人界より知られざる事。人間界より山人界の知られざるが如し。

○問云其祭り方は何さまにして祭る事ぞ。

寅吉云淸き所の四隅に垂を付たる竹をたて。しめを引延え。眞中に常の如く切れる幣を立て。神體をよせ。大なる榊に垂と麻とを付け。種々の物を供へて祭るなり。

○問云しめの形は此方の如く。七五三になふ事なるか。

寅吉云然らず。苅稻を籾の付たるまゝ。圖の如くなひ。垂を付て引張る事なり。神事すみて後に。その籾を米にして食ふなり。

○問云榊は江戶の花屋にいはゆる榊なるか。眞賢木なるか。樒木には非ざるか。また榊には垂のみ付るか。

寅吉云榊とは云へども。今いふ榊に限らず。樒にても。何にても。常葉木の枝の繁りて。眞の立たる腕の太さなるを採來て。引裂たる紙と麻とを付るのみにて。餘に何も付る事なく。左右左にゆさり〳〵と振

りて。神前の眞中に倒れざる樣に。根じめを爲て立奉る事なり。

○問云供物の品々は何々ぞ。覺えたる物どもを語り聞かせよ。

寅吉云第一に水なり。其外海川山の物。菓子何によらず。食ふほどの物は用意次第に供ふ。總て食物に限らず。木葉にても何にても、志をもて奉れば、神へはとゞく物と聞たり、

○問云其供物は何に盛り。何に置て奉るぞ。

寅吉云供物は。土器に。のたき木の葉を敷てもり。くろもじの木にて。圖の如く作れる角盃。丸盃。また膳にもすゑて奉り。神の御座所へは杉の葉。また檜の葉などを敷き。のでむの箸を付て奉る。倍またいつも神祭に。かの枕を神前に奉るは。いと〳〵心得がたき事なり。(神供はいつも、のでむの箸なり、正月は更也。)頭書云貞治五年の年中行事歌合卅三番左神今食　深けぬとて今ぞ手向るいたまくら神もぬる夜の時や知るらむ。

○二月朔日初午の日に。今日は山にても初午にて。賑かなりと云ふ故に。其祭り狀は。いかにと問へば、

寅吉云まづ二壇ばかりに神棚をかまへ。上壇に稻荷神の神體に准へたる。髭なき若き人をすゑ。次壇には其末社に准へたる人々。五六人を居ゑ。常の神祭の如くして。農具をそなへ。師裝束を着し。襷をかけ、親ら供物を料理して供へ。豐年を祈り祭らるれば、神壇なる人々その供物を皆食して。後に壇を下り、稻荷の神體と成れる人、指揮をなし末社に准へたる人々。供へたる農具をとりて。農人の年中に耕作する眞似び。田をうなひ。種をおろし。植付け。草取り。刈藏め。稻をかつぎ。また馬につけて歸るまでの事を。眞似びて仕舞ふなり。

○問云稻荷神の神體たる人。また末社に准へたる人人の裝束は。いか樣の物を着るぞ。

寅吉云神體となる人は。髮を圖の如く結ひて。圖の如き櫛。三枚。また。笄をさし。綠にても。白にても。狩衣を着て。くゝり袴を着し。末社に准へたる人々は。白き淨衣を着て袴を着する也。

生靈祭の時は。髮を。みづらに結ふなり。

○問云襷は何にてかくる事ぞ。

三枚さす
柊か黄楊か
わからず

笄金なり
巴の紋あり

寅吉云正月の神祭には。松葉襷とて。圖の如く。松葉をつぎ合せたるをかけ。其外の神祭には。藤襷とて藤の蔓を用ひ。又楮の皮。又麻などをも用ふる也。

○問云師のみづから料理せらるゝは。いか樣の物ぞ寅吉云自然薯襷を　わさびおろしもて擂り。淺草海苔の上におき。其上に鹽少し。山椒一粒を入れて。圖の如く包み。わり菜にてしばり。また淺草海苔に擂薯をならし置き。鹽と山椒の末とを振かけ。心に干瓢を入れて海苔ずしの如く卷き。兩端かけて割菜にてしばり。また柏の若葉に海苔をしき。海苔の上に擂薯を置き。鹽を摘み入れて。割菜にて結び。また紫蘇の大葉を一夜。鹽水につけて。擂薯に紫蘇の實の鹽に漬けたるを。さつと洗ひて交へたるを包み。右四品何れも油もて揚物にして奉る。但し柏葉。紫蘇の葉などに包む揚物は。初午の時の事には非ねど。序に申すなり。また肴をば能く身どり。ゆでゝ。水に入れ。能々揉洗へば。粉糠の如くなる時に。布に包みて絞り。葛粉を入れて麻布に包み。鹽ゆでにす。また白槿の花を取り。紙の間に狹みて蔭干にして蓄へ置き。用ふ時。酢に漬て。干瓢。椎茸。蓮。慈姑。などを。いと細に切たゝき。味噌のたりをもて。煮て能く染たる時に。絞り上げて。其醤油を水と合せて。精米八合に。餅米二合ほど加へて飯にたき。煮上りたるときに。かの干瓢。椎茸などを煮たるを入れて。たき上げ女竹を一寸五分ほどに切たる中に詰め。堅めて出したるに。一つ毎にかの酢につけたる槿花を冠らせて供ふ。此を玉むすびといふ。一名を花鮨とも云ふ。花ともに食ふなり。(頭書云姫百合。躑躅花。さつき。櫻花。梅花。山吹。桔梗。はつ茸。椎茸。竹の子。しほ焼にしても　よし子を竹の子の樣に煮て食ふ。すゝきの穗の盃。) 偕赤飯。汁。また

アリの酒をも土器に入れて奉るなり。
○問云油揚をするは何の油ぞ。
寅吉云松實の油なり。此は南部の方にある由にて。松毬（かさ）は兩手の拳を合せたる大さなり。葉の細なる松なりとぞ。用ある時は速に行て採來り。實の堅き皮を去り。蒸して細にはたき。太布の袋にもり。橿木の厚板を圖の如く削り。兩方より鐵の輪を二つ箝めて打込み。垂らし取るなり。出ざれば幾度も蒸して。しむるなり。但し此は少しばかりの油をしめる仕方なり。多く醞（しむ）るには常の榨（しめぎ）が宜しきなり。偖此の油をもて麩を作る事あり。
○問云赤飯は糯米を。たゞ炊たるのか。餅米を蒸したるなるか。いか様の炊法ぞ。
寅吉云赤飯は糯米を常の赤小豆と炊合せたる也。炊かたは。まづ小豆を水にて煮たて。一吹したる時に頬打とて。水を少し入れて靜め。また煮立たる時に洗ひ米を入れて。水かげむを察し。土壺（頭書云飯を盛る麻の木の器の事）に入れて堅く燒たる鹽を崩さず。よき程に取分て釜の眞中に入れ。蓋をして炊上るなり。如斯すれば至て色よく炊上る物なり。また八重生。小豆の飯をも炊なり。さて赤小豆飯の時は決めて煮しめを菜とす。蓮根。胡蘿菔。椎茸。干瓢。山薯。慈姑などなり。八重生飯には決めて赤小豆の味噌汁なり。
○問云赤小豆の味噌は。いかにして作るぞ。此方に用ふる味噌は無きか。
寅吉云味噌は此方のを取りて用ひもすれど。多くは赤小豆味噌を用ふ。その造りかたは。先づ米を硬く飯に炊て干し。火にかけて。ふくれる程に炒て。沸湯に浸して能く水を去り。赤小豆を味噌の鹽かげむに成るほど。始より鹽を入れ煮て。大概よく煮たる時に。おろし冷して水を去り布袋に入れて絞り。さて擂鉢にて能く擂りて。かの干飯の炒て水に漬た（液）を交へ。竹の筒に入れ風の入ざる様に口をして。三四十日も。なるゝまで釣置きて用ふるなり。但し米を右の如くもすれど。糀にても宜しきなり。また糠味噌と云ふもあり。粉糠を炒て鹽湯を煮たて。口口りとかきて竹筒に詰て釣り置くなり。摠て豆の類は何にても。味噌に作る。また橡の實。栗の實も味噌になる。甘諸も味噌になりそうなものなり。凡て此様

な質の物は味噌になるなり。
○神代に宇氣母智神の御身より。蠶と桑木と成たる事を講じけるを聞て。山にて桑木の芽の二寸ばかりに延たる時。一切。桑の木をもて祭る神事あり。宇氣母智神を祭るには非ざるかと云ふ故に。其祭りさまを問ひしかば。
寅吉云まづ神壇にも。桑の枝葉を敷き。葉を細に刻みて飯に炊交へ。汁も桑の芽を味噌に摺り交えて奉る。さて惣じて神に奉る汁を盛るは土器に非ず杉の木の一尺廻り許りにて。すぢよく生立たるを。たけ三寸計りに切て小口に大抵七寸廻り程の榲木の短き棒をあて木槌にて打つ時は。杉木の心其棒の太さに抜くるを。抜終ずして繕はず。圖の如く其儘に作り。もし透間あれば紙を詰て此に汁を盛りて奉る。凡て神具に用ふる物は然しも手の掛りたるを用ひず此類に作りて掛流しにするを善とすと師の言なり。右の椀に汁を盛りて食たる事ありしに甚く食ひ惡き物なり。
○問云神降しの神樂は如何樣にする事ぞ。
寅吉云神降しの神樂をする時は。まづ世間の小兒を借集めて淨衣を着せ。髮を唐子に結ひ。小竹を。ふさやかに束ねて持しめ。頭より水をあみせ。山奥の廣き平地に。圖の如く竈戶を築き。釜を掛け燃る炎にて釜の隱るゝばかり大火を焚て。湯をたぎらせ。種々神に供物を奉り。（頭書云生たる魚を供へる供物を釜に入れて煮る。）借たる小兒等にも種々の馳走をして機嫌よく心次第に遊ばしめ。湯の沸上る狀を見て。よせ奉れる神のきげむの善きか惡きかを占ひ。（頭書云どふしても神の願を聞き給ふ法あり火をたきて色を見て吉凶を見てまた燒て卜ふ。）さて終には釜の湯に。かの束たる小竹を浸して振散し。事終りて翌日に。借たる子等をば親里へ送り歸す事なり。此を神樂と云ふ。此神樂を行へば如何なる神と申せども。寄り給はずと云ふ事なし。
○問云碁。將棊。雙六などの遊びは無きか。また若き山人などのする珍らしき遊び事は無きか。
寅吉云碁をうつ事は　たま〳〵有れど。將棊をさす事はなく。雙六もなし。碁石をば木にても作る。さて戲れ遊びは種々有るが中に。土投とて大勢東西に分かりて互に泥を丸めて山の如く積おき。負じ劣ら

じと打付合ひ。顔も體も泥まみれに成たる方を負とするなり。また薪投とて。仙人の山に切おける薪を取りて互に投合ふ。上手同士なるは中にて木の小口と小口うち當りて落る。此も打しらまされて迯たる方を負とする也。又球打と云ふ事あり。高き木の横に指たる枝に。一人を圖の如く釣り置て。長き紐に蹴球の如き球を付て持しめ。其下に角力の土俵程なる輪をしるして。其内に大勢立居るを。木末より彼の球をさげて。下なる人の頭にあてむとす。當てられたる者を替へて釣る故に。下なる大勢の者ども當られじと。丸の内を迯まはる也、其喧ぎの紛に輪の外へ足を踏出しもすれば。此も釣り上らるゝ遊びなり。

○往し卯年に。己れ四十まり四つになりければ。俗に厄年と云ふ事を思ひて。「四十まり四つの齢を今年より。一とかぞへて萬世を經む。と詠みて扇に書き付けたるが傍に在しを見て。此歌の心はいかにと問ふ故に云ひ聞せければ。山人の歳數を定むるも此心ばへなりといふ故に。其由を問しかば。

寅吉云山人の歳を定むる事は。いかにして定むると云ふことは知らねども。まづ千歳とも萬歳とも定めて。其數を百に割りて。其一を一歳と定たる物なり。其は譬へば萬歳の定めなれば百歳を一歳とす。我師は六百歳を一歳とせらるれば。定命は六萬歳と見えたり。右の如く定めて其一念を少しもたじろかさず。生涯善行をつみ行をたてゝ。其願を通す事なり。さて其定めたる年數畢りては。身を隱して眞の神となるとぞ。また人によりて。無歳とて年を定めず。世の有る限り活むと定たるもあり。

○また此より遙後の事なるが。越谷なる或男の。讃岐國象頭山に參詣して歸るさに。我が許に立よりて。寅吉に何にても金毘羅神の尊き物を書て得させ給へと切に乞ければ。此字を書て。此は金毘羅方の山人の上も無く尊き物にする。彼山の御神の文字なるが。足下の切に請ふ故に書て參らするなりと云を。予傍より此は何ちふ字にて。何に記し有る字ぞと問しかば。

寅吉云此は何と云ふ字か知らねども。時々象頭山より廻す卷物の始に。此字を光るばかり墨黑に記しあり。此字を見れば象頭山より廻れる卷物と知る事なり。

○問云其卷物は何の爲に廻す事ぞ。象頭山の神は凡ての山人の君とおはします由などに依る事か。
寅吉云 君とおはし座す 由には非ず。山人各々をりをり山を替へて仕事あり。其は我が師の本山は信濃淺間山なれど。常陸國なる筑波山。また岩間山にも住み。或は諸越その外の國々の山に住るゝ事も有り。すべての山人此の如し。夫故に山々より互に此人今は此國に居ざるか。或は何國の山に住むと云事を知らむが爲に回す事なり。其回狀淺間山に來れる時。師の居らるれば。みづから其實名と。書判と。歲數とを記して返さる。山々にて連名する事。皆これに同じ。偖また師の許より回す卷物には。始に先此の如き字を記さる。山々にて此を見れば。即淺間山の卷物と知りて。各々連名して返す也。山々より右の如くする故に。一年(月カ)に二十度も來る事なり。
○問云その卷物に師の名のみを署して。屬從ふ人々の名をば記さゞるか。師の歲數は。いくつと記されしぞ。
寅吉云何れの山にても。たゞ其頭領たる山人の實名花押。歲數のみを署して。屬從ふ人々の名は署さず。師と古呂明の歲は。いつも七歲と記さる。彼の無歲なる人は名の下に無歲と記しあり。(但し無歲と記す人は死解仙なるべし。)
○問云金毘羅樣の御實名いくつと記させ給へりしぞ
寅吉云御名は何と云ふ字か知らざる字を二字書てあり。御歲は八歲と有し樣に覺えたり。
また此より遙後に。皆川氏より寅吉に云遣さるゝ事ありて。革文筥に入れて遣せられしかば。其事を調へて參らする時に。文筥の紐を圖の如く結びて首にかけ來る。山より卷物を回らす筥の紐は。かく結ぶ。山々にて各々結びかた異なり。
○問云汝の師。杉山々人の事の物語は。汝に常に聞けど。其弟古呂明の事は。然しも物語なきは何なる故ぞ。若くは師の分身なる故に。事のおぼろなるには非ざるか。
寅吉云古呂明といふ人は。至て穩順なる人にて。常に師の業を補佐して。師の爲す事。思ふ事を悟りて。師の許に居ては常に机によりて記錄をなし。又は工物など何によらず種々の物をも作り。また國々山々に行て事を辨ふるも。多くは師を勞せず。師命をも

待ず。早く師の心を悟りて辨せらる。また我等如き輩の。行の世話をもせらる。夫故に我等もし。徒をなし過失など有れば。此後はかゝる事をなせそ。師の叱り給ふぞとて密に誨へらるゝ事もしば〱なり然れど師をさし越して我々に事物を敎ふる事なく。師の彼に此事敎へよと言はるれば敎へらる。師は威稜嚴にして。一度をしへられし事を忘るゝ時は叱らるゝ故に覺えて忘れず。古呂明の敎へらるゝ事は。忘れたらむには。又敎られむと思ふ心ありて。忘るる事も多くあり。分身には非じと思ふ由は。面ざしも異にて師は四十餘りと見ゆるに。古呂明は四十には足らじと見ゆ。殊にをり〱師と議論の合ざる事あり。又は諫言せらるゝ事も時々あり。其を師の用れざる時に。然もあらば我は今より御許には居らじとて。他へ避り行れし事も有りき。また或時の事なるが。何やらむ師に代りて書記せられたる物の事にて。兄弟互に爭ひ募りて。古呂明みづからの書れし數卷の書物を。皆燒捨て出行れし事もあり。然れど其時々しばし引別れはすれど。互に情の通ふにや有らむ。また歸り來て異なく補佐して互に少かも隔意ありげには見えず。誠に不測なる間なり。さてまた師の爲むとする程の事を何によらず悟りて。古呂明の代り勤らるゝ狀と。其間の睦しきに合せては。右の如き爭ひもあるに就て。又殊に意得がたき一事あり。其は或とき師の何やらむ手を放ち難き事にかゝり居られし時。古呂明の代りて小便せられたる事あり。此一事今に心得がたし。

○又或時。門人どもの貧困なるが。二人三人うち寄りて互に歎息しつゝ。其事語り合けるを寅吉傍につく〲と聞居て。人間と云ふ物は。山にても云如く。世間の事に苦勞する事なく。自分一己の事だにすれば濟むと思へば。自在が成らず。長生もならず。借金があるの。貸金があるのと云ふて。苦勞をする。山人は長生にて。自在もなり。借金。貸金など云樣なる苦勞はなしと思へば。世間の世話に鬧がはしく。諸方を探り翔り歩行き。無爲に居る事少くて苦勞也。然れば何になりても苦勞は遁れざる事と見えたり。と云ひし故に。一人が云けらくは。山人は諸越の仙と同じ趣の物と聞ゆれば。仙人と同じ樣に。安閑無爲にして神通自在をもて身の樂

として在べき物と覺ゆるに。何とて然ばかり聞がはしく事多きぞ。

寅吉云山人といふ物は。神通自在にて山々に住する事は。諸越の仙人と同じ趣なれど。安閑無爲には居ざる物なり。其譯は。まづ神の御上より申すべし。師言にすべて神といふ物は。旣に神と崇められては世の爲。人の爲となる事は。何事にても惠み賜はらでは。叶はざる由ある故に。千日祈りて驗なきは萬日祈りて驗あり。萬日祈りて驗なきは生涯も祈らむと云ふ樣に。祈願すれば。たとへ邪なる願にても。一旦は驗を與へ給ふ。況て正道なる祈願は。能く信心を徹しだにすれば。叶はずと云ふ事なきものとぞ。然れど人間の願ふ事ども。道理に叶へる祈りと思へるも。神の方より見れば。多くは邪の願なる故に。後に我知らず。それ程の罰を受る事なり。況て道理に違へる事と知つゝ願ふ事は。遂に天道より永久の罰を降し給ふとぞ。偖山々に神のおはし座ざる山は無く。また山人の居ざる山も無きが。其山によりて秋葉山石間山などの如く。世間にても山人ある事を知りて。天狗と稱し祈り崇むるは云ふに及ばず。山人ある事を知らず。たゞ其山に鎭座し給ふ神に祈りても。其山に住む山人。その祈願を遂さする事なり。然るは我師の本山は。淺間山なれど。世間の人は。かつて師の名をだに知らざる故に。祈願ある時は。たゞ淺間神社に祈る。然れども其願をば師の聞受て。神に祈て遂さする類なり。夫故に象頭山の御神の如く時めき給ふ神の。聞かはしく御座します事申すも更なり。彼山には山人天狗ことに多かれど。手の回らざる故に。諸國の山々より。山人天狗かはるがはる行て山周りするなり。其上にも猶手回らず事多き時。また人間の祈願さまざまなる故に。其山々にて祈願を遂しめ難き難事も多かり。然るをりは他山の山人たちに此祈願を遂させむ事は。如何にせば宜からむと探ぬるを。我師にまれ誰にまれ。まづ聞受て自分に能はざる事は。また他の山人に付託する故に。難義なる事は。先より先へ云ひ送りて。本の出所を失ふ事も有り。しか云ひ送る間に其事に得たるが有れば。次々に本へ送りて祈願を遂さするとぞ。山々より互に卷物を廻らして。名を署(かい)しむる事も此故にて。此は山々の山人今ごろ自分の山に在りや。他山にあ

りやと云事を改め置て。某々得手なる事を付託し合はむが爲なり。それ故にこの卷物には。他山にて稱する名は署さず。實名を記す定りなり。此故に山人の事多く閙がはしき事云も更なり。一事につきて數百里を。數度空行往來する事もあり。常にも何處より何なる事の付託あらむも知べからねば、世に有る程の事は。何によらず知辨へて心にたもち。用ある時を待て在る故に。事を博く知たるほど。處々よりの付託は多かれど。自然に位は高くなる。我師は四千歲に近き人にて。知たる事の多き故に、山人の多かる中にも多用に閙がはしきなり。常に苦行するも。ますく\靈妙自在を得て。人間の爲をせむとてなり。然れば山人と云ふ物は人間よりは苦勞多し。是をもて人間は樂な物ぞと常に羨まるゝなり。

○問云山周りと云へば各々其山々に行て見周り守護する事かと思ふに。然も聞えず。委く其由を語り聞かせよ。

寅吉云山周りと云は。我が山にばかりは居ず。彼山此山と。代るぐ\互に周り往て持つ故に云ふ言なり。去年極月三日より。この正月三日まで。寒三十日。師の象頭山に居られしも。山周なり。彼の山は右に云ごとく。事多きが上に。寒中は祈願の人多く。殊に諸願を果し給ふ時なれば。毎年寒中には諸國の山山より大勢の山人往集りて助を爲すなり。山人のみならず。鳥獸の化れる天狗までも集りて助をいたす。金毘羅樣は山人天狗すべての長の如く座ませば。然する定めなり。然れど他の山々と違ひ。毎年の寒中ばかりにて。常には山周りに行く人なし。また金毘羅樣は他山の山人の如く。本山を出て他山を周り給ふ事もなし。我が知りて師の周られたる山々は。象頭山。烏山。妙義山、筑波山。岩間山。大山などなり。大山に居られし時は常昭と稱せられたり。其は大山の山人の長を常昭と云ひて僧形なるが。かつて人の通はざる杉山といふ深山に庵を結びて住み。他山の山周りに行れしほど。師は其庵に住みて其名を稱せられしなり。何れの山に行ても各々互に本よりの名は稱せず。其山の山人の名を稱する例なればなり。其後岩間山に住ては。杉山僧正と稱せらる。杉山の稱號は大山の杉山といふを用ひらる。僧正といふは岩間山の山人の名か。其は知らず。雙岳と云ふ

號は唐土の山に住れし時の名を用ひらるゝとぞ。偖また師の金毘羅樣に往るゝに就て說あり。そは、まづ師の手に從ふ山人は。古呂明。左司馬をも入れて十一人有るが。師も共にかぞへて十二人のうち。每年鬮取にて六人づゝ金毘羅へ行くなり。然るに寒三十日は山人の大切なる行の時にて。一年の寒行を勤むれば位の進む事なるに。讃岐へ行ては。一年むだに成る故に誰しの人も。いやがりて替りを賴みなど爲るを。師の鬮に當られたる時は、かつて替を出さるゝ事なく。古呂明。左司馬を連て、外に三人と共に行かるゝなり。其は師も寒中の行は爲らるれども。行の積て有る故に。下なる人の行をむだにせしめて。我が行をせむとは爲られざるなり。師の鬮に當らざる時は。古呂明。左司馬など鬮に當りても替を遣りて行かず、其は此二人は常に師の左右に居らでは辨じ難き事の多かればなり。

○問云前には師に隨從の人は。古呂明と左司馬と二人也といひ。常にも此二人より外の人の事は云ざるに。師に從ふ山人は。古呂明。左司馬をも入れて十一人ありと云ふ事心得がたし。古呂明。左司馬の外に九人の名は何と云ふぞ。常に師に付き從ひて在るか。

寅吉云その九人の人々は。常に師に附ては居らず。各々某々に少さき山々を分持て居り。神事その外に多人數なくて叶はざる時、または師の講釋の時。或は金毘羅立の鬮取の時などのみ寄り集るのみにて。常に逢ざる人々なる故に。名も知らず語り出る程の事も無きなり。

○問云大山の常昭山人は。僧形なりと云こと心得がたし。其故は新宿なる藤屋正兵衛が許へ來りて逗留して。下總の三社を書たりしは。黑髮長く生下りて山伏の如くなりしと云へり。

寅吉云そは右申す如く。他山より助に行たる人の。常昭と名乘れる時に行たるなるべし。眞の常昭山人は正しく僧形なり。彼三社の神號の手風も眞の常昭に非ざれば。決めて常昭と名乘れる餘人なり。彼山人の書は我正しく覺えて見まがふ事なし。また眞の常昭山人は。左樣に輕々しく人間の家に逗留などする人には非ず。

○問云僧形と云へば常に剃髮して在るを云ふか。

寅吉云彼界にて僧形と云ふは。此方の僧の如く頭を奇麗に剃りて在ると云ふには非ず。頭の肌の見ゆるほどに剃たるは嫌ひて。大かた一年に三度ばかり剃りて。栗のいがの如くなるを僧形と云ふ。それ故に剃たてのうちは。引籠り居て髮の二分ばかりにも延たる頃より出るなり。

○問云此より口の方に當りて夜國とて云々の國有りと云ふ。然る所に至れる事はなきか。

寅吉云其はホックのヂウの國と云ふ國なるべし。夏の頃行たり。日の大さ拳ほどに見えて寒かりしかど。雪はなく薄闇く八分も缺たる日蝕の時はかくもやと思はれ。日はちら／＼と竪に動きつゝ西に沒ると見え。夜は甚だ長く覺えたれど。月の見えぬ頃なりし故。月の樣子は知らず。地に幾筋も溝川を掘りて有しなり。此國は日の見えざる時も有る故に。水の光りを假る爲なりとぞ 五穀も相應に成る國と見えて。麥を刈て有りき。また稻も出來ると見えて藁の道間に有りしをも見たり。木も草もあり。人の狀は大かた瘦枯れて。丈高く。頭少さく。鼻高く 口大きく。手足の母指二本づゝ有りき。衣服は何やらむ心つかず。家は無く穴に住む趣に見えたり。然れど日久しくは居ず。此より女島へ渡りたる故に委くは知らず。

○問云女島は此より何れの方に有る國にて。其國の有樣はいかにありしぞ。

寅吉云女島は日本より海上四百里ばかり東方に有り家は作らず。山の横腹に穴を掘り。入口を窄く中を廣くしつらひ。入口の所を纔に木を渡して昆布を葺て雨を防ぐ。日本の女に替る事なし。髮はくる／＼と卷て束ねたり。衣物は海はゝきの如き物の和やかなるが。海に有るを採て筒袖の如く組織たるを着て着物ながらに海に入りて魚をとり昆布を採りて食ふ海より上りて身を振へば。着物の水みな散落るなり此は火には然しも傷まざる物なりといふ。此國の昆布は莖の太さ人の股ほども有べし。そを二ツに裂けば中にぬら／＼としたる水あるを採りて煎じつめて蕨餅の如くして食ふ事も有り。さて女ばかりの國故に。男を欲がり。もし漂着する男あれば皆々打寄て食ふよしなり。懷妊するには。笹葉を束たるを各々手に持て西の方に向ひ拜し。女同士互に夫婦の如く抱き逢ひて妊む由なり。但し大抵其時は定りありと

ぞ。此國に十日ばかりも隱れ居て樣子を見たりしなり。

○問云この外に珍しき國に行たる事は無きか。

寅吉云猶知らぬ方の國々へも多く行たれど。見物とはなく。たゞ師の用事を調へに行るゝに附て往たるにて。其國々に至りても人の住ざる野山。または海川などにて用を調へられたる事多き故に。其國の狀までを知らざるが多く。今思へば夢を見し心地なる事多し。たゞ其中に珍しく思へる國あり。此には十日餘りも居られし故に少しは覺えたり。男女ともに貌は然まで尋常の人に異なきが。言語は訣らねどキヤンキヤンといふて犬の聲に似て。家ごとに犬を多く養ひ置て常の食とし。服物には生たる犬の腹を裂て。其生皮を全剝に剝て生なるに。その四足の所へ手足を入れて腹の裂きたる所を縫ひ合せて着ながらに干し。髮を被り居たり。國中の者その如くなる故に。犬の立て歩行く樣に見ゆ。白犬赤犬など各々多く養ひて。赤犬の皮きもの幾枚。白犬の皮きもの幾枚持たるなど樣に。多く持たるを身上よしとす。其首領にも犬を貢物とす。首領とても犬の皮着物なり。また犬の大さにて犬に非ず馬の樣にも見ゆる獸を養ひ置て。魚鳥などを取しむ。此國の人。海に落入りても死する事無れど。夫ながらに海中の物と變るとぞ。多く見たる國々の中に。此國ほど穢はしく覺えたる國は無きなり。然れど國の名も知らず。此より何方にあたると云ことをも辨へざれば。書留むる事は用捨し給ふべし。

○問云師に伴はれて行たる國々にて。象。虎。獅子などの類ひ何ぞ此國に無き獸を見たる事は無きか

寅吉云象も虎も見たる事なし。獅子をば見たるが。此方にて畵く如き物には非ず。猥犬の大きなるが如きいときたなき物にて有しなり。其國は天竺といふ國の近所なる由なり。

○門人どもに。古史なる伊邪那美命の水神に。瓢を持て火神の荒びを鎭めよと誨へ給へる段を說聞かせ。因に瓢の酒に功能ある由を說けるを。寅吉も聞居て宜しこそ山にても瓠に酒を入れ。また盃にも椀にも作る。猩々も瓠にて酒を呑むと見ゆと云ひし故に。傍なる人うち笑ひ猩々の酒を飮む事を見たる事ありしかと問へば。

寅吉云外國には非ず。此國の他處なるか知らねど。海に遠からぬ山の谷合に。猩々の甕なりとて石穗に譬へば禹餘粮壺の如く。自然に成たる甕有て。其中に自然の酒の。なみ〳〵と沸出て有しを見たり。人々も飲む故に。我も飲たるに誠の酒よりは薄けれど。香もあり醉ふ事も異なる事無りき。甕に蓋をして瓠を盃の如く作り。糸尻に藤蔓を付たるが蓋の上に添て有しなり。猩々といふ物は能く人の眞似をする物故に。人間の盃を眞似たるなりと師は言はれたり。但し其酒は飲たる所を去れば直に醒るものなり。日本の内には違なけれど何國なりしか問はず。さて瓠といふ物は酒を入れて久しく置けど香を損はず。凡て藥を入れ置てよき物なりとぞ。麝香の類ひ香の高き物。此に入るれば香の散失せずと聞たり。盃また椀などに作りては。中を漆にて塗る事なり。

○問云岩間山の天狗の事を。彼邊の知たる人々に尋ぬるに。いと舊くは五天狗と云ひしが。次々に祭り加へて十二天狗と稱し。後に又長樂寺が加はりて。其首領と成れるより十三天狗と稱する由なり。誠に然りや。

寅吉云舊き事は知らねども。彼山の天狗を世に十三天狗と稱すれど。十三人の山人あるに非ず。人の亡靈の成たると。現身の成たると。合せて四人ばかりに。鷲鳶また獸などの化たるが多し。其内人形なるは長樂寺ばかりなり。長樂寺が首領と成れる由は。十二天狗の徒が。長樂寺を引入れて手下にせむと爲たるが。長樂寺は其頃の岩間の別當の知たる人にて。異なる靈感もありし故に。殊更に敬ひて第一と崇めしかば。長樂寺元より剛强なる人なれば。十二天狗をおし伏せて。其首領と成たるとぞ。凡て人ならぬ物の化たる天狗は。言語も通ひ自在の業は爲れど。然すがに甚だ愚なる物故に。おし伏られしなり。長樂寺は三十歳餘りと見ゆる山伏姿の人なり。偖師は彼山に居らるれば。長樂寺を始め何れも其命を聞く事なり。

○問云神前に時々の花を奉る事は無きか。

寅吉云時々の花をも。見事なるは活けて奉り。又いつも稻の苗を活けて奉る。穗の有る時は猶更の事なり。もし稻苗の無き時は。神事のある前に早く種を植付て。六七寸にも生延たるを。揃へ束ねて根を切り青

く。ふさやかなるを奉るなり。また新米なき時に新米に擬して奉る米あり。其製法は右の如く植付たる苗の青きを苞に作りて。其中に米を入れて五七日も蒸おけば。稲葉の色香のうつりて。新米の如くに成るを奉る。此は飯に炊ても新米のかほりする物也。

○或日人々と種々の物語りの序に。中村乘高の集たる奇談の書に。或人の女の鐵を食ふ病を煩ひたる由を語りけるを聞て。

寅吉云鐵の出る山に生ずる奇しき物あり。生り始は山蟻の大きさにて。蟲といふべき狀なるが。鐵ばかりを食ふ。始め小なる時は鐵砂を食ひ。大く成るに從ひて釘。針。火箸何にても鐵物を食ひて育つ物なり。形は圖の如く毛は針金の如し。師の此を蓄置て試られたるに。夥しく鐵を食ひ馬ほどに成て身より自然に火出て燒死たりとぞ。名は何と云ふか知らず。此を麒麟なりと云ふ人もあれど。いかゞ有らむ。偖また此につきて思ひ出たり。猿は年久しく立ては。すさまじく大く成りて立あるき。頭に長き髮を生じ。眼は殊の外に光り。自在の術を得て。さて數千年經ては身より自らに火を出して。今迄の體みな燒るとぞ然すれば其體內より別に人と然しも異り無く毛もなき體の出るが。をり〳〵また猿の身に成りて群猿と交はり居るなり。此は師のかゝる物の變化も見置けとて。燒たる體內より。人形して生れ出たるを見せられたり。此をもぬけといふとぞ。

鐵を食ふ物の圖

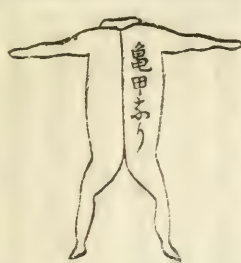
○問云師の寢らるゝに。夜具をも着らるゝか。其儘に寢らるゝか。

寅吉云夜着も布團も枕も有りて。緩やかに十日も廿日も高鼾にて寢らるゝなり。

○問云夜着布團は何にて作るぞ。此方のと異りは無きか。

寅吉云婆が懷の織物を二重にして。薄の穗をこき。夥しく入れて綴付たる夜着ふとむなり。形はさしも此方のに異なし。

○問云枕は何をもて如何なる形に作りたる物ぞ。も

し菰にて作れる枕は無きか。
寅吉云枕は麻の綴り枕にて。中に入たる物は何やらむガサ〳〵と音して藁の様に思はれたり。頭の病を煩はざる薬になる物とぞ。菰ならむも知べからず。
○問云婆が懐と云ふは何なる物ぞ。
寅吉云山にも野にもある蔓草にて。茎葉をむしるに。乳の如き白汁の出る草にて。小なる白花咲く。實は蕃椒を四ッばかり合せたるが如し。その實秋に成れば割れて。其中より木綿の如き物出るを婆がふところと云なり。
○問云婆が懐を如何にして服物になる如く爲るぞ。
寅吉云大帛の糸の太きを。五六尺づゝに切て。竹に弓絃の如く張り。麻糸または木綿糸にても太く縒り合せ。糊をひきて婆が懐のよくうち揉たるを。したたかに縒りつけ。干して此方の夏襦半の如く。こよりにて作れる甚細に圖の如く組たる物なり。

龜甲ぶり

メリヤスの如く婆が懐にて龜甲に組たり

まづ足を入れて手を入れ後は人にぬひ合さするなり。
○問云師の久しく持傳へて。大切に爲らるゝ着物は何を以て。いか様に織縫たる物ぞ。また名を何といふぞ。
寅吉云名は何と云ふか知らず。麻にも絹にも非ず。藤木の皮に似たる何やらむ木の。譬へばアンペラの柔なるが如き。厚き單を製して織たる物にて。色は黄をおびて白し。織目は筋違に見ゆ。背に縫目なく一巾を折返して裁合せ。前を裁さき。かます縫に爲て。圖の如き襟をつけ。牡丹にて合せ。廣袖にて上には白き絹さなだの如き糸にて。圖の如く縫ひ。下は黄と緑との太糸にてぬひ。其末を垂たり。さて腰にあたる所の左右に圖の如く尖り出たる物あり。此は身を放ち難き物を入れ置く所にて。此を袂といふ。服物の多かる中に別に此を大切にして容易には着られず。此を着る時の帶は紫の丸ぐけを〆らるゝ着たる狀圖を見て知べし。
○問云師は僧衣を着し。或は山伏姿など爲らるゝ事は無か。

寅吉云師も大山。岩間山などに居て。其山の事を爲らるゝ時は。緋衣を着せらる。但し世間の衣は元よりひだをとりて仕立れど。彼方のは着てひだをとる。地はもじの樣なる物也。妙義山の山周せられし時のみ。山伏の裝束せられたり。裝束は然しも異なきが。頭巾は此世の山伏のよりは。したゝか大きなりき。

○問云師は座禪靜坐などして。印を結び咒文を唱へらるゝ事などは無きか。

寅吉云坐禪靜坐などいふわざを殊に爲らるゝ事は無れど。重き考へなどの有る時には。坐をくみて目の閉ぢイナの印を結び何やらむ唱言して考へらるゝ事はをり〳〵あり。

○三月節句の日の前日に。明日は山にても節句の祭ありと云ふ故に。その祭りの有狀はいかにと問ひしかば。

寅吉云三月節句は。いざなぎいざなみ神の祭なり。神壇を例の如く搆へて。二神の靈代の幣をたて。種種の供物も例の如し。唯常の供物と異なるは。あさつきと片貝の酢。味噌あへと。榊葉に醴を付て奉るとなり。

○問云醴の造方はいかに。榊葉に付くるとは如何なる狀につくるぞ。紙雛または藁人形などを作りて。川原に流す事などは無か。また桃の花を供へ。又は桃酒を進る事などは無きか。

寅吉云醴の造り方は。飯を甚こわく炊て熱き間に糀を合せ。氣の漏ざる樣に蓋を爲し置けば。飯の熱さにて糀はやわらかになる。其を挽臼にてひきて神前に立奉る。榊の葉ごとに付けて供るなり。紙雛藁人形桃花の酒などの事はなし。

○國友能當問云或人に頼まれたり。甚く雷鳴を恐る人にて。雷鳴の前に早く其氣ざしを知りて。頭痛眩ひなどして臥し。雷の甚しき時は氣絶する事も。をり〳〵あり。此を恐れざる爲方はなきか。

寅吉云其は。なるたけ高山の上に穴を掘り。其中に一夜入り居て。後に中なる赤土を一つかみほど取て。何にても古木の活根を切り。土と共に紙に包みて蓄へ置き。雷鳴の時に臍の上にあてゝ。心をおちつけ居れば動ぜぬ物とぞ。此は雷鳴の時用ふるのみならず。至て高き所に昇る時。または馬駕舟に乘る時も

臍上にあつれば。眩暈する事なし。また氣違を愈すにも暫く右の如き宍住居をさすれば。能く愈る物ぞと聞たり。

○同人また問云。信州松代の邊は。年々痢疫行はれて人を害ふ事甚多し。此災を祓ふ法は有まじきかと。或人の問なり。いかに爲方は有まじきか。

寅吉云師には其を除る法の有べきも知らねど。我は知らず。唯受ざる法はあり。其は鰌を生たる儘に背を箆にて撫れば。ぬらつき多く出るを取りて。白砂糖を交へ冷水にて夜の明方に夜々用ひ。また鰌の黑燒を日々に用ふれば。痢病を煩はず。また煩ひ付たる人も此を用ふれば能く治する物とぞ。

○また問云子なき婦人の懷胚する法は無きか此も或人の賴みなり。

寅吉云神社にても川原にても。奇麗なる石を一つ拾ひ置て。毎日に朝日に向ひ其石を持て額にさゝげ。天道に子を授け給へと白して祈り。懷胚して後に石をふやして彼石を採たる所に納め。彼石をば生れたる子の。生涯の守とする時は無難に育つ物ぞと聞たり。

○又問云深山または里にても。悪鬼妖魔猛獸などの害を爲すを除る咒術などは有まじきか。と或人の問なり。いかゞ有べきか。

寅吉云咒術も有べけれど未習はず。守札を認むる法は習ひたり。此は猥に傳がたき法なるが。此の先生に傳へて我自ら木に彫たり。奇しき事または狼などの類。悪獸に出逢たる時。又は山などにて雲霧起りて難儀の時に。其札を散し。獸などの如く眼に見ゆる物には其札を與ふる時は。決して災難に逢ざる物なり。

○同人また問云。或人の賴みなり。金毘羅。秋葉。道了など其外山人にも祈願を掛るに。佛經を誦して宜かるべきか。何ぞ外に咒文の類ひにても有るか。

寅吉云僧山伏のわざを見習ひて。俗家の人々誰も佛經を誦し祓詞といふ物などを唱へずては感應も無き如く思ひ居れど。實は然らず。直に祈願の筋を有の儘に叮嚀に繰返し申す時は。感應ある事なり。佛經。咒文。祓詞などには拘はらず。祈願の信心だにとゞけば。何を申ても感應あるなり。此意をもて神に祈願

すべき物ぞと師言なり。
○問云予幼くて秋田に在しほど。或木こりの來て我が父に物語の序に云ふを聞けば。三人の連と藤倉山の奥にて。木をこり暮相に成りて歸らむと爲ける時に。其處よりは北の深山の大空に稻光の如き火。ちら〳〵と見えけるが。其火と共に何とも知れぬ木の枝の如き物見えて。赤き靑き花びらの夥しく散ける故に。いと奇しと立留りて見るに日暮るゝと頓て月の現はれ出たり。見る内に怪しく氣味惡くなりて伴ひ迯歸れり。何にて有けむと語るを聞たる事あり。山にて斯る物を見たる事は無か。
寅吉云そは山人たちの遊びにする。ホロユといふ物を見たるなるべし。
○問云そのホロユと云ふ物は。何なる物ぞ知たらば委く語り聞かせよ。
寅吉云此は竹を削りて圖の如く作り。目の詰りたる麻布を以。ふくらみの有る樣に張り。圖の如く仕掛の物を付て。端なる一處に火繩を付て。次々に火の移るべく仕掛け。紙鳶の如く糸を付て吹上させ。立木に結付け。遠くより見て樂しむなり。種々の物を數多く出すことは各々工夫に依るなり。晝のは五色の雲花または雨降などの仕掛をなし。夜のは花火。電光。月などを現はす樣に仕掛たる物なり。
○問云月を出す仕掛はいかに爲たる物ぞ。
寅吉云硝子を丸く二重に作りて。間に水を入れ下に蠟燭を箱に立たるを圖の如く付て。火繩の火次々に移りて蠟燭に移るべく作りたる物なり　硝子を二重に爲て水を入たるに。下なる火映じて眞の月の如く見え。十町ばかり先の空に上たるに。手の筋の見ゆる程に光る物なり。戯事にてこのホロユほど面白き事は無し。
○騰雲が物語に天狗の食類は。松葉。竹葉その外木の葉を食す。また折々魚を取て肉ばかり食し。猿の子をも取て燒て食す。深山などに天狗火と云ふ有るは此時の火なり。其跡小笹の類ひ焦てある物なり　此は眞の火なる故に人の目にも見ゆるなり。狐火は眞の火に非ざる故に焦る事なしと云へるよし。かゝる物を食ふ事も有りや。
寅吉云松葉竹葉その外の木葉を食する事もあれど。常の食に非ず。たま〳〵鹽と等分に漬て食ふ事も有

り。何に依らず鹽と等分に漬て食れざる物なしとぞ。魚鳥は食へども猿などを食ふ事は決して無き事なり凡て獸を食さるは神の惡ひ給ふは元よりの上に山は獸の持場なるに。山に居つゝ獸を食ふと云事は有まじき事と聞たり然れど此は我が山の事にこそあれ、騰雲は金毘羅方の人とあれば。我が知ざる所なり。

○問云騰雲が物語に。金銀米錢は人の力を勞して人界の寶に作れる物故に。金銀は云に及ばず米一粒たりとも食に用ひずと云へるよし此は如何有らむ。

寅吉云金銀錢をも用ふこと。右に云が如し。米を食ふ事は云も更なり然れど金毘羅方はいかゞ有らむ知らず。

○問云魚鳥は如何にして取るぞ。

寅吉云魚鳥をとるには。篠竹を一尺ばかりに切たるに。鐵の簇を付てねらひ定めて。投づきに突て取るなり。鳥を。はがにて取こともあり。山伏の法に魚鳥を取るに。神とも神と奉り念ずれば動く事能はざるを。「東山こうきの上の桃木にのぼりて見れば水となるおりて結むでアビラウンケンソハカと唱へて。九字を切れば手捕になると云へども。此は然しもきかざる咒禁なり。さて鳥は何にても人間にて鶏を料理する如く丸ながらに皮をむきて身ばかりを採り鹽燒にして食ふ。また雉子などを多く取り置て。鹽を付て干物となし燒て食ひも爲るなり。山人の食は鳥が第一なり。能く身體を輕く揚ればなり。我ある時三十日ほど鳥ばかり食たる事有しに。身體まことに輕く。飛も上るべく覺えたりき。殊に鳥のみ食ふ人は命長しと云ふ。

○問云世俗に兎は獸の部に非ず。鳥の部なりとて高貴の人々も食し給ふ。山人はいかに兎を食ふか。

寅吉云餘の獸は。かつて食せざれど。兎は山にても鳥の部なりとて食ふなり。殊に彼の物の頭上に人に甚だ藥と成る肉有り。其は殊に大切に食ふ事なり。

○河野大助問云。二十五六歳の男なるが。瘡毒を煩ひて大抵愈たるが。咳出て止がたく。衆醫いろいろに治療を施せども治せず。何ぞ藥は有まじきか。

寅吉云其は生松葉を刻み。焦色に炒て。芥菓と等分に煎じ用ふべし。摠て咳には妙にきく物なり。

○また問云ある婦人消渇といふ病にて痛苦堪がたく。衆醫手を儘せども治せず。此にも何ぞ藥は有まじきか。

寅吉云鹽六匁を四匁に燒へらし。水一合入れて五勺に煎じつめ。又二合入れて一合に煮つめ。一度に飲み。暫くある内に痛む心地あり。其時に明礬十匁に水六合入れ四合に煎じつめて飲べし。痳病消渇に大妙藥なり。また梅木と松木とに生たる忍草といふ物を煎じ用ふるも。妙に痳病消渇を愈す物なり。(もし梅木の忍草無き時は。其苔にてもよろし。)頭書云文錢とトウシミを煎じ用ひて心下痞硬に妙なり

○予常に著述の事に用多きに合せて。人の來る事繁く。日々に日も年も短しと常に云ふを聞て

寅吉云それ甚よき事にて。長命の相なり。然るは師言に。我は二年を送るに常人の一日を送る間に短く覺ゆ。其は我が壽命の長き故なり。蟲鳥は命短く。中にも蜉蝣などいふ蟲は。朝に生じて夕に死すれど。命短しとは思はず。これ短命に定りたる故なり。命長く世に功を立る人ほど。年月を短く覺ゆ。これ事の成就するしるしなり。假令ば五十歳にて死ぬるとも。其は其人は知らねど。四十くらゐにても死ぬべきを持前よりは生延たるなり。何に付けても世に功を立るが。命を延す法なりとぞ。

○此說誠に然も有べし。そは彼の仙境に行て碁を見たる樵夫の。多年を一日の如く思へるは。命長き仙境に就たる故なり。かの槐安國に至れる人の。一時を多年の如く思へるは。命短き蟲の境に至れる故なり。此理を能く思へば。命長き人ほど年月を短く覺ゆると云こと。實に然も有べし。

また予幼より。肉少く。人の肥太りたるが羨しくて。肉づくべき食物など及ぶ限りは物すれど。少しも其効し無き事を常に歎くを聞て。

寅吉云肉の少きが身も輕く。思慮神明に通じ。長命する相なりと師の常言にて。肉づかぬ樣の食物を用意して用ひ。もし肉増さりたるかと思ふ時は。瘦る藥を飲み。酢を飲るゝ事もあり。然れば肉の少きを歎き給ふべからず。

○また予鼻毛の長く外へ出るが煩くて。傍に毛拔を置て折々拔とるを見て。鼻毛は拔とるべき物に非ずと云ふ故に。其由を問へば。

寅吉云鼻毛の長く生出るは長命の相なれば。必ず拔べき物に非ずと師說なり。師の鼻毛は甚長く。中にも髭と混ふばかりに長きが。二穴より五六本づゝ生出て有るを。甚だ大切に爲らるゝなり。脩鼻息にて壽命の長短を知ることあり。

○問云師は信州淺間山に住して。彼山の神に仕へ奉らるゝが。彼山に鎭座まし座す神の。御名をば何と申すか。聞ざりしか。

寅吉云師は彼山に住して守護せらるれば。彼神に仕奉らるゝ謂れなり。鎭坐ましますの神の御名は聞ざれど。姬神にて富士山の神の。御姊神に座せど。御同體とも拜すると云ふ事は聞たり。

○高橋安左衞門正雄。傍に居て問云。淺間山の常に火燃るは如何なる由ぞ。神の御怒りにて然るか。其由を聞ざりしか。

寅吉云燃る事は。彼山に硫黃の多く有る故にて。燒れば燒るほど硫黃は多く出來る物ぞとなり。

○問云師は外國の旅より歸られし時。また穢に觸たる時など。禊祓の神事を爲らるゝ事は無か。また汝など此方へ來て居たるが歸れる時に。人間にて受入れたる火を淨むるわざ。また禊などさする事は無きか。

寅吉云禊祓ひの神事といふては無れども。穢惡に觸られし時は。川に着物を流し。また鼠居草にて圖の如く硝子の玉を付て作れる物を持て。日向の御柱と幾度も唱へて。身を拂はるゝ事あり。(頭書云常の祓ひにも。それに水を含めて用ひらるゝなり。また竹の物には篠に神馬草と鹽なり。)また瀉水の法を行ふ時枝にて圖の如く作り。赤き緒糸にて編みて籠の如くなし。中に神馬草と。何やらむ明礬に似たる物を入れたる有り。神に供ふる水は。此をもて攪まはして奉る。よく水を淸し淨むる物なり。

赤緒糸にて編む

水を淸す物の圖

○問云正月元日に神事。また祝事。門松立る事などは無か。

寅吉云大晦日より元日へかけて。其時の食物を供じて。年神を祭り。門松と云ふは無れど。山に生立たる松木に食物にても何にても。供物を奉り拜し祈る

事あり。
○問云山人たちも盃事して祝ふ事も有りや。
寅吉云他山の事は知らず。我が山にては師を始め隨從の人々も決して酒を呑む事なし。(頭書云瓢に酒を入れまた瓢を盃また膳などに作る。)酒は人の心た蕩して行を損ふ物なりと師の常に示さるゝなり。然れど正月二日には酒宴あり。皆集りて土器に酒をつぎ昆布を肴に爲て少づゝ飲む事なり。さて此時弓の射初に蟇目の舞ありて各々舞ふなり。
○問云五月節句の祝ひは。いかに菖芥などを用ひざるか。又幟に似たる事は無か。
寅吉云五月の節句は天王祭とて須佐之男命を祭る。此は惡魔除なりとぞ。供物は常に異る事なし。さて此日必ず劍改めと云ふ事あり。其は拵ひを皆とり外して。磨をする事なり。
○問云蟇目の舞の時に。如何樣なる裝束する事ぞ。
また弓矢は。いか樣なるを用ふるぞ。
寅吉云色は萠黃。また花色にても何にても。もじの樣なる肩衣の如くにて。なほ肩廣く袖なき物を着し。蜻目叢の縛り袴を着し。木にて作れる圖の如き物を冠る。弓は桑木のまゝ木弓にて。萩の矢に羽は雉子の羽を。三羽はぎて。二手を左の腰にさして。式をなしつゝ舞ひ。四角に向ひエイヤア〳〵と。高く聲をかけて射放つなり。

冠り物の圖

○國友能當問云。或人の付託なり。中風。癆瘵。噎嗝。癩病など云ふ病どもは。醫書にも不治の症なりと云ふを。いかで治する藥は有まじきかとの事なりいかゞ。
寅吉云中風には梅木の茸を黑燒にして用ひ。癆瘵には宮守を雌雄別に黑燒に爲て。當人にそれと知らせず。何にても入れて用ふべし。噎嗝には鶴の活肝よろしく。癩病をば綿に燒酎をしめし。火を付て燃しつゝ幾度もたゝく時は治するとぞ。
○或人問云痛風にて苦しむ人あり。何ぞ治法は有まじきか。燒處または痔の藥血止の方は知ざるか。
寅吉云梅木の平苔を黑燒にして。飯糊にてねり。貼てよろし。燒處には冷飯と杉の若葉をすり交へて。度々貼れば。藥に熱を吸とりて痛は忽に去り。跡も

つかず愈る物なり。痔には海邊にうち寄する藻くずを干て。黒燒にして用ふ。血止は熊野ぼくちが宜しきなり。さて此に就て思ひ出たり。山より下る時に。うす黒く丸き小石を一箇もらひ來れるが。此を手に握れば何樣に多く出る血にても。忽に止りしが。何處にか置き失ひたり。今思へば惜しき事なり

○また或人問云。我多年疝癪に苦しむ。疝氣また癪の藥は知ざるか。

寅吉云疝氣には。またゝびの粉と橙の黒燒とを等分に合せて夥しく用ふべし。癪には寒鳥を屎壺に三十日漬置て洗ひ腹わた取らず黒燒にして。赤螺の貝を燒き粉にして等分に合せ用ふべし。留飮その外腹病一切によろし。(頭書云癪を愈すエレキテルの如き物、かきどうし草は癪を治す、)

○また或人問云。流行眼病。逆上眼。風眼。血眼など云ふ眼病には何を用ひて宜からむ。

寅吉云平たき眞石の小きを拾ひて。表裡に虎目とかき。火に燒て水に入れ。程よく冷して目ぶらにあてて度々蒸す時は大抵の眼は愈るものなり。

○また或人問云。何ぞ常に蓄へ置て能き膏藥は無きか。

寅吉云山にある膏藥は。杉葉。甘草。青木葉を胡麻油にて煎じ。黒くなれる時に滓を去り。丹と白蠟とを入れて煮つめ。宜しからむと思ふ時。少しばかり水にたらし見れば。程よく堅まる時に。冷して腫物にも何にも用ふるなり。甚だ調法なる膏藥なり。偖また鉛を薄くうち延して。酢にて二時ばかりも煮たるを。名も知れぬ腫物に貼て絞り置けば。散るべきは散り。ついえべきは。ついえて速に治るものなり。

○また或人問云咽にとげの立たる時は。いかによき呪禁はなきか。舌の腫たるは如何すべき。

寅吉古歌にの字の

舌の腫たるには。うなこうじの黒燒を足の裏に貼てよく愈るものなり

○或人の物語に某の山里にて。女の一人晝寢して居けるに。陰門に蛇這入りて出ず。遂に死たるよしを語りけるに。

寅吉云蛇の陰門肛門などに入りて出ざるに。鐵醬一合に酒五勺入れて煮たてゝ飮すべし。速に蛇出る物也。又蛇に枉ませられたるにも妙也とぞ。蛇の喰ひ付

たるにも飲て宜し。眞蟲のくひつきたるは。串柿を付て宜し。眞蟲の齒は細くて針の如くなるが。食つかれては肉に齒のかけ入りてある故に害をなすを。串柿を付れば其齒を吸出すなり。眞蟲は串柿を付けても死する物なり。彼蟲には甚く毒となると見えたり。

○また或人問云犬に食ひ付れたるに。速に治する藥は無か。

寅吉云其は。上々の挽茶と燒明礬と等分に合せ。水にて飲めば速に治すると聞たり。

○國友能當問云。或人の頼みなり道を多く歩行く法は無か。

寅吉云師は其法を知給ふべけれど。我は知らず。遠道を數日歩行て疲れざる妙藥の法は。近ごろ或人に習ひたり。大黄細辛烏頭の細末を等分に合せ。鹿の油にて煉り。足の裡に塗れば勞るゝ事なしとぞ。

○問云

寅吉云松葉。桃葉。南天葉。石菖根。てうくく草。芥葉その外何にても。草を二十七品ほど取て刻み。炒りて麻布の袋に入れて。酒にて黑くなるほど煮出し。

○或日田河利器など數人來合ひて。寅吉に和ぬしが此方に來居りては。山にてさぞ師の不自由に思はるゝならむと云へば。

寅吉云師は人の大勢なくて叶はざる時は。幾人にても分身せらるゝ故に。我一人居ずとて不自由なることなし。

○と云ふ故に如何して分身せらるゝと問へば。

寅吉云分身せらるゝには。いつも下唇の下なる髭を拔て。思ふ處に置き。呪文を唱へらるゝに。幾人にても師と同じ狀なるが出來るなり。其呪文は何と言るゝか知らず。

○土屋清道が言に。猿また鼠などを捕へて殺さむと爲るに。合掌して詫る狀なるは。佛道の世に行はるゝ事。既に二千歲に近き故に。いつとなく。彼道風の禮を獸まで眞似ぶと見ゆ。然れば容易に此道の休まる時は來らじと云ふにぞ。予言けらくは。其は獸らが佛法ざまの禮を學びたるには非ず。天竺の合掌の禮ぞ。却りて獸を學びて立たる禮なるべし。其は唐土籍にも云々といふ說ありと言ひし

を聞て。
寅吉云合掌して拜の狀をなすこと。猿鼠ばかりに非ず。山にて。熊の立て朝日に向ひ。合掌して拜する狀をなして居たるを見たる事度々ありき。
○中村乘　言けらく。遠州□□郡□□村に□□□□といふ者ありしが。其若かりし時いと無賴にて。名主を詈たりし尤めにて。處を遂れしかば。何思ひけむ其より深山に入りて。世人と交らず。五年ばかりは出ざりしが或とき。着物を欲しき由にて里に出たる故に。人々いかにして深山に數年居たると問へば。今は獸らと中よく交りて。食物をもうけ鐺も無れど飯を炊く事を知り。何も不自由と思ふ事も無しと語りて。其後も三年に一度ほどは。里に出るが。やゝ仙人と云ふ物の狀になりたりと語りしかば。
寅吉云仙人と云ふ物の狀になるには。別に仙骨といふ骨なくては成がたきには非ず。誰人にても深山に三十年も住む時は。始の程こそ獸らも厭ひ迯れど。遂には。なれてまづ種々の食を持來て養ひ。後には奇術を得たる鳥獸なども使はれて。いつとなく仙人と成らるゝ物ぞと師に聞たり。鐺なくて飯を炊くなどは然しも珍しき事に非ず。堅き石山を鐺の如く掘りて。山うるしを塗り。其下の横に竈處の如く穴を掘て火を焚けば。何にても煮らるゝものなり。
○又或日人々うち寄りて種々物語の序に。某を作るには云々し。某を作るには云々すなど語りけるを聞て。
寅吉云穿山甲の末と。小麥の粉と合せて池に入るれば。多くの鮒を生じ。又麥のふすまを泥中に埋め置けば。鮹生ずると云ことなり。また饂飩の粉を煉りて。鮒の形に作り。穿山の毛と肉の粉を塗りて。古池に埋め置けば。鮒となるとぞ。俗また穿山甲と云ふ物は鯉の化たるが本にて。子をも生ずる物なり。
○と云ふ故に人々笑ひて其は心得がたき事なり。彼物は唐物にて此國には無き物ぞと云へば。
寅吉云此國にも有りて。本は鯉の化たる物なること。我正しく度々見たり。其は鯉は誰も知る如く瀧に上る物なるが。其を龍と成りて天上すなど云ふは誠しからず。千山鯉といふに化ことは。彼魚は瀧を上る勢氣にて山に纔上り。草原にころ〳〵として居るが。

日數經ては丸き形となり。四つの鰭四足となりて甲を生じ。鱗の間より毛を生じて圖の如く化して這ひあるき。山の水溜りにすみて子を産するに。それ穿山なり。元は鯉の化たる物ゆゑに。殺して肉腸を見れば。鯉の肉腸と同じ樣に膽も鯉の如し。唐土にのみ生ずる物と思ふは甚狹き見識なり。

千山鯉の圖

〇また蟇の背を抱て子を産む咄しを聞て。

寅吉云蚯は切て埋め置けば二本になる。疵を付れば玉くら蚯となる。田螺は殻を出て子をうむ。入りそこなへば死するなり。

〇問云服物の前は世に爲る如く。左を上に合さるゝか。又は右を上に合さるゝか。

寅吉云常には世間の人の如く。左を上に合さるれど。神事の時は必ず右を上に合さるゝなり。

〇倉橋勝尙ぬし來られて。河圖洛書と云ふ物の圖を書て寅吉に示せられ。此は天地間の眞理を包盡したる物也。定めて山人の此をやごとなき物にするならむと思ふを。見知たるかと問はるれば。寅吉よく見て山にて此を見たる事なしと云ひしかば。倉橋ぬし案の外なる事に思はれたる狀にて。汝いまだ年の少き故に。此眞理を傳へられざるならむと云ひて。其より予と周易の事の物語せられ。我多年易學に志して。諸家の註をも悉く見たるが。彼眞理を看得たる說は一だに有ことなし。誠に彼書は天地間のあらゆる道理を網羅して。木火土金水の五行を自由にするを始め。所謂法術の本も。みな此書に盡たり　天下を顚す種謀。また忍術盜賊の秘術も此に依ては得られざる事なし。それ故に我常に易を講ずる人は。決めて易を知ざる人なり。易の眞理を看得ては。決して顯に講じ難き書なり。我その眞理を見得て。旣に註數卷を書たりと言はるゝ故に。予其言に就て易の事の。かねて思ふ旨をも述たりしかば。寅吉傍に聞居て。師の易道を教へられざる趣意を。今こそ思ひ知たりと云ふ故に。其由を問ひしかば。

寅吉云我がかゝる身の上と成りし元の由を云へば。易卜を知たく思へりしが緣にて。彼異人の言に。易

トを知たくは我と共に行べしと云し故に。伴はれて山に行たりし也。然るに師は他の種々の事どもを敎へて。易卜は敎へず。折々易卜を知たき物ぞと願ひしかど。卜は總て疑を決むる料の物ゆゑに。易卜ならずとも。何の卜にても宜し。彼の易は餘り宜からぬ物なれば。餘の卜法を敎ふべしとて。種々の卜方を敎へられ。易卜の宜からぬ由は後に知り辨ふ時あるべしと言はれたりしが。今の御物語にて師の此卜を敎へられざるは。其由と云ふ事を辨へたり

○倉橋氏問云異人に誘はれたる或人の物語に。鷲川童などに取らるゝ人は。何か取らるゝ因緣ある由聞たり。然る說は聞ざりしか。

寅吉云鷲川童などに取らるゝ人は。兩方の肩に靑く光りて丸き玉の如く動く物あり。此物身内に久しく有れば。惡病を生ずるよし聞たり。

○或人問云三十歲ばかりの男なるが。幼少の時より二十ごろまで。癲癇の病を持ち。其頃までいと聰明なりしが。醫療祈禱をもして其病は愈たるが。後に健忘症の如くなりて。世事に通せず。然れど折々聰明なる言語所行もありて。全く痴と成れりとは思はれず。聊も色情なし。此を愈す法は有まじきか。

寅吉云そは癲癇の變じて。然る證と成れるなれば。癲癇の療治にて宜し。其は硝子を天眼鏡の如く二重にして。間に紅をときたる水を入れ。日向に出て其人の體を照し見れば。硝子の赤き光のうつる中に。大抵は肩より腰。または腕のあたりに色變りて毒の凝たる所見える物なり。其毒ある所の形に墨にて輪を付置て。其墨形の狀に。銅を以て深さ二寸ばかりの物を拵へ。其を押あてゝ。好燒酎を忍らるゝだけ熱く沸し。つぎ入れて冷たる時に布にひたし。取て又つぎ替へ斯の如くさい〳〵すれば。其膚赤く漆かぶれの如く成りて。惡水出るなり。斯く幾度もする時は。漸々に毒出盡て愈る物なり。

○問云鷲にとられざれば。惡病と成る靑き玉を取り捨る爲かたは無か。

寅吉云師は其病根を取る法を知られたる由なるが。我はいまだ知らず。

○問云外國にて×の如き物。又は人を磔にかけたる圖。或は婦人の小兒を抱たる圖などを奉り崇むる

國は無かりしか。
寅吉云何處ならむ。いと寒き所にて見事なる筒袖の服物を着たる國に一寸行たりし時。其處の人々然る類の本尊を各々もち齋きて有りき。師は然る物を見るごとに。唾をしかけらるゝ故に其由を問しかば。此は切支丹と云ふ邪法の本尊なり。日本にては堅く禁制の事故に。唾をしかけたるなりと言れき。
○問云天狐を使ふ法はいかに。
寅吉云天狐を下し使ふには何に依らず。うまき食物を夥しく用意して。山に入り天狐に手向けて祈り念ずれば。まづ始に早人といふもの下りて。種々の恐ろしき奇特を現はすを。
○倉橋氏の物語に。近き頃の事なるが或武家の若侍。ふと異僧に誘はれて國々こゝかしこを見周りたるが歸り來て語りけらく。江戸の芝なる愛宕山に至りて。宮の邊を見周りけるに。宮の後にて異相なる武士の。侍を五六人ばかり連たるが行逢て。伴ひたる異僧と互に久しく逢ざりし由の挨拶終りて後に。彼の武士云けらくは。貴僧もかねて知られたる。我が多年の欝憤も今こそ晴すべき時節至れり。共に悦び給はれと云ひしかば。異僧聞て何をもて時節の至れると宣ふぞと云ひしかば。彼の武士の云く。我が恨むる家にて。此まで或寺より護持僧を請して神佛を祈り。我が祟を受じと爲し故に。欝憤を晴し難かりしが。今度かの寺より出したる護持僧は。五體不具にて祈りに驗なし。我其虚に乘りて仇を爲さむと思ふなりと云ひしかば。異僧聞畢りて。實尤なる御遺恨には候へども。既に多くの歲霜を經たる事なれば。然る罪深き恨を止て。安らかに靜り給へと諫めけるに。彼の武士面色を變じて。我が臣として我が家を亡したる恨み。片時も忘れ難し。如何ぞ報ひずて有べきといふを。異僧しきりに諫むれど聞入れず。後には互に角目だちて別れける故に。彼の武士はいかなる人にて候ぞと問しかば。彼は龍造寺隆景と云ふ人なりと答へき。さて彼家の大事なれば。見捨がたしとて。直ちに其寺に行て案內して取次の僧に。何某殿の驗者に五體不具の僧を遣したること以の外なる事なり。早く替を遣すべきよし申せと云ひて。歸らむと爲るに。取次の僧驚きて。貴僧の名はいかに

と問しかど。此事だに云へば名はいふに及ばずと。袖をはらひて立去りしと云へり。かく古き人の。今も在りと云こと心得がたし。實なるべきかと云はるゝに。予も傍より。濱町なる云々と云ひしかば。

寅吉云然る古き人の。今も生たる如くにて。幽世に夥しく居る事いふも更なり。其は我は其人々を知らざれども。師語に日光の御神も將軍樣の御先祖なるが。今も其儘おはし坐し。其外義經爲朝云々と云はれたり。

○また問はれけるはそれにつき。又或人の異人に誘(さそ)はれて東海道を行けるに。肥田豐後守。長崎の任みちて歸るに行逢たり。例の如く御朱印の入たる長持を先にかゝせて。路人を下に／＼と制しつゝ來るを見て。人みな下に居たるが。たゞ突居(つくばい)たるのみにて頭を土に付るまでには無りしを。彼異人は土にひたと居(すわ)りて。頭を土にさし入るゝばかり畏まりし故に。伴はれたる男あやしみて。異人は人間の方よりはかつて見えざる身の上なるに。何とて彼の長持に。しか切に禮を致さるゝぞと問ひしかば。將軍家の御朱印は。禁裡の御璽も同樣の事也。然ればいかにも尊敬せでは叶はざる事なるに。現世には此道を辨へたる人すくなし。能々心得よと誨しけるとぞ。實に彼界の敎へは然りやと問はれしかば。

寅吉形を改めて云く。彼界にも然る掟を守らざる有れど。我が師の交はる人々は誠に其人の物語の如く。天子將軍を敬ふ事。人間の神を尊敬するに似たり。師語に將軍は萬國を鎭め押へて。天下の人を惠み治め給ふ御職なる故に。神々は元より人の爲に世を守り給はでは叶はざる由あれば。御崇敬あるに從ひて。ます／＼神威を益して世を守り給ひ。山人は神と人との中に立て。神の御事を行ふもの故に。天下を治め給ふ君をば。大切に守護せでは叶はざる由なりと聞たり。其は種々の物の成たる。謂ゆる天狗と云へども。正道に就たるは右の如し。それ故に俗にも日光山には數萬の天狗といひて。山人天狗夥しく居て。其山を守るは云ふに及ばず。他山なる山人天狗も。彼山を見周りて守護す。此は師に正しく聞たるには非ざれど。世の始の神たちは。各々某々に持前の事を持分て鎭まり坐まし。世間の御世話は金

毘羅樣がなされ。天下の事をば日光山の御神の掌り給ふ樣に思はるゝなり。天下に變事あらむとすれば。山人天狗いづれも苦行をなし。天道神明に祈りを爲し。また非常の事ある時は云に及ばず。常にも禁廷また江戸の御城へは。日光よりも他山よりも守護にまはり。正月元日と春秋の彼岸に。京の愛宕山より芝の愛宕山へ一人づゝ遣され。また江戸に火災ある時は。東叡山なる。俗に天狗の休所といふ二本杉へ。日光より二つゝ來りて火をしめす咒術を行ふ。すべて火災は神祇の各々異なる御心々に思召す旨ありて。山人天狗の各々某々に。其御旨を得て燒るゝなれば。互に我が知らざる火はしめし難きも有れど。また互に我が事ならぬ火は。しめさむと爲る事かくの如し。是故に彼の境なる人々。各々其位のほどほとに天下を治め給ふ君を敬ふ事。實にその異僧に伴はれし侍の云へるが如し。此に就て物語あり。其は我或人にならひて世の山伏等がする繩ときとて。兩手を背に違ひ合せてしばりたるを古歌を吟じて拔取る法を知れるが。近頃或家にて戲れに。人々に結ばせて解きけるに。或人我に僞りて。己は天下の罪人を縛る役に仕ふる身なれ。我が結びたる繩をば解こと叶はじとて。結びたるに。我實の事に思ひしかば。彼の古歌を吟じたれど遂に解かねたり。其は天下の罪人を縛る役人なりと云る故なり。日比。師の天下樣を恐るべき由を敎へられたるが。心にしみて在し故に。彼の古歌の咒もきかざりしなり。

○倉橋氏この物語を聞て。はたと手を打て。久能の緣起に云々

○國友能當問云或人の賴みに。彼境に種々の武器武術など有を思へば。山人は武備をも幸ひ給ふ事と見ゆ。然れば海邊に。杉山々人の宮を設けて。異國襲來の守護神に祭らば。いかに有らむとの問なり。此はいかゞ有らむ。

寅吉云彼の境にては。人の祈り祈らざるに拘はらず。世間を守護する故に。外國などの犯しある時に。其を退くる防ぎの爲に。武器武術軍法までも精究してあり。然れど師は今まで世に名を知らせず。下山の時にも其人を得るまでは。謾に我が居所實名をも云こと勿れと。堅く誡められたれば。祈り祭りの事も。我よりは何とも云ひ難し。

○淺野世寛(頭書云本所長崎町町醫)が物語に。天狗甚右衛門を伴ひて。或格式高き某てふ寺の某和尙と云ふに逢しめたるに。甚右衛門その和尙を見て。甚くおぢ畏まりて。席に進むこと能はず。和尙見て斟酌なく席に就れよと云ひしかど。我は妖魔の部屬なれば。いかで正法の和尙に近づく事を得侍らむと云ひて。彼界の事を語るまでも無く。鼠の逃るが如く歸れるよし語るを聞て。

寅吉笑て云く。その甚右衛門といふが。事ふる師は在世の時に佛者なるが。彼三熱の苦など有りて。常に在世中に佛道の眞意を守らず。天狗道に墮落したりなど。歎き云ふを聞て。元より愚昧の性質に。佛道をいと尊き物に心得たる者ゆゑに。左樣に恐れしならむ。

○此時予世寛に。寅吉が事ふる師の。甚く佛道を惡ふ事どもを語り聞かせければ。世寛云く然るに平兒代答に。杉山僧正は撫付にて。常に咒文を唱へ印を結び坐を組み居られ。また西に向ひて。西方牟尼半佛と唱ふるよし見え。また木劍を見れば。佛法にて用ふ所と相似たり。また九字を切るも世の修驗者の爲る態なるは。いかにと云ふを聞きも果さず。少か憤れる面持にて。

寅吉云佛道は宜しからざる道と云ふ事は。師の常に示さるゝ故に。屬從ふ我々も深くは辨へざれど。師說のまに／＼然る事と知りて嫌ふ也。座を組み印を結び咒文を唱ふと聞ては。佛法ざまに聞ゆれども。其は山崎ぬしの宅にて人々うち寄り。師は僧形なるか髮あるかと問ふ故に。髮は長く後に下げてありと云ひしかば。撫付と記し。座禪靜座などせらるゝかと問はれし故に。座禪靜座など云事はかへて爲ずと云ひしかど。靜に平座して印を結ぶ事は無かと問ふ故に。考へ事などの有る時に。手を此の如くして腹にあて。平座して目をとぢ。何やらむ唱へつゝ考る事もあり。しか腹に手をあてゝ在る事をナイの印とも云ふと。其事を座禪の狀に書れしなり。此のみならず緋衣を着るかと問はれし故に。衣の如く袖長き服物を着る事も有りと云しを。常に緋衣を着すると記されたり。我は服の名を知らざる故に。衣の如く長き袖の服物と云ひしが。今思へば水干の樣なる物なり。また師の名は何と云ふぞと問ひし故に。そう

しやうと云ふと答へしかば。字は何に書くと云ふ故に。慥には覺えざれど。上に書く字は俎のごとく。下に書く字は正月の正の字なりと云ひしかば。下に正の字をかけば。上なる字は必ず僧の字にて。そうじやうならむと云はるゝ故に。そうじやうには非ず。そうしやうと清みて唱ふと。返す〲云ひしかど。僧正の字に違ひなしと。押てしか書れし故に。心善からずは思ひしかど。是非なくさて有しなり。代答にはかゝる類なほ多かり。かゝる事を思へば。平兒代答は世に何ばかり寫し傳ふらむ　何卒みな火に燒よかしと思ふを。此の先生の。其事は己が筆記に辨ふべしと言はるゝ故に少か安心して在るなり偖また木劍を佛道より取れる如く思へども。此は師に聞たる說あり。まづ劍といふ物。此國には神世より有し物にて。劍をもて咒ふ術は元より有しが。眞劍にては差支ある故に。木に作りたるが。外國までも傳はり。後に種々附會をなし。日本にて世間に木劍の咒禁を用ひたるは。役の行者が始にて。其より山伏に傳はれるを。眞言家また日蓮宗までも。思ひ思ひに何くれと書付て用ふる事となり。また九字の事は。誠は劍カイと云ふわざにて。此はもと神代の劍法より出たるにて。切る狀を爲すには。何の事もなく一二三四五六七八九と云ひ。十字を切るには十といふが本なるを。臨兵云々は後に付たる唱言なりと。師に聞たり　然れば木劍九字切るわざ。共に元これ神世の遺法なるを。修驗者などの用ふるは。返りて神の道を眞似ぶなるをや。

○倉橋氏の印相の事を問はるゝに。印の結び形は六七十も知たりとて。悉く其形をなして見せければ。倉橋氏返す〲賛歎して。印相の尊きよしを言はれけるに。

寅吉云印相といふ物は。實は座禪觀相など爲るに。手の治め形なき故に各々。思ひ〲に種々の形を爲たるが始にて。其より種々の理屈を後に付たる物にて。實は何の益にも立ざるわざなり。然れども世には尊き物に心得たるが多ければ。覺え居て時宜に應じて用ふべしと師の敎なり。

○我が元より知らぬ人なるが。或大醫の相會人もなくてつか〲印然と來りて。予に相はむと云ふに。出て相へば。寅吉に相たきよしを強に請ふ故に。

其間は猥に人に相せざりし間なれど。止事を得ず。相はしめたるに。其醫世の清潔ぶりする俗のまにまに清潔なる物語して。まづ壽天の事を問ふ。其は言はざる掟なりと云しかば。また我が大願あり成るや成らずやと問ふ。寅吉聞ていかなる願にやと問へば。我は金銀を多く持たき抔いふ卑しき心は一點もなし。唯大門戶をはりて。身の上も昇進し。財寶思ふが如く集ひて。十分に遣ひ。人にも施して。壽を長く病難もなき樣にと。常に辨財天。聖天などを信仰して。日々の祭を闕こと無し。いかに此大願叶ふべきやと言ひしかば。寅吉少かトへ考ふる狀して。御信心次第にて叶ひ侍るべしと云ふに。醫は甚く悅びて歸りぬ。跡にて予寅吉に。彼醫の願望甚だ大きなり。誠に叶ふべきかと問しかば。

寅吉笑て云。あの樣なるトへ考ひは然しも骨をりて考ふる心は無ければ。成る成らずも深くは考へず。實は出ほうだいに申し侍り。然るは彼の醫師言には欲心は少かも無しと淸げに云はれしかど。財寶を十分に得て十分に使ひ人に施すばかりに在たきと言はる。我は斯ばかりの欲心は非じと思ふを。彼醫は欲心と知らず。偖その欲心より辨天や聖天などを祭るよし。尤も信仰だに厚からば。驗も有べきなれども。遂には神罰に逢ふ事を知らず。俗人の大願々々と云ふが。大抵は此くらゐの事に侍る故に。神達の然こそ困らせ給ふ事にて侍るべし。實の大願ならば。彼人は醫者のこと故に。何ぞ神界によき療法あるべし。我は醫の事なれば。如何なる難病にても我が手にて癒ずといふ病なしと云ふ樣に。療法を知りて天下の病苦ある人を救ひ。其法を世に弘く傳へて。天下の衆醫にも知らしめ。普く世に醫術を以て功をたて。死して後も人の病苦を救ふ神と成らむと思ふ願は。いかに叶ふべきか抔云ふ問ならむには。骨をりてトひ考へ。聞持たる療法藥方の事を語りも爲べきを。いと可笑しき事なり。

右の醫師の事。後に聞けば。多く財寶を集へ持たる人なるが。獨飽ずまに種々の手段をして金を集むる人とぞ。

○或人の佛法好と見ゆるが。相會人を賴みて來り。寅吉に相ひて小ざかしく物言ひけるが。神境にも

武器あると云ふ物語を聞て。神境に何の用ありて武器あるにやと尋ぬるに。例の如く幽界には妖魔の類夥しく。正道を妨げむと爲る故に其を防ぎ。また遂には人界に及ぼして國用にもせむ爲に有る由を云ひしかば。其人難じて天地間の正理は。人界仙界の隔なく。善惡不二邪正一如の旨に洩るゝ事なし。然るに妖魔夥しく其と軍するなどは有まじき事なりと云ひしかば。寅吉予に。善惡不二邪正一如とは如何なる意ぞと問ふ故に。其意を云ひ聞かすれば。うち笑て席を立ち次の間に入りて再び出ざる故に。予も次に立て。何とて席へは出ざるぞと問ひしかば。

寅吉云彼は佛者の道知らずなり。善惡不二邪正一如と云は佛經の語なるべければ。悟り顔の空言なり。善惡邪正が無き物ならば。世に決斷所も入らず。世世に軍も無き筈なれど。善惡邪正がある故に。決斷所もあり。軍もあるなり。既に佛經にも。帝釋と魔王と合戰すると云こともあり。釋迦に提婆といふ敵も有しと師に聞たり。さて此に就て左司馬が常に云ふ言に。釋迦に提婆。太子に守屋といふが。實は提婆に釋迦。守屋に太子と云ひ替るがよしと云へり。然もあるにや。彼の樣なる佛者には。眞の事を何云ふても耳に入らぬ物なれば。口をきくが否なる故に再び出ざるなり。

○笏の形に木を削りて欲き物ぞと云ふ故。何の用あるぞと問へば。

寅吉云彼境にては。深き考をする時は。常の如く持ち。あごをかけ居て考ふる故に。此方にても然爲たらむには。よき考への出來なむかと思へばなり。

笏圖

こんぜう塗
そりあり
箸入れてあり
丸龍ゝの紋あり
こゝに自分の紋をつくる

○爰に予弟子なる下總國。神崎社の神主。神崎光武に請藏たる。彼社の神木なる。俗になんじやもんじやと云ふ木を出して。此木を知たるか。此にて作らばいかに有らむと云へば。例の如く香をかぎて。

寅吉云此は神崎社の。なんじやもんじやの木なるべし。此は樟木の種類の老木なる由。師に聞たり。い

つにも香は樟木の甚しき香なれば。煎じ出たらむには。樟脳夥しく出べし。

○予が常に用ふ。代赭石の墨を見て。此は何の墨ぞと問ふ故に。代赭石といふ物を以て製れるなりと云へば。朱また丹などは何より出るならむと問ふ。朱は水銀をもて製し。丹は鉛を焼きて製する物ぞと云ひしかば。或藥種屋の言に水銀は漆を焼て取る物のよし聞たりといふ故に。其は其藥種屋が朱塗の古器を水に燒きて。水銀を取るを見て。水銀は漆より出る物と思へるならむ。右に云ふ如く。朱はもと水銀を製せる物ゆゑに。朱塗の物は何によらず瓦に入れて焼けば底に水銀溜るなり。また輕粉といふ物も水銀を燒て製れる物なり。など猶水銀を種々に用ふ道を語り聞かせたるに甚く悦びて。此時焔消はいかなる所に成るを。如何にして製し。雄黄は如何にして取り。金銀銅鐵の荒金は。いかにして製し。硝子は某と某とを合せて。いかにして製する物ぞなど云ふに。人々驚きて然る事どもは。如何にして知たると問ふに。笑ひて答へざるを。强て問ふに。

寅吉云凡てかゝる事どもは。左司馬などに伴はれて。直に其物を製する所に至りて。傍に居て見たりしなり。然れども製する人は。我々が傍に居て其物どもを手に取りても見るを更に知らず。いと可笑き事なり。

○問云蟇目の弓矢は。いか様に製れる弓矢ぞ。

寅吉云弓は桑の木のほどよき枝を切て。其儘に苧縄の絃をかく。矢は萩に雉子の羽をはぎたるを二手腰にさして。四隅に射るなり。此は凡て魔除の弓なり。摩利支天の法を行へば。目前の空中に。其紋ちら／＼と現はるゝを。此弓にて二矢射れば。紋われて消失る物なり。さて弓は此法のと同じ弓多かるが。木の枝を其儘に用ふる事も多し。また鯨弓もあり。太くて大きなり。また鐵弓もあり

○或時人々うち寄りて。古歌に驗ありて。呪禁にきく由を語り合けるに。

寅吉云百人首なる人丸の歌を。修驗者などが色々に用ひて呪禁を爲す。我が試みたるは兩手を人に縛らせて。「ほの〴〵とまこと明石の神ならば。今こそゆるせ人丸の歌と唱ふるに。結とくる物なり。また火

を止むるに。「ほのぼのとまこと明石の神ならば。今こそ止めよ人丸の歌と唱ふるに。火災にも。燒處にもきく物なり。

○屋代翁。小島氏。予と三人。寅吉を同道して山田大圓かり行けるに。あるじ淤蘭陀より渡れる。オルコォルと云ふ物を出して見せらる。其は圖の如き筒の中に。丸木にひしと針金を打たるを二本渡したり。外なる肘金を廻せば針金を打たる二本の丸木きしり合ひて。カリ／＼と鳴るを。それに連れて幾多の笛。ひやう／＼と互に異なる音を出すべく拵へたる物なり。笛は底に有れど。音は誰が耳にも。いと上に聞ゆれば。笛はいづこに有らむと皆不審しみけるに。寅吉ひとり笛は底に有べしと云にぞ。大圓子實に然りとて筒をかへして底を見せけるに。笛は底の外に十二本並べてぞ付たりける。寅吉よく見て。我が山にも此器に似たる物ありと云ふ故に。大圓子そはいか樣に製れる物ぞと問へば。

寅吉云

○また此日山田氏に集へる人々多かる中に。臼井玄仲といふ醫の來り居て云へるは。我は信濃國の產なるが。筑摩郡小見宿なる。神明宮の神主。寺田何某と云ふ人の甥。喜摠治といふ者。我も知れる者なるが。十六七歳の時に。ふと家を出て歸らず。いかに尋ぬれども行方を知ざりしが。七年すぎて後の一日　衣服も何も家を出たりし時の儘にて歸り來れり。人々奇みて何處に居たりしと問へば。今は眞田領なる日知山に居る山人（頭書云大姥權現）の使者と成りたるが。一度は實家に歸る例なる故に。しばし歸り來れるなりと云ひて。彼方の事を問へども言はず。止むれども止まらず。即時に出去れり此は今より。十五年前の事なり　山人とはいかなる物ならむと寅吉に問ひしかば

寅吉云山人といふに種々の別あれど　まづは俗に云ふ天狗の事と心得をりて宜きなり。

○こゝに予　この答たる趣の心に止りて。委く問はむと思ひしかど　集へる人も多ければ。纔に懷紙に其事を記し歸りて。翌日閑靜なるをりを見合せ。前にしば／＼山人と云ふ稱は無かと問しかど。然は云はずと答へき。然れど決めて山人と云ひてあ

るべき物と思ひて。先頭山に歸る時に汝に書て贈れる歌にも。押て山人と詠たりしなり。然るに昨日玄仲に答へたる語に。山人と云ふに種々の別ある由いへること。耳に止れりいかで委しく語り聞かせよと切に問へば。

寅吉云此事。前にしば／＼問給へれど。然は稱せずと云へるは。下山の時師の誡めに。暫く俗に云ふ儘に天狗と稱して。山人など云ことは。明すこと勿れと禁められし故なり。然るに今度また山に歸りて。先生の我に賜へる歌を出し切に此事を問給ふ由を云ひしかば。苦しからず明し聞かせよと許されし故に。折もあらば申さむと思へる間に。昨日玄仲の問はれし故に。ふと申出たるなり。今は師の許しなれば。いかでか包まむ。山人と云ひ天狗といふ由を委く語り申すべし。まづ山人と云ふは。此世に生れたる人の。何ぞ由ありて山に入り世に出ざれども。自然に山中の物をもて。衣食の用を辨ずる事を覺え。禽獸を友として居れば。最初の間は獸類も此を恐るれども。後にはなれ近づきて。食をさへに運び與ふ。三十年ばかりも山に居れば。誰も成らるゝ物にて。安閑無事に木石の如く長生す。これ眞の山人なり。また深山に自然に生ずる物あり。其は異形さま／＼なれど。まづは人の狀に近き故に。此をも山人と云ふ。然れど此は魑魅の類とも云べし。さて我が師の如きも。山に住む故に山人とは稱すれども。眞は生たる神にて佛法なき以前より。現身のまゝ世に存し。神通自在にして。神道を行ひ。其住する山に崇むる神社を守護して。其神の功德を施し。或は其住する山の神とも崇められて。世人を惠み。數百千萬歲の壽を保ちて。人界の事に關がはしく。かつて安閑無事には居ざる物なり。また佛法渡れる後に現身のまゝ世を遁れて。佛を崇むる山に住み。其崇むる佛の功德を行ふ山人も多し。此も自在の態ありて長生なり。また現身を蛻の如く捨て化れるは殊に夥しく有り。此また靈妙なる事元よりなり。但し佛道信仰の者の化れるに。現身ながら化れるにも。現身を捨たるにも。正と邪とあり。然るは世の限り邪道を信ずと云へども。幽界に入りて始めて其道の妄なる事を悟り。正道に歸する心を生じて世人を利益す。これ正なりまた幽界に入りてなほ悟らず。迷へる者。また悟

りつゝも正道に歸せず。ます／＼我慢をはりて。生涯の失を改めざる者は。共に妖魔の部屬に入りて。幽より事を行ひて。世人を邪道に引入れむとす。是邪なり。彼界にて山人と云ふには如此く差別多し。さて前に云へる安閑無事に木石の如く長生する山人をおきて。餘の山人は人を誘ふなど。折々世に知らるゝ態を現はすを。人は右の差別を知らざる故に。凡て天狗の態といひ。天狗と名けたるによりて。姑く彼方にても其儘に稱ふれども右何れも天狗とは異なり。天狗と云ふはもと天狐の事なりと師說なり

仙境異聞上之三巻

平田篤胤筆記

○問云かねて聞持たる物語に。江戸濱町なる或人の下僕が。異人に誘はれて。二年ばかりも。歸らざりしが。歸りて後の物語に。源爲朝義經などに逢たるよし。語れると聞たり　其方かゝる人々。また外にも古き人々に逢はざりしか。

寅吉云我は然る古代の人々に逢たる事なし。然れど師の物語には。義經なども今に居らるゝ由は聞たり。

○問云常陸國阿波大杉大明神をば。俗には義經に從ひたる常陸坊海尊なりと云ひ。此人今も存世して。仙人となり居るよし。會津風土記といふ物にも見えたり。彼の境にて此の說は聞かざりしか。

寅吉云大杉大明神は。鷲の天狗に化たるを祭れる由は聞たれど。常陸坊といふ事は聞かず。

○問云弘法大師は今も存世にて。四國を始め諸國を廻る由にて。彼是にて此僧の所爲と覺しき事どもの有を聞たり。彼境にて其事は聞かざりしか。

寅吉云弘法大師の。然る事ありと云ことは。未かつて

聞かず。たゞ天狗に成たりと云ことは聞たり。(頭書云弘法始めて天狐を使ふ)

○問云小田原最上寺の道了權現。秋葉山の三尺坊。妙義山の法性房などに。師の交はらるゝ事はなきか。

寅吉云此等は眞の天狗たちにて。專ら佛道を崇むる方なれば。吾が師などゝは志願の異なる故か。交ること無れば。委き事は聞き及ばず

○問云口口口口と云ふ書に云々と見えたり。かゝる事は聞及ばずや。また狐を使ふ者も世に多く有と聞ゆるが。如何して使ふか聞及ばずや。

寅吉云狐が人の首を戴きて北斗を拜して。後に妖術を得ると云ふ事は。書物に有ても信じがたし。狐や狸猫などの妖をなす事は。皆其物の天性なり。北斗を拜するには依べからず。さて狐を使ふには。まづ狐を見立て願を起し。鼠を胡麻の油揚にして。我に使へば折々此を與へむと約して使ふ由なり。大凡かかる邪法どもは　佛道にて種々の物を使ひて。法を行ふに傚ひて。後世に爲始めたる事なりと聞たり。凡てかゝる惡法を知つゝ。利欲の爲に行ふ者は。神の大く惡み給ふ故に。末終に宜からず。たま〳〵此世の刑を免るゝも。死後には妖魔の部屬と成りて。永く神明の罰を受け。また然る邪法を行ふと知らずして。其修法を愛用ひたる人さへに。妖魔の糸にかかれる罪は蒙る事なり。然れば法は行ふ人も。よく撰びて正法を行ひ。受る人も。よく其法者を糺して。受くべき物ぞと。師語なり。我が咒禁祈禱を好まざるも是故なり。然るは我文盲にて其撰び未だ委からず。邪法より出たるわざの交れるを。知らず行ひて我も人も罪犯さむ人の空恐ろしくてなり。

○問云世に狐の人にとりつくと云こと幾等もあり。忽におとす手段は有まじきか。

寅吉云我慢の人か。心の虛なる人がとり付れ。化さるゝなり。正しく心の立たる人には。つくこと能はず。また化されもせぬなり。我も或時師の命にて。里に出たりしに。とある稻荷の前を通りしかば。忽に夜となり一筋の道を幾筋にも見せて。迷はさむと爲ける故に。これ狐の所爲と心づきて。稻荷社に向ひ。稻荷馬鹿を爲るなと。大きな聲して叱りたれば。元の如く晝になり。道も一筋に成たる事あり。一體狐に限らず。人も人を化し。人が人にもつき。其外

の物も。化もすれば。つく事も有が。狐は中に卓れたり。さて狐に五種あり。翼ありて空をかける狐あり。此を天狐と云ふ。これ天狗の類なり。白狐。おほさき。くだ。野狐なり。天狐のつきたるは落しがたき物なり。或時天狐のつきたるを。野狐のつきたると心得て。恥かきたる事あり。讀みと讀む咒文を吾が聲より先に讀みて。其術盡たる故に。人々笑ひしかば。口惜くて中臣祓詞をこゝかしこと飛違へて讀たれば。天狐それに困りて落たる事あり。また野狐白狐にも。此方のいふ事を早く悟りて。云こと有るには困るものなり。然る時は狐のまごつく事を考へて行ふべし。凡て何狐によらず。始より。りきみ心を止めて。平和に狐と心易く。實意をもて交はる心になりて。理詰にするが宜しきなり。此方の云ふ如く。聲を揚ても形を現しても去る物なり。また狐を欺きて陶(とくり)などに封じ入れて落す事もあり。さて狐の人につくは。體をば其穴に置て。魂をのみ人體に入るゝなれど。一晝夜に三度つゝは。其體を隱したる所に通はねば。體腐る故に人體を出るなり。其時は。つかれたる人。聊か正氣になる物なり。此時を見て防ぎの祈禱を行ふも宜しきなり。

〇問云山住居の時に。何ぞ恐ろしき物を見たる事は無かりしか。

寅吉云恐ろしき物と云ふは妖魔なり。人の透間を伺ひて。其道に引入れるから。此ほどに恐ろしき物はなし。此外には然しも恐るべき物もなきが。或時一人山奥を行けるに。足元より團子ほどの白き光り物現はれて。目前を横にひら〳〵と飛たるが。漸々に大きく成て。能見れば人のやうにも見え。鬼の樣にも見えて。見定がたく消たり現はれたりする故に。氣味わろくて。土にうづくまり額の所にて十字を切たれば。暫くして消たることあり。狐狸などの所爲なるべし。又困りたる事は口口にとり付れたる時なり。月夜の事なるが。師命を受て山道を通れるに。月の光に見れば向ふより風呂敷ほどの物ひら〳〵と飛來ると見えしが。向ふ二三間と見る程に。最早く。ついと飛來て貌に掛らむと爲る故に。急ぎ兩手を貌にあてたるに。其上に取付て。頭を悉く覆ひたり。鼬ほどの物にて鰭あるが。風呂敷の如くにて節々に爪ありて。しがみ付き。堅くしめ付て鼻息を止めむ

とす。幸に兩手を貌にあてたる上に取付たる故に。其手をうかして引放して打付たれば。難なく打殺したり。我は引放さむと爲るを。放れじと堅くとり付たるを。無體に放ちたる故に。彼爪にて頭より貌のあたりまで引かゝれたり。彼は何と云ふ物ならむ甚憎き物なり。

○と云ふ故に。其は俗に鼯鼠(のぶすま)といふ物にて。漢名は口口と云物ぞとて。兼て藏たる圖を出して見せたれば。誠に此物にて有しと云へりき。○また何ぞ危く恐ろしき目に逢たる事は無りしかと問へば

寅吉云危くて恐怖しかりし事は。或時いづこか知らず。二十丈も有らむと見ゆる。岩山の聳たる峯の上より二丈ばかり下の所に。舌を出したる如き岩の滑なるが。二尺計り指出たる上に。暮頃に連行て捨て歸らむとす。置れじと泣叫び抓み付たれど。引放して捨行たる故に。詮方なく。また少し岩の指出たるに取付て下を見れば。巖石植立たるが如くにて。目くるめき總身びく／＼として。身を動かせば下に墮て微塵になる故に。かく苦しき目を見むよりは。いつそ態と落て死むなども思ひしかど。いつまでも斯ては置かじ。やうある事なるべし。明日の晝まで待て。迎ひに來らずば。其時に兎も角も成らむと。心をすゑて取付たる手を放たず。目を閉て夜中伊勢大神宮を念じて在けるに。夜明たれば迎ひに來て連歸りたり。是時ほど危く恐ろしかりし事は無きなり。又或時日光山の奥山に捨られしに。狼に追れて。命を限りと迯て木に上り。頻に九字十字を切たれど。狼は少しも恐れず退かず。牙をかみ出して。木元に來り我を瞋みて。夜中その根を掘て在る故に。遂には掘拔れなんと。心ならず上り居たるに。掘終ざるに夜明たりしかば。狼は去りたり。是時も誠に危かりしなり。折々かく捨られたるには。困れる事度々なり。

○問云其後は捨られたる事も無りしか。

寅吉云なほ此後も度々捨られたり。或時妙義の奥なる。小西山中とて。米なく芋ばかり食ふ所に捨られけるに。其邊の田舍の家數いと少く。まばらなる所に迷ひ出て。其所の中にも大家と見ゆるに入りて。一宿を賴みて宿りたるに。相應の身上と見えて。男女十四五人も有けり。我をば傍の一間に寢しめて。次の間には亭主を始め家內の者ども休み。臺所には

男ども寢たり 然るに夜更て押込と（入カ）おぼしく 拔刄を持たる男どもの恐ろしげなるが、六七人ばかり入りて。庭なる竈の前に火を燃し。長火箸を二本わたして。茶椀を四つ五つ其上に置て赤く燒き、私語き相ひて既に盜みせむと爲るに、家內の者ども熟く寢入りて知る者なき故に たまりかねて、そつと起て拔足して。亭主が寢たる枕元に至り、耳に口をよせ、神をこめて盜人入たり起たまへと、三聲計り云ひければ。亭主むくとおどり起て。盜人どもを見つけ。大音上て男ども起よ盜人入たりと叫びければ、家內の者ども一度にどつと驚き覺たる故に。叶はじとや思ひけむ、盜人ども皆逃去たり。亭主悅びて我を譽め馳走したりき。斯て門口に出て見れば。五所ばかりに屎をまりて、草履を上に伏せて有けり。後に此事を師に尋ねしかば 其は盜人の竊に入らむと爲るに。人を覺ざらしむる邪法なり。入りて火を燒し茶椀を燒たるは、彌々家內をさがさむと爲る時に。又それに屎をまりて煮立れば。其不淨の臭氣 家內にみち汚れて 守護の神々悉く避り給ふ故に 家內の者の目覺ることなし。其間に物取らむとする法なり。凡て神は穢を惡ひて去り給へば 此旨を世人によく示したきものぞと言れたり

○右の如く時々所々に捨られたる物語せし時に。己傍の人々に、此は俗にも愛しき子に旅をさせよと云ふ事の如く。師は思ふ旨ありて、寅吉が才量の程を試し 又は種々ある事どもを見せむ爲に 捨たるなるべし 人の師となり親となりては。子は覺らねど 態と辛き目見せなど 然る心ばえは爲るものなり 此も子や弟子を見立る一術にて、神代に須佐之男大神の、大國主神に、くさぐさ辛き目見せ給へるも。此心ばえなり。思ふに師は態と情なき狀に捨つゝも。形を隱し付添ひ見立てぞ有けむと云へば。

寅吉云然云ふによりて。今思ひ出れば。其捨られたるは。空行の時なりしかば。履物もはかざりしに。足に少も土つかず、土より二寸ばかり上を歩む心地しけり。其時は甚奇なる事ぞとは思ひしかど 捨られたる事の悲く恨めしくて在つるに、御考に依りて思へば。師は態と捨つゝも。蔭身に添ひて守護しつること今思ひ知られたり

と涙ぐみて師恩の辱きよしを感じけり。○是より後に。神前に奉る水を井戸より汲來れと。寅吉に命じたるに。服物の袂に手を入れて手桶を持來りし故に。叱りて神に奉る物を。然る禮なき事を爲ると云ことやは有る。改めて再び汲來れと云ければ。慨畏りて。また汲來れり。其を神に奉り竟て。後に云けらくは。先に袂をかけて水を汲來れるを。改めて汲しめたることは。袂の塵の水に入たるにも非ざれど。汝常に今教へたる事を即時に忘れ。また神事を行ふ狀をも見るに。口口す仕狀なる事多かれば。改めて汲しめたるなり。汝が師の神に仕ふる狀を語るを聞けば。いと嚴に祇まると思はるゝに。汝は何とて其行を習はざるぞ。また常に然る悪しきいたづら態は勿爲そ。山に居たる時と違ひて此間に居ては。少しは此世の禮も知らずては叶はざる物ぞ。常の性も荒魂のすさびのみにて噪がしければ。今少し心を靜めよと教ふるをも。何とて用ひざるぞ。汝に於ては。先には思ふ旨ありて。決めて此世の事は教へず。氣儘にして叱るまじとは思ひしかど。此頃は。また思ふよし有て。杉山老翁に遙に告て。少かは教ふる事となりぬ。汝が聆悧なるに合せては。我が教を忽に忘るゝこと心得がたし。山にて師の教をも。しか用ざりしか。教言を聞かずても。師は叱られざりしか。又山にて有し事どもは。甚よく覺えて居るに合せては。我が爲こと言ことを。かつて覺えざるも甚奇しき事なりと言ひしかば。

寅吉甚く恥入りて云く。誠に尤なる御言葉にはべり。我が性質元より噪がしく。山にても師の教言を守らず。叱られたること。今數へ盡し難し。然るをりは。尻へたを綱にてうち。唾をしかけ。彼此に捨らるゝも。教言を聞ざりし時の事なり。或は事も無きに。夜遠くの山へ遣して。印を立て歸らしめ。又は工夫に能はざる種々の難事を命じ。など爲らるゝなり。夫故に恐ろしくて。師の教をば能く守りしかど。先生の教は水を再び汲しめ給へるなどは。師の教方に似たれど。常にいと惜み愛み給ふ故に。其教を守らじとは思はねど。忽に忘れて長老しからず。徒の態をも致し侍るなり。

○問云師の叱り仕置したる事どもの。大凡なりとも

語り聞かせよ。
寅吉云我いと幼かりし時。立木に寄り居て著物の袂を握り。嚙切る癖ありしを。直せと敎へらるゝを。忘れては嚙切たりしかば。いつの間にやらむ。蕃椒をしたゝか付置たり。此を知らず。例の如く嚙りしかば。堪がたく辛くて　こりたる事あり。又雪隱に行て鼻唄など謠ひて長居する癖ありしを。制せられしかど用ざりしかば。或とき穴より爪長く。毛の生たる化物の手の如き物を出して　尻を撫たる故に。胆を潰して其後は雪隱に行く事恐ろしくて。長居を止たり。其當分は誠の化物と思ひしかど。後に思へば。此も仕置にて有しなり。また左司馬が我を彼此と世話やき叱るを。いらざる事に師の眞似していぢめる如く思ひて　腹立しく。何ぞ彼が過失の有れかし。師に告て叱らせむと待居たるに。田に水かくる車を。徒にはづし來れる事ありしかば。此を師に告たりしに。我が言を聞ざる狀にて。汝車をはづし來れるとか。人の難儀を爲すこと以の外なる不埒なりと。叱らるゝ故に。我には非ず。左司馬なりと云ひしかど。聞入れず。左司馬は長しくて然る徒する者に非ず。汝にこそ有らめとて　左司馬が長しき由をしたゝかに譽て。我が惡事を人の事にして。我に告たる憎き奴なり封じ置けと。左司馬に云ひつけて。筥の樣なる中に入れて一日計り置れたる事あり。此は後にも決して。人の事を云ひ付させまじき爲の仕置と心得て。其後はかつて告言は。せざりしなり。師は常は柔和なれど。怒りて叱らるゝ時は。額に赤き竪筋二三本立て　實に恐ろしき面ざしと成らるゝなり。また師の見ざる所に。密に徒態して居るを。何處よりか手を伸して　背中などをしたゝかに打るゝ事あり。振歸りて見れど　形は見えず。夫故に知らぬ所にても。めつたにわる態は出來ざるなり。また徒過失など爲る時に。側へ立來て憎き奴なりこちへ來れとて。痛く耳をとりて引行かれし事も度々なり。また太さ指ほどなる細引を手ぐり持て　尻をまくりて擊るゝ事あり。いつも打るゝは大かた尻なり。またつめらるゝ事もあり。また尻をまくりたるまゝに。唾をしかけらるゝ事も度々なり。また鹽を嚙て其唾をも。しかけられたり。尻に唾をしかけられたるは。實にわろき物なるが　鹽の唾は鹽しみねばり痛みて。

是ほど困る事はなきなり。また我前に座し居れとて。一日も居ゑ置き。少か身を動しも爲れば甚く叱り又は臺の樣なる物にのせて。左手に茶椀に水の入たるを捧げ持しめ。右手に線香に火をつけて持しめ。其線香の消るまで置ことあり。或時に手に持たる下の所を。親指にて。そと折て早く消したりしかば。師は疾く其事を知りて憎き奴なり。汝線香の末を折たれば。其過怠に今一本を持べしとて。却りて長く苦みたる事あり。大抵この仕置どもに。何過あるは何のわざ。いかなる徒には何の仕置と。云ふ定りある事なり。又師を二度だましたる事あり。雉子を燒て持來れと云れしを。忘れて鳩を燒て出せれば。雉子かと問はれし故に。前に雉子をと云はれしを。鳩を燒たれば叱られむ事を恐れて。とりあへず。ハイと云ひしかば。其時師は考へ事を爲て。其事に心をもむけ居られし故か。何とも云はず。鳩を食れたり。また或時手水を取置けと言れしを。忘れて居たりしに。いかに手水は取れるかと云れし故に。思ひ出て。ハイといらへ。そつと立て汲置たるに。何とも云れざりしなり。師をあざむきたるは。是二度なり。又工夫に能はざる樣なる。種々の難題を云ひ付て。試さるゝ事あり。能はずと云へば。したゝかに折檻せらるゝ故に。止事を得ず。念じて工夫するに。爲得たる事も度々あり。

○問云師の命せられたる難題の事どもは。いか樣の事にて有りしぞ。

寅吉云まづ粟一合。赤小豆一升などの數をかぞへ置て。線香の一本煙る間に。其粒數を數へよと云ひ。また長き葦を。十間餘りの簾にあみて。葦を一本も潰さず。末より渡り越せと云ひ。或は疊百疊ばかり敷くべき。廣く高き家の屋根裡に。蠅の一面に取付て在を。それに屆く長き物は用ひず。追落せと云ひ。又は神前に嚴しく結び下たる大鈴を。音をさせず取來れと云ひ。或は千疊敷も有らむと覺ゆる。板の間の磨き立たるを。足跡を少しも付けず。ふくべしと云ひ。又は太き綱の中間に。節を拔たる竹の筒の。一尺計りある。あまたを通じて。高みより高みへ張渡して。何としてなりとも。此を向ふへ越し行けと云ひ。或は夜になりて。遠くの野原へ豆四合ばかり蒔しめ。歸り來れば。また其豆を拾ひ來れと云ふ。大抵此の如き難

題にて有しが。度々の事なれば。今逐一には思ひ出ず。

○問云其事どもを。師命の如く皆爲たりしか。いかに。

寅吉云奇しくも。其時々分別の出來て。此等の難題どもは。皆師命の如く行ひたりき。粟を數へたるは。まづ平なる板に透間なくならし置て。一尺ばかりの絹糸を兩手に引張り。口になめわたして粟をつけ。一度その數をかぞへ。幾度となく。粟の有たけ右の如くして。其數を云ひしかば。師の數へたると大略合たり。赤豆をば平瓦に。赤小豆粒程の小穴を百あけて。其にてすくひ數へたれば。暫時に一粒も違へず知たり。葦簾をば。板の四角に細釘四本打たる木履を作り。それをはきて透間に蹈入れつゝ渡りぬ屋根裡一面に付たる蠅をば。大なる團扇を以て扇ぎ立れど一つも飛落ず。糊にて粘たる如く思はれし故に。竹もて水はじきを拵へて。彈きけるに。難なく皆落たり。能見れば蠅と見えしは。紫蘇の實にて有しなり。鈴を取り下す事は。色々に爲て見たれど。鳴らぬやうには下し兼しかば。深く考へて桶に水を汲て臺に上り。桶の水に鈴を浸して紐を解たるに。少しも鳴らず取下したり。千疊敷の板の間をば。板一枚づゝ後去りに。ふきたりしかば。足跡一つも付ざりしなり。大綱は步み渡らむと爲れば。中間に通したる管廻りて忽に落る故に。是は手と足とを綱に搦みて。下方に下り渡りしなり。夜に野原へ豆を蒔に行たりし時は。既に抓みて蒔かむと爲けるに。不思議なるかな。何處よりともなく。其豆は蒔く事勿れ。其處に埋めて歸れ。と云ふ聲聞えし故に。樣こそ有らむと思ひて。穴を掘りて埋歸りしに。暫時して彼の豆を一粒も殘らず。拾ひ集めて歸れと言はれし故に。更に行きて埋たる豆を掘出し持歸りしかば。師は首をひねりて。先に蒔て歸りしかと問はるゝ故に。蒔て歸りしを拾ひ集めて歸れるなりと云ひしかば。合點行かざる貌付せられしなり。野原に聲をかけしは　師かと思ふに。更に拾ひ集めに遣したるを思へば。師には非ず。師の合點行ざる貌付せられしは。決して拾ひ得まじき豆を。拾ひ來れるを奇しみたるが如し。然れば聲をかけたるは。何人なりけむ。若くは大難題なりし故に　産土神の誨へ給へるにや。

此事今に心得がたし。
○問云攝津國大阪に何某と云へる者。俗謠を唄ふ聲いと美かりしが。或時途中に異人あひて。其方の聲を三十日借たし。許し給はむやと云ふ。彼男何心なく諾したるが。其翌日より聲潰れて謠はれず。然れど異人に借られたる故とは心付ず。產土住吉神に祈らむ。と思ひて出る途の向ふより。彼異人來り相て。汝は賴み甲斐なき物かな。此ほど我に聲を借たるに非ずや。然るにわづか三十日の日を待あへずて。住吉神に祈らむとは。甚憎き事なり。汝その事を神に祈らば我決めて御尤めを蒙むる事なり。然れば我も汝を只には置じ。いかで三十日の事なれば。約束の如く借し給へ然も有らば。聲を返す時によき咒禁法を傳ふべし。と云ふにぞ。其男いと恐ろしく思ひて。慥に諾ひて別れけるが。三十日が程。聲潰れて在しが。彼異人來りて。今日より汝が聲を返すなり。約束の咒禁法を授くべしとて傳へたるが。何の病にも能く驗ありて行はれ。後に謠曲をやめて。此事のみにて安らかに世を送りけるとぞ。また上總國の東金と云ふ所に。孫兵衞とて笘さす事を業と爲る者あり。其職いと下手なりしが。或時異人來りて。汝が耳と口とを三年ばかり貸たまへ。と云ふに。孫兵衞も何の心なく諾ひけるが。其日より痴の如く。あまつさへに。啞となりたり。人々然る事ありしとは知らず。忽に啞となれるは不測なる事ぞなど云ひ相へりしが。斯て三年ばかり過ぎて。彼異人來て遠くより孫兵衞を招くに。痴の如くなる故に立こと遲かりしかば。後へひらりと來て。手の平にて。背中をしたたかに打たり。孫兵衞それに驚き。性つきたる心地して。近よれば。今日より汝に借たる。耳と口とを返すなり。受取べしと云ふ時に。はや耳聞え口に物言ふ事も出來たり。斯て彼の異人云く此悅に。其方の生涯を安らかに送るべく。我守らむといひて去たりき。人々は始よりの事を知らねば。忽に啞となれるは。何ぞ神の罰にや有らむなど云ひて在しが啞直りて後に。孫兵衞この始末を語れるに。人々始めて驚きける。さて彼異人に打れたる。大きなる手の跡。後まで黑くなりて有けり。異人の言に生涯を安く送るべく守らむと云へれば

決めて指物のわざ上手に成るべしなど。人も思へるに。此業はます〳〵下手に成りて。誰も誂ふ者も無なりけるに。孫兵衛いかに思ひけるか。成田不動の前町に蕎麦店を出しけるに。殊の外に流行りて今に繁昌なりと。孫兵衛を知たる者の物語なり。成人の聲また耳口などを自在に借ると云ことも。成る物なるか。

寅吉云まづ神の自由に坐まして。人形を人間の使ふ如く。人を自在に爲給ふことは申すに及ばず。山人天狗なども。神に近き物ゆゑに。然る自在の働をなすこと。珍らしと爲るにも足らず。

〇屋代翁寅吉に謂はれけらく。去年□月の事なるが。淡路國なる鷹金屋何某と云ふ者　かねて金毘羅を信仰の者なりしが。金子許多懷にして。男ども五六人と舟に乘りて大阪に渡らむと漕出しけるに。海中にて彼男ども主人を殺して。金子を奪はむと謀り。主人を縛りからげて。碇をつけて海に沈めたり。然るに其沈められし刻を違へず。我が家の奥間に。碇を付られたる儘にて歸されたり。家内の者見て大きに驚き。其由を問ふに。主人性を失ひたる如くにて。此は何處ぞといふ。家内の者ども。此は其住居なれば。心を靜め給へと色々介抱しけるに暫ありて性つきて。右の由を語り。その沈めらるゝ時に。一心に金毘羅を念じて在しかば。其後の事は知らず　正に彼神の救ひ給へるなりと感涙を流し。辱がりて其由を訴へしかば。彼男どもを皆捕へられたるに。奪はれたる金子は少しも失はず有しとぞ。此は如何にして家に歸り居たるならむと思ふぞ。と謂れしかば

寅吉云それは神の惠みにて。その沈めに掛らるゝ時に。船を潮と共に大空に引上げて　主人は家に歸し。船をば元の如く。海に返賜へるにや。神の御所爲には。然る事も有ものにて侍り。

〇爰に屋代翁手を拍ちて　實然も有べしとて。龍宮船といふ書に記せる。空中を船の行たる物語をせられしかば。寅吉も實もと感じたり。また倉橋勝尚ぬしの物語に。小石川戸崎町なる。石屋の長左衛門と云ふ者の弟子。丑之介といふ者の事につきて。象頭山の大神と。其氏神氷川の大神と。御問答の事有。（こは玉襷に委しく記せり、）又或童子の。

異人に誘はれたるが有しかば　兩親血の涙を流して。氏神に祈けるに。四五日ありて歸り來れるが。語りけるは。伴はれたる處は。何處の山とも知らざるが。異人多く居て。劒術など稽古して在しが。折々は酒呑かはす事もありて。其盃を遠く谷を隔たる山の頂などに投て。今取來れと云ふ故に。いかで我かの山に上りて取得むと辭むに。怒りて谷底におし落したると思ふと。何の事もなく。やがて其峯に至り。盃をとりて異人の前に至る。凡てかゝる狀に役はれたるが。昨日の言に。汝が產土神。ねむごろに汝を返すべき由を云はるゝ故に。留めがたしとて歸されたりと。語れる事あり。（此は今井秀文が。或やごと無き侯の。語られしを聞て予に語れり。）また備後國の稻生平太郎が許に來れる。山本五郎左衞門と云ふ物怪と。平太郎が應對せし時に。產土神と見えて。冠裝束嚴なりける神の。半身を現はし平太郎に添て。挨拶せられたるを思へば。平太郎が物怪に卒られざりしも。氏神の守護ありし故と思はれ。また前に云へる。聲を借られたる男の。住吉神に祈らむとせしを。異人恐れ　野山又兵衞が子の多四郎を誘ひたる。異人の首領の。又兵衞が神に祈れるを恐れて。多四郎を返したるなどを思ふに。山人天狗の誘ひたるも。產土神の御言は違ふこと能はず。また物怪の類も。氏神の守護ある人には。禍を爲すこと能はざる物と見えたり。思ひ當る事はなきか。

寅吉云實に御說の如く。山人にまれ。天狗にまれ。何にもあれ。產土神の加護ありて返せと宣ふには。其言を違背すること叶はぬ物なり。伴はれたる跡にて。親などの丹誠を拔むで神に祈る時は。彼境の行を仕損ひ。殊によりては痴の如くなりて返さるゝ事あり。それ故に我が彼境に誘はれたる時に。返す返す此事を親に告ること勿れと。師は誡められ。我も痴になるが否さに。今まで人に語らざりしなり。（案ずるに。氏神の事は古史傳また玉襷などにも委しく記せる如く。人々一日片時も其恩賴を忘るまじき物なるに。世人然しも思はず。外の神々と佛とを信仰して。此旨を思はざるは如何にぞや。古今著聞集に。藤原重澄若かりける時。兵衞尉にならむとて。稻荷の氏子と有ながら。加茂に仕奉りて。

土屋を造進したりけり。嚴重の成功にて。社家推擧しければ外るべきやうも無かりけるに。度々の除目に漏にけり。重澄社の師なりける者に申付て。除目の夜祈請させける間に。まどろみたる夢に。稻荷より御使に參たる者あり。人出あひて是を聞くに。彼の御使の申けるは。重澄が所望殊更に任せらるべからず。我が膝元にて生れながら。我を忘れたる者なりと申ければ。申つぎの。大明神に申入るゝ由にて。度々御問答ありけり。さらば此度ばかり成されずして。思ひ知らせて。後の度の除目になさるべし。と申ければ。御使歸りぬ。師驚きて。急ぎ重澄が許へ行て。此由を語りて驚き奇しむ程に。其夜の除目には外れにけり。此夢の誠を知らむが爲に。稻荷へ參りて。次の度の除目には申も出さゞりけれども。相違なく成されにけりと見え。また仁安三年四月二十一日。吉田祭にて有けるに。伊豫守信隆朝臣氏人ながら。神事も爲て仁王講を行ひけるに。御あかしの火障子に燃付て。其夜やけにけり。大炊御門室町なり。其隣は民部卿光忠卿の家なり。神事にて侍りければ。火移らざりけり。恐るべき事にや。と見え。上杉六郎篤興が物語に。越後國蒲原郡保内と云ふ所の河にて。夏のころ。人々水浴て有ける中に。一人の男河童に引れむと爲けり。其人聲を上げて。我は今河童に引るゝを。人々助給へと。頻に呼はれど恐れて誰も寄つく者なく。皆迯上りけり。彼男は足を引れて漸々に深みに入るに。水ねばりて手足働かれず。既に河童の穴に引入らるべく。危かりしかば。一心に氏神八幡宮を念じけるに。何處ともなく空中より。其水にかぢり付べし。といふ聲。二聲ばかり聞えしかば。其如くしけるに。水のねばり止み。身も輕く成りて渚に游ぎ歸りぬ。いと不測なる事なりと語りければ。寅吉きゝて。予に蓑虫と云ふ物を知給へるかと問ふ故。そは木に取つき。ちりを集めて蓑の如き巣を作りてある蟲なりと云へば。

寅吉云木に付蓑蟲には非ず。別に蓑蟲と稱する事あり。其は山中に有る事にて。我しば〳〵取付れたり。其狀何の故ともなく。身より青き光り。蓑を著たる如く。燃出て。其光り。ちら〳〵と飛散るものなり。

始の時。如何せむと周章て、燃る服物を。こゝかしこと噛付たれば、止たりし故に、師に言しかば、其は噛付て止むるより、爲方なき物なりとて。蓑蟲といふ名も。此時始めて聞たり。其後はいつも右の如くして止たりしなり、然れば河童に引れたる人に神の誨して喰付しめ給へるは、定めて故ある事なるべし。

○一日門人どもに。火の汚といふ事は。伊邪那美命の火神を産給へる後の物より起れり、京の愛宕社は、火神迦具土命なるが、火の穢を忌ひ給ふ中にも、産火を殊に惡み給ひ、伊勢の神宮の御定めにも、産火を重き汚と立られ、胞衣を納たる者の汚を、冂日と定められたるも、此故也、など語り聞かせて在けるに、寅吉傍に聞居て、豆つまといふ物を見られたる事ありや。といふ故に、それはいかなる物ぞ、と問へば。

寅吉云豆つまと云ふ物は。産の時の穢物。また胞衣より出來て、其人の生涯に妖を爲し。殊に小兒の時に禍をなす物なり。其狀は四五寸ばかりにて。人の形に異ならず。甲冑を着し。太刀を佩き。鎗長刀など持て。小き馬に乘りて。席上にいと數多現はれて。合戰を始むるに。太刀音など聞え。甲冑も人間のに異なく。光り輝きて甚だ見事に面白き物なり。此のほか種々のわざを現して。小兒を誑かし惱ましむる物なるが、何にても持て打拂へば、座敷に血つきて消失る物なり、此は度々見たる事ありし故に、師に問へば、其は、豆つまといふ物なるが、産の穢物。また胞衣より成る物なり。右の穢物どもを藏す時に精米を入れて納むれば。出來ぬなりと誨へられしなり。(豆つまは、丑寅の方よりも來る、又産の穢物どもは、究奇(かまいたち)とも化るといふ。) さて又鼹鼠と云ふ物も、胞衣また産の穢物より成る物と覺ゆ。其故は或時右の穢物どもを藏めたる所を知らず、藏めて三十日ばかりも過たるを、掘出したるに。土器の中に。一寸ばかりの鼹鼠、十五六居たりし事あり、彼物を切殺して見れば、腹内みな血にて、天日を恐れて死ぬるなどを思ふにも。産の穢物の化れるならむと思はるゝなり。偖また彼物の庭など掘上るは憎けれど。詮方なき物なるが。海鼠に繩をつけて。其掘上るあたりを。鼹鼠どのは御宿か。海鼠どのゝ御見舞じや。

と云ひて引廻れば。掘上けぬ物なり。
○豆つまの事。（○頭書云聊齋志異に豆つまの事あり）實に奇談にて。古書に思ひ合すべき事あり。其は今昔物語に。或人方違ひに下京邊に。幼兒を具して行けり。其家に靈ありしを。彼人は知らざりけり。（古へに方違といふ事の有しは、皆人の知れるが如し、さて古くは人の住棄たる家の、所々に有しかば、其明家に方違ひに行たるなり、さて撰者は靈と記されたれど、靈とは異なり、寅吉が說に依れば、豆つまにぞ有ける、）幼兒の枕の上に。火を近く燈して。傍に二三人ばかり寢たり。乳母は目を覺して。兒に乳をふくめて居たるに。夜半ばかりに。塗籠の戸を細目にあけて。長五寸ばかりの男の。裝束したるが馬に乘りて。十人ばかり枕のほとりを渡りければ。乳母恐ろしと思ひながら。打まきの米を攫みて投かけゝるに。此わたる物ども。さつと散りて失けり。打まきの米ごとに血付けり。幼き兒の邊には。必ず打まきを置ことなり。」と有り。此事は古史傳の大殿祭の所に。貞觀儀式に。殿內。また御門に米を散す事見え。延喜式なる其祝詞の分註に。今世產屋以レ米散ニ屋中一と見えたる文と共に引たりしかど。唯に散米の功をのみ述て。馬に乘て出たる物は。何物とも考へ及ばざりしに。今始めて豆つまと云ふ名を知り。散米する事は。其妖を消する事と知れるは。實に寅吉が賜にぞ有ける。此に就て我が本生の祖母は。九十歲餘にて果られたるが。幼兒を養ふ婦女には。兒の枕元に精米を忘れず置けと云ことを。常に言れしは。此故實を聞傳へてなるべし。兒を持たらむ人々。產屋に散米すること。胞衣を藏むる土器に。米を納るゝ事。兒の枕元に精米を置く事は。必ず忘るべからず。さて屋代翁の考に。豆つまと云ふは。つは助辭にて。豆ッ魔にて。小きより負たる名には非ざるかと言れたり。然も有べし。○胞衣の鼷鼠に化るといふ說も。奇說なるが。然も有べく覺ゆ。又鼷鼠の海鼠を嫌ふ事は。世人も知れるが如し。庭などを掘上るは。四隅に海鼠を埋め置けば。決めて鼷鼠出ざる物なり。此も如何なる因緣か有らむ。海鼠は神世に天皇命に仕奉らむといふ答せずて。宇受賣命に口を拆れたる物なるが。女の大かた好みて食

ふも奇しく。また活物として血のなき物は無きに。此ばかりは血は一滴もなく。然れども海参とさへ云ひて。悪血を去りて新血を生ずる能あり。鼹鼠は悪血より生じて。血多く血に屬する病を治する功あるも奇し。若くは鼹鼠は海鼠にあへば血を亡ひて消化する事などは無か。なほ試むべし。

○問云人の魂の行方は。如何に成る物ぞと云ことを。師に聞たる事は無か。

寅吉云まづ人の魂は。善にも悪にも。凝り固むれば。堅まりて。消る事なく中にも悪念の凝れる魂は消る期なく。妖魔の群に入りて。永く神明の罰をうけ。善念の凝れる魂は。神明の恵みを受て。無窮に世を守る神と成る。然れど善念は崩れ易く悪念は崩れ難き物故に。善念は生涯の念を堅めざれば。堅まらず。悪念は暫時思へるも。凝りて消えず。譬へば一分の悪念を以て。九分の善念も水の沫と成る物とぞ。また善にも悪にも。凝るといふ程の事もなき人の魂は。散じて消もして。卑魂相混じ。人にも物にも生れ出る事あり。また少き物あまたにも。一固にも變るが。何れ少き物に成りては。魂減りて少くなる物ぞと師に聞たり。

○問云鳥獸の行方は。いかに成る物ぞと。云ことを聞ざりしか。

寅吉云鳥獸は色々に生を替へ。また遂には消失せもし。何處にか身を隱し。消失せも爲るとぞ。又中に猛く強く生れ付たるは。遂に天狗と成りて。鳥は手足を生じて立あるき。獸は羽を生じて。共に人に似たる物と成るなり。然れど此も遂には消失る物と聞たり。

○問云鳥獸は山人を見て恐れざるか。

寅吉云常にならし使ふ獸は。逃ざれども。其外の鳥獸は恐れて逃ること異りなし。

○問云其方の師など隱形したる時。鳥獸は見つけざるか。

寅吉云隱形しても鳥獸は知るなり。中にも犬ほど眼のよく見ゆる物は無く。いかに隱形をよく爲ても。犬の眼は闇ます事あたはず。總て犬は壁三重を隔つれども。見通す物ぞと師に聞たり。

○問云凡人にして。隱形の物を犬の如く。見現はす爲方は無か。

寅吉云いかに隱形すといへども。眼の明たる人。其所に隱形の物ありと云ことを。心得て見れば。人の形慥には見えざれども。丸くぼうと氣の立たる如くにて。向ふなる物は見えつゝも。ほのかに見ゆる物なり。其狀を譬へば。何にても。しかと暫く見つめ居て。空を見るに。先に見つめたる物の。ちら〳〵と見ゆる如き物なり。然れど其處に某物隱形して。在りと云ことを知らでは。更に見ゆる事なし。これ隱形の德なり。

○問云常に隱形してある神。また山人。その外何物にても。時として。凡人にも見ゆる事あるは。いかなる故ならむ。

寅吉云それは神々にまれ。山人にまれ。何物にまれ。其人に形を見せむと思ひて見するなり。故に人あまた竝居るに。其中の一人のみに見え。などするなり。我が山に上れる時も。我師は。許すと云へば見え。下れと云へば見えず。

○問云鳶は天狗の部屬ならむと思ふ事どもを。諸書に許多見出し。なほ多年考ふるに。ます〳〵然思はるゝ事どもあり。師に然る說は聞ざりしか。

寅吉云鳶をみな天狗の部屬と云ひては。少し違ふなり。其由は。信に鳶なるもあり。中に交りて。天狗の部屬なる鳶も有る事なり。少か其差別を申さば。まづ天狗の本は狐にて。狐いと舊く成りては翼を生じ。四足は人の手足の如くなりて。神通自在をなす。また鷲も舊きは白く成り。人の如き手足を生じて立あるき。剛强自在となる。鳶もその如くなり。斯て各各山々に住して。もと狐なりしは狐を使ひ。鷲鳶なりしは。鷲鳶を使ひ。妖をなし祟をなし。又人の祈願を聞て。驗を與ふる事もあり。こゝに於て人々恐れ尊みて。某坊某權現などゝ。名を付て敬ひ祭るなり。また凡人も生ながらに鼻高くなり。翼を生じて化る事あり。死して其魂その如く化るあり。また生ながらにも死ても。形をかへず。此群に入るも多く有り然れど此は大概は出家にて。かく化れるに善なるは少く。まづは悉く妖魔なりと知べし。さて出家は大概天狗となるが。天狗までに至らざるは。鷲にも鳶にも變る物なりと。常に師の物語に聞たり。

○問云杉山々人の許に。儒書佛經なども貯へありや。

寅吉云儒者佛經などは。聞に知て居れど。其書とて

は一部も無く。たゞ師の自記せられたる書物は多くあり。
○問云師の自記せられたる書物は。如何なる事を記せる書ぞ。
寅吉云天文地理のこと。又は種々の法ごとの書物などなり。此等の書等も。種々寫し來れるを。我が實家にて皆燒捨たり。
○問云杉山々人の。佛法をよく知られたる事は。往往の物語にて知らるゝが。いかに西土の老子孔子などいふ人の敎を尊み講ずる事などは無か。
寅吉老子孔子など云ふ人は。何人にて何を始めたる人にて侍るぞ。山にてもいまだ聞知らざる人なり。
○問云大學中庸論語老子などいふ書物を知らざるか
寅吉云老子といふ書物の事も知らず。大學論語などの事は。世間の知れたる事を記せる物のよし。人に語らるゝをきゝたり。
○問云師の自記せられたる書物を　講譯せらるゝ事は無か。
寅吉云をり〳〵講釋せらるゝが。多くは白老人の寓言咄なり。また問ふ人あれば。天文軍學のことなど。其外何にても語り聞さるゝなり。
○問云其咄はいかなる事の物語ぞ。
寅吉云白老人と云ふ人ありて。千身行者といふ者を供に連て。諸國山々に住て。世に仇をなす妖魔を退治して巡る時に。千身行者が眉間より。針を出して大きくも小くも取まはし。また千身にも身を分ちて。魔どもを退治せる長き物語なり。
○問云それは白老人には有まじ。玄弉三藏成べし。千身行者と云ふも。猻行者の聞違ひには非ざるか。
寅吉云それは西遊記の事を宣ふなれど。然らず西遊記も山にて殘らず講釋を聞たるが。十二三日にて事終る咄にて。天竺の佛經を取に行面白からぬ物語也。白老人の物語は。まづ始は毘那耶女といふ女ありて。世に妖魔の多く有て。世の害を爲す事を歎き。天神地祇に。魔を退治すべき賓の男子を授け給へと祈りて妊たるに。六十年餘り腹に居て。白髮にて世に生れ出たる故に。白老人と號けたるが。大器量有て。數多の手下を持たる中に。千身行者とて。熊王が假に人の形となりて白老人を助け。種々の術計を働きて。日本中の妖魔を退治し畢り。後には皆星と化り

て。天上に飛上れる物語にて。其咄の中に。年中の行事。その外天地間にあらゆる事の道理 鬼神の妙用。萬物の變化をも。近く悟り知らるゝ様に。作り爲たる物語なるが。二十日餘りにて畢るなり。本は二十卷餘も有べし。面白きこと西遊記の類に非ず。一席きゝては跡を聞たく。堪がたく面白き咄なり。然れど今は事實を前後に誤り。また人々の名。所の名。妖魔どもの名をも。皆忘れたる故に。語るべき由なし。

○問云その講釋の時に。聽衆は幾人ほど出るぞ。夜なるか晝なるか。

寅吉云大抵晝の四ッ頃と思ふほどより。夜半まで手火を燈して。毎日毎夜つゞきなり。聽衆は山々より集り來て。六七十人。または百五六十人なども打より。時によりては二三十人集まる事もあり。

○問云師の講釋の時に。机見臺などを居て。書物を置かるゝか。又その裝束は如何に。

寅吉云見臺書物を置事なく。只机を前に据ゑ。闇に覺えて物語らるゝなり。裝束は何といふ物か知らねど。地は白く赤と靑と格子縞なる。大袖の服と。大口の袴を着せられ。割をさといふ物を冠り。服物の袖。殊のほか大なる故に。袖を外して背にて結び擧げ。手に小き笏を持ち。折々前なる机をうち仕方をも交へて。語らるゝに。冠物のをさ。ひらりと前に垂れなどして。行裝甚嚴に優美なる姿なり。

○問云割をさと云ふ冠物は。いかに製たる物ぞ。

寅吉云割をさは。煤竹のうす色なる。麻布一反を。眞中より色々に折りて。まづ額端の所を拵へて。黑漆もて塗り。其兩端を折曲げて。左右の角の如くなる所を。鱗の摸樣を作りつゝ。色色に折て。其はしを二尺計りづゝ殘し。其端を細く裁割て。兩角の下の所に通して紐となし。殘れる端に。鯨の鬚を入れて。をさと爲たる物なり。布一反を足ざる事なき樣また餘らざる樣に製る。右の如く折り作るに。中に入れて形どり折堅むるに用ふる木の形十二枚あり。其を入れつゝ。糊付にして。燒小手をあてゝ拵ふる也。十二枚の形の狀も。よく見知り。又作る時に見も爲つれど。委く其製作を覺えざれば。雛形を作る事も叶はず。元より畫をかく事

割をさの圖

を知らざれば。眞の有狀を圖す事も叶はねど。其大抵の圖を致し侍るなり。

○問云軍學の事は聞たる事なきか。

寅吉云此は。をり〳〵問ふ人を前に置て語らるゝを。聞たる事あり。まづ城取の事は。城の圖を多く出して。得失を誨し。陣取の事も。種々の圖を著して示され　勝負は多勢無勢に依らざる事。軍陣の作法古實。大將の心得。士卒一人々々の心得方。籠城の法　城攻の法など。すべて上代の名將勇士の。其時時在し事を見たるまゝに物語りて。其得失を論じ聞かさるゝ事なるが。傍に聞居て面白く聞たる事も多かりしかど。心を留ざる故に覺え居らず。中にたゞ城は四角に作りて。中に塀を掘るがよしと云ふ事と。眞の軍と云ふ物は。劒と弓矢にて爲る物ぞと言れし事。籠城の時釣塀のこと。屎汁を沸して。攻る敵に彈きかくることなど。耳に殘れり。屎をかけられては。其軍に必ず負る物なりとぞ。又へな土を沸して。かくるもよし。さて大將は甲胄をせず。たゞ見物の中に交りて居るがよしと云こと。また三角の物を道に散し。だるまの如くにて。人をころばす物のこと。

○かけ流し竹砲のこと○野中にしこむ竹砲の事。

○問云山にて文字を書ことを敎ふるに。いかなる敎方を爲すぞ。

寅吉云手習ひの始は。細砂を手に握りて。まづ○を書く事を習はしめ。夫より△を習はせ。次に口を習はせ。(頭書云信友加口の次に☆をならふみな筆にてもかくとも云へりと覺。)次に晴明くじを習はせ。何れも一筆に目を眠りても。形よく出來るやうに成りて。後に文字を敎ふるなり。其敎方は。一字を敎ふるにも。其異體の有かぎりを。手本に書て與へらる。一字ごとに然して數百字を習ひ。この修行すみて後に。また一字づゝ運筆のあたりのみを書たる手本を授け。其筆格を違へず。思ふまに〳〵くづして。異體をあまた書出さしめ。其を見て。世の筆學師の爲る如く。朱をもて直し。くづし狀の好きは以來も書しめ。惡しきは捨しむ。其は譬へば金の字を敎ふるに。圖の如く手本を書て。●點に書たる所々は。筆力を入べき所なれば。此筆格を違へず。幾體にも異體を見事に書出よと命ずる類なり。さて書覺ゆれば手本を戻せとて。取上らるゝなり。また字は悉く敎

ふれども。其讀をば。我いまた訓を受ず。字を殘らず敎へて。後に其字どもを用ふべき時至りて。師の術にて。一時に發し覺えさするとぞ。

○問云墨硯筆などは。此世のと異る事はなきか。

寅吉墨硯紙などは。人間のと何も異なる事なし。筆は人間のをも用ふれど。何やらむ梔子の實に似たる。かくの如き物の先を。うちひしぐ時は。馬の髪の如くなる。此を筆として書なり。然れど。いと細なる字は。かけざる物なり。

○美濃國の御代官［　　］主の家子に［　　］といふ人あり。此人の印施する。火用心の守札あり。此は口より傳授したると云ひ傳ふ。其圖［圖缺］かくの如し。此を見せて。かゝる書體はなきかと問へば。

寅吉云それは火垂の書法といふて。瀉水の法を行ふ時に。書く字をば。其體に書ことなり。

○問云瀉水の法は。いかに行ふ物ぞ。

寅吉云［　　］

○屋代翁或御家より出さるゝ［圖缺］この札守を見せて。彼方にて此字どもは。見知ざりしかと問はるゝに。

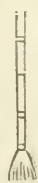
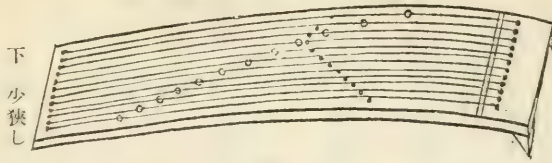
寅吉云我が見知たるは。此と字形少か異にして。都て十三字あり。そは如斯くなりしと覺えたり。［　　］此中の四字なるべく覺ゆるなり。

○問云符字守札などを書くに書法は無か。

寅吉云符字守札神號などを書く時は。心を正くし。息をつめて。其一詰の息の間に。一字を書べき物なり。成べくは。守にても符にても。一枚かく間に息せざれば殊に宜し。一字を書く間に息をつきたるは。守も符もきかざる物と。師の敎なり。九字十字晴明九字などは。殊に一息に書べし。

○問云九字十字晴明九字の認め方はいかに。また九字を切るに唱詞もありや。

寅吉云九字十字晴明九字。共に圖の如く一筆に書べし。九字を切る時は云々。十字を切る時は云々。と世には唱ふれども。其に及ばず。一二三四五六七八九十とすむ事なり。本は十字なるが。十字にては。向ふもの餘りに強くいたむ故に。九字を用ふ。臨兵

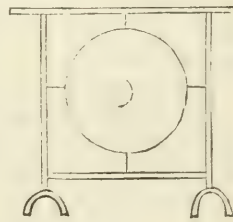
云々の語も。から人の後に作れるよし。師に聞たり。
○山崎美成が家は。下谷長者町にて、地内に有る井戸の水。いと惡かりければ。寅吉見て心苦く思ひ。自ら異所に何の事もなく掘たるに。好水の出る由を聞て。如何なる術かあると問ひしかば。
寅吉云長崎屋の井戸は。雜水に用ふる由にて。然しも叮嚀には掘らず。山にて師に聞たる掘法は。まづ鋤鍬をもて井戸がわの納るべく。深さ二丈ばかりも四角に掘りて、後に七寸まはり計りの竹筩に、根本の節の詰りたる所に、鐵にて圖の如き錐をつけたるを以て荒木田と云ふ土を入れつゝ。突込べし。始の間は柔に通る物なるが、漸々に土堅く通りがたく成て。卑き所二三丈。又高き所は。四五丈も入りて。迫至と通らざる所あり。其時竿を引上げて。常の如くかわを入れ。尤も底入のかわに。とよの穴を明たるを入れ。偖とよを指込て。かわの繼間。又とよの指口に杉皮を込み。然して後に。太さとよの中に入る程の竹を［圖缺］圖の如く拵へ。一人井戸に入りて。とよに指込み。しきりに突入れ引出せば。水泥ともに口より出て。井戸かわの所に上るを。井戸の外に居たる者、桶もてかへ出す、さて大抵に淸たる水の出るまで。替出したる時に。細き女竹の本を。圖の如く作りて、先を窄めて。とよ口に通じ。頻に揉立れば。とよの底に當る所。空洞に成りて。圖に著すが如くになる。
此は竹もて揉立ずても。底は洞になれども。如此く爲たるは。殊に洞廣くなりて。水の出よろしきなり。さて數度水を替へ畢りて。後に鰐の皮を百匁計り刻み。棒鹽消と共に底に突入れ置く。これ水の替らず出る咒法なり。また井戸がわの底。とよの口の傍に六寸計りの鏡よく磨たるを入置く。これ水の濁らざる咒法なり。鏡を入るれば。泥水よく淸む物なり。塗盃にても宜し。但し盃には石を付て入れべし。
○問云七部舞に用ふる樂器の外に。何ぞ樂器は無か。
又外に舞とては無きか。
寅吉云十二絃の琴あり、狀は人間の琴に然しも異なる事なきが。絃は眞鍮にて。絃の下ごとに圖の如く小穴あきたり。彈ずる法は知らず。また簫もあり。然れど委くは見知らず。此方のと違ふ樣に覺えたり。また打鳴しとて口にて圖のごとく作り。手巾かけの

如き物にかけ置て　圖の如き物を持て。打鳴す物あり。但し右三品は獨樂の器なり　舞はショタンの舞と云あり。刀と盃とを持て舞ふなり。但し舞の手も我は知らず。唱歌も有れど　それも覺えず。此舞の時に。大鼓をうつ。其は入鹿の皮にて張る。形は三

十二絃の圖

味線の胴の如くにて。中にしきりあり。其しきりの兩間に。小豆を入るゝ故に　打ときに中なる小豆。ばら／＼と響く音して　此方の大鼓よりは。鳴音善からぬ物なり。(うつには、左手に隅の所を持ち、右手に打棒を持てうつなり、)また拍子木とも云べき木をうつ。其は何にしても。堅き木をもて圖の如く作り。堅木の臺の上にて鳴す。中高なる故に。左右をうちつけて。舞の足拍子とも爲し。大鼓にも合するなり。

絃は眞鍮針金にて太細なく十二絃あり。

琴柱糸道に眞鍮を付る
常の琴の如く刳ぬきにて下に息ぬけなし
木は桐にても　長さは常の琴くらゐ巾知らず厚さも常の琴位なり。譜もせうがも知らず。

打ならしの圖

○或人寅吉と共に食事する時に。彼境の常の菜の物はいかゞ樣の物を喰ふぞと問しかば。

寅吉笑て云左樣の問には。毎度こまる事なり。自由自在なる故に。何にても喰はむと思ふ物　すなはち前に來るなり。然れば。此世の食物に異なる事なし。

○其人猶こりずまに。然にても何ぞ　此世にて常に食なれざる物を　食ふ事も有るべしと云へば。

寅吉云松の新芽の。いまだ葉のほけざるを取て。皮を去り。さつと湯でゝ鹽漬に爲て食ふ。うまき物なり。また杉の若芽を鹽漬にして。よくなれて。鹽を洗ひ出し。常の菜に食ふなり。此二品は口中の藥になるなり。また松の若葉も。鹽を松葉と同じ目方入

れて。漬たるは食へる物なり。凡て何にても。鹽と等分に漬物に爲れば、食ふて活て居らるゝ物とぞ。笹の葉さへに食るゝなり。また松木につく苔を。よく／＼洗ひて。餅に爲て食ふ。餅米を蒸し搗交へては殊によろし。また黏土を幾度も水干して　砂を去り團子に作り。炙りて食へば。隨分に食るゝ物なり。此等はすべて養生の食物なり。よくかやうの物を食ふ事を知れば。饑饉など有ても。困らぬ事なり。と師の言なり。

○また或人煎茶を飲ながら　彼方にも茶は有りやと問へば。

寅吉云此方に用ふる茶は用ひず。たらの木の芽をさつと蒸し揉て陰干に爲て。茶の如く煎じ飲ことあり。また茶菓子に。燒鳥。赤小豆いりを食ふ事あり。（頭書云○麥の皮を煎じて出しに遣ふに鰹節より甘し○茄子の木の皮シキミの皮を味噌漬にして食ふ○れいし。靈芝の事机に活て見る稻穗を活て見る。）

○また或人餅を食つゝ。彼方にも餅を食ふかと問しかば。

寅吉云餅をも搗て食ふなり。夫につき。世にかき餅と云ふは。直の餅をかき切たる物なるが。彼方にて。かき餅と云ふは。生なる澁柿の種を去り。餅に搗交へて干たる物にて。炙り食へば。甚だうまき物なり。但し搗たる當日は。燒餅に爲ざる物なりとぞ。摠じて餅に限らず。一度煮たる物。燒たる物は。成たけ火に掛けざるがよしとぞ。但し味噌。また醬油も。一度火にかけて作れる物なれども。此は煮て食ふはずの物ゆゑに。再火に掛るも。苦からずとの事なり。

○予膳に向ふごとに禮をなし。箸をいたゞき。飯椀を取て頂に捧げ。目を閉て暫く唱詞するを見て尊くも我師の所行に似たる態を。爲たまふ物かな。何を念じ給ふぞ。と問ふ故に。世に在る物は。悉く神の恩頼によりて成ずといふ物なきが中に。五穀は伊勢外宮に鎭り坐す。豐宇氣毘賣神と申す神の御體より成たるを。内宮に鎭り坐ます。天照大御神の。此は愛しき青人草の。食て活べき物ぞと宣ひて。殖生し給へるより始まり。其餘の食物と云へども。外宮の神の。神德に因ざるは無き故に。膳に向ひては。先大神たちに其謝禮を白し。箸をいたゞく事は何によらず。一事の用を爲す物は悉

靈くあり。麁畧にせず。少か其德を謝せむと爲て戴く。此は箸に限らず。机に向ひ退く時も。凡て文具に禮をなすも此意なり。偖また椀を取て暫く念ずる事は。日々に天地間にあらゆる鬼神に。我が身分に應ずる計の。供物はすれど猶あかずまに。常に食ふ物ごとに。其初穗をば。天地間にあらゆる鬼神に手向けて。我は其餘を食ふ寸志を表する迄なり。但しこの鬼神に手向ること。僧にはまゝあれど。世人の爲ざる事なるが。我は思ふ旨ありて。如此するなれど。弟子と云へども。然せよとは敎へず。とねもころに。云ひ聞かせ。此の我が所行の。汝が師の所行に似たりと云ふは。不測の事なり。具に其狀を語り聞かせよと云へば。
寅吉云師も世間の人の如く。食事は三度せらるゝが。其度ごとに。拍手をうちて。笏を常の如く採り。膳に向ひ。愼みて禮をなし。神恩の辱きよしを述べ。笏に納たる箸を笏ながら戴き。飯汁何によらず。膳につける物の限を。笏をもて左手の掌に受る狀をなし。笏を下に置て。其物を兩手に受たる狀に。頂に捧て。天地間のあらゆる鬼神に手向け。畢りて後に食す。一椀ごとに然せらる。偖三度の食。共に中ごろに止め。暫くありて。再食せらる。其時は手向る事なく。只戴くのみなり。然れば食は三度すれど。六度するが如し。さて膳に向ひての禮式を。我々に行へと敎へらるれど。誰も其如くせず。只戴て給るなれど。師はいつも禮式を異にせらるゝ事なし。

○問云笏に箸を納れて在と云こと心得がたし。其は笏の形に似たる。箸の筥には非ざるか。
寅吉云箸の筥には非ず。形は神拜に用ふる笏に異なることなくて大きなり。下に口ありて圖の如し。中に飯をもる抄子と。箸と納れてあり。

○問云抄子の形はいかに。箸は竹なるか。また膳椀の狀は。此方のと異なきか。
寅吉云抄子は圖の如し。(圖缺)箸は竹を用ひず。松木にて作る　世間のに異なし。松木の箸は　齒の藥となる由也　但し神供にそふる箸は。ノデンと云木を太く削りて奉る。此は甚だ剛き木なれば也。凡ての木は重き物を掛れば。下に曲るを。此木は上へ曲る物なりとぞ。膳は白木の盆の如く。椀の形は此方のと異なく。漆に水銀を入れて　白く透徹るやうに

塗てあり。
○問云師の食事せらるゝ時に。汝等給仕をいたすか。
寅吉云誰も給仕する事なく。師みづから禮を嚴にして。飯も何も盛て食せらるゝなり。

閏正月廿七日來問

○問云九頭龍權現は。繪に畵て龍の形容に似寄候や。又蛇の青だいしやうなどの樣の形容に似より候や且又大きさいか程に見え候や。
寅吉云此は師と共に穴に入りて見たるに。全く畵にかきたる龍の形にては無く。まづ青大將の如く見え。一尺餘りばかりの大さにて。半はとぐろを卷き。大なる頭の耳あるが一つ外に六七計り。小なる頭の有る物にて。何やらむ。ぱりぱりと嚙居つゝ。折々あさぎ色なる息を吐き候が。生臭く穴の中曇りて。しかとは見えず候へども。大かたかやうに見受申候。師は恐るゝ事勿れと申されたれども恐ろしく覺えて。疾ぎ穴を出たり。其節穴にて何やらむ。足に掛り候ものあり。何ならむと取て見たるに。佛經なり。是は不思議と思ひ。よくよく見るに。佛經の切れ夥しくありき。今思へば。あさぎの息は。毒氣を吐たると思ふに。其毒に當らざる事は。全く師の威德によりたる事と思はるゝなり。
○火災除の札守出候や。但天災なれば是非もなしといふ事認めあり。此事猶又承り度候
寅吉云此は凡て。火災に神明の罰と。天狗などの所爲と。二樣あるよし。神明の罰を天災と申候。天狗などの所爲は。神明の守にて除き候事なれども。神明の罰は遁がたく候。是を天災は是非もなしと云ふなり。又天狗などの所爲を。同じ天狗の方の守にて除く事もあり。偖また神の罰なる火災も。天狗に命ぜられて。發するよしなり。
○問云立山は佛法の山なる故。天狗住ずとあり。叡山は傳敎大師開山なれど。横川には昔より。天狗所と世俗に申傳へあり。此儀いかゞ。又立山に鬼の居るよし認めあり。右鬼はいか樣なる形の物にや。
寅吉云「我が師などは。佛法を嫌はるゝなり。」世間にては。押込て天狗と申す故。暫く天狗と申せども。實には淺間山に。神代より今に居らるゝ。神人にて候」。天狗に佛法を惡ふと。好むと二樣あり。佛法を

好む天狗は。何所の山にも居る事なり。佛法を惡ふ天狗は。一向佛法ばかりの山をば嫌ふよしなり。然れども。是は師に聞たる事にはあらず。同僚左司馬に聞たる故。しかとしたる事にはあらざるなり。偖鬼といふ物の形。種々にて一様ならず。牛頭馬頭の形なるも。天狗の形なるもあり。立山に住むと云ふ鬼は知らざれども。山々また空中にても。見たる事度々あり。

○問云赤坂邊の酒屋にて。半切桶を鞍馬山の。大餅搗に借られたる由を聞たり。此事虛實いかゞ。

寅吉云其は山々の神仙界。天狗界ともに。餅つく事も。酒を造る事も。現世の如くする事なれば。此事一向に虛事とは云ひ難く。人間の諸道具をかり遣ふといふ事も。時々彼界にて有る事なり。

四月十九日物語

製藥の法は。三十味ばかり有り。是にて足るとぞ。

胡羅服の作方は。まづネンヂンの種を瘦地の水氣少き所に植れば。いぢけて小さく生る。根も小さし。然れど小さき形に實はなる。其を取て。翌年に蕃椒の粉を。干鰯(ほしか)の粉に合せて。種にまぶし、深さ七寸計りの筥に。砂を幾度も洗ひて。土氣を去り。さらずと合せて。筥に入れて。其に右の種を植て。日向に出せば。漸々にして生る。其時日かげに置てそだつ太り過れば。根に蕃椒の粉をふりかけて。水氣をへらす。然すれば莖葉も根も瘦て育つ。心の立つ時は。つめざるなり。此ねんじんは。大人參よりも功勝れたり。

○三ッ葉芹の根を用ふ作方。右の如く植て日にあてゝ育つるなり。しつの藥に。此粉と硫黃と煮て付用ふるなり。(小豆の粉)

烏瓜の作り方右に同じ

目藥やけど林病せうかち

○きちがひ茄子の作り方　右に同じ。根を用ふとぞ。

柿汁に漬て用ふ。又粉にして用ふ。金瘡腫物また刄針の先に付れば。痛まず。

○大黃の作り方右に同じ

何にも用ふ

○馬嚢石と。れいしの實と皮と粉にして。(馬ふむ石計りも)ひまし油にてねり。土に久しくいけて。瘡の藥に付用ふ妙藥なり。

○鯉鮒を清水に養て。よく泥を吐かせ。びいどろの器に入れて。よく口をして。廻りに紙を張り。しつくひにて塗り。土中に埋めて十年ばかり置て。取出し眞綿に包み。日蔭に干て粉になし。血道の藥りとなる。目藥にも用ふ末にして付る。

○鮑の背に付たる（図）如斯き形の貝の身をすりて。眼病に妙なり。

○蜥蜴を干て朝鮮朝顔に交へ。粉にして飯にてねり。腐り藥に用ふ。又蜥蜴を少しばかり。吐藥に用ふことあり。此は毒を呑み。又食滯したる時なり。

○松脂を筒に入れても。只にても土に埋める○これは腫物の藥に粉にして付る。

○脈を診する事なしといふ。

○痣たむしの藥は。朝鮮朝顔の末を糠の油にて。とき付れば忽に愈る。

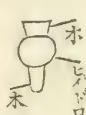
○師說に。人は凡て吾より古をなす心に成りて。細工なり何なりとも考へて。作り出すべし。何某はかゝる事を得たり。其は彼人ぎりの事なりと思ふは宜しからず。我も工夫して其通りを爲むとすれば。出來ぬ事なし。

○忍術法は赤裸なる。女人の像の髮をかぶり。股をひらきて。陰門を出し。中腰にて口骨の所に手をあてゝ。立たる像を椿木にて刻み。此を本尊として。其の祭方は。右像を糞壺に逆さまに數日つけて取出し。骸骨に女の月水を入れて。其を手にて頻にぬりて。うんたらたさふらんと唱へて祈る。忍術のみならず。種々の邪術出來ると云ふ。

○蛇の腹を桑枝にて。さか樣に撫れば足を出す。

○風鳥は足なくては。尾をまきて。とまる胸にて土にすり居て。蟲を拾ひ食ふものなり。

○杉葉ぞめは綠礬にてかへす。

○感通臺と云もの有り。此は碁盤の如く。堅木にて筒を作り。足は碁盤の足の如く。四つにてびいどろの所に水油を入れたり。さて筒の中に。小さき琴あり。筒の一方に肱鐵ありて。右手にて其を廻せば。中なる琴鳴る琴の製法ならし方は云々。

ホ　ビイドロ　木

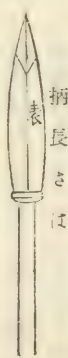
感通臺の圖（圖缺）

さて松杉柏楠欅槻（つき）の木などの類の。老木の我が彼臺に上りて座したる丈の所より。鐵の鎖を引て左手に

持ち。右手にて彼ねぢを廻しつゝ。目をとぢて考ふべき筋を考へ。祈るべき筋を祈り念じて居る。著(き)ものなど筥より下に付ては悪し。又ねぢを人に廻させては悪し。師の此事をせられし時。吾其ねぢを廻すべきかと云しかば。人が廻しては益なしと云れたり。世の諺に逆様になりて考へても。知れぬなど云こと有り。此は昔ありし事にて。神世に難儀を考ふるには。左手のみを地につきて。逆様に成りて考へたる事ありしが　其は容易に成がたき業ゆゑに　其理を以て作れる器なりと。師説なり　また師言に　凡て世の諺に云ふ事は　多くもと有し事なり。然れば其諺より思ひおこして。古のわざを考ふれば。遂には知らるゝ物なりと云はれき。

○玉の作り方は　まづ寒水石の。透とほる計りよき所を撰びて　極々細末となしたるを　なほ細にふらぶには。ふるひにては猶粗し。故にもみ革の袋に納れ。其袋をまたなめし革の袋に入れて。叩く時は。細末の粉。もみ革の袋をとほりて　なめし革の袋に溜る。これ極末也　此末に朱。紺青。緑青。何によらず。色々の岩繪具の　革袋に入れてふるひ出したる極末を。色よきほどに交へて。麩糊にてねり思ふまに〳〵。形を作りて。丸玉などは。轆轤の先へ松脂を付て。形を丸く直し。磨く仕方は木に玉ほどの穴を掘りてさしこみ。たわしの様なる物に。何か白き粉を付て磨くなり。（るり色には、袂くその如きものを入れる。）

○麩糊の製は。生麩に胡麻油を二三度引て。日に干したつれば　もちの如くなる。これにてぬるなり。

○薙刀は大抵此方の形なるが。長さは。柄は細く。鍔はちやん〳〵と鳴る如く付る。柄の尻は。子供のおしやぶりと云物の如き。玉を付て。其玉を右手の掌にあてゝ。廻る様に仕掛たり。手法四十八手あり。切どめと云ふ法を手練すれば。自由に遣へる物なり。其法は云々。

○佐備劒の法（また三備劒ともいふ）其形は此の如くにて少か反(そり)あり。裡に透取りて。へこみあり。此は突通して切る物にて。此をまた矛とも云なり。其遣ひ方は云々。（缺）

表

柄長さは

○鎧甲製方

○國開の祭は。神壇を四段に搆へ。例の如く左右に竹を立て。しめを引き。根こぢの榊に。ゆふを付たるを。眞中に立て。師は例の裝束にて。供物を調へ第一段に幣三本。第二段に五本。第三段に三本。圖の如く大小に作りて立る。これ神のより給ふ御靈代なり。

一　二　三　四　五　六　七　八　九　十　十一

さて神おろしすみて。第四段に供物をそなへ。畢りて祈願をなし。傍に退き管座に坐せば。圖の如く白と赤との。雞の裝束したる。兩人出て神前に一揖し　左右に分りて。羽ばたき鷄聲をなし。鷄の魘相をなす。やゝしばし魘相たる程に。圖の如く裝束したる。（眉白く鼻高く、髮をたれ、太刀をはき、矛をもち、はちまきあり、紘袴、赤衣、履をはく、）魘相ふ中に入れば。左右に分る。其時しばらく矛をまはし舞て傍に立居れば。次々に神樂舞十二三番あり。神樂畢りて。後に猿田彥入り。次に鷄人時を造る聲を爲して入る。これ畢りなり。

○天神待とて。手跡を能く書むと爲るには。月毎の廿四日に天神に供物御酒をそなへ。夜になりて神前に机を直し。一心に天神手を上げて給へと祈りつゝ手習ふべし。一心通れば感應ありて。束帶白髮の神の。眷屬多く連たるが。机前に現はれ給ひ。兩三字の筆法を敎へらる。夫より拔群の手跡と成ると云ふ。

○書法　鐵筆長筆を用ふ。實に書き惡きものなり。體を板ばさみにしてきめる。○飛白の書法は。刷毛にて四十七字を書て與ふ。これ假字音の字也。我も習ひたれど。たゞ十二字ならでは覺え居らず。

○鐵炮の打かた弓の射かた

○飢饉に地主祭とて。墓を祭るべしとぞ。凡て田畠の作物あしき時　此祭をする物とぞ。地主は墓なりと云ふ。

目の療治（缺）

○草鞋をうら返し逆に履きて行ふ法あり。
○大勢と共に小石宮などに入る事あり
○師説に神世に。モヽと云へるは。梅の事なり。梅より李が分り。李より桃がわかれたり。梅の枝の。これがほしいと思ふ枝を。切り取て魔除になる。一心をこむれば人の首も切れる。
○かやつり草をりもの
○蟇目して神を招奉る法。弓をさかさに引く
○神樂殿は十二軒一町四方に作る
○佛像の白口に赤猫の血を塗る
○身延の奥院は阿彌陀なり。(道雄云口口口口に、身延の阿彌陀は、後ろ向なりと云へり。)
○阿部郡口利介咄し。庵原郡えはらの郷の者なり。(西方村の者なり)
○龍爪山に。龍爪權現といふ神あり。此は元祿以前は小社にて有けるが元祿年中に。大に荒びて御林なる故に。大社となる神主四人あり　瀧大和　瀧攝津。望月何某。瀧紀伊守といふ。此山奥にてはやしを開く。(笛、大皷、鉦、三味線、鈴、)此山の續き脇に。黑川瀧の山にて。(險山なり)鹿をうち損ふ。治郎八と共なり。此時軍配團扇の紋付たる。大鹿を打損ふ。後に四寸角の柱の。三丈計り上に御幣の在るを見る。是より治郎八獵をやめたりとぞ。(治郎八は五十餘の男なり)○頭書云三月十七日に鐵炮祭といふあり五百挺も集る虚空を見て放す。
○此山より七八里奥に。千丈が嶽に宿りて。二車程の大屎を見る。篶竹を立たり。足あと二尺餘り有り。源右衛門といふ者と共に見る。臭み草木の蒸したる匂ひなり。
○千丈が嶽の脇にて。天狗の。林の梢にて。五六人喧嘩したるを聞けり。毛を拾へり。白赤く太く柔かなり。夥しく落てありけり。木の枝わり〳〵落たり。
○龍爪山にて。木くもりて。日見えず。託して歸る後に源右衛門といふ者。其所へ行て　曇りへ鐵炮を打かけ。先をちぎり採られたり。
○同所の杉門前にて一丈餘りの人に逢ふ
○江尻の町近き小柴の森と云ふ所の。木の上に立て。手火を燈したる人を見る。身の丈七尺計りあり。

顔は見ず。手火の長さ八尺ばかりあり。逆手に持たり。

○駿府材木町の伊三郎と云ふ者　阿部川にて鮎を釣りたるを、總髪の人に十六疋貸す。然るに其人、其夜の内に　荒川の鮎を持來て歸す。一時の間あり、

○三枚がたうちと云ふは。肩骨を左右どちらにても、一二三四土佐にてせりわきと云ふ　此は肩を打つ事なり。何にても獸此所を打れては死す。

○山犬と狼との別　山犬は水かきなし、狼は水かきあり強し）

○鷄の時に。蛇付て玉子を取るに。樒を玉子と共に呑すれば　死するなり

○雉に鼬つきて、玉子を取るに、瓢を釣り置けば來らず。

小兒に千なり瓢をさげさすれば　怪我せず。口穴を明けてはきかず。

○昆布を人形に切り　名を書て井に入るれば　人影出る。

○昆布を人形に切て、名年を書き、針を指て座に敷けば、背を病むなり

○墓蛭數の子

○瘧に常山。檳榔。烏梅を入れ、夜露にあてゝ。

疫神を隣へ投る

○鳥の手足と成る。

○猫の祟り

○鼹鼠の生血疱瘡の山をあげる

○葡萄は水を見ればよくそだち。實も多くなる。藤柳なども水を見ればそだつ物なり。

○藤の芽また實を食ひて　水を飲み水を見れば吐く

○松の苔を餅に爲たるに　米粉を少し入れる

○杉葉ぞめは　杉葉を煎じつめて染め明礬にてかへす

○ほろの事

○阿部郡下村の山に、福成大明神あり、此所にて時時樂を聞く。又こゝにて大鼓を拾へる者あり、三輪郷なり

○粥占は庵原郡三穗社に、正月十五日に有り。益津郡なべの社にも　正月十三日にあり。當時當目の虛空藏といふ

阿部郡荇翁山に岩屋あり　頭書云熱閑日抄に天狗の事あり

○深山に入りて山神に山を借る事如此柱を
四角に立て布を張る　又しめにても
○天眞院殿は紀州御さとなり。やんちやん
女これに勤むとぞ
山人の褌のこと
○相模の大山不動前の　上總屋と云が女房　今より
二十年計り　以前に　水中に五七年住て歸れり物
語り長し
○近江國日野さらしや久二郎
○費長房がこと神仙通鑑また增補夷堅志廿七卷に見
ゆ
○なわを遣ふこと
○信濃國水内郡南山中聖山聖新田と號す。古代より
聖權現の宮あり
○松平甲斐守殿家來の女六歲の時より行十四歲にて
歸る松岡淸助親類を變を生し　○本をれ○淸助門
人何某へ片付く後に祈禱きかず○上總にも女にて
連られたるあり
○細川長門守殿內岸小平治七十三元は在所詰なり夫
婦とも長樂寺知人なり

○大聖寺の國者に金玉の事いへる
○御花御用の隱居長者町一町目岸本へ行たるわけ。
○上野町看板かき
○井口の小僧ことし二十歲か神かくしになる寅と兄
弟分
○二ふしの竹に含める聲の色八千々を傳ふ山人の笛
目やしろ
○木の葉笹の葉を鹽に漬て織る榎の葉がいつち宜し
カヤツリ草の織物縫かた鼻緒の如し。
○矢花のとらと云ふもの狸を退治す深屋のわきなり
○兩神主大隅河內是は追分の諏訪の神主なり
○タツカケ八幡神主堀籠權正
○實性寺眞言タツカケ別當
○小室の岩屋より千尺瀧(せんがたき)の岩屋へ異人
○治郎吉あとつぎ佐久郡今井より出ばり治介といふ
○筑波郡猪打村名主に時をうつかめあり
時の藥物　鐵棒一本　かなとこ一丁
こんぶ　鐵槌一丁　やすり
あさ　石臺一つ　こうばし
もみ切二尺計、燒小手一丁　ほうせう

はさみ一　　にしの內　　たちほう丁一

たがね（ぬく料）

○鹿島食物を運ぶ　稻をこきて持來る、毛色金色に自し

○鹿が川うその如く魚をとる

○雉の腸を鹽に漬て　びいどろ玉に入れて、鏡をいくつも建て筥に入れ光らす。穴一つあり。

○月夜木は十町ほども見ゆる物なり　（図）カントウ

○神國の人を見知らぬ犬ならば　この日本に居るはずはなし　これは犬除なり。

○馬頭の骸骨の目に豆をうゑ　其豆をとりて燒けば。人々馬の貌に見ゆる。

○はく蟲にて骸骨をかき、たロ（頭書云たわらたにしたはし）を三つ付て　闇き隅に置けば、髑髏見ゆる。

○思ふ事を夢に見せる法は。著物を逆に引返し著て。蓑に狼の屎と。い口〻くの葉と。ふまゑびの葉と合せて。字を書く念じて寢るなり

○寒中の蚯蚓を干て。燈火にともせば。人の頭長く見ゆる。

○產の穢血を小撚によりて紙燭として。馬の草鞋を紙に包み。骸骨に見ゆる。

○聲無て人を召び出す法は。墓の背を割て墨を入れ。四辻に埋置て。日を經て取出し。其墨にて呼出さむと思ふ人の名を書て張り置けば　うか〳〵と出るなり。

○風神幣切やう傳

東方に向ひ氣を吞み。折かたの時は。別して息つかずに。風神の御名を唱へ。折畢て其息を吹かくべし　尤も人の見ざる樣にすべし　火神は御形に火の形あり

此位の所カを入れて切るべし

金神

水神御形細く末大きく

土神ます〳〵細く末ます〳〵大きなり

旱には五柱ノ神。竝に龍神雷神を祈り

水を備へ。其水をまき祈るべし。

右辰年十二月二十七日傳受

○雨乞の歌

天の川苗代水にせき下せ。世に水分の神ならば神

古の人も人なり我も人。我が祈る雨も降らせ給ひね

天津神國津御神のもれ落ちず。聞し給はね雨の祈りを

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り。雨も降れか心たらひに

天津水仰ぎてぞ待つ神の道。世人に知れと祈る心に

神の道思ふ心のやるせなく　しひてぞ祈る雨を賜はね

天津水あふぎて祈る玉くしげ。二つなく神を仰く心に

平田大角　篤胤花押

越谷降臨の記

三月二十二日寅吉事。暮六時ころより。奥の間の床の前にふし候て。何か少しづゝ。もの申すゆゑに。何事かと問へば　先日より癇疾の様子にて困り候と申す。今日は七ッ半時ころ。甘茶を給たしとて煎じさせ。澤山に飲みたれば。それゆゑ心もち惡く成り候にやと心得て。いつもの通り。菰しき寅吉々々と起して菰の上へつれ行て。少し休ませ置候へば。又何か申ゆゑ折瀨。おかね。善次郎共に心身を清め。そばへ行き伺居候に。暫の間は口の内にて。ひくゝ物申して分り兼たるが。段々に聲高くなり。夫よりおゆう篤村も身を清め。側へ參り居候所　これほどに神の道を弘めやうと思ふて。其爲に行をなし。其行に疲れたる所へ付込み。惱ませると云は。ふとゞきなやつと仰られ。大きに御立腹の御様子にて。たとへ大勢にて引込み候とも。中々引込ませぬ。ふとゞきな。やつと押返し／＼。御叱遊ばされ。神の道を弘めずに置べきや。久伊豆様もこゝに御出なさると。いく度も仰られ（久伊豆様と申すは、越谷宿の產土神におはしまし候）益々御立腹ゆゑ。皆々心付き。是は寅吉をなやませる枉神の來り候ゆゑと思ひ。折瀨申やう恐れ多く候へども。御伺申たき事御座候と申候へば。誰なるやと御尋ね遊ばさる。平田大角の

妻に御座候。先ほどより殊の外御立腹遊ばされ候は。如何の御事に御座候やと申候へば、枉神の來れること。一人二人ならば。いづれとも成れども。百人ほども是へ參りて。寅吉を惱ませる。既に大角にも。久しきあとに疫病をやませたる。不屈なやつと仰られ候。然れば寅吉の苦をのかせますに汝、如何いたし候が宜敷と伺ひ候へば　夫は此方よきやうに致すから。かまはぬがよいと仰せあり　又伺ひ候には。あなた様は寅吉の先生様に入らせ候やと申し上候へば　あい／＼と御答遊ばしたるに。皆恐れ入り頭上り候者一人も無く　難有奉存候て。信心いたし居り候へば。久伊豆様はもはや御歸りなされましと仰られ。夫より久伊豆様は御歸りの御様子と存じ皆々畏まり居り、又少し過ぎてさあ枉神ども歸れ／＼と仰られ候へば　皆歸り候樣子。跡に枉神ひとり殘り候にや。われはふとゞきなやつ。其分に指置がたく。此方の法通りに行ふべしと。御意遊ばされ。枉神立むと爲るに。まて／＼と三聲御かけ遊ばされ。誠にふとゝきなやつぞ。明日八時迄に淺間山へ出べし　法通りに行ふと仰られ　御聲高く甚御立腹の御樣子、畏き事に候へども。御姿を拜し候心ちにて。皆ぞつと致し身の毛堅ち。有がたく恐ろしく。覺え候。少しすぎ折瀬御願ひ申たき事御座候と申す、何なりと仰らる。是に居り候母久しく病氣にて困り申候。いつごろ治り候や。御伺申上たくと申候へば。暫くまてと仰られ一寸いつてこいと。御使を御出し遊ばされ。少し過て使の者歸り候樣子にて、此病氣むづかしく。秋にもなつたならば、よからうが長いと仰られ候　大角事大恩を受け候者ゆゑ　少しも早く全快御願申上ると申候へば、隨分よくして遣はすと仰られ。大角も神の道を弘めたく思ひ居るところ　とかく枉神大勢じやまを致す。二三日あんばいがわるく。臥る程でもないが。ずいぶん側よりも氣を付るがよいと仰られ、誠に難有御詞に奉恐入候。寅吉は此節何事もないかと仰られたるに。先日より痳病にて困り申候。子供ゆゑ今日に成りて甘茶がよいと申すまゝ。早速煎じ飲せ候と申す。それには一日に麥六合程たべさせるがよい。併し寅吉は麥が嫌ひだが。むりに給させるがよい。麥は七合にてもよい　先頭より寅吉氣をふさぎ居るは、まが神のわざと仰られ。隨分氣を

付べし。もう外に用事はなきやと仰らる。長右衛門養子の事。如何いたし候はんと伺ひ候へば。北の方よりの相談は宜敷ない。一二年待べし。何れ東の方より他人が宜いと仰られ。寅吉給もの書付べし。麥粟稗青物川肴葛砂糖よろしい。寅吉が行もしてもしないでも宜いが。少しの訣にてさせるから。病氣の内は蒲團を敷ても宜い。さらば立ませうと仰られて。又御立跡り遊ばされ。夫に居るらいさいは何と云と御尋ね。是は善次郎と申ますと申す。殊により煩ひ候間。めし一日に一抔ひかへ。夫だけかゝる物を遣すが宜しい。奉公は冬に成て遣すがよい。其内は親類へ遣したり。何かして 置くがよい。本屋は如何に候はむと申候へば。随分さいさき宜き所へ遣すべし。もうそれで何もよいかと仰られ候へども。指あたり心付もなく。皆々恐れ入り御伺も致さず候所。もう立ます。又いつもの通り。寅吉に酒を吹飲ませよと仰られ。神樣は御歸り遊ばされ候。さて／＼難有御事。御跡にてはあれの。これのと思ひ出し。誠に御殘り多く奉存候御事に御座候

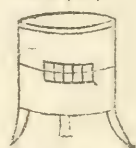
○慶長中大樹公御狩の時。鶴羽に在し文字とて。怪我除。由にて 梓拾梓招。（頭書云一に梓指梓捞但守札の板形を寫す、）かくの如き四字を記して守とす。寅吉云此仙人の常に謠ふ。符字の如き物の中に有る文字なり。

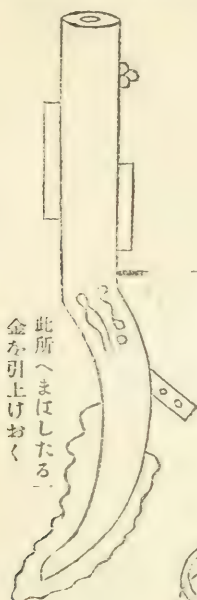
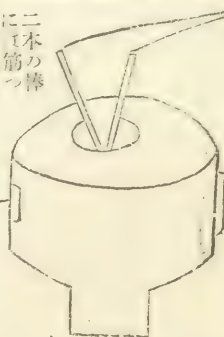
寅吉云仙骨の人の常にうたふ符字の如き物の中に有しを見たり。ジャク。コウ。ジャウ。カウと云樣に聞たれど。能は知らず。

筑波山は日に三度。夜に三度けしき變る。男體山に雲少しかゝれば雨降る。毎年五月一月（日カ）は薄暈たえず。

同山は天地開闢の山といふ。男體は伊邪那伎命。女體は伊邪那美命を祭る。男體山に日の外宮といふあり。人々常に神を信ずる者は。死して此所に生る。後又人にも生る。女體山に夫婦木と云ふ杉三本あり、此木の有ところ六所といふに近し。石地藏あり。

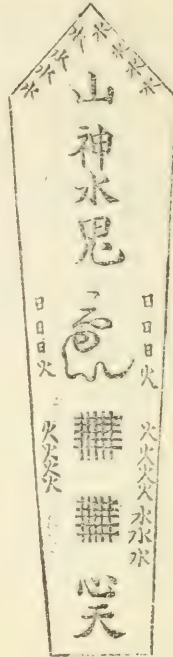
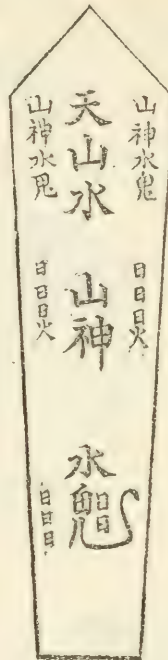
鹿島の神庫に。甕槌神の鬼頭を射貫し跡とて。其鬼頭に矢の通りしといふ。黑き春慶の如く塗し 口口（ほかい）の如き物の中に入たるあり。其蓋の所少しひゞわれ

し所より口口（すかし）見るに矢見ゆ

壽命を斬るに、宵の明星いはさくの神と拜す、あけの明星ねさくの神とも共に拜す、常に師の帶せる劍の身上に出し劍の圖なり

彼界にて打鐵炮は。火縄硝用る事なし。風をこめて。打て音もせぬなり其圖

唐金やうの物にて造り同金の棒二本にて上穴より入廻せば湯となるなり

ばんくつと云是をはきて行を爲す鐵にて作る鼻緒は常の人間の物の如なり。

右羽扇。劍。ばんくつ。しよたんの四種。實には我

面
背
雄
雌
山神水鬼
天山水
山神
心天

拝謁せる神仙の持たまへる物なるを。我は現に云がたき故ありて云ざりしなり。記者の誤なり。

天狗の障碍を爲すに。避る爲に燒く薫方あり。薫陸。白旦。樒葉三味殊に忌嫌ふなり。右の木劒二振を常に所持すれば。災難等なし。又狐付等は立所に落つ。

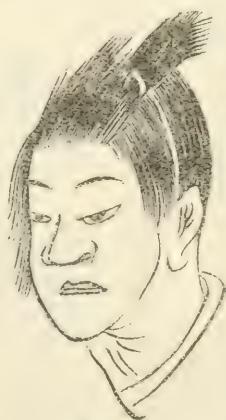
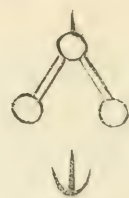
此は岩間山の使者等の、人間に出て加持行に驗ある故に。思付て神仙の花押を書加へたる物なり。

寅吉の書し符字自心用ひて刻しめたる

下は寅吉の書判平馬の二字を合たるなり

右の札は。鹿島神庫に有所の板木を。師の借り來て。岩間山にて摺れるなり。百枚ばかりも下山の時。持下りしに。殘少くなり

此形二つあり一枚は矢の模無し

し故に、鏤刻せむ事を思ふと云へば、本を與しかば、
自彫刻せり。此札の名は矢大臣とぞ云へる。
今思へば鹿島の事ふれの配札なるを。岩間の使
者の中に、本事ふれなりし者の化れるが有りて
其板木を、神庫のを借來れる由いへる故に。實
と思ひしなり。實は我が過ちなり
文政三年庚辰の冬かみな月九日　山崎美成

右平兒代答本文竝頭書共令清書畢
文政六癸未年三月　平篤胤花押

御守

鬼　鬼

山神水鬼

此は寅吉の書なれど何か知れず

此も同人の書なれど知れず

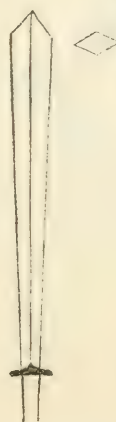
劍の圖

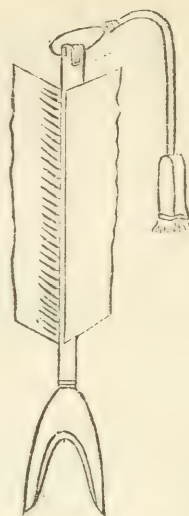
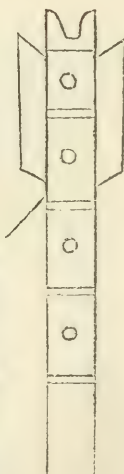
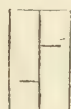
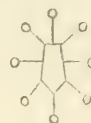
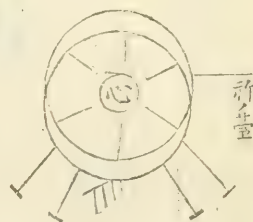
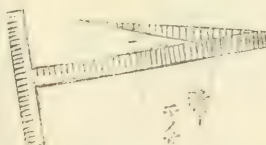
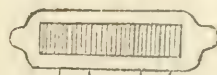
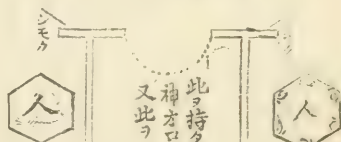
此幣をもて祈るときは邪正ともに成就せずと云こと
なしといふ

カミラ二府を挾む

表也

ハサミ串

上

鐵弓の圖（半弓なりとぞ弦は常の如し）

けづりかけ　なよけ
木は何ぞ
此矢三本何の用か知れず
大弓なり　ぐんと鳴りて飛ぶ　三羽
常の矢くらいの長さ
此くらい三羽付の小矢あり
二羽
四寸ばかり
餘り重くすべからず
管に針を入て目つぶしに用ふ管は先に針
は後に出る物なり半弓なり
右の外矢の圖數種あり別に記す
八握剣
へんどかん　かんどかん　はやちらけん
いきみ玉　くわへん玉　くわつ玉

○祈りを爲る神前に立たる刀。おのれと抜けて魔を切り人を切るには。まづ人の命と書て。生ながら土に埋め　其の頭に上れる時　刀を頭に指立てゝ土をかけ。よく祭りて後に掘出して。刀をとり用ふ

○識神を使ふほど。よき事はなし。

○學文にても何にても。其事にくるしめる人の魂を祭りて。驗大にあり、靈代には其人の死たる時の狀を。違へず作りて祭る、又墓所の土を取ても祭るべし

仙境異聞下之一卷

平田篤胤筆記考按

高山嘉津間（元の名は寅吉と云）始め山崎美成が方に在けるが、後には己が家に來て、長く逗留する事と成りぬ、其は別に記せる物あれば、此に略して。今はたゞ。問に答たる事のみを記し出むとす。

扨其山人に誘はれたる趣を尋ねしかば、

寅吉云く、文化九年の七歲なりけるとき　風と卜筮の事を學びたく思ひて、同所第（茅カ）町なる境稻荷の前に住せる。貞意といひし卜筮者は。其頭よく卜ひ當て流行ける故に。是につきて學ばむ事を請しかば。幼き者と思ひて戲言したるが。七日手燈をともす行を勤めて。後に來らば敎へんといふ故に。其夜より手燈の行をおこなひ始め。七日にみちて行たりしに。笑ひて敎へざりしかば、殘多く思ひて日を送りけるが（この卜者は後に上方邊へ行たりとぞ）或日東叡山の前なる。五條天神の邊に遊びて在けるに、五十歲ばかりなる翁の。藥を賣るが在りて、徑三四寸も有らむと思ふ壺より。藥をとり出て賣けるが。暮時

になりて。取竝たる物とも。小つゞら敷物まで。悉くかの壺に入るゝに。何の事もなく入たり 斯て自もその中に入らむとす。いかで此中に入らるべきと見居たるに。片足を踏入たると見ゆると等しく皆入りて。其壺大空に飛上りて 何所に行しとも知れず甚奇しく思ひしかば。其後また彼處に行きて。夕暮まで見居たるに。前にかはる事なし。其後にもまた行て見るに。彼老人。其方も此壺に入れといふにぞ。いと氣味わるく思ひて。辭ければ。彼翁。かたはらの者の賣る。作菓子など與へて。卜を知たくは此壺に入りて。吾と共に行べしと勸むるに。行て見ばやと思ふ心いで來て。其中に入たる樣に思ふと。日もいまだ暮ざるに。とある山の嶺に至りぬ。其山は。常陸國なる南臺丈といふ山なり。(此山は加婆山と我國山との間に在りて師子が鼻岩といふ石のさし出たる山なり) さて幼かりし時のこと故に。夜になりては 頻に兩親を戀しくなりて。聲を擧て泣しかば。然も有らば家に歸してむ。必この始末を人に語ること無く。日々に五條天神の前に來るべし。我送り迎ひして習はしめむとて。大空を飛て連歸りたり。斯て我は堅く老人の誡を守りて。今日までも父母に。此事を言ざりしなり さて約束の如く。次の日五條天神の前に行けば。彼老人來り居て。我を背負ひて山に至れり。如斯すること日久しかりしが。いつも家をば。廣小路なる井口といふ藥店の男子と共に。遊びに出る風にて出たりき。さて行たる山は。久しく南臺丈なりけるに。いつしか同じ國なる。岩間の山に至りて有けり。爰に我かねて宿願なれば。卜ひを敎へ給はれと云ひしかば。其はいと易き事なれども 易卜は宜からざるわざなれば。まづ餘事を學べとて 祈禱の爲方。また符字の記しかた。咒禁その外幣の切かた。文字の事など敎へらる。又或時かゝる事も有き。其は天狗の面をかぶりて。わい〳〵天王とはやし。赤き紙に天王の二字押たる札をまき散すを。子共大勢つき行くに。我も其中に交りてはやし行たるに 本鄕の兼康(かねやす)の先まで行ぬ。然るに日くれ方に其事を止めて 面を取たるを見れば。彼老人なりき。斯て家に送り返さむとて。家の方へ連來りける。榊原樣の表門の前にて。父が尋ねに出たる事を知りて。向ふより其方の父が尋ね來れり。此事か

ならず云ふなとて。此子を尋ね給ふには非ずや。遠く迷ひたると見し故に。連來れりとて渡せば。父なる者其名を問ふに。何處の誰と。あらぬ名を云ひて別れたり。後に父その所に尋たるに。元より僞なりしかば。其所にさる人は無りしなり。凡てわい／＼天王に札をはりて。錢をとらぬ中に天狗あり。其は日ごとに。彼老人の送り迎ひしたるなれど。兩親はじめ人にはかつて語らず。また我が家は貧乏故に。さしもかまはず。世話なく遊びに出るを善として。尋さりしなり　かく山に往來したること。十一歲の十月までなり。十二十三の歲には其事なく　只をりをり見えて。事を敎ふるのみなりき。さて父與總次郎は。我が十一歲になる八月より。煩ひ付たり。父が病中に彼人來りて。しばらく寺へ行き。經文をも覺え。寺々の有狀をも見よと有し故に。出家せむと父母に願ひしかば　下谷池の端なる正慶寺といふ。禪宗の寺に遣したり。此寺より歸りて後に。同所の覺姓寺といふ。日蓮宗の寺へも遣し。其後また宗源寺といふ。日蓮宗の寺にいたり。此寺にて出家したり。然るに文政二年五月二十五日に。師に伴はれて空中を飛行し。遠きからの國々までも行たるが　また／＼常陸國岩間山に至り　種々の行を行ひ。名も師より。高山白石平馬と負せられ。平馬の二字を書判にして賜はれり。さて去年の秋八月。一度家に歸り。またまた師と同道して。東海道を行きて。江の島鎌倉などを見廻り。伊勢大神宮を拜し。其外國々處々を見廻り。今年三月二十八日に。家に歸りたるなり。

問云。岩間山といふは　常陸國の何郡に在る山ぞ。寅吉云く。筑波山より北方へ四里ばかり傍にて。峯に愛宕宮あり。足尾山　加婆山　吾國山など竝びて。笠間の近所なり。龍神山といふもあり。此山は師の雨を祈らるゝ所なり。岩間山に十三天狗。筑波山に三十六天狗。如婆山に四十八天狗　日光山には數萬の天狗といふなり。岩間山にはもと。十二天狗なりしが。四五十年ばかり以前に　筑波山の麓なる猪打村といふ所の　長樂寺といふ眞言僧ありしが。空に向ひ。常に佛道を思惟して有けるに　或日釋迦如來。迎ひに來りて導きける故に。眞の佛と思ひて。共に行たりしかば。釋迦如來と化り來れるは　岩間山の天狗にて。長樂寺をも其中に加へて。是より十三天

狗となりたりとぞ。我が師は其中にて名を杉山そうせうと云なり。

岩間山のこと。彼方の事知れる人々、彼是に探たるに、細川長門守殿領分にて、岩間村のうち、小名を泉村といふ所にある山にて。十八九町ばかり上る。山上に愛宕宮あり。宮の後の少し高く平なる地に。本宮とて小宮あり。唐銅の六角なる宮にて。上の方は圓しといふ。其宮のまはりに。十三天狗の宮とて、石宮十三あり、此はいと舊くは。十五天狗の宮なりしが。後に十二天狗となりて。宮十二ありしを、彼長樂寺といふは、修驗者にて、常に西に向ひて、大日の眞言を唱へたりしが。元より孝心ある者にて、其母が國々の神社佛刹舊跡など。見廻りたきよし云ふを。いかで其事かなへむとて、殊に十二天狗に祈願し。祈願の叶ふまで、斷食の行を行ひけるに、中間に至り、山下に蹶落されたり。然れどなほこりず、又更に斷食の行を爲果て後も。例の如く西に向ひ、阿字觀して在けるが。或日釋尊迎ひに來給へりとて、空に向ひ莞爾として飛去けるが、後にまた歸り來て、母を背負て、望みの所々を、五六日の内に見廻らしめ。家に歸りて母に云へるは、いたく草臥たり、長寢するとも、覺るまで必見給ふなと云ひて、一間に籠りて、五六日ばかりも覺ざりしかば、母いたく待わびて。そとのぞき見るに。六疊の間をはゞかるばかり。大きくなりて寢居たりし故に。母あつと叫びて逃退ける、其聲に目を覺し、傍の襖を蹶破りて飛出たるが。是より後は歸り來らずといふ。一說には。母を廻國せしめて。後に此事かならず人に語り給ふな、と禁めしかど、母は嬉しきに堪ず。竊に人に物語りしかば。飛出てふたゝび歸り來らずともいふ也。さて長樂寺が家出しける後に。麓の村々を家ごとに誰とは知らず。是まで十二天狗に、膳を十二膳供へたれど、長樂寺も加はりたれば、今よりは十三膳の外に、精進の膳を、一膳まして供へよと。觸廻りける故に。村々にて信仰の者ども、講中といふを立置て。日々に十三の膳を供へ。拜するにも。十二天狗、並に一天狗と唱ふるとぞ。愛宕の別當は眞言宗にて、祭禮は二月二十四日なり。愛宕にも。十三天狗にも。各々膳

を供ふるに　天狗のは殘らず　皆食ひてあるとぞ。祭日の前に。別當の水行。なか〳〵尋常の人の得爲しがたきわざなりといふ。細川家の留守居役なる。岸小平治といふ人は。今年七十三歳なるが。國詰にて若かりし時。天狗になりたる長樂寺とは。懇意に交はりて。其人となりを知れるが。剛强にて正直なる人なりしと。其時の事ども能知得て。今も語り出ると　其親族なる人の物語なり。寅吉が物語と思ひ合すべし

○岩間山の天狗の釋迦と化て。長樂寺を欺き。其徒に引入たるに付て　思ひ合すべき事あり。其は今昔物語に云々。

問云　十三天狗たちの事を　此方にて天狗といひて。腹立まじきや　もし彼方にて。何とか外にいふ稱はなきか

寅吉云。天狗といひても腹立ことなし。其は世の人は。人間界の外なる仙人は云ふに及ばず。惡魔また天狗など。其外種々の怪しき類をば。すべて天狗のわざと云ふ故に。其通りにて在るなり。然れど彼方にては　天狗といはず。山人と云なり。さて十三天狗といふ中に　信の山人なるは。わづかに四人ばかりにて。餘は鷲鳶其外の物の化たるにて。眞に天狗なり　然るに岩間の別當より出す札守に　十三の鼻高く。翼ある天狗をかきたるは。笑ふに堪たる事なり。

問云　其方を伴ひたる老人。やがて杉山そうせうなるか。

寅吉云。近きころ山替して　何處にか行て　今は其所在をだに知らず　ときける樣にも覺えたり　我にも更に合點ゆかず　當昔のことは。今思へば夢の如くにて　そうせうの分身の樣にも思はれ。また別人のやうにてもあり。（寅吉に始めて問へるをりは其伴ひたる老人やがて杉山そうしやうと云へるやうに聞受たりしかど後にまた委く探たるに右の如く答たる故に後に聞つることとなれど此に記す）

問云。杉山そうしやうと云ふは。もと何處のいかなる人なりしぞ。又そうしやうとは。字を何と書くか知らずや。

寅吉云。もと何處のいかなる人と云ことは知らず。是は歷々の山人故に。ワケモチノ命と申すなり。字

は僧正と書て。そうしやうと清て稱ふなり。此後にも度々そうしやうと。清音に稱ふよし懇にいへりき。さて現世にいふ所と。稱の違ふこと。思ひ當れることあり。然るは石原正明。往年物語のついでに。幽界にをる物の名は。現世の人の名と同じ字なるも。何となく稱へ狀の違ふものなりとて。其例をこれかれ語れること有しが。心に止まりて。其後に心を付て考ふるに。近くは安藝の國なる。稲生平太郎といふ人の所に出たる物怪の言に。吾は山本五郎左衛門といふ者なり。サンモトとは山本と書といひ。又その徒に。神野悪五郎といふ者もあるよしいへり。山本神野とは云はず。さむもと。しむの。など稱ふる事は。定めて由あることなるべく思はるゝに付て思へば。僧正を清て稱ふると云事も。思ひ合さるゝなり。

問云。ワケモチノ命と云ふは。何といふことぞ

寅吉云。大天狗になりては。其魂を祭りて。ワケモチノ命とつく事なり。其は在世の時の名を上につけて。たとへば杉山僧正といふ名なれば。杉山僧正ワケモチノ命といひ。長樂寺なれば。長樂寺ワケモチノ命といふなり。何にても名の知れざるは。別持命と名をつけて拜むべし。

予はかく聞受たれど。美成は死して神となりて後に。ワケモチノ命と云ふことに聞受たり。何れか是なる事を知らず。猪ワケモチノ命といふ字をば。いかに書くと云こと。問ひ漏したるが。字は決めて別持と書て。由々を互に別持たる意なるべし。其は神代の傳にも。野神山神。山野によりて持別といひ。速秋津比古。速秋津比賣神。川海によりて持別てなども云へり。此古言の義を思ひ合せて辨ふべし

問云。其魂を祭るとは。如何なる事をすることぞ。

寅吉云歴々の山人となりては。各々自分の魂を幣に留めて。日々に拜し祭るなり。

これまた古意に合へる事なり。其由思ふ旨あれば。此所に記し出ず。古史傳の出るを待て見るべし。

問云。其幣の形はいかに作るぞ。

寅吉云。其幣の切かたは。尋常の幣と何もかはれる事なく。但し中心に玉を掛おく。これ魂の印なりとぞ。

問云。其玉は何玉にて。如何なる形ぞ。
寅吉云　何玉か知らねど　瑠璃色なる玉を。珠數の如く統とほして。數は百十二粒　その外に親玉二箇あり。白き絹の打紐にて、總を下たる物なり
問云。師の龍神山にて。雨を祈ると云こと心得がたし。彼境にては、田畠を作らねば　霖旱ともに苦勞あるまじき事と覺ゆるを。如何なる心にて雨を祈るやらむ。
寅吉あざ笑て云く。然る謂なき事を思ふは　人間の心なり。神は申すに及ばず　山人とても。世が惡くては宜しからず。故に彼堺にては　人間界の祈りが肝要なり。
問云　そうしやうは幾歳ばかりにて　常の衣服はいかなる狀の物を著らるゝぞ　又常の所行はいかに。
寅吉云　四十歳ばかりにて。髮は生なりに　腰の邊まで垂れたるに　眞鍮の鉢卷の　圖のごとく合ふをはめ　山伏の著る衣袴を著す　緋衣なり。長は常人より　五寸ばかりも高し。常は座を組み　ナイ（内縛カ）の印を結び。咒文を唱へて居らるゝなり。また太刀をも指すなり。
問云　袈裟またすゞかけありや　頭巾を冠る事有やなしや。
寅吉云。けさすゞかけなし。頭巾は冠ることもあり。然れど人間のよりは餘程大きにて。形もやゝ異なり。
此は後に問へるなれど　因に此に記せり
問云　その衣服は。いかにして調ふることぞ。
寅吉云　衣服は大天狗達のは　人間に在し時に用ひたるを。幾久しく著らるゝ由なり。我々は赤裸にて居ること多き故に　然しも損ふことなし　若その著物破るれば。師に願ひて　鹿島筑波岩間山など　其餘の守札を　國々處々に配り　其初穗をもて調ひ著するなり　○師も古呂明も古著をも著る　但し女の著たるは著ず。○師の在世の時より著たる物は　麻の如くにも見えて和らかなり。ぬひたるものなりわろくならず
人間に在し時の衣服を、幾久しく著ると云へるに就て　思ひ合さるゝ事あり　然るは此ころ小島惟良ぬしの語られけるは。江戸小石川牛天神下に。

堀江平兵衛といふ人あり。この養父も平兵衛といひしが。一人の男子ありしに。今文政三年より。二十八年さき。寛政五年に。二十四五歳にて。故なく家を出て。行方知れず成しかば。星野源左衛門といふ人の弟を。養子として在けるに（即今の平兵衛これなり）彼男子家を出たるより。十一年のち。享和三年に。ゆくりなく歸り來れり。衣服大小はきもの。其餘の物も。悉く十一年さきに家を出たる時のまゝに著て。少しも損はれず垢つかず。髮月代さへに。其時のまゝにて損はれざりけり。父母おどろき悲みて。何處に在しと尋ぬるに。人間界と異なる堺に行て在しが。一度兩親に見えむと思ひて來れり。是より永く相見する期なしといふにぞ。父母なほも哭悲みて。いかで止まれかしと云へども。中々止まりがたしとて聞入れず。飯を賜はれと云ふ故に。膳を出したりしかば。彼方の飯よりは美からずとて。然しも食はず。暇を乞ひて立上るを。父母その左右に取つきて。止めむとせしかど。振放して出たるが。其後は來らずとぞ。（此事は早く鳥海松亭といへる人にきゝたりしかど、其名を忘れて在けるに此度寅吉が事に就て小島氏の物語られしなり）また我が遠き緣者に。濱田三次郎と云あり。これが妹聟。能勢平藏といふ町同心ありけり。男子二人女子三人有けるに。五十年ばかり前に。平藏故なく家を出て行方知れず。此によりて家斷絶に及たる故に。五人の子等は。三次郎方に引とり養育して。男子一人は他家へ養子に遣して。高橋太右衛門といふ。然るに今より六七年以前に。平藏のもと召仕ひたる老女の。近在に居るが。太右衛門方に尋來りて云けらく。父上平藏君。むかし家を出給ひし時の衣服有狀そのまゝにて。我が許に來り給ひ。我今は此世ならぬ界に入りて在り。子等をば折々見ること有れど。物言かくること能ざる故に。さて過ぬるなり。今こゝに來れることは。我家を出たりしかば。死ざれども死たりと僞て。出たる日を當日と定め。佛法風の戒名までを負たり。此によりて高く昇り進むこと能はず。其方太右衛門方に行きて。此事を語り。戒名をつけて死人のあしらひする事を。止むべき由を。言傳へ吳よとの御言なりと。泣々

云へりと。三次郎物語なりと語られき。此外にも多く幽界より。年經て歸れりと云ふ人の事を傳へ聞けるに。皆本の衣服有狀にて。歸れりと云へば。寅吉が物語に。人間に在し時の衣服を。幾久しく著ると云こと。信に然有べく思はるゝなり。○國國處々に。守札を配りに出るといふ事も。此後に金錢は。いかにして有ぞと問ひしかば。札配りワイワイ天王などに出て。受たるを遣ふよしいへり。又札一枚にて。一歩もとり來る事ありとぞ。かつて天狗に誘はれたる者の言とて。聞おけることあり。或人錢はいかにして得るぞといへれば。答へて。其は町中を卑しき巫覡やうの者が。天狗の面をかぶり。子どもを集め。ワイ〳〵とはやせ。はやせや子ども。天王樣は。はやすがおすき。けむくわをするな。天王樣は。けむくわをきらひ。それまく〳〵ぞ。などいひて。赤き紙を少さく切たるに。天王の二字をおしたる札を。まき散す者あり。また同じ札を。家ごとに門口に張て。跡より初穗を乞てまはるを。初穗を與へざれば。彼札をとりゆくあり。また其中に。家ごとに張て行はすれど。初穗を乞ふことなく。與ふればうけ。與へざれど乞ざるもあり。また世間の小兒のもて遊ぶ。彩色摺に爲したる。細なる繪をまき與へ。また神宮山々の守札などを配りて。初穗をもらふものあり。然る者にもなりて出るよし云へりとぞ。既に寅吉も下山の時に。其師が鹿島の神庫にある所の板木を借來て。岩間山にて。師の手づから摺れりと云圖。(圖缺)かくの如き守札を持來れり。紙は寅吉師命を受て。ふもとなる垣岡宿といふ所へ行て。買來りしとぞ。下山の時は。百枚計り有しが。殘り少なになれる故に。翻刻せまほしきよしいへる故に。美成こゝろ得て木を與へしかば。手づから彫刻せり。右の札の名を。矢大臣といふとぞ。此札は。世に鹿島の事ふれといふ者の配る札なり。然れど或人の言に。事ふれの配るは。天津祝詞太祝詞所。といふ字はなしと云へり。かゝる事どもを思ひつゞけて。深く考ふべし。

問云。遠江國にて。異人に誘はれたる者。歸り來て語れるは。彼界にも金銀錢ともにあり。小判小粒南鐐も不足なく遣ふ故に。いかにして有ぞと問ひ

しかば。異人すなはち一箇の白玉を出して。其者の目にあてしめ。海中また陸地にも。人知らず棄れ落たる通用金銀の。おびたゞしく有しを見せて。此はみな人知らず棄りたる物ゆゑに。拾ひて再び世に通用さする事。我等か任なりと云へる由なり。

然る事は無りしか。

寅吉云。然る事は見ざれども。此世に通用の金銀いかほどもありて。思ひ合せらるゝ事あり。其は通用の金の多く入用なる時は。忽に何處へか行て持歸るを。折々見たり。決めて海陸に棄りたるを。拾ひて來るなるべし。

問云。大天狗たち。並に其方どもの常に居る所に。家を建て有りやいかに。

寅吉云。家を建むと思へば。一夜にも建らるれど。常には山に住み。また雨降の時などは。宮に住むなり。十三天狗の居所は。岩間山の愛宕宮なり。

問云。十三天狗に。各々使者三四人づゝ有りと聞え。岩間の愛宕宮は。すべて二間ばかりと聞たるに。狹くは非ざるか。

寅吉云。宮も家もいかに小なりとも。大勢入りても狹からず。人數に從ひて。廣くも狹くも思ふまゝになる物なり。

此條は。後にふと心付て問へるなれど。因にこゝに記せり。さて此語によりて家々に神棚を擧て。小宮を置きて。八百萬神を招奉れども。狹しと爲たまはず。靈屋に先祖代々親族を鎭めおけども。狹しとせざる理をも思ふべし。

問云。其愛宕宮には。參詣の人も大勢あるべく。また神主か別當などの。神前を勤めに行たる時などは。大勢の天狗たちは。何處に隱れをるぞ。

寅吉云。參詣の人が大勢來ても。別當が來ても。向ふより此方は見えず。此方大勢の目よりは。向ふが見ゆるなり。我等があちらに在るほども。師のよしと聲かけざれば。見る事能はず。また下れと聲をかくれば。見る事能はず。其は常に師に伴はれて。何處までも行くに。我が方よりは。人々を見れども。人々は。我等が傍に來て居るとも知らず。我も今は人間に歸り來れる故に。かく御目に掛れども。今にも彼方へ入りては。御側に來り居ても。皆樣は見給ふこと能はず。殊に自由自在の物ゆゑに。建るとも

見えざるに。障子からかみなども立て、現世の住家の如く。大なる家に住こともあり。家ぞと思ふに忽に山にて。其山も岩間山と見るまゝに。外の山なる事もあり。如何して然る事か。更に今思へば夢の如く。其處も。居るがまに〳〵替ることある故に。何ともおぼろの樣にて。しかと辨へては申がたし。

問云、十三天狗、各々銘々の名は何といふぞ。又竝び座したる時の階級はいかに、

寅吉云、銘々の名は何と云ふやらん知らず 常に竝び座す時は、階級なけれども、幣を立おきて祭るには。階級を正して立るなり。

問云。其方を見れば。常の野郎あたまなり。彼方にても其通りなりや。

寅吉云。彼方へ行たる時には、誰やらむ大勢よりて、髮の毛を皆むしりたり 其後は生なりにて使はれ居たるが。三月家に歸りて後に。野郎になれるなり。

問云。大天狗たち。常に食物は喰ざるか。また喰ふものなるか。

寅吉云。自由自在なる故に。食物はいつと云ふ時なく。食たき物は。速に前に來るを食ふなり 殊に十三天狗は。每日村々より、各々へ膳を供へる故に、其を我等弟子中までが 十分に食ふことなり。然れども現世の供物は。減ことなく其儘にて有るなり。減ことなくても。天狗の方にては食ふなり。もし不思議に思ひ給はゞ 我が彼方へ行たる後に。何ぞ食せたく思はむ物を。棚へ供へ置給ふべし。此後に來れる時に。其禮を申すべし、

問云、食物を、みづから煮炊きて食ふことはなきか。

寅吉云、みづから煮炊く者もあり、然れど岩間山へは。村々の信仰者より。膳を供ふる故に。其にて澤山なれば。煮炊きすることなし。

問云 煮炊きする時の鐺釜などは。如何して有ぞ。

寅吉云 彼方にも、其樣な物も何もかも有り。もしなき物の入用なる時は。誰が家にても。人家に行て借持來て。用がすみて持行て返すなり。然れど人家にも其儘ある故に、人は知ことなし。

問云、魚鳥五辛の類をも食ふか。

寅吉云。魚鳥ともに煮もし燒もし、生にても食ふなり たゞ四足の類は。神のきらひ給ふ故に 決して

食はず。甚の穢なり。凡て神のきらひと立てゐる事は、推ことせぬがよし。魔道に入ると云ふことなり臭き物にては。ねぎばかりは食ふなり。

問云。我幼なくて。出羽の秋田に在しとき。或人の異人に誘はれて。八十日餘にして歸れるが。物語を聞たるに。途中にて飢たりし故に。其事を云ひしかば。伴ひたる異人、懐より。大きさ指ほどある物の。味甘く。ボウロといふ作菓子の如き物を出して。食しめたるに、其より歸るまで。飢を覺えずと云へり。少ばかり其殘りの有しを見たるに。薄黒く。につたりとしたる物のやうに覺えたり。然る物はなきか。

寅吉云。其はアリといふ物にて。いちご桑實（イチマク）。梅。りんご。ゑびかつら。柿實桃實梨實など。栗は水けなき故にわろし。皮もむかず入れる。其餘くさぐさの甘き菓を集めて。堅き岩の。凹くて雨雪の入らぬ所へ。久しくおけば。自然と熟して。とろりと成りてわき上り。水は上に浮て。上水は甘き故に飲て。正味の所は。葛粉を煉たるが如く。底に堅まるを。上水をしたみ。飴を引のばす如くすれば白くなる。其を日に干堅めたる物なり。滓をば布につゝみてこし去り。すておけば自然と堅まる。もしかはらんとする時に。とくりに沸湯をつぎて。さし入れおけば。即ちなほるなり。○本づくりは。水にても酒にても。○アリは水に交らず。○アリを作る近所に。銀杏の木あればかはる。ギンナムとは。誠にかたき同志のやうなり。此外に昆布の様なる物にて。甚だ高直の物あり。此もアリと同く。二百日ばかりは飢ざる物なり。また田螺を干て。食物に用ふるに。此もよく飢ざる物なり。○田にしは三ツづゝ三度に丸ックヒテハラフクレル。○田にしと餅米の粉と粉にしてハラヘラズクスリ。是より遥後に。十一月十一日。蜜柑を與へたれば。其水をしぼりて。掌にうけて。酒に准へて呑ゆゑに。蜜柑酒と云は。此をもて作り。ぶどう酒といふは。ぶどうにて作る物なり。此にてアリは成まじきかと問ければ。「寅吉云。ぶどう。みかむも用ふるなり。さてアリは。熊も猿も。岩穴に作り置ものなり。」といふ故に。其はいかにと問ひしかば。「寅吉云。我山にて。熊や猿の作り置るを見たる事あり。其を取て喰ひたることもあり。熊は掌に

付て嘗るものなり。其に付て　山にてきける物語あり。或所の人。冬のころ山にふみ迷ひけるに。したたかに雪ふり積りて。出べき道も知らず。飢て死ぬべくなりけるに。大なる熊出來れり。其人恐れて。我を食ころすならむと思へるに。衣をくはへて肩に引かくる故に。心ありてならんと思ひて。負れ行けるに。奥山の其住む穴に連れ入りて。穴に貯へたる物を。掌につけて嘗させたるに。甘くして飢をしのげり。其後日々に。其掌を嘗さする事。右の如して養ひ置たり。さて雪の消たる時に。また背負ひて。穴より出したる故に。里に出むとせし處に　獵人登り來り。其人を見て。いかにして。山に久しく生て在しぞと問ふ。其人右の事ども具に語りしかば。獵人いかで。其穴ををしへよといふ　其人熊の恩を思ひて云はざりしかば、獵人さらば汝を打殺さむとて、近く鐵炮をむくる故に、止事を得ず告けるに、彼熊とく知りて、飛が如くに駈來り　其人をみぢんに引さき、獵人をば引さかず、たゞ鐵炮計りを折まげて走去れりとぞ。○出羽國雄勝郡本木村の。幸太といふもの。中仙道村に行とて熊穴に入る……

問云。アリは此方にて拵へて。成(てき)まじきか。昆布の樣なる物は　尉斗鮑には非ざるか。また田螺は生で干すか。ゆでゝ干すか。また粉にして食ふか。其儘に食ふか。

寅吉云。此方にても成べし。昆布のやうなる物は。尉斗鮑には非ず。田螺は殺まゝゆでゝ干て。其儘にかみ食ふなり。

問云。大天狗になりては。いつまでも死せざるか。

寅吉云。彼堺に入りては。二百歳三百歳。また五百歳千歳など樣に。各々定まりて。其定まりたる歳數を記して。封じて祭り置なり。さて幾つになりても。天狗に成り定まりたる年の形にて、年よらず、定りの年數をはりては　忽然老衰へ　消たる身を隱して神となる、これ人間にて云はゞ　死せるが如し、

問云　然樣に一期の年數をば、いかにして知ることぞ　卜ひまたは御籤など取て定むるか、

寅吉云。卜ひも御籤も用ひず。彼堺に入たるとき。風と心にうかべる歳數を。筒に封じて、其前に幣を立て、日々に拜するなり。我もあちらの物と定りては　二百歳の齡なり。

問云、天狗には、一日に三熱の苦みとて、身内より三度火燃いで、或は天道より、鐵湯を飲しめ給ふ事も有ときけり。其事ありや無しや。

寅吉云　其苦は、我が山の十三天狗などの。正天狗にはなし。世に魔をなす天狗、また魔物、行人天狗、又は慢心にて、魔天狗の境に引入られたる徒など、其苦を受ると聞たり。

問云、行人天狗といふは、いかなる天狗をいふぞ

寅吉云、此は世にいくらと云ことなく多く有りて、いたづらを爲すものなり、日光は行場故に、殊に夥しきなり。

問云。日光の古峯が原の、前鬼隼人といふ者は、現世に在りて。天狗を首領する者ときけり、知たるか。

寅吉云、こぶが原なる。前鬼隼人と云ふものは、行人天狗どもの宿なり、其故に世間にて。神隱しの人など有ときは、隼人を頼むなり。隼人は天狗を使ふに非ず、日光山は、天狗の行場にて。隼人が家を宿とする故に。隼人が天狗を頼みて。尋ねさする訣なり。

問云、行人天狗も、後には正しき山人となるか

寅吉云、此等は容易に正しき山人に成ことなし。「然れど遇には成るも有りとぞ。」其故は、元より惡性にて。遂に其性直らざればなり。但し自在のわざはなる物なり。

問云、師に伴はれて行くに。大空をのみ行くか。地をも行くか。

寅吉云。地を歩行くこともあれど。遠くへ行くには。大空をかけり行くなり。

問云、大空を行くに、足にて歩むか、又は矢の如くついて行くか、綿にかける如く、雲に乘りて行くか、其心もちはいかに。

寅吉云。大空に昇りては、雲か何か知らねど、綿を踏たる如き心持なる上を、矢よりも早く、風に吹送らるゝ如く行く故に。我等はたゞ。耳のグンと鳴るを覺ゆるのみなり。上空を通る者もあり。また下空を通る者もあり、譬へば魚の水中にあそびて。上にも游ぎ。底にも中にも。上下になりて游ぐが如き訣なり、

問云、大空に飛上る時に、高山の峰か、又は高樹

の梢などより昇るか。
寅吉云。自由自在なり。何の事もなく飛上るなり。
問云。大空は寒き所を通るか、熱き所を通るか。
寅吉云。まづ大地を上りては。段々に寒くなるを、寒き所の極を通り拔ては、殊の外に熱きものなり。さて多くは寒き所と。熱き所の間を通る故に、腰より下は水に入たる如く寒く、腰より上は燒る如く熱し。また其處をなほ昇りて、熱き所ばかりを通る事も多かる故に、髮はちゞれて螺髮の如くになる。又かの寒き所ばかりを通る事もあり。さてしたゝか上に昇りては雨ふり風吹くこともなく。天氣いと穩なるものなり。

問云　元文年中の事なるが。比叡山に御修理ありし時に。木内兵左衞門とて。神隱しに逢へる人あり。其人歸り來て後に云へるは、伴ひたる異人、丸き盆の如くなる物の。上の方に柄の付たる物を出して。兵左衞門を乘しめ、肩に兩手をかけて、推付るやうに覺えけるが　其儘に地を離れ、虛空へ高く上りたる由を云へり。其方の師は、自在の身なれば。大空を行くこと。然有べきなれども。未熟の其方などの　虛空へ高く上る事　叶ふべくも非ず　もし兵左衞門が乘たる　盆の如き物などを用ひて。伴ふには非ざるか。
寅吉云。遂に然やうの器を用ひたる事なし。仰せの如く、我は自由も何も出來ず。未熟なれども　師にいかなる術か有らん。進退ともに。師に從ひだにすれば　空行も自在になりて、譬へば鷹鴨など、一つがとび上れば、群鳥その後につきて飛上る如く。師に就ては何處までも行るゝなり。
問云　讃岐國象頭山に鎮座す神の紋に　羽團扇をつけ。また舊く圖傳へたる　鞍馬山の僧正坊の繪も。手に羽團扇を持たり　これ決めて由ある事ならんと。古書に考へて、種々思ふ旨あり。師はいかに。羽團扇を持れざるか。
寅吉云。羽扇は。座右を放たずおきて　空行のをりは　まづこの團扇をもて。空をさして　目的を定めて飛上り。空より下る時も、この團扇をさし　其所を見定めて下る。譬へば羽團扇は。檝の如き物なり　然れど空行のうち　常に此をもて。檝のごとく用ふと云ふにてはなし。唯昇る時と下る時とに用

ふのみなり 下る時など 此目的一分も違へば 下にては。四十里五十里ばかりの道は。忽に違ふ故に。大切のわざなり。其は高みより礫をおとしてだに。寸分を違はず。糸を引たる如くは落ざるものなり。是をもて羽扇を用ふわざの 大切なる事を知べし。

問云。羽扇は。大空を昇り下りの時のみに 用ふる物か。餘に用ふ道ありや。其圖はいかに

寅吉云。羽扇の用はなほ有り まづ形は 圖缺）かくのごとくにて。羽は十一枚なり。鳳股に。圖のごときさやを入れて。眞紅のふさを下て。空行の途中はさらなり。住座のときも。妖魔の仇をなし向ふ時に。さやを取り。羽先をもちて 手裡劍をうつ如く打つくるなり。それ故に羽元に。孔雀のとさかの毛をさし交へて。打つくる時に。水にても唾にても。其毛にひたし付て打なり。孔雀の額毛ほど。毒なる物はなく。鴆毒といふも。此事なる由きゝたり。また悪鳥悪獸などに。うち付て殺すことも有るなり。右の如く用ある物ゆゑに。いくらも作りて有り。

問云 この團扇に用ふる羽は 何鳥の羽ぞ 鷲羽には非ざるか。

寅吉云 何鳥の羽なるか知らず 此春下山する時に。其羽を二三本持來れるが 此毛我が家の者どもに燒捨られたり 高みより落てけがをせず 水におぼれず。天氣を見る書も燒れたり。（女仙氏二郎に羽ウチハを與ふ）

問云。むかし源義經。いとけなくて。牛若丸といひし時に。山城國鞍馬山に居られしに。彼山に住む僧正坊といふ異人に 武術の奥儀を習ひ受られたる由 ふるき書に見えたり。山人も武術を習ふ物なるか。

寅吉云。我が部の武術稽古場は。加波山にありて。專要と習ふは劍術 次に棒の稽古なり。また石打の稽古もあり。

問云。劍術棒などの稽古の爲方はいかに。

寅吉云。劍術稽古の始には。まづ豆を抓みて口に含み。一粒づゝ吹出して。太刀にて打おとし。千粒みな打落すやうになりて後に。二粒づゝ吹出して打落し。後に三四粒づゝも吹出し 兩刀にて打落し 此稽古よく上達してのちに 甲冑を着て眞劍の爲合をなす 但し幾太刀合すといふ定りありて 傍に其を

見る人居て、引わくるなり、爲合するどちは、互に勝負にのみ心速りて。幾太刀合せたりとも知らず戰へばなり。棒の稽古は、まづ圖の如く（圖缺）九字を切る形に習ひ始めて。よく練熟したる上にて、種々の形を敎へ、然して後に。爲合の稽古なり。さて石打の稽古は。一刀或は二刀を持たる者と、礫をうつ者と立合ひて、礫をうつ者は、面に打あてむと。透間もなく打出るを、悉く太刀にて受留る事なり。餘の武術は。唯見たるばかりなれど。石打ばかりは少しく習ひたり。

問云。甲冑の製作はいかに。革具足か。竹具足には非ざるか。

寅吉云。甲冑は。こちらのと違ふことなしと覺えたり。さて保呂をも背負ふことあり。

問云。保呂の狀はいかに。

寅吉云。

問云、彼方に弓もあるべし。其狀はいかに。其稽古は無か。

寅吉云、常の弓は、弦また矢の製作も、此方のと異なく。大弓も半弓も有て。其稽古もあり、左にても右にても。勝手次第に引くなり、外に大弓にて引く管矢あり。また半弓にて射る二羽の箭もあり。

問云、弓の稽古は。あづちに的をかけて射るか。また卷藁の稽古もありや。

寅吉云、的卷藁などにて稽古する事はなく。鎖帷子を着て、面をあてたる人向ふになりて、東西南北に逃廻るを。追廻して射留むとす。それ故に稽古の箭には。先にむくろじを付てあり。容易に中らざる物なり。百本に二三本も。射中るやうになれば、的を定めては。百本に百本あたる物なり。

問云、管矢といふは。いか樣に製する矢ぞ。

寅吉云。管矢は常の矢の長さにてわたり。常の矢の入るぐらいの竹を割て。よく節をとり。矢じり三四寸ばかりを。同じ太さの鐵管に爲て。先は丸ぎりの如くに刄をつけ、鐵管を竹管と合ふ所はいふに及ばず。すべて四所ばかりに鐵たがをかけ。四ばかり穴をあけて有り。然らざれば。管に風入りて重くなればなり、さて此管矢の中に。常の矢の太さなる矢の管矢より三四寸ばかりも短き矢の。（圖缺）圖の如きを入れて射放てば、管矢グンと鳴て、中なる物を碎

き止まり。中なる矢は。向ふへ射抜るなり。大魚猛獸などに射中て。甚だ便宜しき箭なり。また鉛玉を射ることもあり。

問云。半弓にて射る二羽の矢は。いかに作るぞ。

寅吉云。半弓は常の如くなれど。推出しの竹を。常に弦に通してあり。矢は（圖缺）圖の如く作りて。矢筒に納れて。夥しくたくはへ。さて握手に持たるは。木の中を右の矢の入るべく。（圖缺）圖のごとくつくりて矢を入れ。推出しの竹にて射出すなり。此は軍陣にももちひ。また鳥魚をとるにももちふなり。また二寸餘りの管に。針を多く入れて。握手に持たる木の中に入れて。右の矢を射出すことく射れば。軍陣には目つぶしとなし。小鳥の群居る所に射て。取る事にも用ふなり。豆を入れても。小石を入れても同じ事なり。また右の矢ばかりを。手裡劍の如く用ふ事もあり。然れど手裡劍に用ふるよりは。半弓にて射るかた。目當違はで宜しきなり。さて管より射出す矢玉。また此二羽矢をも。雨の降る如く射出すを。太刀をもて切拂ひ。棒をもて打拂ひ。爲合する事あり。上手の爲合は。軍を見る心地して。實に面白き物なり。

問云。鳴弦とて。弓弦を鳴して。妖魔を避る事はなきか。また蟇目とて。（圖缺）かゝる矢を射る事は無か。

寅吉云。鳴弦の事ありや無や。いまだ知らず。蟇目法といふは有て。我も既に其傳を受たれど。然樣の矢は用ふる事なく。桑弓に雉子の羽をはぎたる。萩の矢をもて行ふなり。

問云。眞々木の弓とて。槻木梔木梓木。眞弓木などの類をもて。製を加へず。其儘に弓に用ふる事はなきか。

寅吉云　云々

問云。相撲のわざは。今は遊事の如く成たれど。古く名高き勇士たちの。各々角力を取られたるは。軍に出て組討の勝負の爲と聞えて。宜なる事に覺ゆるを。後には聞えずなりぬ。軍用に此わざを習ふことは無か。また柔術馬術などはいかに。

寅吉云。角力は力競の戯に爲ることは有れど。軍用に稽古すると云ことは聞かず。柔術もなく。馬に乘こと無れば。馬術といふもなし。但し馬は乘るべ

き物に定りたれば。氣相だによき人は。いかなる荒馬をも。乘靜めらるゝ物ぞと聞たり。

問云。彼境の太刀は劒なるか。片刃なるか。其作り狀はいかに。また師は常に帶刀せらるゝか。

寅吉云。劒もあり。片刃の刀もあり。師も他境に出る時は。かならず帶劒せらるゝなり。其狀は(圖缺)圖の如くにて。柄は身より打付に爲たるなり。人々の刀も。大抵かくの如し。さて師の指料を。或時師の見ざる間に。そと拔て見たりしかば。大雨ふりし故に。師は速に歸りて叱られたりき。

問云。鐵炮はなきか。

寅吉云。鐵炮もあり。然れど火を用ひざる鐵炮にて。百匁の鐵玉を三里うち放つ鐵炮なり。音はさしも高からず。

問云。其鐵炮の製法は知たるか。

寅吉云。形製作は。(圖缺)圖の如くにて。ねぢを廻し。風をこめて打出す鐵炮なり。風嚢に。三百匁の風こもるなり。其風を一度に出すときは。大木を折り。山をもつらぬく故に。袋に。風をつもり出すしるし有て。遠くも近くも。心當を定めて打出すなり。玉に書狀を付て。岩間山より。筑波の山人に贈りたる事もあり。岩間より筑波山まで。直徑二里足らずも有べし。此製作を委く知れる由は。或時師の居ざる間に。其製作を知たく。取くづして中を窺ひ。砂を吹こめて見たりしかば。食相を損じて。甚く叱られたる事有ればなり。

問云。かねて異人に伴はれたる者の言をきけるに。途中にて行逢ふ人に。唾をしかけ。又は突たをし。或は傍に立居て。印を結び。呪文など唱へて喧嘩をさせ。また或は行逢たる人に。頭をたれ。禮をなして通ることも有るに。しか爲られたる人々知ことなく。突倒されたるは。石につまづき。坂を踏はづしたると思ひ。喧嘩を呪はれたるは。互に口論を仕出して。終には喧嘩となり。唾を爲かけたる人。禮を爲たる人。ともに知ことなく通る故に。其由を問へば。異人答へて。唾をしかけ。突倒し。喧嘩などさするは。穢れたる人。慢心ある人。敬なく信心うすく。神の守護なき徒なり。禮を爲たるは。德行篤く。敬深く。神の加護ある

人々なり。と云へりとぞ。然る事もありや。
寅吉云。實に然る事あれども。其は十三天狗の如き。正天狗のわざに非ず。位のひくき天狗たちのわざなり。但し慢心なく。敬深く。慈悲心ありて正しき人をば。天狗の方にては。何れも敬ひ尊ぶことなり。凡て天狗道に入ては。いかなる尊き人と云へども。現世の人よりは。位卑くなるが。大天狗になりては段々に世人より。位高くなるなり
問云。天狗の位は。いかにして定まるぞ。
寅吉云。行の重なるに從ひて。位上るなり。十二天狗の如き。大天狗となりては。正一の位なり。
問云。其位は何より受ることとぞ。
寅吉云。何より受ると云ことは知らず。
問云。天狗も神を信仰するか。また諸社へ參詣もするか。
寅吉云。神々をば悉く信仰して。常に拜をなし。また諸社に參詣する事もあり。
問云。神拜する仕方はいかに。拍手を拍つか。
寅吉云。拍手をうつに。天の御柱と云ひて。大きく一つ拍ち。國の御柱といひて。小さく一つ拍て。八百萬の神たち。これにより給へと唱へて。祈願を爲すなり。祈願をはりて後に。國の御柱といひて。小さく一つ拍ち。天の御柱といひて。大きく一つ拍て。八百萬神。もとの宮へ歸り給へと唱ふ。神拜に。天の御柱。國の御柱といへば。神々へ祈願よく屆きて聞入れ給ふなり。また日向の御柱。これは身そゝぎの時唱ふることあり。これは淸めなり。出雲の御柱とも唱ふることあり。これは大社大國樣の御事なりとぞ。
問云。每朝日に向ひて拜をなし。東の氣を呑ことはなきか。
寅吉云。朝起ると直に。貌を洗ふことなく。手の平に何やらむ字をかきて。貌洗ふ狀をなし。手に（圖缺）圖の如き笏の本にて。口中に楊枝を用ふ狀をなし。づいと一町ばかり日に向ひてすゝみ行き。跡しさりに。元の所まで歸りて。立ながら笏を前にあて。笏にとゞくほどかしらをさげて。拜するなり。頭は尊き物ゆゑに。下にべたと付ぬものとぞ。すゝみ行くとき。氣を呑ざるか。其は知らず。此事をしまひて。神前に向ひ。拜し終りて。神前に水の字

を（圖缺）圖の如く人さし指にて書、眞似して退き。さて後に貌を洗ふなり。

問云。十三天狗誰も其通りなるか。

寅吉云。誰れも此仕方はかはることなし。

問云。佛を信仰し。朝々念佛題目など唱へ。また珠數をつまぐる事なきか。

寅吉云。彼方は兩部ゆゑに。神棚にならべて。兩部の佛もかざりて有れど。念佛題目ともに唱ふる事なく。また珠數をつまぐる事もなし。たゞ朝々神拜終りて後。直に西に向ひて。西方牟尼ハン佛。と一篇となへて。よく見つめ。桑木の二尺ばかりなるを。エイ。と云て投つけて退くなり。牟尼ハン佛とは。アミダのことなりとぞ。

問云。桑木を西に投つくるは。何の爲なるぞ。

寅吉云。何の爲と云ことは知らず。

問云。神拜に兩手をそろへ。掌を上にして。いただく事はなきか。

寅吉云。朝日に向ひて。一町ばかり進むとき。また神拜の時にも。其わざをして。肩へ引かぶる樣にするなり。

問云。天狗は殊に。愛宕の神を信仰するならん。と思ふよしあり。信ずるやいかに。

寅吉云。愛宕に限らず。何にても。其山の神を大切に信ず。されど火の行をする故に。愛宕をば常に信仰するなり。

問云。火の行をするとて。何故に愛宕を信仰することぞ。

寅吉笑て云く。知れたる事を問給ふ物かな。愛宕は火ノ神加具土ノ命なる故なり。

問云。火の行の狀はいかに。

寅吉云。火つるぎとて。腕の太さなる炭を。長く一町ばかりの所におこし。加持して幣をかざすに。燒ざる時に。片端より一づゝこき行くなり。また衣を着たるまゝ。其上を徒足にてあゆむ。此即火わたりなり。火の勢にて一尺はかりも火上に。衣の裾ひらめくなり。火を手足にかくる時に。熱からんなど思ふ。臆病心ありては。やけどをするなり。一向に然る念なく。踏みも抓みもするなり。○火の行など。すべて怪しき事は。そんな事といへること。○また山人の行は。人間の爲にするといへること。

問云。其外にも種々の行ありや。

寅吉云。いかにも種々の行あり。まづ其時々の時候の服を。一ツならでは著ず。決して重著する事なし。夏はひとへ物。春秋は袷　冬は綿の入たるを著すまた冬ひとへ物。夏綿入を著る行もあり　天狗道を修し始むるには。まづ百日斷食の行なり。堪がたく苦しきものなり　我が勤たる時に。四五日ばかりも過て　ひもじさ云むかたなく。堪がたき故に　密に人にもらひて。結びめしを一つ食たれば。したゝかに叱りて。山下へ七度蹴落し　さて山の木にしばりつけて　爲直させたり。かくて夜とも晝とも知らず。日の多く立たると思ふと。頻にひもじさ堪がたく。前に栗實一つ落たるを見たれば　甚だ食たく思ひ。額より膏汗出しかど。しばられたる故にせん方なく。遂にこらへおほせたり。程すぎては。然ほどになき物なり　其後は死たる如くにて。ふと目を覺したれば。はや百日立たり。されどもやう〳〵七日ばかりも立し樣に思はれ　今思ふにも　百日斷食の行の早く濟たる事　これまた更に合點ゆかず。殊に不測なるは　此行を始むる前に　師より怠なく。行を力むべき由の誓詞を案文して。我が小指の爪を。師の手をおろし拔れたるが　其痛さ堪がたかりし事は。慥に覺えたるに。行をへ夢覺て見れば。爪も其儘にあり。此後師に從ひ居るほどは。折ふし手一合の行。さては寒水に七度入りて。熱湯に二度入る　これ年に四度の行なり。さて年ごとに。寒中三十日の水行あり

問云。百日斷食の行を畢たる後に。定めてつかれよわるならむ。其狀はいかに。

寅吉云。身は干からびたる樣になりて。筋骨あらはれ。力なくて。動こと叶はず。歩行せむと思へど。足立ず。手に物も取られず。物言むとすれど　舌は働かず。耳も聞えず。幾日とも限なく眠られて。眼を覺す事なし。其間に。夢か現か。誰がわざとも知れず　食物しきりに口に入るを　夢中にて食ふやうに覺えたり。さて數十日眠りたるよと覺えて。後に覺れば。現世の事は更に忘れて。生を替たるが如くに。彼方の心となる。これ修行の始也。凡て此方に來ては。もと此方にて有し事も思ひ出らるれど。彼方に在ては　此方にて有し事どもは　夢の如く忘るゝな

り。又こなたに來て。彼方の事を思ふにも。夢の如きこと多し。

問云。日々に寒水に七度。熱湯に三度入る。行の狀はいかに。

寅吉云。極寒の水に。長く息をつめて七度ひたり。寒さ堪がたく成れる時に。熱湯に入るなり。

問云。其熱湯は。何に沸すことぞ。居風呂なるかいかに。燒たゞるゝ事はなきか。

寅吉云。かたき石山を　一間に二間ほどに。風呂の如く掘りて。鐵にて(圖缺)圖の如く作れる物に。水を入れて。上なる穴より。鐵棒二本にて。(圖缺)圖の如く攪まはせば。鐵棒と器のふちと。きしり合ひて。火の如くなりて熱湯となる。其湯を。彼掘たる所に入るゝなり。但し。かくして沸すことは。手間どる故に。また傍にかまどを作り。火を焚て。かの鐵器をかけ。幾はいも湯を沸して。彼掘たる中に入れ。湛え。風呂の中の兩傍に。(圖缺)圖の如く。壺に火を入れて。竝べ置けば。湯はます／＼沸たぎる。其時に。師まづ加持を爲して。赤裸にて眼をとぢ。(圖缺)圖の如く。端より端へくゞりて出るなり。入たる程は。甚く。熱く堪がたき樣なれども。出ては少しもたゞるゝ事なし。

問云。寒中の水行は。何處にてするぞ。其仕方はいかに。斷食にてするか。

寅吉云。寒中の水行は。筑波山の白瀧。不動の瀧。日光山のけごんの瀧などなり。其中に。筑波の瀧は。凡人また山伏なども。行をする故に。おほくは。日光山の華嚴瀧にて行ふなり。赤裸に單物を一枚着て。腹は鳩尾の所と。足の土ふまずと。手くびの所と額をば。太繩にて結びて。頭巾か手拭などを冠り。日の出るより。日の入るまで。瀧に打れ居て。夜は瀧を出て寐るなり。食物も食ふなり。水行の功つもりては。白き團子ほどの物の。ふは／＼したるを吐くものなり。其後まめになる。目をまはせば。人々あたゝめる。常に目をまはせば。とふがらし水にてよみがへる。

問云。其所に寐るか。常の住所に歸りてねるか。

寅吉云。常の住所に歸らず。其山に寢るなり。土の平に。ひくき所にて。松葉を熊手もて攪集めて。夥しく燃し。白く灰になりて。土の熱く燒たる所へ。

樹葉松葉の落腐りて。平たくこゞりたるを持來て。厚くしき。連の者ども。赤裸となりて。其著物を。二枚ばかりも並べ敷て。其上に。たとへば五人の連なれば。三人が寐ころぶと。一人が殘り居て。二枚の著物を。三人の肌に引かけて。其上に。また松葉樹葉のこゞりたるを。夥しく積かけて。能々おし付け。さて殘りたる一人が。尻の方からむぐり入りて寐るなり。毎夜に替る〱かくの如くするなり。夜半ごろまでは。大分温かなれども。明方には歯をたたくほど寒し。夜が明れば。直に瀧に入ること。右に云ふが如し。

問云。大塚町に。石崎平右衛門といふ者あり。此人若かりし程に。筑波山に住む天狗に誘はれて。數年使へたりしが。其後歸り來りしかど。世渡る道を知ざる故に。日光山に行て。林蔀といふ者に頼みて。天狗に世渡りの事を願ひたりしかば。十露盤にてトふ事を教へたり。平右衛門そのトひに妙を得て。云こと悉く。當らずと云ことなく。もし自分に。トひ得ざる事ある時は。林蔀かたへ問遣れば。蔀は筑波山の天狗に問ふて。告遣す由なり。此蔀が言に。天狗は殊に。堅魚節を好むものと云へりとぞ。實然るものなりや。

寅吉云。能も知給へる物かな。堅魚節は。精分を益す物なる故に。殊の外に好むなり。百日の行ならで。常に断食の行をする時も。鰹節と田螺ばかりは食するなり。

問云。妖魔のたぐひ。樹靈天狗などの。殊に否がりて。逃る薫物あり。其を焚ときは。妖物決して災をなさず。我これを傳授したり。何ぞ妖魔また天狗の恐るゝ薫物はなきか。

寅吉云。彼方にて。行などのときに。障礙をなす魔のある時に。焚く香あり。山の赤土。白檀。輕粉薫陸。樒葉の五味なり。是は殊の外に。惡魔の嫌ふ物なる故に焚なり。但し此は大切の事なり。

問云むかし。享保年中の事なるが。備後國に。稲生平太郎とて。十六歳の若者ありしが。剛强類なき人なりしに。此國に比熊山とて。魔所といひ傳へて。登る人なく。木葉一枚とりても祟を爲す。恐ろしき山の有けるに登りて。魔の宿る樹と云ひ傳ふる木に。印して歸れるに。其より平太郎家に。

妖怪あらはれて。三十日の間。千變萬化して腦ませむと爲たれど。平太郎少しも恐れざりしかば。其妖物遂に立去れるが。其去る時に形を現して。我は。山本五郎左衛門とて。妖魔の首領なり。我と同じ事をなす。神野惡五郎といふ者もあり。凡て男子十六歳になる時は。人によりて災あり。そは我等が爲すわざなり。我此熊山にて。汝を見て災せんとて。來りしなり。今歸るを見よとて。現世の武家の如き供立にて。駕に乘り雲に入りて。西に去れる事あり。此は天狗とも聞えず。何物ならむ。かゝる物は見ずや。聞かずや。

寅吉云。然樣の名はきゝ及ばず。されど世に。惡魔は夥しく有れば。其中に然樣の名ある惡魔も有べし。

問云。世に惡魔夥しく有とは。如何なる事ぞ。惡魔は天狗とは異なるか。其住所はいづこならむ。

寅吉云。惡魔どもは。何處に住と云ことは知らねども。各々群々ありて。其伴類夥しく。常に大空を飛行し廻りて。世に障礙をなし。惡き人をば。ますます其惡を長せしめ。善き人をば。其德行を妨げて。惡に赴かしめ。人々の慢心怠慢を見込みて。其心に入り。種々の禍難を生じて。其心を邪にまげしめ。佛ぼさつとも。美女美男ともなり。地獄極樂。其外何によらず。人々の好む所に從ひて。其形象をも現してたぶらかし。悉く我が伴類に引入れ。世を我が儘にせむと計らふ物なり。我が正目に見たるは。其狀下に圖するが如くにて。輩を推す物を大力といふ。形は此二種に限らねど。正しく見覺えたるはかくの如し。外に一人かけるは。何といふやらん知らず。著たる物の圖は如此にて(圖缺)耳にくさり下りたり。手に糸を出す。下に垂たる所を。兩手に握りて。障礙をなす。頭は針金の如くにて。其は髮の如くにも見え。また冠り物の如くも見ゆるなり。手より糸を出し引かける。善人にはかゝらず。また人々の家々をのぞきあるく。魔に蟲たかる。蛇の樣なり。シャリ骨を。首にかけたる魔もあり。神の人を扶け給ふも。此わけなるべし。世人惡魔の多きことを知たらば。道德をつむべしと師說なり。さて天狗といふ物は。深山におのづから出來るあり。また鷲鳶鳥猿猴熊鹿猪。その餘何によらず。鳥獸の年舊たるが化るあり。鳥は手足を生じ。獸は羽を生ずるなり。また

人の死靈の化るあり。生ながら成るあり。但し人の成れるには。邪と正とあり。邪天狗は。やがて妖魔の伴類なり。世には右種々の物のわざを。惣て天狗のわざと云なり。さて我が師の如きをも。世には天狗といふ故に。姑く天狗とは云へども。實は天狗に非ず。山人といふ物なり。さて大空に。右種々の物どもの。飛行し廻る道あること。國土の道の。竪横にあるが如し。火ノ見櫓をおし倒し。半鐘をはづしなどするは。皆かの大力らがわざなり。力いかほど有と云こと。測り知られざる故に。大力と云ふなり。此れほど恐ろしき物なし。世に鬼と云ふも。此等の類なり。

問云。仙人と山人とは異なるか。日本にも役の行者などは。正に山人にて。仙人ときこえ。また舊く楊勝仙人。久米仙人など云つる類。おほく有しが。今も仙人と稱する物はなきか。

寅吉云。唐のを仙人といひ。日本のを山人といふ。同様の物なれども。日本にては仙人といはず。楊勝仙人。久米仙人など云は。舊く有しか知らねども。我は聞知らず。役行者は。今は此國に居ぬと聞及べり。「山人は唐へも行き。仙人もこちに來ること。雙岳。古呂明も。本は唐にありき。其時の名なり。なほ實名あり」。

問云。下總國東葛西領新宿といふ所に。藤屋莊兵衛といふ者あり。先年此者の家に。富士山に住む。常昭といへる山人の來て。二三日逗留し。三社の託宣の如き物を記して。與たる事あり。此の山人を知れるか。

寅吉云。それは富士山には有べからず。大山に住む山人の名なり。大山を富士と間違へ給へるなるべし。

此は。往年。下總國葛飾郡柏井村に住する門人。中尾玄仲といふ者の物語にて。富士山の山人と聞覺えたるを。寅吉が如此いふ故に。玄仲が許へ。態と人を遣りて。なほ委しく問しめたるに。書付て遣せけるは。彼莊兵衛。常に大山の神を信仰せしが。一日午時にもならんと思ふ頃に。今日大山參りに行とて。支度する故に。家内の者ども。今日は遲くなりたれば。明日にせよと止れども。思ひ立し事なれば。止る事勿れとて。立出たるは午時過なり。斯て十八九町も行しに。向ふより柿色の

衣著て。髪長く。山伏のごとき人の。凡人より眼大きく。すさましげなるが來て。莊兵衛に詞をかけ其方大山に參詣するとて。金貳歩持出たれど。壹歩は通用せざる金なり。我それを錢に替て遣すべし。此方へ渡すべしと言ふにぞ。何の心もなく渡しけるに。眼前に消失たる如く見えず成ぬれば。莊兵衛いと不測に思ひつゝ。徐然に行しに。彼異人何處よりか出來て。錢と替て來れり。大山に連行べし。目を閉て。我が背に負れよと云にぞ。莊兵衛背に負れしかば。其まゝ空に昇るよと思ふにやがて大山の麓に至りぬ。さて山に上りて。社を拜み。御札を戴きて。此處に來るべし。我こゝに待居て。送り遣すべしといふ。莊兵衛その如くして麓に至れば。未時すぎなり。斯てまた眼を閉よとて。背に負て。忽にはじめ逢し所に來りて。是より一人にて歸るべし。遠からぬ内に。汝が家に行べし。よく清め掃除して待てよ。とて別れ去ける。さて五六日過ぎて。門口より。莊兵衛宿に居るか。と云ひつゝ。案内もなく。彼人來て奧に通り。汝は正直なる者ゆゑに來れり。我は常昭といふ者なり。酒呑かはさん。火を燧かけて持來れとて。二人にて汲かはし。親く語らひて。五六日ほど逗留しけり。其間にきゝ傳へて。訪ひ來る人の多かる中に心にさげすみ。試し見んなど思ひて來る者をば。疾く知りて。今外より入來る。何某と云者は。我をさみして。試し見んとて來れり。いと穢き奴なりと。唾して忌憎みけるとぞ。逗留の内に。庄兵衛。いかで尊き物を書て。授給へと乞けるに。雨降りて闇き夜に。燭火もなく。筆を執り。たゞかき廻すやうに見えしが。忽に。鹿島香取息栖。三社の神號をかき。下に託宣の如き物をぞ書たりける。此は隣家なる。次郎兵衛といふ者も。彼人を信じける故に。書て與へける。其歸る時に。長々逗留して。世話になれるよし。厚く謝して。此後汝等が家に。火災なき樣にすべし。然れども。此家に常に住すること叶はねば。火災の有らん時は。富士の方に向ひて。我名を呼べしと云ひて出にけり。其後新宿に。火災の有けるに。莊兵衛が家にては。火の近きまゝに狼狽して。呼ことを忘れたりしかば燒たり。隣家なる次郎兵衛

は。四方の軒端に。火の燃付たる程に思ひ出して。富士の方に向ひ。常昭様々々々と呼けるに。誰が消すともなく消にけり。又其後雨夜に。莊兵衛が屋根に。砕くるばかりに物の落たる音しけり。何やらむと立出て見れば。苞に一箇の丸き石を包みて有し故。不思議に思ひて。取納め置たり。其後次郎兵衛が宅に。常昭來りて。先頃鹿島社に御使に參る時。莊兵衛が家に土產を置たり。雨の降る夜也し故に。人の知たりや否やと問ふ。次郎兵衛しばし入りて。休み給へと云に。今日も急ぎの御使なれば。立寄がたしとて。其まゝ見えず成にけり。また其後。この莊兵衛が親類なる。江戸神田に住する。何某といふ者。神隱しに成たるが。歸り來て後に。莊兵衛方に來りて云やう。先年此家に來りしは。常昭といふ人にては無りしやと問ふに。人々驚きて。其人を知れるかと問ければ。其人今は富士山の下に隱居して。使を勤めずと語りけるとぞ。藤屋は今も莊兵衛といひて。六十五六歲なるが。此は常昭と交りし。莊兵衛が子にて此者の十二三歲の時なりしと。今も覺え居て語る。

彼書たる神號も。今に秘藏して持たりと記して。其神號を。先年摸寫し置たるを。再び摸寫して遣せたり。其書體は。(書體缺)如此にて。下に云々と記し。末に田村氏。日向國坂野上常昭山人と書たり。本は田村氏にて。日向國坂上といふ所の產なりけむが。山人になりて。大山の神に事へ。其後に富士山の麓に隱居したりと聞ゆ。予は富士に住むとのみ聞覺えけるに。寅吉が大山の山人也と云へる事甚奇也。年數を推考ふるに。常昭山人。しばらく大山の仕へを退きて。富士の下に隱居したるが。近ごろ再勤むる事となれりと見ゆ。然らでは寅吉が。大山の山人と知べき由なければなり。殊に奇なるは。彼摸寫したる神號を見て。常昭の書と違へるやうに見ゆ。と數々云へり。三轉の摸寫なれば。然も有べくこそ。さて此後寅吉が。己と書たる物どもを見れば。神風野福。神野心惡。鬼野心神なと樣に。辭にかくの字に。野をかけり。常昭山人が書にも。辭の所に野字を六まで書たるは。不測に符合して。甚奇なる事なりかし。

問云。舊き書等に。名の聞えたる天狗に。鞍馬山の僧正坊。愛宕山の太郎坊。比良山の次郎坊。伊都奈山の三郎坊。富士山の太郎坊。常陸の筑波法印。上野の妙義坊。彦山の豐前坊。比叡山の法性坊。伯耆の大山に住む伯耆坊。などいふ類の。天狗と名に負るもの夥しく。然る山々の天狗を知らざるか。また山々に各々山人も多かるべし。知たるは無か。

寅吉云。世に天狗と稱するもの。高山といふ高山に住ざるはなく。其中に。邪なるも正なるも有るよし。又その邪天狗の中に。實は惡魔なるも有べく。また山人も住すべし。但し越中國の立山は。ことに高山なれども。佛法のみの山なる故に。正き天狗は住せず。惡魔のみ住すと。同友白石左司馬が物語なり。然れど此は。左司馬がいへる言なれば。記し留給ふべからず。さて其山々の天狗山人など。各々別界なる故に。名を知れるは更になし。

問云。左司馬はもと。何處の人にて。何頃より。僧正の弟子に成たるぞ。歳はいくつ計りなるぞ。又この人佛法は嫌ひなるか。

寅吉云。左司馬は二十歳ばかりと見えたり。本は妙義あたりの社人なりしとぞ。彼境の人となり極りたるは。二十歳の時にて。元祿十三年三月三日よりの事と聞たり。元は佛法ずきにて有けるが。道に入りて後に。好まず成れる由なり。

問云。唐土に居る仙人といふ物は。此方へも來ること有や。そちは見たること無か。

寅吉云。我が師など。唐へも何處の國々へも行こと有れば。唐土の仙人の。此國へ來ることも有べし。何處の國か知らねども。師に伴はれて。大空を翔りし時。いさゝか下の空を。頭に手巾か何か。たゝみて載たる樣にしたる老人の。鶴に駕りて。歌を吟じて通れるを見たり。其歌は符字のごとき物なり。これ仙人なりしとぞ。此外には見たることなし。

問云。神の御形は。山人天狗。また其方などの眼に。見え給ふことは無か。

寅吉云。師などの眼に。見え給ふ事もあるか。其は知らず。我等は神の御形を。かつて見たること無れど。折々金色にて。幣束の形の如く見なさるゝ物の。ひら／＼と大空を飛ぶことあり。此は神の御幸なり

とぞ。其節(とき)は誰も地に畏まりて拜するなり。

問云。長樂寺が迎ひに。天狗の釋迦佛に化て來れるといへば。餘の佛にも。又神にも化る物なるか。

寅吉云。佛には。何佛にも化れども。神には化ること
となし。

問云。何故に佛には化れども。神には化ざるや。

或人傍に居て。神は尊く。佛は賤しき物故に。神
にはばけず。佛に化るならむと云へば。

寅吉云。然らず。佛は各々像ある故に。其像を眞似
て化れども。神には御像を立ざる故に。眞似て化る
べき樣なし。佛に化るばかりならず。地獄極樂の有
狀をも現はす。是また繪に書たるを眞似てなり。吾
も地獄極樂の有狀を現はせるを見たる事あり。

仙境異聞下之二卷

平田篤胤筆記考按

問云。山人天狗なども。夜になりて寢るか。

寅吉云。尋常の人と同じ樣に寢るなり。我々は云ふも更なり。師は寢らるれば。十日二十日も覺ず。高いびきにてねらるゝなり。

問云。山人天狗などは。夜にも眼の見ゆる物なるか。

寅吉云。見ゆるなり。我々と云へども。師の德によりては見ゆることあり。

問云　山人も夢を見る事あるべきか。

寅吉云。我が師などは。いかに有らむ知らず。我々は夢を見る事　此方に在しにかはることなし。

問云　人に夢を見せ。また夢にて誨し言する事もなる物か

寅吉云。神通自在なる故に。夢を見する法もありと聞たり。但し其法は。人の夢枕に立こと故に。誨す方にても。誨さむと思ふから苦しく。誨さるゝ人も。甚だ苦患なる事なりとぞ。

問云。山人の方へ。何ぞ賴みたき事　尋ねたき事などの有る時に。高き所に上りて　彼方に向ひ言たらむに。屆くべきか。

寅吉云。尋常に物言ふ如く云ひては。いかほど大きなる聲にても。屆く事なし。神に祈願をする如く祈りいへば。屆くなり。

問云。先へ祈願の通りたる事は。いかにして知るべき。

寅吉云。聞受たる事は其事をかなへ。また夢想にても誨すべし。

問云。其方に何ぞ尋ね度ことの有らむ時に。山に入りて對面し　尋ねたく思ふを　然る事はなるまじきか。

寅吉云。それは叶はぬ事にはべり。しか自由に逢る事にては。彼境この境の差別の立ざる故なり。

問云。そちにも穢れたる火は知らるゝか。

寅吉云。隨分に知らるゝなり。

問云。いかにして知らるゝぞ。

寅吉云。おき火ともし火ともに。穢れたる火は。色黃黑く勢なく。又は燃立さま荒く　飛はねもするな

り。燭火は。障子を一重おきて見れば。殊によく知らるゝなり。

問云。山人天狗などの境に。女人はなきか。

寅吉云。餘の山は知らず。岩間山筑波山などは。女人禁斷の山なる故に。決して女なし。女の汚にふれたる人の登山するをば。怪我をさせ。突落しもするなり。

問云。然やうの事は。師みづからするか。其方などもするか。

寅吉云。師のみづから。手を下すことも有れど。多くは屬從ふ者ども。師命をうけて。遠くより足を擧て。蹶る狀をなし。また手を伸し。突落す狀をすれば。倒れもし落もするなり。

問云。山上りせる人の。引さかれなどしたる事を。時々聞ことあり。然る甚しき事もありや。

寅吉云。山人にも天狗にも。邪あり正あり。猛烈なるあり。溫和なるあり。猛烈なる天狗。また山人には。然る甚しき所爲をなす事も有るなり。

問云。彼境に男色の事はなきか。

寅吉云。他山の事は知らず。我が山などには。然やうの事は決して無きなり。

此事は。予みづから問ふことを得ずて。門人守屋稻雄に命じて。寅吉がうち解たる程に。密に問しめたるなり。然るは世に。天狗に誘はれたりと云もの。多くは童子なるは。もし僧どもの化たる天狗等が。在世の惡性なほ止ずて。其用に伴ふには非じかと。日頃疑ひ思へればなり。

問云。天狗また妖怪は。雞の聲を恐るゝ物と聞たり。然る事も有や。

寅吉云。天狗は雞の聲を恐るゝ事なし。夜になりて人に禍難をなす。種々の妖物あり。其等は雞が鳴けば。夜が明る故に。恐るゝと云ことなり。さて雞の事を問給へるに就て。思ひ出たり。彼鳥はいと奇しきなり。常に人家の庭に畜はれ居ては。飛ことの下手なる樣に思はるれど。彼鳥ほど。高く大空に飛翔る鳥はなし。飛ぶ狀も中々。餘鳥の及ぶ所に非ず。美しく緩にして。速く限りもなく飛昇るを。度々見たり。いつも雌雄にて飛ぶなり。甚奇しくて。師に問へば。太神宮の御許へ參るなり。と言れたり。

問云。彼境にても。病煩ふこと有や。

寅吉云。我師などは、病煩ふことなし、屬從ふ者といへども。腹痛、腫物、搯むき。切疵などにて。煩ふこともあり。腹痛には丸薬を用ひ。腫物をば。爪を長く生して居る故に。爪にてむしり、膿の有たけ搔出して。木葉草葉は更なり。土にても何にても。有にまかせて貼るなり。切疵搯むきなども。右のごとし。また嘗て愈すことも有り。また咒禁して。愈すことも有るなり。

問云。其丸薬は何々ぞ。また外によき薬方は知らざるか。

寅吉云　丸薬は。山の赤土と。狐の茶袋とを、よき程に合せて。飯糊にて丸じ、丹にても箔にても衣とす。蟲腹一切の薬なり。またゝじまの實と。芥葉と。外に何にても。百種の草を煎じ出して。滓を去り煉つめて、痰癪蟲腹痛などに用ひて。よく功をなすなり、火熱湯に燒れたるは。蛤貝の白燒と、ひゝな草の白燒とを貼て。よく愈るものなり、又やけどに。胡蘿蔔の屎を養はず作れるを。荒土を去たるばかりにて。洗はず。細根をもとれざる樣に。繩もて纏て。陰干となしたるを煎じ出し。水の如く冷して。其中に燒所をひたせば其水湯の如くなり、痛忽に止みて跡もつかず愈るものなり。また杉葉の芽と。めしを入れてすりて。たつぷりと貼れば。熱くなるを、取かへ／＼すれば。痛止なり。足のつめたくなき薬はとふがらしと山椒の粉を。水にときて引く。なほ薬方は。思ひ出たらむ時々に。教へ申すべし。

問云。彼境に。別に養生の法はなきか。

寅吉云。常の行狀。やがて養生の法なる故に。別に養生の法といふはなし。

問云。唐土の仙人ども。長生不死の薬とて。種々の丹薬を煉る法あり。山人にも然る丹薬を煉り。用ふる事はなきか。

寅吉云、然やうの丹薬煉るを、見たる事なし。但し師の常に用ひらるゝ薬あり。其法は。柚の實を去りて、幾箇にても、上酒にて。火を強からず。柔ならず。煑るときは。煑とけて。とろりとなる。其時に滓を去りて。干生姜の粉と。大白の砂糖を入れて。また煉つめて。塗板に水を引て。親指のはら程におとし。冷堅まれる時に。へぎ取て。壺にたくはへて。常に用ひらるゝ也。此は胸腹をすかし。痰を治する

藥なりとぞ。「またたじまの實と。芥葉と。外に何にても。百種の草を煎じ出して。滓を去り。煉つめて。痰癪虫腹痛などに用ひて。よく功をなすなり。」

問云。山住ひのことなれば。山嵐の障氣とて。山氣また霧露の惡氣に當ることも有べし。其を防ぐ藥は知らざるか。また毒消の藥は無か。

寅吉云。梅實を酸氣なき樣に。黑燒にして。(梅干にてもよろし)酒にて用ひ。又總身に吹かくれば山嵐の氣に中ることなし。毒消の藥には。田植ごろの稻根を。土を洗ひて。蓋をしていぶせば。蓋に霜たまるなり。其を取りて黑餅米の黑燒(餅米なくはたゞもちにてもよし)と。等分に合せ。食中り。毒消に用ひて妙なり。

問云。かつて山人に伴はれたる者の言をきけるに。山谷などに。霧こもれる時に。指にて空に字をかきて。何やらむ呪文を唱へたれば。晴たる由を語れり。然る事もあるか。

寅吉云。實に然る事あり。其は入らんと思ふ山谷に向きて。九字をきり。何と云やらむ知らねども。呪文を唱ふれば。晴るゝなり。また呪文を唱へ。白紙を細少に切て。雪を降す如く。まき散して掃ふ事もあり。

問云。山人たちも。酒を呑ことありや。

寅吉云。常は酒を呑こと無れど。正月二日(蟆目の式あり)にばかり呑むなり。然れど醉ふほどは呑まず。昆布を肴にて土器につぎ。少ばかり呑む眞似をするなり。

問云。節分に豆をまき。赤鰯柊をさし。正月に松を立て。しめをかざり。五月菖蒲をふくなどの事はなきか。

寅吉云。正月別に松は立ねど。生たる松木に。何によらず供物して。拜し祈ることあり。此につきて思ふに。人は日々に松木に壽命を祈りたらむには。長からむと思ふなり。

此時己思ひ付て。タラの木に。蟲齒を愈さむことを祈りて。しるし有よしをいへば。傍の人また。蔦に蟲齒の願をかけ。油揚を與ふれば。直るよしをいひけるに。

寅吉云。立木魚蟲鳥獸。何にても一心に祈れば驗あり。不動觀音をはじめ。なき佛に祈りてさへもしる

しあり。犬の屎にても同じごとく。されど眞の神をさし置て。そんなものに祈るは惡し。

問云。正月より始めて。年中に定れる神祭はなきか。また七月精靈を祭る事はなきか。

寅吉云。年中に定れる祭といふは。大晦日より。正月年神を祭り。二月初午に。田植の神事あり。田の神になる人。ミヅラに髮をゆふ 油揚の供物をそなふ。三月三日に。伊邪那岐。伊邪那美命を祭る。これ雛祭のわざなり。五月五日ごろに。素盞鳴尊を祭るのみにて。七月に靈祭することもなし。(精靈祭のときくしをさす。)

問云。其祭をする神前に。神洗米。神酒などを供ふる事はなきか。外に供物はなきか。

寅吉云。供物は何もなし。たゞ水ばかりなり。

予が神前に釣たる鐵鈴を見て。此方の鈴は眞の鈴なりといふ故に。山人の方の鈴は。鐵とか問ひしかば。

寅吉云。眞鍮のもあれど。鐵の鈴が。上古の狀なりと云ふことなり。

問云。神前にて鈴を振ことありや。また神前につりてもありや。

寅吉云。神前にはつり置ず。手に持て振のみなり。但し此方の人は。小指の方に持てども。彼方にては。親指の方に持つなり。さて音のとぎれぬ樣に振なり。鈴をふれば土がふえ。人がふえるといふ事なり。

問云。其外に。神前にて用ふる鳴物はなきか。

寅吉云。神前に。鰐口をつりてあるのみなり。形は此方のにかはる事なし。

問云。神前にて印を結ぶこと有りや。

寅吉云。彼方の神道は。兩部なる故に。神前にても印を結ぶ。すなはち山伏の行ふ。護身法の印なり。

問云。兩部ならば。神前にて護摩をも燒べし。木はヌルデには非ざるか。

寅吉云。餘の木をも用ふれども。ヌルデを第一に用ふるなり。

問云。神前に鏡を立て有りや。また常に鏡を所持するか。また鏡をもて。魔を恐れしむる事は無か。

寅吉云。鏡は大切に齋き持て。魔除にも用ふる事あるなり。

問云。いか樣にして。魔を除ることぞ。

寅吉云。彼方の鏡は。紐付なる故に。其紐を持て額にさし上げ。吾が後へ光のうつる樣に。吾が目にも見ゆる樣にするなり。魔は後より來ればなり。凡て魔は前に見えても。後に居るものなり。

問云。外に魔を除る仕方はなきか。（寅吉云桃梅柊のズアヒを合せ鷄冠石を入れて魔をよける事有）

寅吉云。夜の旅。また魔所といひ傳ふる所などに行く時は。何にても女の身に付たる物を所持すれば。魔物も害をなさず。櫛にても。笄にてもよろし。また家を出る時に。女の股をくゞりぬけて出れば。決して魔の害に逢ざるものと聞たり。

問云。かねて聞たるに。妖物の障礙をなすと思ふ時に。立て股をひろげて。頭を垂れ。股より後を見れば。妖物を見現はすものと聞たり。然る事は知ざるか。

寅吉云。山にても。魔物の正體を見現はすには。此わざほど。手近き事はなしと聞たり。

問云。十種の神寶の咒文。中臣祓。六根清淨祓。三種祓。トホカミヱミタメなども唱ふるか。

寅吉云。右何れも唱ふるなり。但しトホカミヱミタメを唱ふることは。卜相の時のみなり。

屋代翁の許へ行たりし時。いはゆる舍利を出して。此を知れりやと問はるれば。

寅吉云。此は舍利といふて。佛物なり。天竺の海濱にあり。また唐土にも日本にもあり。子をふやす物なり。

世にいはる。雷斧の少さくて。婦人の衣を仕立るに。袖形をつくる。篦の如き形なるを出して。此はいかにと問はるれば。

寅吉云。此は名をば。知らねど。彼方にも有る物なり。座をくみて行をする時に。咽の乾けば嘗る用の物なり。時に依て目方に輕重あり。幾通りもあり。山より掘出ることあり。又海よりも上るものなり。

また獨鈷の。圖（圖缺）かゝる狀なるを出して。此はいかに。山にても用ふる事ありや。と問はるれば。

寅吉云。此は獨鈷にて。彼方のは。心を圖の如く（圖缺）劒鋒に作りて刺通し。またはりの爪にて抓樣に作る。此も座をくみて行をする時に。魔の妨害をなすを除る物にて。大指を隱して。（圖缺）圖かくの如

く持ち妖魔の妨をなす時に。嚴しく握れば。（圖缺）圖かくの如く開くを。突付て鋒を通し。いさゝか握りを緩めて。引倒す物なり。

問云。獨鈷を握るに。親指を隱すことは。如何なる故ぞ。

寅吉云。すべて拳を握るには。親指を隱すべき事なり。印を結ぶにも。常にも親指を隱して居るべき也。妖魔のたぐひ。害を爲さずと云ふことなり。

己かねて持たる。矢根石を出して。此を知れりや。此を用ふことは無かと問へば。

寅吉云。此は神の矢の根といふ物にて。神の軍を爲給ふ時の箭根なりとは聞たれど。彼境にては用ふる事なし。

また己が所持の。いはゆる石劒の。左に圖（圖缺）せる如きを見せて。此を知たりやと問へば。

寅吉云。彼方にても用ふる物にて。是よりは太く長し。行の時に。右手に握り。柄を膝に立て。鋒を肩にかつぎ。妖魔の障礙をなす時に。打拂ふ物なり。但し此には。性のよき石と。性の柔なると種々あり。此石劒は。もと木にて作れるが。石に化れるなるべし。甚だ性のつよき石劒は。鋒の缺たるも延る物なり。

さて見する程の物ども。何によらず鼻にあてゝかぐ故に。其由を問へば。

寅吉云。石にても金にても。香のなき物はなし。たとへ香のせざる物も。性のつよき弱きは。鼻に吸へば。心下に應ふる狀にて。分別せらるゝ物なり。

屋代翁の秘藏に。妊玉とて珍しき小玉二箇あり。其は大きさ◎これ程にて。平みあり。中に穴ありて。緒を通すべし。色は茄子の皮の如し。一箇はいさゝか少きが。色は白くて。形は替ことなく。穴あきたり。共に光輝いと美なり。元は茄子色の玉のみ得られたるが。白玉は。一昨年産れたる子玉なりとぞ。さて蟲眼鏡をもて見るに。親玉の穴に。赤玉を妊みてあり。其赤玉にも。いまだ産れざるに。いと少さく穴あきて有り。いと奇しく珍しき玉なり。此を見せて。いかに見知たるかと問はるれば。

寅吉甚く感じて云く。斯ばかり珍しき玉は。遂に見たる事なし。信に寶物なり。

また己が持たる。石笛を吹き聞かせて。此は知たるかと問へば。

寅吉云。たゞに穴明きて。ブウ〳〵となる石は。いくらも見たる事あれど。斯ばかり形の具はりて　鳴音のうるはしきは。見たることなし。

と云ひて。甚だ悦び。頻に吹ならす故に。此はいかにして出來たる物か。知らずやと問へば。とつおきつ。久しく考へて。はたと手を打て。

寅吉云。漸々に思ひ出たり。何處にてか有けむ。いと高き山の峯に生たる。樹の根の顯はれたるに。刺込たる如く。かゝる石の付て在しを見たる事あり。然れば木根に。口土の。千萬年付堅まりたるが。如此く化れる物と見えたり。然るにても此石は。形いとよく備はりたるは。然も非ざるか。石質を見るに。久しく海に入りて在し物なるべし。さて石はもと無き物にて。土の堅まりたる物と思はる。其故は。土の石に化かゝりたるが。海邊に幾等もあるなり。

問云。この石笛を持來るとき。供に違たる者。これを取落したるに。下なる石にうち當りて。缺おつべき程のひゞきを付たり。人々終には。缺て離るべしと惜みけるに。高橋安左衛門といふ者。日ごろ口早き男なるが　此石終には缺落べく見ゆ。師の學業成就すべくは　此瑕いえ付べしと云へるが。己心にかゝりて。いかで此瑕をなほしたく思ひて。もと下總國海上郡。小濱村の八幡宮より。賜はれる物なれば。其方に向て。此瑕なほし給へと。朝ごとに祈りしかば。其驗やらむ愈付て。今は瑕とも見えぬ樣に成れる故に。人に其事をいへども。元のひゞきを見ざる人は。信ぜざるも有り。石のひゞきの愈付と云ことも有か。知らずや。

寅吉云。かゝる性のつよき石は。缺おちだにせねば。愈付ものなり。心を付て見れば。此邊にも。堅石の色異なる筋を引たるがあり。其みな自然と愈付たるなり。また石をつぐ法もあり。また石を作る法もあり。

問云。石をつぐ法はいかに。此方にても付べきか。

寅吉云。何の造作もなき事なり。へな土に鐵粉を交へて。ひつたりとつぎ合せ。瀧の源など。水の烈しく流るゝ處に。物にさはらぬ樣にして。半年か一年も置けば。いえ付もの也。然して付ざる大なる疵は。

すべてに泥を塗りて。瀧の流れに置ときは。遂につぎ合ふものなり。瀧ならずとも付なり。
問云。それは。彼境の山人たちが爲てこそ付べけれ。此方の人が爲てはいかゞ有らむ。
寅吉云。こちらにても付そうな物也。試み給ふべし。
予が藏たる禹餘粮壺を見せて。此を知れりやと問へば。此の海邊にても。山にても。折々見る物なれど。心を付ざる故に。何物と云ことを知らずといふ故に。此は禹餘粮壺と云ふ物にて。自然に出來たる物なるが。中に。禹餘粮とて。米粒の如くにて。土とも非ぬやわらかなるものありて。痢病に用ひて。功を爲す藥なりと云へば。例の如く鼻にあてゝかぎて。傍の者に釘を一本給はれといふ。すなはち與へたれば。壺にやゝ久しく摺あてゝ。少く粉の落たるへ。釘をかざして粉を吸はせ。此は磁石の氣ある物なりといふ故に。予云く。實に然なり。此壺に清水を入れ。五七日おきて。鐵醬に用ふるに。よく染る物なり。それ故俗に。鐵醬壺とも。おはぐろ壺ともいふと云ひしかば。然も有べしと。天地の妙を甚く感じて。磁石の性を。よく知たりげに云ふ故に。磁石はいかなる理にて。鐵を吸ふならむと問へば。
寅吉云。鐵の性は。物を吸よせるもの故に。磁石はその性氣の凝りて。石と化れるなるべし。然思ふ故は。この大地の心は鐵にて。北の方には其氣凝りて。磁石山の出來てある故に。磁石の蟲が。同氣相應じて。北へ向ふと師に聞たり。
といひて。磁石針の製法は。如此々々といふに。少も違ふ事無き故に。山人たちの飛行にも。磁石を用ふること有やと問へば。
寅吉云。常に所持して用ふることあり。但し日本にて製れる磁石針は。遠きから國に行ては。向のあちこちに感ことあり。合點行ざる事なり。
といふ故に。其國は。いと寒き國には非ざりしか。國の風俗は。いか樣なりしとぞと問へば。
寅吉云。人なき山上にて。磁石を試たる故に。國の風俗は元より。人物の有無をも知らねども。殊の外に寒く。晝も夜の如く。闇き國にて有しなり
と云ふ故に。予攷へて。萬國圖を出し。口口口の國邊を指て。汝が磁石を試したるは。此邊にても

有べし。其は磁石の變たるにあらず。磁石は元より。北極の所へのみ向ふ故に。この口口口國などは。日本とは。北極を中におきて對ひたれば。彼國へ行て。日本の南にあたる事のみを思ひて。北極を隔たる事に心付ては。然思ふべき事なりと云へば。いたく悦びける。此時ふと思ひ付て。試に須彌山を見たるかと問へば。

寅吉云。須彌山といふ山ありと。書物に記しては有れど。實はなき事にて。大かた此國土から。天までをかけて。假にいふた物であらむ。と師の說なり。然も有べく思ふことは。八萬由旬の高さと云へば。根ばりは。其一倍も二倍も無ては。立て居ぬ理なれば。頂上は見えずとも。麓の見えぬ事は有まじき理なるに。師に伴はれて。星のむら〳〵見ゆる大空へも昇りて見たれど。何處まで行ても見えず。我が師にさへ見えねばこそ。無き物ぞと言るゝなれば。須彌山といふは。誰かよいかげんに云ふたる事と。思ひ決めたり。其に就て。かねて思ふに。この大地は。何でも丸き物で有うとおもはる。其故は。西へ〳〵と行けば。東へ來ればなり。また大地の成はじめを思ふに。丸く潮のこゞつた樣な物でありし所へ。國國が成たでは無いかと思はるゝ。其故は。大空に昇りて見れば。國よりは海が多く有り。又高山の峰などに。蠣殻をはじめ。貝殻がいくらも有ればなり。さて大地は。圓き物とは思ひ決たれど。海川の水の溢れず。また丸き物のまはりに國ありて。人の住ひ居る理は知られず。

と云ふ故に。予云く。大地は元より圓き物なる故に。地球ともいふ。球の字はマリと訓む字にて。大空に球を突上たる如くにて有り。然るに海川の水の溢れず。まはりに人の住居る理は如此しと。かねて古史傳に記しおける考を。讀聞せたれば。甚だ悦びたり。また此時試に。極樂地獄を見たりやと問へば。

寅吉笑て云く。地獄極樂といふは。愚なる者を威す爲に。後人の作言したるなり。と師說なり。殊に極樂は。十萬億土にあるといへば。地つゞきと聞ゆるに。師に伴はれて大空に昇り。遠き國々までも行て見たるに。何と見ても。大地は圓き物にて。くるりと廻りても。十萬億土はありそもなし。

問云。師のをり〳〵。戎の國々まで廻り行るゝは。何の用ありて行るゝ事ぞ。
寅吉云。何の用事をとゝのふるか知らず。
問云。戎の國々の人と。師と應對する事ありや。
寅吉云。何處の國々に行ても。其國々の人物となり。其國々の言葉をつかひて。應對せらるゝなり。惣じて言葉の異なる國にても。其音聲の色を考ふれば。悟らるゝと云ことなり。其は人のみならず。鳥獸の鳴聲にて。其心をも悟られ。蟲の囀にて。其情も悟らるゝ由なり。
問云。文化十一年十二月二十七日。節分の事なるが。池ノ端の正慶寺にて仕ひたる。十四歳の童子。是より前に。しば〳〵異人に伴はれたることありしが。此日近所へ。糊を買ふとて出たるに。いつも伴ふ異人あひて。童子に云けるは。汝寺に奉公すること勿れ。と禁めたるに。何とて寺に奉公せしぞ。今より參りて。其由を御わび申せといふ。童子云けるは。然らば糊をかひて。寺におきて行べしといふに。異人云く。糊を買ずとも。錢を此店におきなば。此より寺へ屆くべし。疾く我と伴ひ行けといふゆゑに。童子その言に從ひて伴はれたるに。空をかけりて。一息に。筑紫の筥崎八幡宮まで至りたるに。宮の豆蒔にて。豆と封守を蒔たるを拾ひ。其より又やゝ暫く空をかけり。幾里ありとも知らぬ。石の屏をつきたることき上に至りて。此はもろこしに名高き。萬里の長城なり。いさゝか遠途なれど。此を汝に見せむとおもひて。此方をかけたりと語りて。其よりまた。遙に空をかけりて行けば。甚だ寒く。日輪常に見えて。天目ほどに見ゆる所なり。いと美麗に壯嚴したる。城郭の如き域に至りぬ。斯て童子其域内を見るに。人物みな日本の人にて。諸商人の店もならび立て。此國に替ることなく。通用の金銀も。小判小粒南鐐丁銀など。皆此國のに替ることなく。たゞ錢のみは。仙臺錢のやうに見えしとぞ。さて彼異人案內して殿に上れば。玉簾を垂れて。貴人五人居給へるが。老たるも若きも有れど。みな日本の人々にて。天子の御裝束の如きを着せられたり。御前に出れば。汝この方に止まるや。古鄉に歸りたきやと問給ふ。童子古鄉に歸りたき由を申せば。伴ひたる

異人すゝめて。然ないひそ。此方に止まれといふ時に。貴人たちの云く。心に應ぜずは。强に留むる事無用なり。四五日おきて送り歸すべしとて。種々菓子など賜ふに。みな日本の菓子に替ること無し。貴人たちの言に。我々と同等の人々八人あるが中に。三人は日本に住るゝを。我等は思ふ由ありて。此處に住するよし。宣ひけるとぞ。さて寄合部屋の樣なる所に下りたれば。近頃作はれ來て。止まる人々と見えて。いと多く居たり。四五日逗留のうちに見れば。其人々に。日々に鐵を丸めたる蠒の如き物を。眞赤に燒たるを持來て。咒文を唱へつゝ。一人々々に。身體のこらず推あつるに。熱き狀にも見えず。また大なる釜に熱湯を沸して。咒文を唱へつゝ。大勢を入れて。蓋をなして煮るに。これも更に熱き狀に見えず。これ日日の事なり。さて翌年の正月元日に。人の來て。童子に云けらく。上に御客ありて。其方がことを宣へば。明日は返さるべしといふ。二日の晝ごろに。また貴人たちの前に召出され。今日々本に歸すべしとて。異人を六人呼出し。其處々の用事ども調へつゝ。此者を送り歸すべき由を命ぜられ。高座の前に。金か眞鍮か知らず。大なる玉の上へ。磁石の針の如き。ねぢ廻す物の付たるを。命を受て行く人々の。赴くべき方へ向て授けたまへるに。即空に伴ひ上りたり。此器は。空行の術の未熟なるを仕ふ時に。用ふる器なりとぞ。さて東北の方なる。某處々々の用事を調へて。日本の空に來りて江戸に入らむとする頃に。しきりに寒かりし故に其由をいひしかば。深川靈巖寺に火災あり。彼處まで待べしとて。彼寺の空に彳むと思ふ程に。火災起りしかば。其火にあてたり。これ夜明の事なり。其より伴ひて。朝五時に。飯田町中坂なる。稲荷社の末社の。金毘羅神の屋根にさし置て。近所に汝の叔父あれば。程なく迎ひに來るべしとて。異人たちは去にけり。斯て所の者ども。童子が金毘羅神の屋根に居るを見て。抱きおろし。叔父に告たるに。童子二三日は夢中の如くにて在しが。覺て後に問へば。右の事どもを語りけるとぞ。殊に奇なるは。髮月代ともに。今すり結たりと見えしかば。其由を問ふに。彼方に。日本橋邊の。何

某といふ髪結ひの住居るに頼みて。今朝結ひたるなりと云ひしとぞ。(此事は倉橋與四郎ぬしの聞記えて。語られしを擧たるなり。彼ぬしの說に。千里の長城より深く。日の天目程に見えて。常に見ゆる所に入たるを思ふに。彼域は。韃靼の奥地。シベリヤの奥なるべし。燒たる鐵を額にあて。熱湯にて煑るなどは。謂ゆる三熱の苦とは。此を云へるにやと云れたり。然も有べくや。)其方師に伴はれて。然る域に至れる事はなきや。

寅吉云。池端の正慶寺は。我も暫く居たる寺ゆゑに。此事はかの寺にて聞たり。我はいまだ然る域に行たる事なし。然れど千里の長城か。何か知らねども。誠に千里も有らむと思ふほど。砂山の如く見ゆる。高土手の有る處は。空より見下したる事あり。

問云。未熟なる者を飛行せしむる時に用ふると云ふ。金色したる玉を見たる事は無か。鐵丸を燒て額にあつる事。釜に入れて煑る事などはいかに。

寅吉云。飛行せしむる玉は見たる事なし。鐵丸を燒て額にあつる事もなし。釜に入れて煑ることは。熱湯の行に似たる事なり。

問云。右の童子の物語に。伴ひたる異人空にて。深川の靈巖寺に火災を起したるといひ。豫て聞たる物語にも。下總國笹川村なる。須波の社の社木を。天明年中の頃。同國銚子の觀音堂を建る材木に賣たるが。其冬木取既に成て。近き內に造建むと催すころ。常陸國石手村の半兵衞と云者。銚子に商ふ穀物薪など積たる舟に乘りて。銚子の川邊に。舟泊して在ける夜に。髮長く眼ざし恐しき異人兩人。何處よりともなく來れるが。思ひかけず。行逢たりげに挨拶して。舟に入たり。半兵衞伏ながら。息をつめて見居たるに。異人どもまづ。船に積たる薪を拔とりて。忽に火を燃してあたりけるが。一人の云く。そこは何處に行給ふぞと問へば答へて。我は中國邊に。しか〱の用ありて行くなり。そこは何所へと問ふに。一人が云く。笹川の須波の社の神木をもて。觀音堂を建ること。不埒の事なる故に。燒拂ふべき由。命を受て向ふなりと。なほ種々の物語して別れける。半兵衞は身毛よだちて聞居たるが。其明朝に。觀音堂の普請場より火出て。材木殘らず燒亡しけるとぞ。(此事

は。右須波社の神主。五十嵐對馬物語なり。また近ごろ江戸神田三河町なる。幸慶といふ佛師。神がくしになりて。十日ばかりに。西國三十三所の觀音を始め。名所古跡をめぐりて歸れり。然るに或夜。火ノ見櫓の鐘をうつ音をきくと等しく。此は小日向音羽の。安養山還國寺の火災なりと云ふ。人々その由を問へば。今かの西國を件ひ巡りし異人來りて。今夜は面白き事見すべしといふ故に。何事を爲給ふと問ひしかば。還國寺の僧身持善からぬ故に。燒くなりと云ひて。今出られたりと云けるとぞ。其方の師も。火災を行ふ事ありしや。

寅吉云。實に然る事あり。師と共に大空の寒き所を通る時に。寒ければ。此先に火にあつべき所ありとて。其所に至り。纔に烟管の火皿の火ほど。空より落せば。家一軒。または二三軒十軒。或は一村も火災あり。其時空にて。いざあたれとてあたる事なり。師の心の如くなる山人計りはなき故に。あちを燒けば。又こちをも燒くなり。其燒く家所は。みな心善からぬ人の家。または汚れたる家所など。何ぞ心に應はざる所を燒くなり。況て神は社木を切ことを惡み給ふ故に。社木にて建たるは。いつか一度は燒るゝなり。

問云。其火は何處より。いかにして出すことぞ。常に火打火繩など持居るか。

寅吉笑て云。燧や火繩を用ふるやうな事はなし。胸また腋下など。體中いづこよりも出す。揔じて人の體には。火みちて有る故に。通を得たる上にては體内何處よりもつまみ出すなり。

問云。天狗甚右衞門と云ふ者。年ばかり神隱しになりて。此ごろ歸り來れるが。劒術師谷川源左衞門に語りて。山人及び天狗の類に。邪正强弱さまざまあるが。共に世の惡行不淨の罰を掌る物ぞ。と云へる由なり。實然る物にや。

寅吉云。實然る事なり。師の身内より火を出して。家所を燒なども。やがて罰を行ふなり。

問云。然樣に各々罰を掌る事は。何れの命によりて行ふことぞ。

寅吉云。何よりの命なるか知らず。大かた神々の命命を受傳へ來て。行ふわざなるべし。

問云。大空より。此國土を見たる狀はいかに。
寅吉云。やゝ飛上りて見れば。海川野山。人の往來ふ狀まで見えて。夥しく廣く丸く見ゆるが。漸々に上りのぼりて見れば。段々に海川野山の狀も見えず。むら〳〵とうす青く。網目を引延たる樣に見ゆるを。なほ上るまゝに。段々少さくなりて。星のある邊まで昇りて。國土を見れば。光りて月よりは餘程大きく見ゆる物なり。
問云。星のある所まで行たらむには。月の狀をも見たるか。
寅吉云。月の狀は。近くに寄るほど。段々大きになり。寒氣身を刺ごとく嚴くて。近くは寄難く思ゆるを。强て貳町ほどに見ゆる所まで。至りて見たるに。又思ひの外暖なるものなり。さてまづ光りて見ゆる所は。國土の海の如くにて。泥の交りたる樣に見ゆ。俗に兎の餅つきて居ると云ふ所に。二ッ三ッ穴あきて有り。然れど餘程離れて見たる故に。正しく其體を知らず。
爰に予云けらく。月の光る所は。國土の海の如しと云こと。西洋人の考へたる說もありて。然る事に覺ゆれども。兎の餅つきて居る如く見ゆる所に。穴あきて有しと云こと心得がたし。彼所はこの國土の岳の如く聞ゆるをや。と云へば。
寅吉笑て云。あなたの說は。書物に見えたる事をもて宣ふ故に違ふなり。我は書物は知らず。近く見て申す事なり。尤も師も岳なりとは云はれつれど。近寄て見れば。正しく穴二ッ三ッ有りて。其穴より月の後なる星の見えたりしなり。然れば穴ある事疑ひなし。
問云。星はいかなる物と云ことと見知たるか。
寅吉云。星は國土より見ては。細なるが多く竝びてあると見ゆれど。大空に昇りて見れば。いつも明るき故に。此土より見たる程に。光りては見えざれど段々にしたゝか大きく。四方上下に。何百里とも知らず。遠く離れて夥しくあるが。大地も其中に交りて。何れ其とも見別がたし。爰に心得がたき事は星のいかなる物ぞと云ことを見たし。と師に言ひしかば。見すべしとて。此土より見て。殊に大きく見ゆる星を目ざして。連上りしが。近くに寄るほど大きく。ぼうと爲たる氣に見えたる。其中を通り拔た

る事あり。通りぬけて。遠く先へ行て顧り見れば。本の如く星にて有しなり。然れば星は氣の凝たる物かと思はるゝなり。(朱書云またかの俗に銀漢といふ物はたゞ白くおぼろ／＼と見えて少し水氣ありて中にいと微さき星のしたゝか見ゆるものなり)

予また此說を心得がたく。其席に佐藤信淵も在しかば。そこは天地間の理に精ければ。此事を辨へよと云ふに。信淵辯を作りて云く。星の體は。其質この地球と同くして。重濁の物の凝結せるなり。然れば貫透すべからざること。地球の貫透して。通行すべからざるが如し。かつ其光輝あるも。自發するに非ず。日輪の遍照を受て。光明あるなり。然れども。其質の地球と同物なるを以て。地球に准へて此を推究むるに。地球は。日輪の既に沒する後も。地平下十八度の處に至るまでの間は。地上なほ薄明あり。又その未出ざるの前も。地平下十八度の處に至れば。地上既に明を發す。此理何となれば。大地球の外。大凡五六百里の程は。いはゆる風際にて。風際は悉く半水半氣なる故に。其水氣に。日輪の遍照を被るをもて。光輝を發す。

こゝを以て日輪の出前沒後。およそ五刻ほどは。薄明あるなり。此に因りて此を推せば。大地を距ること數萬里にして。暗處より此を顧み見ば。地球もまた。一箇の明星なることを知る。彼諸星もまた。大地と質を同くする物なれば。此もまた地球の如く。星外周圍に。數百里の半水部分ありて。日輪の遍照を受て。光輝有べければ。寅吉若くは師に伴はれて。その半水部中分を通行せるか。然れども大虛空中。すべて日輪の遍照の光被せむ限は。星を見ることを得べからざるなり。假令よく見る事を得るとも。白晝の月の如くにて。遠より見れば。星なりといへども。近づくに及びては。我が大地と異なる事なくして。其光を見るに因なし。凡て諸星は。暗夜に非ざれば。其光を現す事なし。我が大地の暗夜は。地上より見れば。廣大なるが如くなれども。全空よりして此を觀れば。地影の及ぶ所は。僅に月輪の在る處に。屆くに過ぎず。山人たち。もし大地を飛去りて。星の在る邊に至らむには。何れの處も白晝にて。我が大地といへども。其在る所を失ふに至るべし。近く

は金星か。或は水星火星等の、日陰なる暗夜の處に至るに及びて。始めて地球星の光輝。および其他の諸星をも見る事を得べきのみ。然れば星の實體を透通せるとしては、理に於て信じ難し、然れども寅吉が言、悉く眞實無妄にして。道理に符合せざる事無ければ。此言に於ても妄とは誣がたし。必ず金星水星火星などの、日陰なる闇夜の處に至りて。其蒙氣を透通したるを。星の實體を透通せると思ひ、また其處より。地球の。諸星と同く光るを見たるにぞ有べき、又若くは。列子がいはゆる。西極の幻人の如く、杉山々人の神通廣大にして。實に入れども得らざるか。是また我儕の得て知る所に非ざるなり。

問曰。大虚空は、いつも明ならむに。星の光りて見ゆべき様なし。いかゞ

寅吉云。此土より。晝は星を見こと能はざるをもて然は疑ひ給ふなれど。

問云、日輪はいかなる質と云こと。見知たるか。

寅吉云。日輪は。近く寄らむとするに。燒る如くにて寄られず。然れども。目眼鏡にて見たるよりは。遙に增りて。よく見ゆる所まで昇りて見たるに。炎炎たる中に。雹の如くひらめき飛びて。闇く見ゆる故に。何なる質と云ことは知らねども。何か一物より。炎の燃出る如く見ゆ。又試に、手火を燭して見るに。日の近くにては。さらに光なく。火焔見るがまに〳〵。日に吸よせらるゝ如く。忽に上りつくる物なり。また其處によりて。日を半月の如くに見る事も多く。又少さく見る所もあり。夜國の事を、ホツクのチウといふ、日は團子ほどに見えたり、日の見えぬ國もあり。地にいくつも穴を掘りて光らす。人は鼻高く、〔極カ〕口大きく。親指二本あり（鋏云ホツクのチウとは北國の中と云ことか、

問云。日月ともに。神々の住給ふ國なりといふ說を。山人たちに聞かざるか。

寅吉云、然やうの說は。聞たることなし。

問云。美成曰く寅吉は。三十三天を見たるに。第一天青く。それより五色の次第にて。下もまた蒼しといへるよし。誠に然りや。

寅吉苦笑ひして云く、三十三天といふ事は、妄說なる由。かねて師に聞き置たれば。然は言はず。美成

ぬしの方にて。物語のついでに。虚空に上りて見るに。青くも赤くも。黄色にも見ゆる物なり。其處に唾を吐て見るに。然る色に見ゆる物なり。と云ひしかば。傍に佛書ずきの人ありて。それこそ三十三天なりと云へりしを。美成ぬし。己が言と聞あやまりて。平兒代答にしか記されたるなり。(空中青赤黄の三色をあらはすこと西洋人考ありとぞ)

問云。熒惑星を近く見れば。白き星にて。二つあり。日の先に立てめぐる。是すなはち摩利支天なりと云へるよし。誠に然るや。

寅吉云。これも違へり。日の先に行りて。白く見ゆる星二あり。これを世には摩利支天といふ。と云ひしを。聞誤れるなり。我は熒惑星といふ名をだに知らざるなり。世の人は摩利支天といふは。有る物と思ひ居れども。實は無き物に名を付たるなり。其故は。摩利支天法を行へば。三四日過ると。其法力にて。空に其紋現はるれども。雉子の羽をはける荻の矢を。桑の弓もて射る時は。忽に消失るものなり。實に摩利支天が。ある神にて。佛者の云ふ如く。尊き由あらむは。魔除の弓矢に射らるべき由なし。試みむとおぼさば。行ひて見せ申すべし。

問云。大虚空を飛行せし時に。迦陵頻迦鳥を見たる由を語れりと聞たり。其狀はいかに有しぞ。

寅吉云。何といふ鳥か知らねども。遠き戎國にて。白き大鳥の。羽がひに手のあるが。其鳴聲をきけば。簫に似たりしと語れるに。かの佛ずきなる人の。それは人面には非ざりしか。と問へる故に。然らずと答へしかど。其は疑ひもなく頻迦鳥なりとて。強て名を付て。寅吉は頻迦鳥を見たりとの事なり。と人々に語れる故に。平兒代答に。誤りて其名をもて記されしなし。摠じてかゝる事より。間違ひが出來るなり。見たる我だに何といふ鳥かと云へるに。見もせぬ人が。名の知れざる物に。名を付るといふは宜からぬ事なり。

眼鏡の玉を日に向けて。板に文字を燒き。文字書たる紙の字を燒などして。此は不思議なる物にて白き紙はやけず。墨の所ばかり燒るなりと云ふ故に。それは外國の人もする事なるが。まづは爲まじき事なりと云へば。

寅吉云。彼境にては。守札符字など尊き物をば。天

日に燒て用ふるに。甚驗あり。翁にほりたる。太兆を空中にて。天日もてやきトふ。すべて天日の火も。今此に用ふ火も。本は同物にて。石にも木にも金にも。火は含み有なれども。皆天日の火の分りたる物なり。其に就て。雷の夏鳴るわけは。夏は天火が厚く濃く。虛空にみちてある所へ。雲立騰るときは。雲は水氣なる故に。火氣これが爲めに狹められ。水氣に包まるゝ故に。雷となるなり。雲はみな水なり。細にぽち〳〵したる水粒なり。さて水氣に包まれたる火氣の。走りてもれ出たるが。稻妻なり。偖また雷を。あしき物と心得て。恐れ否かる人おほく有れども。雷がなくては。萬の物も出來ず。人もへる大切の物なり。

問云。雷獸とて。雷の鳴ときに。雲中をかけり。雷と共に落る獸あり。此物を知れるか。

寅吉云 彼獸は。日光大山筑波山など。其外の山々にも住て。毛色も虎毛なるあり。猪の如きあり。黑き有り。また稀には白きあり。其猛く荒き物なるが。如何なる故か。炎天の雲を好み。雷鳴するに乘じて雲中を飛行し。雷の降る勢ひに。飛損ふにや。雷と共に落る物なり。高みに昇り見れば。雲雷ともに下に見ゆる故に。雷の鳴る狀。また雷獸の飛行する狀も見えて。面白き物なり。白き雷獸の落たる所に。雷屎といふがあり。此は何物と云ことを知らず。

問云。龍は見たる事有りや。

寅吉云。通り物など云ふ程の。大龍の生體を。其の儘に見たる事はなし。濃き黑雲の長くなりたる狀にて。火燃出などして。太き尾を下たる如き狀をば。度々見たること有り。此も高みより見たるに。世には龍は天上すといへども。雲のなき大空まで昇りたるを。見たる事なし。さて彼方に在しとき。危き目に逢たる事ありき。其故は。とある河端に。小石ひろひて遊び居たるに。眞蟲よりは少さく。腹赤き小蛇。いづこよりか出來て。我が指を嘗るを。何とするらむ。いと奇しと暫く見居たるに。漸々に呑入れて河に引こまむとする故に。惜くなりて頭をとらへ兩手にて其口を引さきて。河に投入れしかば。忽に逆浪たちて。水を卷上げ。雨を降らして。恐しき狀になれる故に。足早に逃歸りて。其由を語りしかば。人々それは龍なりと云へりき。此に就て。何處か知

られど。遠き戎國に行たるとき。田や谷相などに。大なるは貳尺ばかり。小なるは蜥蜴位にて。角は無れど。繪に書たる龍の如き物あり。ちよろ〳〵と這ひて。多く在しが。何か探ぬる狀にて。前足にて。土をかき散す樣にせるが。其處より。豆粒ほどの。白き玉の如き物出たり。其物われて霧となり。忽に闇くなれる故に。氣味わろく。其處を立退しが。此は何と云ふ物か知らず。

問云。雲に紫赤靑黑などの色ある理を知れるか。

寅吉云。赤は日の映じて赤きなり。黑は雲のこきなり。其外の雲は。いかにして種々の色をなすか知らず。

問云。地震する理を聞たりや。

寅吉云。地震する理は聞たることなし。されど大地の下に。大鯰ありて。身を振りて。國土を崩さむとするを。鹿嶋の神の要石を。その頭に突立給へる故に。國土の崩るゝばかりの地震はせず。と云事は。妄說なる由は聞たり。

問云。潮のさし引する由を聞たりや。

寅吉云。此事も聞たることなし。然れど熟々考ふれば。晝夜をり〳〵に。國の浮沈する由ありて。其に依ことにやと思はるゝなり。

問云。世に丑寅の方を鬼門とて。重き祟のある方とし。また金神の祟と云ことも有り。此外にも。種々方祟りの說を云ふ者あり。彼方にても此沙汰ありや。

寅吉云。鬼門金神の方は。爭ひがたき由は聞たれど。餘に方祟のことは。餘りいはず。凡て人の方から。色々に名をつけて。祭る故に。妖魔その處に住みて。祟を爲すものぞと師說なり。

問云。人相墨色。劍相家相などの事は聞ざるか。

寅吉云。いまだ聞かず。但し人相は書物が入らず。知易きものなり。其故は。人は七情によりて。種々顏色の變るもの故に。それに本づきて。深く考へ入れば。其時々の情は勿論。その內心の善惡までも知らるゝとぞ。墨色も。書物は入らず。譬へば一の字をかゝしめて。其墨色の濃き薄き。筆のかすりなどに符牒を付て。易卜に合するまでの事なりとぞ。劍相のことは未だ聞かず。家相は軍陣の立かたより。割出たるわざにて。此も易卜に合せたる物也とぞ。

問云。彼方にて。常に用ふる卜かたはいかに。
寅吉云。易卜も有れども。用ふる事なく。常に行ふ卜法に。我か知たるも種々あり。まづ二ッ一ッと決すべき事に行ふ一法あり。又卜を賴む人の姓名を書たる紙を。逆に燒て。其燒くる狀を見て。卜ふ一術あり。又しばし目をとぢて。其時見えたる色をもて。形色を卜ふ一法あり。また卜を賴む人に字をかゝしめ。其文字の墨色を見て。吉凶を卜ふ事あり。また兩手を懷にして。脇下の毛をぬきて卜ふ一術ありまた系卜とて。績麻の先を人にもたしめて。其本を我が耳にあてゝ。卜ふ一術もあり。其外に。異なる卜かた數々ありて。悉くは述がたし。○易は過去つた事を見るもの也。當時の事を見るには心易がよし
問云　江戶神田鍛冶町に。天狗庄五郎といふ者今も現在なり。此者若かりし時。異人に誘はれて。二三年も歸らざりしが。歸りて後に。咒禁祈禱などよく驗あるが中に。卜ひのわざは得手なりしが。其卜の狀は。天目に水を入れて。兩手にて目八分にさゝげ。卜を賴む人を向ふにすゑて。其顏をつらつら見。また捧たる水を見て卜ふに。中らざる事無りしが。色欲に淫して後に。其術ども皆きかずなりしといふ。如ㇾ斯き卜法は知らざるや。
寅吉云。山人によりて。各々種々の卜法あれば。其法も。何處の山人にか習ひたるなるべし。我はいまだ見知らざる卜法なり。但しそれに似よりたる。鏡卜といふ卜法あり。
問云。其卜法はいかに爲て行ふぞ。
寅吉云。其法は。よき古鏡を二面。兩手に持て。まづ卜相す人の面相をよく視て。當時の事を知り。右手なる鏡に。其顏をうつして。來年の事を知り。右手の鏡にうつれる顏を。左手なる鏡にうつして。三年目の事を知る。人相の卜法に。これほどよき法は無れど。我いまだ委くは知らず。
問云。口寄いちこと云ものゝ業はいかに。
寅吉云。あれは犬神法といふ邪法なり。われ山に在し時。同友二人に伴はれて。見廻りけるに。或家にていちこを招き。老若男女四五十人集り。口よせして。色々尋ね泣居たり。我等三人その邊に居て見るに。いちこの腰元に。何やらむ大切にする箱ある故に。我それを見たき物ぞといひしかば。喧嘩をおこ

して。騒に箱をこわして。中を見せむと。喧嘩を興させたるに。互にうち合ひ。抓み合ひける騒動に。彼箱を蹈摧きぬ。其時中より　犬頭の髑骨ころび出て　其下あごを蹈欠たり　さて喧嘩しづまりて後に。亭主その頭を見つけて　如何してかゝる汚き物の。こゝに有しやらむとて　外に蹶飛したり　其時いちこが泣たること甚し。泣居たるおゝばゝは。恐れて逃げ。若き者どもの泣居たるが　抓み合ひて事こわしたる狀。まことに面白かりしなり。さて此後に。いちこが犬の頭を持たるは　何の故にと尋ねしかば　彼法は　犬神法といふ法にて　白き犬の大なる　しかも甚だ强きを執へて　土に穴をほり　其頭ばかりを出して　其鼻先を三尺ばかり放して　飯魚など多くつみ置て　香をかゞしめ　頻に食たがるを食せず　數日おけば。犬の身體の勢氣。みな頭に上りて　眼鼻より血を流しなどするを見すまし。我に仕へてよく事を敎へなば　神に祭り。日々にかゝる食を與へむといひ含めて。其頭を切落し。人に知らせず。四辻に埋めて。百日餘り人に踏しめて掘出し。箱に封じて。日々に祭れば。口寄のときに　犬の靈人々の家に行て。樣子をかぎ出し告る故に。いちこが口走ると。聞人が頻に悲しく。信仰になりて泣なりと聞たり　泣ことは。天下の不吉なるに　市子と云ふものは。とかく人を泣するから。信に不吉なる物なり。

問云　犬神法は。天竺の法か。此國の法か。何人の爲始たるといふことぞ。又四國にも。犬神遣ひと云ふがあるよし。同法なるべきか。

寅吉云　犬神法は。もと何處の法と云事。また爲始たる人の事もきかず。四國のも。犬神遣ひといへども。オホサキ狐といふ物を使ふときゝたり。

問云。泣ことは。天下の不吉なりとは。いかなる事ぞ。

寅吉云　小兒は是非なけれど。大人は泣まじき物といふ事なり　其故は　神たち泣聲をきゝ給へば。耳をふさぎ給ふ故に。天下の不吉となるとて。正しき山人は殊の外に嫌ふなり。女はまだしもなれど。男はなるたけ泣ものにてなし。と師の敎なり。

外法のこと

小島氏にて。一夜ずしを賜へる時に。わろあるじ此はわろき鮓ぞ。と挨拶せられしかば。わろ

きと云ことは。云ぬものにて侍る。といふ故に、
其由を問へば。
寅吉云。わるきと云事は　成だけ云はぬ物なり。殊にわろき天氣などいふ事は宜からず　よくふる天氣など云べき事と。師の教なり、
また或人。結喉の事を云ふとて。咽佛といひしをきゝて。
寅吉云。俗の人は。咽の骨を　咽佛といへども、我が山にては咽神と云ふなり　米の事も　ぼさつといへども。神と云ふがよし　と師は云はれたり、
といふを聞て　傍に在し或人　咽佛ぼさつなどは。俗のいひなれ故に、聞苦しからねど。咽神といひ。米を神と云ふ事は　をかしく聞ゆといひしかば、
寅吉云。それ宜からぬ心なり。よき言はいひ〳〵して。世人のをかしがらぬほど。いひゝろめるがよろしきなり。
問云。彼境にも、忌詞とて、病を休といひ。泣を鹽垂、死を直り、墓を土塊　血を汗　佛を中子、僧を髮長、堂をあらゝぎなど　よき詞に替て云ことは無か。
寅吉云。然やうの事あるかも知らねど。氣がつかず。
問云、其方の師は　不動法、陀祇尼天法。聖天法。麻利支天法、飯綱法など。其外佛道より出たる種種の法を　修せらるゝ事はなきか。
寅吉云　師も此等の中なる法を修する事もあれど。實は無き物に名をつけて　觀音、不動、麻利支天などゝ稱せる物ゆゑに、快からぬ法どもなり。況て陀祇尼天。飯綱　聖天などの法は。天狗　狐。妖魔の類を祭りて役ふ法ゆゑに、實は行ふべき事に非ず、と常に示さるゝ事なり
問云。實は行ふべき法に非ずと示しつゝ。師も其法どもを修せらるゝ事　心得がたし
寅吉勃然として云く。陀祇尼天法　飯綱法は　狐天狗などを役ふ法ゆゑに、我が師などは修することなし　唯聖天法は　時々行はるゝ事あり　其故は　聖天は　世の障碍をなす物故に　一名を障碍神ともいひて。妖魔の首領なる故に、障礙をさせじと。其法を修するなり、世の修驗者などの　利の爲に行ふ法とは大きに異なり。然るは師の本行は。偏に善事を修して。天下泰平、萬民繁榮を祈り。遂に眞の神と

なる行故に　神道を本と立たり　然れども世の並に。佛道より出たる法をも修し　兩部を用ひて　神壇の外に。いはゆる須彌壇をもかまへ　佛法ざまの祈を爲ても。世にも我が行にも。障礙あらせじとなり。されど世の人々。此國の神ならぬ。かやうの物を多く信仰して　其を專と祈り祭る故に　神を麁末にすること始りて。神には威靈のなき樣に成たり。と折折言るゝ事なり。

問云。世の修驗者など。利の爲に行ふといふ。聖天法の狀はいかに。

寅吉云。いはゆる浴油の法なり。まづ聖天といふ物のさまは。象の服物を著たるにて。甚だ妖々しく。男女抱相たる。交合の銅像なり。それ故に。歡喜天といふとぞ。然るに其像を油煮にして。强たる祈をなし。供物の團子には。驗者の指より。活血を出してそそぎ入れ。また小麥粉をもて。聖天の像を作り。此をも油煮に爲て。團子と共に食へば。聖天と一體になりて。願望成就するといふ法なり。驗者の驗德卓れたるには。聖天かならず物言ふとぞ　かゝる惡法なる故に。行ふ人々。しばしの幸は得れども。遂には身の禍害となること。皆人の知れるが如し。（アミダの體に針生たること。）

この後寅吉　人の賴みに依て。寄祈禱と云ふわざをするを聞けば。いはゆる六根清淨の祓詞を讀て十一面觀音の眞言を唱へて　寄本尊とする故に事畢りて後に。先ごろ觀音と云ふも　無き物なるが。像を造りて名を負たるなり。と言へるに非ずや。然るに其を寄本尊に立て　祈ること心得がたし。また然る無き物の。寄來る事も有るはいかに。と問へば。

寅吉云。すべて寄祈禱を行ふ訣は。人の心に。是はいかに有らむ。と辯がたき事のある時に。神に問ふて知らむとするわざなれば。神をよせて。伺を立るが本なれども。神を寄るは恐多き事故に。世間の祈禱者。また我等も。兩部めかしき。不動觀音摩利支天などを。寄本尊に立るなり。然れども此等は。右云ふ如く。實は無き物に名をつけて。像を設たる物ゆゑに。寄來ることなく。世に種々うろつき居る靈鬼妖物などが寄來て。驗を現はす事ぞ。と師に聞たり。これ實に然有べく思ふ由は。我この法を。もと

人に習へるに非ず。或時戯に寄人を立て。暫く祈禱の眞似して。取留なき言どもを、色々唱へて在けるに。何やらむ寄付て。其驗ありし故に。驚きて師に。其由を問しかば。右の如く示されしなり。是より後は、其意を得て 此祈禱を行ひ 世人なみに、觀音不動摩利支天など、何によらず、兩部めける物の眞言を唱へて 祈を爲すに、十度に七度は、何やらむ寄來て驗ある故に、たとへ妖鬼の寄來るにもあれ。病人などの事を、此病癒べくは 寄人の持たる幣を左に上たまへ。癒まじくは。右に上たまへなど祈るに。其言の如く驗あれば、人の爲ともなる故に。人が頼めば行ふ事なり、

余きゝ畢りて、其說を譬て 古史傳に記せる 久延毘古ノ神の 足は行かねども 天下の事を 悉く知る。といふ條の說を讀聞かせたるに 甚く悦びて、此にて寄祈禱の驗ある理を。いよ〳〵 慥に思ひ決めたり と云へりき、○また此の後に彼此より頼まれたる 呪禁祈禱などの多かるに。其を行はむとはせず。徒に遊び戯れ居るを、余傍より。とく行ひてよと云へど。唯のみして。蜜柑よ椎實よとねだり、頼みの事どもは。明日にせむなど云ふにぞ、其由いかにと問へば

寅吉云、加持呪禁など、世の人は甚だ好む事なれど。我は然しも心にすゝまざる故に、遊びたくなるなり。

と云ふ故に、また其由を問へば

寅吉進みよりて云く、加持呪禁など 隨分に驗ある事も多くは兩部の法にて。正しく思はるゝが少き故に、我が心に應はず。然れども是までは、人の頼み故に。是非なく行ひし也。よし人が頼むとも。自分の心に應はざる事を行ふは。心宜からず 病には。藥を用ふるほど宜しき事はなきに 加持呪禁などを先とするは 愚なる事なり 良醫者にかゝり、藥を飮ことを第一にして 其藥の驗ある樣にと 神々に祈るべき事なり 加持呪禁に をり〳〵驗ある事は 行ふ人の一念と 受る人の信仰とによる事のごとく思はるれど。此も世に多かる鬼物の 與ふる驗かと思はるゝなり 其故は 或田舍人の胸やくるとて苦みけるに。我戯に加持する眞似をなし、胸に龍吐水をかき、其傍に 知れざる樣に 十人火けしと書たれば、即座に癒たる事ありしなり。

此とき余云けらく。加持呪禁の法ども。多くは兩部めける故に。心に應はずと云ふこと。藥を飲て。其驗のある樣にと。神に祈るべき事と云へるなどは。實然る說なれど。病には藥を第一にして。と云こと甘心せず。其故は。其方も知らむ。神代の卷にも　大己貴ノ命少彥名ノ命と二神にて。呪禁と藥のことゝを始給へる由見えて。上代には。呪禁が第一にて有しなり　然れば。今傳はる呪禁どもには　佛法のわざも交りたれど　其は擇び捨て。上代の正しき呪禁を探ねて。其を第一とし藥を次にするぞ　眞の道なると云へば　甘心しけるに後にまた屋代翁も。此說に及びて　我はたとへ兩部の法なりとも。呪禁を第一にして。藥を次にせまほしく思ふなり。其故は。呪禁は兩部にても。用ひて身に害をなさず　藥は用ひ過ちて　人に害を爲こと多ければ　古人も　藥せざれば中醫にあたる　とは言へるなり。と云れしかば　寅吉ますます感伏したりき。○或人戲れて　寅吉に謂けらく　我は此世に住侘たれば　山人に成たくと思ふを　山に歸るとき　いかで我をも伴ひ給へと言へば。

寅吉信と思ひ。居直りて云く。それは以の外なる事なり。神を置ては。世に人ほど貴き物はなきに。山人天狗などの境界をきゝて。羨しく思ふは。心得の宜からぬなり。人は此世に住て。此世の人の。あたり前の事を務めて終るが。眞の道なり。山人天狗などは。自由自在がなると云ふばかり。山人には日々に種々の行ありて苦しく。天狗にも種々の苦みあり。それ故に。彼境にても。人間といふ物は　樂な物ぞと常に羨み居るなり。此方にては彼方を羨み　彼方にては此方を羨む。これ皆その道に入りて見ざる故の事なれど。人と生れたからには　人の道を守りて。外を願ふまじき事なり。我師を始め。山人となり天狗と成れる人々は。何か因緣ありて成れる物なるべく。我とても。小兒にてありし時よりの事を思ひつづけ　また願ひもせずして。彼境に伴はれたるなどを思へば。何か定れる因緣ありげに思はれ。我が身で　我が身の事すら知られず。今日にも明日にも迎ひが來るやら。此儘こちに居る事やら。其も知れず。夫故に。時々こゝらの事を思ひつゞけては。かく成

れるも。善事か惡事か分らぬから。身の毛の立つやうに。恐ろしく思ふ事もあり。夢のやうにも有るが。とてもかく成れる上は。天道樣の御さしづ次第。また師匠の心次第と。打任せて居るなり。然るに好みて成たがるは。入らざる事なり。夫よりは人間相應の勤を第一にし。身の行を正くして。死後には神になる樣に。心を堅むるが肝要なり。此事に限らず。一體外を願ふといふは。宜からぬ事なり。序なる故申すが。世に佛法を信仰して。其身の貴き事を思はず。卑しき佛に成たがるも。外を願ふなり　此國は佛國に非ず。神國にて　我も人も貴き神の末なれば。何でも神に成らむ。と心掛べき事なり。これは社々に祭りて在る神々にも。本は人なりしも多く　神は尊く佛は卑しきことは。今の世にも貴き人また卓たる人をば。某大明神とかいふて。神に祭る事は有れど。某佛といふて。祭ると云事なきを以ても知べし。然るに佛に成たがる人のあるは。山人天狗になりたがると同じ事にて。心得わろし。坊主が改名付たればとて　天竺の佛の末でないから。佛には成らず。神の末なる故に。善くも惡くも神となるなり。其は桃實より桃木が生え　梅實より梅木の生ずる理に同じ。然れば人は。生涯の善念を立とほして。善神となるが道なり。但し世に最期の一念によりて。善惡の生を引くと云ふなれども。生涯の一念を通さねば。生を引くといふ程に。最期の一念も通らぬ物なり。生涯の一念のかために依りて。神にも何にも成らるる物ぞ　と師に聞たり。事は何でも。成就せまいと云ことを思ふべからず。何でも成就すると心得てものすべし。何でも自分で。思ひつめてすれば。出來ぬことなしとぞ。

また或人　そこの師杉山々人は　誠に神通自在にして　道德も又類なく聞ゆれば。其宮を搆へて祭らむと思ふを。いかで靈代の幣を切て。得させ給へと云へば。

寅吉云。それは必ず無用に致さるべし。其故は。我が師は思ふ旨ありと見えて　深く其德を包み。身を隱して山人となり。人に拜まれ祭らるゝ事は。かつて好まれず。下山の時に　尋常の人には。岩間山にて稱する名のみ云ひて。志の切なる人なりとも。雙岳古呂明といふ號までは云ふとも。實名はいふ事

刎れと。堅く誡られたり。其故にや。不測にも山に在し時は。正に知たりし師の實名を。今いかに考へても思ひ出られず。たゞ某王とかいひて。兄弟ともに。三千歳餘りの人と云ことばかりを。慥に覺えたり。かく古き人ゆゑに。軍のありし時分の事。賴光義經などの事をも。此頃のことの樣に。をり〳〵言ひ出らるゝ事あり。さて此は我が了簡なるが。師の祭を好まれざる事は。常に世人の佛を尊み。天狗を祈り。又は鳥獸木石など。何ぞ聊か不思議なる事あれば祭る事を歎きて。かゝる物を崇むる故に。それに心移りて。神を麁略にするなり。もし祟むべき事ありとも。其時々祭り。また祟らぬ樣に和めもして。祭り過ぬやう。祠なども。數々作らぬ樣にしたき物ぞ。と言れしを思へば。我を拜み祭たらむも。神を麁略にする端となるべき事を思ひてにや。又天狗を信仰するも宜からず。況て鳥獸木石などを祭ると。直に邪天狗妖魔。種々の鬼物がよりて驗を見はす。緣切榎。首絞榎など云ふが。みな物のよりて驗を見するなり。鰯の頭も信心がらといふ如く。藁人形を祈りても。忽に鬼物がより來る。實にいやな事なるが。人は知らず。惡魔は然る事あれかし。と常に伺ひ居るなり。驗を得さへすれば。善き事と人は思へど。正しき神のおはし坐すに。其をさし置き。惡魔を尊み拜むことは。やがて魔緣となる事を辨へざる。淺猿き事なり。

また或人。神は尊く。佛は卑しき謂はいかに。と問へば。

寅吉云。神は尊く。佛の卑しき物なることは。人に問はずとも。各々心に考へて。知られそうな事なり。この世間の有狀をつら〳〵觀れば。此天地がまづ不測な物なるを始め。四季行かはり。雨降り風吹き。人を始め。木草鳥獸。種々の物ありて。木草に春は花咲き。秋は實がなり。其外色々樣々の事のあるは。皆神の御わざなり。然れば此天地も。神の造り給へる物なる事明なり。佛は釋迦が始めにて。神よりは大きに後の人なり。と師に聞たり。然れば釋迦も神の御德にて。生れたるには違ひなし。神が本にて。佛は末なる證據を。近く言はゞ。旱がつゞき。霖がつゞきても。神に祈りて。雨を乞ひ。晴を願ふに祥あるは。雨風旱霖ともに。神の掌ること灼く。雨風

旱霖など。みな神の御所爲なる上は。此の天地を始め。人も鳥獸も何もかも。神の御德によりて。成たる物には違なし。坊主山伏が佛經を讀みて。雨や旱を祈りもすれど。佛前にて經を讀みたる計りにては。雨一粒も降ことなし。是非神降しをして祈る事也是を以て。神の尊く。佛の卑しき事を知べし。殊に佛道で宜からぬ事は。男女の道を絕たるがわるし。魚蟲鳥獸に至るまで。此道のなきはなし。然るに世の人が。みな佛道のとほりに成ては、人が絕て仕舞ふから。神々の人をふやさむと成さるゝ、御心に違ふなり。佛道はかく。無理なる邪さの道ゆゑに。坊主たち立派な顏つきをして居るけれども。內々を見れば。男色女犯をもせず。肴も食ずに居るは。百人に一人もなきなり。佛道を邪さの道と云ふては。腹を立つ人も有べけれど。神國の道の立て居るに。傍から橫に這入れる道ゆゑに。やつぱり邪道魔道なり。いかで我は。十四五度ばかりも。高き人に生れ來て。佛道みな亡びて。神道ばかりになるを。見たきと思ふ心願なり。十四五度生れ來たらむには。千年立べし。其內に亡びそうな事なり。

こゝに己難じて云く。神は尊く。佛の卑しき由も然る說に聞え。佛道で男女の道を絕たるが。道に非ずといふも聞えたり。然るに其方の師も。山人とはいへど。同じ人間にて。男女の交りなきはいかに。此は佛道を用ふるに似たり。又十四五度も生れ來る內には。佛法亡びそうな物と云事も心得がたし。然樣に自由に生れ替らるゝ物には非じ。

寅吉云、我が師を始め山人の。男女の交り無きことは。山人の仕來りの法にて。此道あるときは。自在の術を得ず、長命もならぬ故に、絕たる物と云ふ人もあれば、其故なるか。人にして人の道を絕たるは。かの因緣による事と見えたり、然れども日々に。土がふえ人がふえるやうにと、神前にて鈴をふり祈るを思へば、佛法に依たる事には非ず、外に深き謂ある事と覺ゆるなり。さて十四五度生れ替る事は。かの生涯の一念を立とほして。生を引くによる事なり。佛法の。今の有狀にては。決して亡ぶる時節あるべからずと見ゆれど。天地自然の道ならで。人の作れる道は。終には亡ぶる時節の來るものぞ。と聞たり。

問云。瘧神。疫病神。貧乏神。疱瘡神。首絞神。

火車など云ふ種々の物ありて。世人に禍を蒙らしむ。此等はいかにして出來たる物ぞ と云ことを。師に聞たる事はなきか。

寅吉云。此等はみな人靈の成たるにて、世に在し時より。心のをさめ方宜からぬが。其群々に入ると云ことなり。凡て妖魔は云ふに及ばず。然る鬼物ども。世の人を一人も多く 我が群々に引入れて。同類をふやさむと。各々透間もなく伺ふなり 其に就ても、人はいさゝかも、曲れる心を思ふまじき物なり、たとへ德行の善人なりとも 邪に曲れる心を、しばしも思へば 日比の德行も 水の泡と消て 其惡念消る事なく やがて妖魔に引込るゝ緣となる物ぞと云ことなり 此を思ふにも。氣の毒なるは 極樂へ行かう〳〵と思ひ居る人々なり、死むで見ると極樂はなき故に、狼狽へて居る。其内に惡魔や 其外の妖物に。目を闇まされて。心ならずも。其部々に引入れらるゝ、誠に哀なる事なり。

また或人謂けらく そこは神の道を尊み。佛道を卑しく邪なる事にいへども、神は然しも。佛を惡ひ給はぬと見えて、かく世に弘まり 神社には、大かた僧の仕へぬがなく あまつさへに 神の本地は佛なり といふ說も出來て 神前にて佛經を誦上げ 護摩など燒くをも。其儘に捨置給ふなり。此辨はいかに

寅吉云 誠に御說の如く 今の有狀を見れば。神たちは佛道を 然しも惡ひ給はぬ樣に見え。餘りに御心の善すぎるやうにて技樣く思はれ 何とてしたゝかに荒びて 佛狀の汚を退け給はぬ事かと 腹立しけれど 熟思へば 神は大朴に坐まして 然しも御搆ひなく 唯々御持前の功のみを成して 鎭り給ふと見えたり

或日 人々己が許に集りて 四方八方の物語しける序に 或博識ぶりする人の噂になりて。彼人の言に 神道はいと少さき道ぞといひて。然しもなき學事を いと猛き事に云ひ誇れるは。慢心なる人ぞ など語り相けるに

寅吉云 すべて學問といふものは。魔道に引込るゝ事にて まづは宜からぬ事なり 其故は學問するほど善き事は無れども、眞の道理の至極まで。學び至る人はなく 大槪は生學問をして。書物を澤山に知

て居る事を鼻にかけて　書物を知らぬ人を見下し。神はなき物じやの、仙人天狗はなき物じやの。怪しき事はないの。然やうの道理はない事じやなど云ひて、我意を張るが、これみな生學問の高慢にて。心狹き故なり、書物に記して有る事にも、直に見ては。違て居る事はいくらもあり。一體高慢なる人は、心狹くて、遂には惡魔天狗に引込れて、貴さへなまる人なり。彼方にて聞たる咄なるが　何とか云ふ大鳥が。己ほど大きなる物は有まじと思ひて出かけ。飛草臥たる故に。下に見ゆる穴に入りて、羽を休めたれば。其穴がくしやみを爲て　何奴なれば　我が鼻に入りて休むぞと云はれて、膽を潰したと云ことなり。人ほど貴き物は無れど。我より下の物を見れば。段々卑しく劣れるが有りて　幾百段あるか知れず。顯微鏡にて見ても知べし　蠅は少さき物ぞと思ふに。蠅に羽蟲がたかりて有り、然れば其羽蟲に、また羽蟲のたかりあるかも知らず。其如く　上にもまた段々に、幾百段か、尊き勝れたる物の有べく。此天地も何も　何とか申す神の腹内なるかも知れず其故は、人の腹内にも、色々な蟲のあるを以ても知べし、然れば高慢と云ものは。大空が何處に止まると云事までを知りて。自由にする程の器量が無ては。云へぬ事なり。凡て慢心高ぶりほど。宜からぬ事はなし、魔道に引入れらるゝ緣なればなり。それ故に顏の美しき人。また諸藝の達人、金もち長者なども。慢心おごりの心ある故に、多くは魔道に入る、主坊は大かた賤しき者より出て、位高くなり、人に敬はるゝ故に　みな高ぶりの心ありて、大抵は魔道に入るなり、殊に金持の　あるが上にも慾を深く金を集めて。世の爲に遣ふ事をせざるは、神の惡み給ふ事と聞たり、金持が。一所に金を集むる故に、貧乏人が多くなる。世人が各々某々に。暑からず寒からず、食て着て仕るゝ程に用意して、欲を深くせぬと、世が平に行くなり。金持が金をしたゝかに集めて。此は我が物ぞと心得て居れども。能思へば、自分の物とては何もなく。悉く天下樣の物なり、金銀も天下樣より　通用なさるゝ世の寶　その外食物も着物も、天下樣の地に出來たる物なり　家も天下樣の地にあり。其身さへに天下樣の地に生れて、天下樣の御人なれば、我が身とは云れず、金銀や何かを　澤山に持て

も。死ぬときに持ては行かれず。然るに此事の辨へなく。めつたに欲を深くして。物持金持となりたがる人は。死しても其心うせず。人の物を集めて欲がる鬼物となるとぞ。此やがて魔道に入たるなり。

神童憑談畧記

此の一卷は。神童寅吉が事實の畧記なり。然るは其物語の記錄。師の草稿ありと云へども。思ふ旨ありと申されて。祕め藏して。人にも見せられざるを。予年ごろのをしへ子にて。師も殊に厚く惠るゝまゝに。元來公に召仕はるゝ者ながら。いまだ勤むる事もなければ。常に師の許に參りて。朝夕と物學ぶにつきて。師も免されて。かの記錄をも見せられ。又直に神童が物語なども聞き。かつ其常の行狀をも。したしく見などして。學びの佐けとも爲りたる事どもの多かるに。得捨置がたく。かつ同じ學びの徒にも。知せまほしき事どもの有るにつきて。まづ其大概を。かつ〴〵書記したるなり。なほ委しき事は。師の記されたる記錄の。世に著れむ時を待て見るべし。

竹内孫市健雄記

文政三庚辰年十月朔日。夕七時前と思ふ頃に。屋代翁師が許にゆくりなく來られて師に語らるゝは。山崎美成が許に。去る九月の初より。年ころ神誘に誘はれて。其使ひ者となりたる童子の來り居て。天狗より習ひ受たる呪禁。卜ひなどするに驗なしと云ことなく。且彼境の事を語れる趣を聞くに。豫て足下の考へたる說等と符合する說ども多かり。吾は今美成が許へ行き其童子を見て。事問はむとする也。いかで同伴し給はぬかといはるゝに。師常に然る者に直に逢ひて。糺さればやと思はるゝ事どもの。種種ありければ。いとよろこばれて。然らばとて物も取あへず。彼翁に伴はれ出られて。途中申さるゝは。天狗に誘はれたる者は。其言行おぼろ〳〵として慥ならず。殊に彼境の事をば祕つゝみて。顯に言ざるものなるが。其童子はいかに侍るやらむと申さるれば。屋代翁いはるゝは。大方世に聞ゆる。天狗に誘はれたる者は然有れど。彼童子は何事もつゝまず語る由なり。或處にて。天狗に誘はれたりし者も。祕す事なく語れると聞けば。昔は彼境の事の世に漏るるを。忌たるやうなれど。近頃は彼境の事を。然しもつゝまず成ぬと思はるゝ。よく問ねて忘れず筆記せられよと。返す〳〵言るゝに。師の諾はれて。また心に思はるゝは。現世の趣も。昔はいたく祕た

る書も事も。今は世に顯はれたるが多く。知がてなりし神世の道の隅々も、いや次々に明になり。外國國の說事器ども、年を追て世に知らるゝ事と成ぬるを思ふに、これ皆神の御心にて、隱れたる天狗界の事までも、世に明に知らるべき機運のめぐり來つるにや。などおもひつゞけられつゝ、間なく美成が許になむ至られける（美成は、長崎屋新兵衛といふ藥店にて、家は江戸下谷長者町といふ坊にて、師が今の家、湯島天神の男坂下と云ふ所よりは、十町ばかりも有るべし、屋代翁の家と美成が家とは、五町ばかりもへだてたるべし）時よくあるじ居逢ひて。彼童子を呼出し。屋代翁と師とに逢しめたり。兩翁の面をつくづくと打見て。辭義せむともせざりしを。翁も師も始めてと演られたるに。其對も爲得ざりしかば。美成傍に在て。御二人へ御辭義せよと云ふに。いとふつゝかに辭義を爲たり。また師が面をと見かう見て。アナタは厚く神信心をせらるゝと見えたりといふに。師の驚きて。神信心をするは。善事か惡事かと申さるれば。いと善事なりとこたへたり。憎氣なき尋常の童子にて。歲は十五歲なりと云へども。十三歲ばかりに見え。眼は人相家にいはゆる下三白にて。並よりは大きく。光ありて凡ならず見ゆ。脉を見、また腹を見られしに。小腹堅く實にして。脉は三關のうち。寸口の脉いと細く、六七歲の童子の脉に似たり、江戸の根津七軒町なる、越中屋與惣二郎といひし者の二男にて。寅吉といふ。父與惣二郎は多葉粉を賣て在けるが、今より三年以前に死て、後は兄庄吉十八歲にて少の商ひ爲て、母と幼き兄弟等を養ふとぞ（神童が親兄などの事は、後に師の其母兄などに探ねて、知られたるなり、母が言に、彼は文化三年寅十二月晦日に生れたり、生れたる年も、日も寅なりし故に、寅吉と名付たり、彼子五六歲のほどより、事のいまだ起らざるに、今夜はかゝる事あり、明日は然る事ありなど、言當たる事もありて、變なる子にて有りしと物語なり）さて天狗に誘はれたる起を問ねられしかば。神童云く。文化九年の七歲なりける時。風と卜筮の事を學びたく思ひて。同所茅町なる。境稻荷の前に住せる。貞意といひし卜筮者は。其頃よく卜ひ當て流行ける故に。是につきて學ばむ事を請しかば。幼き者と思ひて戲言したるが。七日

手燈をともす行を勤めて後に來らば敎へむと云ふ故に、親にもいはず、ひそかに其夜より。手燈の行をおこなひ始め。七日にみちて行たりしに。笑ひて敎へざりしかば。殘多く思ひて。日を送りけるが。（この卜者は、後に上方邊へ行たりとぞ）或日東叡山の前なる。五條天神の邊に遊びて在けるに、五十歳ばかりなる翁の。藥を賣るが在りて徑三四寸も有らむと思ふ壺より。藥を取出て賣けるが。暮時になりて、取並たる物ども小つゞら敷物まで悉くかの壺に入るゝに。何の事もなく入たり。斯て自も其中に入らむとすいかで此中に入らるべきと見居たるに、片足を蹈入たると見ゆると等しく、皆入りて。其壺大空に飛上りて。何處に行しとも知れず。甚奇しく思ひしかば其後また彼所に行きて夕暮まで見居たるに前にかはる事なし。其後にもまた行て見るに。彼老人。その方も此壺に入れといふにぞ。いと氣味わるく思ひて辭ければ、彼翁かたはらの者の賣る作菓子など與へて。卜を知たくは此壺に入りて。吾と共に行べしと勸むるに。行て見ばやと思ふ心いで來て。其中に入たる樣に思ふと、日もいまだ暮ざるに。とある山の嶺に至りぬ。其山は常陸國なる南臺丈と云ふ山なり（此山は、加婆山と、我國山との間に在りて、獅子が鼻岩といふ石の、さし出たる山なり）さて幼かりし時のこと故に。夜になりては頻に兩親を戀しくなりて聲を擧て泣しかば然も有らば。家に歸してむ必この始末を人に語ること無く。日々に五條天神の前に來るべし。我送り迎ひして習はしめむとて。大空を飛て連歸りたり。斯て我は堅く老人の誡を守りて。今日までも。父母に此事を言ざりしなり。さて約束の如く。次の日五條天神の前に行けば。彼老人來り居て我を背負て山に至れり如斯すること日久しかりしが。いつも家をば廣小路なる江口といふ藥店の子と共に。遊びに出る風にて出たりき扱行きたる山は久しく南臺丈なりけるに。いつしか同國なる岩間の山に至りて有けり爰に我かねて宿願なれば卜ひを敎へ給はれと云しかば其はいと易き事なれども易卜は宜からぬわざなれば。まづ餘事を學べとて。祈禱の爲方。また符字の記しかた呪禁その外。幣の切かた。文字の事など敎へらる。其は日毎に。彼老人の

送り迎ひしたるなれど。兩親始め人にはかつて語らず。また我が家は貧乏故に。さしもかまはず。世話なく遊びに出るを善として。尋ざりしなり。かく山に往來したる事。十一歳の十月までなり。十二十三の歳には其事なく。只をり／＼見えて。事をゝしふるのみなりき。さて父與惣次郎は我が十一歳になる八月より煩ひ付たり。父が病中に彼人來りて しばらく寺へ行き。經文をも覺えよと有し故に 出家せむと父母に願ひしかば。下谷池ノ端なる 正慶寺と云ふ。禪宗の寺に遣したり。此寺より歸りて後に 同所の覺姓寺と云ふ。日蓮宗の寺へも遣し 其後また宗源寺といふ。日蓮宗の寺にいたり。此寺にて出家したり。然るに文政二年五月二十五日に。師に伴はれて またまた常陸國岩間山に至り 種々の行を行ひ 師に伴はれて。空中を飛行し。遠きからの國々までも行たるが。名を師より高山平馬と負られ。平馬の二字を。書判にして賜はれり さて去年の秋八月。ひと度家に歸り。また／＼師と同道して。東海道を行きて。江の島鎌倉などを見廻り。伊勢太神宮を拜み。其外國々處々を見廻り。今年三月二十八日に。家に歸りたるなり。と云へりしと。師の語られたり。扨又其後師の。岩間山といふは。常陸國の。何の郡に在る山ぞ。と問ねられたるに。此は筑波山より。北方へ四里ばかり傍にて。峯に愛宕の宮あり。足尾山加婆山。吾國山など並びて。笠間の近所なり。龍神山といふもあり。此山は。師の雨を祈らるゝ所なり。岩間山に。十三天狗。筑波山に。三十六天狗。加婆山に。四十八天狗。日光山には。數萬の天狗といふなり。岩間山には。もと十二天狗なりしが。四五十年ばかり以前に。筑波山の麓なる。猪打村といふ所の長樂寺といふ眞言僧ありしが。空に向ひ。常に佛道を思惟してありけるに。或日釋迦如來迎ひに來りて導きける故に 眞の佛とおもひて。共に行たりしかば 釋迦如來と化り來れるは。岩間山の天狗にて。長樂寺をも其中に加へて。是より十三天狗となりしとぞ。我師は。其十三天狗の外にて。名を杉山ソウシャウと稱ふなり。とこたへたりき。また師の。十三天狗たちの事を。此方にて天狗といひては。腹立まじきや。もし彼方にて。何とか外にいふ稱はなきか。と問ねられたるに。答へけらく。天狗と云ひても

腹立事なし。其は人間界にて。人の事を人間といふに同じく。すべて世の人は。人間界の外なるは。仙人は云ふに及ばず。悪魔又天狗など。其外種々怪しき類をば皆天狗のわざと云ふ故に。其通りにて任る也。然れど。彼方にては天狗といはず。山人といふなり。さて十三天狗と云ふ中に。信の山人なるは。わづかに四人ばかりにて。餘は鷲鳶其外の物の化たるにて眞に天狗なり。すべて狐熊猿狼鷲鳶鵰其外何にても。年を經れば天狗になるなり。然るに吾師は。中々然る類ひの物にはあらず。何處のいかなる人と云ふ事は知らねど。元來甚貴き人にて。山人の中にても。歴々の山人故に。名をも杉山ソウシャウ。ワケモチノ命と稱ふなり。但しすべてなみ〳〵の山人も。歴々の山人になりては。皆其魂を祭りて。ソケモチノ命とつく事なり。たとへば杉山ソウシャウなれば。杉山ソウシャウワケモチノ命といひ。長樂寺なれば。長樂寺ワケモチノ命といふなり。さて歴々の山人に爲りては。各自分の魂を幣に留めて。日々に拜し祭るなり。其幣の切かたは。尋常の幣と。何もかはる事なく。但し中心に玉を掛けおく。是魂の印なりとぞ。さて其玉は。何玉か知らねど。瑠璃色なる玉を。珠數の如く統とほして。數は百十二粒。其外に親玉二箇あり。白き絲の打紐にて。總を下たる物なり。と語りき。魂を祭るに、玉をかくる事、吾古道の旨に應ひて、いと尊く覺ゆ。さて又師の。汝が師の。龍神山にて。雨を祈るといふ事心得がたし。かの境にては。田畠を作る事あるまじければ。霖旱ともに苦勞あるまじき事と覺ゆるを。いかなる心にて雨を祈るやらむ。といはれたれば。神童あざ笑ひていはく。然る謂なき事を思ふは。人間の心なり。神は申に及ばず。山人とても。世が悪くては宜しからず。故にかの境にては。人間界の祈りが。肝要なりと云へり。さて十月十二日。美成と同伴して。師が許に來れり、折ふし御鐵炮師。國友能當の來合せたるが。山にも鐵炮は有りや。と問ねたるに。鐵炮も有り。また火を用ひず。風にて打鐵炮も有りと云ふに。能當いたく驚きて。其は氣炮といふ物にて。人間界にも有る物なるが。本西洋の製作にて。物の用にもたゝぬ物なりしを。おのれ猶委しく考へて。製作したる物あるが。山なるはいかなるぞと云へば。

其はしか〴〵の物にてなど云ひしが。能當なほ心得がてにして、其後度々とひ探ね、はた圖などかゝせて、色々に工夫を爲し、終ひに其全圖を得て、此は己が製する所のよりは、はるかに卓越て、さらに人智の及ぶ所にあらずとて、深く感じたりき（此風炮の事を、師が記錄に、其圖までしるされて、いとくはしく見えたり）扨其後また。師がもとへ招きたるに。隣なる、井戸十三郎の屋鋪とおぼしくて、俗にいはゆるはごと云へる物に。何やらむ小鳥のかゝりたるを見て、此は興ある事かな、此鳥もちを放して飛してむ、天目に水を清くして、持來り給へと云ふに、皆打よりて、此はいかに神童なりとも、おぼつかなき事なりなどさゝやきながら、然すがに乞ゆゑに。水をあたへたれば、呪文を唱へ、其水を鳥にそゝぐ眞似を爲し。氣をふきかけなどして、云ふやう、此息の彼所にとゞけば、此鳥漸にもちを放れて、飛ゆくなりと云ふを、師を始め、誰も信られぬ事に思ひ居たるに、信に其言の如く、しまし有て、此鳥上枝よりたり下りて。中の枝にかゝり。それよりまた下枝にたり落て。即羽づくろひして飛さりぬ。此はおのれ目のあたり見たる事にて、さらにうきたる事にあらず、扨又□月□日、また〳〵師が許へ招き寄せて、山にて樂器に用ふると云ふ所の、笛を造らしめしに。俄に美成が許より、迎ひの來たりたるに、得はたさで歸りぬ、其後また師が門の外を、神童の飛が如くに走り行く。と人の告るに。おのれ疾くはしり出て。追ひとらへて來て、強て師が家に抱き入れむとするに、いそぐ事ありて、親の許へ行くなれば、得入らじと云ふに、其はいかなる事にか、おのれ行て其事果さむ。まづ入れと云ひて。いつも好みてふける。師が秘藏の、石笛てふ石笛をふかせむと云へども、得耳にも入れず、明日なむ山へ立むとおもふを、それに付ては、山より授り置たる書付を、持行ではかなはぬ事なれば。とてもかくても。行てはあらじと云ふ、其狀常とは變りて、狂人の如くなるに、得もだしがたく。然すがに。取逃さむ事のいとをしくて。然らば吾同道せむと云ひて、同門なる守屋丹下といへる者と。二人にて。親が許へ送り行けるに。つと入て物も得いはず。其書付と。また云々の物と。只二種を、あやしき箱の中より取出、予に其書付を見

せしむるに、抜き見れば。左りに記す所の書付なり。

書　付

此高山白石丈之進といへるは。神童が師の弟にて。此も山人なりといへり　此書付の寫は。師が許にあり。さて母のとかく云ふをも聞入ず　其がまゝにまたはしり出て　美成が許へゆかむとするを　さまざまに云ひもてなして。師が家に連れ來りければ明日山へ行かば。またいつかはきたらむ。然らばかのつくりさしたる笛も。徒ら事になりて。いとほいなし　いかでけふ一日に造りをへて。扨ゆかば行けがしと　師のあながちに乞はるゝに。然らば造りをへて行きてんと。しぶ／＼に諾ひて。まづ暫くしづまりき。さて漸に笛は。其日のうちに成りをへぬ。（凡貳管、其丈、壹管は壹丈、壹管は九尺にして、壹丈なるは、孔いくつありて、吹人壹人にて、調を爲すもの四人なり、九尺なるは、孔いくつ有りて、吹人貳人、もとも吹孔二ッあり、調を爲すもの二人なり、此もくはしく、師の記錄にしるされたり、さて其笛の吹やう、また山の舞の事など、具に語りて、おのれにも、かつ／＼其舞やうを教へたりき、）さて其次の日に。餞別の物など與へて。美成が許へ送り返したるが。程なく旅支度してまた來れり。今なむ直ちに山へ立と云ふに。美成が方より　送りて行く者もなかりければ　兼て神童の云へるは　おのれはいまだ　自在の術も未熟なれば　師に伴はれざれば　飛行する事あたはざる故に。獨行く時は。凡人の如く。あるきて行事なりと云へりしを。師の聞居られたれば　折よくも來合せ居たりし　同門なる　下總國笹川村　須波の社の神主五十嵐對馬といへる者の。近き程に國に歸ると云ふを。師の促されて　然らばまだ成しをへぬ事どもゝありなめど。其はまた來む時に爲しはてね。まづ彼を伴ひて。明日なむたちて。笹川迄連行て。猶聞べき事どものあるをば。よく聞き糺して。扨筑波へ送りやりてよ。と申さるゝに。對馬諾ひて直に其用意して　終ひに其明る日　對馬に伴はれて　立出ぬ。然るに其立むとする程に。師のかねて考へ置れたる神世文字の考と　また往し年著述せられたりし。靈の眞柱てふ書と。また別に此書どもの說に。もし非說のあるならば。其由具にさとし

賜へと　ねもごろに書記されたる一翰とを授け玉ひて、此を汝が師に塵す　杉山老翁の御もとへ奉りてよ。と云ひ含められ　また其別れを惜まれて。

車屋寅吉、今の名は白石平馬が。神の道を修行に。山に入るによみておくる。

御　　名

「寅吉が山にし入らば幽世の　知らえぬ道を誰にか問はむ

「幾度も千里の山よありがよひ。事致へてよ寅吉の子や、

「神習ふ人の萬齢いのりたゞと　山人たちに言傳をせよ

「萬齢を祈り給はむ禮代は　我身のほどに月ごとにせむ。

「神の道にをしくこそあれさもなくは。さしも命の惜けくも爲し。

文政三庚辰年十月十七日

とよまれたるもかきつけられて與へられたり。其後程なく同月廿日の夜八ツ時ばかりに　誰やらむ門をきびしく打たゝく故に、此はさる方より使の來たりたるならむとて。小者をして其よし問はせられければ寅吉なりとこたへたるに小者いたく驚きて師にかくと白せば師もいみじく驚かれて誰にか伴はれて歸り來しぞと問るれば山より送られて來しと云いかなる事のありてかくゆくりなく物するぞと問れたればこたへたるやう　おのれいまだ笹川なる某が許に居たる程に吾が師の弟なる高山白石丈之進の來られてことしは杉山老翁讃岐國なる金毘羅の社に御番に當られて彼處へ行れたれば山の行ことしは休みなればまづ歸るべし（此事は其立むとする程にことしは師の讃岐の金毘羅の社の御番に當られて彼所へ行れたるなるべしもし然もあれば山の行は必休みなれば又歸り來るべしと云ひて出たるがはたしてしかなりき）と云はれたるが上に。かの與へられたる書どもと。又一翰とを取出て見せたれば。只うなづきてありしが。神代文字の傳を、大かたに見通して　此はいとよく集めたり。但し此中に。異體の字のしかぐゝなるが。三字脱たり　此は篤胤がもてる本にはあるなれど、是には脱たるなりと云はれ、またかの長笛を造りたる時　其吹ようまた舞の手などをしへたるが。我見居

たりしに　皆少しづゝ違へり　また火龍と云へる笛もあり。此をも序に造りて來よとて。其笛の製作の事。またかの笛の吹やう。舞の手など。具にをしへておこされたるなりとて。かの脱たりと云ふ字を。三字ながら、かの山人の教へられたるまゝなりとて書たりしを　師の見られたるに　誠に然る事にて。師がもたる、本は　再稿にて誤もなきを、神童に授けられたるは。初稿なりければ。脱字のありたるなり。扨笛の吹きやう　舞の手など　改めて教へ　又かの火龍といへる笛をも造りたり。（此笛は、大かたの笛とは異にて、俗に水てつぽうと云へる物の如く、突て鳴らす笛なり、此も師の記錄に、委しくしるされたり、但し此笛をば、よく造り得ざりける故に、笛師獅子田某を呼て、其の製作の仕方を、委しく傳へて誂へたりしが、常の笛とは異にて、衝笛なる故に、舌の工合甚だむづかしく。近きほどに、日光の方より、舌の事にくはしき者の來るなれば、それが來たりなば、まづ試みに造りて見むと云ひて、いまだ得造らず。）扨其明る日。朝とく師の屋代翁の許へ行れて。上の件の事ども委しく語られて。猶きかまほしき事の多かれば。今より我許に留め置てむと思ふを。然てはあしかる事もありなむや　よく思ひはかりて給はれかし。と申されければ。屋代翁もかつは悦び。かつは奇異なる事に思はれて。何てふさはる事かあるべき。ともかくも思ふがまゝに止め置て。問ふべき事をば。よく委に探ね給へかしと云はるゝに。然らばとて。夫より師が許へ止めおかれて。種々の事問るゝに　其答悉く理にかなひて　覺ゆる事のみなり　其が中にも　日光山は數萬の天狗と云ひて。其數を知らず　其中に　古より今に至る迄　諸侯旗下の士の　英雄豪傑なる人の　死して其魂の　死解仙となりたるが多く　其は悉く　東照宮の御前に伺候するなり　さてかく諸侯諸士の靈を　多く日光山へ召置るゝは　いかなる所以によりてなることぞと云ふに　抑　天皇は、天下萬國の皇（きみ）におはしまして　天神地祇の御祭を怠り給ふ事なく　大切に行はせ給ふぞ　天の下を普く所治看し給ふ。重き御業なるを　其御手に代らせ給ひて　天神地祇の御祭を執奏し給ひて。天下萬國安穩の御政に關り給ふは。今は將軍家の御職なるに依りて。幽界にては。專ら東照宮ぞ

此御職に仕へ奉り給ひて。普く天下萬國を所治看し給ふ故に。伊勢の兩宮は申に及ばず。諸國の神社神社へ。日々に奉幣の御使として。遣はされむがために召置るゝなり。是則東照宮の朝廷に仕へ奉り給ふ所なり。また朝廷は申すに及ばず。江戸大阪駿府甲府の御城　上野增上寺、兩山の御靈屋へも　かの諸侯諸士を御番として　遣るゝなり。然るに此諸侯諸士の人々を。俗には日光の天狗と云ひ思ふは　甚しき誤りなり　其は旣に云へる如く　眞の天狗と云へる物は。鷲狐など　其外くさ〲の物の化れる物なればなり。と云へるなどは　誠に吾古道の旨にあやしき迄に應ひて。たふとしとも恐しとも。云ふに堪たる說どもなり　然るは天皇は　天下萬國の王におはしまして　天神地祇の御祭を怠り給ふ事なく　大切に行はせ給ふぞ　天の下を所知看し給ふ。重き御業なるを。と云へる事の　おもぶきの。古の傳說に。大國御魂神の神代に。天照大御神は。天の原を悉治め給はむ。皇美麻命は　葦原の中つ國の八十魂の神を　專治め給はむ　吾は大地の官を。自ら治めむ　と白し給へりしと見へたる趣に符ひ　はた東照神祖命の諸侯諸士を帥ひ給ひて。朝廷に仕へ奉り給ふ。と云へる事の狀の。幽世をしろしめす。大國主神の。其の御群の神等を帥ひ給ひて。現世を守り給ふ理などに應へばなり。こゝを以ても。吾古道の貴き事は知るべき也（大國御魂神と稱するは。出雲國の大社に鎭り座す。大國主神の。荒御魂の神なり。皇美麻命と稱し奉るは。則天皇の御事なり。八十魂神とは。諸の神等をすべ稱す言なり。八十魂神を專ら治め玉はむとは。天皇は。天下萬國の大王と大座すなれば。普く天下の民に。禍なからしめむために。神祇を崇敬し給ふべき事。其主と在る御業なり。と白し給へるなり。神を齋き祭る事をも。古へは治むると云へり。）また云へるは。今は世に　外國の道いたく行はれて。神の道廢れ。諸國の神社々もおとろへまして　或は退轉したるも有るを　それ再興せむと爲る者も無く。此を幽界より見る時は。終ひには世の大きなる禍を引出すべき基の　著明く見ゆるなり。然れども。神はなほ人民を憐み賜ひて　旱する時は雨を降らし給ひ　霖する時は風を起し給ひて　雲霧を吹撥ひ玉ひ　また火にも水にも　野にも山にも幸ひ

給ひて、萬民を撫育し給ふなり。但し此は神の所謂御役にて。必かくおはしまさでは。得かなはぬ御事なり。すべて風火金水土の五つは云ふに及ばず。山海田畠に生ふる物までも。皆神の掌り給ふ所の物にて。悉く神の御徳によりて　其用は爲す物なるを。人はそれとも知らで。火も水も。野も山も。元來自然る物とのみ心得て。神を蔑如に思ひ奉る事。返す返すもかしこき事なり。然るともがらをば。吾師の杉山老翁などは。甚く忌み惡み給ふなり。然れども。此はまた深き理ある事なりとて。姑くゆるし置給ふなれども。終には神罰を蒙る事疑ひ無し。尤も其神罰は壹人に蒙るにはあらじ。天下皆然なれば。天下の禍となれるなり。よく神等を崇敬し奉りて。此災ひを逃るべし。凡て天下は。神祇をよく崇敬する時は。亂るゝと云ふ事なく。諸の災害なく。安穩なる物なるを　天下の諸侯に。此理をよく知る者なきは。外國々の道どもの行はるゝが故にて　悲しき事の限りなり。此故に前に云へる如く。東照宮は幽界におはしまして。神祇を崇敬し賜ふなり。是天下太平。將軍家御長久の御祈なり　然ればこそ　御代も古に例なき迄に榮えさせ給ひて。萬民安堵の思ひに住するなり。と云へりしは　吾古道を學ぶ徒らの。云ひもし書きもしては信ふ人もあるまじきと思はるゝばかりの高談なり。(凡て此の神童の物語は、古道に關る事のみなれば、世の人口を思はれて、師はかゝる說どもをば、人にはかつて語られざるなり、然るは此らの論は、師が著述なる古史傳に、既に委しく云ひ置れたるによりて、此は吾師の、其說を立むとする杜撰なり、と人の疑はむ事を深く思はるればなり、)さて又彼方の神事、樂事の式を具に語り。其式は云ふに及ばず、其器其服の事に至るまで。師が記錄につぶさに見えたり。)また卜事は。よく其未然を曉し。呪禁事はよく其驗を現はす。また彼方に用ふる所の藥方を語り。かつみづから製したる膏藥もあり。(此藥方の事も、師が記錄に委しく、また其自製の膏藥も、師が許にあり。)また文字の事は　此は屋代翁も委しく知らるゝ事にて。彼神界の文字は云ふに及ばず。神世文字。其外この方に用ふる文字。はた其異體に至るまで。運筆自在にして　更に凡人の及ぶ所にあらず。文字の事につきても、猶その說あるを、此

ま師が記錄に、委しくしるされたれば、今度にあげず。)さて此年三月朔日。師は板倉阿波守殿の藩なれば。式日の禮白さむとて。櫻田の屋敷へ行かれたりし留守の事なりしが。神童の云ふやう。我は聊か用事あれば。上野の山まで行たしと云ふに。師の刀自の云はるゝは。けふは師も留守なれば。急ぐ事にもあらずは。明日行くべし。もしけふ行で叶はぬ事ならば。師の歸られぬ程に急ぎて返るべしと云ひて。やられたりしが。なほ獨してやられたりし事の心もと無く思はれて。神童の出行くまに〳〵。おのれにとく出て見よと云はるゝに。急ぎて門の外へ出て見やりたりしに。はや飛ぶが如くに走りて。廣小路の方へ曲り行くと見えたるに。取物もとりあへず。追つかむと。廣小路の坊へはしり出て。と見かう見るに。はやいづち行きけむ。ともしられざれば。猶息もつぎあへず、追行きて上野の黑門へ走り入てと見やりたれば。あなたより神童の物に恐るゝ氣色にて。顏色もかはりて。走り來り顏見合せ。いささか打ち笑みたるまゝにて。物も得云はず すり違ひて。黑門を出ゆくに、己れも跡につきて出たれば。元仁王門の有りし。と云へる所のあたりへ至りて。黑門の方へふり返りて。三度ほど腰をかゞめ。拜むさまして。然て立かへり また顏見合せ打ゑみて。己れと共に成りて歸らむとするに。いづちへか行たると問ぬれば。寒松院の原まで行たりと云ふ。師の老翁の來られたるにかと探ぬれば。たゞ鼻にて笑ひたるのみにて答へず。はや用事は濟たるかと問へば。よくも果さゞりしかど。まづ返りぬと云へば。然らば又行て。よく成しをへて來よ。もし晩く成りて。師の返られて。叱らるゝとも。おのれよく計らはむと云へど。又後に行くべしと云ふに。然らば後にまた行て。よく果してよ。此方の師には。いかに叱らるゝとも彼方の師の。令せ給ふ用こそ大事なれ。また此方の師と云へども。彼方の師の令せ給ふ用のあるといへば。何かは叱らるゝ事のあるべき。と云へば。けふにも限らぬ用なり。あすにてもよしと云ふ。又寒松院の原へ行く事にかと云へば。然にはあらずと云ひて。行く先は云はず。然いふ間に。幾度とちなくふり返り 上野の方を打見つゝ。今師が門へ入らむとするきはに。大空をあなたこなたと 物

尋るが如く見廻して入りぬ。然て其がまゝに。師が刀自君のをらるゝ傍に至りて。得物も云はず居たりしが。つと立て二階へ上りたれば。其間にありし事どもを　師の刀自に物かたりてあるほどに。此頃越谷の方より。善之助と云へる童子の。師が許に來居たりしが。それが來て云へるは。神童の火の見へ上りて手を打かざして。上野の方をながめ居る。と告る間に。はや下り來りて。猶物も云はず。暫く有りて。おのれに云ふべき事のあるなれば。此方へ來よと云ひて。おのが常に物學びて居る所へ。つれ行きて云ふやうは。今師の來りて。我に百日が間　テッパン　といふ行を。此月の十五日までのうちに。行ひ始めよと命せぬ　此行は　一日に米一合づゝの飯を食ふ行にて。外に食ふ物は　一日に蕃椒一ッ　鹽をいさゝか嘗るのみなり。其外の物は。何にても食ふ事ならず。もとも火は別火にして。飯も鹽もみな土器にて食ふなり。衣物は夏に成るとも。今著居る衣物を脱く事あたはず　髪は自らよく洗ひてつかね　夜いぬるには　疊の上にぬる事ならず　板鋪の上に。荒薦を敷て。其上に寢るなり。また夜著を著る事は　か

つてあたはぬ事なり。但しことさらに寒き夜などは。代りに荒薦をば著るなり。然て此行は。何のために爲る事ぞと云ふに。世にいみじき禍ひの起るなれば。それを除むとして　神界にて。吾師其外の山人たち迄も。皆な一統に行ふ事なり。また吾徒の爲すは。これは師の行を助くるにて。吾に百日と云ひ付られたるは　吾徒らの中に。もともかろく云ひ付られたるにて。吾友左次馬などは。此年(ことし)一とせが間と云ひつけられたりとぞ。然れば此行。はやく初めてむと思ふを。今の師（此は我師の事なり）の許されなむや。もし免されずは。しひて行ふに及ばず。ともかくも　今の師の云ふまゝにせよと　師の云はれたり　此事いかゞはせむと云ふに　おのれ　其は何てふ事か有るべき　師の歸られたらば。其よし白さむ。かならず免(ゆるさ)るべし。もし許されずは。おのれ猶ねぎ白して。ともかくもせむと云へば。いと嬉しげに打笑て。よろこびぬ。然らば其よし。まづ師の刀自に申さむとて。伴なひ行て。かくと申しければ。たゞ驚かれたるばかりにて　師の歸られたらば。然申さむと云はるゝを聞て　心や落つきたりけむ。漸に常

の如くに成りぬ。然ていふやうは。今上野へ行たりし時。師の云はるゝは。汝が此所へ來れるを。心もとなく思ひて。跡より人の來るなれば。とく歸るべしと云はれたれば。急ぎてかへりぬと云へり。師の刀自を始め、人皆おそれを爲すばかりなりき。又己れに云やう、けさ早く行むと。かねて約束したりしが。けさ今の師の櫻田へ行れたりしに依りて。いつも晝前には歸らるゝなれば。歸られて後に行ても。餘りに遲くは成らじと思ひて。時をうつしたりしが、いつもとは變りて、晝過るなれども。歸られざるに依りて。師の刀自君の云はるゝ言をも聞かずて。しひて行きたりしが。猶いさゝか遲くなりたりと云へば。己れさらば　師の山人の、先に其事云ひ付て行れたるか。いつの間に來られたるにかと問へど。また鼻笑ひして答へざりき。かくて其夕つかた。師の歸られたれば。師の刀自の。かくと白さるるを聞れて、甚く喜ばれて　其はいとよき事なり。世の枉事をはらはむとならば、予れもとも〴〵に行ひてむを。凡人の意には。要なき事すとて　必家内の者の妨ぐべければ。然ては中々に。行はざらむこそましならめ。あさては三日にて節句なれば。其祝ひ事のついでに。よく物振舞て。然て四日の日より始めさせてむ。つとめて怠る事なかれ　と云はれたれば　甚く喜びぬ　然て其明る日に、おのれ、けふはきのふ用事のありていづちへか行く。と云ひたるにはあらぬか。とく行ねかしと云へば。はや行でもよしと云ひて、つひに行かざりき　然て三日の日に。まづ髮を洗はせ。はた彼是と其用意をせさせ。また日ごろ好める物を食せなどして。四日の日よりぞ。行ひ始めさせられける。たゞ米一合の飯を　鹽を嘗て食ふのみなるが、更に然る氣色も見へず。常にかはる事なし。かくて五日の日の夕方。七時過と思ふ頃、常の如く遊びて居たりけるが。かの善之助と云へる童子の、おのれに云へるは　神童の彼處に倒れ居て、寢言の如き言いふと云へるに。己れ其處にとく行て見れば。よく寢入りたる如き狀にて。顏色變り。手も足も冷て。何やらむつぶやくを。よく聞けば。其れは左次馬がといひ〳〵左次馬といへるは、神童が幽界の友なり）又其れは山に返りて。と云へるばかりは聞取られたれど　猶つぶやきたるは。更

に何の由とも知られざりき。この日はをりあしくも。師は伴信友と云へる。同學の者の許へ行れて。いまだ歸られざりしかば。家内の者皆つどひて。とやせむ。かくやせましと驚くに。おのれ此は。必ず神懸りなれば。驚く事にはあらじと云へば。をりふし來合せ居たる。新吉といへる同門の者も。此は疑ひなき神事(かみごと)なり。其儘にておきねかし。など云へど。家内の者は。猶聲ふりたてゝよびさわぐ程に。神童の云へるやう。寅吉をば。人の來ざる所へ連行て給はれと云ふに。新吉の云へるは。然てこそ神事なれ。我いだきて。連行きてはあしからむや。いかが仕らむと申したりければ。神の然して給はれと宣ふに。新吉いだき上て。行の中の寢處と定めたる板鋪に。あらごも敷。屏風たて廻らして。寐させむとしたりければ。神の宣へるは。起し置て給はれと宣ふに。然らばとて。宣ふまゝに爲たりける時に神の宣へるは。竹内孫市と云へる人に。水をもらひて賜はれ。と宣ひければ。おのれ畏まりて。水を請めて奉りたりければ。みな呑給ひて。此後も水を乞はるゝ事度々なり。然て此處には。外の者は皆退きて。おのれにのみ殘り居れ。と宣ふ故に。己れ獨屏風のうちに入りて。畏まりて侍ひたれば。宣へるやう。寅吉が此度の行につきて。種々と世話なして給はり。又此許に久しく留め置きて。世話せらるゝ事どもの忝けなく。其禮申さむとて來れり。但し形を現はして。禮をも申すべきなれども。此は得ならぬ掟なれば。寅吉が心を拔て。乗り移りて御禮申すなり。外に禮申さむかたも無ければ。災難除の御札を書て參らすべし。もはや先生は返られたるか。と宣ふに。己れつゝしみて。いまだ歸宅は仕らず。さきに迎ひの者をば遣し候ひしが。なほ又迎ひつかはして。此よし告遣さむと申したりければ。然らば迎ひやりて給はれかし。但し據なき用のあるならば。歸らるゝには及ばず。又居らるゝ時に來るべし。と宣ふに。おのれ畏りて。さまで要の事も候はねば。とく迎ひ遣はすべしと白せば。然らば序に。屋代太郎殿にも。寅吉が事につきては。甚く世話せられたるなれば。此人をもよびて給はれかし。禮に御札參らせむと宣ふ故に。奉はりて。師の刀自に此よし白せば。いそぎて師の御むかひには。かの新吉參り。屋

代翁の許へは。上杉六郎と云へる。同門の塾に居るを。つかはしける時に。また宣ふは。今の迎ひの者どもを。よび返して給はれと宣ふに。急ぎてよび返して。かくと申しければ。しかじかの御禮申さむために。御札かきて参らすべき由を。申して遣すべしと宣ふに。奉はりて。此由申せと云ひてつかはしぬ。然て御札はいく枚書て参らせむや。と宣ふに。おのれ恐みて。家内の人數ほども。給はりたくこそと白せば。うべなひ給ひて。然らば先生の返られて後に。書て参らすべし。まづ一度歸りて。先生の歸られたる時に。また來るべしと宣へば。ともかくも御心の儘に遊ばし給へと白せば。神童忽に倒れておのれが膝の上に頭をたれかけ。手も足もいと冷かに。顔色は青さめて。がたがたとふるひ出しぬ。おのれ袖を覆ひ。かき抱きて。暖めむとするほどに。また神の宣へるやうは。前には先生の歸られてより。又参らむとこそ思ひたりしが。今は歸らで待べしと思ふ。然て汝も寅吉をば。よくも世話なして。くれられしぞかし。形を顯はして。御禮申すべきなれ共。此は決してならぬ定まりなれば。寅吉が心を抜て。乗り移りて。御禮申すなりと宣ふに。おのれ甚く恐れて白すやう。此はいとも恐き仰をば。承りて侍ひぬ。私におきては。それぞと申すべき世話をば。仕りたるおぼえも侍はず。たゞ朝夕の事のみにて。御禮のたまふと奉はりては。申すべきかたも無く。恐き事にこそと白せば。いやとよ。よくこそ世話をばせられたれ其御禮に。何事なりとも望まるゝ事あらば。申させ給へ。かなへて参らせむと宣ふに。此はまた難有御言を奉りて侍ひぬ。然らば願ひ申すべき事の候は。道の蘊奥を極めて。師の手に代らむ事をと申したりければ。いと安き事なりと宣ひて。それよりくさぐさ。貴き御物語どもありき。然てその御物語のはしばしに。寅吉が心をぬきてのりうつりたれば。いたく身内のひゆるなれば。蒲團しきて。ねさせて給はれかしと宣ひけるに。師の刀自の。さらば疊の上にふとむしき。夜著をきせてねさせてむを。然てはいかにあるべき。白して見よと申さるゝに。しかじかのよし白したりければ。うべなひ給ひて。はたいみじくひえたれば。火を入れて。暖めて給はれかしと宣ふ故に。まづ火を入れてあた

ため。然て疊の上に蒲團しき。屛風たてめぐらして寐させむとて引越さむとするをりに、師の刀自君の申さるゝは。我手傳ひて連行かむ。よかるべしや。申して見よと申さるゝに。其よし白したりければ。然らば手傳ひて給はれかし　と宣ふに依りて。師の刀自とおのれと二人して　いだきあけて。衾の上にねしめむとする程に。うつぶしにねしめ給へと宣ふ故に。またおのが膝を枕にせさせて。うつぶしにねさせたり。屛風たてまはして。先の如くおのれ獨り侍ひて　人々は退きぬ。然て目もくれければ　師の刀自君の。おのれに夕食食へと申さるゝを。後にこそと申せば。師の刀自の返す〴〵然申さるゝを。所開食して。然らば此所へもて來て　此處にて食へかしと宣ふによりて　己れ有がたき事に思ひて。然らば御ゆるし蒙ふりて　此處にて給はらむと申して膝をば神童が枕にせさせたる儘にて喰ふを。師の刀自の。然ては不自由にぞあらむ。我代りて枕をばせさむと申さるゝを。いなめども。かへす〴〵申されければ　又然らば代りて給はれかしと宣ふ儘に。師の刀自の代られて。然て伺ひ申さるゝは。かく願奉るも。畏こき事ながら　猶伺ひ奉り度事候と申されければ。其はいかなる事にかと宣ふに。師の刀自の。恐る〴〵申されけるは。寅吉が此度の行の事にて候。日に米一合の飯を食ひ候と申すは。よそに見るさへにたへかねて候　それにつき少かも。其助けにもなれかしと　大角をはじめ　竹内孫市。上杉六郞すべて。三人食事ごとに。一椀づゝ減して候ひぬ。又あすよりは。私事も。一椀づゝ減して助申べく候へば。すべて四人の者の。減じ候ほどの食を。寅吉に給べさせ候事は　なり申すまじきや　と伺ひ申されければ　聊かいなみ給ふ御氣色なりしが　然らば一人毎に。米一握り。都て四つかみ增て遣はすべし　但し寅吉は　必諾ふまじければ。我許したる事を云聞かせて。給はるべしと宣ひぬ　師の刀自いたく畏まれて「これは難有尊きことにこそ候へ。猶此上の願には。香の物の御許をも受たくこそ。と申されければ。然らばとて。これをも許し給ひぬ。師の刀自君悅ばるゝ事限なし。然る間に　己れも物くひ終たるをりに　屋代翁の來られたれば　其よしを申しつゝ　師の刀自に代りて。又おのが膝を枕にせ

させたりけるをりに。神童おきあがらむとしたりしが。屋代翁に宣ふは。心をぬきて甚くよわりたれば起得ず侍ふを。ゆるし給へと宣へば。屋代翁は。寅吉いかにしつるぞなど申されて。脉を取りて久しく見られたりしが。後に師に申さるゝは。脉しづみて。さらに知られざりし。と語られたりとぞ。然て屋代翁にも　寅吉が事につきては　いたく肝煎られたる事のあるを　忝なくおもほしめすよし宣ひて。其御禮に　御札參せむと宣ひぬ　然てそれよりは。御物語などもなく　師の歸らるゝを待かね給ひたる御氣色にて。屋代翁には。まづ御札かきて參らせむと宣ふにつきて。其料の紙硯机など。清くして持出。筆は屋代翁の持れたるを奉りたりければ　既に書給はむとし給ふ時に。師の還られたるに依りて。かくと白したりければ。神童むくとおきて。さきに設けたる机によりかゝりて　いく度も倒れなむとする故に。おのれ。後　の方よりかき抱きて居り。師は後に遣はしたりける迎ひの者には　逢はれざりしとて。然る事をも知られざりければ　人々の此よし申すをきかれて。かつ驚き。かつよろこばれて。直ちにみそぎをせられ　衣服を改められて。神の御前に出られ　額つき拜みて申さるゝは。云々　と宣ひて　神は上らせ給へば。神童は其まゝ机によりふして。いとよく寐入たるが如くなり。然て神の宣へる如く　師の酒を吹かけられ。又一口呑しめ給へば　驚きたる氣色なりしが　そが儘に机を取のけて。よくふさしめたりしに。間なくむくと起上り。枕邊を見廻して　あやしむ事かぎりなし　師また屋代翁など。とかく云ひ靜められて。猶寐しめむとせられたりしかど。更にいぶかしみて有りし事どもを問ぬるに。師のしかじかと云ひ聞せられたれば。驚きたる氣色もなし。人々さぞ物ほしからむ。いざ喰せばやなど云ふに。更にほりする色もなく　暫の間は。とかくに物あやしむ狀なりしが　然らば物食むと云ひて。晝の間に食ひ殘したるをくひをへて。それよりは常に變る事なし　然て神の上り給へる時に。其座鋪の軒の邊とおぼしき所の　すしりと音のしたりしが。其所に居たる人々の中にては。おのれのみ聞たるばかりにて　餘には聞たる人なく。其所よりは　間を隔てたる所に居られたる師が姑の。其

音を聞かれて。唯何の心もなく。大じき音のしつる事ぞと思はれたるばかりなりしと後に云はれたりき。もとも其夜は風のいつもよりは強く。雨戸に吹當てたれば。その音にもあるべしと云へるもあれど・おのが聞たる音は。風の音にはまがふべくもあらざりけり。然て此の神懸の間に神の宣ふ御言ども。俗に云ふきり口上にて。たとへば御自の御事をば。私と宣ひ人をさし給ひては。あなたと宣ひ師が事をば先生と宣ひける。すべてかくさまにいと〳〵謙りて物をば宣ひける。然てまた。同月十二日の事なりしが。かの善之助と云へる童子の。おのれに云へるは。神童の火の見に上りて誰とか物語るさまなれど。外に人も見えず。我かしこに至りければ。此處には聊か用のあるなれば。あなたへ行きて給はれかし。といひたるさまいとあやしげなりきと云ふに。おのれも奇しき事に思ひて。まだ火の見に居るかと問へば。居ると云ふに。急ぎ走り出て。物蔭より窺ひ見れば。火の見の上に居て。擧動かして。人と物いふさまなれど。誠に餘には人も見えずしきりにいらへなどして。聊か數ふさまなり。おのれ此は又神の幸ましゝ事ぞと思ひて。ひれふし拜みつゝ思ふやう。おのがかく拜み奉るを神はよく知しめしてまだきに還り給はむも知るべからずと思ひて。頭を擧て拜み奉れば。はや神童さへに見えず。此はいかにと思ひて。なほ物のひまより。かしらさし出して見れば。神童は。火の見の下り口に居て。西の方に向ひ。大空を打見わたして居たりければ。其まゝに師に白さむと思ひて。つと内に入れば。神童は火の見より下り來りて。其儘厠へ入りぬ。おのれは師の傍へいゆきて。かくと申せば。師もまたあやしまるゝはしに。神童參りて。師に白すやう。あすは吾が師の老翁の。誕生の日なれば山にては其御祭を行ふなり。我もまた此の祭をせまほしく思ふを。此事ゆるし給はれかしと申すに。師の喜ばれて。其はいと安き事なり。然らば山にて行ふ如くに。仕へ奉れと申されければ。いと歡びて。然らばしか〳〵の物どもを。調へて賜はるべし。我料理して供へてむと申すに。師も歡びのあまりに。費は厭ふべきにあらねば。品のよろしきを。思ふが儘に調へて。よく料理して。ねもごろに仕へ奉れと申

されて。然て其はとくよりも心得居たる事か。また此度に云ひ付られたるか。と問ねられたれば。とくより。あすは御祭せまほしく。おもひ居たるなりと白すに。師の。其は僞なるべし。今汝が師の來られて。云ひ付られたるなるべし。と申さるれば。只うちゑみて。然にはあらじといなむを。己れ傍よりいふやう。我今汝が火の見にて。誰とか物語するを見たるが。かならずかの時に。云付られたるなるべしと云へば。其は僞なりとのみ云ひて。續ことの實をあかさゞりしが。師の返す〲問ねらるゝに。忍びかねて。誠に然なりと申すに。師の。さらば又。師の老翁の來られたるか。と問はるれば。いな使にて。云ひ付られたるなりと申すに。師の使には。誰かは來られしぞ。左次馬などの來りけるか。と問るれば。然なりと申す。何處へか來りしぞ。と問ねられければ。師の書齋の庭の。向ひの空に指さして彼處のあたりへ來たりし故に。二階の火の見へ上りて。物語しつるなりと申しき。然てまた申すは。左次馬が云へるは。明日御祭行はゞ。其を享に師の來らるべき事なれども。明日は汝も知る如く。山には種々の事ありて。いといそがしければ。師は來られず。代りの來るべし。はた誰にも限らず。願白すべき事のあるならば。其よし書記して。神前に置べしといへりと申しき。然ておのれに云ふやう。明日の御祭に獻る。種々の物どもをば。我自ら求めとゝのへ。また自製して獻る事。定れる山の範なれば。然る物どもを。みづから求め調へ。みづから料理せまほしく思ふを我ひとりにては。物の價をも定め難く。かつ調味も種々の事なれば。いかでともに行て。其物どもを求め。かつ其料理の手傳をもなして。給はれかしと云ふに。己れ諾ひて。それより神童と共に。其處此處とはしり廻りて。其種々の物どもを調へ集め。然て其製しの手傳などしたりしが。其夜八時過る頃ほひ迄には。先大かたは調ひて。殘れる事をば。明る十三日の朝まだきより。始めて晝九時半ごろには。調味は云ふに及ばず。神床のよそほひなど。すべて悉く調へをへぬ。然て其神床の裝ひは。まづ古ぶりの如く。眞菰を敷て。御座を設け。櫁まさ木（是は櫁まさ木に限る事にはあらず賢木の類ひなればいづれの木にてもよしと云へり但し松杉など

の如き葉の木にては惡しと云へり）を根こじにして。白和幣を取垂て。左右に建て神籬と爲し。然て神童の。みづからきりたる幣帛を。御靈實と爲し。其献る幣物には。まづ緑豆の飯。洗米。神酒。水。鰭ノ廣物。鰭ノ狹物。毛の和物。（是は小鴨の生ながらなるを。青木五郎治と云へる者の。奉れるなり。調味して献らむや。はた生ながら献らむや。と神童にたづねたりければ。生ながら奉れるかた。殊によろしきとて。いたく歡びたりき。後神事はてゝ。神童の云へるは。此鳥再び人に取られざるやうに。禁咒をして放ちてむとて。則加持をして。秋元家の士河野大助と云へる者を賴みて。不忍辨天の池へ。放ちやりたりき。）然て此外に。神童が自製の幣物は。まづ鰹節の田樂と號けたる物。此はよく鰹節を湯煮をして。和かに爲し。厚み二分ばかりに。輪切にして。聊か火に燒て。白砂糖と山椒（實にても。芽にても。）とを。すりまぜたる味噌にて。あへたる物にて。此供り物の中にも。殊に勝れたる物なりとぞ。又長芋を。生ながらすりたるを一箸ばかり。其中に。鹽と白砂糖と山椒（實にても。芽にても。）とを。聊かづゝまじへて。淺草海苔を。貳寸四方ほどに切りたるに包み。乾瓢（芋からにても）にて結ひて。油にゝ揚たると。また長芋を。鹽と白砂糖を入れて。煮たる酒もて煮て。うすく輪切にして。其上に。ころ柿をいと微さく切りたるを。一ツづゝ載せて。葛の粉の煮たるに包みて。これをも油にて揚たると。又澤瀉をも。右の如くに製したると。又長芋を。右に云へる酒もて煮たるを。火に燒たると。又澤瀉を。湯煮をしてよくすりて。右の酒を入れ。それに鷄卵を入れ。また葛の粉を。水どきにしたるを入れて。其を玉子燒の如くに燒たる。とを献れり。（此等の物どもを、直會の時に、人々に賜はしめたるが、其味ひ大かたの物にあらず、實に神界の調味なりとて、人人いたく感じたりき。）然て物みな設け備へて。神童みづから幣帛を。大小貳本きりて。かの幣物を悉く祓ひて。然て奉幣を爲しぬ。其狀。此方にて行ふ奉幣の式とはいと異にて。後によく聞けば。此は劒術の手なりと云へりき。然て奉幣終りて。集侍る人々に。拜みせよとて。皆拜ましめ。然して後に。かの人々の願事を記したる書付を。神童人々より受とり

て。其式ありて。かの神床の傍に奉りぬ。然て後。かの神童が自製の幣物をば。みなおろして。古ぶりの如く。其神器のまゝにて。直會の式を行ひぬ。まづ其式は云々。此式終りて後に。人々に賜はしむ。これ皆神童が執行ふ所なり。然て此直會の式はてゝ後に。神童みづから。神樂の舞を舞たりき。先幣帛と鈴とを取て舞ひ。次に鈴と扇とを取り。又次には鈴と榊とを取り。また次には弓をとりて舞ひぬ。此弓とりの舞は。則かの界の臺目の法なりと云へり。然て次々に俳優を。三番舞たりき。其體たるすべて凡ならず。神の懸りて。舞賜ふかと思ゆるばかりなり。(實に此時の舞は、神のかゝり玉ひて、舞ひ玉ひけむも知るべからず、と覺ゆる事あり、其は其翌十四日の夜、晝のほどより、今夜はきのふの夜よりも、殊によく舞ひて見せ申さむとて、稽古などして舞たりしが、きのふの夜の舞には、更に似るべくもなく、甚くおとりて見えたるは、いと奇しき事なりかし、)長袴を著て。能の三番叟の如き足拍子をふむに。悉く拍子に應ひ。更に杜撰にあらずとて。然るかたに心ある人には。皆感じて止ざりき。(これより先に師の問はるゝは、神界には必ず古ぶりの神樂、また俳優などもありなむと思ふを、汝はしらじや、としば〳〵問ねられたれど、更に然る事はあらじと云ひ居たりしが、はたしてけふに至りて、かくは舞ひたりき、すべて舞の番數□番あるを、我は其うち、口番ほど覺えをる、と語りたりき、)然て其俳優の相手を爲したる者は。御鐵炮師國友能當と。醫師淺野世寛となりき。然て神樂終りて。神送りの式あり。此は神童かの幣帛を取りて。また奉幣の如き事を爲して。然て其御燈を消しぬ。今神の還らせ給へば。雨戸を明て給はれと云ふ。人々雨戸を明れば。今神の立せ給へば。かならず大きなる風の吹べしと云へりしが。はたして然なりき。然て神送りすみて。神童彼願書を人々へ渡し返しぬ。此御祭。晝の八時前と思ふ頃より始めて。其夜五半時頃にぞ行ひはたしたりける。其始め終りいと正しくして。更に少年の者の爲す事とは覺えざりき。すべて此御祭に。參り會たる人々には。まづ屋代翁。師が家ところの地主御勘定小島祐助。同子息泰次郎。酒井若狹守殿の家來。伴州五郎秋元但馬守殿家來。河野大助。板倉阿波守

殿家來。青木五郎次。御鐵炮師國友藤兵衛。醫師佐藤松庵。淺野世寛。町人多田屋新兵衛。佃屋傳次郎高橋安右衛門。此餘に越後國小關村より塾に來居る。上杉六郎と云へる者と。おのれとなりき。然て此外にも。猶かゝまほしき事は多かれど。今は姑く略きて云はず。

文政四巳年四月

七生舞の記（仙境異聞附錄）

問云或船人の物語に或時海中に船懸して在けるに一町ばかり南の方にも懸り居たる船有しか夜更て其船の方に琴笛篳篥などを合せて不思議に面白き音樂の聲聞えたり船中には珍しき事と思ひながら彼舟に音樂する人の乘合ひて樂をするにこそと思ひて翌朝帆を揚る時に其船人に言葉をかけて夕部の音樂はいと面白かりき其道の人々の乘合たるにやと尋ねしかば彼船の者とも奇しみて我が船にも音樂の聲面白く其船の方より聞えたれば今問はむと思へるに其方より問はれたりといふにぞ見れば彼船には常の船人のみにて音樂など爲べき者とては一人もなし互に奇異の思ひをなして別れけるが其後またかゝる事に逢たりと語りきまた或人の言に山にても然る音樂の聲を聞事有と云しも此狀なりかゝる音樂を世には天狗囃しといへども天狗の態のみならず神仙の態もあらむと常に疑ひ思ふ事なり然る遊樂する事は見ざりしか

寅吉云それは七しやうの舞とも御柱（おはしら）の舞ともいふ樂を奏せるを聞たるにや其舞は度々見たる事も侍り

　問云七しやうの舞とは字をばいかに書ぞまた樂器は何々ぞまた唱歌はいかに

答云七しやうとは一二三の七の字を生の字に何か扁の有し字と覺えたり樂器は短笛五管一丈の笛九尺の笛各々一管りむの琴一挺かりやうの笛五管浮鉦（うきがね）二つ此六品にて唱歌は五十音を聲を長く引て唱ふるなり

（篤胤云七しやうと云しやうの字は詳かならねど寅吉が語のまに／＼姑く七生舞と書てあるなり）

　問云まづ五管の短笛の狀はいかに

答云短笛は五管同製にて女竹の節間の長きを擇て歌口とも九穴に圖のごとく作り圖の如く持て五十音の唱歌に合せて圖に著せる如く吹くなり

　問云一丈の長笛の作り狀また吹かたはいかに

答云これも女竹の本末同じ太さにて節間の長きを擇みて節をぬき歌口一つにて小穴すへて五十六穴あり圖の如く作り畢て中に生蠟を流し圖の如き玉紐をつけて高樹に圖の如く釣おき五人圖の如く立て中なる一人が五管の短笛を吹ことく八穴を開閉して五十音

を吹を左と右との二人づゝ立たる人々左右の四十八穴を兩手の指にて開閉するなり但し此は圖に著はし難ければ爲方をまなびて口傳に申すべし

問云九尺の長笛の作り狀また吹かたはいかに

答云これも竹は右に同じく節をぬき此は歌口二つにて小穴すべて四十八あり圖の如く作り畢て生蠟を流し此も五人懸りなるが圓座に座してふくなり二人は息を入るゝ計にて穴を開閉する事なし中と左右とに座したる三人にて兩手の指もて開閉するなり但し此も圖に著し難ければ仕方を學びて口傳に申すべし

問云リンの琴の狀また其奏しかたはいかに

答云此をまたキンの琴ともいふされどリンの琴といふか實の名なりとぞ字はいかに書やらむしらず其狀は圖の如くにて木を空にくりて底に板を打つけ面に二た所八の字形の穴を明たり眞鍮の針金の一ト筋にて一二三の順の如く次第に太きを引通して八絃にかけ絃の通る穴ごとに鐵のしとゝめを入れまた絃の下にあたる處ごとに圖の如く小穴あり底板の下に圖の如くしめ木をさし左手には鎖にて製れる目利安の如き物をかけ右手には鋏にて圖の如く作れる爪を指三本にかけて二人にて向相ひて左の手にて常の琴彈くごとくあしらひつゝ笛に合せて奏し時として八の字なりの穴を左の手にて塞ぐ事あり然れども我は其彈く法をしらずさて琴柱は圖のごとく女竹にて作れり上手の者は足の低き方より彈上げ下手なる者は足の高き方より彈下るなり鳴音おびたゞしき物なり針金の絃なる故に鎖のぬりやすを掛ざれば手を損ふ物也

問云カリヤウの笛の狀また鳴すやうはいかに字はいかに書くぞ

答云この笛は吹鳴す物に非ず狀は圖の如くなるを左手に筒をもち四穴を四ツの指にて開閉しつゝ右の手に柄をもちて突鳴す故にまた突笛とも云中に笛十二本しくはせ筒先穴の内と柄の先とに雷獸の皮を付たり何の爲といふ事を知らずさて此は五人並び座して外の樂器ともに合奏する事にて突時は穴を塞ぎ引時に穴を明る狀に見受たるがそれにて音韻によく叶ひて聞えしなり然れど一管にては音韻に叶ふとも思はれずカリヤウといふ字はいかに書やらむ知らず（篤胤云此笛の字も詳かならぬを寅吉が語にクワとカと聞別かたき事の多ければ屋代翁と議りて姑く迦陵の

字を書てあるなりさて出羽の山形の殿人須賀氏はかるる工みに得手なる人なれば寅吉がいふまゝに傳へて一管作らせたり)

問云浮鉦(うきがね)の狀また鳴しかたはいかに

答云浮鉦は木をくりて火桶の如く作り内に三の耳あり此は蓋のかゝる所なり蓋の尖りたる處は金なり音を能せむが爲なりとぞ中に水を入れて蓋をなし圖の如き打棒にて打なり但し此は笛琴などに合奏する物には非ず舞の場に出る時入る時或は一周々々の間々に打つ物なり

問云この舞樂を行ふ時の裝束は何樣なる物を着る事ぞ皆一樣なるか各々異なる歟

答云舞人樂人皆一樣の裝束なるが何といふ物なるか知らず上の服は綠色にて雲の摸樣見えたり圖の如き後を引く物なり其下には白き物を着し其下は常の如くバアガフトコロの服物を着てあられ地の白き袴を着し烏甲に似て異なる圖のごとき冠をかぶり鞋を付たり舞人樂人ともに一樣の服なり

問云鞋のさままた作かたはいかに

答云鞋は藤よしを以てアンペラの如く編み圖の如く作りて引掛るやうに爲たる物なり

問云右の樂器どもを合せて舞ふ處をばいかに搆たる物ぞまた其作法はいかに舞人は幾人なるぞ

答云舞人は五十音に合せて五十人なりまづ海にても山にても廣き處に檜木か椙木の尺角ばかりにけづり頭に穴をくり明たる柱の高さ目通り計なるに四面に東西南北の字を記し頭より一尺計り下に麻の紐を付て數枚の木札を通して中央に突立て此を御柱といふ此柱の周りを舞人のゆるやかに立並びて其中に樂人の並ぶべく角力の土俵の如く丸をしるし巽坤乾艮の四隅にまた印をなし樂人の坐する所に菅の圓坐をしき舞人樂人すべて七十四人其場より東の方に屯して支度を調へまづ樂人二十四人次第を正して其場に進み各々柱に向ひて一禮し各々其坐に就き貌を正し氣を靜めて後に浮鉦の樂人二人相圖の浮鉦を打出す時に五十人の舞人ら等しく立ち次第を正して其場にすすみ最先に立たる二人は丸の中に入りて柱の東西に就き其次より四十八人の舞人は東を首とし南を尾とし四隅の所を界として一方に十二人づゝ立並び五十人の舞人ともに手を臍の所に當て何れも柱に向ひて

一禮し浮鉦を打こと終りて後に舞始むるなり

問云しか並びて舞ふ狀はいかに

答云浮鉦を打こと止みて後に五十人の舞人手を臍に當て立たる儘にて柱に拜禮をなし何れも振向きて斜に立ち笛吹の樂人諸共にアーーと吹出る音と共に東頭第一に立たる人まづ甲音にアーーと發聲す其時に柱の東西に立たる二人の舞人左の手足を出すこれ舞始なり此を見て周に立たる四十八人一整に左の手足を出す（すべて手はいつも踏出たる左右の足に從ひて出す事下これに傚ふべしさて柱の東西に立つ二人は中にも功者なるを用ひ手の舞足の踏は何れもと同じ樣にして柱の邊を小さく廻る四十八人の中にもし舞踏を過まる人ある時は二人の舞踏を見て直し改むべき規矩をなす大切の役人なりとぞ）笛にイーーと吹時に第二に立たる人また笛の聲とゝもにイーーと乙音に唱ふ其時一整に右の足を出す（すべて甲乙の音を互にする事始終この定なり笛に聲を合する事も下此に傚ふべしさて五十人にて五十音を一聲づゝ唱ふれども心にては五十音をみな唱へつゝ周らされば舞踏をあやまる物なり）第三に立たる人ウーーと唱ふる時に一整に右の足を引き第四に立たる人エーーと唱ふる時に一整にまた右の足を出し第五に立たる人オーーと唱ふる時に一整に左の足を出す（左右にて三足進みたり）第六に立たる人カーーと唱ふる時に左足を引き第七に立たる人キーーと唱ふる時にまた左足を出し第八に立たる人クーーと唱ふる時にまた左足を引き第九に立たる人ケーーと唱ふる時にまた左足を出し第十に立たる人コーーと唱ふる時に一整に右足を出す（右を一足進みたり）第十一に立たる人サーーと唱ふる時に右足を引き第十二に立たる人シーーと唱ふる時にまた右足を出し第十三に立たる人スーーと唱ふる時にまた右足を引き第十四に立たる人セーーと唱ふる時にまた右足を出し第十五に立たる人ソーーと唱ふる時に一整に左足を出す（左を一足進みたり）第十六に立たる人ターーと唱ふる時に左足を引き第十七に立たる人チーーと唱ふる時にまた左足を出し第十八に立たる人ツーーと唱ふる時にまた左足を引き第十九に立たる人テーーと唱ふる時にまた左足を出し第二十に立たる人トーーと唱ふる時に一整に右足を出す（右を一足進みたり）第二十

一に立たる人ナーーと唱ふる時に右足を引き第二十二に立たる人ニーーと唱ふる時にまた右足を出し第二十三に立たる人ヌーーと唱ふる時にまた右足を引き第二十四に立たる人ネーーと唱ふる時にまた右足を出し第二十五に立たる人ノーーと唱ふる時に一整に左足を出す(左を一足進みたり)第二十六に立たる人ハーーと唱ふる時に左足を引き第二十七に立たる人ヒーーと唱ふる時にまた左足を出し第二十八に立たる人フーーと唱ふる時にまた左足を引き第二十九に立たる人ヘーーと唱ふる時にまた左足を出し第三十に立たる人ホーーと唱ふる時に一整に右足を出す(右を一足進みたり)第三十一に立たる人マーーと唱ふる時に右足を引き第三十二に立たる人ミーーと唱ふる時にまた右足を出し第三十三に立たる人ムーーと唱ふる時にまた右足を引き第三十四に立たる人メーーと唱ふる時にまた右足を出し第三十五に立たる人モーーと唱ふる時に一整に左足を出す(左を一足進みたり)第三十六に立たる人ヤーーと唱ふる時に左足を引き第三十七に立たる人イーーと唱ふる時にまた左足を出し第三十八に立たる人ユーーと唱ふる時にまた左足を引き第三十九に立たる人エーーと唱ふる時にまた左足を出し第四十に立たる人ヨーーと唱ふる時に一整に右足を出す(右を一足進みたり)第四十一に立たる人ラーーと唱ふる時に左足を引き第四十二に立たる人リーーと唱ふる時にまた右足を出し第四十三に立たる人ルーーと唱ふる時にまた右足を引き第四十四に立たる人レーーと唱ふる時にまた右足を出し第四十五に立たる人ローーと唱ふる時に一整に左足を出す(左を一足進みたり)第四十六に立たる人ワーーと唱ふる時に左足を引き第四十七に立たる人キーーと唱ふる時にまた左足を出し第四十八に立たる人ウーーと唱ふる時にまた左足を引き第四十九に柱の西に立たる舞人ヱーーと唱ふる時にまた左足を出し第五十に柱の東に立たる舞人ヲーーと唱ふる時一整に右足を出す(右を一足進みたり)すべて十二足進みたる故に先に東頭第一に立たりし人は南頭に至り南頭に立たりし人は西頭に至り西頭に立たりし人は北頭に至り北頭に立たりし人は東頭に至る此を一行とす一行すむ時に樂器を皆止めて柱の本なる舞人一行の數取の札をよするなり一周ことに此の

如しこゝに何れも前の如く柱に向ひ立ち兩手を臍の所にあてゝ拜禮をなせば浮鉦の樂人浮鉦をうち出す此を打事止みて笛を諸聲にアーーと吹出る其聲と共に東頭第一に至れる人アーーと唱へ柱の東西に立たる二人の舞人左の手足を出すを見て周に立たる四十八人一整に振向き左の手足を出す次々に唱ふる事また手の舞足の踏行さま上に紀せるに違ふ事なし都て五十度かくの如く廻りて五十人の人々五十音を悉く唱ふるなり十度目ごとに柱の本なる兩人白紙を柱の頭なる穴に入るゝ何の料といふ事をしらずさて五十度目には始め東頭に立たる人南頭に至るなり此時に何れも始の如く柱に向ひ立て日輪の印と云狀に兩手の指を合せ樂器に合せて五十人諸聲にアーーと唱へ次にイーーと唱ふる時に突居り五十音隔聲に立居して立時は合せたる手を上に向け突居る時は下に向る是また五十音を五十扁鳴ふるなり一扁ごとに浮鉦を鳴し木札の數取をよせ十扁目に白紙を柱の穴に入るゝ事も上件の如し五十扁畢りて後に樂器をみな止むる中に浮鉦のみは皆々退去する迄鳴すなり退去する事は始め東頭に立たる人最先に立ちそれより次第を正し柱の本なる二人の舞人は最後になりて退き其より樂人また次第を正して退く也なほ細かなる事は其場に臨まねば思ひ出かたく侍れど大略をのみ申侍るなり

問云此舞樂はなくさみに物するかと思ふに其狀はなはだ嚴重にして敬みたる事と聞ゆるは何の爲に行ふ事ぞ

答云此舞樂は天神地祇の大きに歡ひたまふ樂にて此を行ふ時は感應ありそれに替りて妖魔の倫は殊の外に忌嫌ふ樂なりそれ故に神祇をなくさめて感應を蒙らむと欲する時かまたは山人たちの住する山々の妖氣を拂ひ淨むる時などに行ふなり音樂の道理を極めたる物故に妖魔も邪心を返して善心になると聞たり山にて行ふに音樂の響樹靈にこたへて面白く鳥獸もこの樂を好みて寄聞くものなり中にも海にて行ふときは廣き海面に響きて音色ことに面白く魚共群りて寄來るか中に鰯の類なる小魚は丸く堅まり青く白く光りて寄來る物也

問云山にて此樂を行ふよしは聞えたれど海にても行ふといふ事心得す但し何の爲にする事ぞ

答云海にて行ふ事は何の爲といふ事を知らず海神の手向といふを思へば其所の海に魚獵ある樣にとのことにてもあるべし。

問云海原にて此舞樂を行ふ時に柱をば建ざるか樹に懸る一丈の長笛をば用ざるかまた山人たちは水面に立て行ふかいかゞ

答云人々水面にも立ち或は宙に立ても行ひ柱は海潮にも宙にも立るまた長笛もいかにしてか宙に釣もし又は碇を下せる帆柱にも釣り置き其傍にて行へとも船中の人は遠くに聞なす物なり惣て人間にて思ふとは大きに相違の事なり

問云この舞樂を汝に習ひて眞似たらむに山人たち怒りて祟る事などは有ましき歟

答云吾師の山人は溫和にして人間の爲となり用に立べき事をばよく信じて問人には見聞し覺えたる儘に傳へよと下山を命せられし時に言れたり然れば怒らるゝ事なし妖魔の嫌ふ樂なれば願はくは人間にても行ひ度ものなれど容易に調練する事叶はず殊に樂器の奏し方も我よく知ざれば是非もなき事なり

問云舞人五十人樂人二十四人すべては七十四人の人々は師の分身なるか若くは他山の山人たちにいひふれて呼集むるか一同の裝束樂器などは何として調ふる事ぞ

答云舞人樂人ともに師の分身にあらずいひ觸るかいかにやらむ知らねども他の山々より各々某々に裝束樂器を持てより集まる事なり

篤胤云寅吉を山にて師の山人のよぶには高山嘉津間といふとぞ山人とは仙の和語にて古き神樂歌萬葉集などによめり寅吉が師などみつから山人と稱するとぞ古言の存れるなり抑仙は諸越にのみ有て此國にはなき物と思ふは見聞せまき人の心なり皇國にも舊より仙多き事は古書に數知らず見えたる中に神仙あり佛仙ありまた其中に現身なると尸解なるとあり其差別はこゝに盡しかたし（唐土の書ともに仙に天仙と地仙と尸解仙と三品あるよしいへり皇國の仙にも此差別あり）世に天狗の態と稱する事右の山人たちの態なる事多しこゝかしこの海山などにて目に見えず聞しらぬ音樂のあるを世人は天狗はやしといひ中昔にもしかいへりと聞えて空穗物語俊蔭の卷に遙なる山に誰にか物のしら

べ遊び居たらむ天狗のするにこそあるらめ云々とあり此は作り物語なれど其頃すでに然る事の有し故にかく文たる也又神社に音樂の聞えしは日本記略に天延二年五月七日近江國解云兵主三上神社自去三月打太皷幷鉦之聲經日不絕云々と見え長明か發心集に奈良の松室といふ所の僧の許に在ける兒の仙になりて去たるが師に語りて三月十八日に竹生島にて仙人集りて樂をする事侍り琵琶を彈へき事の侍るか貸たまへといひて借り去れり師の僧三月十七日に竹生島へ詣てたりけるに十八日曉のねさめに遙にえも云れぬ樂の聲聞え雲に響き風に隨ひて尋常の樂にも似す覺えて目出度かりければ淚こぼれつゝ聞居たるに漸近くなりて樂の聲とまりぬとばかり有て椽に物をおく音のしければ夜明て見るにありし琵琶なり不思儀の思ひをなして竹生島に奉る香しき匂深くしみて日頃ふれと失ざりける此琵琶今にかの島にあり浮たる事にあらずと見ゆ（本書の文をいたく切めて擧たれば委くは本書を見るべし此事また三國傳記にも記し傳へたり）また近頃の物なれど諸國里人談といふ書に享保のはじめ武州相州のさかひ信濃坂に夜ごとに囃物の音あり笛皷など四五人の聲にして中に一人は老人の聲なり近在は江戶などより此をきゝに行人多し方十町に響きて始は其所知れざりしが次第に近く聞つけ其村の產土神の森の中なり折として篝を焚事あり翌日見れば靑松葉の枝燃さして境內にあり或はまた靑竹の大きなるが長一尺あまり節をこめて切たるが森の中に捨有けるこれは彼鞁にて有べしと里人いひあへり只囃の音のみにして何の禍ひもなし月を經て止ず夏の頃より秋冬かけて此事あり次第々々に間遠になり三日五日の間それより七日十日の間を隔たり始のほどは聞人も多く有て何の心もなかりけるか後々は自然と怖ろしく成て翌年の春のころ囃のある夜は里人も門戶を閉て戶出をせず物音も高くせざりしなり春の末かたいつとなく止けりと有りまた駿河國府中の人新庄仁右衞門道雄が語れるは阿部郡なる龍爪山といふ山に龍爪權現と云神の祠有り此山奥にて時々囃を聞者あり樂器は鈴大鼓銅羅笛などなりといふまた時として三味線の音の如き樂器を交ゆる時もありまた

同郡三輪の郷下村の山に福生大明神と云神あり此森にてをり〳〵音樂を奏する事あり或男其音樂を聞果し後に其處にて革一ト重張たる大鼓の如き物を拾ひし事有といへり此等を合せて思ふに仙境には現世に絶たる種々の樂事も傳はりまた彼界にて作れる樂事はさら也今存る種々の樂事をも物すると知られたりなほ七生の舞の事につきては種々思ひ得たる事も有れと仙境異聞に委く記せれば爰には漏しつ

文政五年二月朔日　　平田篤胤記花押

また追つきてしるす

去年の八月二十八日の事なりき土佐の國の殿人谷丹作正兄といふ人來れりさるは寅吉が師の山人は常陸の國なる岩間の山にも住事有といふを聞て其事を問はむとて也けりさて語りけるは我父は好井といひけり己はことし三十五歳なるが二十歳ばかりの時に父は身退られたり催馬樂の其駒伊勢の海田中の井戸席田などの秘曲を知たりしが吾にも人にも語られしは此秘曲どもは若き時鞍間の山に米叟上人とて道德卓れたる僧の有けるに偶會ひて習ひたりさて後に心づきて此態は雲上の秘事なるをかく習ひたりとも其家家より尤むる事有まじきかと云しかば上人きゝても し難むる人あらは吾に習へりと答へらるべし我に問人あらば吾は常陸の國岩間の山にて異人に出會し時習へるなれば有のまゝに然答ふべしとて岩間山の異人の事を種々語れる中に飯を供ふるに形の見えざる時にも供へたる飯の失る事も有しと語れり然れば岩間山には仙人の住て上代の樂事をも傳ふる事と見ゆと父の物語なりき此事年頃不審に思へるに寅吉と云童子の仕へたる山人は岩間山にも住事有と聞けば委しく聞まほしと云ふにぞ己代りて彼山の事とも語りきかせさて寅吉を呼出て催馬樂と云音曲を聞たる事ありやと尋ぬるにさる音曲の名はしらすといふ故に其駒席田の文句をいひ聞せてかゝる文句の音曲を聞たる事無りしかといへば其文句の音曲をも聞たる事有と覺ゆと云にぞ谷氏きゝてさては米叟か說實なりけりと喜びて歸りぬ是よりさき去年の三月十三日に今日は山にては例年師の誕辰を祝ふ日なりとて其祭をなしけるか山の神樂を見覺たるを舞はむとて七八番舞たり其日集へる人々二十人ばかり有けるか中に

亂舞の音曲をよく知たる人々も四五人ありしか何れも驚き異しみて中には此舞の古雅なるを見れば三番叟の舞などは事にも非ずといふ人もありき此時の事も山人の神樂の事も仙境異聞に委く記せれば此にはいさゝか其端を記しつ彼此思ひ合せて仙境に種々の樂事ある事を辨ふべし

二月十五日

鐵胤云く。浪花人松村完平。その頃來合せたるに依て。寅吉が事を。少か聞書せる一冊あり。屋代輪池翁その聞書にはし書して云く。

虎吉。岩間山にて。白石丈之進といふものゝ子となりて。白石平馬と稱す。十月十七日發足して山に入。十一月三日曉こゝに來る。このたびは嘉津間と改名せしと云。三字名をつくは。階級すゝみし由なり。故に此一冊を。嘉津間答問と題す。

また完平自ら。聞書の後に書そへて云く。

さてかく記し果たるを。師に見せ奉れば。虎吉童子に讀聞かされたるに。我が言へる事をたがへず。よく書取給へれど。我はいひたる言を物にしるして。人に見せるやうな。位のある者に非ざれば。ほぐにし給へとて。取上むとするを。己かたはらより。然もあらば人には見せじ。我一人の心得に隱し置かむとて。懐にさし入れて。なほ思ふに。此も又いと高き心なりけり。

右聞書に記せる趣は。既に前の條々に出たる事ども故。こゝに省きつ。

今年文政三年十一月平田先生に入門せまほしく思ひてわざと浪速より江戸に來り先生の許に至れるに時よく常陸國なる岩間山といふ山に住む山人杉山僧正といふに年久しく仕へたる虎吉といふ十五歳の童子の來り居るに逢ひて師を始め人々と種々の事ども語りつゞくるを傍に聞居りまた我も問ひ聞ける事どもを我が里人に見せむとてをろ〳〵書記しつ其は十日の夜と十一日の晝とにて此を聞たる人々は伴氏竹內氏今井氏守屋氏岩崎氏などなり

十日の夜に師の虎吉に言れしは某々よりそちに賴める呪禁祈禱をとく行ひ得させよすべて人は世の爲人の爲になるべき事の我が知たる事は勤むべき事なりそちの師杉山僧正の敎へも然ぞ有らむと言るゝに唯はすれどいたづらに遊び食物などねだりて取敢ざるを傍よりも强ひて催すに明日にやせむ明後日にやせむなど云ふゆゑに其由をいかにと問へば

寅吉云く呪禁加持寄祈禱などの事世の人は甚だ好みてすれど我は然しも心にすゝまず。

といふ故に人々いかなる故ぞと問へば

寅吉進みよりて云呪禁加持など隨分に驗ある事もあれと多くは兩部の法にて正しく思はるゝが少き故に我が心によしと思はずされど人の賴み故に行ふなり人が賴めばとて我が心に應ざる事を行ふこと進みなき故に遊びたくなるなり病には藥を用ふるがいつちよろしきを加持呪禁寄祈禱などを先とするは宜からず藥を專一にして其藥のきく樣にと神に祈るべき物なり加持呪禁に折々驗あることは賴む人の信仰と賴まるゝ人の一念による事もあれど世に種々ある鬼物の與ふる驗なり其由は或田舍人の胸やけるとて苦みけるに我戯れに加持する眞似して胸に龍吐水をかき傍に知れざる樣に十人火けしと書たれば即座に愈たることあり是をもて悟るべし

問云寄祈禱も宜しからずとは如何なる事ぞ然る宜しからぬわざを行ふはいかに

寅吉云寄祈禱をする譯は人にはいかなる故といふこと知れざる事のある時に神に問ふて明らむるわざ故に神をよせて伺ふが眞の道なれども其は勿體なき故に世間の祈禱者また我等も神に似たる佛たち觀音不動毘沙門摩利支天などを寄せるなり然れど此等はも

と無き物に名を負せたる物なれば寄べき樣なき故に世に種々うろつきをる鬼物などの奇來て驗を現はす物ぞと師の說なり此事先頃これの先生にも御咄し申たるに神世に出雲大社の神の案山子に物問給へる事の物語し給へるにて彌々しかと思ひ決めたり然は有れどたとへ鬼物のわざにもあれ驗あれば人の爲ともなる故に我々も行ふこと也

といふに人々案の外なる事に思ひて感じけるに寅吉又云かくいひては惡けれど天狗を信仰するも宜しからぬ事なり夫はこれの先生の言に火の行熱湯の行なども天狗の方にては何ぞ故ありて爲ことなるべけれど我が心には加持して其熱をおさへて行ふ上は神通といふに足らず火熱湯は熱かるべき物なれば熱きがよし水は冷なるべき物なれば冷なるがよしこれ人の眞の道なりと思ふ夫ゆゑ我はそちにたゞ幽界の事は問へども加持呪禁また法ごとなど一事だに習はむことと思はずと言れたりこれ實に然る事なり凡てかかる法どもは皆佛法より出たる事にて宜くも有らぬ事なれど仕來りのまゝに彼方にては行ふことなり殊に我が師などは人間の方から天狗といふ故に天狗といへど眞は山人と云ひて仙人の類にて天狗とは異なり偏に善事を修して天下太平萬民繁榮をのみ祈る故に神道を本とはすれど世にならひて佛をも捨ず兩部を用ひて神壇の外に佛壇をを搆へ佛法ざまの加持祈禱をもせらる然れども佛道は後人の作れるにて地獄極樂といふ所もなく觀音不動摩利支天などいふ物もなき物なるを有として此國の神を麁末にさせるからやつぱり魔道なり陀祇尼天法。飯綱法。聖天法。摩利支天法。などみな狐天狗其餘の物の靈を仕ひて行ふ法なりと聞きたり其證據には摩利支天法を行へば二三日めに大空に摩利支天の紋あらはるゝを雉子の羽をはける萩矢を桑弓もて射る時は其紋忽にわれて消るなり實に摩利支天がある物ならば魔除の弓矢に射らるべきに非ず此をもて餘の佛に驗ある事も魔のしわざ又は鬼物の見する驗なること顯然たりもし不審に思召さば我その法を行ひて紋を現はし射散して見せ申すべし地獄極樂須彌山などの說も誰かよいかげむに作りて愚人のおどしに爲たる物なり極樂は十萬億土といへば地つゞきと聞ゆるに師に伴はれて遠きからの國々まで行き大空に昇りても見たるに何で

も大地は丸き物にてくるりと廻りても十萬億土はありそもなく師も極樂といふ所はなしと云れたりわるい事を爲て御仕置に逢ふが地獄なり須彌山といふは大かた此大地から天までをかけて假に名けたる物と見えたりさて神をおきては世に人ほど尊き物はなきに天狗を拜み祈り。又は木石など何ぞ少しく不思儀なことがあると奉る故に惡魔・天狗種々の鬼物がよりて驗を現はす緣切榎など云かこれなり何にても惡魔の直によりて來る證據は藁人形を奉り祈りて見るべし忽に驗がある。こんな物や佛なとを崇める故に神を麁末にするなり此國は神國で我も人も太神宮樣の末なれば神を麁末にしては濟ず死んでも神の末なる故によくも惡くも神とはなれど佛には成られず其は梅實より梅を生じ桃實より桃の生ずる理に同じ。此世にて極樂へ行ふ／＼と思ひ居る人は死んで見ると極樂がないからまごついて居る內に惡魔や種々の鬼物に其道々に引込れるから氣の毒なもの也。凡そ惡魔はそんなまごつき人の透間を見て引込んと常に伺ひつけて地獄極樂を見せたり色々な物に化てたぶらかすなり。また佛法の惡き事は第一に男女の道を絕たるがわろし。鳥虫獸魚までも此道のなきはなし。然るに世に佛法が一ぱいになつては人がたゆるわけなり。坊主なる人が多く有から人のふえやうが少なからうと思ふなり。これ神々の人をふやさんとなさるゝ御心に違ふなり。

上件の說どもは各々其々難問しつゝ聞たるを一條にすべたるなり。

こゝに於て師の難じで。然らば十三天狗たち男女の交りせぬはいかにと問給へば

寅吉云世の人は山人天狗などの境の事をきいて浦山しがれども自由自在といふ計り山人には日々に種々の行ありて苦しく天狗にも種々の苦みあり夫故に彼方にても人間といふ物は樂な物ぞと常に羨み居るなり。女を忌ことは長命の爲に仕來りのまゝに爲て日日に神前にて鈴を振り土がふえ人がふえる樣にと祈るなり。

また其日來りし或博識ぶりする人の處々古學の講說しあるきける咄しの中に神道は小き道ぞと說たる由をいひて捕へ所なき學事をいと猛き事にいひほこりたる噂をしてあれは甚だ慢心なるをのこぞ

など人々語り相ければ

寅吉云すべて學問といふ物は魔道に引込るゝ事にて宜しからぬことなり其故は是ほど善きとは無けれども眞の道理の至極まで學び至る人はなく大凡は生學問を爲て書物をたんと知て居る事を鼻にかけて書物を知らぬ人を見下し神はなき物じやの仙人天狗はなき物じやの怪しき事はないのそんな道理はないのなど云ひて我意を張るが。これみな生學問の高慢にて心狹き故なり。書物にかいて有る事にもたゞちに見ては間違へて居るとは幾等もあり。一體高慢なる人は心狹くて遂に魔天狗に引込れ或は責らるゝ人なりあちらにて聞たる咄なるが何とかいふ大鳥がおれほど大きなる物は有まいと思つて出かけ飛草臥たる故に下に見ゆる穴に入りて羽を休めたれば何奴なれば家が鼻の穴に入りて休むぞと云れて膽をつぶしたと云ことなり人ほど尊い物は無れど我より下の物を見れば段々卑しく劣れるが有て幾百段あるか知れず其如く上にもまた段々に幾百段か尊き勝れたる物の有かも知れず然れば高慢といふものは大空はとこが止まりだと云ことを知て自由にする程の器量が無てはいへぬ譯なり。凡て慢心高ぶりほど宜からぬ事はなし。魔に引込れる縁なればなり夫故に貌の美しき人金持長者なども慢心高ぶりの心あるゆゑに魔に引込れる因縁にて　殊に金持のめつたに金をためるは宜からぬ事ときけり。金持が一所に金をためる故に貧乏人が多くなる世人が各々に暑からず寒からず食つて着て住るゝだけを用意して慾を深くせぬと世が平に行くなり物持金持が此はおれが物だと心得て居るけれども能思へば自分の物とては何もなく皆天下樣の物なり金銀も天下樣より御通用なさるゝ物其外食物も着物も天下樣の地に出來たる物なり家も御地面に在り其身さへに天下の御地面にてきて天下樣の御人なれば我が身とは云れず　金銀や何かをしたか持ても死時に持ては行れず然るに此事を辨へずめつたに慾を深くして物持金持となりたがる人は死してもやつぱり其心うせず然る鬼物となるこれ魔に引込れたるなり。

右寅吉の說どもは筆記し畢て其時ともに聞ける人人にも糺して淸書したるなり

庚辰十一月十二日

浪速人　　松村平作完花押

さてかく記し畢たるを師に見せ奉れば寅吉童子に讀聞かされたるに我が言へる事をたがへずよく書取給へれど我はいひたる言を物にしるして人に見せるやうな位のある者に非ざればほぐにし給へとて取上むとするを己かたはらより然もあらば人には見せじ我一人の心得に隱し置かむとて懐にさし入れてなほ思ふに此もまたいと高き心なりけり。　完平

勝五郎再生記聞

この再生記文の本は文政六年六月の末に清書しをへていまだ表紙も付さるを七月廿二日に江戸を立て京にまゐ上りける時に携へゆき八月六日に京につきて宿れるほど富小路治部卿殿へしば〳〵召れて出けるに此事を聞え申したれば其書見まほしと宣ふにぞ十三日のよるもて參りて見せ參らするに御前にあるほどゝみに讀はたし給ひてこはいと面白き物なれば仙洞の叡覽に入れ奉らば如何さらむかつは其方(そなた)の名を聞えあぐる便ともなりなむと宣ふに畏りてともかくもと申たりければ其あくる日の院參し給ふをりに叡覽にそなへ奉り給ひしかば甚く大御心にかなひ反さへ御讀まして大宮御所へも御覽せさせられ雲のうへ人たちにもをり〳〵かゝる珍らしき事ありて江戸なる篤胤といふもの記しつと御物語ありしと餘のいとやごとなき御あたりより慥にきゝ傳へたりさて女房たちにおほせごとありて寫さしめ給ひ五十日ばかり御許にとめ置たまひて此本を治部卿どのへ下給へるは十月四日の日にぞ有けるこゝかしこ折目の付たるは仙洞の讀さしましてしをりし給へるなりと伺ひつればいとも畏くて朱もてしるしの系をひきつさて江戸にもて歸りて此表紙は付たるなりたま〳〵も讀見む人はその心してこの本はおろそかになあつかひそよあなかしこ

未十二月十三日　篤胤　花押

文政六 癸未年四月十九日御書院番頭
佐藤美濃守殿ゑ屆書寫し

私知行所武州多摩郡中野村百姓源藏忰勝五郎去る午年八歳にて秋中より同人姉に向ひ前世生替し始末相咄候得共小兒之物語故取用不申度々右樣之咄申候に付不思議成義に存姉儀父母ゑ相咄候而此年十二月中改めて父源藏より勝五郎ゑ相尋候處前世之父は同國同郡小宮領程窪村百姓久兵衛與申者之忰にて勝藏與申自分二歳之節久兵衛儀は病死仕候間母ゑ後家入にて半四郎與申者後之父に相成居候處右藤藏儀六歳之時疱瘡にて病死仕り夫より右源藏方ゑ生替申候由相答へ委敷樣成事ども申候に付村役人ゑも申出得與相糺候處世上取沙汰仕候故程窪村半四郎方にても沙汰承及同人儀知行所源藏方ゑ尋參り候故相糺候處小兒勝五郎申候通相違無之前世父母面體其外住居等も相咄申候に付程窪村半四郎方ゑ小兒召連候處是又少も違無之家內に對面爲致候處先年六歳にて病死仕候藤藏に似合候小兒に有之其後當春迄に折々懇意に仕候內近村ゑも相知申候哉此節は日々右勝五郎を見物に所々より參候もの有之候に付知行所より訴出候間源藏勝五郎呼出相糺申候處右之通兩人も相答申候尤折々世上にて取沙汰仕候間難取用筋には御座候得共御內々此段御耳打申上置候以上

四月　　多門傳八郎

○

中根宇右衛門殿知行所
武州多摩郡小宮領程窪村百姓
實父藤五郎繼父半四郎
藤藏

文化二乙丑年出生す。同七庚午年二月疱瘡を病て。四日晝四時頃死去す。于時六歳なり。葬地は同村の山なり。菩提所は同領三澤村宗覺寺なり。去る文政五壬午年十三回忌なり。

藤藏繼父
當未五十歳　半四郎
藤藏　母
當未四十九歳　しづ
半四郎子藤藏異父弟妹
男子　二人
女子　二人

藤藏實父　藤　五　郎

若年の時の名を久兵衞と云ふ。文化三丙寅年藤藏二歳の時四十八歳にて死去す。半四郎古藤五郎が妻しづが入夫となり家を相續す。

○多門傳八郎殿知行所

武州多摩郡柚木領中野村百姓源藏次男

當未九歳　勝　五　郎

文化十二乙亥年十月十日再生す。前生は程窪村藤五郎初名久兵衞が子にて藤藏といひしが。六歳の時疱瘡にて死去せること前文に記すが如し。文化七年に死去せるより六年めなり。

勝五郎父小谷氏と云

當未四十九歳　源　藏

源藏妻勝五郎らが母

當未三十九歳　せ　い

せいが父は。尾州の家士にて。村田吉太郎（書入云村田吉太郎は織田遠江殿組にて侍の所行にあらざる事ありて寛政元酉年十一月二十一日追放仰付られしとある書に見えたり後に丹羽家へ[illegible]左京大夫との」かかへられしと或人いへりをはりの人某花押かゝれはせいが五歳の時浪人となりたるなり本書とたがへり）といひしが。せい三歳の時に。吉太郎故ありて浪人となり。文政四年四月廿七日七十五歳にて死去すと云ゝ。

源藏母勝五郎らが祖母

當未七十二歳　つ　や

源藏娘勝五郎姉

當未十五歳　ふ　さ

源藏長子勝五郎兄

當未十四歳　乙　次　郎

源藏娘勝五郎妹

當未四歳　つ　ね

○

去ぬる文政五壬午年十一月のころ。右勝五郎八歳にて。姉ふさ兄乙次郎と。田のほとりにて遊び居つゝ。ふと兄に向ひて。おまへはもと何處の誰が子にて。こちの家へ生れ來れると問ふ。兄きゝて我はさる事をしらずと云へば。また姉に向ひて同じさまに問ふ。ふさ答へて何處の誰が子にして生れ來れると云こ

と。如何して知らるべき。笑しき事を問へるものかなと嘲けるを。勝五郎きゝていと心得がたく思へる體にて。然らばおまへは生れぬ先のことは知ざるかと云ふ。ふさ然らばそちは知りて居れるかと問へば。勝五郎云く。我はよく知れり。本は程窪村の久兵衛といふ人の子に。藤藏といひし者なりと語るを。姉いとあやし。然らば其の事父母に告げむと云へば。勝五郎いたくわびて。親たちに勿云ひそとて泣悲しみければ。然らば。云ふまじ。但しあしき行ひするを。制めてきかざる時は。かならず告てむと云ひてやみぬ。かくて喧ごとなどするをり〳〵。彼事を告むといへば直にやめたりければ。兩親祖母もこれを聞あやしみて。ふさに問へどつゝみて云ず。さてはいかなる惡き事をかしつると心ならず。密にふさにせめ問ければ。止事を得ずありのまゝに語るにぞ。兩親また祖母もいたく不審に思ひ。勝五郎をいろ〳〵とすかし拵へて尋けるに。しぶ〳〵語り出けるは。我はもと程窪の久兵衛の子にて。母の名はおしづといふ。我がちひさき時に久兵衛は死て。その後に半四郎と云が來て父となり。我を愛養ひけるに。我は六歳になりける時に死たるが。後にこの家の母の腹に入りて生れたりと云ふ。されども小兒のしどけなき詞にて。餘りに奇しき物語なれば。容易にとり上べき事にも非ずと思ひて打過ける。扨彼が母せいは。四歳なる娘に乳を飲する故に。勝五郎をば。祖母つや夜ごとに添寐しけるが。或る夜に勝五郎。程窪の半四郎方へ連行てたべ。彼の方の兩親にも逢まほしと云を。祖母もけしかる事におもひ。打まぎらかし置つるに。其後は夜な〳〵同じ樣に行まほしがるによりて。然らばこゝへ生れ來つる始より。委く語るべしとさま〴〵拵へ問ければ。いとしどけなき詞ながら。有來し趣を委しく語りてこは父母をおきては堅く人に語り給ふなと返す〳〵いへりとぞ。(此物語は。四月二十五日氣吹能屋にて聞たり、前に或人のつやに問ひて、記されたる物あるを見置たりけれど、今度さらに、源藏勝五郎に始終を問て、答へたる趣なり) 勝五郎云ふ前世のこと。四歳ばかりまでは。よく覺えて有しが。漸々に忘れたり。死ぬ命にては無りしかど。藥を食せざる故に死たるなり。(疱瘡を病たりしと云ことは知らず、後に人のしか云をきゝ

て知れりと云へり、此死たりと云ふ時は、文化七年二月四日に當れり）息の絶る時は何の苦みも無りしが。其の後しばしがほど苦しかりき。其後はいさゝかも苦しき事もあらず。さて體を桶の中へつよく押入るゝとき飛出て傍にをり。山へ葬りにもて行ときは。白く覆たる龕の上に乘りて行たり。さて其の桶を穴へおとし入れたるとき。其の音のひゞきたること。心にこたへて今もよく覺えたり。さて僧共が經をよめども何にもならず。すべて彼等は。錢金をたぶらかし取らむとするわざのみにて。益なきものなれば。惡く厭はしく思はれて。家に歸り（僧は尊きものにて、經よみ念佛申せば、よき國へ生るときく、さて地獄極樂など云へる國はしらずやと問しによりて、僧のことをかくいへり）机の上に居たるが。人に物をいひかけても聞つけず。其の時に白髮を長く打垂れて。黒き衣服着たる翁の。こなたへとて。誘なはるゝに從ひて。何處とも知らず。段々に高き。奇麗なる芝原に行て遊びあるけり。花の盛なる所にあそびたるとき。其の枝を折らむとするに。小さき鳥の出來りて。いたく威たる事のありしは　今も恐ろしくおぼゆ。（中野村の產土神、熊野權現に坐すと源藏いへり、烏の出たると云につきて、幽に思ひ合さることあり）またしか遊ありくほど。我が家にて。親たちのもの云ふことも聞え。經誦む聲も聞えたれど。吾は旣に云へる如く。僧はにくゝ思ゆるのみなり。食物を供たるも。食ふことは爲ざれど。中に溫なるものは。其の烟氣の香ひて甘く覺えたりき。七月には庭火をたくとき家へ歸りたるに。團子などを備へてありき。斯てあそびて有經るほど。或とき彼の翁と家の向ひの路を通る時。（家とは源藏が家を云り。）翁この家を指て。あれなる家に入て生れよといふ。敎のまゝに翁に別れて。庭の柿の木の下にたゝずみて。三日伺ひ居て。窓の穴より家の内に入り。竈の側にまた三日をれるほど。母の何處ならむ。遠き處へ別れ行給はむことを。父と語らひ給ふ事を聞たりき（源藏云、勝五郎が生れたる年の正月の事なりき、或る夜閨の中にて夫婦相語らひて云く、かく家貧きに。子さへ二人ありて、老母を養ふに侘しければ、妻を來む三月より、江戶へ奉公と云事に出さむと云ひ合せたる事あり、されど其の頃は老母にも

語らで有しを、二月になりて母にも告て、三月に至りて妻を奉公に出し遣たりしに、既に懐胎たりしこと、詳に知られたりければ、主に暇をこひて家に歸りたり、其妊たるは即正月にて、月滿て、同十月十日に勝五郎生れたり。此事は、かつて夫婦をおきては、知べからぬ物語なるを、彼が知たりしは、奇しくおぼゆといへり、さて懐胎のほど、また生るゝ時も、其後も奇しき事はなかりきといへり。其後母の腹內へ入たりと思はるれど。よくも覺えず。さて腹內にて。母の苦しからむと思ふ事のある時は　側のかたへよりて居たる事のありしは覺えたり。さて生るゝ時は何の苦しき事も無りき。(程窪村にて藤藏と云て、文化七年に死たりしより六年めにあたれり。)此の外何くれの事ども。四つ五つになるまでは。よく覺えて有しかど。漸々に忘れたりと云へり。(以上直話をつりなせる也。)其後祖母ます〳〵奇しく思ひて在りけるに或るときものへ行て。同じ嫗ども集へる處にて。もし程窪村にて。久兵衛といふ人ありと知給へる人やおはすと云ふに。一人がいふ己は知らざれど。彼村に因あれば問合せて參らせむ。さるにても。如何なる事にて問給ふにやといふに默止かねて。勝五郎が事をあら〳〵語りけり。さるほどに此正月七日に程窪村より何某と云老人來りて云く。己れは程窪の半四郎といふ者に親しき者なり。久兵衛といふはいと若き程の名にて。後に名を藤五郎と改めたりしが。十五年前に身まかりて。今は程窪に。久兵衛と云し名を知たる者もなし。其が妻の後夫を半四郎といふ。此ころ人づてにきけば。此の家に生れたる子の。もと其の久兵衛が子なりし藤藏と云へるが。六歳にて身まかりて後に。此家に生れたりと聞傳へたるが。餘りに打合て奇しく聞ゆれば。問きかまほしがりて。まづ己にあとらへて遣せたるなりと云ふに。上の件の事ども語りて。相互に奇しみつゝ。かの老人は歸りけるとぞ。かゝりしかば此事終に人あまた知て。見に來る人もあり。勝五郎外に出れば。人珍らしがりて。程窪小僧など仇名をつけて。言囃す事となりしかば。恥かしがりて其後は外に出ず。父母に。かゝればこそ。人に語り給ふなと云ひてしに。人に語り給へる故にこそかゝれと云て。恨かこちけるとぞ。斯てのち勝五郎。半四郎が方へ行まほしがる

こと彌まさりけるが。又後には何となく夜すがら泣いさつを。夜明てその由を云へば都て知らずと云。夜な／＼かくすること轉有ければ。祖母わびて。こは謂ゆる半四郎が許へ行まほしがりて思ひ入たる故なるべし。よしや非ぬ虚事なりとも。男ならばこそあれ。我老女の身として。連行たらむには。人のあざけり笑はむもさて有べし。連行なむやと云ふに。源藏もさる事なり。いさ給へとて遣けるは。正月二十日になむ有ける。祖母は勝五郎をつれて。程窪村に至り。(程窪と中野村とは山一つへだてゝ其間一里半ばかりありとぞ。)この家か彼の家かといふに。勝五郎まださき也まださきなりと云つゝ。先に立て行ほどに。此家なりと。祖母より先にかけ入る故に。祖母もつゞきて這入りぬ。(是より前に勝五郎、程くぼの半四郎が家は、三軒ならびたる中の引き入たる家にて、裏口より山につゞきたる家なりと云けるが、果して其の言の如くなりしとぞ。)まづあろじが名を問ふに。半四郎と答ふ。妻の名をとへばしづといふ。半四郎夫婦は。かねて人づてに聞居たる事にはあれど。なほ祖母が物語を聞て或は奇しみ或は悲しみ。共に涙にしづみ。勝五郎をいだき上げてつく／＼と顔をうち守りて亡なりし藤藏が六歳のときの面ざしに。よく似てありなど樣々かきくどき居るに勝五郎懐かれながら。向ひの煙草屋の屋根を指さし。まへ方はあの屋根無りし。あの木も無りしなど云に。皆その如くなれば。何れもます／＼驚ける。半四郎が家の親族どもゝ寄り來れる中に。久兵衞か妹の嫗ありて。久兵衞にさへ似たりと泣しほたれしとぞ。扨其日は中野村に歸りしが。其の後も程窪へ行まほし。久兵衞の墓參りせまほしと云を。源藏いひまぎらし。日を延て有けるに。二十七日にふりはへて。彼の半四郎をとこ。源藏に近付にとて來りしが。勝五郎に程窪へ行ぬかと云しかば。久兵衞の墓參せむと悦びて。伴はれ行て。その事とげぬとて夕さり歸りけり。かくて後は。父に半四郎がもとへ連行て。いかで彼の家と。親類の結びをなして給はれと云をきゝ受て。暇あらむ時に連行むと思ふほど。地頭より召れて參りぬと。父源藏語りけり。

文政六年四月二十九日

立入事負記

右異童のこと。或人の筆記を見たりし後に。地頭へ呼出され。吟味ありて。支配頭へ届け書出したるよし。其の寫をも見たりけるに。屋代輪池翁の。なほ己にゆきて尋ねよと云るゝによりて。四月二十一日の日に多門主の。用人谷孫兵衛といふ人を訪ひて問きゝけるに。其日は勝五郎。父源藏と。駒込の西教寺といふ寺へ。或人の計らひにて行たる由にて居合さず。谷氏にあらましを問て歸れるが。同人の計らひにて。翌二十二日に。源藏勝五郎を連來りしかば。屋代翁へも知らせたるに。翁も來らる。まづ妻と娘と嘉津間とに云ひつけて。(嘉津間と云はもと寅吉と云ひしが故ありて名を改めたるなり)色々とうらかしつゝ咄させたるを。物かげにて聞たれど。問洩せる事多かりけるに。二十三日に秋田なる我兄渡邊正胤の來れるに。國友能當風炮を持來りて。此をうつ狀をまねび見せて在りける。かの谷氏の來りしかば。勝五郎また伴はれ來りぬ。さるは此童子本文に事負が記せる如く。再生の事を人に問はるゝ事をいたく否みて。何方へも往ことを嫌ふ由にて。我が許へはじめて

來る時なども。甚たすまへるを。しばしと云て連來れる由なれば。其意を得てあながちには問はず。者どもに云つけて。只心まゝに遊ばしめ。折を見て少かつゝ問たりしかば。いたく心に叶ひて。終日あそび戯れて。今夜は御許に止當てましなど云ひしかど。谷氏の方に。童子の歸りを待つ人ありと云ひ遣せたりしかば。本意なく歸れる故に。けふまた來れるなりけり。此の日居りあひて見もし問もしつるは。我兄なる人と。國友能當。五十嵐常雄。志賀綿麻呂。細貝篤資などなりき。斯て二十五日にも源藏また勝五郎を伴ひ來り明日なむ鄕へ罷れば御暇申さむために來侍りと云ふ。此日來相たるは。堤朝風。立入事負。國友恒足などなり。又さま〴〵にすかし拵へて。己と事負と嘉津間と三人にて問ふに。餘人にきかぬ所にて語らむと云ふまゝに。庭につれ出て。己いだき上て。なり菓物などとり與へつゝ。事負と能々とへば。いともしどけなき詞にて。極めて小聲にて語れる趣の條條を推問て。前後をとりつゞけて。事負が右の如く書とれるものにてかつてこの記せる如く。首尾

をとゝのへて語れるには非ず。此時物かげにて聞たる人々は。堤朝風。國友恒足。土屋清道。矢澤希賢などなり。少かも長びたる事なく。荒々しき遊びをこのみ。尋常の百姓の子に比べては。さどき方に見ゆ。雄々しき事を好みて。武士にならまほしと常に云ふよし。既に谷氏の語れるに違はず。太刀刀をこのみ。是をさして武士にならまほしと云へるによりて。大小の刀をとり〳〵取出て。ぬき放し見せなどすれば甚く喜ぶを。やがて長人になりたらば是をとらせむに。物語せよと計りこしらへたるに依りて。然らばとて物語する事となりぬ。わざと僧等がことを尊き物にいへば。いたく腹立きらひて。彼れ等は人を誑かし物をとらむと計るわろ者なりといふ。然も有べけれど死てのちは。彼等に經を誦せて。地獄などへは行かず。極樂と云よき國へ生れむと思ふなど。色々よさまに執なし云ど。おまへ好ならむには心にまかせ給へ。我はきらひなり 極樂など云ふことはみな僞りなりと益々嫌へり。凡て嘉津間が。始めて山より歸りし時のさまと。異にして似たるところあり。

○伴ひたる翁のこと。或人の記せるには。爺さまの(篤胤云此七月九日に源藏また先頃江戸へ出たりし時に參れる家々に禮を申さむ爲に來れりとて勝五郎を伴ひ姉ふさ兄乙次郎をも連來れり折しも己は越谷へものせる程なりしかど三夜計我家に止まりて在けるに太田朝恭增田成則など留學せれば此翁の樣を委く問けるに白髪を長〳〵うち垂れ白き髭長く生たり白紿の衣服の上に黒き紋ちらしある袖の大きなる羽織の如き物に後に長く垂れたる上服を着てくゝり袴を着し足には外黒く内赤く塗たる丸き物の足の甲迄かゝるを履たりしと云りとぞ)やうなる人の來て云々とあるが。甚々ゆかしくて坊樣なりしかと問ふに頭をふる。然らば我が頭のごときかと事負が問ふに。かぶを振りて。篤胤が頭を指さして。御前の頭のごとくにて。長く垂たりと云ふ。また鳥のこと樹にとまれるを指さして。あれと同じことにやと問へば。彼よりは少さくて。眼ざしは恐しかりきと云へり。按ふに世の諺に。御前烏と。(また目前烏とい

ふ人もあり。）云がありと云ふも。舊く再生せるものゝ。又は蘇生せる者などの。然る事を語りたるが有りしを。語り傳へたるにや有む。烏と鶏のことに就ては。おのれ年ごろ考へたる說も有れど。此には記さず。

○父源藏　勝五郎がいたく佛事僧等をきらふ由を語りて。去ぬる二十一日に。或る寺へ往たるに。（故ありて寺號をしるさず）茶よ菓子よともて囃し侍れど。寺の物はきたなしと云て一つだに食はず。いたく心苦しき思ひをしはべり。彼が僧徒をかく惡ひ侍ることは。去々年わが許に源七とて。すこしの緣ある者の病めるをおきて侍るに。それが死たるときに。吊ひ來れる僧の布施に。錢をつゝみて遣たるを。勝五郎見て。何とていつも門にたつ僧に物をあたへ。今またあの僧に錢をとらせたると問ふ故に。僧といふ者は。人に物こひて世すぎをする物ゆゑに。呉るゝことぞと申して侍れば。僧といふ者は。人の物をほしがる惡しき者ぞと申せるが。夫より後きらひに成りたるやうに覺え侍ると語るを。勝五郎きゝ果さず。イナ然には非ず。きらひなる故ありて。元より嫌ひなりと。言葉に力をいれて斷りぬ。其の元より嫌ひなりと云ふ由を問ぬれども。憎きもの也とのみ云ひて。他事にまぎらはして答へざりき。

○源藏また語りけるは。勝五郎生れつきて。少しも化物幽靈など云ふを恐るゝ事をしらず。右申せる源七が病は。狂氣にて侍りしかば。別に放ちて小屋をたて入れ置たるに。死べき前になりて。顏色恐ろしげになりたる故に。姉兄などは恐れて小屋のほとりへも近よらず。然るに勝五郎のみは。彼の源七は間なく死べく見えて哀なり。藥も食物もよく調へてやり給へ。いつにても我もち行きて與へむとて。夜中といへども持行て與へ。死て後は。姉兄などは恐れて厠へも行がてにするを。死たる人の何か恐しき事あらむと少しも恐れず。また自分の死ぬと云ふことをも。少か恐れずと云にぞ。勝五郎に。などて死ることを恐れざると問へば。我を死たりと人の云ひし故に。死たると心付たれば。亡骸も見えしかど。其の時みづからは　死たりとも思はざりき。其死たりと云ふときも。人の

見る日ほどは苦しくはなき物なり。死てさきに居たるほどは。腹飽きて暑しとも寒しとも思はず。又夜とてもさばかり闇からず。ありきにありけども疲るゝことなく翁のもとにだに居れば。何も恐ろしき事はなかりき。六年めに生れたると人は云へども。彼方にてはしばしの間と覺えたりと云ふ。また御嶽さまの死ぬ事はこはい物ではないと宣へると語れるよし御嶽樣とはいかにして見奉れると問へど例の他事にまぎらはして答へず。

○或人の記に。勝五郎をり〳〵。我はのゝ樣なれば。大事にして給はれといひ。また早く死ぬことも有むと云ひ。また僧に布施することは。いとよき事ぞと云へるよし見えたり。また汝は佛道を信仰せるにやと問ふに。源藏答へて云く。勝五郎が云ることは。人に物を施すことは。よき事なりと申したるは聞て侍れど。其の餘のとは祖母に申したるか。我等は聞たること侍らず。さて己は佛道を深く信仰と申すにては無れども。父の時より乞食道心者などの門口に立があれば。少づゝの施物を遣しぬ。是は後世を願ふなどの意にはあらず。只彼等が物を乞ふを憐れむのみなり。家内の者どもは。朔望式日などに。鎮守神に參詣し侍るを。己は日日に詣で神々をたふとみ。佛閣といへども緣あれば詣でゝ。捨ることなし。然れども只今日の無事を祈ることをのみ心とせり。己が村の邊は。謂ゆる德本が流の念佛講流行り侍れど。其講にも入らず。勝五郎が事をきゝ傳へて。出家たち弟子にせまほしとて。所々より申し來りしが。中にはかく奇しき童子を農人とせむこと。佛の罰やあらむなど申せるも有しかど。當人いたく出家をきらひ。己も好まざる故に。農人となりて宜からぬ者ならむには。我が子には生れ來まじきを。農人のわが子と生れ來つる上に。當人も出家をきらへば。農人となさむも苦しからじと斷りを立たりしかば。其の後は出家だちのこひに來る者なしと云へり。

○こゝに我も人も。しか產土神をねむごろにすと聞くにつけて思へば。彼の勝五郎を伴ひたる翁といへるこそ疑なく產土ノ神にて在けめと云ふに。源藏云く。其の事はこのほど西教寺へものしける時に。彼所にても然云はれたりき。或は其の翁をか

の久兵衛ならむなど云ふ人もあれど。産土神ならむと言ふにつきて。いさゝか思ひ當れる事のあるを。今日まで人に語れること無れど。深切に物とひ給へばとて。又云けらく。勝五郎が姉ふさと申すは。今年十五歳になり侍り。去々年の事なりき。庖丁刀を失ひたることの有けるに。彼が母いたく叱りたるに其後また庖丁刀を失ひたり。此度はますゝゝ叱られむ事をおもひて。本居神熊野宮へ詣でゝ失ひつる庖丁刀のあり處を。さとし顯はし給へ。然らば百度詣し奉らむ。と祈りたりける夜の夢に。髪長く垂れて山伏と云ものゝ如き頭の。翁なる人枕上に立て。失ひたる庖丁刀は。それの處の田の草かげに。刄の上にむきて有むをとり來るべしと告たまへるに依りて。夙めて行て見るに。果してその如く在けりとて。取り歸りてのち。夜べの夢の告を。はじめて云々と語りはべり。其母これた聞て。こやつさばかりの物の失たらむに。本居神などに。こひ祈申すべき事かは。いと有まじき事なり。よくゝゝ其罪を謝して。とく賽しの百度詣し奉るべしとて詣させき。また其後ふさ。或日の朝さめゞゝと泣うれふる状あり。父母その故を問ふに。さおとつ夜より。夜べまで三夜つゞけて。いと悲しき夢を見たり。一ト夜ばかりは。思はぬ夢を見るも常なるを。かく三夜つゞけて同じ夢を見しは。神の御誨しなりけりとて。又さらに泣を。よくゝゝ問へば。さおとつ夜の夢に。また彼の山伏のごとき翁と。今一人枕上に來て。汝はむかし惡き事したる男なり。今かくて有れど。能せずは此家に在りがたくて。苦しき目見るべしと告へり。されどおろそかに心得て在し。次の夜も夜べも。正しく同じ夢を見はべり。さて彼の山伏のごとき人は。何とも物のたまはず。今一人の男の。件の事を告たまひて。吾は蛇體の者なりと曰へり。かかる夢見しことは徒事にあらじ。いかなる憂目をか見むと悲しくて泣なりといふに。元來さる跡なし事の夢見たるが心にかゝりて。又次々に同じ夢を見たるなめり。心になかけそとなぐさめ置たりき。其後勝五郎が物語に。髪を垂たまへる老人のしかゞゝと云ふが似たるを思へば。先に庖丁刀を失ひつる時に。山伏の如く見え給へる翁も。同じ

類の神にこそおはすらめ。かく同じ趣なる事のありしを思ひ合すれば。娘がすぎにし夢の告も。今さら奇しく覺え侍りと語りて。さて今かく物語るに付てふと思ひよれることは。己もと此の江戸の小石川に。夫婦住たりける時に。ふさ生れたり。其の處の本居神は氷川大明神なり。今一人の男の我は蛇體の者なりと曰ひしは。若くは氷川大明神にもやおはしけむと。密に思はると語るに。堤朝風その座にありて。是をきゝて云く。氷川大明神は龍體の神なりと云ひ傳ふる由は。早く聞居れりと云ふにぞ。益々に思ひ合せられたり。そも〳〵氷川大明神と申すは。延喜の神名式に。武藏ノ國足立ノ郡に氷川神社（名神大月次新嘗）とある社の神を。所々にうつし祀ひたるが多かる中の一つにて。氷川神社の祭神は。一の宮記に素盞烏尊と見え。今もしか云ひ傳へて一の宮といふ。江戸砂子といふ物に。小石川なるも一の宮を勸請し龍女を祝へるよし見えたり。按ふに素盞烏ノ尊出雲ノ國簸川上にて八俣の大蛇を斬給ひしに依りて。彼處に樋神社とて式内にてあり。されば遠呂智は素盞烏尊に斬られたれば。その靈を使はしめと祝へるを龍女と誤り傳へたりけむ。さてこの武藏國に。この御社のある由は。此國の國造は。成務天皇の御世に。出雲ノ國の國造より別ち定め給へれば。其本國の神なる故に。樋ノ神社を移し祭れるなるべし。委くは別に考へ記せる物あり。さて熊野ノ神を。まことは素盞烏尊の御靈を祭れるなれば。殊に由ありて覺ゆ。されば勝五郎が再生のことは。程窪村の鎭守の神は何神と云ふこと未だ聞ざれど。中野村の鎭守の神と御語らひ坐て。計らひ給へる事なるべし然るは人によりて其の生れたる所を去りて。他所に移り住するも多かるを。さる人をば本生の所の神と。今住する所の鎭守の神と。互に守護し給ふこと。己近きころ見聞つる正しき證のあればなり。抑々かゝる事どもをさへに云ふを。神の道を知らざらむ人は。心得がてに怪しみ思ふめれば。委く云はま欲けれど事長ければ此にはもらしつ。

○再生の事は。和漢古今にいとあまた聞ゆる事なるが。見識せまき漢意の學者たちの此理をつや〳〵

得知らで。有まじき事のごとく強說すめれど、前に鬼神新論を著して云へれば、さる倫は今さら論ふにたらず。又佛者にはやゝ其の旨を得たる說どもゝ聞ゆれども。餘りにさだし過て、なべて再生轉生する事のごとく云ふめり。誠は人の世に生れ出ることは、神の產靈によりて一日に千人死れば新に千五百人生るゝ由緣なる中に。いと希々に。人を物とも、物を人とも、また人を人とも、再生せしめ給ふ事もあるなるを。佛者のその希なる事を常にとりて　然は論ふなりけり、さて然やうに再生轉生せしめ給ふこともある物から　其事を再生轉生の人ごとには知らしめざるは。神の幽事の中の秘事なるを、いと希々に知しめ給ふこともあるは　幽き由ある事とは通ゆれども凡人の何ちふ御心と云ふことは測り知るべき事にあらず。さて再生とは云へど、前生を知ざりしかぎりは除て。正しく其前生を知りたりし事どもの漢籍に見えたるは。晉の羊祜が前生は李家の子なるが。前に弄べる金環の在所を記臆せる、鮑靚といふ者の。前生に井に落て死たる事を記えたる、唐の孫緬といふ者の奴が。前生に狸なりし事を知れる、崔顏武といふ者、前生に杜明福といへるが妻也し事を覺えたる類は、あまたの書に見えて數へも盡されず。人のあまねく知れる事なるが中に。勝五郎が事に思ひ合さるゝ事どもを記さば。酉陽雜俎に　顧況といふ者　年老て十七歲になる一子を喪ひけるに。其の子の魂、恍惚として夢のごとく。其の家を離れざりけり、かくて其の父悲傷止がたく詩を作りて。老人喪一子。日暮泣成血。心逐斷猿驚。跡隨飛鳥滅。老人年七十。不作多時別、と吟じけるを。其の子の魂これを聞て感慟し。もしまた人となる事あらば。再この家に生れむと誓ひけるに。日を經て人に執へられて一處に至れば。縣吏のごとき者ありて、また顧況が家に託生せしむと思へる後は。すべて覺えざりしが、後に忽に心醒て、眼を開きて見れば吾が元の家にて、兄弟親愛みな側にあり。然れども語ること能はず。其生れたる後は其の年を記えざりけるに。七歲になりける時。その兄戲れに批たりしかば。忽に云けらく。我はこれ汝が兄なり　何故に我を批つと云

ふにぞ。一家驚き異みて問へば。前事を叙るにいさゝかも誤らざりき。後に進士顧非熊と云へるは是也と見え。また增補夷堅志に。代州崞縣に。盧忻と云者あり。生れて三歳にして能言ひて其の母に告て云く。我が前生は回北村なる趙氏の子なるが。十九歳になりける時。牛を山下に牧ひけるに。秋雨にて草滑なりしかば。岸下に墜たり。身を奮ひて起て見れば。一人ありて傍に臥せり。意に我と同じ牧子の墜たるならむと謂ひて。大にこれを呼ぶに應へず。久しくして此を見れば。すなはち自身なり。これに投らむと欲ふに入こと能はず。これを捨むと欲ふに忍がたくて。左右に盤旋しけるに。翌日父母來りて慟哭するに。我これを告れども答へず。遂に火を擧て吾が體を焚く。そのとき我を燒べからずと云へどもまた應へず焚をはり骨を收めて去る我これに隨はむと欲して。父母を見れば身みな丈餘にて。懼しき故に隨ひ往こと能はず。徬徨として歸なく一月餘りも在けるに。忽に一老人ありて。我爾を引きて歸せしめむ。と云に隨ひて行けば。一の家に至る。老人指さして此汝が家なりと云ひて此に生れしむ。これ今の吾が身なり。我昨日の夜の夢中に往て。前身の父母に告たれば。明日まさに來て我を看るべし。我が家に一の白馬あり。かならず其に騎りて來るべしと云ふ。其の母これを異しみつゝ。明日門に俟けるに。果して白馬を馳せて來者あり。兒これを望見て欣び躍りて。吾が父來れりと云ふ。既に見て大に哭して其の舊事を詢ふに知ざる事なし。是より二家ともに其子を養ひけり。と有など甚よく似たる事なり。縣吏のごとき者といひ。老人と云へるは。唐土にも城隍廟とて。産土神のごときを。所々の鎭守と祀りて在れば。其の神なるべく覺ゆ。そもそも再生のこと。和漢にいと多かるを。弘く採並べて考ふるに。顧況が長子の顧非熊と生れ。趙氏が子の盧忻と生れ。程窪の藤藏が今の勝五郎と生れたるなどは。本居神漢國にて謂ゆる城隍神のわざと知られて。正しく聞ゆれども。此の外に。妖魔のわざと。再生轉生せしむる事は殊に多かり。こは古今妖魔考と號たる書の中に別に委く論ひ置たり。さて大かたの人の。妖魔に牽られざるかぎりの魂

は、其の所々の鎮守の神の掌りて。かもかくも治むる事と思はるゝが中に、其道の上首たる神靈の。幽に鎮まる所に歸して、其の治めを受るも多かりと知らる。そはまた漢籍どもに。宋の王曾字は孝先といふ者の父が、年の高きに孔子の神靈夢に託して。曾參を生れしめて、門戸を顯さむと云へるが。幾ならず果して男子を生りしかば、王曾と名けたるが。後に宋の宰相となれる。宋の高宗が夢に。關羽が靈あらはれて、張飛を相州岳家の子に生れしむる由を託せるに、岳飛が父の夢に、張飛託生すと見て。男子を生たる故に、岳飛と名けたるなどの類は。その上首たる神靈の所に歸して在しが、再生しつることと疑なし

○世人の死て往なる幽冥の事の本は、神世に天照大御神、産靈大神の詔命によりて杵築大社にしづまり坐す大國主神の。無窮に治め給ふ御業なる事は。神典どもに委しく記し傳へて明なるを。なほ其の古傳に本づき熟々に推究め考ふるに、そは幽冥の事の大本を統領給ふにこそあれ、末々の事に至りては、神々の持分けて掌り給ふべき理あり。さるは凡てこの現世の上に大君おはし坐て。御政事の大本を統治め給ひ、國々所々をば、そを分ち司る人々を任して。治めしめ給ふが如く。幽冥の事の大本は大國主神統治め給ひ其の末々はまた國々所所の鎮守の神、氏神、産土ノ神など世に申す神たちの持分けて司たまひ、人民の世にある間は更にも云はず。生れ來し前も身退りて後も治め給ふ趣なり。其を細密に說はむは言長ければ此にいはず

中つ世よりこなたの古事の證となるべきを。一とつ二たつ記しいでば、古今著聞集神祇部に。仁安三年四月二十一日、吉田祭にて有けるに。伊豫守信隆ノ朝臣、氏人ながら神事もせで、仁王講を行ひけるに。御あかしの火障子にもえつきて。其の夜やけにけり。大炊御門室町なり、その隣は民部卿光忠卿の家なり。神事にて有ければ、火移らざりけり。恐るべき事にやと見え（吉田の社は藤原氏の氏神なり）また藤原重澄若かりける時に。兵衞尉にならむとて、稻荷の氏子と有ながら。加茂に仕へ奉りて、土屋を造進したりけり。（稻荷は神名式に山城ノ國紀伊郡に稻荷神社三座並名神大月次新嘗

とある御社を申せり、三座は中座宇迦之御魂神、左右は猿田毘古神、大宮能賣ノ神なりと書どもに見えたり、加茂は同式に愛宕郡に賀茂別雷ノ神社名神大月次相嘗新嘗とある社也、)嚴重の成功にて。社家推擧しければ。外るべきやうも無りけるに。度々の除目に漏にけり。重澄社の師なる者に申し付て。除目の祈請させける間に。まとろみたる夢に稲荷より御使に參りたる者あり。人出あひて是をきくに。かの御使の申けるは。重澄が所望殊更に任せらるべからず。我が膝元にて生れながら。我を忘れたる者なりと申ければ。中次の大明神に申し入るゝ由にて。度々御問答ありけり。さらば此の度はなされずして。思ひしらせて。後の度の除目になさるべしと申しければ。御使歸りぬ。師おどろきて急ぎ重澄がもとへ行て。此由を語りて奇しむ程に。其夜の除目にははづれにけり。此夢の誠をしらむが爲に。稲荷へ參りて。次の度の除目には。申しも出さゞりけれども。相違なくなされにけりと有り。かゝる心ばへのことなほ何くれの書どもに見えたり。これらの事どもを思ひわたして。鎮守の神氏神などの。其の所々の人を持分けて治め給ふことを辨へ。寛平七年十二月三日の官符に。諸人氏神多在畿内。毎年二月四月十一月何廢先祖之常祀。若有申請者。直下官宣とありて氏神の祀を大切にすべきよし勅へる例にならひて。産土ノ神の祀りを大切にすべき物なり。また塵添壒嚢抄にも。神に仕ふる心向の事を論ひて。まづ其所の神明に懇懃に奉仕して。その餘暇には他所の靈驗をも仰ぐべし。其趣きは神宮雜事といふ秘記にも。人間の例を引て。我が主をさし置て他人に隨ふに譬へたり。何の故にか白地にも我が神をさし置て。他所の利益を仰ぎ奉らむ。もし他所を伺ふとも。主君を背きて他所に參るは。不當なりと覺し食すべし。然れば狹小の所におはすとも。其恩德を忽にすべからず。社の損はれたらむには何なる弊衣をまとひ着ても餓死せむを期として奉仕すべきなり。(今案ふに、世に佛の事としいへば、弊衣をまとひ命をもかけて、物する人多かれど、我が身の本たる神の事に然する人のなきこそいとも〳〵悲しけれ。)もし當所の神。不信の者の失を咎めて祟りお

はし坐さば。いかに憑み奉るとも、他所の神さらに助け給ふべからず、若餘社の祟は、我が惠みにては宥め給はむ。此の心をもて仕ふべきなりと云へるはよく神の情狀を窺ひ得たる說にて、法師にとりては殊に感べき論ひなり、なほ此の因に法師の中にもたま〳〵に情ありし倫ひをいはゞ、新拾遺集の神祇に、法印源深「後の世も此の世も神にまかするや。おろかなる身の賴なるらむ」（同集に、藤原雅朝朝臣「さりともとねても覺ても賴むかな、おろかなる身を神にまかせて」、續後拾遺集爲世卿の歌に「後の世も此の世も神のしるべにて、おろかなる身のまよはずもがな」とあるも同じ心ばへの歌どもなり）、また無住法師が砂石集に。三井寺の公顯僧正と申しゝは。顯密の學匠にて。道心ある人と聞えければ、高野の明遍僧都、その行業をゆかしく思ひ、善阿彌陀佛といふ遁世者をかたらひて。彼の人の行義を見せられける、善阿かの坊へゆきて、高野ひがさに脛高なる黑衣きて。別やうなりけれど、しか〳〵と申入たりければ、高野ひじりと聞て、よび入れて通夜物語なられけり、さて其朝淨衣をき幣をもちて、一と間なる所の帳かけたる所に向ひて。所作せられけるを。善阿思はずの作法かなと見けり。三日が程かはる事なし、さて事の體能々見て、朝の御所作こそ異やうに見奉れ、いかなる御行ひにかと申ければ、進みても申たく侍るに、問たまへるこそ本意なれ。都の中の大小の神祇は申すに及ばず、邊地邊國までも聞及ぶにしたがひて、日本國中の大小の諸神の御名をかき奉りて。此の一と間なる所に請じ置奉りて、心經神咒など誦して、出離生死の要道を祈り申すの外別の行業なし、我國は神國として、我等みなかの孫裔なり、氣を同くする因緣淺からず、此の外の本尊をたづねば、還て感應へだゝりぬべし。仍てかくの如くの行儀とやうなれども。年久しくしつけ侍ると語らる。善阿誠にたとき御意樂なりと隨喜して。歸りて僧都に申ければ。智者なれば、おろかの行業あらじと思ひつるに合せて、いみじく思ひはかられたりとて。隨喜の淚を流されけるとぞ、靑は藍より出て藍よりも靑きが如く。佛より出てゝ佛よりも尊きは神明の利益の

色なり。彼の僧正の意樂かゝるおもむきにこそ。心あらむ人かの迹をまなび給ふべしとあるは。共に情ある法師たちなりけり。然はあれど。かく神の佛にまされる御德はかつ〴〵辨へつゝも。なほ佛者にて終りけるこそ哀なれ。さるはそのかみいまだ眞の道の學びも委しからず。世にあまねき佛敎も捨がてなるが上に。その佛經とてもてはやせるも多くは後世の杜撰なりとしも思ひたらず。其の垣内に迷惑して。神を佛の垂跡と思へる故の失にぞ有ける。さて瑤囊抄に。白地にも我が神をさし置て。他所の利益を仰ぎ奉らむ。もし當所の神不信の者を咎めまさば。他處の神をいかに憑み奉るとも更に助給ふべからずと云へるは然る言ながら物部ノ大連尾輿、中臣ノ連鎌子の佛を退けむとせる時の語に。我國家者恒以二天地社稷百八十神ノ祭一爲レ事。改拜二蕃神一恐致二國神之怒一。と云れたる大なる理をば得思ひたらで。なほ佛にも諂ひて。僧にて世を盡せるはいと哀なり。（また物部の守屋大連中臣勝海の語には。何背二我國神一敬二他神一也。由來不レ識二若レ斯事一矣ともあり、蕃神といひ他神といへるは佛のことなり）また無住法師が。心あらむ人は。公顯僧正の迹を學び給へと云へるはさる說ながら。旬子なる譬を引きて。神を佛より出たる垂跡なりと思へるは。法師の常の心ながら。實には國土人民草木はさらなり、釋迦も達磨も猶も拘子も悉皆神の垂跡にて。神は萬づの本地としも知ざるはいとも憐れむべき事なりかし。抑々佛を本地。神を垂跡といへる說は。林羅山先生の語に。其異端以レ離二我而難一レ立故。設二左道之說一曰。日神者大日也　或其本地佛而垂跡神也。時之王公大人信伏不レ悟。遂至レ令二神社佛寺混雜而不一レ疑。讀レ書知レ理之人可二少覺一也。非下爲二庸人一言上レ之　と云れたるが如し。然るを法師ばらは更なり　世の痴人らも。佛は本地。神は垂跡と常言にいへど。もし此の言のごとくは　神は佛の心任になるべきに制すること能はず。佛祖その身をはじめ。神の隨意に人身を造しめて。魔てふ名を專と負するばかりの惡物をつけて婬情あらしめ。其の物ゆゑに修道をさまたげ惡道におとすや　佛祖もかの一物ありしとは。妻を三人もちて子をも三人生せたるにて

論ひなし。彼の一物のあるが故に。婬欲の心のあるなるを。其を神の産靈のまに〳〵造らしめて。僧道に不婬の戒を立たるは。深井を堀りて水の出るを惜むにひとしき痴態ならずや。此の一とつをもても。神は天地萬物の本地なることを辨ふべし。此はいともをさなき論なれども。世の痴人らに示せむと。古今妖魔考に委しく記せるを因にいさゝか其の端を記しつ。さて勝五郎がことの如きも。法師たち。また法師ならぬも。佛意にしみたる人々は。くさ〴〵其の方ざまに思ひよせて。佛經説の證となさま欲がり。舊くも今もかゝる事としいへば。佛の靈驗のごとく心得て。其の事を記すにも。しひて其の趣にかき取らむとするは常なれども。凡て天堂地獄再生轉生因果報應などの趣は。その傳への精粗こそはあれ。何れの國にも本より有來し事にて。佛祖のはじめて言ひ教へたる説には非ず。また元より佛に係れる事にも非ざるを。たゞ元よりある事實に。くさ〴〵附會の説を增して。佛經どもの次々に多く出來れるなるを。然る本の由をばよくゝ尋ねず。多かる經説のかたへを見て迷惑したる。世の佛學者たちの失にぞ有ける。そはいまだ佛説のわたり來ざりし以前の。和漢の書の古事を委くよみ味ひて思ひ辨ふべき事ぞかし

文政六癸未年五月八日

伊吹廼屋のあるじ記

上の件の如く論ひとぢめては有れど。なほ足ずまに産土神の事につきて。また近ごろ見聞たる事の思ひ合さるゝ事どもを。一ツ二つ三つ記しつぎてむ。倉橋與四郎ぬしの來まして語られけるは。文化十二年の事なるが。小石川戸崎町なる。石屋ノ長左衛門といふ石工の弟子丑之助といふ者。おもき瘡毒をわづらひて。醫師らも愈るまじき由をいひしかば。此の男元よりいみじき大酒飮にて有りけるが。讃岐國象頭山の神に立願して。酒を禁けるに。然ばかり重き病のやう〳〵に愈けり。然るに元より酒は何よりも好物なる故に。得禁じがてに。折々は酒しほと號けて薬物にひたし。飮ことなども有しとぞ。(因に記す、讃岐ノ國象頭山と云ふは、

彼の山の別當、金光院正傳の秘事とて記せる物を見るに、元は琴平といひて、大國主ノ神の奇魂大物主ノ神を祭れりしを、天竺の金毘羅神といふに、形勢感應似たる故に、混合して金毘羅と改めたる由見えたり、こは比叡ノ山に大宮とて、三輪の大物主神を祭りて在けるに、かの金毘羅神を混合せるに傚ひてにや、然ればこそ金光院の秘書にも、出雲ノ大社、大和ノ三輪、日吉大宮の祭神と同じといへり、なほ此の後に白峯より、崇德天皇の御靈を遷して配祭せるよし、正に聞たる說ども有れど、書に見えたる事無ければ、今は漏しつ、されど此は世の人の口實にもあまねく云ふは、やがて神の御心なるべく覺ゆれば、其の正說の世に知らるゝ時もこそあらめ、然れば金毘羅とまをす名こそ佛なれ、神實はいともやごとなき神に御坐せば、おろそかに思ひ奉るべき事にはあらずかし、さて俗の神道者修驗者など云ふ輩の、金山彥命といふは金の字より思ひ付たる杜撰にて、さらに謂なき妄り事也。)かくて其の年の九月十日は、例のごとく處の鎮守氷川大明神の祭日なりしが。其前日に處の若者どもかの丑之助男に云へるは。和主は狂踊を上手なれば。例のごとく明日はかの踊をせよと云ふに。丑之助云けらく。我は瘡毒にて愈まじかりしを。金毘羅神に立願して。酒を禁たりしかば愈たることはわぬしらも知るごとくなり。醉のしれ心ならで。彼をどりせらるべきかと云ふに。皆々云へるは。明日は鎮守ノ神の祭りなれば。常とは異なり。酒ものみ踊もせよと强にいへば。丑之助男もげにもと云て。當日は朝より友どちと酒飲み遊び。醉狂れて在りけるに。巳の時ばかりより。忽に大熱さして。あらあつや堪がたや。金毘羅さま忍しおはしませと云ふに。皆々驚きて如何と問へば。庭の空を指さして。人々には見えざるか。金毘羅さまのあれにおはし坐すものをといふ。皆々見れど。目にかゝる物もなければ。如何なる御有狀にておはし坐ぞと問ふに。丑之助火のごとき息をつきて。御神は御黑髮長く垂れて。冠裝束を召れて。雲の上に立給ひ。いとあまた御供つき從ひ。爪折の緋がさを差かけ奉り。御前に鬼神のごとき力士ありて。その仰せを承はり。汝が病きはめて愈まじ

かりつるを。強に祈り申せる故に愈し給ふ所なり
然るに折々ひそかに。少づゝ酒を飲たるだにある
に。今日は朝より思ふまゝに酒飲て醉狂るゝこ
と。憎く思食すによりて、手足の指をみな折しめ
給ふ由なり。と言ひもはてぬに。早うつ伏にふし。
て。免し給へと。大汗を流して泣叫ぶ有さま 物
の爲におし伏られて、其の足を折るゝ狀にて 恐ろ
しなど云むもおろかなり。然れども若き者ども心
を勵まし。諸ともに引起さむと立よるに。物に投
らるゝ如く覺え。うち倒されて近づくこと能はず。
その有さまいと物すごく恐しければ。日比は鬼を
も挫ぎてむと競ひたるをのこども 皆逃のきて慄
き居たるに。片足の指はみな折たると思ふほどに。
丑之助また。鎮守氷川明神入らせ給へりと云て聲
をあげ。この御罰を救はせ給へと叫びけるが。稍
ありてまた。多久藏主稻荷來りたまへりと云ひて。
人々に近よること勿れと制しつゝ。起直り畏まり
てしばし在けるが。腹這ながら庭に出てひれ伏し。
神々を送り奉る狀しけるが。物狂はしき狀は止た
り。かくて人々うち寄て其由をとへば。金毘羅ノ神
の怒り給へる御氣色 申すも中々恐ある御事なる
が。雲の上に坐まして。我が方を流し目に一ト目
見返り給ふごとに 我をおし伏たるかの力士。わ
が足の指を一づゝ折たり。左りの足の指はみな折
たると思ふほどに。鎮守の神。これも供人あまた
供して。束帶にて入らせ給ひ。金毘羅ノ神に向ひて
宣へるは。此奴 その御前に祈白して酒を斷たる
故に。病を愈し給へることを忘れ。今日いたく酒
飲たるを咎め給ふは然ることながら。元より我が氏
子として。殊にわが祭日なる故に我をなぐさむる
態仕らむとて 人々にそゝのかされて。酒はたう
べたるなり。然れば免し給ふかたも有むを。たと
へ咎め給はむにも 一應我にその事を宣ひてこそ
兎もかくも罰め給ふべきわざなめれ。然る事もな
く。我が氏子を思召すまゝに。御罰あらせらる
る事こそ心得られねと宣ふにぞ。金毘羅ノ神げにも
と思召せる御有狀ながら。何のいらへもなく。互
ににらみ相ておはしける處に。傳通院の多久藏司
稻荷ノ神來り給へり。此は僧體のごとく見え給ふ。
淺黃の深頭巾をかぶりたるが。（案に此稻荷ノ神の

ことは、其の緣起を見るに、當社は駒込吉祥寺和田倉御門の内に有りし時より、其ノ地に鎭座ありしが、傳通院の中興廓山上人の時に、學寮に極山和尙といふ所化あり、元和四年四月ある夜に、山主上人を始め、極山和尙、同學の僧の夢中に、一僧見えて入學せんことを思へば、明朝登山すべしと告あり、翌朝極山和尙の寮へ、一僧來りて謁見あり、此の事を山主へ申せば、夢に合せて不思儀なる事に思ひ、入寺を許して、多久藏司とぞ名づけられける、然るに多久藏司の智德他に勝れ、諸人尊敬しけるに、其の後三箇年の學席を經て、或る夜の夢に、我は誠は吉祥寺なる稻荷の神なり、小社を作り給ひてよ。永く當山の守護神となるべしと誨し、白狐の形を顯はして去ると見しかば、境内に鎭座するよし見えて、狐神を祭りたるなるが、人の稻荷と名づけて祭る故に、自らも稻荷と名告なりけり、實は稻荷神あに狐ならむや、こは別に委く考へ記せる物あり、さて此ノ狐神の僧體なりしと云ふと、いかにぞや思ふ人も有るべけれど、伊勢ノ國にて、或る男に老狐のつきて、種々の事ども語りけるに、稻荷と號けし狐神ども、俗家に祭れるは俗形なるが、寺に祭れるはみな法體にて、各々其主人の格位によりて、狐神の格位もそなはる事ぞと云へるよし、小竹眞棹にかねて聞たるに符へり、御二方の間に平伏して。いたく恐愼める狀にて申すやうは。己は傳通院の多久藏主にはべり。金毘羅宮の御怒り。氷川明神の仰せともに理ありて承り候。かく承り候も。元こやつが怠より事起り侍れば。とにもかくにも罰め給ふべきを。此奴をり〱我が許へも詣で來て。身の上の事を祈りつるを聞たもち侍れば。此所へ參り侍り。いかで。御雙方の御怒りは。我等に給ひて。こやつが罪を免し給へ。さらば我等相計らひ。金毘羅宮の御許へは。こやつを賽しに參詣しめ奉らむと申されしかば。二柱神はそれに御心を和し給へるさまにて。互に式代して。いつ〱しく立別れ給ひつと。大息つき振ひわなゝきてぞ語りける。かくて左りの足の指三本は。骨うち折れて痿れけり。人々始めよりの有狀をよく〱見たりければ。恐怖ることゝ限なく。打よりて路用をとゝのへ壽へて。丑之助

を象頭山の御社に參詣せしめけるに。折たる指も本のごとく愈りしとぞ、然れば產土ノ神の守護あるには。他の神のたゝりも遁るゝ事あるにや、と語らるゝに就て、おのれも云けらく、松村完平が物語に。大坂に聲いと善くて、今樣の長謠といふ物を謠ひて業とする男ありき。或日ものへ行く途にて。山伏體なる男あへり。行逢ひながら、そなたの聲のめでたきを。しばし我に借てよと云ふを。道行ぶりのされ言と思ひて。笑ひつゝ唯といひて行過けるが、三日ばかり有りていたはる事もなきに。ひしと聲かれて出ず。されど彼の異人に聲を借たる事につゆ心づかず。住吉ノ神社は產土ノ神なれば。祈らむと思ひて出行ける途にて。また彼の山伏體なる人來りあへり。先つころ我が請へるごとく聲を借ながら。そを忘れて。產土ノ神に申し祈らむとする心得こそ心得られね、汝かしこに祈らば。決めて我を罪し給はむ然もあらば。我また汝にからき目見せむ物ぞ。然らむよりは、しばしの間なれば、まげて借てよと云ふに、始めて先に聲を借らむと云ひし時に。唯しつる事を思ひ出して。卒に恐ろしくなりて、決めて產土ノ神に祈るまじと、堅く約りて途より立歸りけり。さて三十日ばかり有りて。物へゆく途にて。また彼ノ異人行逢けるに。其方の聲は今返すべし。受取てよと云ふに、はや聲本のごとくになりぬ。斯て異人この報を爲べしとて。呪禁のわざを授たるが。萬づの病に驗ありて。後には謠うたひの業を止めて。此呪禁のみして。世をやすく送りしと云ひ。(案に聲を借たりと云ふこと、疑ひ思ふ人も有るべけれど、上總ノ國東金といふ所の、源兵衞と云し者、異人に口と耳とを借られて、三年がほど耳しひ啞になりて在し例もあれば、准へて辨ふべし、此孫兵衞がことは別に記せる物あり)また今井秀文が、或侯の語り給へるを聞て語れるは。其の侯の治たまふ所の或童子の。異人に誘はれて行方しれざりしかば。兩親いたく泣歎きて產土ノ神に祈りけるに。四五日ありて、歸り來りて語りけるは。伴はれたる處は何處とも知らぬ山なるが。異人おほく居て。劍術などならひて在しが。折々酒を飲かはす事もありて。其の盃を。とほく谷を隔たる山の頂などに投て。

そを取來れといふ故に、我いかで取得むと辭むに。怒りて谷底におし落したると思ふに、何の事もなく忽に其の山に至り、盃をとりて異人たちの前に至る。凡てかゝる狀に役はれたるが、昨日の言に汝が親どもの。ねむごろに願へばとて。産土ノ神の。とく汝を返すべしと申さるれば、留がたしとて送り返されたりと語れるとぞ。また備後ノ國なる、稻生平太郞といふ者の許へ來れる。山本五郞左衞門と名告れる妖物と、平太郞が應對せる時に、産土ノ神身を顯はして、平太郞にそひ守られける故に、平太郞その妖氣に瘁ざりし事あり。これらを、思ふに、妖物の人につきて、禍害をなすが如き小事は産土ノ神たちの主と掌り守護り逐退たまふ御事なり。さればとて、其神を信申さゞらむ者は、おのづから御守護も厚からざる趣あり。この心ばへを覺るべき事なり。已この說を述て、寅吉に問試みけるに。(こは幼きときより、神仙の使はしめとなりて、奥山に年ごろ在たりしものにて、神の情狀を窺ひたる者なればなり、此がことは仙境異聞とて、別に委しく記せる物あり。)答けらく。誠に言

ふごとく。山にても其の事をきゝて侍り。妖魔にまれ。何にまれ産土神のあつく守護たまふ人には、禍事をなすこと能はず。適に神の守護なき間を伺ひて勾引たるも。親などの丹誠をこらして神に祈るときは。返さでは叶はぬものとぞ。然れど殊によりては。其の界の事を世に漏すまじき爲に。癡人のごとくなして返すことも多かり。神の御力にもさる事までは、制し給ひがたき事もあるにや、又いかに丹誠をこらして祈れども、歸らぬ人もあるは、神どち相議りて。召寄せて使はしめ給ふこともも有けなれば、祈りて驗なき事もあるべしと語れり。此の言につきて、また思ひ合さるゝ事なむ有りける、そは我が許に來通ひて物問ふ、野山又兵衞種麻呂といふをのこあり、家は江戶南鍋町といふ所なり。これが子に多四郞といふあり。十五歲にて文化十三年のころ、芝口日蔭町といふ所なる。萬屋安兵衞といふ者は、多四郞が母の甥にて有ければ。其が所に滯留しけるほど、失ちて釘をふみ貫き。病臥して在けるに。五月十五日の事なり。既に燈火をともせるころ。痛む足にしひて木

履をはきて、裡なる便所に立ながら尿して居けるが。アッと叫ぶ聲しける故に。家内より出て見るに。多四郎は見えず。衣服の片袖ちぎれ落てあるに。其はきたる木履屋の上におちたり。人々おどろきて聲々に名を呼はれど音もなし。さればこれぞ天狗の伴ひたるなめりと、人を走らせて父又兵衛が許へ告おこせたり。又兵衛いそぎ行て有りける趣を尋ぬるに、安兵衛が同じ長屋のものども。頼もしく打ちよりて例のごとく、大皷鉦など打ちて。呼に出むと噪ぐほどなり。爰に又兵衛云けらく。此はまさに謂ゆる天狗のわざと覺ゆれば。常のごとく呼たりとも出べくもあらず。いたづらに。人々を勞し參らせむことゝ。心苦しければ。まづ止まり給へと云ふに。噪ぎ立たる徴ひにしあれば。止まらず出行ける。又兵衛は家に歸りて、家内の者どもの泣倒れて在けるに其由を委しく語り。我今祈り返してむ。勿泣そとなぐさめて。髪かき亂し井邊に行きて水をあみ。二階なる神の御棚の前に畏りて、既におのが敎へ置つる意ばへもて。祝詞申せりとぞ。其の申せる趣はまづ龍田神に。今天神地神に祈り申す事を。御耳いや高に。疾く聞え上たまへと云ふことを。返々祈り申して。さて。天津神千五百萬、國津神千五百萬の大神たち。辭別ては。幽事しろし看す大國主大神。産土ノ大神の和魂は靜まり荒魂は悉くにより給ひて聞し食せ。我卑しくも。深く神世の道をたふとみ。神の恩賴をかたじけなみ。心を正しくする事は更にも云はず、一日も神拜おこたる事なく、祈り信奉りてあるに。今わが子にかゝる災害ありては。憑なきとに侍り。かつは痴者どもが。後指さゝむも耻かし。されば奴吾が耻は神の道の耻ならずや。明日とは云はじ。今速く我が子を返さしめたべと。大聲に諄かへし〳〵汗水になりて。をどり上りをどり上り。三時がほど祈り申したるとぞ。餘りに祈りこうじて曉方になりて。物のほしくなりければ。階子を下りてみづから飯櫃とり出て。飯二椀くひける所に。周章しく門をたゝく音す。誰ぞと問へば。安兵衛が許より來れり。多四郎今歸りつ。されど氣絕て見ゆれば。早く來り給へと云すてゝ立歸りぬ、又兵衛いたく歎び神々に謝申して。近きわた

りなる醫師を作ひ。いすゝき走りて。安兵衛がり行て見るに。多四郎は死たるが如くなるを。人々とりまとひ。名を呼て有り。まづいかにやと問ふに。長屋の者どもの尋ねに出けるのち。家内の者は。たゞあきれ果て顔見合せ居たるに。七つの鐘うつころ。長屋のうちぐわら／＼と震動して。空より此の家なる門口に。したゝかなる物をうち付たる如き音すると等しく。ウンと云ふ聲す。おどろき急ぎ戸を開たれば多四郎なり。やがて庭にころび入りて。かく現心なしと云にぞ。面に水そゝぎ。醫師に氣付の藥など含めしめて。やゝ身動きするを待て。多四郎いかに心を慥にもちてよ。父なるはと三聲ばかり呼けるに。くわと眼をあきて父を見つけて。あら辱なしや。今歸り來れることは。偏に父の御惠なりと云ふ。其の由はと問へば。恐ろしさに。今は語りがたしと戰き云にぞ。さも有べしとて。勞はり寢しめけるに。二日二夜ばかりは疲れ寢けるが折々目をあきて。アラ恐ろしかりしとぞ云ひける。かくて正氣になりて後に。能能問へば。かの夜痛き足を爪立て。何心なく尿して居けるに。何處よりとも知らず大男の髪を垂たるがつと來りて。いさと云ひさま。嚴しく腕をとれる故に。ふり放ちたれば。小ざかしとて。兩手にて首筋をとらへて。屋ノ上より空に上りぬ。今は叶はじと息をつめて有りけるに。たゞしばしの間に何處かしらぬ淸げなる山に至れば。寺のごとき所あり。其の時はすでにこゝは日暮たりけるに。彼處に至ればなほ明き頃なりき。眼をあきて熟見めぐらせば。物すさまじきこと云むかた無れば。よくも見留ざれど。山伏のごとき人また法師。或は俗形の人なども並居たる中に。上座なるは別に眼ざし恐ろしき老法師なりき。かの伴ひたる男末座に我を具して。しひて頭を低させたり。此の時我のみならず。十二三歳なる童子を。二人伴ひ來れる男どももありき。此所はかならず天狗の住所なるべく思ひて。泣悲みつゝ。返し給はれと。聲をたたず額突けるに。かの伴へる男。わが頭をおさへて。ダマレ／＼と頻に云を。耳にも聞入れず。操返し云ひしかと。ふと頭を上て。上座の老法師を見れば。甚く恐れたる狀に頭をかたむけ。心耳

をすまして。何やらむ聞をる體なりしが。我を伴ひたる男に。童子らを用ふる事ありて。彼をも伴はしめたれど。彼が父の神たちへ嚴しく祈り申す聲。遠音に聞ゆれば。やがて神のおほせ有べしと云ふにぞ。始めて我も耳をすまして聞けば。父の神を祈り給ふ聲。風にひゞきてよく聞えたり。伴ひたる男の。我にダマレと頻に云ひしは。老僧の耳ひき立てきゝをるに。我がもの云ふ聲の妨となればなりけり。さて老僧のかく言を頼みに。なほ歸し給はれと返す〳〵云ふに。並居たる中に。年のころ五十歳餘りに見ゆる人と。二十四五歳に見ゆる人と並びたりしが。五十歳餘りなる人手をつきて。是は我等がゆかりの者に侍れば。いかで返し遣たまへと願ひけるに。老僧我に。さらば歸るべしと云ふ。我何として。獨は得歸らむと云へば。彼の伴ひたる男に。送りてとらせよと云ふに。彼の男すなはち我を引たてゝ。大空に上りたるまでは覺えたれど。其後はしらずとぞ語りける。多四郎が母また安兵衛も。この事をきゝて。その五十歳餘りと見えし男のありける形容を委く尋ねて。大きに驚きて。母がいへるは。今より二十年さき。寛政九年の事なりき。我が姉聟なる萬屋萬右衛門といふ者。その頃はいさらご臺町といふ所に住き。すなはち今の安兵衛が父なり。九月二十四日の夕つかた。安兵衛が弟に藤藏とて。七歳なりける子を連て。芝の愛宕山へ詣たるが。往方しらずなりぬ。錢二百文より外に。つゆの物も持たず出たるに。幼き子をさへに連たれば。旅に出べくも非ざるに。遂に歸らずなりぬ。其の後巫に口をよせて問けるに。今は二人とも。人の得見ざる所に使はれて歸ること叶はす。折々そなたを見れども。詞をかはさぬ定めなれば。さて在るなりと云へり。齢のほど其の形容をもて考ふるに。五十歳餘りと見つるは。決めて吾兄なるべし。また二十四五歳と見えしは。藤藏が成人になれるなるべし。然らば多四郎がをぢと。いとこなる故に。ゆかりの者とは云へるならむと云へば。人々も殊にいたく驚きて。誠に其なるべしと思ひ合せけり。さて其の後は多四郎。龍田ノ神をことに信じ奉りて。一日も拜を闕ことなしとぞ。此は又兵衛安兵衛をはじめ

其の時の事を。目のあたり見たる者どもの。委しく語るを。なほ反さへ問證したる趣なり。さて案ふに。安兵衛が家を燈火つくる頃に誘はれ出て。行つきたる所の。なほ明かりしと云へば。百里餘りは西にあたる國なりけむ。然るを江戸にて祈れる父が聲の聞えたりと云ふを。神の道をしらざる人は。いと有まじき事と怪しみ思ふめれど。熟く神の道の理を辨へたらむ人は。奇しとは思はざらまし。正しき神の守護まして。御稜威をふるひ幸はへ給ふは。妖鬼の類の恐怖るゝこと。此の多四郎が一事をもても證し曉りつべきを。漢國意に化りて心遅き輩の。奇しき事とてはなき事なるを云々など。例の青々しき見識もて論はむかし。凡て世にくさ〴〵聞ゆる奇しき事どもに。信ずまじきあり。信ずべきあり。信ずまじきを信ずるは尋常の人なり 信ずべきを信せざるは漢國意に化れる人にて 共に思慮の至らざるなりけり。然れば此等の事ども其人に非ざるには。謾に語るべからぬ事なれど然のみは默止がたくてなむ

文政六未癸年六月七日

伊吹舎主又記

幽郷眞語はしがき

今はむかし我が友に。本村何某と云へる人あり。呼名を力藏と云ひき。裝束の衣紋といふことを習ひて。ひろく人に交はる人なりけり。今指をゝりて數ふれば。文化三年といひし年の春の頃なりしが。語りけらくは。此ほど薩摩國しらす殿の御内なる。伊木何某てふ人に聞る事あり。そは彼國の霧嶋山より出る。明礬を製らるゝ所に使はるゝ小者に。何某とか云男有て。ある日おもほえず。彼山に鎭まり居ます女仙の許に行たりしが。其後もをり／＼に往來して。しか／＼の事どもありける由。詳にきゝつと語れるを。己もとより然るすぢの事どもは。おぼろかに聞ながし得ぬ性なれば。いかで其をのこに直に逢て。問はばやと思へど。國放れゝばせむ便なく。せめてはその伊木氏に。たゞに聞ばやと思ふに。其つてさへなくて過しぬるを。其後つねに此事の忘られず。年ふる間に。顯世幽世のさかひ別なる故由をも。すき／＼に委く思ひ得るに就ては。霧嶋山なる神界のことの。いかで／＼と思ひわたりけるに。前のおとつ年に。かの御内なる大橋昌倚てふ人。初めて我門に入れるより。其紹介にて。其國の殿人たちも。次々にあまた名簿を遣せて。敎へ子となれる中に。木村鈴滿と云る人あり。呼名を休右衛門といふ。歌もよく詠み。書つめたる物もこれかれ有りと聞ゆるに。彼をのこが。霧嶋山の神のさかひに至れる實を尋ぬれば。其れいと正しき物語りなり。吾も久しく聞ながら居つれど。今師のかく問たまへば。國に歸らむ後に。反さひとひ正して。書記し見せ奉らむと云ふに。返す返す勸めてやりつ。さて後に消息するごとに。何に何にと催がしやれるに。猶聞はてぬことあれば。熟くとひ畢てこそと云を。いと待わぶる間に。悲しきかも。去年の五月に。鈴滿はしも身まかりぬ。故また誰にかも誂へむと。歎き居つるに。今としまた池田武純といふ人の來れるに。此事を問へば。をろ／＼聞たもてる事もぞ有ると。やがて其事どもを記し見せて。猶國なる友にも問やりて。きこえ申さむと云しは。往し卯月の始なりき。斯てこの八月になりて。この幽郷眞語をもて來て。國なる友のもとより。彼女仙の事かく書つけて遣せ侍りといふに。情しなど

云むは世のつねにて。取る手も遲しと披き見るに。奇くも此を記せるぬしの　殿の仰せごと承賜はりて。其邊り見巡らるゝ時しも。ゆくりなく其男に。この六月に逢て問明せる事をし。かく詳にかき取られたる文辭の。あやに調へる學びの力は云ふも更なり。其男のけはひ人がら面もちさへに。今こゝに正目に見る如く。物せられし眞語のいと辱く。三十とせ近く神にさへこひ願申せる事の。時のゆければ神のゆるし聞え給ひて。かく知しめ給へるにこそと。尊く覺えて。むすこ鐵胤をして。常に齋く神の御たなの前に捧げて。拜みぬかづき謝まをさせつる事は。池田氏のそこに居あひて見られたるが如し。然るは神世の神たち。既に顯幽わかりてこそ現には見え給はね。神ながら常しへに鎭まり坐ますこと。何か疑ひ思ふべき。然るを今の凡人の。其御形を見奉る事なき故に。崩御ましつとおもはむは。最も忌々しく愚なる心なりけり。抑神の御上は。神の御典を讀伺ふまゝに。最も尊くいとも畏き御事とは。想やり奉らるれど。正目に拜み奉らむには。又殊にその尊さの類ひなく。其御稜威の彌增りておはし坐さむとは。惟ひ奉るものから。然る事ならざるを如何せむ。しかるをこの善五郎をのこ。又さきに寅吉と云へる童子の。あまた年ある神仙に仕へ奉れるなどは。正しく神の許して。其界に入しめ給へるなれば。殊なる御靈を蒙れるにぞ有べき。斯て此童子は。御暇賜はりて後は。予が家に來れるを。數年とめおきて。懇に問ひこゝろむるに　我が古道の學びのうへに。思ひ得たる事少からず。是はた尊く辱き事にこそ。あはれ吾黨の人々よ。是等の眞語を承賜はりて。今しも神世の神々の。人の目にこそ見えまさね。堅石に常石に御坐すべき理を辨へ。人の世となりての後も。千世萬世も長らふる神仙の多く座ます事をも知り。また幽世の有狀の。靈く畏き事をも悟りねかし。故この書しるされたる。八田ぬし。また此を傳へられたる池田氏にも。此悅び聞えがてら。少か此よしをかき添るになむ。時は天保の二年といふ年の八月廿まり四日といふ日

たひらの篤胤　花押

霧嶋山幽郷眞語

○今年天保二年の夏おほやけ事にて薩摩國日置郡(和名鈔)市來郷(延喜兵部式驛名中所載市來即此)にものしけるほど友なる池田武純が江戸の御館より消息してこたひはしめて平田篤胤翁を訪ひけるに翁古史傳と云書を著はさるゝに付て用せらるゝ事共のあめれは故白尾大人(白尾齋藏國柱)の山陵考をつかはしてよ又かの霧嶋善林寺の奴僕某が仙境に至れりと云事の始終をも一卷に書綴りてなと言おこせたりかの仙境の一奇事はしもはやくよりもれ聞えて世のかたらひ草にもつみはやせれと今そをかい記さんにはあからさまにものしかたく本より浮說もまじるべければこは是非まのあたりに聞とりなん上ならでは手も下し難きわざなるをかの某今はいつくにあるやらむそれはたさたかならねはとかくとみにははたし難き事なりともてなやみ居るほどあなあやしいかなる因緣にかあらんかの某をは卽此たひやとりにして尋出たるうれしなと云はんはおろかにこそさるは其なにかしはもと薩摩國伊集院郷神ノ川村の百姓なりとか聞し事をほの〳〵おぼえけるが其神川村の名は此市來郷にもありてやがて伊集院の神川と隣れる所なりこの度はおのづからそこあたりへもゝのすべき事のあなればついでにたづね見ばやと思ひ居るほどはや市來郷湯田村の事終りて五月廿八日同郷伊作田村に移りぬ爰より神川は半里餘の所なれば先あるじの善右衛門と云へるを呼出しかの一奇事を取出てそこ達はいかに聞及ばすやと問ひければいでそは神ノ川には侍らし此里にこそさる者は侍れきはめてそれにぞ侍らん卽名は政右衛門と申侍りと云へるはまことに胸つふるゝわざにてさらば今たゞいま行てあひみむあないしてよといへばいなとよかの物語する事をはかれが家人ともの忌憚り侍れば爰に侍らはせて聞取たまへとて卽そを率て來けり荒妙のなれたる膝頭などかくれもやらぬ甚短きを打着て皮の煙草入提げたるさま誠に古びたる山賤なりけりされど生れつきは健やかにたけ高くよきほどの男にて日は少さけれど眸子は兒のごとく澄たりさてひたふるに直朴なる方にて言語などか

しこからずかの物語をいなむけしきはなけれと始終り細かに語續る事のかたけに見ゆめればこなたより心してかうやうの事はなかりしやなどゝにかくに問を起して聞とりたるそのむねを次々に記す（あまりにあやしき事のさまなればもしは狐などのものしてしかせしにやと一たびはたれもうたがふべきわざなれば試にかれが常の心しらひやなにやを里人ともにもくはしく問ひたゞしけるにひたふるに正直なるものにて朝夕の勤をもまめやかにしていさゝかも異やうなる事をなさずうたがはしきくまもあらずといへり）

○政右衛門は薩摩國日置郡市來郷伊作田村久保園門の半兵衛が三男也はじめは善五郎とぞいひし寅年の寅日に生れたるによりて産名を虎と云へりとし六十二歳になりぬ十二三の時より木によくのぼるとを得て枝などつたふさまはさながら猿のやうなりしと里人ともいへりさて酒をば露ばかりもえのまずたはれたる事などは人なみにもえいはぬほどの生質也歯は一二おち殘りたれどまたいとすこやかに田畑の事どもよく勤ものすとなん拾五歳に成りし時より霧嶋の明礬山の雇はれ人となりてそこに廿六年ありきそれより善林寺に行て飯炊き薪こりなどしてつかへたりしが五年ばかり前つかた家には歸りしとなり

○拾六歳になりし時獨り明礬山を夜あるきしけるに身のたけ七尺ばかりなる山伏法師の如きもの前をさへぎりてたてり善五郎云そこもとはなにものぞたとひ變化のものなりとも我をばよも喰ふことはえあらじとて打まもり居たれば即かきけちて失ぬ其のち／＼も同じさまにものせしこと三年の間に六たびまでありけるを人にもらすべき心露おこらざりしとなり

○かくあやしき事六度ありてそれよりいくほどもあらぬに夏のよの曉がた端ちかく居ねふりてありけるを外より善五郎が名をよぶものありけり即手水つかひてたち出れば（こゝにはやく手水の事を思ひよれる先奇特なりと云へし）五十ばかりの男我は山神の御使なりそこを召すべきことありて迎につかはし給へればとく我しりへに付て來るべしといふまゝに從ひて出行ほど白晝のやうにて大路あ

りけり一町もゆかぬやうにて大門のあるを入もてゆけば檜皮ふきなる家のいと淸くひろらなるに十七八ばかりの女六人ありいづれか主なりとも見分かたくみな髮ながくかき垂りきよらにそうぞきたるがあひ迎へたりさてかの使の男はやく道にていひけるは神達のかならずほしきものあらば望めよとの給ふべしその時には打出の小槌を賜へと云へと敎へ置けるがはたしてさることありて卽それを賜はりぬさて茶と菓子とを出してあしらひ給へり（のち〳〵のたびにもかならず茶と菓子とのみなり）庭はいとひろくて桃栗柿柑子梨などやうのもの成みちて犬の一尺ばかりなると（我方言むく犬といふものなり）髮長き馬の放ちかひたるかひとつ雞は百ばかりむれ居たり（この庭にある物ともはいつもかはる事なくありしと也）扨其小槌は五年ばかり持たりけれどなにひとつ打出して見むと思ふ心おこらざりしとかさて旣鹿兒島下町に火の災ありし時かの明礬山の親かた桑原某が家もやけ失てその家造りしける時かしこに行てものしけるほどかの小槌を紙入にいれながら物のうへに打置けるがその隙にかの小槌いづくにか失けんなくなりしとぞ（そのつちは銀もて作れるものとみえてそのほとわづかに六七分ばかりありしとなり

○かく仙境に行初しより後行んの心おこる時は月に二度も三度もたゝかた時の間に夢の心ちして行けり（行ときは大かた夜中也けれと晝のやうにあかかりしとなり）こゝらの年月の間には故鄕にかへり居たる折も有けるが其折とても行んと思ふ心おこれば卄里計のみちの程を夜のまに行かへりしことありけり異所に立よりなどする時は行着ことかなはざりけり又宮中に客人などおはすやうのけはひする時は速かにも入やらず門にたちやすらひなどしてあれはかしこに善五郞が來てありはやく內へなどの給ふこともありけりその客人達はいかなる御方にやかつて姿をはみしことなくはた折々には琴やなにやとたへなるもの丶ねともきこゆることありけり

○女神のおはす宮のうちは限りなく廣くて目もかゞやくばかりきよらに作りみがきたりさて調度めくものなともみえずたゞちいさき爐と棚とのみあり

て爐はいつも蓋をおほひて火などおこしたるはみず茶菓子などはいつもかの五十翁が立ふるまひて棚の中よりとり出しけりこなたより菓子とも奉る時も直にその棚にをさめたまへり神の御衣は白赤黑色々ありてすそながく引給へりかほかたちのうつくしきことといはんかたなく世にあるたぐひにあらず扨御物かたりは人界のうへの事をばの給ふ事はなけれど善五郎が人にとかく語りし事又里の女などにたはれたりし事ともなどかねてありしにたがはずの給ひ出てそれを戒め給ふとはなけれど笑ひのゝしりなどし給ふ事ありしとぞ（いつもさやうの物がたりをのみし給ふべくもあらねどそこにいたりてはもらすべからぬ事ともゝあるにや細かにはとへとかたらず）

○宮の在る所は明礬山（山の半腹なり）より七八町ばかり上の方也とおもはるれど常にはひたつゝきのしげ山にてそこともしられすと云へりさて行んとする前かたは眼色かはりよろづ常やうならぬことのあるを人々も目につけは出行あとをとめて試るものもありけれど一町ばかりゆくとみゆるほど影もなくなりしとぞ（ゆかむする前かたのこととみつからはなにの覺えもなしとぞ）

○かしこにいたれる時はなにも心に願はしき事なく又幸ひを得しこともあらねとひと度豆金一歩金などやうの物二三賜はりし事ありそはみなたゝにつかひすて里の女などにもあたへたり又藥を賜はりし事はたび〳〵ありけり（眞珠丸などに似て味ひ甘し）それも人々にくれて今は一もゝたらすはた病家の願ひによりて藥を乞ひにまゐりし事度々ありけりされどかゝるわざはかたくつゝしむべしもしそむきなん時は汝が身毒藥の爲にそこなはるべしと後には戒め給へり（干菓子饅頭やうのものも賜はりしと云へるをもて思へばさるたぐひのものはみな人界にもとめ得てたまはりしなるべしさるは俗にかつら錢をもて市に物買にくるものはかくれ國よりの使人なりと云事あり我方言仙境をかくれ國といひ蔓草もてつなげる錢をかつら錢といふ）

○かく行通ひし事のさまを五年の間はかたく人にもらすなとかの御使のをこの云へりけるを八年ま

ではつゝみ居たりその後鹿兒島の赤松某霧島の湯にものせられし時委く尋取られし事ありしより世にはもれ聞えたりとぞ扨其赤松氏より菓子一箱を善五郎にことつけて山神に奉られしかは即受給ひてあなたより又こと菓子をかへし賜はりしとぞ此事はやく世に聞えけるかたしかにさる事ありしといへり又或人霧島に獵に行かれし時善右衛門をまねきて云はるゝはこたひの狩に得物さはにあらせ給へと山神にねがひ申すなりかくねき申せし上に得物なからん時は神なりとも此山に置申さしなとたはふれのやうに云はれて菓子一箱を奉られしにこは眞實の志ありてのわざならずふと取あへず奉りしもの也と神達はの給へりとぞ

○かく若かりし時より幾度となく行かよひ近くはこぞの八月もことしの二月も行けるが二月の度に神達の宣へるはそこにはながく爰にとゞまらんの心あらば親子の道をもたちて來るべしもしさばかりの心あらすばともかくもせよかしとの給ふまにまに今はながくもえつかへまつらじとてそれよりいとまたまはりてまかり歸りぬれば今はふつにかよふべきみちもたえ侍りきといへり（かの使の男ももと世間より行かよひて終に長くとゝまれるものならん始より五十ばかりとみえたるがなほのちのちもかはる事なかりしといへりさてその五十男は其もと鹿兒島藩中平瀬勘兵衛武乘といひし人なるべしといふ說ありさるは此人元祿年間の人にて霧島にこもりて仙術を學びしといふことは世の人のしる所にて橘東邊が書たる西遊記にもみえたり今霧島山中にて狩人など折々右の人を見ることありとぞこの事は猶別にものすべし今其平瀬氏につたへ來れる舊記ありうつしとり置たり）

○人の目にも付てあやしきことは善五郎が薪こりに行し度ことに人よりは甚速かにしてさて木を取束ねてひとつにくゝらんとするには蔓草やうのものならで木にても何にても手にふれたるものしてくくればよくくゝられてさて家にかへりつく即おのれと解けたりとぞ

件の物語ともは五月二十九日と六月三日の日と二度我旅宿に呼取りてまのあたり聞取りたる也さるは同じ事を打返してもたづね又里人より聞たりし

事ともの實否をも問明し外にもくさ〳〵たづねし事とも丶ありけれどまづはなにも申すべき事侍らずと云へりさて常に花香などものして神を拜む事ありやとたづねけるにさる事はかつてし侍らずといへり六月三日四日二度かれが家を訪ひてかれが妻のけさといへるにもたづぬる事ありしかど內にてさる物語共せらるゝ事なければ何事も知り侍らずといへり（むすこは伊右衛門娘は鹽滿(みつ)と云へり）

○六月朔日伊集院鄉神川村に事ありて行けりはやかの善林寺の某はたしかに尋出たれば今はこゝにて問聞べき事もあらねど前のものがたりともをあらあらかたりけるに濱崎門の名主休助と云ものゝ云へることばおのが曾祖父金兵衛と申すもの二十計の時天狗に誘はれて霧島山にこもり三年の間に劍術と鍛うつ事を習ひ得たりと申傳て侍りさて天狗より賜はりしとて鎌の六寸計なるを持傳へて侍りけるが其利き事あやしきまでに侍れば祖父休右衛門と申せしがそれを鍬の刃金に用ひんとて鍛冶にあつらへて侍りしに金養えすて鍛ひがたく終にはふらし捨て侍りぬおのれらもその鎌はよく見覺えて侍りつるか誠にくち惜き事に侍りされと其折同じ形にうつし作らせてそを形見には傳へて侍りとてとり出てみせたるは大かたのよりは厚らにしのぎ正しくしていとうるはしく磨きなしたり柄は二尺ばかりありけり（山にての食物は餅くだものゝ外なかりしとなん）

○かく記置けるに卯六月十九日市來鄉年寄役岩重杢左衛門と云人我たび宿りを訪ひ來て語りけるはいにし年より鹿兒島の東鄉某（劍術師範家也）病(やみ)煩らひ給ふ事ありてかの山神に藥乞ひの事たのみおこせ給へり政右衛門は常におのか家に出入するものに侍ればやがてその事あつらへ付侍りしにいとやすきことゝて忽乞ひ得てかへり侍りぬ其くすりは白砂糖と眞珠丸のごときものに侍りきさてそれをば腹したまひてやう〳〵病もさはやき給へるによりて其御禮(よろこび)にとて菓子一箱を奉りたまへるに其箱の隅の方のを一つ受とり給ひてその跡に又異菓子をば入れてかへし賜はりぬさてかく政右衛門が行かよひしはいにし春のころに侍りしを今までかたく秘(ひめ)おきてもらし侍らざりしを今君のたづねた

まふことのわりなければかたり申すなりかくて又ひとつあやしき事なん侍りしさるはそのころおのが家に（杢右衛門がいへなり）火難の相みえたればよく〳〵つゝしむべきよし神達の宣へりとて政右衛門が告しらせ侍りしにその時しも家の葺易せんとて萱ともあまたつとへ置侍りしかは即それをとりのけなどふかく用心して侍りければ何こともなく侍りきといへりさて前件くさ〳〵の物がたり共はおほくは程過しことの跡なるを今ちかころの事をば岩重氏かくまのあたりにかたるをきくはおそろしきまであやしくなんおぼえける

○縁に記おとゝしの秋日向の高岡郷（諸縣郡）にものしける時籾木村なる郷士籾木新右衛門と云へる人の物がたりに高鍋領の小鶯嶽といふに高岡郷より獵に行かよふものゝ有けるが一日わなを張り置けるにあやしきものなんかゝりたりけるさるは大かたは人のかたちにて髮いと長く手足みな毛生ひみちたりさてそれがいひけるは我はもと人のむすめなり今は數百年のむかし世のみたれたりし時家をのがれ出てこの山に兄弟共にかくれたりけるがそれよりふつに人間のみちをたちて朝ゆふのくひものとては鳥獸木の實やうのものにてあり經しかばおのづからから形ちもあやしくは成にけりけふしも妹のある所に通はんとて夜中にたちてものしけるに思はんやかゝるめにあはんとはいかで〳〵我命をば助けよかしと涙をおとしてわびけれど（その言語今の世の詞ならでさたかにはきゝとりかねしとぞ）いといぶかしくや思ひけんそのまゝ里へはせかへりて友あまたかたらひ來て終にその女を殺してけりさてその男はいくほどもなくやみ煩らふ事ありて死にけりとかこは近頃の事也とて男の名も聞しかと忘れにけり

○大隅國高山郷（肝付郡）日新院といふ山寺の僧仙境に至れりといふ事ありきこは鹿兒島人久米村某（庄左衛門）のものがたり也委くはのちに問ひたゞすべし

以　上　　　八田知紀識

かくのごとく書記して同月二十九日の便りに江戸へつかはしけるに池田武純やかて平田翁にみづからもて行て見せまゐらせしよしにてかへり事したる其文

兎角秋暑去兼候處彌御安全被成御勤珍重奉存候次に野夫にも御同前相勤候間乍憚御休意可被下候然ば御認被下候幽冥記一咋七日平田翁へ持參いたし候處殊之外歡にて三十年來本意遂たりとて幾度もおしいだき是は篤胤が志のふかきことを霧島の神のとくしろしめして知紀武純をして事をへしめ給ふものならんとてむすこの内藏介にいひ付居間なる神の御前に奉れといひければやがて手水つかひ鐸引ならし神の御前にかの文を奉りてその譯を祝詞のやうに唱へたるさま道に志あるもの斯まであらずば高きに至る事はあらじとおのれ心に思へり其折吉備人鳥越新助常成といふ人もおなじ座にあり（此人木下宮内少輔樣藩中也本居翁の門弟にて何やらの序文をかきたるもの見しことありき）一座にて一ぺん讀ぬ（いまた神に奉らざる前に内藏介是をよむ）よく書調給へりとて殊の外賞し候此本書は留置候間外に寫させ候て序文など書君にもかしこまり申さんと云き序文相出來候上は京都へつかはし可申哉又は直に其許へ差越候樣可致哉序文出來候上は一先其御地へ差上候樣可致候間左樣思召可被下候今日吉原氏出立に付一左右まて如此御座候猶期後音候恐惶謹言

八月九日　池田武純

八田知紀大人

尾張國名古屋なる澤井才亮といへるくすしの子に才一郎といひて年は十七に成けるがいにし慶應三年神無月の頃遠江國秋葉山なる神の御つかひにいざなはれておもほえず神界にかよひそめけりそは世にいはゆる天狗こだまにつかまれしなどのたぐひにはあらでいとくすしくいひがたき事どもなむ有ける其年の霜月の末つかたよりくひ物をたちて七月といふにあたれる十二月の朔日の日うからやからよびつどへわかれを告て家を出て屋の上にのぼりしがやがて姿は見えざりけりかくて又の年十一月の朔日の夜大空よりかけりてふり來けるが何とかや只ならぬけはひどもありてこたびは靈をむかへ給ふよし神の御さとしなむあるといひてその十三日といふにまこと骸をはなれて魂はさりにければある人どもおどろきまどひてさき／＼かゝるためしも世にあらばこそあらめこはいとことなる神の御心によれるものなめりと涙にくれていといたうかしこみあへり此あひだに才一郎が師なる栁田泰次親子父の才亮など神界の事ども何くれと問たづねしに才一郎答へ云けるはじめ終りの物語どもいとも／＼たふとくはた靈しく可懼ことゞもさま／＼有けり此才一郎がはじめ神の御使にいざなはれていにし頃ほひ吾妻路の遠江三河あたりより尾張伊勢かけて國々所々山の奥野の末までも押なべて神々の守りふだ祓の大麻などいくそばくともしらずひるよるわかずふりにふりて家ごとにそを齋きまつり大かた世のいとなみも忘れて人みなこの事にかかづらひわたれるほどにて彼につけこれにつけ神の御心のくすしく妙なる事ども思ひ續けて其頃八田ノ大人薩摩より都にのぼりまうで來て一條あたりに居給ひけるもとにふみのついでにかゝる事なむ侍るいとあやしき事ときこえやりけるにこゝにも同じさまの事こそとてみさとの內處々に神の札降り下りてもてさわぐ事などかきて又此春の頃西洋人日向霧島山(即高千穗なり)に詣でむとて登りにけるを山の半腹にて俄に人も馬も皆たちすくみてければさすがに恐れて其所より歸りしとなむ此霧島は皇孫命の天降りましける山にていと奇異き事ども多く今現に幽界ありて神仙います事は世にも知る所なるがおのれ往年其さかひに往來せしをのこに直に逢て聞とりつる實事を書つめて幽郷眞語となづけし一まきなむあると

言おこされしかばそれ見まほしきよしこひきこえけるに又の便りにその書おくりおこし給ひてさてかの才一郎の事はいかにぞ同じくは其ありさまをも事つけて此が附錄にものしてよとなん有けるいとうれしくよろこぼしくてその書披きみるになにがしが神のさかひにいたりけむその時の狀を件々おつるくまなく問明しいま眼のあたり見ることくつばらにかきとられたるはいとたふとしなどいはむもおろかにてかの才一郎が物語りしことゞも父の才亮より跡さき聞とりけるとつら〳〵思ひあはするにかれはあづまこれは筑紫國放り年へだてれどそのおもふきのたゞにわりふを合せたらむやうの事ども有にます〳〵神の御うへの測りがたく深きむねをもさとりはた其さかひの有狀をさへかしこくもかつ〳〵うかゞひしることのいと〳〵たふとく思へばおもふまに〳〵身の毛もいよだつこゝろすればとく此こと世の人にもしらせまほし大人にこひてまづ此眞語を板にゑらせつるになむ澤井が家の事もいかて書つゞりてとは思ふ物からむげに近き事なれば忌はゞかることなどもありておのれたゞ熟らにはきゝはてぬふしもあればとみにも物しがたくてなふそは後になほよく問たゞしてこそと今はたゞ有つる事のよしをいさゝかつみ出て一巻のしりへにかきしるしつ尾張人三浦千春

稲生物怪録巻之一

目録

稲生物怪録巻之一

稲生平太郎生立の事並三津井權八が事

爰に去ぬる享保年中の頃なるが備後の國三次郡の住人にて稲生武左衛門と云者あり夫婦のみにて歳四十餘まで一子これなきに付き同家中中山源七の次男新八(兄を源太夫と云)と云者を養子としけるが其後三四ヶ年すぎて享保十九甲寅年武左衛門一子を設け平太郎と名づく平太郎十二歳に成ける時次男出生して勝彌と名づく勝彌出生の後まもなく兩親ともに相果て家督は養子新八ぞ繼たりける夫より四五年の後に新八ふら〳〵と煩ひ腹藥のしるしもなかりしかば實家中山氏の方へ養生かた〴〵逗留に行けり此年平太郎十六歳にて五歳になる勝彌を養育し權平といふ家來一人を召遣ひて稲生の家にぞ住にける此家の脇に在所の藏あり在處中より麥など入置けるゆゑ麥藏屋敷とぞとなへける此隣家に權八といふて歳は三十有餘にて力量すぐれたる男あり元來三次郡布野村の出生にて背高く角力を好みて十七歳より諸國を修行し後に或御家へ召抱へられて三津井權八と名のりける

が少しの譯有て今は故郷へ歸り平田五左衛門といふものゝ家明き居けるを借て當分住居しけり角力は當時西國にての上手ゆゑ安藝の宮島などよりも礒上亂獅子といふ角力取其外近國より寒稽古などに集りける其中にも三つ井は先生ぶんたり

平太郎權八百物語りの事並備後の國比熊山の事

頃は寛延二年己巳五月の末つかた權八は平太郎の家に來りて長き日の黄昏遲きにさし向ひ四方山の噺のすゑにたがひに血氣ばなしになりて權八云ひけるは我等今まで何もあやしきこと恐ろしき事を見ざれば今夜比熊山へ登りて互に根性を試し見るはいかにと云ければ平太郎も是は一段よき慰みならんさらば今宵百物語りをして兩人のうち鬮取りにて一人比熊山へ登らむと約束を究め權八は私宅にて相待べしとて歸りけりさて權八は我家へ歸りしが全體不敵ものゆゑ今宵の百物語りを心にたのしみ平太郎が來るを待居たりはや初夜すぐる頃平太郎は家内を取片付て弟勝彌を寢させて家來權平に留守の事を云付て權八方へ行兩人さし向ひいろ／＼の怪談取集め噺しける折から打つゞき降る五月雨の今宵は一しほ止もやらで夜半も過つる頃やう／＼と噺の數もつもりて鬮取しけるに平太郎にこそ當りけれされはとて權八は木の札に燒印を押糸を付てこれをしるしに付られよとて渡しければ平太郎受取て身支度をぞしたりけるが夜はしん／＼と更わたり丑みつ頃とも覺しき頃只一人蓑笠を着て比熊山へと心ざし出て行けり抑この比熊山といふは山上に平場有て世の人千疊敷とぞ申しける大木生ひ茂りて樵夫の道もたえたり片脇に三次殿の塚とて三次若狹の古墳あり自然此石にさわる時はたちまち祟りありて物の怪付と云傳へ里人恐れて近寄ものなしすべて此のほとり白茅鬼かや生ひ茂りて誠にものすさまじき氣色なり此山つゞきの奥は三四里がほど杉の林深く續きて鳥獸の道も絶たりあやしき事のみ多しさて平太郎は西江寺堤より大年大明神の前をよきり絶頂なる千疊敷へ分け登り雲間にすかし見れども暗さはくらし更に彼の墳も見えわかず雨はしきりに降り來り猿の聲のみ聞えけりかくて千疊敷の内彼方此方と尋ね廻りやう／＼古塚にさぐり當り彼權八が渡せし燒印の札を結び付て立歸るにもはや麓も程近しと思ふ處に何かは知らず人の聲聞え

し故暫く休らひ様子をうかがひけるにふもとより登り來るものありあやしとおもひ何ものなると聲を掛しかば彼もの平太郎さまにやといふを聞ば三つ井權八なりあまりに御かへりの遲きゆゑ御迎ひに參りしなりと打つれ立て歸りぬされども百物がたりのしるしもなく互に笑ひ分れて我家にこそかへりけり即時に不思議の事はなしといへども程なく奇妙の物怪ありけるは此時の故によりてならんと後にぞ皆人おそれあひける

稲生屋敷物怪はしまりの事

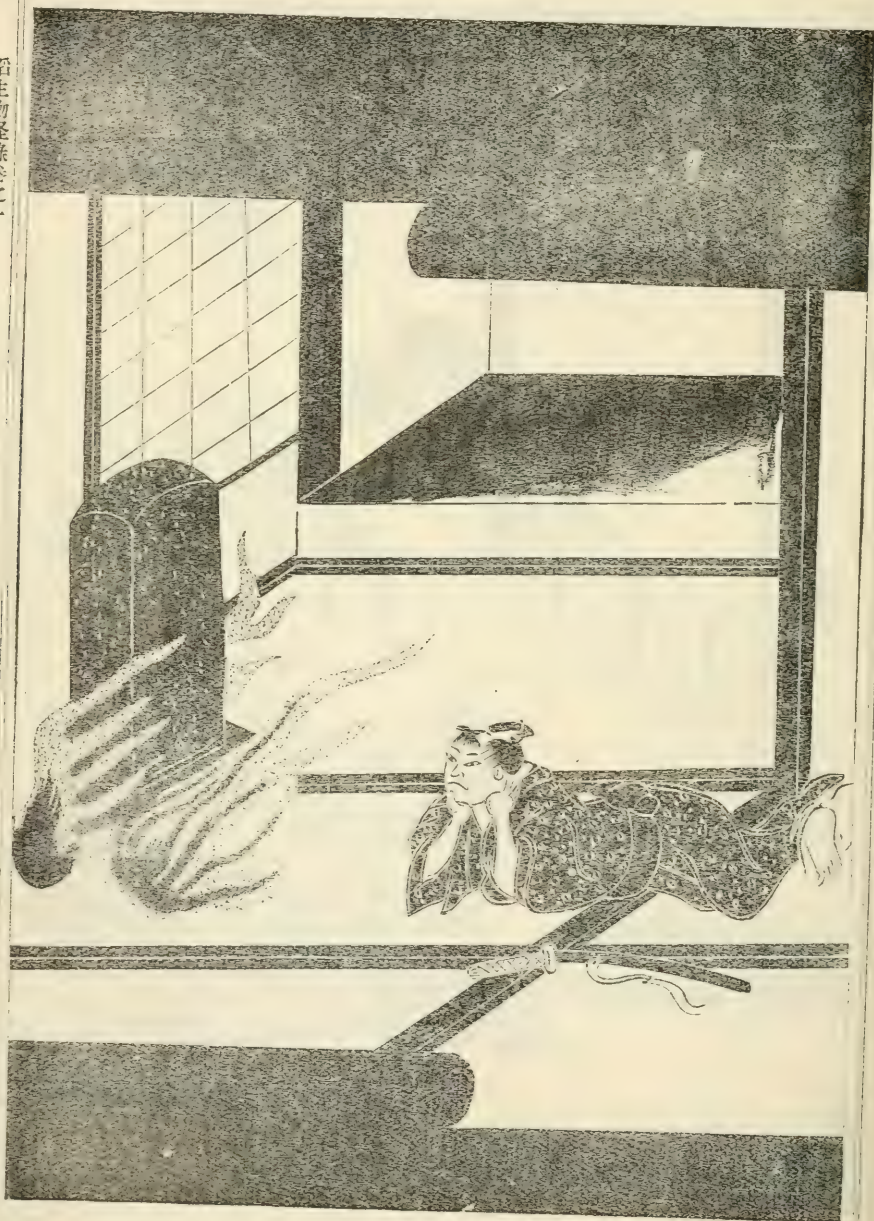
かくて其後何の怪しき事もなくて日數過ぬればふり續きし梅雨もいつしか水無月と移り行照つゝく暑氣を忘れんといつも夕方より川邊に出て納涼しける爰に上り川原川とて二筋の川あり何れも石川の急流なり上り川は比熊山の麓を回り五日市と十日市のわたりに至りて原川と一つになり落岩といふ所に至り又吉田川と落合三川一帶の大河となる石見の國の太田川の水源にして洪水の節は川幅目も及ぶべからず常は小石原白砂原にして廣く續き納涼などには比熊おろしにさながら夏を忘れ飛かふ螢は秋天の星と詠め月の光りは寒夜の氷かと疑はる權八はもとより平太郎も角力を好みて近處の若者ともを集め彼川原へ出て稽古しけるが頃は七月朔日の事なりしが平太郎權八たゞ兩人例の河原へ出かけけるに晴渡りたる空比熊の方より俄に曇り來り一天墨をそゝぎし如く白雨ばら〳〵と降り來りしかば兩人は濡ながら我家々々へ走り歸り平太郎はぬれし帷子を片脇へほし勝彌と共にやがて閨へ入りて休みぬさて雨は篠をつくが如くにて雷おびたゞ敷鳴わたりける夜半すぎとも思ふ頃家來の權平は次の間に休み居けるがくるしげなる聲を出しぬる故。呼起しければ漸く正氣つきて云やう何かすさまじき大男の來りしと存せしが夢にて候ひしか今にむねさわがしく何やらん物凄く今夜は御次の間に休みかね候と云ければ平太郎云やうそれは臆病ゆゑなりとくと心を鎮めて休み候へと叱りければ其儘にて休みしが程なくまた始めの如く苦しげなる聲の聞えしまゝ呼起し叱り付やすませけるかくて雨は誠に車軸を流す如く夜も最早八ツ過ならんと思ふ頃さつと一吹來る風に灯火忽然と消ぬれど其儘打捨置たりしがしばらくありて障子火の如くに成し

かば平太郎こは出火ならんと思ひ驚き起上りしが今迄火の如く見えし障子また眞暗になりける故あやしく思ひ障子へ手を掛ひき明んとすれども釘にて打付たるが如くなればいよ〳〵不審に思ひ力を入て明んとすれども一寸も動かず柱へ足を掛兩手にて力に任せて引ければ障子一枚引くだけて取れたりしが何かはしらず兩の肩と帶へ手を掛し如くにて前へ引いださんとす平太郎心得たりとて足にては敷居を強く踏止左の手にては柱を聢ととらへ右の手を伸したゝかんと思ふにいかさま三四間もあなたより材木などに引掛ひかるゝやうに覺えければ右の手にても鴨居をとらへひき出されぬ樣にと爭ひしうちまたあかるくなりしかばよく見れば丸太の如き物にあら〳〵と毛のはへしものにて兩の肩と帶とへ掛りしものは指などにやと思はれいづくに本體あるやと思ふうち又眞暗になりぬしばらくしてまたあかるくなりしかばよく〳〵見ればこの光りは向ふ納大手の（大手といふは江戸にて云練塀の事なり是備後の方言なり）屋根の上にて光るなり是は大の眼のしかも一眼と見えたるがくわつと開く時は蟻の這も見え朝日の如くにして面を向がたく尋常の者ならば絶入もすべけれど平太郎は強氣の若者なれば少しも恐れず是は昔ばなしに有事なれど心を鎭て白眼返す化生又眼を閉れば眞の暗となりひた引にひき出さんとす平太郎大音にて權平刀をもち來れといへどもさらに答もなしせんかたなくえいと聲を出してつよく引ければ着せし袷の兩肩さけ帶もきれてぞしり居にどふと倒れけるゆゑ刀をさぐり取て飛出さんとすれども眞のやみにて化生のあり所もしれず其内床の下にて光りければ化生は床の下なるかいざや入りて討んとすれどゆかひくければ入る事叶はず床ごしに刺とめんと思ひ内に入りければ不思議なるかな疊一度に散亂し勝彌が寢し疊計りは一枚其まゝにて權平はとくより正氣を失ひしが是も疊より轉び落されける扨散亂せしたゝみは座敷の隅へおのれと積あがりたり平太郎は刀にて床の透間を刺通しさし通しすれども手答もなし所に門の戸をしきりにたゝきあけて入り來る者ありさだめて化生ならむと思ふ内近よるを誰ぞと問へば權八なり先ほど御家來を御呼び刀を持來れと仰られしを承りし故何事やらむと驚き急ぎ參らむと出けるに御門

前にて小坊主が茶碗に水を入れ持通ると見えしが行違ふと其儘惣身しびれ聲も出ず口惜ながら下に居り漸く只今痓れも直り馳參り申候と云ひけるゆゑあらまし樣子を噺し先づ權平を呼び活て冷たき水など呑せけり三つ井いふは思ふに此體にては猶この後も怪しき事ありぬべし兼て申約せしは是なればともに化もの退治せむと申し合せけり扨ほどなく曉にもなり雨もやう〲やみければ今一寢入りして草臥を休めんと疊を敷直し三つ井も家へ歸り平太郎も一休みと床に入りけりすべてこの夜は平太郎近處の家々迄もよもすがらおそはれしやうにてありけるとぞ誠にあやしかりける事になむ

一族中相談勝彌を預くる事並灯の怪水の出る怪

翌れば七月二日の朝平太郎が家來權平は宵よりの事おもひつゞけ夜の明るを待かね寢ひ居けるが寺々の鐘も夜明をつげはや晞わたる朝鳥に正氣つきて門前へ立出忙然として居たりしが程なく近き邊りにも門戸を開きければかしこ爰へ夜前の噺を己れ一人の噺にして鬼の首をも取し如くにはなしありきける故其沙汰かくれなく一族中よりも追々來り權八も來りてとり〲に評定しけるが幼少なる勝彌が事何ぶんにも心元なし平太郎も屋敷を明けて當分一族中へ一所になりてしかるべしと打寄て相談致しけるに平太郎は變化の正體も見ずして此家を去がたしとて得心なく弟の勝彌は叔父川田茂左衞門方へ預け遣しける家來權平も永の暇を願ひける故代り聞合せ候へと申付ければ甚だ迷惑に及び申すやう晝の內は隨分相勤め申すべく候間夜中の義は御免下さるべしと願ひける故當分晝計りの奉公にて夜は下宿致させけるさて晝の內は何事もなくくらしければ今宵はいかなる事かあらんと近處の朋友五六人來り宵の內伽いたしけるが何たる事もなく伽の人々も次第に噺しも絕え凡そ九ッ時頃にもなりければいつとなく物すごく成りけるが行燈の火ばち〲と鳴て次第々々に長く大きくなりき後には天井に燃付とみえたり伽に來りし人々すはやと各貌見あはせて何とをいふものなし權八この體を見て大にあせりけれども平太郎すこしも騷がされば せんかたなく居たりしが頓てたゝみの角々五寸三寸程つゝばたり〲とあがりければ皆々彌逃所

になりて居たりしに次第に強くなりければ人々臆してや其内一人用事の有とて出ければ何れも其尾に付て暇乞もせず歸りける其後疊の揚る事も止みければ權八も暇乞してかへりける平太郎も蚊屋へ入て臥けるが居間の內何やらん生ぐさく覺しが俄に水わき出て目へも鼻へも入とおもはれおきて見れば間の內に水たゝえて漫々として浪をうたせり是をも捨置見るうちに後は潮の引やうに次第々々にきえ失てぞ寢入ける扨三日の早朝權平も宿より來り又一族中其外近所の者も見舞に來りける故平太郎は夜前の有樣を委くはなし乍然最早さしたる事も有ましければ氣遣ひ致さるまじきよし申歸しけりさて暮合より權平は下宿し近邊のもの又五六人伽に來り宵の內何かと取交大咄に成り何の疊の揚るほどの事に驚く事や有べき夜前の膽臆したるなりなどゝ種々の評判致し酒など飲居けるが人々の刀皆なくなりて見えずこはいかにと驚きそこゝゝと尋ねければ奥の間の蚊屋の上にあけ置ぬいづれも恐縮みて額を寄て色を變じて居たる處へたばこ盆机などの類躍り出また〳〵疊の角々ばたりばたりと揚りければ各彌氣味あしけれ共初の大言に恥らひて睡昌にてひかへける扨九ッ時前にも成しかばいづくともなくごろ〳〵と鳴出し何事やらんと思ふうち次第に家鳴強くめき〳〵ゆさ〳〵となる程に是は大地震なりまづ〳〵歸り申へしとて一人出ければ皆々一度に逃歸りける平太郎は庭へ出て隣家を見れば何事もなし我家も屋根などは動くとも見えずめき〳〵とたゝさわかしき計りなり平太郎思ふやうとても此家の潰るゝほどの事はあるまじと覺悟して內へ入何事をも心に掛ず休まんと行燈を提て寢屋に行しに其あんどう忽ち石塔と變じけり是は一興かなと見るうちに其石塔の下より火すさまじく燃出やがて石塔も燒失ると見えしが又元の行燈となりしかば平太郎は打笑ひ誠に綾つりの一しほ手際なる物ぞといひて少しもさわがずして休みけるが何か天井にて動くものありあやしと蚊屋をすかして見やれば青々として圓なるものなり頓てずる〳〵と下り來るを能見れば瓢箪の蔓をひきていくつともなく下り來る平太郎もおかしくおもひしが是をも捨置て寢入ける扨夜ふけて目を覺しけるに惣身汗になり胸の上に何やらん有て重く覺えしゆゑ障子あかりにすかし見

ればば大きなる女の首の色は青白く切口より長き血わたを引出し氣味の惡しき眼つきにて少し笑ひなから胸の上に居れり平太郎爰ぞと思ひ手にてはねのけんとすれば彼首やがて蚊屋の隅にありて透間あらば飛かゝるべき勢ひなり捨置ねむらんとすれば又胸の上に飛來るゆゑまた拂ひのけ足にて踏とばさんとすればば蚊屋の外へ出蚊屋を出入する事無が如しかくする事度々にて後には草臥て捨置づる〳〵と眠れば又むねの上へ來りて終夜寢らる事あたはず漸く鳥の啼頃になりて彼首も何れへか消失平太郎も日出る迄も寢過しけり

平太郎門前群集の事並木履の飛ぶ怪蟹の如き物の怪

かくて四日の日近邊は勿論遠里までも隱れなく三次麥藏屋敷には化物出て夜中家鳴りの音など外へも聞えけるとの取沙汰ゆゑ門前に見物人多く其上かゝる評判には尾に鰭を付る習ひなれはさま〴〵にいひなしてあるひは生靈死靈狐狸の所爲などとの評判なり殊更三夜迄續て誰かれも夜伽に行き家鳴りなどは見及し事なればかしこへ寄ても爰へよつてもたゞ其噂のみにてさらに他の噺しはなし婦人幼童は日暮てよりは便所へ行くにも家内一連にて行けるとなりまして平太郎近處の家々にては追付我方へも物怪の來るやとおもひて恐れあへりさて今日は朝より大勢稻生の屋敷見物に來るものひきもきらず不慮に門前市をなしぬさて其日もくれて初夜頃までは門前に見物の行來たえず見舞に來し人も追々歸り殘りし輩も今宵は靜にて何事もなしなどゝ云中に平太郎の宅大風の吹く如くに鳴り出しければくらさはくらし小氣味惡くや有けん人の跡へあとへとしさり最早家鳴りの音も聞ぬとて一人かへりければ追々に殘りなく迯歸りける此夜は水瓶の水氷となり又は釜の蓋ひらきがたく火吹竹を吹ても風かよはざりけるかやうの怪敷事種々ありしが後には違ひ棚に置し鼻紙次第々々に一枚づゝ散あがりて蝶の飛ぶやうに見えしとぞ是などは翌日も散てありし儘にて其跡のまさ〳〵と殘りて有しは怪なる事なりける明て五日になりしかば猶猶此沙汰隱れなく晝は靜なれども夜に入ると五人七人申合せ得道具を持ち又敷物等もち運び花見遊山の如く平太郎の門前へ寄集れりされども門内へ入りて

見る人もなくたゞ家鳴りの音計り聞けるのみなりしかるに日のくれ頃より少し雨降りて見物も過半かへりぬ今宵は兒新八來り宵のうちはなし居けるに鴨柄のうへに小き穴の有りしに其穴より新八が木履飛び込み内を舞ひありく體さながら人の歩行にことならず平太郎いふとかく人來ればかやうにいろ〳〵と怪き事ありまづ御歸り候へとく新八をばかへせしが此夜は權八も來りて咄し居けるに米三斗ばかりなる石一つ走り來りけるこれを見るに大指の如くなる足ありて這ひ回りて蟹の如くなる眼ありてにらみ權八が方に向ひて進み來る權八あはたゞしく刀をとりて切らむとせしが平太郎押とゞめし故すべき樣なく歸りけり扨夜明て後臺所にありしを見れば近所の車留の石なりしが化ものとり來りてかく仕立たるなるべし扨三津井權八も日々見舞けれども是また夜中はあまり來らざるやう斷りを申ける權八も先夜より少し熱氣有りて心地宜しからざれば夜中は外へも出ずして養生しけるさて今夜も前夜の如く蝶々數多飛び出て座敷一面に飛びめぐりしが是は前夜のとは違ひ跡形もなく消失ける扨是より後平太郎宅家鳴震動は夜ごと〳〵にて後は晝夜をわかずさわがしければその度度をはしるすにいとまなし

村役所より群集差留の事并脇差の飛怪白き物の怪

扨其夜も明て六日になりぬかくて平太郎門前見物の人次第に多く近郷よりも聞傳へ出てあまりに騷が敷由聞えければ村方の役所より見物に出さるやうにとそれ〳〵の村役人に觸させける又新八方へも門前に人立申す間敷よし申來るに付き晝九ッ時頃に平太郎方へ右の譯申聞せんとて新八來る外に同道の者一人有り右村方役所より申來る趣平太郎へ申きかせ其外一つ二つ咄し居ける所いづくともなくぬき身一振鳥の羽風の如く鳴わたり新八が着せし帷子の右の袖を少し計り切りて後のから紙へ鍔元迄ぐさと立たりいづれもあきれ果たる中に殊さら危き事かなと身の毛立しもとわりなり斯て彼の刀物を拔取見るに家來に貸し置し脇差なりさて鞘を尋れどもなしいろ〳〵さ尋れどもさらに知れずせんかたなくて居たりしにいづくともなくトントコ、ニといふこゑ人の物いふ樣に聞えけりまた桐の箱などうごかしてすれ逢てなる

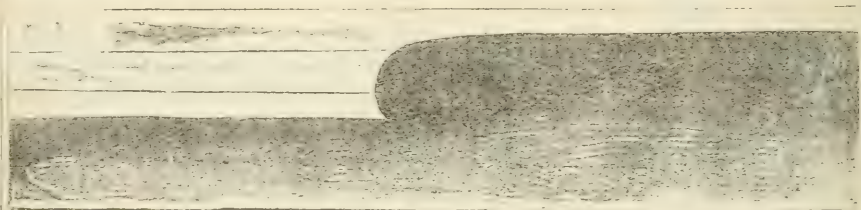
音にも似たれども正さしくさんさこゝにと聞えかく云こと三聲四こえ聞えけるまゝいづくやらんと考へ見るに座しきに掛たる額の邊に聞えければまづ額をおろしけるに額のうしろに有てばたりと落たり家來に貸置し故家來の部屋に置たるにいかゞして出しや不思議なり去ながら化物も心有にや鞘をあまり尋る故に敎くれしかとそゞろにをかしかりしとなり扨新八其外もさう／＼にして歸りけるが是より後は晝もをり／＼怪しき事多かりけり家來權平も兩三日以前より病氣なりとて晝もきたらずまた代りに參るべきといふものもなき由にて暇を願ひける故是非なく永のいとまを遣しけりかくて平太郎は夕飯をしまひ湯を心よくつかひいざ一休みと思ふ折から堀場權右衞門同道にて叔父の川田茂左衞門來り此頃の樣子を尋ね聞今夜は噺し申べしとて兎や角する內はやくれかかりければ夜食などを拵へて宵の中咄しけるに今宵はいつもより靜なりしがいかさま初夜すぎとも覺る頃臺所の方に白き色の大きさ一抱も有べき丸く至極やはらかき物のふわり／＼と舞あるきければ兩人しきりに氣味あしくや有けん互に頭をよせて再び見もやらず平太郎は又何事をするやらんと見るうちにまた木履一足急にとび來り額を突ぬき外へ出たり兩人驚きこれを見るうちにかの白き物次第々々に座敷の方へ舞きたり權右衞門と茂左衞門と頭をよせて居たる中へふわりと落かゝりぱら／＼と何かかゝりければ兩人はわつと云て飛のきしが暫しはものも得云はで居たりけりさて彼落し物をよく／＼見れば鹽俵の古きにてばら／＼とおちしは鹽なりけるやゝあつて兩人は夢の始てさめたる心地にてこそ／＼と歸りける平太郎はしほ俵を庭へ投すて夜伽は却て邪まなりとつぶやきながら休みけるこそ大膽なれ

稲生物怪録巻之二

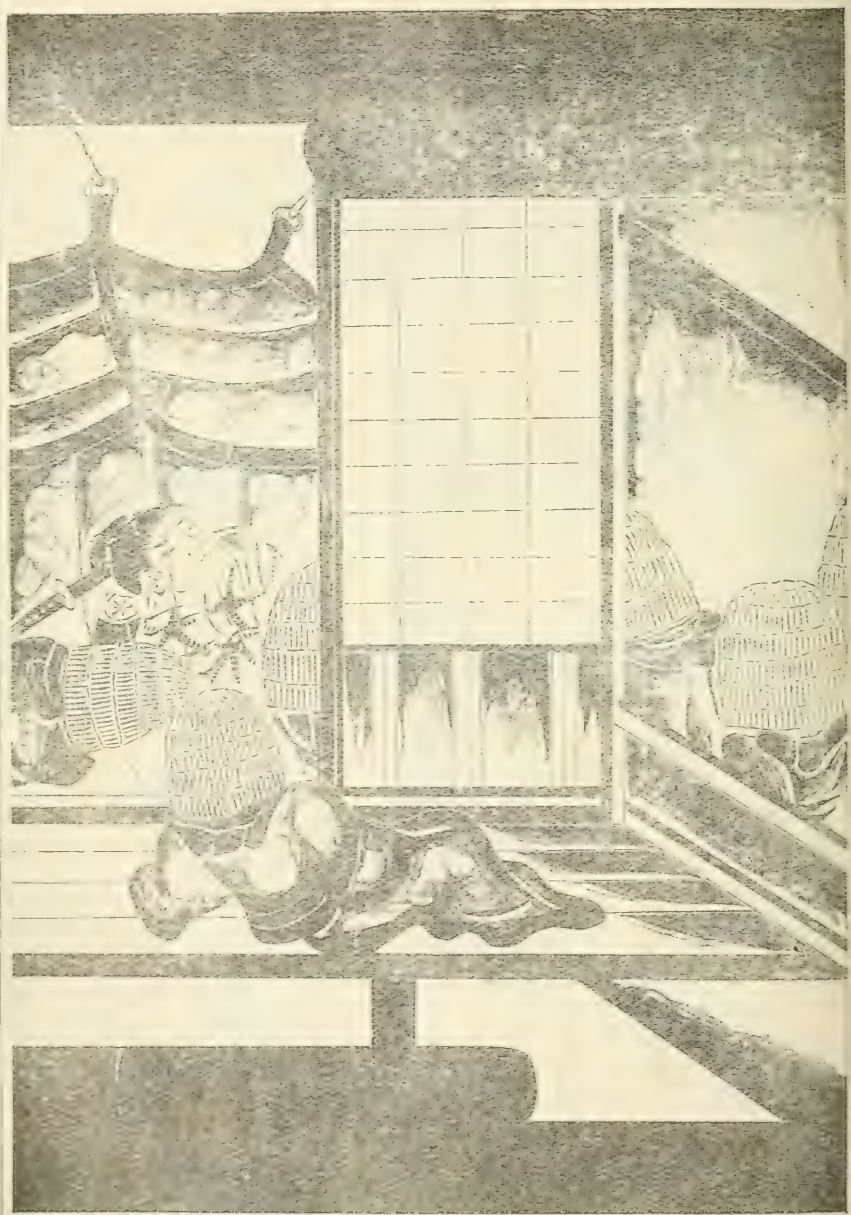
目録

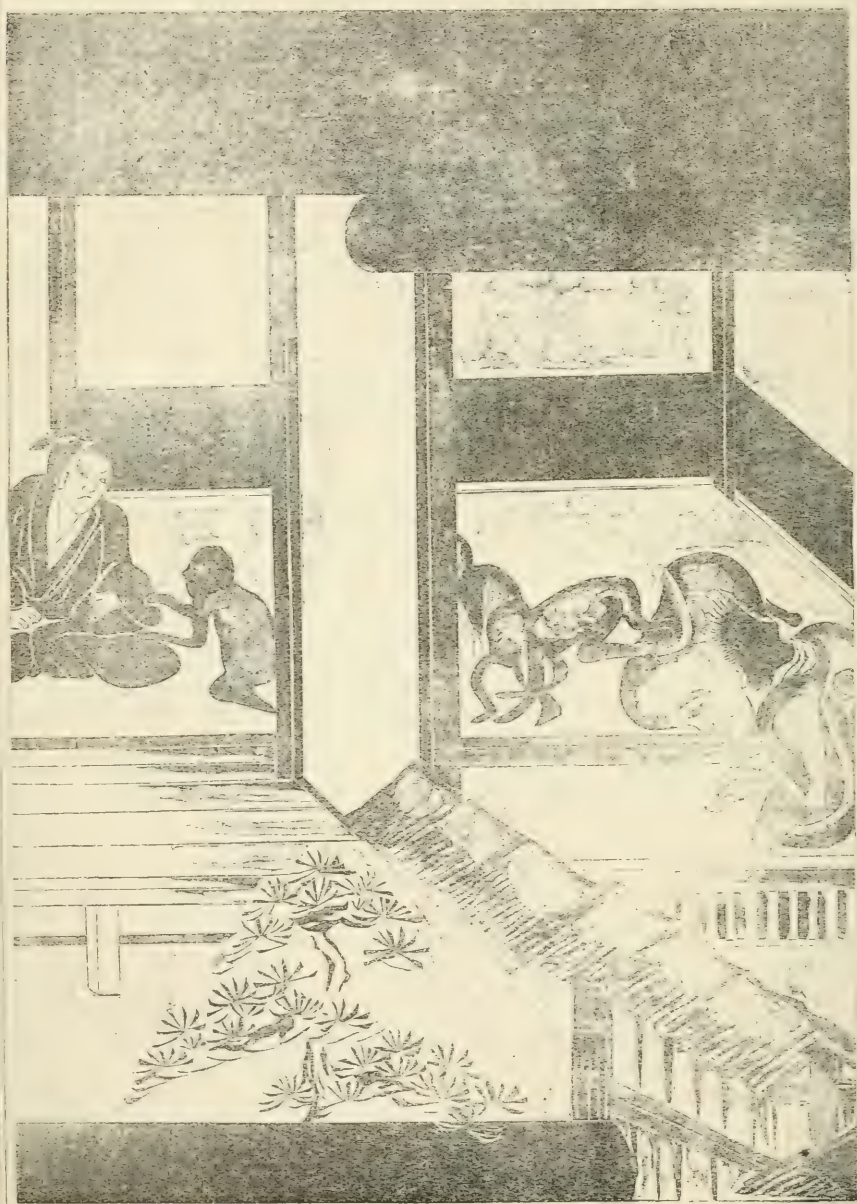
稲生物怪録巻之二

擂木手串ざし首の怪

あくれば七月七日の朝七夕の禮を述んと戸を引立てまつ兄新八と叔父川田茂左衞門かたへ行き其外へも二三軒まはりけるに逢人ごとに兎角物怪の事を尋ねける故いまだ見ざるものにはよし語り聞すとも虚言ならんと疑はれん事を口惜しく思ひければ外へはあまりつとめず歸宅して其のちは人の尋ね來る事のうるさければ一向他出は止めけるとぞ扨今日も暑氣のしのぎかたく照増りけるかゝる所へ平太郎が家に前方より出入せし賤の女今日の祝儀として訪ひ來りしが此頃の咄しにそこ氣味わるければ早々に禮をのべて歸らんとせしにいづくよりか盥一つごろ／＼と鳴てころげ出しけるゆゑ彼女大きに驚き是こそ怪物ならんと門口へ迯出けるにそのたらひつゞいて門の外迄追かけ出しかば女は膽を潰しこけつまろびつ迯歸りけるも斷りなり扨夕方よりかき曇り白雨降來りしが夜に入て晴渡り星合の波も涼しく詠め居ける今宵は人も來らず伽人は結句世話ぞと思ひけるさて臺所

へ行んとせし處に入口一はいの白き大袖あり例のと思ひ暫しひかへて見居たるに袖口より大きなる手を出しぬ其手を見ればすりこ木の如くにて指の所は握り拳の如く丸くしてしら〳〵と白げたる手なりしばらく見るうち其手の先より又其如くなる大きなる擂木手出又其先より常の人の手ほどのすりこ木手數々出さぼてんの如く次第に小き擂木手となりて其數も知れずうじや〳〵とうごく有さま不氣味なるを事ともせず平太郎走り寄て捕んとすれば形もなくまた遠ざかり見れば數限もなくわき出る如くなれば何となく不氣味なる有樣を詠め居たる内夜半の鐘の音聞えければ其儘捨置さて〳〵益なき事に骨折しと獨言して閨へ入りけるが又忽然と坊主の首の眼は丸く光りけるがしかも串ざしにていくつも〳〵でんかくの樣にて其串を足として飛出々々彼擂木手と同くあちこちこうるさくはね廻り殊に擂木手はをり〳〵寢たる貌へひや〳〵とさはりて何やらんやはらかなる樣にてはねのくれば消きえてはまた湧來り曉方に至る迄眠る事ならず漸く明方になりてよし〳〵たとへ貌へさはるとゝ又はね歩行とても何程の事かあらんかまはす眠べしと思ひ打捨置ければ彼の首も手も次第次第に消失て跡方なし夫より平太郎もいよ〳〵工夫付て大かたの事はうち捨置けり

大勢夜伽に來る事並煤掃の怪虚無僧數多來る怪

明れば八日になりぬ平太郎も夜前の怪物には困りはてゝ大きにくたびれ終日居眠りけるさて晝のうちながら折々疊など揚りて思ふやうに休息もならず晝過頃近所の者ども來りて申合けるは今夜は大勢夜伽を致しなばたとへいかやうのこと有とも大勢なれば格別の事もあるまじ何卒少しなりとも平太郎を寢させたきものなりと相談を究め日の暮るを相圖に集る約束してみな〳〵立歸りぬ今日も白雨降けれども其夜も又晴わたりける初夜すぐる頃までに六七人もあつまりまづ〳〵休みたまへとて平太郎を休ませける今宵は權八も來りければ夜伽の輩も力を得て銘々好々のはなしして夜半過る頃月も山の端に隱れ何とやら物淋しく風もそよ〳〵と吹き來て涼しすぎたる夜なれば秋めきておのづから物あはれに覺る折しも疊はばたり〳〵と揚りしが人々の居りたる疊の角々も少しつゝ揚りける故各力に任せて押へ居けるが次第に

強くなりて後は煤掃の如くばた／＼と揚りては落あがりては落灯も消えて座敷中ちりほこりになり黒煙り立て目もあけがたき次第なれば人々も始めはこたえ居けれど力つかれて立さわぐ程にあまり騒しければ平太郎寝もやらず漸々つよくばたつけば各つひに叶はずして一人駈出すとつゞいて我もわれもと逃かへる時には權八のみ殘りけり猶奥のかたばたつけば兩人行て見るに疊ことごとく紐を以て天井にくゝりあげて有兩人申合せ其たゝみをおろさんと階子(はしご)を持來りしに其時彼疊忽ち天井より一度にどつさりと落にける誠にあぶなき事にて兩人も驚きしと也夫よりやう／＼疊拵敷直し心を鎭めて居たる内次第に靜になりければ權八も暇乞してかへりしかば跡は平太郎一人閨(ねや)に入りけるに又何やらん物の音する故見れば大きなる錫杖おのづから出て居間の内をあちらこちらと飛歩行きけるが何も捨置平太郎は休みける明れば九日になりぬ平太郎起出て見れば納戸の内よりしゆろ箒自然と出て座敷々々を細に掃廻りける昨夜すすはらひせし例には甚だ相應の化物かなと平太郎獨り笑ひけり今日は度々屋鳴していつもよりつよく其日もくれぬ人々も昨夜にこりてや今宵は來るものなくたゞ權八は宵の内來りしかども是ははじめ小坊主に逢ひしよりとかく熱氣のさしひきありて此の頃は食も平日の通りにはたべかぬるよしを聞て平太郎云けるは自然と怪の氣に當りしものならんかならず用心專一なりさして變りたる事なきに每夜此方へ來りて下地の邪氣に猶かさねては惡かるべしかくべつ珍らしきこともあらば其時しらせ申べし每夜來るは無用なりとくと服藥をも致し然るべしとくれ／＼申して歸しける此後は權八每夜は來らずさて夜に入りてより家鳴も次第に弱く間遠なりしが何くともなく遙に尺八の音聞えしか程なく裏の方より虛無僧一人いり來りけるが次第々々に同じ姿のこも僧數多いで來り後には大勢さま／＼の體をなし居間の内一めんにこも僧となりけるがやがて平太郎が臥たる傍へのこらず寢ころびけり平太郎はよき伽の心にて一向かまはずすて置ければ何の事もなく後には次第にきえうせて一人もなくなりて甚も靜かなりけるまゝ夜半頃より此頃になき快寢をいたしけり

頭より赤子の出る怪

明くれは十日になりぬ始めにしるせし如く家鳴り疊等の揚る事は日々なれば書もらしぬれど其うちにも至て強き日も有又さもなき日もあり其内にも九日の夜半より今日一日は至て靜なりこゝに上田治部右衞門といふ者あり物怪の事を聞て尋ね來りしゆゑ初めよりの事あらましに咄し聞せしかば治部右衞門いふには是はかならず狐狸か又は猫また等の所爲なるべし然らばわなをかけ置き試みなば必正體あらはるべし幸ひ某が得たる蹄の仕様あれば明晩までにこゝのへ參るべしと約束して歸りける平太郎思ふ樣初に逢し物怪のやうすなか〳〵わななどにて退治すべしとは思はねども何事も慰みぞと思ひ居ける其日も暮て夜に入しかば夜食なども仕廻ひ煙草盆もちて椽先へ出て月を詠め居けるが門口に人の音しければ誰なるらんと見れば兼てなじみの人にて貞八と云る者來りしなりやがて次の間へ入て物語せし中に貞八が頭次第次第に大きく成けるか忽ち二つに割て中より猿の如き赤子三つ顯れ出たりさては是も例のかと思ひ打捨て見るうちに彼の赤子は平太郎が膝の元へ這來りしが又赤子三つとも一所になりて一つの大童子になりて平太郎目がけて摑みつかんとせしゆゑ平太郎は憎きやつと思ひとらへんとするにとく消失て跡形もなしさればこそとうち笑ひ頓て寢所に入て休みけるか其後は何の事もなく家なり又は疊のあかる事もさして強くもあらざれば平氣にて休みける

反蹄の事並鯨波の怪足跡ありし事

かくて十一日にもなりしかば上田治部右衞門ははねわなとて三年竹の性よきを用ひ杭を丈夫に打ち其杭に聢と結びつけ鼠の油揚を餌に仕かけ強くはねる事段々仕掛の傳授是有るよし用意ことごとく調ひしかば暮るを遲しと仕かけ置き治部右衞門は歸りけるほどなく初夜も過夜半も近くなりけれども今日は朝より折々家鳴りまたは疊など揚りし計りにて今宵は格別の事もなく曉に至りぬ平太郎起出て便所に行とて彼わなを見ればもとより何もかゝらず。さればこそと思ひて又休みける十二日朝とく起出てよく〳〵見れば蹄の餌人間も及ばぬほどに實に手際に紐ともに解取りぬたとへいかやうにするとも餌にさわる程ならば竹のはねぬといふ事なき仕掛なれども何としてかつり緒ともに見えず平太郎思ひけるはわなにかゝ

らぬもさる事なれども釣紐までほどきとりしは不思議なりと思ひける扨この鼠の油あげは軒の下につるして有しを日數經てのちに見つけ出せしとなりさて治部右衛門來りわなの體を見てあきれたりしが何にもせよ此鼠を取し上は必ず年經る狐のわざと見えたり今宵はまた椽の上に糠をまき置其ほか臺所の板の間にも糠をしき足跡の有か無かを見て其足跡にて又跡の仕樣ありとて歸りける今日は折々の家鳴りも弱く暮方に成ぬ又治部右衛門來りて所々へ糠を薄々とまき置きけり今宵は昨夜と引かへ宵のうちより家鳴震動すさまじくいづくともなく鯨浪(ときのこゑ)のやうに大勢の聲聞えければ治部右衛門是は世人の云る天狗だをしにやと云てしきりに氣味惡くや有けんいづれ明朝參るべしとてさう／＼に歸りける夜中別に替りたることはなけれどときの聲は今宵初めてなればいかさま天狗などにやとも思はれける今宵も平太郎は快く休みけり扨十三日のしのゝめの頃門をたゝく音の聞えける故起出で見れば治部右衛門なり足跡はなきやとて平太郎と兩人して蒔置し糠を見れば犬か狐かと云やうなる足跡の大きなると小きとありて其中に二尺

計もあらんと見ゆる人間の足跡も有治部右衛門つくづく見て何とも合點のゆかぬ事ながら定めて狐狸のわざ成べし此趣きにては蹄などへ掛るべきもの共思はれず是は野狐除の祈禱こそ宜かるべし某西江寺へ頼み進ずべしとて歸りける平太郎は寺の祈禱くらいの事にてはなか／＼退治のほど覺束なしとは思ひけれどもさからはず人のすゝめに任せけりそれより治部右衛門は西江寺へ行き右の譯を咄し祈禱を頼みければ和尚申けるは稻生家物怪の事は兼て承り及びしなり易きことながら今二三日相待れよ御存の通盆の頃ゆゑ行事に取こみ居れば祈禱は勤めがたし當寺の藥師如來は至てあらたなれば此藥師の前にて香を炷(た)く卓(しよく)と香爐は昔より由ありて奇どくかぞへ難し是と藥師の御影とを貸し申べし是を平太郎の居間にかけ香を炷き信心淸淨にして拜し玉へ此佛器計りにても疫神狐狸甚だ恐るゝ靈驗あり大かた此佛影の功力にて物怪も消滅すべしと申ければ治部右衛門もそれは有難し然らば晩ほど取に越し申べき間御貸し下され候へと約束し直に平太郎方へ行き右の譯委しく語りければ平太郎も御深切忝ししからば晩程取につかは

すべしとて禮をのべたればよく信心を致されよとて治部右衛門は我家へ歸りけり

獵師長倉が事並電の如きものゝ怪

七月十三日暮方治部右衛門方より鐵砲打の長倉といふものを伽に差越したりこの長倉は若年の時より山野を家として力人に越へ猪鹿をとりて世をわたりけるが自然と鐵砲の妙を得て猪狼の類も此長倉か銃先にとまらぬはなく元より治部右衛門方へ殊更出入し平太郎方へも出入なれば何卒御伽に參らむとて治部右衛門へ申につき幸ひにして遣はしたるなり平太郎長倉へ申はよくこそ來りつれ今宵は西江寺へ藥師の佛影を借につかはす筈の處家來は暇を遣し折ふし誰も來らずいかゞせんと思ひ居たり大義ながら西江寺へ行き佛影を借來りくれ候へと云ければそれは易き事に候とりながらまづお茶など給べて御咄し申うちもし怪き事も候はゞ其時借參りても宜しく私は是迄御伽にもまいらず未だあやしきことを見ず候へばもし今夜より佛影の功力にて怪き事の止み候ては誠に殘念に候へば今しばし御まち下されかしといふにそれは兎も角も致すべしとて茶をせんじ夜食などしまひて四方山の咄しになり元より平太郎山獵は好なり年經し狼又手負猪を仕とめしなど其外さまゞゝの咄に覺えず夜をふかし初夜すぐる頃例の家鳴震動など仕出し疊などもばたゞゝ揚りければ長倉もはじめて不思議を見申たり今迄人の申處大かた十に八九は虚說にて何ぞ少し計りの事を仰山に申ならんと存居候所さてゝゝ不思議も有物にて候いざや西江寺の佛影を借て參らんとて出行きける頃は七月十三日月よく皎て晝の如し然るに途中より俄に曇り眞暗になりて前後も辨へ難し時に中村源太夫といふもの小挑灯を燈し來りしが計らず言葉を掛ければ長倉も日比出入する源太夫がこと故西江寺へ行譯を咄し只今途中より俄に曇り候へば一しほくらくおぼえ扨々困り入候と申ければ源太夫がいふには某はほど近ければ挑灯を貸すべしといひければ長倉は忝しと挨拶し挑灯を借てわかれける扨少し行は津田市郎右衛門といふ者の宅あり角屋敷にて其屋しきの藪より大きさ笠袋のやうなる黑きもの飛出したり長倉怪く思ひ津田か屋敷の角を廻りしが忽ちかの物稲妻の如く光りて眞赤き石の如きものと共に長倉が頭の上へ落來り首へ

巻付けるゆゑわつと云て挑灯も捨両の手にて取のけんとすれどもまきつきてしめければ目も見えず聲も出ずしきりに息つまりてつひに絶入けり此時津田市郎右衛門は居間にすゞみ居けるが表にて人のわつといふ聲の聞えけるゆゑ怪く思ひ格子より覗き見れば誰かはしらず人の倒れ居ける故家來を出して水など呑せ呼活ければ長倉やう／＼心付起上りて見れば最早雲晴て晝の如き月夜なり源太夫に借し提灯もいづくへか行けん無かりければ強氣の長倉も臆病こゝろ付て佛影を借りに行くまでもなく津田が家來に禮をのべて立歸り平太郎方へ門口より今宵は夜も更ぬれば佛影は明日かりて參らせん其譯は明日御咄し申さんと云捨て我家をさして歸りけるこの長倉強勢を頼みあやしき事を見度などゝいひしを妖怪のにくしとや思ひけん又我慢の鼻をひしがんためかいづれ怪き事なりけり扨長倉は翌日源太夫方へ行て夜前の御挑灯はかやう／＼の事にて失ひ候とて夜前の事どもを語りければ夫は合點の行ぬ事なりまづ夜前は少しも曇りたる事もなく其上我等いづ方へも出されば元より途中にて挑灯を貸すべき謂なしといふを長倉聞て舌を巻て恐れをなせり

　藥師如來の事並卓香爐の飛怪えい／＼聲の怪

明れば十四日平太郎は一人住なれば佛影を取につかはすべき人なく徒然なる折ふし長倉來りて夜前の次第を委く噺し扨佛影を取りに參らんとて直に出行ける西江寺にては昨日にも借に來るやと待けれども人も來らず盆のいとなみにて取まぎれ居けるに長倉來りて夜前の始末くはしく語りければ和尚も大に驚き何分祈禱を致し札を進じ申べし先づ／＼此佛器御影を預け申間信心を専一にし玉へと傳へられよ必ず奇特有べしとて渡しける長倉受取て平太郎方へ持行き和尚の傳言を委く演べて今宵もときに參るべしと申ければ平太郎申は伽人有ば却ていろ／＼とあやしき事多し其上時節がらさぞいそがしく有べければ必ず來る事は無用なりとて長倉をば返しけりさて平太郎も暮方に墓參りして直に新八方へ行き暮過に立かへり今宵は人も來るまじければ早く休んと彼佛影を床の間に掛その前へ佛器を直し置き香爐をすゑ拜をして扨椽へ出涼みながら月を詠め暑さをわすれて最早四ツ時頃にもなりしかば閨へ入んとする處に佛壇

の前のからかみさら〳〵と開きければいかゞと見るうちに佛壇の戸おのれと開け座敷の床に有し彼卓香爐疊をはなれる事三尺計り佛壇までは其間三間ほどの所をしづ〳〵と行く事人の持て行くが如しつひに佛壇にをさまりければ開きし戸も本の如く戸ざしぬ平太郎不思議ながらも世話いらずにてよし〳〵と云ひながら蚊屋に入て休けり佛影は動かず今夜は靜也平太郎近來に覺えぬ快寢しけれども此のちも物怪は更に止むことなく佛影の奇特とおぼしき事もなかりけりかくて十五日晝のうちはいよ〳〵靜なりしが夕方よりまた〳〵疊などもばたつき出しぬ今朝より小雨も降むし〳〵と暑さも強かりければ湯も早くつかひ暮行空を詠め例年今日は近所寄あひ中元を賀し酒など呑で在中の辻おどり見物せんとくれるを遲しと待けるに今年は物怪故に外へも出ず淋しく過ぬるものかなと獨言する折から津田市郎右衛門木金作吾内田源次三人同道にて來り嘸淋しからんと思ひ酒を携へ來りしとて取出しければ平太郎も忝なしとて晝の瓜もみ鯖鱠を取出し酒などのみ初夜過まで咄しけるが今宵は三人に任せ氣遣なしに休み給へとてすゝめければ彼の佛影の前へ佛器を出し備へ置き然らば御免候へとて平太郎は蚊屋へ入て休みぬ扨三人はさまさまの物語りに程なく夜半にも成しが作吾申やう煎じ茶も薄く成ぬれば今一つ花香を入て（花香とは茶の煮花の事を云是備後邊の方言也）眠りを醒させ申さんとて土瓶の茶を入直し夫より咄もまた〳〵新らしくなりしに裏の方より大勢の聲にてニイ〳〵と掛聲して重きものを持來る樣子也人々すはやと思ふ内其聲段々近くなりて内庭に來り臺所に來ると聞えしかござりとおとしたる其音のすさまじさ此ひゞきにつれて家なり仕出しめき〳〵と鳴ければ三人はものをも云はずたゞあきれたる計也平太郎も此響に目をさまし何事やらんと見れば臺所の板の間に何やらん物有平太郎いひけるは各方見て來られよと申けれど各返答もせず只一所にうづくまり居たり平太郎某見て參るべしとて蚊帳より出紙燭を付臺所へゆきて見ればうらの物置部屋に有し香の物桶なり是は此間茄子の香のものを積置しが部屋の口は錠を掛置ければ戸の明くべき樣なし夫にいかゞして出しけるか此處へもち來ること不思議なれしかし各方へお茶の口取に

もなされよとの事ならん物怪どのゝこゝろざしこそやさしけれとてやがて茄子の香の物を取出しけれども三人は物怪の持參せし香の物は氣味惡しとや思ひけん喰で置ぬるを平太郎ばかりとり喰ひ茶をのみてまた閨へ入り休みける暫く有て彼卓香爐またおのれと舞あがり蚊屋の廻りを舞ありきければ三人ともそろ／＼とかやの中へ這入りける佛器はいよ／＼舞けるが後には卓と香爐と別々になりて舞ほどにいつのまにか入けん香爐は蚊屋の內へ入て舞步行き少しかたぶきては三人の頭の上へ灰ばら／＼とちり掛りけり三人は一所になりてものいふ人もなし時に內田が首筋へ灰ばら／＼と强く散かゝりければわつと云てうつむきしな胸の中こみあげしが黃水をがばと二人の上へ吐かけけれども兩人は夫をも覺えず只心なき計りにきしうつむきて居るのみ也平太郎は起上り是はこれはとて幬をはづし掃除せんとするうちまた昨夜の如く佛壇の戶開けて卓香爐とも內にをさまりけるぞ不思議なる平太郎は三人をやう／＼引起しうらの釣井戶へ伴ひ水を飲せければ三人も漸く人心地つきて早々歸りければ平太郎は跡の疊など掃除してつぶやきながら休むうちはやしのゝめのそらとぞなりにけり

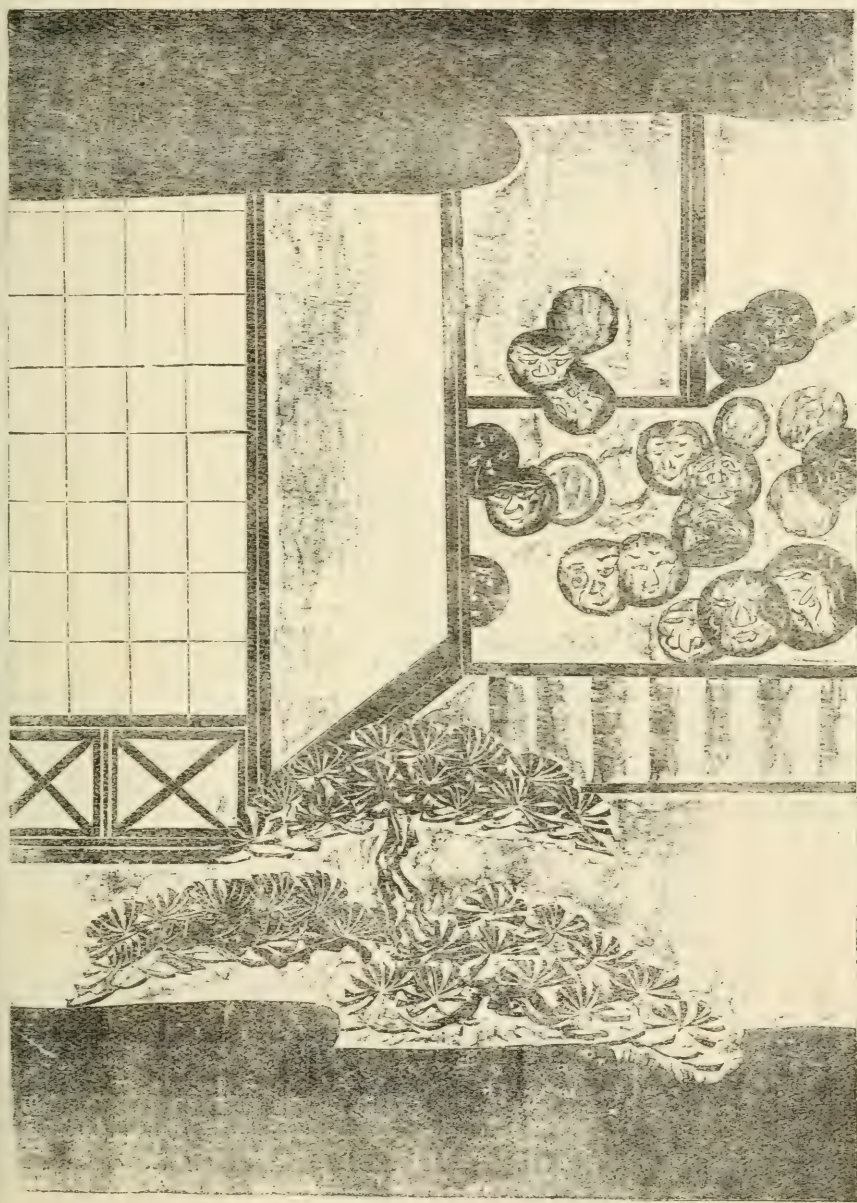
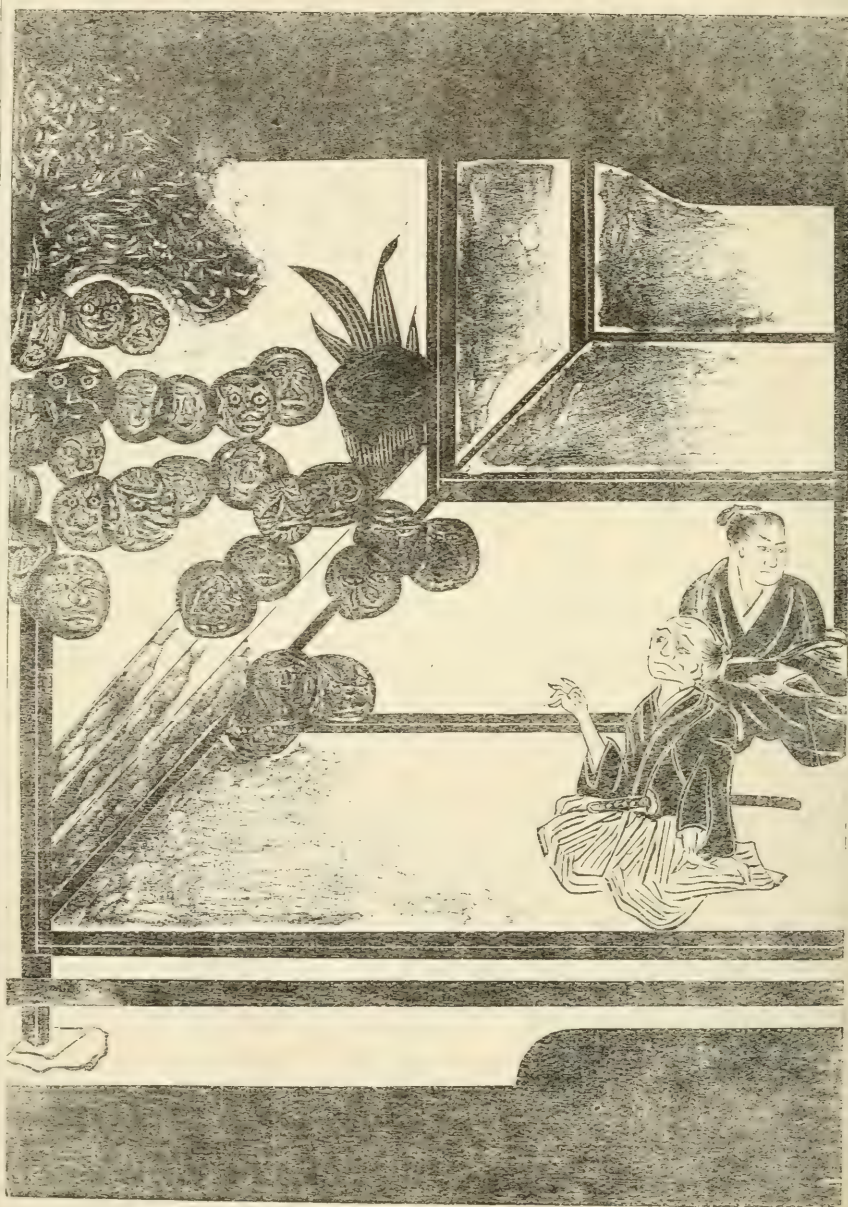
　一族中より異見の事並天井の下る怪

あくれば十六日になりぬ今日は當所にては藪入とて在中は專ら親類のかたへ寄合事なり正月と七月共に同じ扨平太郎も叔父川田茂左衞門方へ行ければ一族中集り無事を祝し酒飯等もすみ茂左衞門は平太郎に申すやう先頃より其方宅には怪き事ありて各夜伽にゆかれたれど迯歸る人も多し其方氣丈にてひとり暮す事いづれも驚き入しなりさりながら此のち萬一あやまちありては其身は勿論一族中も見捨置しといはれては甚た以立がたし今日より一族中何方へなりとも逗留致し暫く樣子を伺ひて然るべしと申ければいづれも一同に其旨に致されよと異見を加へける其時平太郎申すやう成程其段は最初よりも仰られし事なれどもさしての事も有まじと存せし處日々の怪事今日までもやむ事なし此上は最早氣根づめに候あいだたとへ半年にても一年にても是ぞと申す事を見屆し上いよ／＼人の住居相成り申さず候はゞ其時願ひ出屋敷を上げ候ても相濟申べし只今となり狐とも狸と

もしらずしてほかへ行候ては臆病の名を取されば こそ初の人の異見の時何方へなりとも參るべきに我慢ものやなど丶いはれんも口惜し夫はともかくも此屋敷後に他國の人昔噺しの如く望みて來り住居致し何事もなき時は我等の名の汚るはいふはねども第一國の恥なりこ丶をおもへば何分此義は私存念に任せられ下さるべしと申ければ人々申は左程に思はれ候はば是非に及ばずとて茂左衞門も其旨に任せけり夫より平太郎は暇乞して歸る時其座に居ける出入の者一人今宵は私參るべしとて同道して暮相頃家へ歸りける平太郎も少し酒機嫌なれば椽へ出て涼み風にさそはれ眠りを催しけるに彼若者は居間にて風爐に火を起し煮花に醉を醒さんと思ふ折から天井めき／＼と鳴出しける故天井を見れば何とやらひく丶なるやうに覺えけれども醉まぎれかやうに見ゆるやと打捨置けり扨天井は次第々々にひく丶なりけるを彼者も隨分こたえけれど旣に落か丶ると見えければ今は叶はじとや思ひけんわつといふて庭へ飛下り一さんにかけ出す平太郎は前後もしらず眠り居しが彼もの迯しなにわつと云聲に目を覺し見れば天井ひく丶なりぬされども一向に捨置て幮に入て休みける夜明ぬれば彼若者は我こそ夜前稲生の化物に逢し由云ふれける故人々いよ／＼恐れて稲生が門前は日暮て通ふ人もなし

西江寺祈禱札の事并輪違ひ貌の怪

かくて十七日晝時分上田治部右衞門は野狐除の札を持參して是は此間西江寺へ相賴み置しが今日祈禱相濟札を差越し候なりとて彼の札を居間へ掛置かへりける扨日のうちは例の如く折々の家鳴ばかりにて格別の變もなく暮方頃より治部右衞門も來り宵の中はなし申さん今宵は札の功力にて何事もあるまじとてとも／＼椽へ出て月待空のいと面白く漸く山の端に白々とおぼろなる月影に庭の木の葉なども夫ぞとは見えわかず樫の木の有しか其木の此方に何かは知ずくる／＼と輪違ひのやうなる者數多あらはれて次第次第に空より舞來ると見えたり治部右衞門あれはいかにと云に早椽の前迄くる／＼と輪違ひのやうに見えければ月のうつりなどにやとよく／＼見ればいよいよくる／＼とめぐるなれば治部右衞門も氣味惡しくや思ひけん暇乞しければ平太郎いふ今暫し咄し給

はんやと申けれど歸らんとする處に臺所の方よりも彼輪達來り中には小たらひ程の輪も有て煙りの如くくる〳〵と廻る有樣治部右衞門も兼て覺悟にて野狐のわざとおもひよく〳〵見れば其輪の中に目鼻口も有てこと〴〵く人の顏なり見定めんとすればくるくると入替りて顏の上へかほが交りさま〴〵の顏あらはれ白眼もあり笑ふも有治部右衞門白眼つめて居たりしが最早叶はずして臺所へは出かねしや庭の方へ出ければ其顏一度に笑ふ如く聲聞えければ治部右衞門驚き門口へ飛出て一さんにこそ歸りけれ治部右衞門の逃出したると物怪の笑ふにて平太郎もをかしくて笑ひながらやがて寢所へ入けるに其後は彼顏もいかがなりしや出ず何たる事もなく靜なり明くれば十八日朝とく治部右衞門來り夜前は扨々不氣味成る事を見しなり祈禱の札にも恐れぬは狐狸のわざにも有まじなど丶種々評議する折から權八も來り夜前の噺しを聞扨もいろ〳〵と狂言を替候ものかな何分此化には勝れ申さずと云を平太郎聞て思ふやう權八程の者なるが加樣なおくれし言葉をいだすは物怪に負る道理なり權八が身の上心もとなき事なりとは思へどもさあらぬ體にて權八に向ひ殊の外顏色も惡しく毎度云事ながら取しめて養生して先此方へ見舞中に及はず尤隣家の事なれば此方の騷がしきを聞る丶度々心元なく思ふもことわりなり去ながら此方は少しも氣づかひなし心易くそんじちと外へ行て逗留して保養第一に致し元氣を取直し來り候へと云ければ治部右衞門も其義然るべしとすゝめけりさして是ぞといふ病にてもなく其儘にてうか〳〵と暮し後には大病となりけるが此節外へも出て養生致せしならば快氣の事もあるべきに其まゝに打捨置しは是非もなき事なりける扨かの西江寺の札を見れば薄墨にて文字の書入有梵字と見えたり昨日は慥に書入はなかりしと覺えしに變りたる事なりとて早速西江寺へ此よし知せければほどなく和尚來り此札を見て大きに驚き梵字を書入しはなか〳〵かりそめの妖怪とは思はれずとて舌を巻てぞ歸りける何たる事は知ねども落字か又書損にても有しにや何さま不思議の事也けるばけ物の手跡なりとて追々見物も有しが一年も過て次第に薄くなりけれども二三年は其形見えけるとぞ其後も其儘掛置しかばのちには本書も煤にくろみ見え

ず成りけりさて今日は晝の中も殊の外あら〳〵しく諸道具も舞あがり或は茶碗の類ひ臺所より鳴渡りて居間の方へ飛來り鴨柄にて今にみぢんに打碎けるよと見るうち一寸と鴨柄を潜りて飛行座敷の眞中にて落或は煙草盆も飛上り其外の諸道具も動く事此後も度々なり茶碗など飛時に手を添れば落て碎けるなりいか程に飛ても捨置ば音計りすさまじくてさらに損る事なし行燈など舞歩行ども捨置ば油一滴もあふれず平太郎も今は物怪功者になりて何事も一向に搆はず打捨置たゞ物怪と同居なりと心得て暮しけるこそ大膽なれ

稲生物怪録卷之三

目録

稲生物怪録卷之三

曲尺手の怪並大婆の怪蜂の巣の怪

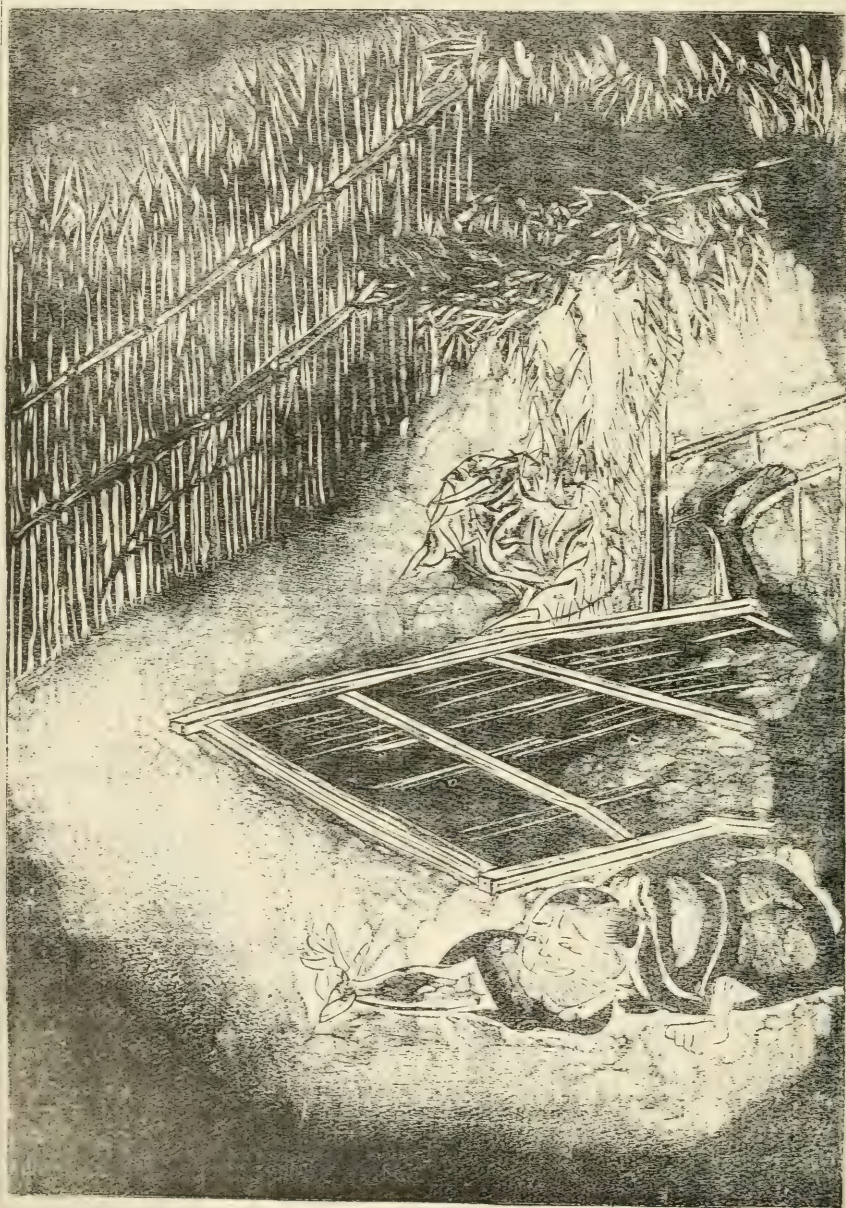
扨十八日宵の中また／＼出入のもの三人噺しに來りけるが初夜すぎにもなれば先夜にこりてや各戻込して噺しも自然と絶間がちになりけり折から三人の背中を一度にはたとたゝくものあり三人とも驚き見れば臺所口より曲りがねの様なる手のいく處ともなくぎく／＼と折て電の如き手をのべちゞめしければ三人は一度にわつと云ながら駈出し臺所へは出る事も叶はすとて奥の庭に飛をり路次口を引明て歸りける平太郎は跡を片付寢所へ入けるが彼曲りかねの如き手座敷中をぎくしやくとして動き居しが夫をも搆はずして寢入しがふと目を覺し見れば彼手とは事かはり天井一めんの大きなる老婆の貌出てやがて長き舌を出し蟵をつらぬきて平太郎か胸より顔をねぶりまはし其ぶ氣味なる事云計りなしされども猶かまはず其儘打捨置けるに其中夜もしら／＼と明わたるにしたがひ老婆も消失て鳥の渡る頃は夢のさめし如くにぞ覺えける平太郎は夜中の勞にて其まゝ休みけるが

十九日の晝四ツ時ごろ門をたゝく音に漸く目を覺し起出て門を開き見れば向井次郎左衞門と云者なり今日は外へ參るとて此所を通るに早日もたけ候に門口しまり有故わざと起せしなりさして用事もなく候へども此頃の事故心元なくぞんじ起し候と云ければ平太郎それは段々忝し夜前はかやうかやうの次第にて夫故思はず今迄寢申候といひければ次郎左衞門も內に入り此間の樣子とくとたづね聞いかさまこれは治部右衞門の申さるゝ通り何分にも狐狸の類なるべししかし跡の餌を取し程なれば是は狐狸とは云ながら千歲をも經し曲ものなるべし十兵衞といふ穢多殊の外わなの上手にて度々手柄を致せしものなり明日にても此者を呼よせ委細申聞せ今一度跡を掛させ見るべし今日は據なき事にて外へ參り候へば明日參るべしと立歸りけり平太郎は夜前の草臥にてまた寢所へ入休みける漸く晝九つ過起出て飯等給べてける夜に入なば大かた老女の貌か曲り手の出べし今宵は透間た得て手取にせんと暮るを遲しと待居たりかくて日もくれ初夜も過き四ッ頃にもなりぬれど變りたる事もなく今宵は人も來らねど閨へも入ず彼怪の出るかと待居たりされど夜半過てもかはりたる事もなき故少し氣をたゆみし所天井次第に落かゝる平太郎は例の事よと見るに段々に落かゝりつひに天窓の上へさはれども猶しらぬ顏にて居ければあたまは天井をぬけ出また行燈も天井をぬけ出て天井の上くはしく見ゆる鼠のふん蜘の巢など夥敷或は古わら煤塵等にて眞黑なり天井は平太郎が膝の上迄落たりけれど一圓かまはず捨置たりければしばらくして天井は次第次第にあがりて遂に元の如くになりにける平太郎は天井を見るに我ぬけ出しと思ふ處に穴もなく行燈の拔出し處を見るにあともなし又ふと天上を見上たるにいつの間に出來しや大きなる蜂の巢かゝりしが見る內に次第に大きく數々になりて其中より蟹の如く淡を吹出し黃なる水を吐けるぞあやしかりけるされども猶物ともせずゆう〳〵と打ながめて居りければ是もほどなく次第に消失て元の天井となりけり扨今宵は裏に米搗臼のありけるが宵の口よりトン〳〵とつく音の聞えければ平太郎思ひつき試みにしらけざる米をうすの中に入置てやがて寢所へ入ぬれど今宵はさしたる草臥もなく休みけり翌日彼臼を見れば米は

少しもしらけず本の儘にてありしとなり

踏落し弶の事並大手の怪川田十兵衞難儀の事

明れば二十日向井次郎左衞門は川田十兵衞と云穢多を連來りてわなの用意を致させける此十兵衞は年は六十計りの男なり若年の頃より鐵砲獵は勿論わなも上手なりしが此踏落し弶の事は先年十兵衞大坂へ登り革の賣買場にてある獵師と出會せしに殊の外大きなる狸の皮を出せり十兵衞もしたゞ獵好ゆゑ是は殊の外大きなる狸と相見え申候いかさまにも年を經たる狸ならんと申けるに彼獵師聞て大きに笑ひ其方には似合ぬ目きゝかな是は若狸なり狸にも數種ありてかやうに大なるは全體の生れなり此類は稀なるもの也また常體の狸の外に一種人をよく訛すたぬきあり是はなか〳〵一應の事にては取得がたし其狸は至つてさとく生れ立もかやうに大きにはなし人にも山犬などにもとられぬ故自然と功を經て後にはいろ〳〵と自在を得て人をなやますなり其狸の皮は至て厚く毛はあら〳〵として毛波は宜しからず此功經たる狸を獲にはふみ落しと云弶ならでは取得がたし我等が得し踏落しは多く人の知ぬわななりと申ければ十兵衞云やういまだ其踏落しといふ仕方は存し申さずいかやうの仕方にて候哉何卒御傳へ下されたしと申ければ彼者申やう我等數年此わなを掛自然と骨を覺えしなりいかやうのさかしき狐狸にても我ふみ落しを遁るゝ事は稀なり我等若き時天滿の社夜中三社に見ゆるといふ事あり其時われ深更に及びてひそかに彼所に行て踏落しを掛置しに大猫かゝりしなり尾先は二ツに割て首より尾先まで四尺餘ある猫なり直に打殺して翌日其近所の者に見せければいづれも大きに悦び近年此猫さま〴〵の妖怪をなす天滿の沙汰も此猫の所爲ならんと申あへり惣體古き猫は狐となれ合いろ〳〵化るともいへり夫ゆゑか取得がたししかしながら此踏落しにては遁るゝ事なしと語りける十兵衞其時迄は鐵砲獵のみにて弶の事は未だ不案內にて有けるが彼獵師に申やう私在處には鐵砲獵計りにて熊猪鹿の類をとり申候狐狸多く候へども銃先を見るとかげを隱し手に入れがたし何分にも其ふみ落し仕やう御傳授下されかしとたつて所望致しければ彼獵師も據なき所望により弶の次第又掛場の見計らひのことまで委く傳授致しぬ夫より此十兵衞わなの上手

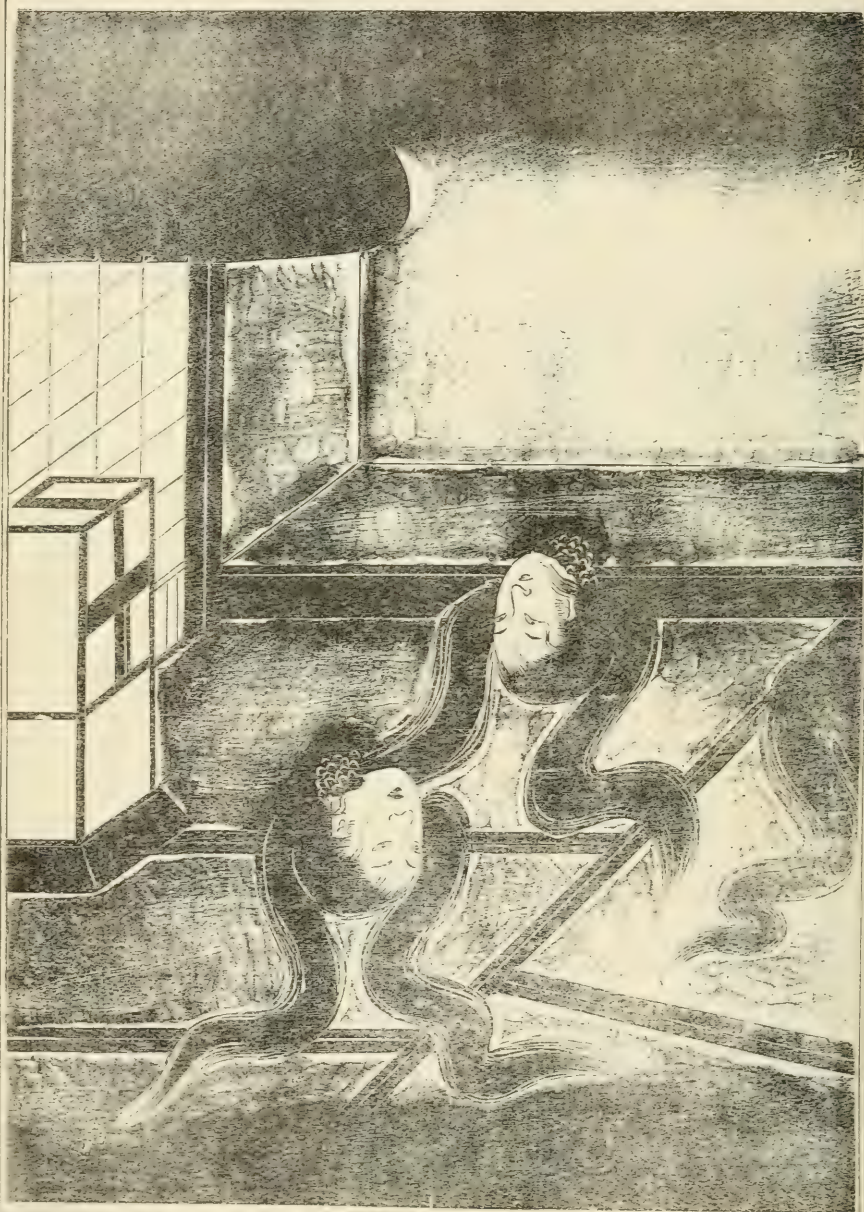
となり其上段々功者も出來て踏落しにて數々狐狸を取て世を渡りけり中にも一とせ鳳源寺といふ寺にて大般若經おのれと舞あがる事度々にて後は人も恐れ自然と參詣も稀になりし上猶怪しき事有けるを十兵衛聞及び是は必ず狐狸のわざなるべしとて其寺の裏門の外に大なる森の有けるを見立其所へ弶を掛置けるが案に違はず幾年經しとも知ぬ古狸の掛りしを鳳源寺へは知さず打殺し歸りしが其後は何の怪しき事もなく寺も繁昌せり又其後松尾藤助と云人の所に怪敷事ありける或時藤助居間にて晝寢致せしに召仕ひの者用事有てゆき見れば二人の主人臥居たり不思議にも又おそろしくてそつと次の間へ出て呼び起しければ何事なく常の通り起いでたり其後折々奥にも藤助あれば外にも藤助居るといふやうなる事にて藤助も何とやら本性亂るゝやうに見えければ一族ども打寄て祈禱御札などさま〳〵とすれども一向其しるしなく相談まち〳〵なり十兵衛此事を聞て彼天滿の社の事を思ひ出し望みて弶を掛しに彼獵師が咄にたがはず背中の毛なども拔てあら〳〵としてまだらなる誠にいく年經しともしれぬ古狸かゝりしなり其後は藤助何事もなくして家内の歡び大かたならず其外狐狸を取事に妙を得て是迄度々手がらを致せしなり扨向井次郎左衞門も此事をよく〳〵存せし故此度十兵衞を同道せしなり爰に於て十兵衞は平太郎に逢てとくと咄しを聞て申すやう御屋敷の樣子は大かた古猫か古狸の内にて候べし狐は却てかやうの事はいたさぬものにて狐は古狸古猫をつかひ脇にて見物致し居と存られ候猫も又狐の力にて色々自在を得る事面白きにやわが身の上をも忘れていろ〳〵と怪敷事をなしてつひには化あらはれて身を亡すと見え申候其時は猫計り弶へ掛り狐は脇に見物して笑ふかと存られ候世に狐ほどさかしきものはなく候それ故わなに掛りても大かたは猫狸のかゝり申にて尤はね踏にて狐をつり候へば野狐は掛り候へとも是はかやうなるわざを致す狐にはこれなく野狐にても功を經し狐は一向かゝり申さず此御屋敷にも打續きいろ〳〵の妖怪有是は樣々のもの集りて怪しき事を爲と存られ候しかしいか程集りても其内一疋とり候へば殘りはちりぢりになり其所には住ぬと見えて怪しき事忽ち止み申候此上猶數多にも成候てはいよ〳〵むづかしく候

間只今より踏落し支度仕るべしとてみちやうの場所を考へて彼の弶を仕かけ聲を立るを相圖に早速御出あれと約束を究め置さて夜に入れば十兵衛は客雪隱へ入て待居たり次郎左衛門も宵の內咄し居しが初夜も過る頃まで殊の外靜にて次郎左衛門も歸り平太郎もやすみけり扨一ト休みして只覺最早夜半過とも思ふ頃何やらん。うごめく聲の聞えけるまゝよく／＼きけば人のうなる聲にて客雪隱の方に聞えければ平太郎は早速行て見ればせつ隱の戶はちり／＼に倒れて十兵衛は正氣もなし平太郎はまづ十兵衛が顏へ水をそゝぎ正氣をつけさせければ十兵衛は夢の覺し心地にて申やう先程ぞつといたせし故彼もの來るならんと透し見ればかの踏落しの方より大きなる手を出し雪隱の戶と我と一所につかんで引出さるゝ故聲を出さんとすれども聲少も出ずその後は一向に覺え申さす是は大かた天狗か山の神にてぞ有べしさて／＼恐ろしき事に逢候とてわなも其まゝに置て怖れふるふて歸りけり平太郎はくすれし戶を片付又々寢所へ入て休みぬ

逆さ首の怪

明くれは廿一日平太郎起出て彼蹄(わな)を見るに片脇に片付て有けり誰が片付しや又夜前損ぜしと思ひし雪隱の戶少しも損じたる處もなしいよ／＼不思議に思ひ取直しつく／＼見れとも少も損せし所もなし程なく向井次郎左衛門來り夜前の次第はいかゝやと云ければ有し始末つぶさに語り聞せければ次郎左衛門肝を潰し左樣ならはなか／＼十兵衛か手にも叶ふ物にあらずとて十兵衛を呼びにやりけるに十兵衛は夜前歸りてよりつかまれし處の骨痛みて立居なり難しとて外のものを差越わなをも取しまひて歸りける其後十兵衛も病身ものと成けるとなり扨次郎左衛門も不調子にてかへりける其日は外に人も來らず夜に入ても伽人も來らず隨分靜にて最早寢所へ入らんと思ふ折から居間の隅に鼠のあけたる穴の有けるが其穴にて何か動ものありよく／＼見れば女の首ばかりなるがしかも逆さまになりて四五寸ほとのび來るなり至つて長き髮をくる／＼と圓座なとのごとくに卷て其上に首ばかり逆さまに切口と思ふ處は柘榴などの實の如く外の方へ赤くゑみ出し女と見えて齒を黑く染て囅然(にこ／＼)と笑ひなからとび來る有樣不氣味とも何とも云

計りなし平太郎もあまりに珍らしき物と思ふ故少し居直りて見居たればまた柱の根より其如く同じ様の首數々飛出て彼方此方へ飛行くなり飛しなには長き髮を尾の如くに引て毛鎗を採如くにぱら／＼と音の聞えて笑ひ／＼飛來る平太郎は寢もやらす守り居けれは次第に膝の前へ飛來る故持たる扇にて討んとすれば飛のきて飛鳥の如くなか／＼打べきやうもなしうしろよりも前よりも飛來りけるゆゑ平太郎も立上りて追廻し片隅へ追詰しとめんと思へば其儘見えすまた跡より出來れりかくするほどにいつの間にかは夜はほの／＼と明わたるにつれて首も皆彼柱の根に飛行て失ければ平太郎大きにくたびれ宵のうちと思ふ間に最早夜も明たり扨々口をしくもたぶらかされしと腹立ながら朝飯などをつかひける扨二十二日は夜前の草臥にて晝寢せしが夕方陰山正太夫來り（正太夫兄を同苗彥之助と云）ければ前夜の物語り致しければさて／＼それは不思議の事なりと恐れけるさて正太夫云やう拙者の兄方に先祖より名劔なりとて持傳へし刀有是にてたび／＼狐付その外疫病また瘧などもおちて奇特多し兄方へ御所望なされ御取寄御覽なさるまじきやとだん／＼其刀のしるしの有し事ども數々語りて歸りけり

似せ銘劔の事並平太郎危難の事

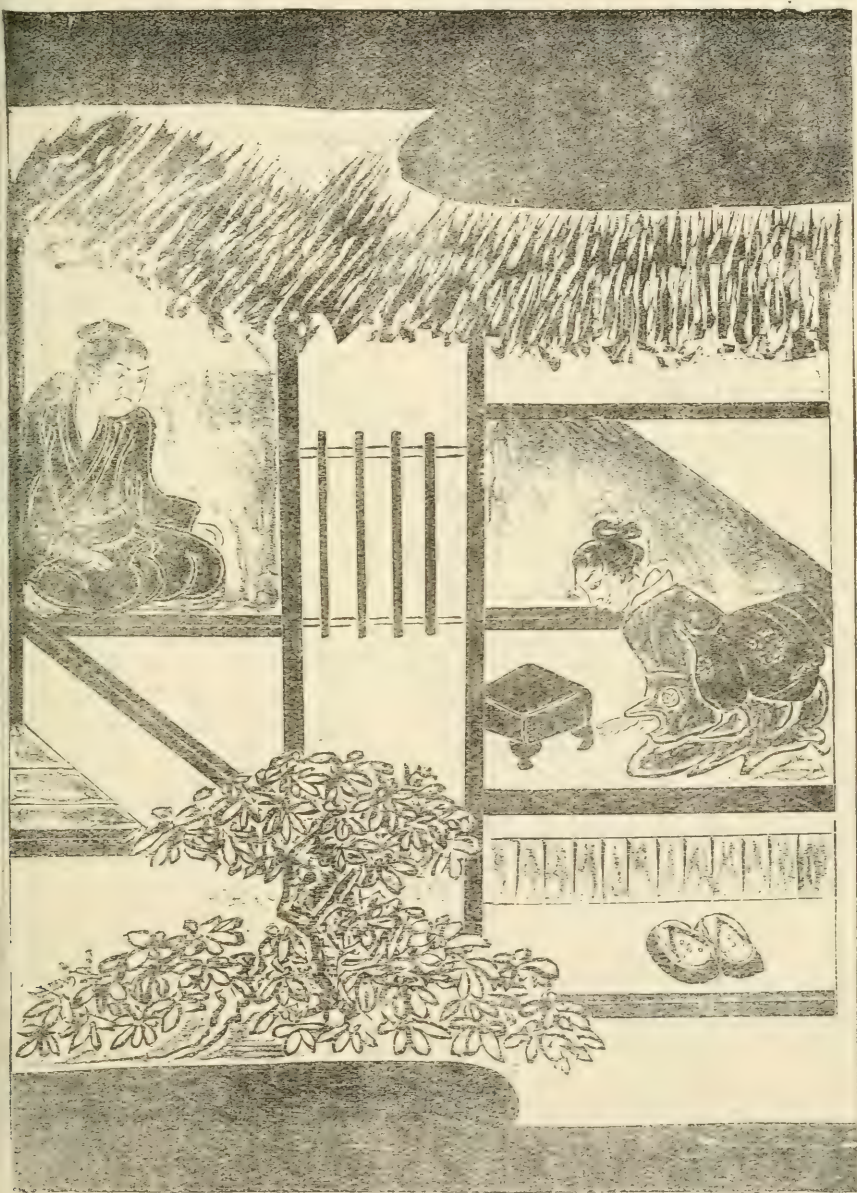
平太郎は夫より又枕引寄てうたゝ寢しけるが黃昏に及起上り湯などつかふうち最早初夜にもなりしかば今宵も夜前の首出ぬらんに誰ぞ來れかし珍らしき物見せんにと思ひ居ける折から陰山正太夫來りて晝ほど御噂いたせし兄方秘藏の刀持參致せしと申ければ平太郎いふ是は忝し承及し御刀一應にては拜見もなるまじと存候處御持參迄下され忝なき次第なりとてまづ右の刀は床の間へ上げ置一ツ二ツものがたりするうち前夜の通り彼の女の首また／＼臺所よりあらはれ出たりすはやと正太夫彼刀を箱より取出し自分の膝元へ置けれどもかの首一圓かまはす飛來るを正太夫は銘劔にて切つけしかば見事に彼首は切て眞二ツに割けるされどもかの首は二ツになりながらいよいよ正太夫を目がけ飛來る正太夫は又ふり上て切付ればさつと火花ちりて刀はほつきと二ツに折たり白さやの事ゆゑ柄木もぬけて散亂せり平太郎これはど思ひよく／＼見れば首と見えしは臺所に有し石臼な

り外の首は殘らずごつと笑ひながら柱の元へ行と見えしが消失て跡もなし正太夫はあきれ果て折れたる刀を取上げ顔色變りて言葉も出ず平太郎申けるはさて〳〵氣の氣千萬大切の御刀損せし事誠に以て申すべき様なしと挨拶しければ正太夫申けるは實は片時も早く御貸申度兄へ知らせずして持參致し候所かくの通りの仕合迚も兄へ對し存命いたし居られずと申す故平太郎も笑止限り無けれども爲へきやうもなし然しながらあやまちありては濟ずと思ひ申けるはそれは大なる御了簡ちがひなり畢竟は拙者の難義を思召て一刻も早くと御舍兄に御相談の間も遲しと右の御刀御持參下され候事全く拙者へ御懇意故なり尤も大切の御道具なれども麁相は是非もなき事どもなり其段は明朝私貴宅へ參りて拙者身に替御斷申べく候間今宵はまづ〳〵御歸りなされ候へと理をわけて申けるに正太夫自分の脇差をぬくより早く我腹へぐさと突込ける故平太郎大きに驚き是は何としたるはやまりにて候や取のぼせ亂心なとにて候やとうろたへければども一言の答もなく直に其儘脇差を咽へ突込みうしろに切先三寸計りも出ければ忽ちに息たえけり

平太郎十方にくれさて〳〵せんかたなき事なり最早曉も近く覺ゆれば夜明ては濟ぬ事とまつ血のこぼれし疊をも納戸へ引入て死骸へふとんを掛置とくと思案して見れども正太夫が切腹をみな人誠とは思ふまじ正太夫一筆の書置もなく又腹切ほどの事にてもなし意趣口論抔にて某が殺せしと疑れんも口惜しまた側に居ながら切腹を見てとゞめる事もなさずおくれしなど人に笑はれんも殘念なりもしまた上の御沙汰にて召とられていか様の責抔にあひ恥をさらさんも計り難しそれにては我も第一兄へ對し濟さる事又上の御苦勞になるも本意ならず正太夫は兄へ言譯なしとて切腹せしに我は御上の御苦勞又兄の世話になり恥をさらしてまさ〳〵しく居る抔と人口に掛らん事甚だ無念至極なり誠に是非もなき次第我も是迄の壽命ならんいで〳〵我も切腹せんと書置をしたゝめすでに脇差に手を掛しがまた〳〵思ひ直しいや〳〵切腹は只今にも限るべからず夜明なば新八へも一應譯をはなしまた思慮も有べき事なり其上是も彼の物怪にかゝりての災難なるに其物怪を見屆ぬも殘念なり何分にも夜明て遲からぬ事と思ひ柱によりかゝりて居

たりしが忽ち一ひらの陰火燃あがりしが其元より正太夫が幽靈あらはれ出たり頓て平太郎が側へ來り肩に打かゝりなどしてわけもなき恨を云ければ平太郎もこまりしが幽靈なりとも言葉をかはさば事譯云聞さんと幽靈を引よせ膝に抱き上て理を盡して解きかせ居たりし中にはや東雲の頃にもなりて鳥の聲にて引寄しと思ひし幽靈も消失夜もほの〴〵と明わたりければまづ納戸へ行ふとんを取のけ見れば何もなし餘りに不思議なれば彼刀を尋ね見るに是も同くなし血などのけは勿論なし又夢かと思へば疊二枚納戸へ引込置ぬさてはゆふべの正太夫は化物にて有しかさて〳〵口をしき事かな我もすでに切腹せんと思ひしかと書置を見ればいよ〳〵夢にてはなし扨々危きめに逢ひし事やと思へば今更心も心ならず覺えて是迄の物怪とは違ひ何とやら氣味惡くまづは夢の覺し如くなれども未だ何事も心元なく正太夫が物いひの耳に殘りて不氣味なり此時始て化物と言葉をかはし既に切腹と思ひしを又思ひ止りしは誠に神々の御加護にて有つらんと有難く殊に產土の神を拜みけると也後々迄も其時の事思ひ出せば今の樣に思はれて身の毛もよだちて恐ろしといへるも實に尤の事ども也

大盥の怪擂鉢の怪火の燃る事

さて翌二十三日餘りの不思議さに何となく陰山正太夫方へ行きければ正太夫申すやう昨日は參り何かと御咄しの趣さて〳〵不思議に存候故家内の者へも委く申聞せ候處家内ども兼て承及し事ながら猶くはしき咄しを聞いよ〳〵おそれ夜前は手水に參るにも連を求めさわぎあひ申候と云ひければさては來りしは正太夫に違ひなく夜中のもたしかに正太夫と覺ゆれど消失しうへはまさしく化物なるべし平太郎も誠に疑はしく思ひけるも無理ならずさて正太夫申けるは此頃は物怪のさわぎで外へ御出なしと承りしに今朝の御出は昨日御咄しいたしたる兄方の刀の義にても候やと申ければ平太郎夜前の事を咄さんと思ひしがあまり不思議なる事ゆゑ疑ひに逢んも益なしと思ひイヤ其儀にてもなしと何となく挨拶してぞ歸りける扨夕かたまで何事もなく靜なり七ッ時前と思ふ頃平野屋市右衞門と云もの來り咄し居けるは此頃は刀脇ざし其外小刀庖丁の類一切の刀物飛行して荒ければ小きあき櫃の有ける故自分の大小其外一切の刀もの

を入て蓋の締りをよく致しおきしに來る人あれば大小共に早速右の櫃へ入させ置なり夜前はすこし油斷せし故に大難儀に及びしなれば今日は晝の内よりも一切刄物は彼の櫃へ入れ置けるさて程なく夜にも入しかば松浦市太夫陰山彦之助來り又忠六といふ出入の者も咄に來りける平太郎心付何れも刀を櫃に御入候へと申ける市太夫は其儘直に入けれとも彦之助は承知と返事計りにて少し咄して後次の間に置し刀を櫃へ入んと見ればはや鞘計り有て刀の身はいづくへ行しや見えず何れも氣味惡く色々と尋けれども更に見えずいづくにありて怪我なとせんも計り難し此所よ彼處よと詮議すれども曾て見えす何も尋ねあくみて暫く煙草抔のむ中に何かはしらす臺所にてすさまじき事雷の落し如く響き渡りてごろり／＼と轉びくる平野屋市右衛門は肝を消し何の挨拶もなく庭へ飛びをり逃出しぬ其外の人々も氣味惡くや有けん駈出度氣色なれどたがひに恥合て逃られもせず暫し見合すうち臺所をごろり／＼と轉び廻り座敷の方へ轉び來るを能々見れば大だらひ也平太郎もをかしく湯殿に有しがいつの間に來りしにやとて轉ひ來るたらひをやがて湯殿へ持行けるが又も臺所の方に物音あり此度は何やらんと見れば擂鉢すりこ木おのれといですり廻り／＼座敷の内を歩行きける平太郎打笑ひ是はめつらしく實におかしき所爲也さりながら今宵は何とやらん騷しき宵也まだいかやうの事あるべきも計り難しと云ければ忠六しきりに氣味惡くや有けん市太夫をすゝめて同道にて歸りければ彦之助は只一人刀の見えざれば是非なく跡に殘り刀の有所を又あちこちと尋ねける平太郎も氣の毒故いろ／＼と尋ねけれとも更に見えず夜半すぎにも成ければ彦之助申すやう刀見えざれば夜明ては歸り難し我等は夜の明ぬうちに歸り明朝來りて又たづぬべしと申ければ平太郎もいかさま左樣が宜しからんとて暇乞して彦之助は中戸口を明れば鴨居の上より彼の刀の身鼻の先へふらりと下りけれは彦之助仰天して其儘敷居へすくみければ平太郎もをかしく思ひやがて飛をり刀の身を取て鞘にをさめ遣はしければ彦之助立上り大小さして戸口を出んとする時天井にて大音聲にてどつと笑ひける彦之助其聲にまた仰天なして下にすくみけるを平太郎引立て外へ出して跡の戸をさしけれは

彦之助は一もくさんに歸りける其後は猶さら小刀一本をも彼の櫃に納て錠を〆置けるしかし入用の節ごとに出し入れするには甚だ不自由にて困りけるよし去ながら外々に錠前有所の內よりさま〴〵のもの飛出けれども此櫃にいれ置し物は出ざるも不思議なり其夜彦之助歸りし後は靜にてさしての事もなし明れば廿四日の朝また〳〵平野屋市右衛門來りける故彦前は何とて迯かへりしやと尋ければ何か臺處へ落しがごろ〳〵と鳴出し轉び來る其音のあまり氣味わるさ覺えず迯出し途中にて漸く夢のさめし如くに有しといふに平太郎も笑ひける市右衛門申すやう其後はいかやうの事有しにや彼の轉び來りしは何にて候へしやと尋ける故湯殿に入置したらひにて有しなりと噺しければ市右衛門云私はすさまじき大太皷が轉び來るとおもひしがぞつとして覺えす迯出し候とて笑ひけるをりから三つ井權八來り芝甚左衛門も來り噺しをきゝて甚左衛門申すやう南部治部大夫は鳴弦の傳を請て奇特あるよし聞傳へぬ此仁を同道致し鳴弦を賴み進ずべしと申ければ平太郎それは忝く候へども西江寺の祈禱も驗しなく左樣の事にて恐るゝ物怪とは存られず候と申ければ甚左衛門左やうには候へども鳴弦は不思議の奇特の有由常々承り及びしなり病人にもさま〴〵藥を替て見ればまた合藥もあるものなりなどゝ勸めける故左樣思召候はゞ兎角宜しく賴み入よし云ければ甚左衛門さらば明晩同道致すべしと約束すれば權八もなるほど鳴弦は奇特ある物とうけ玉はり候一段然るべしとて打連かへりける扨其日も何事もなかりしが夕方に相なり中村平左衛門が家よりの使とてうつく敷女來りて餅菓子を贈りけるが其女誠に美麗にして嬋娟とたをやかに花に妬れ月に猜るゝ百の媚ある姿此邊には覺えもあらぬさまなれば平太郎も大に感じ恍惚としてながめ居しがふと心づきて油斷せず一つ二つはなして頓て歸る故送り出て見れば門に出るといづちへ行しや消失けり後に聞は中村が家にて餅菓子を入たる重箱一ツうせたりしは此物怪のわざにて平太郎方へ持參せしなり是にも限らず陰山正太夫に化し後はやゝもすれば平太郎が馴染の人などに化て來りしには困りぬこぞ其內初夜にもなりしが今宵は誰も來たらず至て靜なり平太郎は此程腹合惡く度々用場へ通ひけれ共此頃の流行

にて當分の事なれば打捨置けるさて今宵は靜にて休みけるが宵より二三度も厠へ通ひ其のち一ト休みして目さめまた〳〵厠へ行けるに臺所のかたころ〳〵と火のもゆる音のきこえくわつとあかるくなりしゆゑ是は出火なるかとうろたへ厠を出て見れば竈の内より火燃出かまどの前の板敷の所より床の下までもえ込たり平太郎大きに驚きやがて板じき引上け瓶の水をさぶと掛ればかけるより早く消て暗の如くになりけり是は又例のにて有しに大に驚きたりとて火を灯て見れば板敷は何事もなく竈の内へ水打込ければ灰は流れ出てなか〳〵急に箒除もならす下地不快のうへなれば平太郎もやかましく腹立（ヤカマシクトハ面倒ナリト云備後ノ方言ナリ）其儘うち捨置て休みけり

鳴弦の事並鏑の飛來る怪

明れは二十五日平太郎起出て見れは臺處中は灰になり竈の中には水溜り居たり漸に掃除などして其邊を片付とかくする内に權八來りければ夜中の事を咄し彼火を其儘に打捨おかざる事の口惜さよと申ければ權八申すやういや〳〵此後とても其樣なる事は隨分苦しからずもし誠の出火の時捨置なば後の悔百倍なるべしと申けるも斷なり扨南部氏御出あらは御知せくださるべしとて權八は歸りける其日もほどなく入相近くなりしかば芝甚左衞門南部治部大夫同道にて來り弓矢を持參して夜に入なば鳴弦を行はんと先彼弓矢をば床の間に置しばし休息する中に權八も來り四方山の噺になり權八申すやう鳴弦にて狐付を落し候節狐の形顯れ候にや治部大夫申すやう形のあらはるゝ事はなく候へとも付たる狐の落る計りなり其落る時は其入かけ出し倒れるなり狐狸などは其近所に居申すべきなれども其座にて形あらはれ候事は是なしと申ける扨程なく夜にも入しかば弓取出しなにかと祓ひ淸め拵へしける甚左衞門は權八に申すやう表か裏へ何ぞ形のあらはれ候事も有べし汝は我か宅へ行て居間に掛け置し枕槍を取來り表へ廻り相待べし某は裏の方へ心をつけてもし何にても形あらはれなば目にもの見せんと思ふなり必々ぬかる事なかれと申付ければ承知致し候とて權八は甚左衞門が宅へ急ぎける去程に夜ははや初更過る頃治部大夫は垢離を取り床の弓を手に取と見えしが何かはしらず外の方

より長き物時わたりて飛來り甚左衛門が鬢先をかすり彼弓の弦を突切て其所へぐわらりと落たり治部大夫大に驚き弓を取落しぬ甚左衛門はのがさじと飛かかり彼長き物を既に切んとせしが能々見れば槍なり是はと云處へ權八駈來り甚左衛門さまの御の通夜與槍を取來り表へ廻り何にても目にさへ見ゆるものならばと存じ外をめぐりしに家根の上に大なる坊主の如きもの立居たりと心得たりと立寄候處彼もの家根よりひらりと飛下りたり所をすかさず表圍ひの壁へ突付候處其形は見えず是はとぞんじ拔とらんとすれば穗先に人有て引如くなればこゝぞと思ひ力足を踏て力を盡して引けれども怪の力のすさまじさ只一ト引に壁の中へ引取られ候と申ければ人々も肝を消しなかなか人力の及ふ處にあらずと手持なくぞ見えにける平太郎は見物して居たりしが大かたかやうの事と兼て存し候兎角此物怪は捨置て心の儘に働かすかよく候間鳴弦も先是迄にて打捨置給へと申ければ人々も夫をしほにして歸らんとせし時天井の上にてぐつぐつと笑ふやうに聞えければいづれも彌氣味わるく早々に立かへりぬ權八も弓と槍とを持て送り歸りける扨其後は靜にて平太郎一ト休みして程なく夜はしら〳〵と明れば廿六日平太郎今日心ざす日にて早朝に墓參りして歸りしなに權八が方へ立寄ければ權八も起出て夜前の噺など致しけるが兎角熱氣も強く成ける樣に覺え候と申ける故何分取しめ驗と養生致し然るべしと勸かへりける惜べし此權八はさしも三つ井と名乘て名高かりし相撲なりしが此怪異の氣にやうたれけん平太郎宅の家鳴震動の節は心に掛り口惜く思ふ度々には熱出てつひに大病人となりのち〳〵次第に熱氣強くなり九月初旬に相果けり未だ四十にたらぬ大の男力あく迄强かりしか邪氣を請ながらも當分の事と押付置たりしゆゑにや氣丈却て身を亡しけることこそむざんなれ

稻生物怪錄卷之四

目錄

稻生物怪錄卷之四

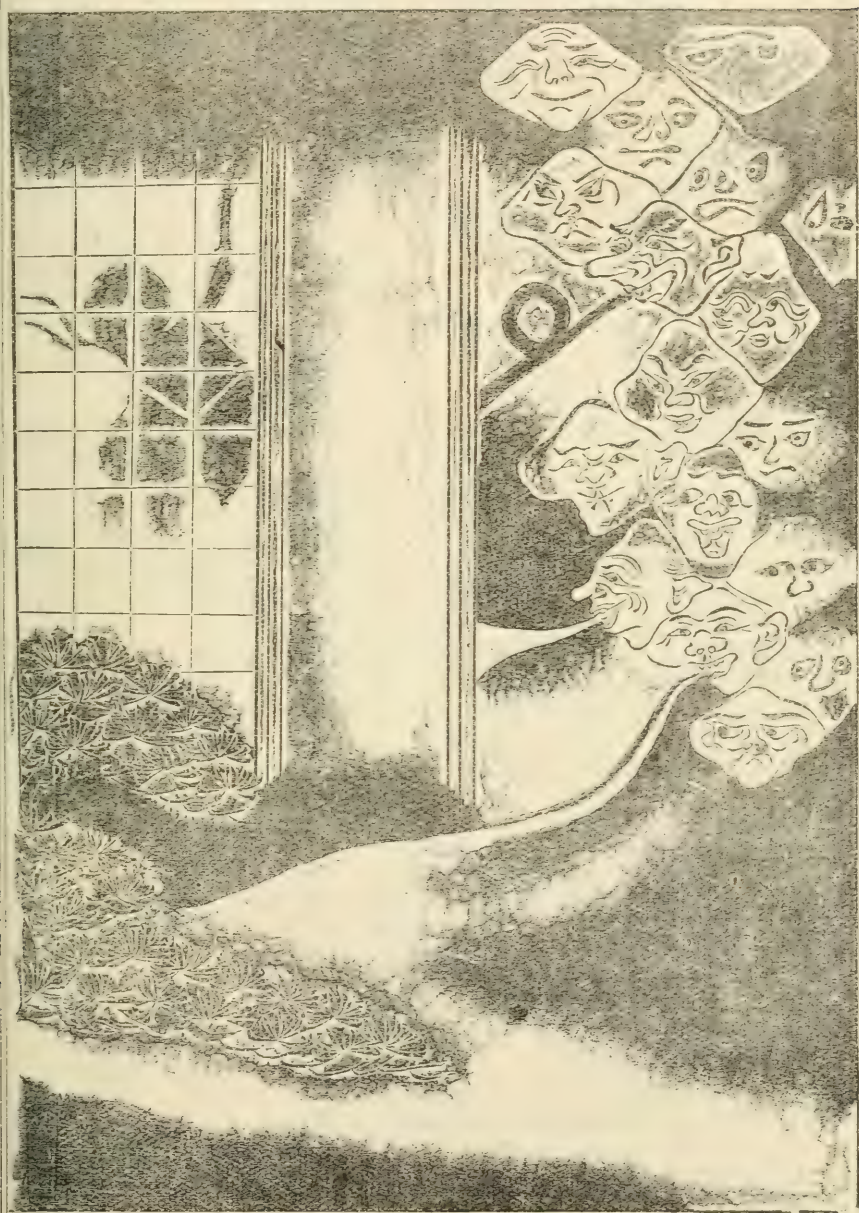
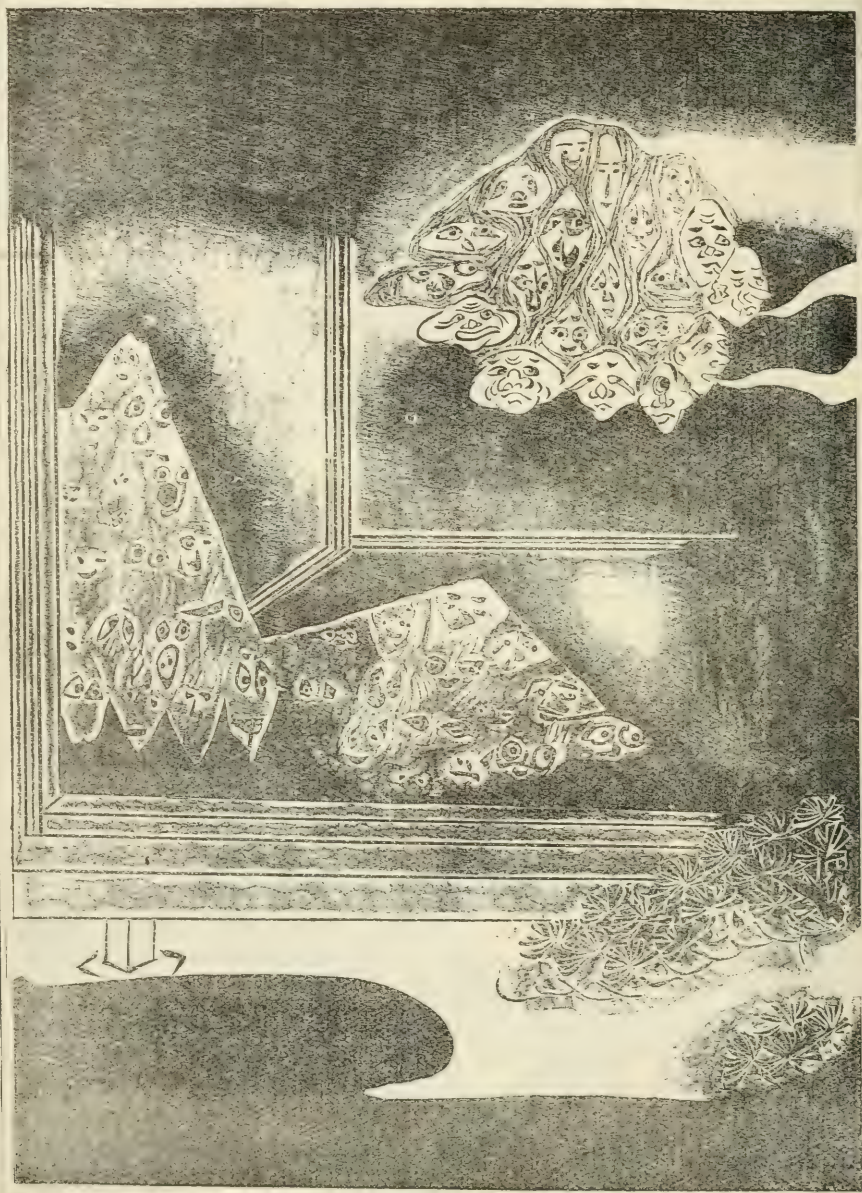
眞木善六が力の事並柿の怪

扨また平太郞宿に歸りほどなく南部角之進陰山正太夫來りていかゞやと尋ねし彼夜前の咄し抔致し何事ありとも驚く事なく張合さへいたさねばさしての事はなしと申しければ正太夫申すやういかさま只今までいづれも變化退治と云氣持有ゆゑいろ／＼の事有て騷動すると存られ候今宵は申合せ伽と思はずたゞ咄しに參るべし夜伽根性だめし抔とて參る故珍事をも引出す事なれば今晩は其心得にて參るべしと申せば角之進も然るべしとて立歸りぬかくて其日も何も格別の事もなく暮時に至りければ彼兩人眞木善六といふ者を同道にて來り咄しけるが何事もなく靜なり今宵は廿六夜ゆゑ月の出を拜まんと何方も夜を寢ざる宵なれば何となく世間も賑々敷三人も月の出るまで噺さんと打集り語り合ぬさて角之進宿に霜かづきと云柿ありて霜月になれば風味もよろしききざはしなり九月十月までも澁のぬけざる故霜かづきと名付し尤霜月には霜の降たる如く上白くなれば味ひも甚

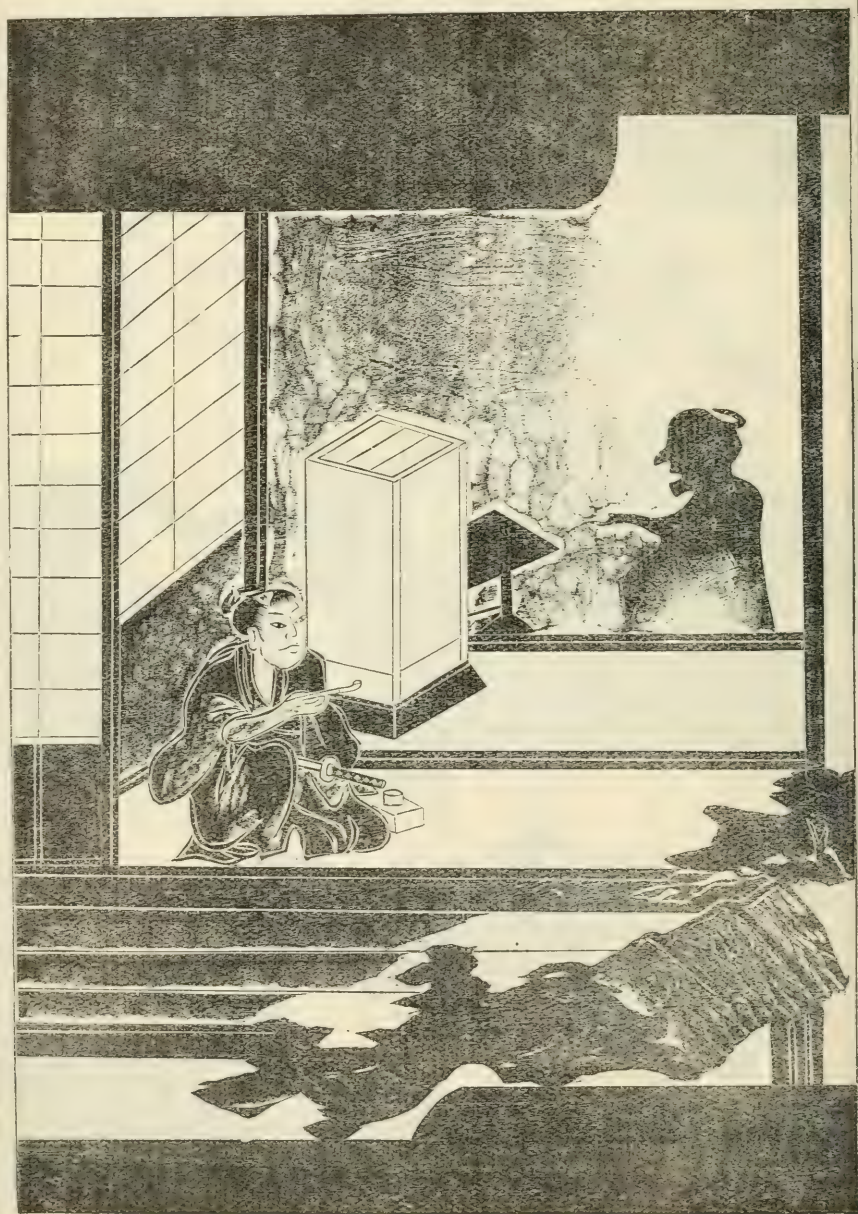
だ美なり此の柿此の頃は却て澁もなく風味は宜しからねど隨分と喰るゝ也八月中旬よりは又澁かへるなり角之進此の柿を持參して眠りさましにせんとて宵の內取出しければ是は珍らし後刻の樂みと器に入て片脇に置しに後夜すきていざや彼霜かづきどのを賞翫せんと器を取出し見ればいつの間にかこと〴〵く種計りになりて柿は一ッもなし誰が喰しにやと思へど宵よりいづれも差向ひ咄しける事故喰ふべきやうはなし是は必化殿の給られしならんとて手持なく咄し居たりし處にしばし有て臺所にて又大雷の落たるやうの音がしければ人々も驚きながら兼て聞及しことゆゑ爰ぞと思ひ知らぬ顏して居たりけり平太郎は手燭をともし行て見れば搗臼なりこの臼は先年大風の吹し時近所の大木吹倒れしを取て造り置し臼なり大木にて造りし故並のうすよりは餘ほど大きなり此臼うらの物置部屋に入置しをいかゞして出しけんと皆々驚きしなり平太郎云是は狹き所に有て甚迷惑なりと申ければ眞木善六立よりて裏へ片付置べしとてうらの口を明て彼大臼を竪にとり何の苦もなく差揚て投出しけり此善六は兼て力有と聞しかどかゝる事をば初めて見ければ先刻の音よりもなほ肝を消しぬかやうの節には一しほ力はたのもしきものなり南部陰山も眞木が勇氣に力を得て疊の揚るなどの事は見もやらずさあらぬ體にてゆる〳〵咄し居たり最早八ッ過にも成し頃天井めき〳〵と鳴出し種ばかりになりし柿の又元の儘のかきにて天井よりばら〳〵と落て四人が打寄噺す中を轉び廻りけるを平太郎やがて取て乃物はまたやかましとて其儘に押わりしに中の種はこと〴〵く色々の蟲となりて迯さりけるを種は何になりともなれ此方は種に用なしと云つゝ喰たり善六もいかさま拙者も一ッたべ眠りを覺さんとて取てくひしが是も種は皆蜘又油蟲となりて逼去けり扨落し柿はこと〴〵く元の器に轉び入ぬそれよりまた一しきり落し咄又飩相ばなし等にて興を催すうちに寺々の鐘も鳴もはや月の出にやとて平太郎もともに月の出を拜しなどかれこれするうちもはやしのゝめも近しと皆々打つれて歸りける今迄は幾人か伽に來りしが皆辟易して夜半にも及ばざるに迯歸りけるが今宵は不思議のことをもさして驚かず曉までも居たりしは眞木が力に人々も氣を取直し夜もすがら咄し

明せしなり有難きものは力なり平太郎もよき伽にて面白かりしとて跡を片づけ今暫くとて閨に入て翌日しばらく休みぬ明ればニ十七日の朝四ッ時頃起出て夜前善六が臼を投出せし處を見れば臼はなく其所の土は臼なりに深く窪みて有けり不思議におもひ物置部屋に行て見れば臼は其儘元の通りにて臼の角に土付たりしかば正しく夜中物怪の持出せしに違ひなし去ながら又もとの所へ戻し置また柿などをも返せしは律義なる仕方也鬼神に横道なしとはかゝる事にや

網貌の怪葛籠の怪

今日は終日さして變りたる事もなく暮方陰山金左衛門來り前夜の咄を聞善六が力は聞及しよりまさりしなり其外の人も眞木が勇氣にひかれながらもよく終夜居られしぞなに事ありてもしらぬ顔にて爭ふ心なき時は物怪も張合がぬけ又此方にも少々の不思議は手妻などを見る氣になりて居れば却て不思議もなかるべし今宵は拙者しばらく咄し申さんとて四ッ前頃迄はなす平太郎は殊の外ねむく咄しながら眠りけるに金左衛門ふと次の間を見れば臺處の方に何か煙りの如くもや〳〵と動くものあり金左衛門も今宵は覺悟の事なればしらぬ顔して居たりしがはや次の間へ來るをよく〳〵見ければ人間の貌の樣には見えながら數多にて網の目の如き貌にして竪菱に長きもあれば横菱にひらたきも有て其貌段々並び重なりて竪になり横になり甚目紛はしく出來れば金左衛門今はたまらず平太郎をうろたへ呼起す平太郎目をさまし見れば金左衛門が顔は青菜の如くにして奥の方へと這こみぬ平太郎は彼あみ貌をよく〳〵見れば日外の輪違ひよりもいま一しほ不氣味なる貌にて竪になる時は口をひらき横になる時は口を閉息を吹やうに見えければ陰山はたまりかねてや彼櫃へ入置し刀をとり出し拔はなし切拂へども手答もなくたゞ煙りを切るが如くにして一時にどつと笑ふ聲に驚き庭へ飛び下お暇申すと云ひ捨て立歸りぬ平太郎は跡の戸を〆網がほをつく〴〵見るに子供遊びに朱欒をせんじ茶に入れて吹が如く貌の上へは貌重りて竪菱横菱になりて消てはあらはれ後には間ごと殘らず貌に成ければ前後左右何方ももや〳〵として其うるさき事云計りなし平太郎も近よる顔をとらへんとすれども只空をつかむにことならず平太郎思ふやう是にたぶらかさ

れてまた夜を明さんも計りかたしとやがて蚊屋に入ていつ消しとも知ず休みけるが何やらん物音する故目を覺しければ大きなる物歩行來るを見れば蝦蟇出て蚊屋の廻りを飛あるきやがて蚊屋の中へ入來れりよく〳〵見れば彼かえるの胴に紐ひもの結ひてありし故平太郎も是は葛籠の化し物よと心づき其儘かの紐をしかととらへてはなさす臥けるが夜明て後見ればふしたる腹の上につゞらを乘てひもをとらへて有けるとぞ明れば二十八日佳日なれども頃日の事故兄かたへも行すして外へも出ねば退屈のまゝ晝寢がちに暮しぬ晝の內は是ぞと云ほどの怪き事もなく今日もすでに暮かゝり湯などつかひ椽先に出て漸く暑氣を忘れ居たり

講釋の怪踏石の怪並天井より大手の出し事

其日もくれて茶抔せんじゆる〳〵と夜食などもしまひ最はや初夜もすきぬれど今宵は誰も來らず靜にて蚊屋の內へ灯を入れて通俗本を取出し讀かゝりしに覺えず座敷を見れば壁に人のかげあり〳〵と鮮にうつりけるが見臺を前に置つゝ高らかに書物をよみけり何をよむにや言葉の譯も詳ならざる故よく〳〵耳を止めて聞ば平太郎が今取出して讀たりし本を講じけるなりおかしく怪しき事ながらよき伽ぞと思たりされどもとかくに聞分かたく有しが程なく消失けりその內夜半にもなりしかばいざやすまんと思ひ便所に行はやさて蚊屋を出て平日は居間の便處へ行けるが今宵は不計奧の椽へ出て涼みかた〳〵路次へをりんと踏石の上に例の下駄あるべしと思ひ何心なく踏石へをり立しにその冷氣事氷をふむやうにてしかもやはらか成ければ不思議に思ひ椽へ上らんとすれどもねばりねばりとして足揚りがたく鳥もちをふみ付たるが如し下を見ればおぼろ〳〵と白けて見ゆるをよく〳〵見れば人の腹の上へあがりたると見えてやはらかにてつめたし死人をふみ付たると覺ゆれば踏ながらとくと見るに手足は至て短く貌と覺しき方何かぱち〳〵とちひさき音の聞えけるゆゑのぞきて見れば目を動し瞬をする音なりかつぼ蟲などの飛やうなる音絶間なくぱち〳〵と聞えける平太郎は足の裏ねば〳〵として泥の中へふみこむやうなれば椽へ手をかけ這ふやうにして漸く椽側へ上りしが足のうら椽側へにちや〳〵と付て急に歩行がたく居間へ歸り

て足を見れば何も付たりとも見えずさて手燭を灯し彼の踏石を見れば下駄のみありて何もなし只ぱちぱちなる音は其儘聞えける足の裏のねばるも止みければ是も捨置がよしと思ひ居間の厠へ行しに何の變りたる事もなし夫より蚊やへ入休みしに夜もすがらぱち〳〵と鳴音耳に入て休みかねけるが其後は變たる事もなく鷄明（あかつき）に及て漸と一ト寢入をしたりけり明れば二十九日何事もなく晝飯も仕廻て後に中村平左衛門來りしばらく咄すうち夜前は何事もなしやと尋ける故前夜の話をきかせ殊に踏石の怪の物語に及び是迄色々珍らしきことと不氣味なる事數々有しが足のうらにちや〳〵と付たるには大きに困りしなり又目のぱち〳〵が耳に付て寢られざりしと語りければ平左衛門それはいかやうの貌にて有しやと尋ければ闇の夜ゆゑしかと見え分らす只目のぱち〳〵動くやうには見えしと申けるを平左衛門まづおほよそ誰に似たるぞと返す〳〵尋ける時誰かはしらず平左衛門が背中をたゝくもの有平左衛門ふり返り見れば其たたきたる手と見えて天井の隅に手計りぶらりとさがりてしづ〳〵と天井へ引込けるを平左衛門は見るよりわつといふてうつむき二度と見もやらす平太郎は此人もし氣絶をもせしやと引起しければ平左衛門漸く起上り御暇申さんと立を見れば元結ばらりと解たり平太郎云其亂髪にては歸られましといふを聞入ず早々に歸たり今迄晝の內道具の飛などは度々有しかど怪き形のあらはれしは今日が初なり平太郎は跡にて居間の方を見ればまだ七ッ頃なるに眞くらになりて恰もしんのやみの夜の如し是はいかなる事をするならんと見るうちに又次第々々にあかるくなり又暗くなり後にはひたもの打かはりて目くるめくほどなりしが後には段々と止みて元の如くに成にけり此趣ならは晝夜のわかちなく色々の事有べしいかさま天井に何ぞ住居して有かと思はる隨分と捨置いよ〳〵正體をあらはし油斷するを待て本意を遂せんと少し樂みに思ひけるよし不敵なる魂なり

炭部屋老女の怪並種々の怪異の事

かくて其日もほどなく暮て最早四ッ時にも成しかば風爐の內へ火を留置て休まんと思ひ炭取を見れば折節炭なき故うらの物置小屋より炭を出し來らんとて炭箱（すみとり）を提て物置へ行て見れば物置の戶口一ぱいなる

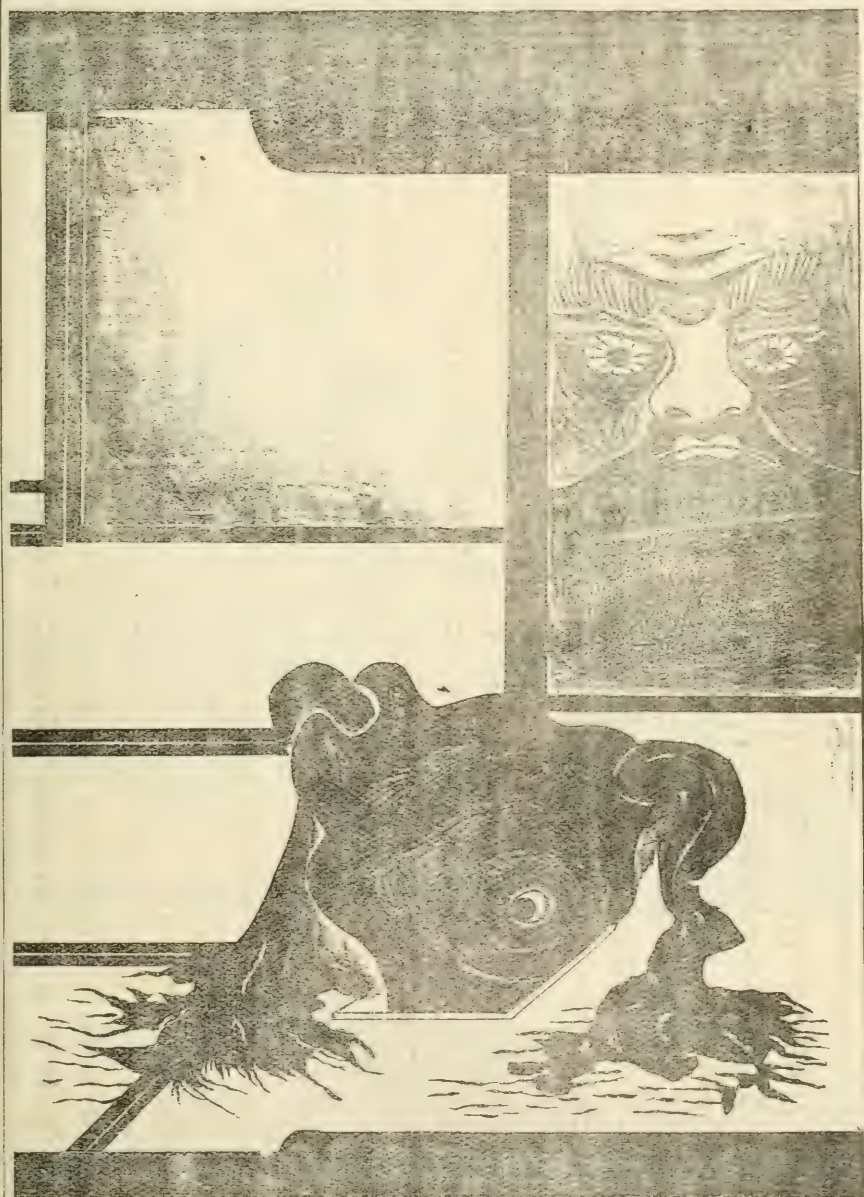
大きなる老婆の貌出て戸口ふさがりて入べき樣なし平太郎思ふやうこれまた品を替しと思ひ大かた行からば例の如く消失ぬべしと行て見れども其顏さらに動かされば入事も叶はず目鼻ぎろ〳〵として今物を云かと見ゆ平太郎炭取の火箸を取て貌へ突立見るにやはらかにしてぶつ〳〵とたちぬされども其首一ゑん退かず何とやらねば〳〵したる樣なれば平太郎も前夜の死人にこりて是も打捨置たるがよしと思ひ火箸をば兩眼の間へ突立て歸りて椽側へあがりて見れば座敷中いづこものりなどをぬりたる如く眞白になりてねば〳〵ねばりつきければ是も前夜にこりて寢處の設もなく心もこゝろならず居間なる柱によりかゝりてうと〳〵眠り居たりしが兎角今夜はいつもよりも家鳴も強くして天井にては婦人の啼聲など聞えしかも大勢にて譯は知ねども口々に物云やうの聲きこえしかば夜もすがら寢られず殊更暑氣強く折々は風吹き來れどもあたゝかなる風にてよもすがらまどろむ事あたはずたま〳〵眠り就は疊と共に上りては落されて曉迄騷動しけるが漸く明方しづかになりしかば草臥て寢入て翌日四ッすぎ迄寢すごしけり扨漸く目さめて昨夜の婆々の首のいかゞ成しやと物置へ行て見れば不思議なる哉彼婆々の貌の目鼻の間へさし置し火箸その儘戸口の眞中にちうに糸にてつるしたる如く見えたり行てとくと見るに何へ立しとも見えず只ちうに有けり是は不思議と思ひ手を出して其火箸を取んとする時ぐわりと落けるはつと思ひとりあげて見れども火ばしに何の替りたる事なし平太郎炭を出し來り茶などせんじ今日はいかなる事か有らんとたとへいかなる事ありとも性根だに見あらはさば仕方あるべしなど思居たるに何やらん心地あしき風吹わたり星の光りの如きものかづ〳〵ちらめき出しが後は螢のみだれ飛ごとくに見えて何となくあはれに物寂しく心細く覺えしが何々是しきの事めづらしからずとすこしも屈せぬはじつに勇氣なる男なり

物怪の主長山本五郎左衛門が事

扨平太郎つく〴〵數ふるに物怪は此月朔日の夜始めて出たりしが最早一ケ月に及び今日は晦日なりいつ迄か此妖怪の出るならん扨々氣の長き物怪かないでいで我も氣長く思ひ彼奴が油斷を見て仕留くれんと

種々長き心組をぞしたりける折ふし俄に曇り來り白雨篠を突が如く風いと烈しくうらの椽側へ横雨ふり込障子などぬれければ押入の戸をはづし立かけ置て雨を防ぎけるが雨につきて家鳴も强くするに付て平太郎又もや思ふやういつ迄か化物の守をする事ならん去ながら二三日の様子を見るに晝も色々の形見ゆるは物怪も最早油斷の體なれば正體だに見つけなば程を見て働かばやとは思へども刄物なくては叶ふべからず何分にも脇差は腰を放すまじと彼箱より取出しこしにさし食事をするにも片手は脇差をはなさぬ樣にして寸の間も油斷せず今日は終日人も來らずさて日のくれより雨も止殊に晴渡りたる空となり星明らかになりければかの立置し戸などを取入かた付る内最はや初夜すぎ四ツ頃かとも覺えぬれば雨にぬれし板樣かわきしにやと障子を明て見ければいまだじめ〳〵としければまた障子引立て入けるが下にもすはらぬうち跡の障子ぐわらりと明ける故ふり返り見れば大きなる手を出し平太郎をとらへんとす平太郎爰ぞと思ひぬき打に切付ければ彼手を早く引て跡の障子をはたと立たり平太郎續いて出んとするに障子の外よりそれへ參らんまづ待れよと云聲の聞えてしかも其聲あとをはねるやうにて大音なり平太郎思ふには是は面白し出てものいふを唯一ト打と思案しひかへ居ければ暫して障子をさらりと明て背の高きこと鴨居よりは一尺ばかり上なり至極肥りて四角四面の大の男ゆう〳〵と出來るをつく〴〵見れば年の頃四十ばかりにて甚人品能花色の帷子に淺黄の上下を着し腰に兩刀をさしてしづかに歩行て平太郎が向ふ座へ居りけるを平太郎こゝぞと思ひ立上り脇ざし引ぬき無二無三に切んとす彼男はすはりしまゝにて綱をつけうしろより引が如くに壁の中へ入影の如くに見えけるが此もの笑ひながら云やう左やうにあせりても其方の手に討るゝ我にはあらずいひ聞すべき事の有て來れるなり刄物を納め心をしづめられよと云ければ此趣にてはなか〳〵仕とめがたし油斷を見すきをうかゞひ討とめくれんと思ひまづ何をいふか聞べしと脇差を鞘に納め居直れば其時また壁のうちより居りしまゝにてうしろより押出す如くに出てさて汝は氣の強きものなりと云けるゆゑ其方は何者ぞと尋ければわれは山本五郎左衞門と云者なりさん

もとゝはやまもとゝかくべしと申ける平太郎云夫は人間の名なり其方は人間にてはよもあらじ狐なるか狸なるかと云ければ我は狐狸の如きいやしき類ひにはあらずと云狐狸の類ひにあらずは天狗か何にもせよ正體をあらはし云へと申ければ我は日本にては山本五郎左衛門といふ成程汝が云如く人間にもあらず又天狗にも非ず我は魔王の類なり我日本へ初めて渡しは源平合戰の時なりわがたぐひ日本にては神野惡五郎と云者より外にはなしと云てさて平太郎が方をじつと見て居る中に平太郎が居りし四尺計り左の方に炬燵ありしが其儘蓋をして置たりしに其ふたおのれと舞あがりて次の間へ行たり平太郎は又何事をか仕出すにやと見るうちに彼すびつの灰次第々々に舞上りて茶釜をかけし如く丸くなりしが自ら人の頭の如くになり兩方に角の如きもの出來て其のあいだとちつひらきつして煙りを吹出し其角の如く銕付とも思ふ處小く丸くなりて唐子の髮などの如し見るうちに其二つの丸きものより湯氣立てぐつ〳〵と煮上る體なれば平太郎もいかにと見るうちに次第々々に煮あがりのちにはにえこぼれ疊の上へも流れ出たりし

が其こぼれし湯のうぢ〳〵と動くゆゑ何ぞと思ひて見れば蚯蚓なりその釜の如くなる物もよく〳〵見ればみなみゝずにて煮えこぼれてはうぢ〳〵疊へ這上りはひあがり次第々々に這上るなり平太郎は元來嫌といふものは曾てなきにいかなる事にや蚯蚓を見れば氣も消る計り氣味惡く覺え草道などを行時にみゝず數々出て居る事あり其道をば通り得ぬ程のきらひ也然るに彼煮こぼれし蚯蚓次第々々に平太郎か方へ這ひ來りければ平太郎も是には大きに辟易して胸さわぎ仕出して氣をふさぐやうなりしが能々考へ見るに此所に蚯蚓の居るへきやうなし是は我嫌ひを知てかやうに目に見するものならん何程の事かあらんと覺悟して漸に氣を取直し氣を失ふ程の事はなけれど何ぶん元來大嫌ひの事なれば大にこまりけるが次第次第這來り膝の上肩の廻り迄はひ上りけれどもけつくはらひのくるも不氣味にて氣を取失はぬを取得にしてこたえ居り凡一時計りも其通りなりしが又次第次第に元の如く這ひかへりければ炬燵のふたもまた舞ひ來りてもとの通りになりければすこし心も落付たりしにかの大の男はから〳〵と笑其聲に心付てこ

れを見れば扇をつかひながら云やうさても汝は氣丈なるものなりさりながらなんじ氣丈故に今迄難義せしぞかし汝は當年難に逢ふ月日來れり是は十六歳にもかぎらず大千世界すべて人によりて有事なり其人を驚かし恐れさせて行を我業とするなりこれ我私の所爲にあらずと云を平太郎聞居たる向の壁にさも大きなる顔あらはれてはつたと白眼ければ是をつくづくと見るに目はとんぼうの目の如く飛出て青光に見えけるがしばらくして是も消失けり

五郎左衛門平太郎に槌を讓る事并物怪歸去の事

時に又山本五郎左衛門申すやう我汝に比熊山にて行あひたれどもおしつけ汝が難に逢月日をまち驚かさんと思其月日に驚かしたれども恐れざる故思はず日數を送り此方の業の妨となれり但外より聞求めて來る人あれども是はその難の來れる人にあらずゆゑに打捨置なり去ながらしひ求めて出あふ人は自ら難を招く道理なりつひに其身の仇となるなり是等は我爲處にあらずみづから難を求るなり我は是より九州へ下り島々へ渡る故これより直に出立すれば此後何の怪事も有るまじ汝最早難も終りたれば神野惡五郎も來るまじと云ながら一つの手槌を取出しされば此槌を其許に讓る間汝一生常に持べしもし此後怪敷事あらば北に向ひて早く山本五郎左衛門來れと申て此槌を以て柱を強く叩くべし其時は速に來りて汝を助くべし扨も長々の逗留忝しとて少し禮を云心持と見えて辭義をしければ平太郎も少し會釋しけり其時平太郎傍を見れば冠裝束したる氣高き人の姿腰より上の方計りあらはれて五郎左衛門が物語のいらへをせられて平太郎を守護せられし樣子なり是產土神の附添給ひし事と深く難有嬉しく思ひけり扨彼山本申やう我歸るを見送り給へとて座を立ゆゑ平太郎もいかやうにして歸るやらんと思ひ後につきて椽まで出ければ彼は庭へをりまたすこし會釋する體ゆゑ平太郎も思はずかゞむと思しが扨も口惜きことかないかで討留んと思ひ立上らんとするに大の手にて押す如くにて少しも働れず何卒脇差へ手を掛んと思へども手は椽へつき付られし如くにて叶はず是非なく其儘にて押へられて居たりしがやう〳〵と手をゆるめし如く覺えける故起上り見れば庭の內に駕と鎗長刀狹箱長柄傘駕脇の侍徒士其外小者に至るまで大勢の供廻り

庭にみち〳〵て居ならびたり扨駕は常體なれども供廻のものは皆異形にて上下袴羽織等夫々の着服にて奇怪の容貌不思議の風體にてぞ扣へたり思ひやるになか〳〵此駕に彼大の男乘事はなるまじと見る内に彼山本は片足より駕に乘に其身たゝみ込様に何の苦もなく乘けるがやがてあら〳〵と髭のはえたる大の足を駕の中より出しけり扨先供其外行列を立て左の足は庭に有ながら右の足は大手の上に有て（大手とは江戸の練塀の事也是備後の方言也）さながら烏羽繪の如細長くなるもありまたは片身おろしのやうに成て行も有て色々さま〳〵に見え廻り燈籠の影の如くにしてみな〳〵空に上り星影ながらしばしは黑黑と見えけるが雲に入よと見えしが風の吹やうの音して消失けり平太郎夢ともうつゝともわかちがたく只忙然として詠め居しがつく〴〵と按じ見るにもしや夢にてやあらんと其儘に障子を明置しき居の溝に扇を入置しるしとして内に入心をしづめて蚊屋をつり寢具をのべて休みしが晝よりの勞にて前後もしらずね入けり扨夜の明るを遲しと起出見れば敷居の樋に入置し扇子其儘にてあり庭を見れば竪横に明間なく爪にて掻し跡有彌夢にては無かりしとおもひ内へ入て何角と見合す處夜前五郎左衞門と對面せし處に正しく槌の有ければ猶々驚き取上て扨々不思議なる事と能々見れば其槌の形凡六寸位柄長サ一尺あまり柄長すぎて常の槌にあらず惣じて兩木口そぎ付切にて中高く木は何ともしれず丸木の皮を取たる儘にて黑のために塗たる如し柄は元の方太く先も太し實に不思議の槌なりけり

此槌今猶安藝の廣島國前寺に有元來此槌を三次の妙榮寺へ納置し處同寺は廣島の國前寺の末寺にて妙榮寺より則國前寺へ轉任の和尙享和二年六月八日國前寺へ持參し今は同寺に納れり

扨平太郞は此槌を持て八朔の早朝兄新八方へ行前夜の事どもくはしく語り槌をもらひし事を咄しければ何れも奇異の思ひをなし物怪歸りし上槌をあたへ置し事汝が勇名の顯るゝのみならず大成仕合なり大切にして所持すべしと云ければ其外の咄し彼是してかへりけるさて其後は家鳴震動は勿論鼠の音もなしされども又たぶらかす手立なるも計り難しと當分油斷せざりしが何の變もなければいよ〳〵安堵の思ひを

なしゝとかやこの平太郎後に武太夫と改名して兄の跡目を相續せり其後の咄に口惜きは其節若年故何心なかりしが其時何ぞ珍敷事か又は呪か妙藥にても尋しならば隨分敎へくれなんものを習置なば人の益にも可成に只神野惡五郎が事と此槌を與へくれし事は今に殘り多く思ひしとなり彼五郎左衞門が顏は今に忘っれずと語りぬ世の中に狐狸の妖怪はさま〳〵多しといへども又日數を重てかゝる物怪古にも聞ず誠や山本五郎左衞門が云しにたがはずよくもこらへ居たりし又武太夫が强勇今の世には亦あるべきとも見えざりける

羽州秋田藩　　平田內藏助校正

徵古歲時記稿

●正月(上に辨へたるが如し)

○元日　正月の一日を一日また朔日などいはず元日といふ事これもいと古きことにてそは尙書の舜典に正元の日といふとのある此は正月元日といふを略文にかくいへるなりさて一日といはず元日といふ事は字彙に元は始也とありて正月一日は一年の始の日なるによりて元日とはいふなり(此餘に說々あれどそは信ずるにたらず)さて元日の朝を三朝といふ事は尙書大傳に正月一日爲㆓歲之朝月之朝日之朝㆒故曰㆓三朝㆒といへるが如くまた三元といふ事は玉燭寶典に元日者歲之元時之元月之元故曰㆓三元㆒といへるが如し(但し此も上なる三朝の說の如く元日爲㆓歲之元月之元日之元㆒故曰㆓三元㆒とあらむにはことによくきこゆるを時之始といへるはいかならむ○また三元といふべきを古くより元三ともいふそは漢書注に三元之轉稱也といへる如くにて餘に義はなきなり)

○歲神　○吉方

○門松　その始さだかならずその詳ならぬがいと上代より有きたりたる證にて此は元來古の黑木の門の形ならんと思はるゝ也其黑木の門とは今は伊勢の神宮にのみ其名のこりて延暦儀式に云々とあるこれ也(四季物語といふものに松竹を立たる事はきんめいの御代よりはじめさせ給へりといへるは中々にうたがはしくことにかの書は僞書なればさら也)此は古は神宮のみならず戶々家々にかまへしものにて今あるしもく門すなはち其遺風なりかくて正月元日は歲の始月のはじめとある日にてとに門戶は常の出入はいふに及ばず(頭書云御門祭の祝詞また古歌を引べし)吉凶共に出入する所故春の始に其をあらたに作りかへて祝ひたる事と見えたりかくて後の世と成ては何事もうつろひ行くならひなれば舊年に立つる門の猶その儘有は其の儘おきて祝ひのしるしのみにかりそめなる黑木門をかまへたるものと見えたり此もいつの程よりと云事知べからねど堀河百首顯季の歌に「門松をいとなみたてるそのほどに春明がたに夜やふけぬらん」と詠るを思へば七十三代堀河院天皇の御世

のほどは既にかく有しかばその始はなほ久しき事
なるべし（また西行法師の家集に元日聞鶯歌に「し
めかけてたてたる宿の松にきて春の戸明る鶯の
聲」）さて此のわざ古へは下々賤が家にのみせしこ
とにて朝廷にはなかりしかば古記錄どもに所見な
く新撰六帖ついたちの歌に信實
「けさ見れば賤が門松立なべていはふことくさい
やめづらなる」また　　青春の歌に藤原爲事
「けさはまた都の手ぶり引かへて千ひろのみしめ
賤か門松」これらの歌に依て古はたゞ民間にのみ
せしことなるをさとるべし（然るを後には朝廷に
も爲給へると見えて僞書ながら四季物語にやはた
松尾よりかさり竹奉りぬれば矢瀨大はらの民くさ
しりくめ縄こしらへてつかふまつればとのもつか
さをさゝめともつかさなとはとしはあら〳〵しうつ
とめぬなちらか身あさましかりぬべしなどいひの
のしるよ松はいつもみあれ山より奉ると見えた
り）然れば此の書は朝廷にも御門松立給ふ事とな
れる世と成て作れると見ゆるをそはいつの程也けむ（其の大かたを云はゞ鎌倉の末足利の始つ方に
もやあらん）○さてそのかざり立るさまは門前の
左と右に枝はらはぬ松竹の青葉なるをつかね立て
上に竹二竿をうちちがへにわたして鳥井のかたち
をなし其外面にしめ引渡し昆布橙串柿炭海老うら
白ところ干鰯ほだはらゆづり葉などを見る目よく
結ひつくるなりかくかざり附る物故飾松ともいふ
也日並紀事云凡新年之賀儀各〻有ニ方土之異一有ニ
一家之例一其式樣不レ一雖家内之華奈并門前之松竹
者夏（みやこひな）夷共同レ之と云へるは然る事也）門松の根に
立る木を幸木また鬼打木といふまた薬にて盒子の
如くあみて門松に結付て供物を此内へ備ふる也こ
を幸籠といふ○草木の多かる中に松と竹とを建る
事は兼良公の御說に松は千年（ちとせ）を契り竹は萬世を契
るものなれば年の始に祝ひに用ふと宣へる如く古
き歌にも古今集に「ときはなる松のみどりも春く
れば今一しほの色まさりけり」後拾遺集に能因「春
日山岩根の松は君かため千年（ちとせ）のみかは萬代ぞへ
ん」續千載集に後二條院「おなじくは八百萬世を
ゆつらなむ我九重の庭のくれ竹」この外歌にも書（ふみ）

にも松竹を日出度ためしに云へる事いと多く西土籍にもしか有りて史記（龜策傳）てふ籍には松爲ニ百木之長ニ而守ニ門閭ーとさへ見えたりから倭おなじためしとや云べき○内傳の妄說に門松は北天竺吉祥天國王牛頭天王南海の沙渇羅龍王の女頗梨女を娶て歸路に日暮しかば廣遠國の王巨旦將來といふものに宿を乞ひけるに借さゞりしかばそこを去る事一里ばかり傍なる蘇民將來といふ貧人に宿を借り其後かの巨旦をうち亡し蘇民を賞賜す門松は巨旦を降伏したる墓印の木なりなどいへる此は先輩の各々辨へたる如くすべて云ふにも足らぬ事どもなり墓印は何のめでたき事かはある（「但し風土記に云々といふ事のあることは似よりたる事なれど此の風土記は延長の度のには非ず後の風土記なれば本文に記せる妄說を聞傳へたるものゝ云ふを護に記したるものと見ゆれは右の據とするに足らずなむ」

○志米繩　（頭書云門をはじめ家内一間々々の四方いつき奉る神々の棚に引く事也）これの見えたる始は天照大御神の速須佐之男命の御荒びを畏みまして天之岩屋戶にさしこもり坐しかば天上も國土も常闇となれる時に八百萬の神々甚く憂ひて種々議りごち給ひ八意思兼神の神慮によりて遂に岩屋戶を出し參らせ其の出御る時に天兒屋命天太玉命二柱の神しり久米繩を其の岩屋戶に引渡して此より内にないりましそ」と白して新宮に移し參らせたる事のある是始なりさて岩屋戶にこの繩を引渡したるは何の事もなく大御神のまたも岩屋戶にこもり坐さんことを思ひて入らせ奉るまじとて其戶に塞へたるのみ也此は今の顯にも彼方へ通さじ此方へ入れじと塞留るに繩を引わたすと同じ心ばえ也さて齋場に志米繩ひくことは世にも人の上にも凶事のあるは穢不淨より起る事故その穢に觸たるものを塞がんとて也（そは神事の場に觸穢のもの僧尼不淨のものを禁せらるゝを以て知るべし）但し此は顯の事なるを幽には（古史傳また眞柱にも云る如く）汙穢の有れは其を惡みます火の神また禍津日神の荒び坐て禍事をなし給ふ事を畏みて也其は天照大御神の岩屋戶に籠り坐しゝも須佐之男之神の御荒びとは云へども實は禍津日神の御心な

る事眞柱に具に辨へたるが如し禍津日神の禍事を爲し給ふ事は御門祭の祝詞に四方四角與利踈備荒備來武天能麻我都比登云神と云へるにて知るべし故其の禍事を塞て入れじと齋場の四方四隅に志米繩を引渡す事になんさばかりいみじき御稜威の禍神もこの繩をば越て入り給はぬ是れぞ我皇神の定給へる神事のいとも妙なる所にて凡人の小き智もてはかり知らるゝ事に非ず○さて志米繩とは志理久米繩と云ふの略りたる語にて志理久米のしりは藁の本をいひ久米は俗の語に何具留米何具留美などいふ語有て其れは譬ば魚を皆がら食へる事をいふとては骨ごめに食へるとか鱗ぐるめ食へるとか頭ぐるみ食へるとかいふ其の骨ごめ鱗ぐるめ頭ぐるみなどいふごめぐる米ぐるみと同じ語でござる常に用ふる繩は藁の端を斷去などねもごろにするを齋ひの事に用ふる繩は藁の尻をも斷去ずしりぐるめに用ふる故志里久米繩とは云ふなり故に日本紀には志里久米繩を端出之繩とは書れたてござる此の志里久米と云ふ言が自ら約りて志米と云ふやうになり（シメと云ふ言後には種々うつりて標又領なども活き用ひたる其は語彙に云へり）今は然のみ云ひて志里久米繩と云ふ事も知ぬやうになりはてたでござる然れども中比迄も志理久米繩と云たもので紀貫之の土佐日記にこゝのへのかどのしりくめ繩—とあるでござる○拔端を斷去ざるとは此を用ひたる始めは大御神を出し奉らんとて思兼神の議り坐るなれば深き御慮りの有ける事なるべけれど凡人の議知るべき事に非ず○後世の説に後塞の意にて道を塞ぐ意也と云ひ或は志米とはイマシメと云ふ義也と云ひ又神道者の説に志米繩はうたぬ藁を七五三に端を出して左り繩になふものぞ七五三にすることは天道は十五にして成るの義也左り繩にするは天道は左旋するの義也など云へるたぐひ都て附會の忘説にて古に徴なく信ずるに足らず又或は荊楚歳時てふ漢書に正月朔日帖畫雞戸上懸葦索於其上挿符於旁百鬼畏之と有などを引て志米繩ひくとも異國より移れる事の如く云ふものも有れど其は本を辨へざるによりてさは思ひなす也けり實は人の國に然る事のあるも我神事の彼國にも傳はりたるにこそあれ

○若水　抑水のやむとなき物なる事は其の初伊邪那美之大神火神の荒びを鎭めまさんと思ほし坐て彌都波能賣神を生して此を掌らしめ給ひぬる神御惠の忝けなさはさらにも云はす掛卷も畏き皇御孫邇々藝命の天神祖天照大御神産靈神の大詔命蒙り坐して此の國土に天降坐しゝ時に國所御御政はさらにも云はず萬の事もるゝ事なく落る事なく傳へ坐しを如何にしてか大御食聞食べき水の御政は傳へもらし給へりしを皇御孫命天降坐て後其事聞奉らしめに天忍雲根命と申す神を大御使として天上に參上らしめ給ひ天御祖命に問奉らしめ給へる時に御祖命の天之玉串を依し賜ひて詔ひつらくは此の玉串を刺立て夕日より朝日照るに至る迄天詔戸の太詔戸事を以て告れかく爲てば稚韮に由都五百篁生出て其下より天之八井出べし其水を持て天津水と聞食すべしと事依て降し給へりしかば其の大御言の如く爲給ひて皇御孫命は齋庭の穗を聞食し始め給ひぬ此は大御食に水を齋み清め給へる始にて曆世此御政のまゝ也其は主水司式を見て知るべし（頭書云伊勢神宮ニテ水ヲ大切ニスル事　御井神井と云事）　其は食は命の本にてとに大御神のよさし給へる齋庭の穗を聞食すなればかく有るべき御事にこそかくて水は其の食をかしくものなれは此れまた忌み清めますべき本よりしかあるべき事也さて正月元日は其食を聞食す一歳の始なればとさらに齋ひきよめて朝とく汲しめ給ふ事故兼良公の御説にも荒玉の春たつ日是を奉れば若水とは申すにやと宣へる如く祝して若水とはいふなるべしかくて下さまにも其をまねびて戸々家々然する事になむ○内裡に若水聞召さまは江次第曰供立春水事舊年封御生氣方。云々人家井一用之後廢而不用之自御厨子所付臺盤所女戸供之於朝餉（兼良公云若水は去年引生氣の方の井を轉じてふたをして人に汲せず春立日主水司内裡に奉れば朝餉にて是を聞召なり○案に其の蓋を爲たる井を立春にひらくを包井開と云とぞ）土高坏上置折敷面押紙大土器盛立春水居折敷供之陪膳居之於高坏上一度御飲畢徹之（○又云飲御若水之時有呪萬歲不變水急々如律令）兼良公云荒玉の春たつ日これを奉れば若水とは申すにや此は

年中の邪氣を除くといふ本文ある故なり（本文とは漢籍どもに新汲水却邪調中下熱氣宜飲之など云へる類を宜へるなるべしまた漢書に初て汲むを新汲水と云ふと云ひまた平旦の始に汲を井華水と云ふなども見えたり）又云わたくしにも此日は井花水とて新に汲たる水を飲こと侍るにや（此の頃既に下さまにも若水を汲たる由なれば其の始は猶久しき事なる事知るべし）○今世下ざまに若水を汲むさまは年男たるもの朝とく起て若水桶とて舊年より調ひ置く所の手桶てふ物に鶴龜松竹などの目出度名を書したるに志米を引たるを持て井にまれ川にまれ其歳の吉方にあたる所にて水を汲かへり其を家內のもの各々これを飲み雜煮を始煮炊くものは此水を以て調する事也○若水を汲む人を年男といふ其の家々人を撰びて是を定めまづ舊年煤掃の竹を以て拂はしめ除夜追儺の豆を撒しむる事各當年の惠方より始むこれ年男の役とする所也

○齒固　齒固を祝ふ事此も其の始さだかならず其詳ならぬぞかへりて上代より爲來れる徵にはありけり然るは御國の風俗に五節供の日はさらにも云はす祝事の有る毎に餅を搗て祝ふ事なれば春の始は事さらに餅搗て祝ふ事上代より爲來りけんかし（但し繁花の地は何事も古き業のうつろひ行くならひなれば然らぬ地も多かるめり江戶の地などは今はせぬなり）さて內裡に於て此を聞食す御儀式は江次第云元日平旦天皇御東廂（清涼殿也）自御厨子所供御臺二本內膳自右青瑣門供御齒固具盛青瓷白所度於內膳（居張百五物內）每物有蓋擎子（內膳所設）釆女傳取之自第三間御几帳上付女藏人傳陪膳

大根（一坏）瓜串刺（二坏）押鮎一坏（切盛置頭）煮鹽鮎一坏（同切置頭二串）猪宍一坏（以雉代之）鹿宍一坏（以田鳥代之）以坏之內精進物供於第一御臺魚類供於二御臺（或說無鹿宍有腹赤）○齒固具に猶洩たるものあり其は其の品々は後に加へ給へるにかと思ふに此の書より先つ世の書に見えたるもの丶なきが多かれば此は記し洩されたるにこそ然るは源氏物語（初音の卷）に爰かしこにむれ居つ丶はがための祝ひして（齒固の祝ひする事

は天皇のみならず大宮に仕奉る人々もせし事此文にていちじるし）もちひかゞみをさへとりよせて千年のかげにしるき年の内の祝ひごとゞもしてそほれ給へるに（湖月抄云歯固は元三の業なり歯はよはひとよめり歯固はよはひをかたむる心なりたかつき六本におしきをするゑ一の臺に餅大根橘をもるなりこの餅は近江のひきりの餅を用ふる也三余抄云近江の火きりの餅を用ふる故にや此國の鏡山の歌をながむる也「萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の腹にそまんと思へば「あふみのやかゞみの山をたてたればかねてぞみゆる君が千とせは」此の歌をよみて又次の詞にかゞみにむかふなり）うへにはわれみを奉らんとてみだれたる事共すこしうちまぜつゝいはひきこえ給ふ

源氏　うす氷とけぬる池のかゞみには世にたぐひなきかげぞならふるけにめてたきおむあはひともなり。

紫　くもりなき池の鏡に萬代をすむべきかげぞしるく見えける（河海抄云榮花物語云うへ若宮にもちひかがみ見せ奉らせ給ふ云々長和三年正月二日此餅鏡御覧の例なり）是れに依て歯固具には餅鏡の要とあるものなる事知るべくなほ珉江入楚に見えたる歯固具

鯉　鳥　鹿　猪（一本皆随盛物串差置上倶貫之）
瓜漬　茄漬　蕪大根（一本）　屠蘇　白散（一本）
窪坏　空坏（一本）　酒盞　窪坏四口（一本）　鏡
相具鮎（あひもの）　大根　橘（一本）

此を見て江次第に記せる餘に品々ある事知るべし

○歯固といふ事舊説に人は歯を以て命とする故歯字をよはひと訓むなり歯固とはよはひを固むる義なり」と云へれど案ふに此は甚くうがちたる説と思はるゝ其は實は文字の如く歯を固むる由にて年の始ゆゑ種々の物をかみかためて其の年中食事を為（な）すに歯牙の恙なからむ事を祝しての事なるべし（荊楚歳時記に元日食膠牙餳取膠固之義餅制鏡形といへる事あり歯固またもちひ鏡に似たる事也然るは膠牙とは歯牙を膠固（かたむ）るの義なれば也俗の生學者或はこの歳時記を引て御國の歯固もちひ鏡も漢土より移れる祝儀のことく云へるもあれと例の漢學癖なり其の御式に見れは漢様のしわざとももまじれるを以て西戎にならへることゝな思ひそ

よ其は後に潤飾したるわざにこそあれ）餘國の事は知ねど出羽秋田の風俗(ならはし)に正月齒固に調じたる餅鏡を其儘に乾貯へて六月の朔日に齒固と云ひて炒赤小豆と供に食して祝ふ事あり此ぞ實に齒固なるべき○土佐日記（元日條）にいもしあらめも齒固もなしかうやうのものなき國なりもとめもおかず只おし鮎のくちをのみぞすふ」と見えたるは遠き田舍などには此の祝ひを爲ざりし國もありしか土佐國にのみせざりしかさはあれ其は延喜の御世の程こそあれ今は國として此の祝ひせぬ國はなく其は齒固とこそ云はねども喰積鏡餅雜煮を祝ふなど並に齒固の祝ひの遷れる事になむ其は次々云へり

○喰摘臺　此は上に云へる如く齒固の祝儀の遷れる事にて今世に是を祝ふさまは三方臺に紙二枚を重(かさ)ねしきて裡白。楪をかいしきとなし松をさし建て洗ひ米を以て其根をかくし熨斗昆布海老野老薮柑子榧實串柹蜜柑橙搗栗穗俵また水煮に爲たる黑大豆などを積飾り元朝になりて其を座の眞中に直しおき家内の大小座に即てのち給仕のもの起て臺を執りまづ上座のものに供ふこゝに少か拜儀をなして臺中の煮豆一二粒を摘み喰へばまた次座のものに是を供ふ次々如此しつゝ一順してのちに是を納め三朝及ひ五ヶ日七日並に右の如く爲ること也「また新年を祝する客ごとに是を供へて祝す」

○鏡餅　此も上に云へる如く齒固の祝儀の遷れるにて正月の祝具の多かる中に此の餅鏡ぞ要と有る物なる（頭書云鏡餅の飾を爲す事、古く三種の神器を象どれる物也と云は然も有べし、そは世に三種の神器ばかり、尊き物はある事なし、さるは先其形丸く、平かに作れるは、御鏡に因れる物なる事、鏡餅と云ふにて論なく、上に重ねて、少し小く中高なるは、八坂曲玉の御形によそへ、菱餅は、草薙の御劒に、象れる物なるべく、所思る也、下賤の者といへども此を年の始の祝飾として、人々懇に拜み戴きなどするは、然すがに神の御國の風儀にて、いと〳〵尊くこそ所思ゆれ。）扨此を祝ふさまはまつ此の餅の形を圓く底平に中高く製りて是を大小二つ重ねて其の上に菱形(なり)に切りたる熨餅三切を添たるを一ト供といふ（また一ト重とも一ト飾ともいふ）此は舊年に調じ置て（此事は十二月餅搗の

所に云り）其をおしきに盛て祝ひかざりの品々を配し家に祭る神々及び先祖の靈前其の餘武家にては武器に供へ農工商それ／＼の家業に用ふ所の諸器にも盡く供へ（今は世に青々しき儒生の多くかの輩は大方青々なる説どもを云ひ弘めてかゝる祭をするなどをはいと拙き事の如く云ふからに世の人も多く其れに化せられし繁化の地などは漸々に古へ風の事はうせ行きつゝ古風の事をはかへりて笑ふ世の中とぞ成ける然れば諸器に物を供へなどするをば無情のものになど嘲云ふも有れど是ぞ我が古への道にて器にまれ何にまれ其の用を爲す所やがて神にて其を直に神と祭が我神國の神の御教なればゆめ／＼外國心になまどひそよ其の西戎人すらも月令廣義などを見るに元旦三更迎竈云々五更家長率大小香燭酒菓素供祈穀于上帝拜三光萬靈又拜本境山河土地社稷祈禱再以牲酒祭祖考享宗族序長幼飲屠蘇酒天明祭農家所司六畜之神仍以農具漁器等物以雞豚酒禮祭などさへぞ見えたるを本つ神國の人にして其を辨へざるは如何ぞや）また我が親方のものに送り供へ（さかり居る父母舅姑師など云々）また家内の人數にあてゝ各々一供つゝとりよそへ松過きと云ふまで神のは供じ置き人のは三朝を始五ヶ日七日等節日の朝々喰摘臺に向ふ事終て後給仕の者此を供ふれば少か拜儀を爲して理めおくのみなり（此に附て江戸などには絶て見ぬ事なるが出羽秋田にては鏡供のおしきにゆづりはをしきて糸引納豆といふに米の粉を衣としたるを盛て是を化粧納豆と云ふ太箸を添置正月中元日より節日毎に其の納豆を朝の膳に向はんとする前に少つゝ食ふ事也餘の國々にも然する事有るか聞まほしさて其の鏡供をは干貯へて六月朔日の齒固に爲る事上に云へるが如し）

○志米繩、齒固餅、及び喰摘などを飾るに用ふるものの種々あり國により所に依てなきものもありまた餘に用ふる物も有るべけれど其れ盡くは知がたければ書にも記しまた目の當り見聞に及べるをのみこゝに記す其品々は

裡白（此の草の又名をしだまたもろむきまた穗長とも云ふ葉は蕨また狗脊に似て葉柔にして薄く面あをく裡しろし故に裡白と云ふ名をおへり其の

根は藥種に用ひて貫衆といふ本草綱目云此草葉莖如鳳尾其根一本而衆枝貫之故名鳳尾根名貫衆と云へり此を飾に用ふる事は一說にモロムキといふ名ある故に夫婦の間の祝にとると云へり然も有るべし)〇根松(此を用ふる事詳ならずたゞ松は千歲をちぎるなどいふを祝してなるべしまたもしくは正月初子の日に子日の遊びとて野に出て小松を根ながら引て遊事あり此は下ざまにせぬことなるが其をまねびて祝儀に用ひ來れるにも有るべし)〇藪柑子(此は山に生する蔓艸也其の實の大きさ赤小豆ばかりにて赤し冬の霜雪にもしほむ事なく榮ゆるもの故祝儀に用ふるなるべし諸國の歲事を記せる書にも見る所なければ此は江戸にのみ用ふるか)〇穗俵(此は莫鳴菜を以て是を作る莫鳴菜は和名抄に奈々里曾とありまた一名を神馬藻とも有りて和名奈乃里曾神馬莫騎之義也と見えたり此藻莖細く扁く長三四尺ばかりなほ長きは丈ばかりにして節あり小極の上に細く尖りたる葉あり葉の間に小圓子を結ふ中空にして是を撚り潰すときは音ありて水を出す初は青く乾くときは黑し西南の海に多くこれあり冬これをとり乾して藁を以て一握りばかりに折卷てこれを束ねて米俵の形に作る故に穗俵と名く其の俵と云ふを祝して祝飾に用ふるなるべし俗にほだはらといふを此藻の名と思ふは誤りなり)〇榧(此を用ふる事は漢籍に松栢爲百木長と云ひまた松栢之膏服之可以延年など云へるに依て年始の嘉祝に用ふるかさだかならず)〇搗栗(生栗を殼ながらに晒し乾しやうやく皺を生するとき臼に搗て殼と荴皮とを去れば肉黃白色にして堅く味ひ甘美し如此するを搗といふ搗と勝と訓のおなじければ勝といふ義にとりてこれを祝飾に用ふ)〇串柹(竹串に貫きて干たる柹をいふ或說に柹と抓と訓の同じければ年始に萬物をかきとるといふ義に祝して祝具に用ふと云へり然もあるべし)〇橙(此の木和名抄に橙似柚而小者也和名安倍太知皮奈と有り乳柑に似て味ひ苦く酸くて食ふに堪へず五月頃小白花を開きおほよそ八歲ばかりを經るもの實を結ぶとぞ霜降る後に黃色に熟し春に至て色濃く夏になりて色を變じて青く新と舊と辨へがたし故に俗に代々と云ふ名を

負せたるもの也其の代々といふより嘉祝の具に用ふるなるべし）○昆布（和名抄に比呂米一名衣比須女とあり其の大きなるは一株にして數莖を生じて林の如く葉の長さ二三丈ばかりなるあり（巾八九寸尺餘もあり）これを長昆布と云大かた幅四五寸あり海人鎌を以て是を刈取る松前及び蝦夷より産するもの最上なり味ひもまた美なり或説に此を嘉祝に用ふるはヨロコブといふの義に取と云へり然もあるべし）○熨斗鮑（また打鮑ともいふ此を嘉祝の具に用ひたること古書に多く見えて今にかはる事なし）○海老（正月祝飾に用ふるもの伊勢國また相摸の鎌倉よりこれを出す故に伊勢海老また鎌倉海老と云なり其の嘉祝の物として用ふる事は海老ともいふ文字の義に依て也）○田作（小鰮の干たる也一名をゴマメまたコトノハラともいふ此を嘉祝の具に用ふことは田作といふ名は此を田を作る肥にもちふるより負せたる名なるをやがて田をつくるといふを嘉詞としたる也またコマメとも云へば身の健にあると云ふの義に取れるなり）○數子（松前より産する鯡の子なり腹を剖て是を出して干たるもの也歳の始また婚禮の節の肴とす此は子多しといふの義にとれり）○野老（萆薢なり此の根に長鬚のある故に野老とはいふをやがて其の老字の義をとりて嘉祝の具とせるなり）○楪（此木新葉を生じとゝのひて後に舊葉の落るゆゑに讓葉といふ舊くはユヅルハと云へると見えて萬葉集に弓弦葉と書り楪字は御國にて作れる文字也また親子艸とも云ふは親の子に讓るが如く葉を讓る故に負へる名也其名をめでゝ嘉祝の具に用ふなりさて此を齒固具に用ふることいと古きことにて枕の艸子木の條にゆつりはのいみじうふさやかにつやめきたるはいとあをうきよげなるにおもひかけずにるべくもあらぬくきのあかうきら／＼しう見えたるこそいやしけれどもおかしけれなべての月ごろは露も見えぬ物のしはすのつごもりにしもときめきてなき人のくひ物にもしくにやとあはれなるに又よはひのぶるはがための具にもしてつかひたんめるはいかなるにか」と見えたり此の草子は六十六代一條天皇の御世の事を記せるなるにかくいへれば其の用ひ始めたるは猶いかに古かりけ

む〇又おもふに古へ食物のかいしきにはかしはなどのたぐひの葉をしけるを其は常のことにありけむを正月はことに祝ふ月故其かいしきにゆづりはの名の目出度を用ひたるにて實は食物のかいしきなるべしさるにてもなき人のくひものにしくはいかならんそはとまれはじめはかいしきなる事疑ひなきかまたもろむきを用ふも本はかいしきよりうつれるなるべし）〇干鯛（此は古くは戸々家々かならず門前の志米繩の中間に掛たりしとぞ今世下ざまには多く海老を以てこれにかへたり其の掛るさまは藁索を以て鯛二つを喉を合せてつなぎとめ裡白ゆづりは等の品々と共に志米に掛る事也故に掛鯛といふまた竈神の御前に掛くる志米にも掛奉て此は六月朔日になりて羮に煮て食ふかくすれば疫病利病等諸の邪氣を請ずといふ但し上代よりの流例なれば今は世になべてせぬ事ながら古をしぬぶ輩はかくすべきにや）〇飾炭（此は本草綱目に白炭除夜立之戸內亦辟二邪惡一と云へるなとに依れるなるべし內傳の說に牛頭天皇巨且將來が屍を斷て五節供に配し調伏の儀を行ふ年の始の門松は巨且か墓驗の木にして上に結たる炭は葬送の火爐也と云るは例の妄說云ふにもたらず）〇苞煎（此は糯米の穀を其のまゝにしめして熬るときは爆脹れて稃おのつから脫去て潔白なる事雪花の如く是を唐書には白米花また爆米なども云へり此を古くは喰摘臺に盛りたりしが後に白米にかへたりとぞまた元日に家內に撒たりともいふ其は古へあしきものを辟るまじなひに米をまき散したる遺意なるべし俗說に聖德太子と守屋大連と戰ひのとき稻みなはぜて兵粮の助となれるより始ると云ふは古書に見る所なく信ずるにたらずかゝる俗說のある故にや今も津國今宮の戎市にこれを賣るとぞ）〇押鮎（鹽に押て漬たるアユを云ふ此を內裡の齒固具に用ひ給ひ土佐日記元日の所に云々と見えたれば下ざまにも古くより用來れる事也この魚の事書に見えたる始は神功皇后の三韓を伐給へる時云々扨此の魚は春生じて其歲の中に長じて子を生ずる故またの名を年魚ともいふ其長じて子を生す事速なるを以て新年嘉祝の食としたるにやあらむ）なほ國々地地に依て用ふるものゝ種々多かるを今は其常に見

なれ聞なれたるものをのみを記しつ餘に用ふる物も大かた是らの類に名義を祝し或は形狀を祝して用たるにてさしも深き義のあるはまれなるべし。

○屠蘇酒（屠字もと瘏なり然るに一點を加へて屠に作く事は尸字を忌て也蓋し此は本邦の故實なり）上代より酒はいとめでたき物にして神にも奉るはさらにも云はずとよのあかりなどすべて嘉儀には第一の品と爲つれば年の始の祝事に聞食しけむ事とよのあかりあるにて知るべしさて其の酒に藥を入れて聞食す事は異國の書に記せる趣にならひ給ひてなるを其の儀式は（一說に天武一說に弘仁年中ともに未詳）內裡に此を聞食す儀式は公事根元云主上晝の御座に出御なりて生氣の色の引衣をよのつねの御直衣の上に重ね召たる陪膳の典侍藥頭も生氣の色を着す此時まづ御廚子所の御齒固を供す（此式上條に云へり）命婦藏人役送して典侍次第に御前にすゝむ命婦まゐりはてゝ藥子（江次第云奉仰之人求童女未嫁之者）鬼の間よりがゝみてはしの几帳のもとにさむらふ女官典藥を佁て御藥を催す一獻にまづ屠蘇を酒に入れて藥子に飲しむ（延喜式云以屠蘇酒盛銀鏟子上火溫之と見え江次第にも洗煖御酒以御藥入於酒主殿寮設火爐是に依れば屠蘇には煖酒を用ふる事故實なり（まづ藥子に飲しむる事は此も公事根源に屠蘇は小兒より飲と云ふ本文あれば其爲に小女をゐらびて先飲しむるなるべしとあるが如し其本文とは漢籍どもに元日飲屠蘇酒先從少者小者得歲故賀之老者失歲故後飲之など有るを云なるべし然は有れど其の少者より飲む事は小字の義を謬解せるより起れる誤なる多喜桂山いとよく辨へたり其は下に記せり）次に銀器に入れて典藥頭とりて陪膳に傳ふ主上座を立せ給ひて夜の御殿の戶より入給ひて東の戶に向ひて立せ給へば（千金方に於東向戶中飲之と云へるに依りてなるべし）陪膳御盃を將てまゐらす（江次第云陪膳女房取御酒盞參御前供之次召後取次女官移入御酒盞餘分御銚子餘分等於大土器傳給於後取人）二獻に神明白散を供ず（江次第云供銀匙居馬頭盤入神明白散於金銅小器居中盤尚藥鋤藥入御酒盃供御畢後餘分給後取）三獻に度障散を供ず（其の儀式二獻にお

なし）延喜式に三朝而畢とあり〇案に屠蘇白散
の二方は千金方の方度障散は千金翼方の方にして
（二書並に孫思邈）今本朝に用ふる所は今大路道三
其方中の藥味を取捨して立たる方也その元方左の
如し

屠蘇酒　辟疫氣令人不染溫病及傷寒歲旦之方

大黃　桔梗　蜀椒（各十五銖）　白朮

桂心（各十八銖）　烏頭（六兩）　菝葜（十二銖）

右七味㕮咀絳袋盛（本草綱目云以三角絳囊盛
之と本朝にて紅絹の三角なる袋にもるは是に
依るなり）以十二月晦日中懸沈井中（月令廣義云
或懸水缸中）令至泥正月朔旦平曉出藥置酒中
煎數沸於東向戶中飲之屠蘇之飲先從小起多少自
（多喜桂山云從小起の小を古より老小の小とな
して是を飲む事小歲より始むと云へども疎謬の
甚しきなり按に此藥大黃烏頭などの毒品あるが
故に多服すべからずとの義也則ち本草に用毒藥
先起如黍粟と云ふの意也肘後方屠蘇酒の法後に
從小至大少隨所堪といひ又千金外臺など餘方も
また從少起と云ふもの有を以て徵とすべしと云
るは實に然る事也然れとも今は改むべからず）
一人飲一家無疫一家飲一里無疫飲藥酒得三朝還
置井中能仍歲飲可世無病（本草綱目云藥滓還
投井中歲飲此水一世無病）當家內外有井皆悉
着辟溫氣也（扶壽精方といふものに載する居蘇
飲の方千金方はじめ諸書に載する方と大く異に
して古屠蘇菴仙人遺方と云いとあやしき事也）

〇屠蘇といふ名義は通雅云屠蘇草也一名闊葉
草今廣西猺人中呼大葉似蒿者為頭蘇頭居
音近正因其有蔭而名屋也（また唐土書に大冠
また帽また羽帳などをも屠蘇と云ふ事ありなら
び物を覆ふを以て會意に名を假借したるもの
也）歲華紀麗云屠蘇乃草菴之名昔有人居草菴
之中每歲除夜遺閭里一藥貼令囊浸井中至
元日取水置於酒樽合家飲之不病瘟疫
今人得其方而不知其姓名但曰屠蘇而已と
見えたるこれがそも〳〵屠蘇を用ふるの始りで
屠蘇中に居たる人の弘めたる藥なるに依て此の
藥を屠蘇とは云ふのでござる扨又草菴を屠蘇と
いふ事は假借して會意に名けたるにて屠蘇とは

もと草の名でござる其の假借したる故は通雅と云ふ書に云々名くる屋也とあるこれ正說也按其草菴名を酒名とせる事は七修類藁に屠蘇本古菴名也今曰ニ酒名ニ者孫思邈以ニ屠蘇菴之藥ヲ與ヘ人作レ酒之故耳と云るが如し（然るを俗に屠蘇の文字に依て屠者屠ニ絕鬼氣ヲ蘇者蘇醒人魂也といひ屠割也蘇腐也と云ひ或は蘇魖鬼名此藥屠ニ割鬼爽ニ故ニ名くなど云へる類の說々多かれども凡本義を知ずして云へる說共なればすべて信ずるに足らずたゞ多喜桂山の考說を以て正とすべし今は其の要を摘て記せるなり委くは本書屠蘇考に就て見るべし即桂山著す所の醫賸中に是を收む〇元周云本朝月令に桂山と同說ありと云へり見るべし）

本邦屠蘇酒方（此方ハ一溪先生の所製なりと云）

白朮　　桔梗　　山椒　　防風（各三分）

肉桂　　大黃（各一分）

右六味㕮咀紅絹袋盛酒中浸

又方

白朮　　桔梗　　防風　　山椒（各一戔）

肉桂（五分）

右五味㕮咀紅絹袋盛酒中浸（今の世諸家に用ふる所則此の方なり猶一二味の增損加減の方あれども今これを略す）

神明白散

白朮（二兩）　　桔梗（一兩）　　細辛（一兩）

附子（去皮二兩炮）　　烏頭（去皮四兩）

右五味麤擣篩絳囊盛帶之所居閭里皆無病若有得疫者溫酒服一方寸匕覆取汗得吐即差若或三四日者以三方寸匕內五升水中煮令沸分溫三服

本邦白散方（これも亦一溪先生の所製なりといふ）

白朮　　桔梗（各一戔半）　　細辛（三分半）

右三味細末入酒中〇一方白朮桔梗各三戔細辛（一戔半）

度嶂散

麻黃（去節）　　升麻　　附子（炮去皮）

白朮（各一兩）　　細辛　　防已　　乾姜

桂心　　烏頭（炮去皮）　　防風　　蜀椒（汗）

桔梗（各二分）

右十二味擣篩爲末密貯之山中所在有瘴氣之處且

空腹飲服一錢匕覆取汗病重稍加之
本邦度瘴散方（此亦一溪先生所製といふ）
草橃　山椒（各六分）　細辛　防風　桔梗
乾姜　白朮　肉桂（各三分）
右八味細末點酒中○一方無草橃用山椒一錢餘藥各五分
按に右三方御藥は典藥頭の掌る所にして典藥寮より是を獻り丹波氏の祖康頼以來世々これに預れり然るに其後裔に至て彼家漸に衰て纔に三十石の祿を領して是を屠蘇料となし毎年十二月晦日に三方を製して禁裡院中及び將軍家に獻りしに近世に曲直瀨一溪翁道三丹波氏の術を傳へて大に家を興してより以來今は世々此家に於て是を進獻する事とは成れる也○片倉元周云夫正月朔旦云々豈可不哀痛哉（此事予もはやく聞る所也其醫者是を恥て遂に亡命せりとぞ姓名も聞しかどこゝに記さず元周が說實に然る事なり）按謂正月元旦飲屠蘇酒辟疫癘傷寒者憶是原出道家方士之所創制誠不足取信何則今夫上自王公下至閭里小民於元旦莫不家飲戸酌（下さまの戸々家々にも屠蘇をのみたりし事いと古き事にて其は土佐日記に二十九日おほみなとにとまれりくすしふりはえてとうそ白散さけくわへてもてきたり心ざしあるににたり元日なほおなじとまりなり白散をあるもの夜のまとてふなやかたにさしはさめりければ風に吹ならさせて海にいれてえのまずなりぬと見えたり）雖然至其遭疫氣流行則滿都閭鄉莫不染疫氣者由此觀之則喫屠蘇斷乎屬無益（雖然積習所痼今不可改焉若用之本邦所傳五味者爲可）又何無病而可用有大黃烏頭等駛藥者邪故斯表而出爲世之護用古方者龜鏡云

○雜煮餠　此もまた齒固の祝儀の移れるにて其は齒固の具は上に云へる如く齒牙を膠固る祝にものせるなるを生にて供するものも多く不辨なる故に何の頃よりか其を煮て食する事となり別に喰積また鏡餠を調じて祝儀の飾具とせるなるべし（何事も古き事はかく移り行ぞ世のならひなる）扨しか種々のものを和て煮たる餠ゆゑ雜煮餠とは云ひ今は貴賤共に其風と成て其は古年製し置たるのし餠に結昆布（雜煮に和る昆布を結ぶ事は結び喜と云義を取れりと或人云り然も有るべし）串鮑（あはび

を串にさして干たるを云ふ）煎海鼠牛房芋頭（またいものかみとも云ふ此を用ふる事は或云多子の義に取れりと云へり然もあるべし）大根（舊くはおほねと云へり其は根の大きなれば也後に漢音にだいこんと云ふ漢名は萊菔と云ふなり內裡の齒固ノ具に必用のものにて餅鏡に添て供する故其時は鏡草といふよし珉江入楚に見えたりさて雜煮は齒固より遷れるなるに依て此は雜煮に要とあるものとして用ふる也）菘（うきな）おほかたこれら也「なほ國により所により家により其品々の異なるもあるべし」さて此を味噌汁または醬油にて煮調へ餅と羹として家に齋ける神々先祖の靈前にも奉り屠蘇を祝ひて後に食す三ヶ日が間然する事也○雜煮に和て膳に添るもの（いはゆる菜のもの）はなますのみ也また所に依ては雜煮の膳の左右におく是を兩のものと云ふ但し添おくのみにて食する事はなし○開牛房開豆（水煮にしたる大豆を開豆といひ算木の如く切たる牛房是を開牛房といふ土器に裡白ゆつり葉をしきて此の二種を盛たるなり）と云ふを和にそふる家々もあり○雜煮をはじめ正月の節供ごとに用ふる箸は太く作たるを用ひて是を太箸といふ或說に此は箸の折るゝは落馬の相也といふ諺のあるに依りて歲始には殊に太く作して心しらびしたるならむと云へり然もあるにや○俗說に御國に於て喰摘。鏡餅。及雜煮餅などを祝ふ事は漢籍どもに立春の日春餅生菜號春盤といひ或は食ニ生菜一取ニ迎レ新之意一と云へるなどを引て彼國風にならへる事の如く云へるは例の漢癖なれば論ふにもたらず○曆の元日の下に齒固くらびらきひめはじめきそばしめゆどのはしめこしのりそめ萬よし」とあるはがためは上に歲のはじめに先齒を膠固るの祝なる事上に委く云へるが如し次にくらびらき是は開えたる如く藏を開くよしにて此は財寶を貯へおく所なれば其の開ひ始に祝ふ事然も有るべき事也次にひめはじめ此は世に種々云ひさわぐ事にて其の正說を知れる人世に少かるを年山紀聞に記せる說ぞよく此事を辨へたる說には有ける故に今は其の說を本として辨ふる事になむ抑この事の古記に見えたるは白川資益王ノ日記明應十年正月一日の下に諸社遙拜之後三獻有之次御コワ次比日始と見えて

其の御コワとは謂ゆるコワメシの事比目とはただの飯の事なり其は和名抄に糄糉和名比女或說曰非レ米非レ粥之義也とありて此は糄糉のはね音を直音に直し云へるにて實は漢語にぞありける和名抄にあげたる或說に非米非粥之義也と云へるは比目始の比目を非米の義にとりて云へる附會の說なれども當時其の物の米に非ず粥に非ざる事を見知て云へるなれば附會の說ながらも信ずるに足り其非レ米とは米を煮たるよしを云非レ粥とは薄糜になるまで煮とろかさぬよし也然れば今謂ゆる飯なる事論ひなしまた枕草子(とり所なき物と云條)にみぞひめのぬれたる」と云へる事ありみぞとは衣の事にて此文に依れば古へは衣に糊するには飯をすりつぶしなどしてつけたりけむ(今も然する也)故に此文あり衣に比女の糊していまだ乾かぬほどはとり所なき物ぞとの心なるべし(今の世にも衣に付る糊をひめのりと云は古語の遺れる也)かゝれば資兼王ノ記に三獻の次に御コワと有るは屠蘇白散度瘴散を祝ひて次に剛飯を喰ひ初むるよし次に比目始と有るはたゞの飯を喰はじむる事にて元日は一歳の元なればかく云へるもの也暦の元日の下にひめはじめと有は即この事也

○俗說に飛馬始と書て馬を乘り始むる事の美稱也と云ひ或は卜部家の秘說とか云ひて火水始と書て元日に火と水とをつかひ初るより也と云ひ或は內裡にては米の事をひめといふひめはじめは米を喰始むる事なりなど云へる凡て非說也其は內裡にては米をひめと云ふこと書にも見えず聞も及ばずまた火と水とをつかひ初るよし也と云るもより所なくまた飛馬と書るは假字なるが上に馬乘初と云ふは別に有るをや然るを貝原氏など馬乘初是れを飛馬始と云暦にひめはじめと有りて又馬乘初と有るは誤也と云へるはかへりて誤也此餘にひめは馬の梵語也と云ひまたは姬始にて男女交會を始むるよし也と云へるなど凡て云ふにも足ずみな其の本說を考得ざるが故に辛ふじてひねり出たる說どもになん次にきそはじめ此は衣を着始むるよしにて餘にまぎるゝ說なし次に湯殿はじめ此は沐浴を爲始むるよしなり其は湯殿にてすなれは湯殿始とは云也一說に臺所始の事にて臺所は人の生命を繫ぐ食物

を調ずる所故ことに祝ひてかく云といへれど未だ詳ならず次にこしのりそめ此は輿をのり初むる由にてまぎるゝ事なし

○大服茶　元日より正月中其の節日ごと及び追儺の日に茶を煎じて其の釜の中に小梅干鹽山椒炒大豆を二三十粒つゝ入れて汲む時此の品々の中ひさごに入りて汲上たるを飲たる人其年の嘉徵として是を悦ぶ事也其梅干を用ふる事は面に皺を生ずるまで長生すると云ふを祝し山椒を用ふる事は唐土(から)書に服レ之令人身輕能走と云ふにより豆を用ふる事は壯健(まめ)になると云を祝して也と或人いへり實に然るべし扨此は大服に汲て飲む事故かくは云ふなるべきを俗說に村上天皇御腦のとき六波羅密寺の觀音に供たる茶を服し給ひて平癒し給へり主上の服し給へるに依りて王服と云ふなどいへるは例の法師の妄說なれば取に足ずまた江戶などにてはただにふく茶と云ひて福の義と思へるも違へり○淡海志と云ふ書に正月詞に祝ひて勢田には大服茶を點じて吹たり廻したりと云ひて飲み矢橋には是に異なり早に粥を食て今日は能きカイ日和なりと云(いひ)て祝ふよし見えたり此はともに旅人の多きを悅ぶの祝言也とぞ

○甲乙のこと漢籍諸書に依りて是を考ふるに彼國上古に軒轅といふもの其の君神農氏を亡して後其師大撓といふ臣に命じて作り定しめたるにて孔穎達說に日之先後無レ所二分明一故作二甲乙一以紀レ之（左傳注文）と云へる如く其これを作れる故は歲を紀し月を紀し日を紀すべき要に設けたるものになむさて其の定めたるやうは北の虛空に見ゆる謂ゆる北斗の星を目的として此を虛空の眞中にとりてまづ東西南北の名を定めかの設け定たる十二支を十二方に配し（北を子とし東を卯とし南を午とし西を酉と配したるたくひをいふ）正月の節は北斗の尾（いはゆるけんざき）日暮酉時に寅方に向ふが故に寅の月と云ひ二月の節は酉の時に卯の方へ向ふが故に卯の月と云へるにて「特に每月の下に建レ寅建レ卯と有るは卽これなり」三月以下次次十月もみな此の例なり其は月令章句に大撓占斗則所建於レ是始作甲乙以名レ日謂二之幹一作二子丑一以名レ月謂二之支一と見えて十幹を立たるは日々の

紀とせむ爲十二支を立たるは月の紀とせん爲也然して此の十干十二支の文字を作れるに各々義あり（すべて文字は此の軒轅が時に蒼頡と云ふもの鳥跡を見て作始たるよし云ひ傳ふれば支干の文字の義をもつくりて其の義を合せたりけむ）其は說々の多かれどもまづ十干の干を幹之義と云ひ十二支の支を枝之義也と云へるぞ古へにかなへる說にて此は幹より枝を生ずと云ふ義にぞ有りけるさて十干の文字の義を委く探ぬるに甲乙を東方に配して東方は五行のうち木に配しつれば甲を木の陽とし乙を木の陰として○甲字は史記「の律書」に甲者言萬物剖符甲（索隱符甲猶孚甲）而出也と云ひまた說文に「東方孟陽氣」萌動从木戴孚甲之形と有て篆書に依りて見るに㽞と書て初春の頃草木の未生出ず皮を被れる形の孚甲を着たるに似たれば其れに象りて作り○乙字は篆書に乚に作りて史記に言萬物生軋々也と云ひ說文に象春艸木寃曲出と云へる如く草木の土を軋りて寃曲つゝ生出るを象りて作れり

○丙丁を南方に配し南方は五行の火に配しつれば丙を火の陽とし丁を火の陰とすかくて丙字は篆書に丙に作りて說文に从一入冂一陽也徐鍇曰陽功成入於冂冂門也と云ひ釋名に丙炳也物生炳然皆著見也と云ひてかの寃曲して軋々たりし草木夏になり炳然として皆顯はれ見え火功成就して門に入ると云ふを象りて作れり○丁字は篆書に个に作り說文に夏時萬物皆丁實也と云ひ史記に丁者言萬物之丁壯也と云ひてかの炳然と著れたりし草木の此時に強く壯に立つと云ふに象りて作れり

○戊己を中央に配し中央は五行の土に配しつれば戊を土の陽とし己を土の陰とすかくて○戊字は月令註に戊之言茂也萬物枝葉皆茂盛と云ひて戊と茂と同音相通し此時に至りて草木の盛りに茂ると云ふに象りて作れり○己字は篆書に己に作り月令註に含秀者抑屈而起と云ひて起字と相通じ此時に至りて萬物みな土より起ると云ふの義也

○庚辛を西方に配し西方は五行の金に配しつれば庚を金の陽とし辛を金の陰とす○庚字は月令註に庚之言更也萬物皆肅然改更と云へる如く更字と相通し夏盛に茂起れる草木の秋に成て色を更て黃葉な

どしつゝ更りゆくと云ふの義也○辛字は釋名に辛ハ新也初新者皆收成也と云ひて新字と相通じ秋のはじめは物いまだ熟せずして味淡きを秋の末に至りて味新に收成ふよし也

○壬癸を北方水に配し壬を水の陽とし癸を水の陰として冬にあてたり○壬字は史記に壬之爲言任也言ハ任養萬物於下也と云ひて妊字と相通し草木の來春發生すべき氣を土中に懷妊して養ふの義也〇癸ノ字は史記に癸之爲言揆也言可揆度也と云ひて揆字と相通し土中に妊養せらるゝ草木の立春の時を待て生出んと揆度催すと云ふ義也

〇右十干また是を十母ともいふ其は幹を本として枝を生ずるが如く十二支を是に屬して子となすに依りて也故に十二支をまた十二子とも云ふは是なり是より十二支の義をいはん

〇子　史記に子者滋也滋者萬物滋於下也と云ひて滋字と相通して滋は生育の意也十一月冬至の比は春氣やゝ生じて萬物土中に生育し蕃るの義也

○丑　史記に丑紐也言萬物厄紐未敢出と云ひて紐字と義を通じ十二月の比萬物土中より出んとするものから猶寒氣の爲に厄せられて出る事能はず紐れて苦しむと云ふの義なり

○寅　釋名に寅演也演生物也といひて演字と相通じ丑の時は萬物土中に厄紐れて有しが正月に至りてやゝ演然に成て生出んとするの義也

○卯　釋名に卯冐也戴冐土而出也と云へる如く冐と通じて正月寅の時に萬物演然として生伸んときざしたるが二月に至りて土を戴冐して生出るの義也

○辰　史記に辰者言萬物之蜄也と云ひて蜄と相通じて二月卯の時に萬物土を戴冐して生出たるが三月に至りてますます振羨て大いに生出たるの義也

○巳　史記に巳者言陽氣之巳盡也と云ひてかの土中に含みたりし温煖の氣四月に至りて皆發し盡るの義なり

○午　說文に午啎也五月陰氣午逆陽冐土而出也と云ひて啎字と相通し地中に含み藏れたりし寒冷の氣五月に至て地を冐し出て溫煖の氣と互に相交午するの義也

○未　史記に未者言萬物皆成有滋味也と云ひて味と相通じ五月午の時に生じたる冷氣六月に至り

てまた長じ煖氣と互に交午しつゝ萬物みな成熟し果の熟して滋味を生ずると云ふの義なり

○申　釋名に申身也物皆成其身體各申束之使備成也と云ひて身と通じ六月の未の時に成熟したる萬物を七月に至りてよく其體を備成して申束する如くならしむるとの義也

○酉　史記に酉者萬物之老也と云ひて老字の意に見る也七月申の時に冷煖の氣互に助けて其の體を備成せるが八月に至りて冷氣ます〳〵長じて煖氣漸に衰へ萬物こゝに於て老て收斂せんとするの義なり

○戌　史記に戌者言二萬物盡滅一故曰レ滅と云ひて滅字の意に見る也八月酉の時に萬物老て收斂せんと催せるが九月に至りて寒冷の氣大に長し盛にして萬物盡く滅するとの義也

○亥　釋名に亥核也と云ひ律歷志に該二閡於下一孟康曰閡藏塞也陰雜陽氣藏塞爲萬物作レ種也と云ひて核。該。閡等の文字の心に見る也九月戌の時に萬物盡く滅し冷煖の氣ともに地下に該閡て種を作し十一月に至り煖氣生ずるの時を待て產んと欲するにて此れ亥は核也といふの義なり

○子丑寅卯などを鼠牛虎兎と稱することを十二相屬とも十二生肖とも云「相屬とは鼠は子に相屬き午は丑に相屬くと云ふの義また生肖とは其生の肖たると云ふの義也かく配當したる事其始しるべからねど詩。易。春秋。禮記。などにをり〳〵其の證と爲べきことの見ゆればいと〳〵古きことにて十二支の本は其の十二生肖ぞかへりて黃帝が時よりは古く子丑寅卯などは後に作りて其れに替たるならんとぞ思はるゝ

室松岩雄
保持照次　校

明治四十四年九月七日印刷
明治四十四年九月十日發行

定價金貳圓也

編輯兼發行者　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　室松岩雄
印刷者　東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地　遠藤廉治
印刷所　東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地　公本社
製本者　東京市京橋區南鍋町二丁目七番地　由美直之助

發行所　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　平田學會